

## 第5章 嵐の訪れ——密州、徐州、湖州

### [第5章その一]

熙寧7年 [1074年]、蘇軾39歳。

熙寧8年 [1075年]、蘇軾40歳。

#### ■ 【05-1-001】 平山堂次王居卿祠部韻

【**解説**】熙寧7年10月に長江を渡った蘇軾は、揚州の平山堂で知事の王居卿 [字は寿朋] の作に次韻してこの詩を作った。平山堂は、かつて歐陽脩が揚州知事であったときに大明寺に建てたもので、眺望に優れ、遠く江南の山々を見晴らすことができた。王居卿は口が達者で、それを駆使して官界を巧みに遊泳するような人物であったらしく、この詩からもその一端が知れる。平山堂には潤州で再会した孫洙 [字は巨源] [→作品番号 04-3-086] も同行していた。

#### 【訳文】

王知事殿が連日大いに催す酒宴のお供をする。

知事殿は、酒が入ると、酒狂を発し、

酒が醒めると、こんどは狂言連発する。

酒というものは、人の顔のように、もとより白く、

山というものは、人に向かって、とにかく青い。

あの飛ぶ雲は、北固山から長江を渡ってきたものなのか、

欄干の前の青い竹は、西湖の風景を思い出させる。

六朝[三国時代の呉と南朝五代の王朝]の興廢が繰りひろげられたこの地も、

当時と同じように残っているのは丘陵ばかりで、  
 かつて奸雄の腹芸に政敵が返した微妙な笑い声にしても、  
 知事殿の語りにも思わず漏らす我等の笑い声にしても、  
 いずれも空しく消え去ってしまうのである。

【補足】[この詩には種々の故事が用いられていて意味が汲み取りにくい。史書には、王居卿は「俗吏」であったと評されているので、蘇軾が故事の厚いベールの下に、実はこっそり皮肉を忍ばせたと解釈できなくもないので、それに従ってここでは訳してみた。楽しくあるべき宴席で非礼を働くのは、蘇軾の好むところではなかったであろうが……]

## ■【05-1-002】書許敬宗硯

【解題】蘇軾は次の赴任先である密州みつに向かうために、揚州ようから大運河を北上した。高郵こうゆうに至ると、そこには、母の喪に服して帰郷していた孫覚そんかく [→作品番号 04-1-073 など] がいた。孫覚に会うと、古い硯を蘇軾に見せた。それはいささか蘇軾と関わりのあるもので、そのことについて記した短文が二種類伝わっている。互いに補い合う箇所があるので、ここではそれらを合体して訳す。

### 【訳文】

杜叔元としゅくげん、字は君懿あざな、くんに、文雅な人となりで、書も詩も観るべき立派なものを作った。古い風字硯ふうじげん [硯の一つの型]を所有し、石が美しい上に、みことな作りであった。唐の時代の許敬宗きょうけいそうが愛用していたものとして、代々杜の家に伝えられてきたものであったのだが、私は初めはそのことをあまり信じていなかった。

後に私が杭州こうに赴任すると、漁師が錢塘江せんとうこうから網で一つの銅の匣はこを掬い上げ、そこに「許敬宗」の

字が鑄こまれていた。匣は硯を入れるのにちょうどよい大ききで、二つの足を受け容れるところがあった。杜叔元が持っていた硯にも二つの足があって、真四角な形で、匣にあるものとぴったり合うのだった。それまでまことに許敬宗の硯であったのだと、私はそのときに知ったのである。

昔、私の父〔蘇洵〕は杜叔元と仲がよく、父はその硯を求めたのだが、断れられたということがあった。

杜叔元はかつて私に向かって、

「吾が家にはほかに何もないので、もし私が死んだなら、この硯を潤筆料として、貴君に我が墓誌を書いてもらいたいと思っているのだが」

と、いった。

その後、杜叔元は亡くなり、その子の杜沂〔字は道源〕はこの硯を出して、実際に私に墓誌の執筆を求めた。私は普段から墓誌を書かないことにしていたので辞退した。

それで、杜沂はその硯を与えて、私の友人の孫覚に墓誌銘を作ってもらった。私は高郵を過ったときに、孫覚はその硯を出してきて、

「許敬宗は棍棒で人を処罰して殺すのを好んだようなとんでもない人物で、犬でもけしかけてやれば十分であるのに、どういったわけでこのような硯を持っていたのでしょうか」

と、いって笑った。

私はそれを聞いて、この硯は許敬宗のために四百年余りにわたって辱めを受け、いまだに穢れが落とされないのであって、この硯の不運を思っって哀れになった。許敬宗が奸事を為したときに、この硯は何も関わりがなかったのだから、硯には罪は一切ないのだ。ましてこの硯の善さは格別である。それで、その恥辱を洗い流してやろと、孫覚に求めて私はその硯を得たのだった。

いま匣は唐氏のところにあつて、唐氏はそれを甚だ惜しんで、求めても得ることができない。硯の美はずっと匣の中にないままであるのだが、上には敬宗の姓名があるのだから、そこに必ず蓄えておかれるべきなのである。

【補足】〔(1) 杜叔元は成都の人で、官界でキャリアを積み、蘇洵はかねてから杜叔

元に兄事していた。蘇洵が科挙を受験する息子たちを連れて上京すると、杜叔元は蘇軾に筆を贈った。そのことについて蘇軾が記した短文を後の章で見るようになる。その後、蘇軾が鳳翔<sup>ほうしやう</sup>での任を終えて都に戻ったときに、たぶん郷里の成都にいたであろう息子<sup>とぎん</sup>の杜沂に宛てた蘇軾の手紙の断片が残っていて、それによると杜叔元が都にいたい<sup>たい</sup>らしいことが知れるので、墓誌銘を依頼した話はそのころにあったのかもしれない。(2) 蘇軾はある信念をもって墓誌銘の類を書かないことにしていたことが、この短文からも知れる。蘇軾が実際に執筆したのは特に個人的に深い関わりのあった人だけである。(3) 同じく高郵<sup>こうゆう</sup>滞在のときに、孫覚<sup>そんかく</sup>から秦觀<sup>しんかん</sup> [字は少游<sup>あざな しょうゆう</sup>] の詩を見せられ、大いに褒めたと伝えられている。このとき秦觀は24歳で、後に科挙に合格し、蘇軾の高弟として「蘇門四学士」の一人と称されるようになる。秦觀は高郵の人であるから、もしかしたらこのときに直接蘇軾と会ったのかもしれないが確証はない。

「四学士」のもう一人の黃庭堅<sup>こうていけん</sup>と蘇軾が知り合うのにも孫覚が関わっているのはなかなか面白い [→作品番号 04-1-074]。「四学士」のさらにもう一人の晁補之<sup>ちやうほし</sup>との出会いは作品番号 04-3-059 で見ていて、残るもう一人の張耒<sup>ちやうらい</sup>については後に本章で触れることになる。なお「学士」とは皇帝直属の学術アカデミーの学士院に所属すること許された者に与えられる称号で、蘇軾は先に試験を受けて学士となっている [→作品番号 03-1-001]。(4) 高郵では、かつて湖州で会った邵迎<sup>せうい</sup> [字は茂誠<sup>あざな もせい</sup>] [→作品番号 04-1-081] の家も訪ねている。邵迎はすでに他界していて、遺族に弔意を述べ、邵迎の遺した詩集に序文を記したのだった [→作品番号 04-1-082]]

## ■ 【05-1-003】 更漏子

【**解題**】 潤州<sup>じゆん</sup>で会った孫洙<sup>そんしゆ</sup> [字は巨源<sup>あざな きよげん</sup>] は、揚州<sup>よう</sup>からも蘇軾に同行してそのまま都に行こうとしたのだらう、楚州<sup>そ</sup>に至って二人はようやく東と西に別れた。そのときに

蘇軾はこの送別の詞を贈った。孫洙はこの年の8月まで海州かいの知事を務め、海州を去るに当たって、8月15日に景疏楼けい そろうで送別の宴が開かれた。その宴で妓女が詠んだという設定でこの詞は作られたと読むこと可能であるので、その解釈に基づいて訳文を作った。

### 【訳文】

水涵空、[水と涵みたしあう空]

山照市。[山と照あらしあう町]

西漢二疏郷里。[漢かんの時代の疏そ父子が帰ったのはこの郷里]

新白髪、[父子の新たに増えた白髪]

旧黄金。[父子が散財し尽した黄金]

故人恩義深。[父子は昔なじみの人達に深い恩義を示したのです]

海東頭、[東の海のほどり]

山尽处。[ここで尽き果てる山]

自古客棧来去。[古来、旅人がここから漕いぎ去ったという棧いかた]

棧有信、[棧には皆からの手紙]

赴秋期。[旅立つのは秋のこの時期]

使君行不帰。[知事殿は去ってもう帰らないのでしょうか]

【補足】「(1) 疏父子 [原詞は二疏] とあるのは漢かんの時代の疏広とその兄その子の疏受。

海州かいの出身で、2人とも優れた業績によって朝廷の高位に昇ると、2人揃ってさっと引退して郷里に帰った。そして、人々を招いて酒宴を開き、財産を惜しみなく郷里のために使った。「二疏」の引退は官僚の身の処し方として一つの理想型とされ、詞の前

半はそのことを歌っている。景疏楼けいそろうの名はその二疏にちなむ。(2) 海州は元来帰ってくるべき土地であるのに、そこから逆に去ってしまう知事との別れを妓女が悲しむというのが詞の後半。知事が乗ったいっかだ槎を見送る妓女の想いは、すなわちそんしゆ孫洙の乗る船を見送る蘇軾の想いなのである]

## ■ 【05-1-004】永遇楽

【解題】楚州から東に進んだ蘇軾は大陸の縁近くを北上し、上の詞で見たように孫洙が8月まで知事を勤めていた海州かいに立ち寄った。11月15日、海州知事とともに景疏楼けいそろうに登り、ちょうど3カ月前にそこで送別の宴が催された孫洙のことを想ってこの詞を作った。旧暦で15日は満月である。かつて景疏楼で孫洙との別れを惜しんだ妓女が、同じ満月の下で悲しんでいるという設定でこの詞は詠まれているのだらう。

### 【訳文】

長憶別時、[長く憶いつづけるのはお別れしたあの時]

景疎楼上、[景疎楼の上]

明月如水。[水のようにあたりをひたしていた明るい月]

美酒清歌、[美しい酒と清らかな歌]

留連不住、[それでも引き留められず]

月随人千里。[行く人とともに千里の彼方に随うのは月の光だけ]

別来三度、[お別れしてから三度]

孤光又満、[また満ちる孤独の光]

冷落共誰同醉。[寂しくも共に酔うのは誰と]

捲珠簾、[捲き上げる簾]

凄然顧影、[しみじみと顧みる私の影]

共伊到明無寐。[月とともに明るくなるまで眠らずにいるのです]

今朝有客、[今朝の旅人]

来從睢上、[来たのは<sup>すい が</sup>睢河のほとりから]

能道使君深意。[よくぞ<sup>こころ</sup>って下さいました知事様の深いお意]

憑仗清淮、[あてにするのは清らかな<sup>わい が</sup>淮河の流れ]

分明到海、[きつときつと到るのです海に]

中有相思淚。[その中にある知事様が思<sup>おぼ</sup>って下さる涙]

而今何在、[そしていまいるのはどこ]

西垣清禁、[禁中の西の御殿]

夜永露華侵被。[夜は永く、輝く露が湿らす夜具]

此時看、[その時に看るのは]

回廊曉月、[回廊にかかる曉の月]

也應暗記。[きつと暗<sup>ひそか おぼ</sup>に記<sup>おぼ</sup>えていて下さることでしょう]

【補足】〔(1) 詞の後半にある「今朝の旅人」とは蘇軾のことであろう。妓女を想う孫洙<sup>そんしゅ</sup>の心を蘇軾が伝えにきたという趣向なのである。このように友情を男女の情愛に擬して詩歌に詠むのは決して珍しいことではない。自由恋愛が許されなかった旧い中国においては、男女の恋を大っぴらに歌えない代わりに、男同士の友情を濃密に歌ったという説がある。(2) 孫洙<sup>かい</sup>が海州にいた間にあったとされるエピソードがあるので、本筋からははずれるがここで見ておこう]

## 【訳文】

こうまい いけんし こうし かんたい  
 洪邁：『夷堅志』甲志卷第十一

そんしゅ あざな きよげん りせいしん ほうちよく せい か きねい  
 孫洙[字は巨源]と李清臣[字は邦直]は若い時に同時に制科を受けた間柄で、熙寧年間に孫洙が海州知事であったときに、李清臣は副知事だった。李清臣の住まいと孫洙の家の庭は境を接して、孫洙の末の娘はいつも庭で遊んでいた。李清臣は娘の姿を見ると、じっと目で追い、そのうち、車に乗って出かけるときに、娘の声が聞こえてくると、すぐに車を降りて引き返し、娘の姿を見ようとするまでになった。

李清臣の妻の韓夫人は、窓の内からそのような様子をたびたび見たので、

「何をなさっておられるのですか」

と、問いたたした。李清臣はありのままに答えた。

ある夜、李清臣は夢を見た。

夢の中で、孫洙の庭に行き、娘を見かけたので、その後を追った。娘はすばやく立ち去ろうとし、李清臣はあとわずかのところにまで接近し、娘の鞋を踏んで、その襟首に花を挿し込んだ。

はっとして目が覚めて、その夢を韓夫人に告げた。

韓夫人は非常に驚き、

「花を簪にすると、婚約が成り立つ兆しだといひます。『鞋』は『諧[かなう]』に通じます。とすると、私はきっと間もなく死ぬのでしょう」

李清臣は、

「お嬢様のことを思っただけだったので、おかしな夢を見ただけなのでしょう。そのようなことが起こるはずはありません」

と、いったのだが、韓夫人は間もなく亡くなってしまった。

しばらくして、李清臣は媒酌人を立てて、娘を妻に迎えたいと孫洙に申し出た。

孫洙は、

「私と李君と一緒に勉強した間柄ではないか。年齢もほぼ同じだ。我が末娘と釣り合はずがない」



と、怒って返事をしなかった。

孫洙は朝廷に帰還し、翰林学士かんりんがくしとなったのだが、病気のために死ぬばかりとなった。

孫洙が見舞いの客に向かって、

「末の娘がまだ片付いていないのが気がかりでなりません」

と、嘆息、客人は、

「現在の士大夫しだいふのなかで賢人といったら李清臣様の右に出る者はおりません。どうして嫁がせよとならないのですか」

「年齢が違いすぎるではないか」

「嫁ぐべきところに嫁ぐのが何よりでありましょう。それより他に問題にすべきことなどないのではありませんか」

しかし、婚約が調わないうちに孫洙は亡くなってしまった。

後に、孫の家では、娘を李清臣りせいしんに嫁がせた。後に魯郡夫人ろぐんふじんに封じられたのがその人である。

李清臣が書いた孫洙の墓誌には、

「三人の娘があり、長女りこうげんは李公彦のもとにゆき、二人の女は家にいる」

と、記してあるから、墓誌を書いたときにはまだ李清臣は婿として定まっていなかったのだろう。

晁補之ちやうほしが書いた李清臣の行状記には孫氏の娘と再婚したと記してある。

【補足】 [(1) 『夷堅志』は南宋時代の著名な文化人である洪邁こうまいが編んだ奇談集で、収録されている話のほとんどは事実とはいえないようなものであるのだが、このエピソードは事実にある程度近いようだ。(2) ここに韓夫人かんきとあるのは、韓琦かんきの姪である。韓琦はたびたび見てきたように、蘇軾が8歳ときに憧れた4人のスーパースターの一人で、政界の超大物である。李清臣りせいしんが韓夫人に何も隠さずに打ち明けているのは、韓夫人には頭が上がりなかつたということの現れであろうか。李清臣は、歐陽脩おうようしゅうがその才能を高く評価して将来を嘱望される若者であったので、韓琦はいち早く自身の親族

に迎え入れたのである。士大夫したいふが社会的に高い地位に昇るには、科挙に合格することが何よりも近道で、出世に成功した士大夫が一家の繁栄を後々までも保とうとするなら、やはり科挙に合格するような優秀な子や孫を持つ必要がある。それで、士大夫は士大夫同士で婚姻関係を結ぶことに非常に熱心であった。(3) 李清臣せいしんが孫洙そんしゅの娘に惚れてしまったときに李清臣も孫洙も四十代前半であって、娘の方は十歳前後であつただろうから、韓夫人が驚き、孫洙が怒るのも当然であるが、ありえないことではないだろう。なお、李清臣は政治的には、保守派でも改革派でもないという独自の立場を保ちつつ、権力の座を得ようとする野心はかなり強かつたようである。李清臣と蘇軾の関りはこの後本章で見ることになる]

## ■ 【05-1-005】二疏図贊

【解題】先の詞で見たように、海州かい かんは漢の時代の二疏に そ そこう そじゅ [疏広と疏受] の故郷である。海州で二疏を描いた画を見て、この贊を作った。贊は含蓄に富んだ韻文で、この訳文は残念ながらその味わいを全く生かせていない。

### 【訳文】

時代によって変わらずに壮健であるのは、

ただ天たけなのだろうか。

天は静かにして強く、和やわらかに包み込む。

赫赫かくかくたる帝王であるのは、

漢かん こうその高祖であるうか。

高祖は智をもって王たることを努め、

君臣関係を明確にしたために、

師友の道は喪われてしまった。

宣帝は漢の統治を立て直し、

法をもって人を馭ろうとし、

蓋寛饒、韓延寿、楊惲を誅殺したのだが、

三人は実は良臣であった。

二疏先生はそれを憐れみ、

袂を振って、朝臣としての履を脱いだのだった。

ちまちました統治術で、

志のある士を抑えてはならない。

二疏先生はそのようなことをあらわにはいわなかったけれど、

その意は千年後に伝わっている。

私は二疏先生の画を観て、

涙で襟を濡らすのである。

【補足】 [ここに挙げられている三人の良臣が誅殺されたのは、実は二疏が朝廷を去ってから少し後のことであったのだが、蘇軾はそのようなことには頓着せずに、その時代のありようを記しているのである]

## ■ 【05-1-006】 次韻陳海州書懷

【解題】 このときの海州知事は陳という人 [名は不明] で、かつて蘇軾の故郷である眉山県の知事を務めたことがあった。その陳知事が、二疏のように隠退することに憧れる懐いを記した詩を示したので、それに次韻した。

### 【訳文】

暗くわたかまるあの山は、  
 遥か東の蒼梧の海から流れ着いたものだとか。  
 海上を眺めやると、  
 仙人が住む蓬莱島や方丈島は見えるのやら見えぬのやら。  
 それらの島では草も木も全てが仙薬になるというので、  
 妻子を棄てて海辺のこの町に逃れてきた人がかつていたという。  
 私達はといえば、  
 風雅に遊ぼうという志をいまだに成就できずにいる。  
 昔馴染同士でこして会って、  
 互いに虚しく顔を見合わせている。  
 酒が醒めると、  
 故郷で過ごした子供のころのことがしきりと思い出される。  
 まことに残念なのは、

王喬の二羽の鳧にすがりついて彼方の世界に飛び去れないことだ。

【補足】〔(1) 昔の中国の人にとって海の彼方は神秘の世界で、蓬莱島やら方丈島やら、仙人が住む島があると想像し、海州から船を出してそのような島に渡ろうとした者も実際にいた。海州の近くには、遥か遠くの海〔蒼梧の海〕から、プレートテクトニクスではないけれど、流れ着いたといわれる山があった。(2) 「王喬の二羽の鳧」は作品番号 01-2-037 で見ている。その詩は、仙人の世界からのこの俗世に出てきた王喬の行為を揶揄するような口ぶりだった。この詩では、二羽の鳧にすがりついて仙界に飛んで行きたいと、真剣に願っているわけではない。「退隱ということを軽いノリでいっているだけなのではありませんか」と、陳知事に問いかけているかのようである〕

■ 【05-1-007】 次韻陳海州乗槎亭

【解題】 同じく海州で、陳知事の乗槎亭の詩に次韻した。「乗槎」とは槎に乗ること。槎に乗って行こうとするのは東の海の向こうにあるとされる仙界であろう。

【訳文】

人間界の出来事には涯はてがなく、

人の一生には涯がある。

故郷かんこうに帰り、漢江に筏を浮かべて釣りでめしうか、

それとも、

荒れる海の筏の上でも泰然自若としていたかの謝安しゃあんを見習うのがよいのか。

世を逃れ去った後にも民衆から慕われ続けるようでありたいと思っても、

なかなかそいうことはないものだ。

乗槎亭じょうさていから眺めると、

日が昇るとともに、紅い波が翠の山へと寄せ、

潮がくるとともに、白い浪が青い沙の上で巻く。

この美景と、そして陳知事との清らかな会話は、二つとも非常に結構なもので、

いつの間にか、帰りは、馬の鞍に月の光を浴びながらということになった。

【補足】 [(1) 漢江は蜀から流れ出る川で、そのことは何度か詩に詠まれていた。実際には、蘇軾の郷里を漢江が流れているわけではないが、漢江は広く故郷の河川の象徴として用いられているのだろう。 (2) 謝安は晋の時代の人で、作品番号 02-3-014 から何度か見ているように、いかなることに動じなかったという逸話が多数残っている]

## ■ 【05-1-008】 次韻孫職方蒼梧山

【解題】 孫奕 [字は景山] が詠んだ蒼梧山の詩に次韻した。孫奕は一時期杭州で同僚だった人 [→作品番号 04-2-022]。何らかの経緯でこのときに海州にいたのだろう。蒼梧山は、遙か東の蒼梧の海からやってきたとされる鬱州山である。

## 【訳文】

蒼梧の海から山がきたとは、  
 いかりにも不思議ではあるが、  
 虚伝というわけでもないのだろう。  
 荒唐無稽のような話は、  
 その方面の専門家であった晋の王嘉に問わなければならない。  
 蒼梧山は巨大な鰲の頭に乗し、  
 鵬の背に負われて青空を飛んできたのだ。  
 霊境は賢者のいるべきところといわれるが、  
 そこをつくった神妙の技もただの偶然であったのかもしれない。  
 聞くところでは、  
 新春には貴君は蒼梧山のあたりを自由に遊覧するとか。  
 貴君がこの平地にいなから、  
 仙人のように山々を飛びまわっているのを羨ましく思う。  
 【補足】 [結びの句からすると、このとき孫奕は官職に就いていなかったのかもしれない]

## ■ 【05-1-009】 次韻孫巨源寄漣水李、盛二著作並以見寄五絶

【**解説**】<sup>かい</sup>海州滞在中に<sup>そんしゅ</sup>孫洙 [字は巨源] [→作品番号 05-1-004] から詩が届いたので、それに次韻した。<sup>れんすい</sup>孫洙の詩は、海州に属する<sup>り</sup>澧水県の<sup>せいきやう</sup>李某と盛僑ならびに蘇軾に寄せたものだった。

【**訳文**】

其の一

南の山りゆうにいる劉君たちとはなかなか逢えない。

馬と牛のようにひとつに集まることはまずないのか。

<sup>そん</sup>孫君とは逢えはしたけれどその機会は多くない。

秋に去る燕と、秋にくる雁のようなものなのだろうか。

【**補足**】 [この詩は、蘇軾自身の注で、「かつて揚州で、<sup>よう</sup>孫洙、<sup>りゆうはん</sup>劉攽、<sup>りゆうし</sup>劉摯と会ってから長い時間が経ち [→作品番号 03-4-037]、<sup>そんしゅ</sup>孫洙とは近ごろ潤州で会うことができた」と記している。四人が一堂に会する機会がないのを嘆いたのである]

其の二

優れた人であっても、

進むのが難しい時がくるものである。

勇退とは急流のなかりにおいてなされるものであるだろう。

慕うべきはに「二疏」だけではない。

この地けいそんろうにはいずれ「景孫楼」が建てられるであろう。

【**補足**】 [(1) <sup>かい</sup>海州にある<sup>けいそろう</sup>景疏楼にかけて、いずれ<sup>けいそんろう</sup>景孫楼が建てられるだろうと<sup>そんしゅ</sup>孫洙に戯れたのである。(2) 続く第三首と第四首は、幾つかの故事を引いて<sup>そんしゅ</sup>孫洙、<sup>り</sup>李某、<sup>せいきやう</sup>盛僑ならびに蘇軾のことを歌ったもので、訳すとひどくごちゃごちゃするので割愛す

る]

### 其の五

膠西<sup>こうせい</sup>[密州<sup>みつ</sup>]にはまだ行っていないが、

私はその地<sup>ち</sup>について説くことができる。

桑や稲や麻が春の訪れを待っている。

羨ましくもなんともないのは、

都の塵を浴びて馬に乗る人。

羨むべきは、

膠西の地の川で、月の光のなかに舟を浮かべる人である。

## ■ 【05-1-010】浣溪沙

【解題】<sup>かい</sup>「海州知事の陳君<sup>ちん</sup>に贈る。陳知事はかつて眉山<sup>びざん</sup>県知事として名声があった」  
との添え書きがある詞。

### 【訳文】

長記鳴琴子賤堂。<sup>ちん</sup>〔陳知事もかの宓子賤のように琴を鳴らすだけでよく治めたのでした〕

朱顔緑髪映垂楊。<sup>やなぎ</sup>〔楊の下に立ったそのときに陳知事は輝ばかりに若々しかったのです〕

如今秋鬢数茎霜。〔鬢の毛はいまでは秋枯れの草のようです〕

聚散交遊如夢寐、〔人が出会い、そして別れるのはすべて夢のよう〕

升沈間事莫思量。〔浮き沈みも、退隠も、思案の外のこと〕

仲卿終不忘桐郷。〔かつて赴任したところを故郷よりも忘れずにいた人もいました〕



【補足】〔(1) 前半は眉山<sup>びざん</sup>県知事であったときの陳氏<sup>ちん</sup>について歌っている。(2) 終わりの句の原文は「仲卿終不忘桐郷」〔仲卿<sup>ちゆうけい</sup>は終<sup>つい</sup>に桐郷<sup>とうきやう</sup>を忘れず<sup>わす</sup>〕で、これは漢<sup>かん</sup>の時代の朱邑<sup>しゆい</sup>〔字は仲卿<sup>あざな ちゆうけい</sup>〕の故事に基づく。朱邑は若いときに桐郷<sup>とうきやう</sup>に赴任し、真心をもつて統治にあたり、民衆から慕われた。朱邑は死期を迎えたときに、「後々まで私のことをこと厚く祀<sup>まつ</sup>ってくれるのは桐郷の民だ」といって、桐郷に葬られることを希望した。実際に桐郷に葬られると、土地の人々は朱邑の祠を建て、長く祭祀を行い続けた。この故事を蘇軾は好んで詩文に何度か用いている。この詞を見ると、陳知事は老年に達していたのだろう〕

## ■ 【05-1-011】 王莽

【解題】歴史に精通する蘇軾は、歴史上の人物や事件を主題にした詩をとときどき詠む。前提となる知識を十分に共有しない我々は蘇軾が詩に籠めた意味を容易には読み取れない。これと次の詩はこのころに詠んだと推定され、前年の4月に王安石<sup>おうあんせき</sup>が宰相を辞めたこと〔→作品番号 04-2-096〕と関連しているとされている。題に挙げられている王莽<sup>おうもう</sup>は、皇位を篡奪<sup>せんかん</sup>して前漢を亡ぼしたことで、儒学の伝統において極めて評判の悪い人物で、歴史上の事実を補足しつつ訳す。

### 【訳文】

漢朝<sup>かんちやう</sup>は天下の治め方を知らなかったのだろう。

とかく新しい事をした者が功名を手に入れた。

ある田舎の役人が朝廷にこう報告した。

「夢に天からの使者を見まして、その者がいいますには――

『王莽<sup>おうもう</sup>はまことに傑物である。』

わしの言葉が真実である証拠に、  
 汝の庭に深さ百尺の新しい井戸を掘るぞよ』  
 朝、起きてみると、確かに井戸がございました」

王莽は西に版図を広げようと意図し、  
 天下に優れた技を持つ者を募った。  
 すると、一日に千里を飛ぶという者が現れて、千金を獲得した。  
 ところが、その者が大きな翼を付けて飛んで見せたところ、  
 数百歩で落ちてしまった。

【補足】〔この詩は王安石を王莽おうあんせき おうもうになぞらえて批判したという解釈に基づいて訳した。前半は、王安石が俄かに宰相になったことや、朝廷には改革を讃える情報だけが上がっていることをいっている。後半は、王安石が西方で軍事行動を構える姿勢でいたこと、そして人材を十分に吟味せずに集めたことをいっている〕

## ■ 【05-1-012】 董卓

【解題】董卓とうたく ごかんは後漢末期に政治的大混乱をもたらした人物として、やはり評判がはなはだ悪い人物である。董卓は横暴を窮めたあげくに、身边警護を任せていた呂布りよふに殺されてしまった。

### 【訳文】

とうたく  
 董卓も、初めは儒者を用いるよう勧められてそのようにした。

しかし、その人達が董卓の暴政に一斉に反発したので、

「いったい何事だ」、

と、わめきちらした。

董卓は自分の非を指摘されると、  
「天下にどうせ利口者などはいない」、  
と、極論を言い放った。

確かにその通りで、  
自分の最も身近なところに裏切り者の呂布りよぶがいることにさえ、  
気付かないくらい利口者だったのである。

【補足】[この詩は、王安石おうあんせきが最も信頼していた呂恵卿りょけいけいに足元を掬われてしまったことを痛切に皮肉っているとされる。王安石が宰相を辞めると、神宗皇帝しんそうは、韓絳かんこうを宰相に、呂恵卿を副宰相にして改革を続行させた。王安石は理想家であり理論家で、改革の実際上の運営は腹心の呂恵卿に全面的に依拠した。呂恵卿は政治的抗争を好み、非改革派を排除して改革を急テンポで進めることに成功した。蘇軾も蘇轍も呂恵卿によって朝廷から追い出されたのであって、改革はあらゆる異論を排除して断行されたのである。王安石が宰相を辞めると、呂恵卿は自身が権力を掌握する好機だと見て、王安石が二度と都に復帰できなくなるような工作を進めた。後に、そのまた裏をかくようなことが行われて王安石は宰相に返り咲く]

## ■ 【05-1-013】 沁園春

【解題】「密州みつに赴くに、朝早く馬上で弟に寄せた」との添え書きがある詞。

### 【訳文】

孤館燈青、[ぼつねんと旅館の青い灯火]

野店鷄号、[野辺の店からの鷄の声]

旅枕夢殘。[旅の枕で終わったばかりの夢]

漸月華收練、[次第に収まりつつある月の白い光]

晨霜耿耿、[きらきらと朝の霜]

雲山摘錦、[山に錦を巻く雲]

朝露溥溥、[まるまるとした朝の露]

世路無窮、[窮まるどころのない世間の路]

劳生有限、[劳苦多く限りある人生]

似此区区長鮮歡。[ちまちまとしてばかりいて少ない歓び]

微吟罷、[もう罷めようか微かに吟じていた詞]

憑征鞍無語、[旅の鞍の上で語らずにいるのは]

往事千端。[過ぎ去った千の事ごと]

当時共客長安。[ともに都に滞在したあの当時]

似二陸初来俱少年。[昔の有名な陸兄弟りくに似た少年]

有筆頭千字、[筆の先から溢れる千の文字]

胸中万卷、[胸の内には万の書物]

致君堯舜、[我が君のために為さう堯ぎょうや舜しゆんの治世]

此事何難。[何の難しくもないと思えたこの事]

用舍由時、[用いられるか捨てられるかは時による]

行藏在我、[出るか隠れるかは我による]

袖手何妨閑処看。[懐手ひまをして閑を決め込むのも悪くはないのか]

身長健、[長く健やかな身]

但優游卒歳、[よいのはゆるゆると遊んで終える寿命]

且斗樽前。[ただ一斗樽の前で]

【補足】 [(1) 詞の前半は早朝の旅のスケッチである。(2) 詞の後半の最初に原文で「長安」とあるのは都のこと。父に連れられて科挙の受験のために上京したころのことを回想して、自分たちは晋の時代の陸機、陸雲兄弟のようであったろうかといっている。陸兄弟は若くして当時の都洛陽に上ると、文才をもって一躍天下に名を轟かせた。宋の世の「陸兄弟」は、いまを古代の聖天子の堯や舜の時代に近づけることだってできるくらいの気構えていたと、かなり誇張して自分たち兄弟の輝かしい日々を回顧している。しかし、現実には政争に敗れ、改革の進む政治情勢の中で地方官として不本意な日々を送るのを余儀なくされているのである。(3) これまでにも見たように、弟に向かっては心の底にあるものを率直に言葉にして示している。(4) 現存する作品を見る限りでは、蘇軾はこの年に入ってからにわかに多数の詞を作るようになった。詞の新しい世界を切り開こうと、いろいろな試みをしていたのだろう。弟に向けたこの作品をもって、独自の新たな段階に入ったとみてよいように思われる。何度も記したように、詞は元来は酒宴の場で歌われる艶っぽいものであったから、自身のこのような恋愛感情ではない心情を吐露する作品はそれ以前にはまず見られないものであった]

## ■ 【05-1-014】 虎兒

【解題】 このころに弟の蘇轍に第三子の虎兒〔寅年にちなんだ幼名〕が生まれ、この詩を作って弟に寄せた。この詩は、弟が卯年であることから、「兎がどうして虎を生むのか」というジョークをベースに組み立てられている。それを導き出すために「老蚌生珠」の故事が最初に置かれている。「蚌」は「はまぐり」と読むこともあるが、蛤とは別種の「どぶがい」であるらしい。いずれにしても、貝から真珠〔明珠〕が生まれる意外性を、平凡な親から非凡な子が生まれる譬えとしている。

## 【訳文】

古くから、どぶがい しんじゅ老いた蚌が明珠を生むということなら聞いているけれど、

老いた兎が虎を生むとは知らなかった。

兎が自分でいうには、

「おれっちは月におるものでして、

速く走る馬ではなく、ひきがえる蟾蜍に騎乗します。

蟾蜍というやつはのっりのっりと蛙跳びで、

すいすいとは進まんです」

だからなのか、君はぱっとしない地位のまま、

白い髭ばかりが長くなってしまったのだらう。

虎は兎とはまるで違い、

己自身が駿足で獯猛である上に、

まかいしやう黄熊を顎で使い、どらかいじやう黒豹に駕籠を担がせるのだ。

世間の子は不祥を避けるために、

たん さ丹砂とかしじや紫麝といったまじない薬を塗るものだが、

虎にはそんな必要はなく、

ぎりりとひとにらみするだけで、

妖怪狐だって百歩飛び退いて走ってしまう。

それでも妖怪狐は、

「わしには知恵がある」

と、強かりをいかも知れないが、

虎は牙を動かすまでもなく、

そんな連中はひと呑みしてしまうのだ。

【補足】[この詩は、知人の子の生後三日の祝宴で笑いを取った詞 [→作品番号 04-3-076] と並べてみるとより面白いであろう。先の詞では、熊、牛、犀を用い、ここでは蚌どぶがい、兔ひきがえる、虎ちゆう、蟾蜍、熊、麕、狐とたくさんの動物を並べている。大きな動物をひと呑みにしてしまうというイメージで、子がたくましく育つようにという思いを表現している点は共通している]

## ■【05-1-015】密州謝上表

【解題】蘇軾は12月3日に密州みつに着任した。密州には諸城しよじょう、安丘あんきゆう、莒きよ、高密こうみつの四つの県が属し、州庁は高密県にあった。密州は京東路に属し、路の役所も州庁の近くにあった。密州に到着すると、早速にこの文章を皇帝に朝廷に提出した。皇帝が知事職を授けてくれたことへの感謝状である。この表は駢文べんぶんという非常にやかましいルールのある文体で書かれ、重々しい用語を連ね、きわめてへりくだった調子で綴られている。着任の報告をするだけでも、かなりの高度の文章作成能力を必要としたのである。そのようなことを日本語の訳文で示すのは不可能なので、いつも通りの「ずっぱ訳」を掲げつつ、知事としての職務に誠心誠意努める決意を述べた最後の段落は、荘重な言葉を並べただけでほぼ無内容なので、注釈抜き書き下し文を掲げる。

### 【訳文】

わたししよく  
臣軾が申し上げます。

先に密州知事の勅命みつを頂戴し、今月三日に到着いたしました。草や芥あくたのような卑小な身でありながら、天地のような広大なお恵みをたまわり、私の誠まことを遂げることがができます。勅命を受けて我が身を見ますと、その任にふさわしくないと知ったのでありますが、密州の境より入って、その地の風俗を問うと、思っ

ていた以上にすばらしい土地柄であります。

伏<sup>おも</sup>して念<sup>わた</sup>いますに、臣の家は代々貧しく、性質は甚だ低く、学問<sup>あつ</sup>には篤く志があり乱<sup>あ</sup>れども、昔の時代の進士の表面を飾った文章を習っただけで、議論するところは時代<sup>お</sup>に後れ、老人たちが言い古した陳腐な説ばかりであります。聖世においては役に立たない者として捨て置かれてしかるべきでありまして、ひとたび都を離れてより幾度が歳が改まり、筆硯<sup>お</sup>には塵埃が積もり、次第に古臭い学問も奥底から忘れるようになり、公文書の処理に奔走して、庶民の実情をほぼ理解するようになったのであります。かくて、民衆や国家のために我が力を試して、わずかばかりでも貢献できればと思った次第であります。公<sup>お</sup>をみる朝廷においても私的な願いをすっかり廃することはないだろうと、また家族を都の近くに連れて行くと日常の品も宝玉のように高価であるのを憂い、さらには弟と近くなればと、東方の地を請い願ったのであります。いかなる幸いでありましようか、求めるところを臣は得られたのであります。父や兄であつても臣<sup>わた</sup>に対して、これほどの僥幸を与えてくれるものではありません。遠く地方に置かれまして、これほどの巡り合わせはないのであります。

此<sup>こ</sup>れ蓋<sup>け</sup>し伏<sup>ふ</sup>して、皇帝陛下の上聖之資<sup>こうていげいかのじやうせい</sup>を躬<sup>の</sup>として太平之業<sup>たいへいのぎやう</sup>を建ててに遇<sup>あ</sup>いによるものであつて、以為<sup>おも</sup>うに、人<sup>ひと</sup>は賢愚<sup>けんぐ</sup>と無く、皆用<sup>みな</sup>う可<sup>も</sup>きところが有<sup>あ</sup>つて、故<sup>ゆ</sup>に臣等<sup>わたしら</sup>の如<sup>ごと</sup>き輩<sup>やから</sup>と雖<sup>な</sup>も、猶<sup>な</sup>おも<sup>な</sup>尽<sup>ことごと</sup>くは捐<sup>す</sup>て未<sup>な</sup>いののでありましよう。臣<sup>わた</sup>は敢<sup>あ</sup>のこと、仰<sup>お</sup>ぎみて至<sup>し</sup>恩<sup>おん</sup>に酬<sup>む</sup>いて、益<sup>ます</sup>ます素<sup>そ</sup>守<sup>しゆ</sup>を堅<sup>かた</sup>めて、中<sup>ちゆう</sup>和<sup>わ</sup>之<sup>の</sup>政<sup>せい</sup>を推<sup>お</sup>ひ広<sup>ひろ</sup>げて、疲<sup>ひ</sup>瘵<sup>さい</sup>之<sup>の</sup>民<sup>たみ</sup>を撫<sup>な</sup>綏<sup>すい</sup>しないてゐることはないのであります。要<sup>かな</sup>らずや、民<sup>たみ</sup>が臣<sup>わた</sup>に安<sup>やす</sup>んぜられることが、則<sup>すな</sup>ち臣<sup>わた</sup>が国<sup>くに</sup>に報<sup>ほう</sup>じることとなるのでありましよう。臣<sup>わた</sup>は、天<sup>てん</sup>を瞻<sup>み</sup>て聖<sup>せい</sup>を荷<sup>に</sup>いて、激<sup>げき</sup>切<sup>せつ</sup>屏<sup>へい</sup>嘗<sup>じやう</sup>之<sup>の</sup>至<sup>いた</sup>りに任<sup>た</sup>えるものではないのであります。

【補足】〔(1) 蘇軾が「老人たちが言い古した陳腐な説」[老生常談陳腐之説]を棄てて、「公文書の処理に奔走」[奔走簿書]と記したときの心情は、容易に推察できであろう。改革に伴って、本来の学問が疎んじられて、法に基づいた実務能力ばかりが重んじられるようになったことを、蘇軾は繰り返して批判してきた。ここでは敢えて反対のことを書いたのである。(2) 弟の蘇轍はこのとき密州と同じく山東半島に位置す



る齊州せいしゅうにいたので、弟の近くに赴任したいという蘇軾の願いは叶えられたのである。

(3) 同じときに着任の報告書を宰相の韓絳かんじょうにも提出していて、そこでは、「自分ごときには、天は愚忠を与えてくれただけで、家には素朴な学問が伝えられ、議論は卑俗なところにとどまって、友人たちから陳人でくのぼうといわれた」と記している]

## ■ 【05-1-016】 与滕達道

【解説】蘇軾みつは密州みつに赴任後、青州知事兼京東安撫使の滕元發せいしゅう ち じげんけいとうあんぶ し とうげんぱつ あざな たつどう [字は達道] に宛てて、数通の手紙を書いているので、その一つを見ておこう。滕元發は官界での先輩で、若くして范仲淹はんちゅうえんに才能を認められ、科挙を第三位の成績で合格した。蘇軾は都にいた間に滕元發と会って話したことがあり、やはり改革を批判して地方に出されていた。密州は京東路けいとうろに属しているので、この手紙には、蘇軾は滕元發の指揮下にあると記し、また青州は密州と近いので、この手紙ではそのことを強調している。

### 【訳文】

遠く離れ離れになって早や長い歳月が流れ、お会いしたい気持ちが日々に深まります。朝には履き物が凍り付くほどありますが、いかがお過ごしでしょうか。拙く取り柄のない私でありながら、貴君の指揮下にありますのは、まさに天の幸いであります。お住まいとはごく近くでありながら、馳せ伺う縁がないのかひどく残念でなりません。……

【補足】[滕元發とうげんぱつに宛てた別の手紙では、密州みつのあたりでも蝗の害がひどかったことや、新法によって密州の軍隊組織で幾つかの問題が生じていることが記されている。滕元發とは後に非常に親密な関係になる]

## ■ 【05-1-017】 答水陸通長老

【**解題**】同じころに、蘇州にある報恩寺の水陸禅院の通長老にこの返書を送っている。通長老は、もとは成都の僧で、蘇軾の発案で蘇州に招いたのだった〔→作品番号04-2-100〕。

### 【訳文】

先ごろ、蘇州を通りました折に、お会いしてお別れを申し上げることができず、深く残念に思っております。お使いの人が来られてお手紙を頂戴し、法履〔通長老〕が清勝であることをひとえに喜んでおります。私はこちらに到って十日ほどで、僻遠での地でありますから、事は少なく、拙い衰え者を養うにはよいところです。ただし、近くに山水のよいところはなく、寺は鄙びて僧は皆粗野であります。蘇州や杭州でのような湖山の遊びをまた求めたくても、ぼんやりと思ひ描くこともできません。いつかまたお会いできますことを楽しみに、この侘しさを慰めるばかりです。万万自重されますように。

【**補足**】〔上の手紙で寒さについて触れていたが、3年間江南で過ごした蘇軾には、遙か北の密州にきていきなり12月の真冬の寒さに遭ったのは身にこたえであろう。なおさら蘇州や杭州の風光が懐かしく思えたのではなかろうか〕

## ■ 【05-1-018】 上韓丞相論災傷手実書

【**解題**】上の手紙で、密州は事もなく閑であると書いていたが、実際はそうではなかった。着任するとすぐに密州が直面している諸問題の把握に努め、その年のうちに宰相の韓絳に向けてこの意見書を提出した。その一部を訳す。

### 【訳文】

密州に至って二十日余り、この民は鈍く、よそからくる人は稀で、私のような真に愚拙な者が長いには結構な場所です。しかし、災害の影響が残り、民衆は疲弊しております。

初めてこの州の境に入りましたとき、蝗いなごをくるんで棄てた藁が道の左側にずらりと並び、二百余里にわたって続いていました。一体どれだけの蝗を捕殺したのかと役人に尋ねますと、およそ三万斛こくとの答えでした。その一方で、役人がいには、蝗は災いをもたらさなかったと。はなはだしくは、民のために草を除いたとまでいう者もありました。蝗がはたして民のために草を除いてくれるのなら、民は蝗がきてくれるのを祝うことがありまして、どうしてこれほどたくさん殺したりするのでしょうか。

私は、杭州こうにいて、蝗が西北より飛来するのを目の当たりにしました。その音は大河の波濤が乱れるのにも似て、太陽も月も覆い隠し、蝗が地上に下ると、草も木も覆ってしまって、たまたま落ちたところは見渡す限り何もかもなくなってしまうのでした。その蝗は都の東方にいた集団が南に及んだものでありました。同じ蝗でありながら、都の東方では害をなさずに、南方では害をなしたというのは、南の人々が偽りをいっているからなのでしょう。

地方の災害の状況については詳細な報告が朝廷に上がっていることでしょう。宰相殿はどうかそれらを少しく信用していただきたいのです。

……[副宰相りよけいけいの呂惠卿しゅじつほうが新たに作った手実法などの新法の弊害を幾つか指摘する]……

私は錢塘せんとう [杭州こう] にありましたときに塩法えんぽうを犯した者を裁く書類を書くたびに涙を流さずにはられません。京東路けいとうろに到りますと、官が塩を売ることではなく、獄中に塩法の犯罪者を見ることもなく、途中の道でも塩法のために遠くへ流されて行く民を見ることはなく、私はまこと幸いであると竊ひそかに喜んでおりました。ところが、近ごろ朝廷からきた文書を見ますと、王伯瑜おうはくゆなる者が京東路、河北路かほくろでも塩を官の専売とすることの利害を説いていましたので、思わず愕然として嘆息したのであります。密州みつしゅうにおける塩の税収は一年に錢二千八百万余りで、塩の量りょうは百九十万秤余りです。これは密州だけの数字です。これを官の専売として、全ての売買が実行できるのでしょうか。もしもそれができなければ、民衆は作ったものが余らないように生産を控えるか、あるいは、作って余っても敢えて売らずにおくということになるのでしょうか[密売が横行すると暗くらにいつている]。先ごろ、両浙りょうせつ [江南こうなん]の民で塩法を犯して罪を得た者は年に一万七千人もいましたが、それでも完全に抑えることはできませんでした。京東路の民は両浙の

民よりずっと悪賢いので、一万七千人ではきっと留まらないであります。もし官が塩の全ての売買を行うのなら、時機に後れることなく全てを売り尽くさないとなりません。それができないなら、残った塩は土塊と同じになってしまいます。害はそれに留まるものではありません。

どうか宰相殿におかれては、塩法が行われぬようにしていただきたく、もしもすでに実施が決まっていたならば、どうにかして止めていただきたく願うものです。……[以下、特別な配慮を重ねて宰相に希望する文言が続く]……

【補足】〔(1) この文書は州行政のトップに立った蘇軾の覚悟をはっきりと示すものであろう。副知事のときは、知事の指示に従って動くことしかできなかったが、知事になったからには、朝廷に対しても意見をはっきりと述べて、自身の考えで州行政を引っ張っていかうとしているのである。(2) 最初に蝗<sup>いぬご</sup>の害について記し、杭州からは地域の実情をありのまま報告したのに、密州からは偽りの報告がなされていたのではないかと指摘している。朝廷に上がってくるのは朝廷が聞きたい情報だけになっているとしたら、蘇軾<sup>しんそう</sup>が神宗皇帝に差し出した意見書で危惧していた [→作品番号 03-2-009] その通りになってしまったことを意味するであろう。つまり、改革政治はすこぶる順調に進んでいると中央に報告すると受けがよくて自身の出世につながるので、蝗の害などがあっては困るのだ。(3) 塩の専売をより広い地域で行うべきだとの王伯瑜<sup>おうはく</sup>の提言も、同じような構図を見て取ることができるだろう。専売にすれば税収が大幅に増えると計算上はいえるだろう。実際の運営は容易ではなく、大量の犯罪者を生み出すという大きな弊害も生じるのである。(4) 蘇軾は、宰相の韓絳<sup>かんじょう</sup>とは若干の縁があり [→作品番号 01-2-014]、副宰相の呂惠卿<sup>りょけいけい</sup>と違って、自分の意見にも耳を傾けてくれるのではないかとの期待をもってこの文書を提出したのだろう。しかし、名門出身の韓絳は決断力に欠け、政治的野心に燃える呂惠卿を抑えることができず、この二人は結局のところ何も決められない膠着状態に陥ってしまった。韓絳は思案にあぐね、

後に王安石を呼び戻して呂惠卿を黙らせるという禁断の奥の手を使った。確かにそれで呂惠卿を出し抜くことには成功したのだが、圧倒的な実力者の王安石の前に韓絳も宰相職から飛ばされてしまうことになる]

## ■【05-1-019】論河北京東盜賊狀

【解題】上の意見書に続いて、密州周辺で盜賊が増えている現状を分析して、その対策について提案するこの文書を朝廷に差し出した。12月3日に着任して、年内にこの二つの文書を出しているのを見ると、蘇軾には相応の行政能力があり、かつ勤勉であったと見てよいらう。一部分を訳す。

### 【訳文】

熙寧七年十二月、太常博士直史館權知密州軍州事蘇軾が書状をもって奏上いたします。臣が河北路と京東路の現状を見ますに、このところ蝗害と旱害が並んで起こり、さらには盜賊の勢いが増え盛んになっています。いまも雨が降らず、秋から冬に至っても、数千里四方で麦が成長しておりません。心密かに、明年の春と夏の境のころには、いまよりも甚だしい患いとなってしまっているのではないかと心配しております。このことについて、愚かでありながらも陳述して、万に一つでも国政を補うことができればと存じます。

謹んで按じますに、[都の北東に当たる]山東地方は遠い昔から、國家の腹心根本の地でありまして……[歴史を振り返る]……陛下が即位されてからは、黄河の北側では北方の民が流動してきたり、天災が起こったりすることでは他の地方よりもはなはだしく、ここ五、六年の間はこゝたことを全く防げずにいます。しかしながら、京東路のあたりでは何事も起こっていないとされ、その民は富みかつ安逸に暮らしているので、黄河の北側で何かあったときにも物資を十分に送れるとされてきました。現実には、京東路でも近年は公私ともに欠乏し、民はお上からの命令に応えられなくなっています。

いま民が飢饉にさらされ流離していることに対しては、国が備蓄している食糧を放出して物価を安定させ、余裕のある民間人にも協力させようということだけが議論されています。盗賊が横行していることに対しては、お上に告げ知らせる者に褒美を与え、厳しく掴まえるということだけが議論されています。そのようなことで効果が上がっているのを見ることはできません。……[中略]……

いま一般の庶民は皆食糧がないために、法を犯して盗みを働き、ついには死刑にもなっています。法を畏れて盗みをしなければ餓えて死ぬしかないとしたら、刑死するか飢え死にするか、いずれにしても等しく死があるだけです。目前の飢えと、この先の刑死とでは、身にふりかかる災いに早いと遅いとの違いがあります。盗賊となる理由がそこにあります。盗賊を一日に百人殺したところで、その勢いはやむことはないのです。……[中略]……

わたし臣が治める密州は今年の秋から日照りによって、麦を植えても育ちません。十月十三日には雪が降るほどに地が冷え、麦は成長するのが難しく、例年に比べて十分の二ないし三程度しか育っていません。河北路、京東路ではどこも同様です。……[中略]……これでいつも通りに夏に徴税を行ったならば、民は必ず土地から逃げるででしょう。逃げ去って、どこかに豊作の地があればまたしも、数千里にわたって麦が稔らない現状ではどこに行ったらよいのでしょうか。善良の民が挙って盗賊となってしまうのを恐れます。目のある者なら地に麦がないことは誰が見てもわかります。耳のある者なら民の困窮は誰が聞いてもわかります。朝廷を欺く者でなければ、どうして座視して何もしていないということができましょうか。

河北路、京東路では塩の国家管理が厳重になって以来、民衆は非常に困っています。……[中略]……河北路、京東路では塩の売買によってかつて国家が得ていた税額は三十三万二千余貫でありました。きねい熙寧六年には四十九万九千余貫に、七年には四十三万五千余貫と増えました。一方で、法による刑罰は年々厳しくなり、多数の者が捕えられています。庶民は自分のための塩を買わずに困っています。……[中略]……ここ数年盗賊が増えたために、密州において塩からの税収が去年一年は二万貫の増額になった一方で、盗賊を捕えるための費用として一万一千余貫を費やし、それで

も掴まえきれない盗賊がたくさんいます。これらを比較すれば、利害得失がどこにあるのか明らかとなりましよう。……[後略]……

【補足】〔(1) 山東は「腹心根本の地」で、そこで盗賊が跋扈しているのは由々しい問題であると蘇軾はここで指摘しているのだが、後に民衆反乱の一大拠点となる梁山泊はまさしく山東の地である。そして、民衆反乱には必ず塩の密売人が関係していた。

(2) ここでは、河北路、京東路と記しているが、詳しくは河北路は河北東路と河北西路に、京東路は京東東路と京東西路に分かれ、密州も弟がいる齊州も京東東路に属した。山東半島はおおむね京東路の範囲を指す]

## ■【05-1-020】鉄溝行贈喬太傅

【解題】密州の州庁舎は諸城県にあって、諸城の町の北東に、北に向かって流れる鉄溝水という川がある。喬紱〔字は禹功〕とともにその川に行き、鉄溝水を詠んだこの詩を贈った。蘇軾はどこに行ってもすぐに詩友ができるようだ。喬紱は諸城県の役人であった。

### 【訳文】

町の東の丘や農地が何に似るかというと、

風が吹いて海の波が高くなったり低くなったり――。

知事さんは、とにかく気分が悪くて何もできやしないと、

馬に乗って町の中から走り出て、

鉄溝水のあたりへとやってきた。

川の水は浅くて船を浮かべることができない。

貴君と二人で、昔のある師弟がそうたように、

釣竿をここに並べてみよう。

ここに魚がいるかいないかは問題ではない。

その師弟のように、

我が憂いをここで少しばかり詩に写そうと思うのだ。

あの小さな村のあの小さな店には何もなさそうだが、

酒さえあれば、思いのほどを言い合えるだろう。

そろりそろりと山に日が落ちて行くのは、

金の盆が斜めに傾くかのようだ。

我等のこの白髪頭に載っている帽子なんぞは、

いっそひっくり返しにしてやったらよいのだ。

貴君はいう、

「若いときに従軍しまして、

軽い毛衣も速い馬もまったくありませんでしたが、

弓を手にし<sup>や</sup>箭を腰に付け、

南の山の下で獣たちを追い掛けたものです。

こうやって老いて貴君とともに酔っ払い、

不景気面で、夜になってから帰ったならば、

漢<sup>かん</sup>の時代の李<sup>り</sup>将軍が弓退後には門衛にさえも馬鹿にされましたように、

町の人たちを驚かせる勢いなんぞはこれっばかりもありませんな」

私はいう、

「だが、その李将軍も再び大いに用いられるのですから、

来年には、貴君も志をきと得るでありますよ。

そのときに、李将軍が門衛を罰して憂さ晴らしをしたようなことは、



貴君は決してしないでしょ」

【補足】〔(1)「思いのほどを言い合」うと、ここでは平凡に訳したが、原文は「狂言きょうげんをはっ発せんとほっ欲す」で、普通は黙っているべきことも言葉を飾らずにいってしまうという意味であろう。蘇軾は、鬱屈する思いを抱いている人とすぐに仲良くなる特技があったようだ。(2) 李將軍とは漢の時代に西域で大活躍した李広りこうのことで、將軍職から離れていた間に町の門を守る兵士に馬鹿され、後に再び將軍の地位に返り咲いたときにその兵士に復讐した。蘇軾はそれはつまらない行為だと見ていた。(3) この詩の終わりで、蘇軾はきっと志を得ると喬紋きょうじんを励ましているが、後に見るようにそれは現実のものとなる〕

## ■【05-1-021】雪後書北台壁二首

【解題】密州の官舎の北側にある見晴らしのよい建物〔台〕の壁に書いた二首の詩。

### 【訳文】

其の一

たそがれ  
黄昏どきは、しとしと雨が降っていた。

夜になると、風はなく、静けさが増し、次第に寒さが厳しくなり、

かげぶじん おまき  
衾や柵が水をかけたような冷たさになった。

まさかそのときすでに雪が降り積もっていたとは。

真夜中に、軒端のあたりで冷え冷えとした音がし、

夜明け前に、書院の帷カーテンにほんのりと明かりが訪れた。

起きて、雪をはらって北台ほくだいに登り、

ば じ さん  
馬耳山を見ると、

二つの尖った耳だけが、まだ雪に埋め尽くされずに飛び出ている。

【補足】<sup>ば じ さん しよじょう</sup> [馬耳山は諸城県の南にあり、山頂にある二つの尖った巖が馬の耳のように見えるところからその名がある]

## 其の二

町の上に出てきた朝日を受けて、鴉が翼を翻すと、

道は早くも泥んこ、車輪がのめり込んでしまう。

寒さは、<sup>ぎょくろう</sup> 玉楼[両肩]に氷が張るほど、

ぞくぞくとして肌粟が立つ。

雪からの反射光が眩<sup>まばゆ</sup>く揺れて、

ちらちらと銀海<sup>ぎんかい</sup>[両眼]に花が生じる。

この雪に驚かされて、<sup>いなご</sup> 蝗どもは地中深くに入ったであろう。

そして、この雪のお蔭で、

麦畑には雲を連ねるような豊かな稔りのときがくることだろう。

かつて氷の柱をみごとに詩に詠んだ人がいた。

それを吟じつつ、

自分の詩の力が、年齢とともに後退してきたのを嘆く。

【補足】 [(1) 雪は豊年の吉兆とされた。猛威をふるった蝗も雪によって完全に退治されることを蘇軾は期待したのである。(2) <sup>ひょうちゆう</sup> 氷柱を詩に詠んだのは唐の時代の劉叉<sup>とう りゆう さ</sup>という人。温暖な江南から寒さの厳しい密州<sup>みつ</sup>にきて、新たな土地にまだ慣れないことを、詩の力が後退したと表現したのだろう]

## ■ 【05-1-022】 謝人見和前篇二首

【解題】 ある人が上の詩に和したので、また和して返した。

【訳文】

其の一

酒というものは、  
自分のくたぐだのところへとうまく入り込んでしまうので、  
せめて詩の力でもって、  
深く厳しく知恵をしまり出そうとしなければならない。  
昔の人もそうだと見えて、  
ある人は、漁師の蓑に積もる雪を詠んだ句をひねり出したところ、  
画題としてまさにぴったりのものとなった。  
ある少年は、雪を塩に譬えて、  
「しめしめ、うまく詠めたぞ」  
と、思っていたら、  
「柳絮リウジュに譬えたほうがまたまだたてように」  
と、妹にいわれてしまった。  
貧乏先生は、壊れた履くつで雪の中を歩いて人に笑われ、  
おかしな屁理屈の句を吐いたし、  
地上に落とされた仙人は、  
雪を簷ひさしに舞う花だと詠んだがした。  
いずれにしても、  
書生のすることはどうころんとところで笑ってしまうがなく、  
寒さに凍えなからで、とにかく詩を吟じたりするものだから、

酷使される筆にとっては迷惑な話である。

【補足】 [(1) 雪を詠んだ有名な句をあれこれ引用してこねくりまわした詩で、技巧的  
 のでさほど面白くないので、あえてふざけた調子で訳してみた。(2) 第二首でも同じ  
 ようなことをするのは気が引けるので割愛する]

## ■ 【05-1-023】 除夜病中贈段屯田

【解題】 おおみそか 大晦日にこの詩を詠んで だんえき あざな しやくし 段繹 [字は積之] に贈った。 けいとうとうろ 段繹は京東東路の役人。詩の題に「病中」とあって、体調を崩していたからなのだろうか、悲観的な内容の詩になっている。

### 【訳文】

三十九歳にしてすでにへとへと――

己の生命を疲れさせて人生の半分を超過してしまった。

昔、白居易が、

斜めになってきた大晦日の陽射しのもとで、

我が三十九歳もこれで終わると嘆いたのは、

こういうことであつたかと実感させられる。

まだ今年はまだほんの一本の線ばかりは残っているのだが、

もはやそれも遊ぶほどにはない。

起きて無理にも酒を手にとしようとして、

古い友人は雲か雨のように散り散りになってしまっている。

何も無いこの部屋で親しい友となっているのは、

次々に続く病気だけである。

冷たく寂しげな燈火と向き合って、  
寒い夜はいつ終わるとも知れない。  
下僕は倦み疲れて頭を屏風につけて居眠りをし、  
腹をすかせた<sup>むさびが</sup>鼯がやってきて空っぽの机を嗅ぐ。  
ここ数日間、門を閉ざして臥せていたので、  
白い髪が枯れ草のようにこぼさばさに乱れている。  
使いの者がきたとの報せに、  
よるよると<sup>たらい</sup>盥のところまで行き、  
手を洗い、髪を<sup>しげず</sup>梳ってから迎え入れると、  
貴君からの手紙がもたらされ、  
ほっと安堵したのは、  
往来が間遠になっていたけれど、  
貴君はそれを変に思わずにいてくれたとわかったからだ。  
<sup>ちゅうれつ おひな どうだい だんしゅうじつ</sup>  
忠烈と謚された唐代の段秀実——  
貴君はその子孫であるから、  
気高い<sup>きんせき</sup>義心は金石をも貫き、  
権勢を誇る悪党ともをきつと撃つべく、  
いさかも衰えたり怖じ気づいたりなどしない。  
私はといえば——  
この人生は何に似るのか、  
暗い塵に埋もれた灰の中の炭か。  
もはや燃え上がることかないのなら、  
郷里に帰って田に暮らすと決めるべきである。

この町をいつまでも旅の宿りとしていようとは思わない。

鳥は一本の枝さえあれば暖かく暮らせる巣を作れるのだ。

昔の賢人は退官後に三本の小道を作って友を招く道とした。

願うのは、貴君がその小道をたどって我が一本の枝にきて、

長く逗留して祭って話し合うことだ。

【補足】[蘇軾は 21 年後に書いた手紙で、この年に初めて痔疾を患ったと記しているが、ここでいう「病」はそれを指すのではたぶんないだろう。ただし、蘇軾も痔疾のために急に悲観的になったと想像しても悪くはないのかもしれない]

## ■【05-1-024】喬太博見和復次韻答之

【解題】前の詩に喬紱きょうじよが和したので、それにまた蘇軾が和した。前の詩は 16 カ所で韻を踏んでいて、詩の末尾に置かれた韻は「粲さん」で、前の詩ではそれを「笑う」という意味で使っていたが、この詩では「輝く」という意味で使っている。粲さんさんは燦燦さんさんの燦と通用するのである。

### 【訳文】

百年は三万六千日。

そのうち半分を老いや病が占めてしまう。

しかも、憂ゆうと楽らくが交互にあって、

歌い笑うと悲しみ嘆なげ息いきが雑まざり合う、

我々は、人生が突如ひっくり返るのも知らずについて、

運命の神にただ玩あそばれる。

万事が一瞬にして風や雨のように散り散りになるありさまは、

笑ってしましかなない。

この理ことわりを早く知ってからは、

私は子供同士の仲間から離れ、

世間の日々の出来事いひまに関心を寄せる暇などなく、

無何有ユートピア之郷郷に遊ぶことを想うようになった。

貴君を煩わせるのは恥ずかしいが、

私の混乱した人生をどうか整理していただきたい。

ただし、私は非才でしかも多病であるから、

私を評価するにはこの二つの点も勘案してもらわなければならない。

貴君は、譬えていえば、

周しゅうの文王ぶんおうの廟おたやまやで祭祀に使われる器のように清らかで、

貴君が髭をちよいと震わせるだけで、役人たちの姿勢をひしと改めさせ、

一国いっくわの緩な風俗をもかりと変えてしまう。

鳥は高く上あがりが過ぎると強い風に退かされてしまうものだが、

貴君はそのようなことはなく、

雑魚どもは貴君と並んで進もうとしてもとても及ばないと取とり入るしかない。

貴君の議論のほんのおこぼれを聞くだけでも、

意気地のない者どもも勇気を与えられて発奮する。

名剣は炉の炭の力を借りることなく自ら躍り出るといふが、

貴君がまさにそれだ。

朝は南の国まぐさで秣まぐさを食らっていた馬が、

夕方にはもう北の国の旅宿を通り過ぎてしまう勢いがある。

いつまでもぬくぬくと同じところに留まってなどいないのだ。

そこで、昔の賢人のように、  
 私は牛の角を叩きつつ、  
 君のためにこのように歌おうではないか——  
 「正しくない世間から離れ、  
 これから行くところ、  
 ああ、南山なんざんは築かぎやいている。

【補足】〔(1) 喬きやうじよ紱は先の詩にあったように不本意な境遇に置かれていたから、蘇軾のやや暗い詩に共感しやすかったのだろう。それだけに、この詩は過剰なくらいに贅辞を贈って励ましている。(2) 終わりにある「南山なんざん」は、具体的には長安ちやうあんの南方に聳える終南山しゆうなんざん〔→作品番号 02-3-033〕を指すが、世に容れられない高潔な人間が最後に入って行く神聖な山というイメージがある〕

## ■ 【05-1-025】二公再和亦再答之

【解題】喬きやうじよ紱に返した前の詩に、喬きやうじよ紱と段繹だんえきの2人がまた和したので、さらにまた和してこの詩を返した。こうした応酬が年末の一晩のうちになされたとは思えないが、ここでまとめて見ておく。ある人は、16個もの同じ韻を繰り返し使った最後のこの詩が最もこなれていて、再三和したものとは思えないと評している。末尾の韻の「築」はこの詩では王おうさん築という人名で用いている。王築は戦乱に追われて故郷を離れ、ひとまず身を寄せた土地で高楼に登り、故郷を偲とうろうぶ『登楼の賦』を作った。それ以来、「王築」あるいは「登楼」は「望郷の歌」の代名詞のようになった。

### 【訳文】

鶏は朝になろうとするのを知って鳴き、



鶴は夜半になろうとするのを知って鳴く。

同じように、

病に臥せる老いた旅人は、年が改まろうとするのを知って嘆く。

こういん  
光陰は石を叩くと飛び出る火花と同じ——

眼の前を一瞬過ぎたら、もう遊ぶことはできない。

親しい友は手に握った砂のようなもの——

手を開けばたちまちばらばらになってしまう。

旅から旅へと独り行く私は、

寂しくも伴う友もない身だと、自分で自分を笑えない。

しん きょうちめい  
晋の世の喬智明は神のごとき智者といわれ、常に高い評判を得ていた。

かん よ たんけい  
漢の世の段熲は賢い將軍といわれ、机に埋もれての事務もこなした。

現代の喬智明、段熲ともいうべき二君と、

夜たけなわに至るまで燈火を乱して笑い合う。

食べ足らないうちに皿はすでにからつまこなり、

酒は薄くて杯を洗うらいのことしかできない。

私が無作法でのろくさいのをどうか許していただきたい。

ここにはたおやかな美人の珠をころがすような歌声はないが、

幸いにも我等三人には縦横に動く舌があるのだから、

剣のような鋭い議論でたわけた連中の目を覚ませようではないか。

二人の豪傑は、

湿った炭が火を暗くして埋もれているように、いまは下位に沈んでいる。

昔むかし、占いを研究して書齋の内で年老いた学者がいたけれど、

二君は決してそれと同じにはならないであろう。

いつか二君にも富貴が迫ってくるだろうが、  
 富貴というものには身を焦かしてしまう力があるので、  
 手をぬくめる程度でやめておくのがよいだろう。  
 そして、いつも故郷に帰ることを思って、  
 楼に登って王粲おうさんの賦を唱えるようにしていただきたい。

【補足】 [詩を贈る相手と同姓の人の故事を詩に詠み込むのは蘇軾の得意技であった]

### ■ 【05-1-026】蘇州姚氏三瑞堂

【解題】熙寧きねい8年 [1075年]、蘇軾40歳。これは蘇州にある姚氏ようの三瑞堂さんずいどうについて詠んだ詩。この詩を密州で作った事情ははっきりとはわからないが、この時期の作であるとされている。三瑞堂は蘇州しゅうもんの閭門 [→作品番号 04-3-082] の西にあって、蘇軾自身の注によると、姚氏は代々、孝をもって知られたという。

#### 【訳文】

昔、董邵南とうしょうなんという人がいた。

貧しく世に隠れて生きていたが、

義ぎを行い、孝こうにしてかつ慈じであった。

天公てんこうは、その人が誰にも知れられないままになるのを恐れたのだろう、

鶏や犬が育児を助けるような不思議をさせたり、

韓愈かんゆに詩を作らせたりした。

それから三百年、

その名は淮水わいすいとともに東南に流れて広く知られている。

董邵南のように埋もれた賢人は世の中にきっと少なくなく、

このようなことも時にはあるのだろう。

蘇州の楓橋の近くにある三瑞堂は誰の目にも見え、

つまり、天の意は舜の後裔である姚氏の上にはっきりとあるのだ。

ただ問題は私が昔の韓愈ではないことであって、

測ることさえできないような高い価値を有する人に、

貴君は改めて詩を求めてほしい。

【補足】 [依頼を受けて、どうにか義理を果たしたという感じの詩である]

## ■ 【05-1-027】 莫笑銀杯小答喬太博

【解題】 改革に伴ってしばしば公費削減の指令が下っていた。そのことに関連して喬きょう紱じよに向かって戯れの詩を作った。

### 【訳文】

陶淵明は小さな町の県令だったとき、

お上から賜った公田は二頃五十畝の広さで、

その全てに酒を作るための秫もちあわを植え、

食べるための秬うるちは植えなかった。

それによって、独り飲んで独り醒めるには十分な酒が得られた。

私はいま知事としていわゆる二千石の年俸で、

その中から年ごとに百石だけを費やして酒を醸すのでは、

客人を十分に酔わせることなどできるものではない。

銀の杯が小さいのも、どうか笑わないでほしい。

海辺の地域はこのところ日照りて窮迫し、もはや酒どころではない。

陶淵明ならさっさと衣をはらって郷里に帰ってしまうだろう。

そこで私は空想する――

河の神様に手紙を書いてお金を拝借し、

一万斛を積載する船を酒でいっぱいにして、

郷里に向かいつつ貴君と楽しく飲み続けようではないか。

【補足】[漢の時代に郡の太守 [長官] の年俸が二千石であったことから、「二千石」は地方の広域行政区の長官の代名詞となった。それで、蘇軾は自分の年俸は「二千石」であると歌ったが、宋代の州の知事は漢代の郡の太守に比べたら収入はずっと少なく、行政者として自由に裁量できる範囲もかなり限定されていた]

## ■【05-1-028】蝶恋花

【解題】「密州の上元」という添え書きのある詞。つまり1月15日の上元の日にした詞である。上元節の夜に多数の灯籠を飾って、それを見物して夜歩きするのを当時の人々は大きな楽しみとしていた。この詞は前半で杭州の上元を回顧し、後半で現在の心情を歌っている。

### 【訳文】

燈火錢塘三五夜。[杭州の灯籠、十五夜の月]

明月如霜、[霜のような、明るい月の光]

照見人如画。[画のような、灯籠に照らされた人々]

帳底吹笙香吐麝、[帳の内では吹かれる笙、流れ出る麝香のかおり]

此般風味応無価。[これらの風味は価を付けられるものではありません]

寂莫山城人老也。[山に囲まれた寂しい町で老いてゆく人]

擊鼓吹簫、[撃たれる太鼓、吹かれる簫<sup>ふえ</sup>]

乍入農桑社。[始まったのは豊作を祈る村の神様の祭り]

火冷燈希霜露下、[火が消えかかって、灯籠にうすすら降り下る霜]

昏昏雪意雲垂野。[雪を含んだ雲が暗く暗く野に垂れこめます]

【補足】<sup>じょうげん</sup> [上元のころに南の<sup>こう</sup>杭州ではすでに華やかな春を迎えつつあり、北の<sup>みつ</sup>密州ではまだまだ冬であった。そうでなくても、杭州は天下に名高い大都市で、密州は一地方都市でしかなかった]

## ■ 【05-1-029】 江神子

【解題】「正月二十日、夢を記す」という添え書きのある詞。前の詞から5日後の作である。

### 【訳文】

十年生死兩茫茫。[生きる者も死する者も遥かに遠くなった十年の歲月]

不思量。[ぼんやりとするばかり]

自難忘。[忘れられもしない]

千里孤墳。[千里の彼方にぼつねんとある墓]

無處話淒涼。[どのように話したらよいかこのもの悲しさ]

縱使相逢応不識、[たとえ君に会えたとしても、「えっ、あなたは誰なの」]

塵滿面、[僕の顔に満ちるのは人生の塵]

鬢如霜。[鬢はすでに真白なのです]

夜来幽夢忽還郷。[夕べ僕は故郷に帰っていた、あれは夢]

小軒窓。[小さな部屋の窓辺]

正梳妝。[君は化粧の最中]

相顧無言、[振り返って、ただ無言]

惟有淚千行。[ぼろぼろと落した無数の涙]

料得年年腸断、[これからはきっと毎年、心を痛めるのは]

明月夜、[昨夜と同じように明るい月の下]

短松岡。[まだ松が短いかの丘で]

【補足】[夢に見たのは10年前に亡くなった妻の王弗<sup>おうふつ</sup>。父と妻を葬った墓地に自ら松を植えたことは作品番号 03-1-007 などで見ている。王弗を夢に見て、この詞を作ったのは、このころの蘇軾の心情を反映するものであったのだろう]

## ■ 【05-1-030】 送段屯田分得于字

【解題】段繹<sup>だんえき</sup> [→作品番号 05-1-023] が密州から去ることになり、喬敘<sup>きょうじょ</sup>、趙昶<sup>ちようちよう</sup> [諸<sup>しよ</sup>城<sup>じよう</sup>県の知事]、趙臬<sup>ちようこうけい</sup>卿<sup>みつ</sup> [密州の学校の教授] とともに送別の詩を作り、蘇軾には「于」の字が韻として割り当てられた。詩には特に送別ことは詠まれていないので、段繹は役目柄移動して行っただけなのだろう。

### 【訳文】

貴君<sup>だんえき</sup> [段繹] は農業を興す仕事を授かっているのだから、

古代なら大夫に相当する地位だ。

国家の仕事は決してないがしるにはできないと、

衣服が泥まみれになるのも厭わずに走り回り、

はなはだ身を疲れさせている。

喬君[喬敘]<sup>きょう きょうじょ</sup>は鬚を恐ろしげに長く二つに伸ばし、

趙君[趙昶]<sup>ちよう ちようちよう</sup>は天をも走る馬のように格好がよろしく、

趙君[趙杲卿]<sup>ちよう ちようこうけい</sup>は世間ずれしない学者然としている。

この四人が野外で呑む楽しさは、町の中にはないものである。

四人は自分自身で酒の壺を携えて川辺を歩く。

昔むかしある知事さんが春を楽しもうと、

客人を舟に乗せて、それを村人に曳かせようとしたところ、

ある賢者<sup>しやく</sup>が笏を取り出して水をかき、

自分たちの遊びのために農民の仕事を妨げてはならないと、戒めた。

そのようなことは、四人はもとより最初からわかっているのだ。

この私は、病みかつ老い、その上、迂闊な知事であるので、

からんとした部屋で書物を読んで憂いを紛らせようとしている。

昔むかしある人は四十歳までには国家の重鎮になるぞと心に期したものの、

三十六歳でなお遠くかけ離れた地位にあったので、

「我がつむりがどの程度であるのか私は知らないものではない、

もう郷里に帰るべきなのだ」

と、いった。

私はすでに四十歳——

人様に妙な具合に評判されるのを恐れて、

ぐずぐずしているのは実に愚かしいのではないだろうか。

【補足】〔(1) 蘇軾は詩詞の中でしばしば官職から退くことを歌っている。さしあたって具体的にその計画があるわけではないので、詩詞の味わいをよくする調味料〈退

隠ソース) をかけて一丁あがりというようなものではなかろうかとの疑いも生じるし、  
 海州の陳知事かい ちんに向かって安易に退隱を口にするのを戒めてもいた [→作品番号 05-1-006]。それでも、蘇軾は厳しい政治情勢のもとに置かれていたので、精神を安定させる拠り所として、心の内に常に退隱のイメージを宿しておく必要があったのだろう。

(2) 同じころに、段繹だんえきの甥を褒める詩を作っているが訳は割愛する]

## ■ 【05-1-031】 出城送客、不及、歩至溪上、二首

【解題】 詳しい事情はわからないが、他所からきた人が町を去り、何かの都合で別れを告げることができなかった。その後を追ったが、その人に会えないまま溪流のほとりに至って詠んだ詩。

### 【訳文】

#### 其の一

客人を送ろうと出たけれど、客人はすでに行ってしまった。

ならばと、花を尋ねようとしても、花はまだ開いていない。

町にもどる気にもなれずに水辺へときて、

ぶらぶら歩いていると、

土地の老人が声をかけてきた。

「州知事様はいまどこにおられますかなあ。

今年は天候がなかなかよるので、

きっと麦がたっぷり収穫できましょと、

お伝えいたきたいものです」



其の二

白居易はくきょいはこういた——

「春はわずかに九十日、

その間に口を開いて笑わずにいるのは癡しれ者だ」

春になってすでに六十日、

私はいったいいつ口を開いて笑ったのだろうか。

昔からいように、

春は後ろ姿そっけなを見せて堂々たうたう去ってしまう。

まさしくその通りになるのだろう。

これも昔からいように、

自然の風光はこちらに姿ことさらを見せて得得とくとくにやってくる。

まさしくその通りである。

私は旅に倦み老いつつある。

陶淵明とうえんめいは官ろを去って廬山ろざんを望む郷里きやうりに帰った。

いま東を見れば、

ここにも廬山という名のうずだかい緑の山がある。

ごく小さな山だけれど、我が郷里がきやうりの峨眉がびざん山にも似ている。

【補足】 [ふつうに廬山ろざんといえ、慧遠えおんが東林寺とうりんじを建てた江西省九江市きやうせいしやうきやうきやうしの廬山を指すが、密州みつにも同じ名の山があった。以下の詩にその山のことが詳しく歌われている]

■ 【05-1-032】 遊廬山、次韻章伝道

【解題】 章伝しやうでん [字は伝道あざな でんどう] [密州みつの学校の教授] が密州みつの廬山ろざんに遊んで詠んだ詩に次韻した。

## 【訳文】

世間の塵にまみれたい私の姿は、  
荷車を曳けずにへたばっている馬にも似ていようか。  
それでも、  
私には、溪流を自由に泳ぐ魚と同じ野性が具わっている。  
廬山ろざんに登り、  
深さ千仞じんの岩壁の中と外とを出たり入ったりして、  
我が十年前の筋力と比べてみようか。  
先に行く車に美女を乗せて巡るような優美な遊びはしないけれど、  
後ろの車に酒を入れた袋を積んで廬山に行こうではないか。  
私のこの詩を読んで、野暮な暮らしをしていると笑わないでほしい。  
貴君の詩を得て、それを味読する風雅な心は確かに自分には欠けるけれど、  
字の形くらいは知っているので、筆を執ってこの詩を書いたのだ。

## ■ 【05-1-033】 廬山五詠

【解題】廬山ろざんの詩の続き。蘇軾は実際に廬山に遊んだのだらう、山中にある廬菽洞ろこくどう、  
飲酒台いんしゅたい、聖燈巖せいとうがん、三泉さんせん、障日峰しょうじつほうの名勝を詠んだ5首の絶句を作った。障日峰が先の詩  
で峨眉がびさん山に似るといった山で、蘇軾は小峨眉しょうがびと呼んだ。

## 【訳文】

其の一 廬菽洞ろこくどう  
上界じょうがい〔仙界〕にもきっちりきっちりと官僚機構官僚機構があるとか。

だったら、昇天したところで何の益もないだろう。

この山に入ったところで、

霧の中で結局、何も見えないのである。

【補足】〔<sup>ろざん</sup>盧山には昔、<sup>ごうはかせ</sup>敖博士と<sup>しんはかせ</sup>秦博士が世の乱れを避けて入り、仙道を得たとされ、それにちなんで<sup>ろごうどう</sup>盧敖洞の名があった。仙界もどうせ窮屈なところであろうから、昇天などしないと豪語した仙人は昔から大勢いた〕

### 其二 <sup>いんしゅだい</sup>飲酒台

飲酒台があるからには、

盧山に隠れた博士は雅やかに酒を飲むのを好んだのだろう。

しかし、人気のない山では誰とともに楽しんだらよいのか。

隠れるにしても、かの<sup>りざん</sup>驪山はよろしくない、

<sup>しこうてい</sup>始皇帝が儒者を嫌って生き埋めにしたところであるのだから。

### 其三 <sup>せいとうがん</sup>聖燈巖

聖燈巖からはかつて光芒が発せられたとか。

<sup>いわお</sup>巖の内に不老不死の<sup>きんたん</sup>金丹があって、

夜中に輝いて人々を驚かせたのだから、

山の神どもはそれは秘すべきものであるとは知らなかったのだろう。

【補足】〔(1) 蘇軾は、天上の仙界に昇るとか、不老不死の仙薬を得るとか、およそありえそうにない奇怪な伝説にはかなり冷淡で、この一連の詩でもその姿勢は明らかである。ただ、仙薬の製法には強い関心があり、病氣治療や健康増進に役立つという範囲では有効性を認めていた。(2) <sup>さんせん</sup>三泉を詠んだ第四首は、意味が汲み取れないので

割愛する]

其の五 しょうじつほう  
障日峰

昔、ある皇帝の子は、

ちやうあん  
長安は太陽よりも遠いと答えた、

太陽はそこに見えるが、長安は見えないからだ。

本来、長安は遠くはないのだが、

しよく  
蜀からきた私は、長安よりさらに向こうの故郷に帰ることができずにいる。

あの山を「障日」と呼ぶのはやめようではないか、

さよ  
日を障ぎると、長安、そして蜀はますます遠くになってしまう。

しょうがび  
だから、私は小峨眉の名を与えるのだ。

【補足】[蘇軾自身の注で、「しょうじつほう障日峰はがびさん峨眉山に似るが、そのびやく耳は小さい」と記している]

■ 【05-1-034】与滕達道

【解題】とうげんはつ滕元発 [あざな たつどう字は達道] [→作品番号 05-1-016] に宛てた手紙。

【訳文】

我が弟をせい青州に招いてくださるとのお手紙で、恩義の深さに、まことに光栄に感じるとともに、弟とは長らく分かれていて、少しばかり近くなりますのを、私はよことに喜んでおります。ただ、その通りに朝廷が決定してくださるかどうかはわかりません。いま私には朝廷には知り合いかおらず、尋ねることができずにはいますが、お上りが憐みをもって少しでも御留意いただけるなら、難しくはなからうかと思ひます。長くお近くに参ることができずにはいて、思うところがたくさんあって、とても書き尽くすことができません。

【補足】〔(1) 青州知事の<sup>せい</sup>滕元発が、蘇轍を幕客に呼ぼうとして動いてくれたので、その謝礼を記している。しかし、それは後に見るように実現しなかった。(2) 蘇軾はこのころに、<sup>かくろうじゅう</sup> 霍郎中、<sup>ちんろうじゅう</sup> 陳郎中、<sup>そうぶ</sup> 宋駕部、<sup>でんぐぶ</sup> 伝虞部、<sup>きょうたいふ</sup> 喬太傅および<sup>きよ</sup>莒県の人々とともに、<sup>きりしゅうば</sup> 沂州馬鞍山<sup>あんざんふくじゆ</sup> 福寿寺<sup>じ</sup> 禅院の<sup>けいこうじゅうじ</sup> 惠阜<sup>せきじょういんかいどう</sup> 従事を莒県の石城院開堂の説法者として招く手紙を出している。5人の姓の後ろにあるのは肩書で、喬太傅が喬紱 [→作品番号 05-1-020] であること以外は、ほかの人物についてはわかっていない。仏教界の人事に俗世の権力が関わっているのである〕

### ■ 【05-1-035】 与石幼安

【解題】3月某日の日付で、郷里の石康伯〔字は幼安〕に宛てた手紙。石康伯と蘇軾は姻戚関係にあり、石康伯の父の石揚休と蘇軾の父の蘇洵とは親しい関係にあった。

#### 【訳文】

そちらに行った者が帰ってきて、お手紙を受け取り、皆様ともども安らかにお過ごしのことを詳らかにいたしました。私どもも<sup>つづが</sup>皆恙なく過ごしております。こちらは凶作の後で、流民や盗賊が見られない日はなく、百事に心を勞しておりましたが、このところは少しばかり静かになり、民衆も官を信用してくれるようになってきていますので、次第に事なきに向かうてありましようから、御心配には及びません。楊絵君のお手紙は届いていますでしょうか。……

【補足】〔終わりに名が挙がっている楊絵は杭州から潤州まで一緒だった人である [→作品番号 04-3-077]〕

### ■ 【05-1-036】 和頓教授見寄、用除夜韻

【解題】<sup>とん き あざな とん し</sup>頓起 [字は敦詩] という人が詩を寄せてきたので、除夜の詩 [→作品番号 05-1-023] の韻を用いて詩を返した。頓起はこのとき<sup>せい</sup>青州の学校の教授であった。

### 【訳文】

笑ってしまうのは陶淵明だ——

妻が止めるのも聞かずに、

二頃半の<sup>けい</sup>田に酒を作るための<sup>もちあわ</sup>秫ばかりを植えたくせして、

子どもに対してはあれこれ文句をつけたし、

琴は<sup>むげん</sup>無弦の音こそ最上であるとわけのわからないこともいった、

だったらわざわざ琴を抱いたりしなくてもよかったはずだ。

笑ってしまうのは<sup>りゅうれい</sup>劉伶だ——

酒樽を載せた車を常に後ろに牽かせ、

酔い倒れて死んだなら、その場に埋めてくれといっていた、

人の一生など昼と夜の入れ替わりのようなもの、

死んだ後の埋めることまで心配しなくてよいのだ。

二人とも世に<sup>い</sup>納れられないことに苦しみ、

自ら鋤を担って耕すことを志向した。

二人は賢人だったのかどうか、

是非の定まらない禪問答のようなことをいったまでであろう。

このように人を笑う私にしても、

口では治乱を偉そうに談じて、

人からは笑われているのである。

我が一生は塵や垢にまみれ、

晩年に至ってようやく正しい学問に目覚めたところで、  
成就するものもないいまにぐうたら過ごし、  
すべてを成り行きのままにまったらかしにしている。

ほのかに聞くに、

とん 頓先生は道みちを講義して新しい見解を出されているとか、

ならば短いお手紙でも頂戴できないだろうか、

きとつまらない言葉は一切記されていないであろうから。

我が邦くにはいま貧しく民は病み、

わずかな米粒を数えて炊き、炭は高く買えないほど、

気の毒なのは章先生しょうで、

十日の間、何も無い家に座って、

袖から頓先生の詩を出しては、

それを貪読たんどくしつつ酒を暖めているとか。

何はともあれ狂言きやうげんは慎まなければならない、

うっかりすると刑罰を食らってしまうのだから。

【補足】〔(1) 章先生しょうとあるのは章伝しょうでんのこと [→作品番号 05-1-032]。恐らく蘇軾は章伝を通じて頓起の詩を受け取ったのだろう。(2) 「狂言」とは普通には口にはしない言葉で、とくに権威者の前では口をつぐんでいべきときに、内面から突き動かされて発してしまう言葉である〕

## ■ 【05-1-037】 祭常山祝文

【解題】先の詩で、土地の老人から今年ことしは天候がよいと聞いた [→作品番号 05-1-031] とあったが、実際には春から夏に向かう季節に雨がわずかししか降らず、今年もまた早かん

害がいと蝗害こうがいの発生が憂慮されるようになった。州知事の重要な職務に雨乞いがあることはすでに見ている通りで、4月に蘇軾じょうざんは常山じょうざんに登って雨を祈った。常山じょうざんは諸城県の西南三十里にあり、あまり高くはないがその神は雨を降らせる靈験があるとされていた。これは山の神に雨を願った文。

### 【訳文】

天帝てんていは、山や川などの神々の所轄のもとにその地の民を置き、皇帝は、州や県の役人の所轄のもとにその地の民を置く。だから、土地の神々と役人の職掌には共通するものがあり、民が困窮して生活を失えば、その咎とがは等しく両者が受けなければならない。

我が州の民は哀れにも日照りと凶作に遭遇したために、流浪し、命を落とした者もあった。その上、蝗が害毒を流し、その遺のこした種がいまも野に満ちていて、それがたしも変化して飛び上がるようになったなら、桑ざくろも柘も麦も稲も全てその災いを蒙り、民はもはやその子孫を一人も残せないまでになってしまうであろう。そうなれば、役人は罪を得なければならないし、神々はもう誰からも祀ってもらえなくなる。

私は四月一日より齋戒さいかい、蔬食そしょくし、ここに畏れ多くも、雨が遍く地を潤し、蝗が発生することのないよう、自ら牲幣せいへいを捧げて神の助けを謹んで祈るものである。

ああ、我が州を望むに、神々はいま何をしているのか。古老がいうには、

「この山の神に求めて叶えてくださらないことはありません。だから、常に徳があることをもってこの山の名となっているのです」

でありながら、もしも我が祈りに応じてくれないのならば、その名なに愧はじねばならないであろう。

【補足】[蘇軾ほうしやうが鳳翔府たいはくざんにいたときに太白山の神に雨を祈っていたが [→作品番号 02-1-004]、そのときも神に対して少しもへりくだっていなかった。州知事と地方の神はここに記されている通りほぼ対等なのである]



■ 【05-1-038】 次韻章伝道喜雨

【解題】蘇軾が強い調子で常山<sup>じょうざん</sup>の神に雨を降らせるよう迫ったので、それに恐れ入ったからなのか、蘇軾が祈って3日後に雨が降り、それを喜ぶ詩を章伝<sup>しょうでん</sup> [字は伝道<sup>あざな だんどう</sup>] [→作品番号 05-1-032] が詠んだので、それに次韻した。

【訳文】

去年の夏は日照りが続き、秋も雨が降らなかったので、  
このあたりの海辺の人々は、塩辛い水を飲まなければならなかった。  
今年の春は暖かく、  
蝗<sup>いなご</sup>の幼虫がたくさん湧き出し、  
もぞもぞしているありさまは土よりも多いくらいだ。  
いま心配されるのは、蝗<sup>はね</sup>に二つの翅が開いてしまうこと。  
そうなったら、蝗にはたとえその気はなくても、  
口から、まさしく嵐が吹き出すほどにもなってしまうのだ。  
この前、蝗<sup>ちようこう</sup>は長江を渡って呉<sup>ご</sup>や越<sup>えつ</sup>の地方にまで入ってきた。  
蝗が空を横断する有様は、  
天下を奪おうとする大將軍の陣立てのようであった。  
農夫は手をこまねいてただ泣きだけて、  
人のかなど小さすぎてどうすることもできなかった。  
蝗は牛や馬の尾にまで食らいついて苦しみ、  
家の戸にも穴を開けて入り込み、衣服までも噛んだのだった。  
知事として、  
このような蝗の害を座視して、民を救おうとしないということはありません。

太古の神は、

蝗が自ら火に飛び込んで亡ぶようにしたと伝え聞く。

昔の皇帝が、

一石の蝗を掴まえて土に埋めた者には穀物を一斗与えるとふれたところ、

人々は争って蝗を埋め、飢えからも救われた。

常山の神はまことに英烈で、

雷の父に対して指図するし、雷の母を叱りつけもする。

神は、知事が老いて愚かであるのにもかかわらず、

どうにかして民衆の傷を癒そしているのを憐れみ、

知事が山で祈って帰ると、

すぐに風の様子が変わって、

町に至る道の途中で早くも雨が降り出した。

夜になると、

窓がたたかたと揺れ、松や竹が騒がしく鳴る雨となり、

朝には、

田に白い乳のような水が流れるほどになった。

老農がいうには、

蝗の害と日照りの害は必ず一緒にやってくると。

願うのは、

たっぷりの潤いをもって蝗の残る害を掃い除いて、

今年は豊作となって収穫物をお上に還<sup>かえ</sup>せるようになること。

一畝<sup>は</sup>の田に群がる蝗はおよそ一升とか。

町の前ではすでに八千斛[八百万升]の蝗を穴に埋めた。

よくいわれるのは、

蚕いちみんが一眠すると蝗はもう生じないと。

いまや蚕しゅみんは初眠を過ぎたのを我々はすてに見ている。

きつと豊年を祝う客が次々に訪れるようになるだろう。

貴君の筆力は私の畏れるところ——

南朝時代の大家である鮑照ほうしょう、謝朓しゃてうを蹴倒し、徐陵じょりやう、庾信こしんの上にまたかろうとするほどだ。

たまたま談笑する間にも佳篇を得て、

それが世間に広まって、人々に吟唱される新しい型となるであろう。

この田舎の一地方に雨が降るか降らないかぐらいは取るに足りないこと。

肝要なのは、我が君の盛んな徳あまねが天下に普く行きわたること。

いつしか我が朝廷を讃える詩を作る詠み手を探そうということになったら、

いったい誰を選ぶのか、諸君等に尋ねるまでもないだろう。

【補足】〔(1) この詩に「收穫物をお上かみに還す」〔原文では「明主めいしゅに還す」〕という表現がある。優れた為政者の庇護のもと、人民は農地を分け与えられ、平和裏に耕作に勤しむことができるのであるから、收穫物は元来為政者に帰属するものと考えるのである。(2) この詩に見るように雨は降ったものの、大地を十分に潤すには至らず、その後も蘇軾は繰り返し常山じやうざんに祈りに行かなければならなくなる〕

## ■ 【05-1-039】 謝郡人田賀二生献花

【解題】蘇軾の魅力の一つは、相手が皇帝であろうが一般庶民であろうが、ほとんど姿勢を変えることなく率直にものをいうところであろう。この詩は、田員外でんいんがいと賀秀才がしゅうさいの2人が蘇軾に牡丹の花を献じた謝礼に詠んだもの。「員外」は正規の組織外のポスト、「秀才」は科挙の一次試験に合格した者を指す語であるが、次第に本来の意味を失っ

て、ちょっとした町の顔役を「員外」、そこそこの教養人を「秀才」と呼ぶようにもなった。ここでもそのような意味であるのだろう。

### 【訳文】

町の中に住む<sup>でん</sup>田君も、  
町より西に住む<sup>が</sup>賀君も、  
家といっても四つの壁があるだけ、  
そのような身の上を愁うことなく、  
自作の詩文を一千反の錦のように積み重ねている。  
珍重すべき優れた作品は艱難の最後に開く——  
そのことを体現したような牡丹を二人は贈ってくれた。  
花の色は、昨日は、雷雨と戦い、  
花の心は、今日は、春を終わらせようとしている落日に苦しんでいる。  
老いた知事はこのところ病気がちで、  
<sup>さか</sup> <sup>おも</sup> 壮んな懐いはもう灰のようになってしまった。  
そのような私のために、  
二人はこの輝く牡丹を慇懃にも手折ってくれたのだ。  
花の姿は、美しい腕が翻す紅の袖のようであり、  
花のみずみずしさは、金の樽から注がれる酒のようである。  
そこで二人に提案するのだが、  
我が頭の白髪をそっくり抜き取って、  
これらの牡丹をいっばいに挿してみたらどういことになるだろうか。

## ■【05-1-040】惜花

【解題】牡丹を見て、蘇軾が杭州を想わないわけがない。それで次のような短文を添えて「花を惜しむ」という詩を詠んでいる。

### 【訳文】

吉祥寺の牡丹は杭州第一である。三年前の春、その最も盛りのときに皆で賞玩しようと集まった。金色の盆、七色の飾りの付いた籠を、それぞれの前に置いて五十三人が座った。夜になってその一同が帰るのを、大勢の者が沙河の塘の上に並んで見物した。その後で同じことをする者はいなかった。今年、密州では、いろいろな家の庭で牡丹の花が盛りを極め、なかでも竜興寺の僧房のひとおれが最もすばらしい。病によって衰え、気持ちが沈む私は、牡丹を見てもなかなか興が湧いてこない。昨日は雹が降り、無事な牡丹がどれくらい残っているのか心配でならず、大きく溜め息ばかりついている。

吉祥寺に積まれた千段の錦——

かの年の玩賞こそはまことに盛んであった。

「清明節の日にお越しあれ」

吉祥寺の道人に誘われるがままに行ってみたのだった。

寺に着くと、

腰に括り付けた百面の太鼓が一斉に打ち鳴らされ、

春の雷のようなその音とともに牡丹の花が満開となった。

それはあたかも、

玄宗皇帝の面前で『春光好ろし』の曲が奏し終わるとともに杏の花がみな開いたのと同じであった。

私は花を頭に載せて沙河の塘を歩いて帰ったのだが、

すっかり酔っ払ってしまったために、

町の人々に笑われたのを実は覚えていない。

そのときはまさか、

鬢の毛がかくも抜け落ちて、

密州の町の西の草深い古寺ふるでら[竜興寺]にくるようになるとは思ひもなかった。

ここでは一人の僧が門を閉ざして手ずから牡丹を育て、

千の枝、万の葉を巧せんさいみに剪裁している。

なかでもひとむれの花は何に似るかというと、

瑪瑙めのうの盤ばんに金の飾かざりりを施した杯さかずきを載せたようであろうか。

私はこのところ清せいさい齋さいして蔬そさい菜さいだけを食べているので、

せっかく見みにきても酒さけを飲のまないから、

花はおかしなことをしていると首くびをかしげたであろう。

その夜よに、李りの実みほとんどもある雹はくが降ふったので、

紅こうは損こなわれ、緑りくは暗くくなってしまったのではなからうか。

——ああ哀あはれむべきである。

【補足】〔(1) 3年前さんねんの杭州こうしゅうの吉祥寺きつじょうじでの牡丹見物の折せに詠よんだ詩しを作品番号 04-1-015 で見ている。(2) 清せいさい齋さい〔身みを浄じよめる〕していたのは雨あめ乞こいのためである〕

## ■ 【05-1-041】 和子由四首

【解題】 弟から送られてきた4首の詩に和した。

### 【訳文】

其の一 韓かん太たい祝しゆく送たいざん遊あそ太山おく〔韓太祝の太山に遊ぶを送る〕

君〔弟〕はたまたま郊外の野のに十日ばかり出ただけのこと、

獄中の囚人をもう見ないですむようになったわけではない。

塵の世を駆けまわりつつも、

うんざん らんまん  
雲山の春爛漫にひたったのである。

せいと たくきんこう  
君は成都の濯錦江を偲んだりしているようだが、

退隱する場所ならどこにだってあるではないか。

ただ残念に思うのは、

たいざん いただき  
君が太山の頂に登って、

きんりん  
夜の闇から金輪[太陽]が出てくるのを見なかったことだ。

【補足】[これは、かんそうひつ 韓宗弼という人がたいざん たいざん 太山 [泰山] に行くのを見送った蘇轍に詩に和したものだ。蘇轍の詩には、郊外の野山で遊びつつ、故郷を想うことが歌われていたのだろう]

其二 送春[春を送る]

夢の中でなら、

このよき春をいつまでも追いつけていられるのだろうか。

せめて、詩句でもって、今日の夕日とともに去り行く春を繋ぎ留めたい。

たけなわ  
春の盛りとは、酒闌のころ——

悩みを抱える旅人はただ眠りたいと思う。

春の盛りとは、花の蜜が熟すころ——

黄色い蜂が飛ぶのもものげである。

しゃくやく ゆすらうめ  
かくて芍薬も桜桃も地に落ち、

いす びん  
座禅の榻の上にある者の鬢の毛も抜け落ちてしまう。

けい ごんきょう ほうかいかん  
近ごろ君は華嚴経の法界観について読んでいるという。

僕も君に教わって、

じんかん せかい ばんじひ  
人間世界は万事非であるとの嘆きを洗い去ってしまいたいと思う。

【補足】〔(1) これは、『春を送る』とう蘇轍の詩に和したもの。(2) 弟も仏教に強い関心を持っていた。「人間世界は万事非なり」とは、要するに、世の中は全てうまくいかないということか〕

其三 首夏官舎即事しゅ か かんしゃ すぐじ

ざくろ  
安石榴は春の花の中で最も遅くに開き、

奥深い木からちらりと赤いすそ裾を見せる。

想い見るに、

我が故郷の家は、いまのこの時期、限りなく好い。

なのに、旅に倦んだ客子はどうして帰らずにいるのか。

昔からいー——

樽に酒がたっぷりある宴席にいても、憂いがないわけではない、

「四事」はいつも巧みにすれ違ふようになっている。

ざくろ  
安石榴を見て僕は、かえって、西湖の畔のかの寺を思い出す、

柳の深い蔭のもと、扉を閉ざして午睡したのだった。

【補足】〔(1) これは、『夏の首の官舎での即事』という弟の詩に和したもの。(2) 「四事」とは、良辰りやうしん [よいとき]、美景びけい [よい風光]、賞心しょうしん [めでる心]、樂事らくじ [楽しいこと] で、その四者が揃うのは難しいとされた。その「四事」が揃ったのが、故郷の家での少年時代、あるいは西湖の畔の寺での昼寝であった。寺での昼寝は「宝山ほうざん 昼ちゆうすい寝」[→作品番号 04-2-042] など幾つかの詩に詠まれている。(3) 第四首の『李昭りしょう 叙じょを見送る席上で李昭叙の詩に和した』という詩に和した作品は割愛する〕



■ 【05-1-042】 西齋

【解題】<sup>みつ</sup>密州の住まいの西側にある部屋について詠んだ。

【訳文】

<sup>せいさい</sup>西齋は家の奥深くにあっても明るい。

中に六尺の寝台<sup>ねだい</sup>があり、

朝そこで起きれば、十分に眠りが足りていて、

昼にそこに座れば、一日がゆっりと過ぎるのを感じることができる。

ここでとろとろとした心持ちになっているのは決して酔っているのではない。

ここにぽつんと一人でいるのは頭がおかしくなったからではない。

竹のあたりからくる風に衣をそと曳き上げると、

わずかな涼しさがそろりとやってきてくれる。

立って西側の庭を歩む――

草や木はささやかな香りを含み、

<sup>ざくろ</sup>石榴のひと枝に花が開き、

<sup>なつめ</sup>桑や棗の葉がつやつやと光っている。

鳩は、木蔭が困ってしまうくらいによすぎるのだらう、

すっかり飛ぶのを忘れている。

<sup>うぐいす</sup>黄鳥は、自分の美声に喜んでいるのだらう、

のどを変化させて囀りを新しくしている。

自然の移り変わりを観察しつつ、我が生きるありさまを顧みるに、

万物はおのおの時を得ているのではないか――

しかし、自分の生きざまはよたよたとして、一体どこに行こうとしているのか。

【補足】〔末尾の二句には深い意味があるのだろう。原文は「万物各得時、我生日皇  
ばんぶつ おの とき え わが せい ひ こうこう  
 皇」〔万物は各おの時を得て、我が生は日に皇皇〕で、万物が道〔宇宙の基本原  
みち  
 理〕に従うのなら自然界も人間界も調和が保たれて事なく運行されていくものであるはず  
 で、自然界は確かにそうであることが目の前に見えているのだが、己は明らかに違っ  
 ているという思いを詠んでいるだろう〕

### ■【05-1-043】小児

【解題】小さな子供を詠んだ詩。題にある「小児」は三男の蘇そ過か〔4歳〕であろう。

#### 【訳文】

小児は、愁いを知らない。

小児は、私が立っても座っても衣を引っ張るので、

私は、小児を叱ろうとする。

妻は、小児にむしろいたずらをするよう仕向ける。

「児こというものは、もとおろかなのです。

あなたさまときたら、もとおろかなのではありませんか。

だって、おろかな児がおろかなことをしたからといって叱ろうとするのですもの。

楽しもうとなさらずに、愁いてばかり。

いったい何をなさりたいのですか」

妻の言葉に、私がいつものように恥ずかしく思っていると、

妻は蓋さかづきを洗って私の前に置いてくれる。

そうか、我が妻は、

酒代をちまちま節約しようとしたあの劉伶りゅうれいの妻よりもずっと勝るのだった。

【補足】〔(1) 表題は「小児」でありながら、実は妻について詠んだのだった。(2) 「劉伶りゅうれいの妻」とは、こういう話である。劉伶は大酒飲みで、あるとき、「喉が渴いて仕方ないから酒を用意してくれ」というと、妻は酒を捨てて酒器を壊し、「飲み過ぎです。お体にさわります。どうかお酒を断たってください」と泣いて頼んだ。蘇軾はこのことを、酒代を節約したと脚色している。劉伶は、「よくわかった。では神に誓って断つことにする。ついては神に捧げる酒と肉を用意してくれ」といった。妻がそのようにすると、「このわしは他でもない、酒でもって天下に名をなした劉伶様だ。一度に一斛こくを呑み、二日酔いをさますのに五斗を呑む男だ」といって、神に捧げる酒を飲んでしまった〕

## ■ 【05-1-044】 寄劉孝叔

【解題】劉述りゅうじゆつ [字は孝叔あざな こうしゆく] に寄せた詩。劉述は王安石おうあんせきと考えが合わなくて江南こうなんに左遷され、蘇軾が飢餓対策で杭州こうから潤州じゆんの間を行き来していた時期に一度会っている  
[→作品番号 04-3-035]。この詩は、かなりあからさまに改革を批判している。

### 【訳文】

皇帝は驕りたかぶった外国の悪党を懲らしめようと思い立たれた。

銅山をことごとく掘り尽して銅銭を鑄て軍資金を用意させ、

三十七人の將軍を都に勢揃いさせ、

西方に馬を走らせておのおの司令部を開けと命じられた。

南の山では、木を伐って車の軸を作り、

東の海では、鼉わにを捕えて陣太鼓の皮とし、

人々は戦の準備で遅れを取るまいと、汗を流して奔走し、  
軍用品を十分に供出できなくて、処罰されてしまうのを恐れている。  
今日に至るまでに、  
村々に自衛組織を作れとの号令はまだ十分に行きわたらず、  
土地の計測を正確にする作業もお山積みになっている。  
新たに細かく課税対象を増やして、  
ひげ根の先までも残さずに取り立てようとしたので、  
あまりの行き過ぎに、皇帝は人民を深く憐れむ詔みことりを出された。  
しかし、役人は浅はかりにも民衆が労苦するのを放置している。  
かねてから、私の学問は「流俗」であるとばっさり切り捨てられ、  
大勢の者が一斉にたたピーピーやかまくふえ笙を吹く中で、  
一人だけ正しい音を出そうとしてみたものの全く聞いてもらえなかった。  
おかしな楽曲ばかりが演奏されると、正しい楽譜はすたれてしまう。  
民衆は毎年毎年飢饉に苦しみ、  
木や草を剥いて齧り、泥を食らうありさまだ。  
今年は雪や雨がちょうど時節に合致しているのに、  
蝗いなごに肢が生え、翅が出てきたとの報せもある。  
私は憂いに襲われ、  
盞さかずきを洗って無理にも酔ってみようかと思ひもするのだが、  
がらんとした部屋にあるのはからっぽの樽で、  
それを枕に寝るしかない。  
役場の厨くりやからはもう十日も煙が立っていないのだ。  
まして華やかに妓女が舞うような遊びは望むべくもない。

古くからの友人がくれる手紙への返事としては、  
まさに故郷に帰るべきときがきたと記す以外に言葉がないはずなのに、  
官服を脱ぎ棄てて、そこの壁にでもひっかけて去って行こうとしないで、  
雀や鼠のように官の倉から米を盗み食いを私を私を続けている。

「呉興ごこうの長者りゅうじゆう」[劉述のこと]は正しく真理をわきまえていて、

朝廷にあって補うところが多々あったにもかかわらず、

人が集まってこようとする都から逆に出て、

いまでは湖と山の地あるじの主となっている。

長者の高い行いは釣り人とまじわる身となり、

「大隱たいいん」は必ずしも官服を脱がなくてもよいということを実践している。

昨年お会いしたときには、

道みちを尋ねてそのごくあらましをお聞かせいたいたただけて、

十分には話せなかったので、

官職を捨ててそちらに行って学業を遂げたいと思う。

長者の家は呉興どうけいの霅溪のあたり、

白い雲が羽のように広がる下にあるという。

私は俗世間との縁が切れなくて、進退ははなはだもたついている。

「安心あんじん」を説いた達磨大師だるまだいしを思うべきなのだろう。

【補足】〔(1) この詩の初めの部分では、西方の夏国かこくとの間の積年の問題を軍事力の行使によって決着させようと皇帝が意図し、それに応じて朝廷が動いていることを批判している。(2) 劉述りゅうじゆうが呉興ごこう [湖州] の出身であることから「呉興の長者」と呼んでいる。(3) 「大隱たいいん」とは町の中で普通の社会生活を営みつつ、精神は隱者と同じであることをいう [→作品番号04-1-028の第五首]。(4) 最後に唐突に達磨大師だるまだいしが出てく

るのは、劉述と蘇軾の間でかつて「安心」[心の安定] について話題にしたことがあったりしたからなのだろう]

## ■ 【05-1-045】 文与可字説

【解題】蘇軾には、心を許せる先輩にして友人の文同 [字は与可] がいた [→作品番号 03-3-014 など]。その文同の字の「与可」について蘇軾なりの解釈をほどこしたのがこの文章。

### 【訳文】

『論語』にはこのようにある――

弟子が尋ねた。

「村人が皆、その人を好むのなら、その人はどうなのでしょうか」[人物の評価基準を問う]

孔子は答えた。

「それだけでは十分ではあるまいな」

「村人が皆、その人を悪むのなら、その人はどうなのでしょうか」

孔子は答えた。

「それも十分ではあるまいな。村の善い人がその人を好み、村の不善の者がその人を悪むのには及ばないだろう」

この問答に対して次のような議論がある。

「善い人が好み、不善の者が悪むのなら、その人は君子[道徳的に優れた人]であるとするに足りるということなのか」

この問いに対して次のような答えがある。

「それは十分ではあるまい。孔子は問いに応じて、尋ねた者にわかるように、何をもって賢とするのかを

答えたまでだ。村に君子がいれば、君子は善き人を推奨し、不善の者を心の内で恥ずかしく思うであろう。それだけのことなので、君子がどつて不善の者からにく悪まれたりするだろうか。君子は人をにく悪まないし、人からにく悪まれもない。孔子の弟子の子夏し かは自分の弟子にこういったという。『交わってもよい人と一緒にいるけれど、交わってはならない人と一緒にいるのは拒絶する』。そのことを告げた子夏の弟子に向かって、孔子の弟子の子張し ちやうはこういった。『君子は賢を尊ぶとともに、多くの人を容れる。善をなす人をよしとするとともに、それができない人を哀れに思う。私がもしも大賢の者であるのなら、人との交わりで容れないことはないだろう。私がもしも賢ならざる者であるのなら、人が私を拒絶するであろう。だから、私から人を拒絶するようなことはない』。つまり、子張がいったのは、交わってもよい人と一緒にいて、交わってよしくない人は自分からは遠ざけておくということなのではないのだろうか」

それに対して重ねて問うのは、

「交わってよしくない人は自分からは遠ざけておくというのは、交わりを拒絶するよりもはなはたしいのではなからうか。子張もつまりは拒絶したのではないか」

「いや、子張に拒絶する気持ちなどありません。もしも拒絶する気持ちがあるのなら、天下の人は結局は避けようとするであろうから、一体誰とともに一緒にいられるというのか」

「しかし、孔子は孺悲じゅ ひという人の面会を断ったではないか。これは拒絶ではないのか」

「孔子は病気を理由に孺悲とは会わなかった。そのとき、取次の者がその断りを孺悲に告げている最中に、孔子は樂器を弾かせて歌い、実は病気ではないことを相手に知らせた。それはつまり、会わない理由が孺悲の方にあることをわからせようとしたのであって、拒絶したのではないのだ。拒絶する気持ちがないのだから、交わってよい人となら一緒にいるのである。孔子も子張も同じなのだ」

吾が友の文君ぶん くんは名を同どうといい、字を与可よ かという。「与可」とは子夏の言葉にある「交わってもよい人と一緒にいる[可者与之]」からとったものであるから、ある人は文同に、

「君は子夏と同じ考え方なのか」

と、尋ねた。

文同は答えた。

「そうではない。子夏の言葉に基づくとはいえ、<sup>とも</sup>与にいるという方をとって、拒むという方はとっていない。実は子張と同じなのだ」

文同の人となりは、道を守って勢を忘れ、義を行って利を忘れる。徳を修めて名を忘れ、不義を為すことはなく、どれほどの俸禄を差し出されようと顧みることはない。しかも、人を悪む<sup>にく</sup>ことはないし、また人から悪まれる<sup>にく</sup>こともない。だから、与可は子張なのである。

【補足】〔(1) 何やらごちゃごちゃして話の筋が見えにくいですが、要するに、君子はいかなる交わりを人と結ぶべきかについてあれこれ思索を巡らせて、それと「与可」の意味と結び付けて解釈しているのである。改革が強引に推し進められて以降の官界のありさまを見るに、道義を守るよりも時の権勢に靡き、正義を行うよりも利益に走り、身に徳を修めるよりも一時期の名声を求め、俸禄を得るためなら不義をも為すような者が目に付くようになった〔つまり、蘇軾が改革を批判して、いまは「風俗を厚くする」〔→作品番号 03-2-009〕ことが肝要であると指摘したのが的中した〕ので、ことさらに文同の人柄が慕わしく思われたのだろう。(2) 名や字は何らかの思いを籠めて付けられるものだ。蘇軾の父の蘇洵<sup>そじゅん</sup>はいかなる思いで息子に軾<sup>あざな</sup>と轍<sup>しよく</sup>の名を付けたのかということを書いた文章を作品番号 01-2-008 で見ている〕

## ■ 【05-1-046】 与靈隱知和尚

【解題】杭州の靈隱寺の雲知和尚<sup>こう れいいん じ うん ち おしやう</sup>に送った手紙。靈隱寺は作品番号 04-2-053 などで見ている。

### 【訳文】

私はしばらく錢塘〔杭州〕に滞在し、寝食を湖山の間で過ごし、時に仏説について聞くことがあり、見聞



かせられることが多くありました。とりわけ靈山道人<sup>れいざんどうじん</sup>〔雲知和尚のこと〕とは前世からの縁があったかのよう  
に感じたものです。お別れてからすでに一年を経て、夢にも見ることがありますのは、きっと深く知り合  
ったために忘れ去ることができないからなのでしょう。

杭州<sup>よほ</sup>から余簿君<sup>てんじくじ</sup>がきて、天竺寺の僧呂や俗人の手紙を百通余り受け取り、皆が私のことを思っ  
ている気持ちや、杭州の民衆が私のことを忘れずにいることなどが記されていました。私には何の取  
り柄があるわけでもないのに、杭州との縁がまだ切れてはいないということなのでありましょうか。次の任  
地として湖州<sup>こ</sup>や明州<sup>めい</sup>を求めて、西湖<sup>せいこ</sup>にしほ留まって、日ごろの思いを遂げたいものです。……

【補足】〔蘇軾がいかに杭州<sup>こう</sup>を好んでいたのかがよくわかる手紙である。縁が切れて  
いなかったことは、ずっと後の章で見ることになる〕

## ■【05-1-047】祭常山神祝文

【解題】この年は雨が少なく、5月には旱魃<sup>じょうざん</sup>の様相を呈し、蘇軾はまた常山の神〔→  
作品番号 05-1-037〕に雨を祈った。

### 【訳文】

私の不徳のために順調な天候を導くことができず、災厄を防ぐには、神のお力を求めるばかりはありませ  
ん。神よ、私の不才を憐れみ、その勤勉さをよとされますように。常山の神に願っておよそ忘れてくださ  
らないことはなく、かつて神のもとに詣りましたときには、退いて三日のうちに雨があまねく降り、町から百  
里の範囲<sup>いんご</sup>で蝗が生じることがありませんでした。私も民衆も、これは神の徳によるものたと思わなかつた  
者はいなかったのです。しかし、そのひと雨の後には、月を超えて雨が続くことがなく、百里の遠方にお  
いて蝗の幼虫が初めて発生しました。神が先の願いにこ応じてくださりながら、後でこのようになったのは、  
近くは憐れみ、しかし遠方は憐れまないということなのでありましょうか。これはきっと私が知事の職に適う  
者ではなく、政治が的外れて、民心を乱してしまっているために、神も恵みを与えようがないからなので

ありましょう。我が州の民は、このところ毎年飢えに苦しみ、いまはようやく命を繋いでいるところで、これでまた稔ることがなかったならば、もはや土地を離れて流浪の民となってしまつてありましょう。聡明なる神におかれては、私那不才であることにはどうかこらえて、民衆を救つてはいただけないでしょうか。この夏の麦がいよいよ稔るときを迎え、このままでは秋の収穫が枯れてしまつかも知れません。どうか雨をもたらし、虫の害を払って、秋の恵みをもたらして下さいますように。かくて九月には人々がそろって神のもとに詣でて、お礼が申し上げますように。

【補足】[前回雨を祈ったときと比べて随分と低姿勢なのは、状況がそれだけ深刻化したからなのだろう]

### ■ 【05-1-048】 孔長源挽詞二首

【解題】 孔子こうしの四十七世の孫である孔延之こうえんし [字は長源あざな ちようげん] の挽歌。孔延之は官界の先輩で、1年ほど前に61歳で亡くなっている。その死を悼む詩を蘇軾がこの時期に詠んだ経緯はわからない。

#### 【訳文】

其の一

公こう[孔延之こうえんし]は若いときに、

その才気は当時天下に第一とされた。

公は晩年において、

その節義はただ一人だけが守る貴いものであった。

昔、韓愈かんゆは孔子こうし三十八世の孫の墓誌銘を作り、

孔子の子孫としてまことに適う人であったと讃えた。

公もまたその通りである。

昔、蔡邕さいよう かくたいは郭泰の碑文を作り、

これまで数多くの碑文を書いたけれど、

どれほど褒め言葉を並べても一切恥じることのないのはこの文章だけだといった。

公の場合もまたその通りである。

公は南方こう〔広州〕に赴任したとき、

その地の知事の不善を暴いた者が獄に繋がれていたのを解放し、

その知事を罰した。

公は東方えつ〔越州〕に赴任したとき、

そこで塩法えんほう〔塩を国家の専売とする法〕が実施されないのは公が止めているからだと告発され、

知事職を解かれて都に呼び戻された。

我等が仰ぎ見るべき先人はいま幾人が残っているのか。

己の義を貫かれた公であるから、

恨むことはしないけれども、

時の流れをひたすらに悲しむのである。

【補足】〔孔延之こうえんしは、この詩に詠まれているように、改革派に嫌われて越州えつを去って都へと向かい、その途中で杭州こうに立ち寄り、有美堂ゆうびどうで詩を詠んだ。それは熙寧6年〔1073年〕11月であったと推定されていて、蘇軾はそのころに湖州に出張していたので、孔延之と会ったかどうか定かではないが、孔延之の詩に基づいて次の第二首を詠んでいる〕

## 其の二

公はかつて杭州しやうえんもんの小堰門にほど近い柳の木に船を繋いだ。

公が呉山ござんの有美堂ゆうびどうで宴を開いたときには、月光が筵を照らし、

夜中には、<sup>せんとうこう</sup>銭塘江を遡る潮が千の巖に当たる音が響いた。

そのとき公は詩を詠み、

その句は翌朝にはもう万民の間に伝えられた。

ところが、思いもかけず、公は寿命の長きを全うできず、

日が傾くようにしてたちまち亡くなったとの報せに、

私は驚かされた。

公の無窮の業績も墓地に納められてしまう。

南を見つこの詩を作って、<sup>かみ</sup>牋に涙がしたり落ちる。

## ■ 【05-1-049】 寄呂穆仲寺丞

【**解題**】 <sup>りょちゆうほ</sup>呂仲甫 [字は<sup>あざな</sup>穆仲] に寄せた詩。 <sup>こう</sup>呂仲甫とは杭州で親しくしていた [→作品番号 04-2-023 など]。

### 【訳文】

<sup>こう</sup>杭州の<sup>こざん</sup>孤山の寺の門前には、

すぐそこにまで水が迫る。

私がその寺に行っていつも最初に見たのは、

貴君が酔って書いた墨の痕だった。

杭州には一人の役者がいて、貴君の真似をするのを得意としていた。

貴君が杭州を去ってしまった後でも、その役者がいると、

いまでも貴君が談笑し、あるいは規律を正そうとしていると思えた。

先に杭州を去った貴君は、いまは塵埃の降る都の道を踏んでいる。

後から杭州を去った私は、いまは<sup>なつめ</sup>桑や棗を産する村を訪ねている。

首を回らせば、西湖は真に一場の夢。

しかし、もういまい——

心の火が消えて灰になったたとか、髪が抜けて白くなったたとかは……

【補足】〔(1) この詩にあるように、呂仲甫は蘇軾よりも先に杭州を離れて都に行っていたのである。(2) この詩にある「回首西湖真一夢」〔首を回らせば西湖は真に一夢〕は印象的である。蘇軾は杭州の風光を深く愛していたのである〕

## ■ 【05-1-050】 答陳述古二首

【解題】これは、都にいる陳襄〔字は述古〕から送られてきた詩に答えたもの。陳襄はかつて杭州知事を努め、蘇軾とはすこぶる信頼関係が厚かった〔→作品番号 04-2-033 など〕。

### 【訳文】

#### 其の一

密州は山東第二の州であるとか。

棗の林、桑の入り江に、春を尋ねる遊びこはまだ行けていない。

町の西には千もの紅い牡丹があるとか。

あわれにもさらに老いた私の髪に挿されたのでは、

花はますます取ずかしかるたろう。

【補足】〔蘇軾は杭州で、牡丹は老人の頭に載せられるのを羞う、と詩に詠んでいた〔→作品番号 04-1-015〕〕

#### 其の二

萼<sup>がく</sup>を破って小さな桃の花が開いたばかりのときには、

まるで春の風にも耐えられないような風情がある。

それはまさしく、美しい女性たちが居並ぶ中でも第一のあの人。

知事<sup>こう</sup>殿が杭州を去ってしまっただけから、

その人の舞いの着物にも扇にも塵が積もってしまっているとか。

【補足】[これは、杭州<sup>こう</sup>で陳襄<sup>ちんじょう</sup>が眞眞にしていた妓女のことを詠んだ戯れの詩である。気心の知れた間柄なので、このような詩を作りもしたのでらう]

## ■ 【05-1-051】 懷西湖寄晁美叔同年

【解題】これは、晁端彦<sup>ちやうたんげん あざな ひしゆく こう</sup> [字は美叔] が杭州に赴任すると聞いて寄せた詩。晁端彦は同じ年に科挙に合格した「同年」の間柄 [→作品番号 04-2-095]。

### 【訳文】

西湖<sup>せいこ</sup>は天下一の景勝地。

そこに遊ぶ者は、

賢かろうか愚かだろうか、あるいは浅くあるいは深くそれぞれに得るところがあり、

しかも誰もその全てを知ることができない。

ああ、私はもともとからおかしなぐらいに真直ぐで、

世間から早々と棄てられてしまった。

だからこそ杭州<sup>こう</sup>の山水の楽しみをもつばらにすることができたのだから、

むしろ天からその機会を授けられたのたろう。

三百六十の寺を奥深く訪ねて一年を使い果たし、

行けばどこにでも妙所があった。

それは心に知っても、口で伝えるのは難しく、  
いまになっても夢に見て、目覚めた後もありありと目にも耳にも残る。  
貴君は朝廷から杭州に派遣されることになり、  
その風采の輝きに杭州の雲も霞も融かされてしまつたろう。  
清らかな流れも陰しい山も、  
貴君のために特にそうするかのように、  
麗しくその姿を見せることだろう。  
貴君にお勧めするのは――  
従者を退け、寺で僧榻そうとうを借りてしばらく眠ってから、  
私が壁に書いた詩を読み、  
清涼な空気に日頃の煩わしさを洗い流した後で、  
道のあるなしによらず、心の赴くままに歩むこと。  
そうすれば、古の「漁父いこほ」のような人が、葦の間を自在に行くのに出会うであろう。  
もしその人に道を問うて会得するところがあったならば、  
どうか魚を値切って買うような野暮なことだけはいらないでくれたまえ。

【補足】〔(1)「同年どうねん」の友に向けて率直に心情を吐露している。(2)初句の「西湖天下景」〔西湖は天下の景〕で、蘇軾がいかにも西湖を好んでいたかがわかる。(2)第5句、第6句の「嗟我本狂直、早為世所捐」〔嗟我は本より狂直、早く世の為に捐て所る〕も印象的である。(3)「漁父いこほ」は中国の文化史においてかなり特徴的なキャラクターとして異彩を放ち、舟に乗って自由にどこへでも行く孤独の漁父は詩にも画にしばしば登場する。漁父のイメージの決定版ともいえるのが唐の柳宗元の『漁翁ぎょうおう』の詩である。次の詩に描かれているような漁父と会い、脱俗的な会話を交わしておきながら、別れ際に「ところで、その魚、なんぼ？」とかいったら台無しであろう〕

## 【訳文】

柳宗元：『漁翁』

漁翁夜傍西巖宿、[漁翁は、夜には西の巖に舟を寄せて眠る]

曉汲清湘燃楚竹。[曉には清らかな水を汲み、竹を燃やして朝飯を支度する]

煙銷日出不見人、[朝靄が消えて日が昇るころには、その人の姿はもうない]

欸乃一声山水綠。[棹をさす声がかどこかで一つ響くと、あとは山と川の緑があるだけ]

迴看天際下中流、[漁翁はすでに天の涯を顧みつつ、中流を下っている]

巖上無心雲相逐。[もとの巖の上では、心を持たない雲が追い掛け合っているのである]

## ■ 【05-1-052】 張安道楽全堂

【解題】 恩人の張方平 [字は安道] [→作品番号 03-4-015] に寄せた詩。張方平は楽全堂という建物を作り、「楽全堂居士」と称した。

## 【訳文】

「楽全」[百パーセントの楽しみ]とは何であろうか。

列子は、ふわりと風に乗ってどこへでも行けたから、

なかなか結構な楽しみを自在にした。

しかし、荘子は、汲々として風に頼っておるではないかと列子を批判した。

世の中が非常に厳しかった時代に、

酒や琴に逃れて己の生命を保全しようとした者がいた。

己の生命を全て尽くせたからといって、

それだけでは「至楽」[百パーセント超えの楽しみ]とはいえないだろう。



しゃか せい まきつ  
釈迦の弟子の維摩詰は病気になる、

己の命を全て尽くせたわけではなかったのだが、

何もない部屋で悠然と過ごし、

それは「至楽」に近かったのではないだろうか。

らくぜん こじ まつ  
楽全居士殿は天から与えられたものを全うしようと、

かつては飲んでいた酒をやめたし、琴は初めから持っていない。

とうせんめい  
陶淵明は弦のない琴を抱いて最高の音を楽しんだと聞か、

無弦の琴よりもそもそも琴が存在しない方がより完全なのではなからうか。

楽全居士殿は天より英雄としての素質を与えられ、

まさしく竜や鳳凰の姿を具え、

自ら発する輝きでまわりの魚や鳥を照らし出し、

朝廷に座っていれば、北方や西方での紛争も談笑する間に片が付いてしまう。

ところが、老いてからはもっぱら帰ることばかりを思い、

私に細々と手紙に書き、詩を添えて送ってこられた。

それでお尋ねするのは、

「楽しみを百パーセントにするとは何を百パーセントにするのでしょうか」

莊子はいくことをいっている――

百パーセントを求めようとすれば必ず欠けたところがある、

もとより百パーセントを求めなければ欠けるところはない。

【補足】〔(1) 蘇軾には、もしかすると、自分の楽しみを百パーセントにすることを求めるよりも、民の楽しみを百パーセントにするよう努めてほしいと、張方平ちやうほうへいに期待するところがあったのかもしれない。(2) 「北方や西方での紛争」は先の劉述りゅうじゆつに寄せた詩 [→作品番号 05-1-044] の冒頭にあったように、皇帝が外で軍事行動を起こそう

としていることに関連している。後に張方平は、戦争に反対する意見書を皇帝に提出する]

## ■【05-1-053】祭魏国韓令公文

【訳文】蘇軾が8歳のときに憧れた4人のスーパースターの1人の韓琦かんきがこの年の6月24日に亡くなった。韓琦の霊を祀るこの文章は、遙か後に定州知事として赴任したときに書いたものであるとの推測されてもいるが、ここで読んでおこう。

### 【訳文】

……[前半では、荘重な言葉を並べて韓琦を讃えている]……

六月甲寅こういん〔二十四日〕、公こうはもはや禄を受けることができなくなり、我等は天下を支える名臣を失ったのだ。我等の民を、これからは誰が教え導くのか。我等の子孫を、これからは誰が保護するのぎか。巍ぎ巍堂堂たる公のようなお方もいないのだ。公が亡くなられ、我等には太陽どうこくていりやうがなくなった。慟哭涕流して、いくら嘆いたところで及ばない。昔、我が父が都で亡くなったとき、公は二首の詩を作って、父のしたことのあらましを詠んでくださった。父の文は古典を追い、古代の聖王について論じたと、公がひと言述べてくださったことで、それからは誰も敢えて父のことを評し直しはしなかった。公の恩は不肖私にも及び、国士のように見なしていただき、私自身が知らないところまでも公は見えていてくださった。父も私も弟までも公の門から世に出ることができたのだ。公は何ら報いを求めることもなく、私はその恩を深く思い、涙を流して公がもうおられないのをただただ哀しむのである。公の霊に供える肉は俎の上にあり、酒は樽の中にある。公はすでに天に帰ってしまって、私の言葉はそこには届かない。嗚呼あ あ哀しいではないか。

【補足】[韓琦かんきは詠んだ蘇洵そじゆんの挽詞の結びの句は、「父子ふし尽ことごと賢けん良」[父子は尽く賢良]で、儀礼的な誉め言葉であったとしても、雲の上の人のように思っていた韓琦りやうか

らそのような言葉をもらって、蘇軾はいつまでも感謝の念を持ち続けていたのである]

### ■ 【05-1-054】 余主簿母挽詞

【**解題**】<sup>よしゅぼ</sup>余主簿という人の母の死を悼んだ詩。主簿は役職の名称。この余主簿はもしかしたら作品番号 05-1-046 にあった「<sup>よぼ</sup>余簿」と同一人物であるのかもしれない。

#### 【訳文】

閨庭<sup>けいてい</sup>[家庭]にある蘭玉<sup>らんぎょく</sup>[優れた母]は、  
郷里を明るく照らし出し、  
たとえ貧しくても余りある楽しみがあると、  
昔からいわれている。  
母は家にあつて先祖に食を供えるだけでなく、  
よき息子を育て、よき嫁を選ぶのである。  
そのような母の乗る車が、  
たちまち<sup>せんぶ</sup>仙府へと帰ってしまい、  
ただ高い木々だけが古い廬<sup>いおり</sup>を囲んでいる。  
昔、<sup>ろうらいし</sup>老萊子は七十二歳になつても、  
幼児の服を着て父母を喜ばせたという。  
余君は、郷里に帰って、  
千斛<sup>ごく</sup>の涙を裾<sup>そそ</sup>に灑ぐことであるう。

### ■ 【05-1-055】 張文裕挽詞

【**解説**】挽詞が続く。これは前の年に八十歳で亡くなった張掞〔字は文裕〕の死を悼んだもの。張掞とは、蘇軾が都にいたときに若干の交流があったようである。

### 【訳文】

張公の高才は朝廷において右に出る者がなく、

その徳のほんの余りで政事をよく行ったのだった。

お会いするたびに、魏の曹植にも匹敵するような句を聞くことができ、

いまに伝わるのは、晋の魏華と同じ宝物とされる書である。

済南は昔から名士が多く輩出するところ、

しかしまた新たに一人が亡くなってしまった。

かつて張公は恵政を行った蜀の地では、

すでに公の祠を建てて祀っている。

私は西に向かう風に寄せて、

張公の廬を囲む高い木々に、

二筋の涙を寄せよと思う。

【**補足**】〔(1) 曹植と魏華は、それぞれ詩と書の名手である。(2) 上の詩でもこの詩でも、旧居を高い木々が囲っているというイメージを詠んでいる。高い木々は長く家が繁栄する象徴である〕

### ■ 【05-1-056】次韻劉貢父李公扈見寄二首

【**解説**】劉放〔字は貢父〕と李常〔字は公扈〕から送られてきた詩に次韻した。二人とも以前からの友人で、劉放が李常の草書を見てからかったエピソードを作品番号03-3-022で見ているように、二人の仲はよかった。湖州知事を務める李常〔→作品番

号 04-3-076] のもとに劉攽が訪れて二人で詩を詠んだのだろう。

【訳文】

其の一

白髪となった二人の古い友人が顔を合わせた。

二人の眼は、幾度となく時事が新たになったのを見た。

曲の調子が高くなると唱和する者が少なくなり、

議論の調子が高くなると理解できるものが少なくなるという。

李公は湖州周辺で飢饉が続いているために好い詩を歌い上げるひまがない。

劉公は細君を亡くしたばかりで夜長に親しく語る相手がない。

私とはいえば、思い煩うことはなく、

誰にも負けないくらいによく眠り、

鼻息は雷鳴のごとく四方を揺り動かすのである。

其の二

誰が私に勧めてここにこさせたのか。

絃管の楽器は使われずに苔が生え、米櫃には埃しかない。

酒は唇を濡らすだけで、蓄えはわずかしかない。

蝗が人の顔を打つほどに飛びまわり、すでに三回にわたって退治した。

刀を磨いて谷に入り、盗賊となった者を追うこともある。

町を回って、涙をこぼしつつ捨て子を拾うこともある。

地方の町を治めるのはまことに歓びが少ない。

しかし、それでも嘆くには及ばない——

塵にまみれて都の道を往来していたところに比べたならば……

【補足】〔(1) 第一首では、思い煩うことなくよく眠っていると詠んでいたが、実態はそれとは異なっていた。(2) 密州では捨て子が多く、蘇軾は民間の力を借りて、捨て子を養うシステムを作った。詳しくは次の章で記述される〕

## ■ 【05-1-057】 祭常山回小獵

【解題】この年は依然として雨が少なく、蘇軾はまた常山の神を祀って降雨を祈った。その帰りに、ちょっとした狩猟をしてこの詩を詠んだ。

### 【訳文】

青い覆いのある車を黒い旗が先導する。

黄色い茅の繁る岡の下で、

長い囲みを作る。

風を受けて馬は、前脚を何度も<sup>あが</sup>跑いて勇み立つ。

蒼い鷹が地を掠めて飛び、逃げる兔を追いかける。

振り返ると険しい常山の上に白い雲が湧いている。

我が衣には数々の紅葉が落ちかかってくる。

晋の時代に書記の謝艾が將軍に拔擢されると、

白扇をもって軍を指揮して大きな戦功を挙げたというから、

今日のこの姿を皇帝がご覧になったなら、

この私もまたきつと用いられるであろう。

## ■ 【05-1-058】 江神子

【**解題**】<sup>みつ</sup>「密州で獵に出る」と添え書きのある詞。上の詩と同じときの作で、内容も共通している。

【**訳文**】

老夫聊発少年狂。[老人はにわかには少年のような物狂い]

左牽黄、[左手に黄色の犬]

右擎蒼。[右手に蒼い鷹]

錦帽貂裘、[錦の帽子に貂<sup>てん</sup>の裘<sup>コート</sup>]

千騎卷平岡。[低い岡を取り巻くのは千の騎馬]

為報傾城随太守、[報せが走って知事に随う町中の人々]

親射虎、[知事自ら虎を射るのは]

看孫郎。[まるで孫權<sup>そんけん</sup>を見るかのようですぞ]

酒酣胸膽尚開張。[酒たけなわにして開いてみせる胸の内]

鬢微霜、[鬢にまじる白髪]

又何妨。[それもまたよからう]

持節雲中、[皇帝の命令を受けて行く国境の地]

何日遣馮唐。[いつの日か漢の大將軍のように]

会挽雕弓如满月、[よしういてみせよう満月のようにこの弓を]

西北望、[西北を望んで]

射天狼。<sup>てんろうせい</sup>[天狼星を射るのですぞ]

【**補足**】[(1) 冒頭の「老夫」は蘇軾自身のこと。千の騎馬とか城を傾けて知事に随うとか歌っているのは実景ではなく、三国志の英雄の孫權<sup>そんけん</sup>のようだと見栄を切ってみ

せるのはむろん遊びである。(2) 詞は酒席において主として男女の情愛を歌うものとして、詩とは別の世界を形成してきた。これまでに見てきた蘇軾の詞もその延長線上で軟らかな情を歌うものであった。この詞は一転して勇壮な獵の場面を歌い上げ、詞の世界を広げようとするものだった]

## ■ 【05-1-059】 与鮮于子駿

【**解題**】<sup>せん う しん あざな ししゅん</sup>鮮于侁 [字は子駿] に宛てた手紙。鮮于侁は作品番号 04-2-002 で見たように<sup>しよく</sup>蜀の地で官職に就いていた。この手紙では、上に見た『江神子』<sup>かうしん し</sup>の詞について書いている。

### 【訳文】

……送ってくださった詩文は、いずれも<sup>しやうぜん いんこし</sup>蕭然として遠く古の風味があります。この風味は長らく絶えてしまったもので、いまの世俗の人々の耳目に供しても疎んじられてしまうことでしょう。私は時間のあるときに独りて拝見しており、また誰にも見せておりません。これを愛する者が少ないのを知っているからです。拙詩をお求めてありますが、手を動かすまいとしているわけではなく、作らないことは決してないのですが、とにかく暇がありません。ただ、近ごろ小詞を作りまして、<sup>りゅうしちちろう リゅうまい</sup>柳七郎[柳永]の風味こそはありませんが、これもまた一家をなすものでありましょか(笑い)。数日前に郊外で獵をして、非常にたくさんの獲物がありました。それでこの一篇を作り、<sup>みつ</sup>密州の男どもに、手を叩き、足を鳴らし、笛を吹き、鼓を打って歌わせましたところ、すぶる壯観でありました。この写しをみて、どうぞお笑ってください。

【**補足**】 [(1) <sup>りゅうえい</sup>柳永は蘇軾よりも一時代前の詞の名手で、井戸端で女たちが柳永の詞を歌わない日はないといわれたほどに非常にポピュラーな作詞家であった。柳永は科挙を受験したのだが、<sup>じんそう</sup>仁宗皇帝が「このような軟弱な詞を作る者は我が朝廷には不要だ」とのひと言で不合格になったという伝説があり、晩年に至ってようやく小さな官



職を得られただけで、官界では不遇であった。(2) この手紙で面白いのは、鮮于侁の詩文は古風であるとして、蘇軾は敢えて自分の新しい詞を添えて送っていることである。古典を学びつつも、新たな表現の可能性を切り拓くことが肝要なのであろう。妓女が軟らかく歌うのが普通であるとされてきた詞を、がさつな男どもに勇ましく歌わせたとあるのは、蘇軾の一種の自負を示すものであろうが、こうなるともはや詞ではないと批判する人もむろん大勢いた]

### ■【05-1-060】和梅戸曹会獵鉄溝

【解題】これも獵を詠んだ詩。上の作品と同じときの作であろう。獵は鉄溝水〔→作品番号 05-1-020〕のあたりで行われ、密州の役人である梅君が詩を詠み、それに和した。獵で梅君も趙君も獲物を射ることができなかったことをネタに詩を構成している。

#### 【訳文】

趙君、梅君は山西の出身なのか。

山西は昔から猛者が出ることで知られている。

貴君らのような文官であっても、

いざとなったら命がけで城を守るくらいのはする。

この界限では盗賊が多く出没し、

近ごろさらし首にされた者たちはまだ土に埋められていない。

盗賊の親玉は討っても、

草の根に潜む狐や兎までは驚かさずともということはあるかもしれない。

その昔、大酒呑みで有名な趙さんやら、

詩が得意で妻子を棄てて姿をらました梅さんやらがいいたけれど、

諸君等はよもやそっちの仲間ではあるまい。

かつてある大臣は、美人の妻を娶ったものの、

妻は夫の顔があまりにも醜かったので三年の間全く口をきかなかった。

その大臣が妻の前で雉を仕留めると、

妻は初めて笑って夫と言葉をかわした。

諸君等もこれで何も射ずに帰ったのでは、

家で待つ美しい奥方にそっぽを向かれてしまうのではないのかな。

【補足】[全体として楽しい戯れの詩なのだが、盗賊を捕えてさらし首にしたことが詠み込まれているのは穏やかではない。作品番号 05-1-019 で見たように密州周辺では盗賊が横行していた]。

## ■ 【05-1-061】 雨中花慢

【解題】これは一転して和かな詞。「密州に至った当初は、早魃や蝗害の対応で月を累ねて潔斎しなければならず、春の牡丹が盛んに開くときに、一度も鑑賞できなかった。九月に至って、千葉【牡丹の一種】の一枝に花が開いたので、雨の中に酒を置いて花を見てこの詞を作った」と、添え書きがある。

### 【訳文】

今歳花時深院、[今年の花のときは建物の奥深くにいて]

尽日東風、[春風の吹く日にも]

蕩漾茶煙。[茶の煙がたたよなかりいたのでした]

但有緑苔芳草、[苔や草が伸びあがり]

柳絮榆錢。[柳絮が飛び、榆の葉も出していました]

聞道城西、[聞けば、町の西のあたりで]

長廊古寺、[長い廊下のある古い寺は]

甲第名園。[近隣第一の名園である、と]

有国艶帯酒、[国艶<sup>こくえん</sup>[牡丹の一種]は酒を帯びたような色合い]

天香染袂、[天香<sup>てんこう</sup>[牡丹の一種]は袂を染める風情で]

為我留連。[私のためにまた花を留めている、と]

清明過了、[清明節<sup>せいめいせつ</sup>も過ぎてしまって]

残紅無処、[どこにも紅<sup>ねない</sup>の残るところはなくて]

对此淚灑尊前。[涙を灑<sup>そそ</sup>ぐしかありませんでした]

秋向晚、[秋の暮れに向かうころ]

一枝何事、[どうしたことか一枝だけが]

向我依然。[私に向かって春と同じようになっただのです]

高会聊追短景、[貴重な出合いは短い日と競い]

清商不仮余妍。[秋の風は美しさを余すまいとします]

不如留取、[ならば摘み取ってしましましょうか]

十分春態、[この春の姿は]

付与明年。[また来年のものとして]

## ■ 【05-1-062】 後杞菊賦

【解題】これは杞<sup>くこ</sup>や菊<sup>ふ</sup>を食べることを歌った賦。賦は韻文の一つの形式で、問答によって構成されるのが特徴となっている。作品を作った経緯を記した序文が付いている。

## 【訳文】

じょ  
叙

とうだい てんずいせい りくき もろ  
唐代の天随生[陸龜蒙の号]はいつも杞と菊を食べていると書いている。「夏の五月に及ぶころには、枝の葉は成長して硬くなり、気味が苦く渋くなる」。それでも食べ続けていた。それで『杞菊の賦』を作って、自分の気持ちを慰めたのだった。

私は以前はここに書いてあることを疑っていた。いかに士が不遇となつて、窮乏に迫られたからといって、飢餓の余り草木を嚙んだというのは、あまりに過ぎたことではないかと思ったのである。

私は仕官して十九年、家は日々にますます貧しくなり、衣食に供せるものは以前に及ばなくなつてしまつた。膠西[密州]の知事に移り、飽くまで食べてみたいと思つても、厨の内は索然として、憂いに堪えぬばかりである。仕方なく、副知事の劉庭式君と毎日のように古い町並みの放棄された畑を巡つて、杞や菊を探して食べ、腹をひねつて笑いあつている。それで、天随生のことは正しく信じるべきなのだと知つたのである。よつて、『後の杞菊賦』として、自らを笑い、いささか気持ちをほぐそうとするものである。

ふ  
賦

「ああ先生よ、誰が先生を立派な座敷に登らせて太守[知事]と称するようになされたのかな。先生の前には客人が並んで食事にあつきたいものだと待っているし、先生の後ろには役人たちが書類をもって押し寄せてきている。朝早くから仕事を初めて、たちまち夕暮れになってしまう。酒の一杯があるわけもなく、草木を取つて口をごまかすしかない。机に向かつてうなだれ、箸を手にしてうめくのだ。昔、麦の飯と蕪の葉をあてがわれたために、將軍の招きを断つた人がいたけれど、先生はどうしたことか、それにも及ばない境遇にも未練たらたらであるとは。先生にだって故郷の山はあるだろうに、どうして帰らずにいるのかな」

先生は笑つて答える。

「人生は、臂を曲げて伸ばす間のくらの短いもの。誰が貧しいとか、誰が富むとか、何が美しいとか、何がやばったとか、それがどうたおというのか。糠ばかり食べていてもぷくら太っていた人もいたし、肉をたらふく食べても墨のように顔色悪く痩せていた人もいた。食事に一万銭を費やしても食べられる物がろくないろくないといっていた者もいたし、二十七品を並べても少なすぎる少なすぎるといっていた者もいた。どれほどの贅沢をしたところで、それも夢のようなもの、ついには誰もが朽ち果てて終わるのだ。私は杞を主食とし、菊をおかずとする。春にはその苗を食べ、夏にはその葉を食べ、秋にはその花や実を食べ、冬にはその根を食べる。それによって、百年、二百年生きた仙人のような長寿を得よと思っているのだ」

【補足】〔(1) 陸龜蒙の『杞菊の賦』を読んで、蘇軾は本当かどうかを疑ったのだが、我々は『後の杞菊の賦』を読んで、州知事でありながら杞や菊の葉しか食べるものがないなどということがあるのかと、やはり疑いたくなる。もちろんある程度はフィクションであって、蘇軾の言いたいことはそのことにあるわけではない。(2) なお、菊は長寿の象徴とされ、甘い菊がむらがり咲く谷の下流に住む人々は、菊のエキスがまざった水を飲んでちょうよういたために長寿であったという伝説があって、重陽の節句には菊の花を浮かべた酒を飲むようになったのである。しかし、現実的には苦い菊で飢えをしのぐのはあまり嬉しいものではなかったろう。(3) ここに劉庭式〔字は得之〕の名が挙げられているのは、たまたま副知事として近くにいたからではなく、実は非常に優れた人格の持ち主だったからである。そのことを記した文章を次の章で見ることになる〕

## ■ 【05-1-063】 与金山宝覺禪師

【解題】『後の杞菊の賦』を金山寺の宝覺禪師のち ききく ふ きんざん じ ほうがくに送っているのだから、それに添えた手紙を読んでおこう。

## 【訳文】

去年、密州みつへと赴任する途中では、期限に迫られ、舟で金山きんざんに立ち寄る余裕がありませんでした。長江ちやうこうの流れの上で、雲のかかる山を見て、そこが遥かに遠くになって行くのを嘆いたのであります。ところが、長江を渡り終えると、軽やかに舟がやってきて、貴僧がわざわざ見送りにきてくださったのでした。笑って語り合い、食事をともにすることを得たのであります。貴僧がそこまで私のことを懐おもってくださることのかたじけなさは言葉にできるものでありませんでした。

お別れしてから、またお手紙も差し上げずいたところに、貴僧から使者かたげな すうふくがきて、忝かたげなくも数幅をいただき、何度も読み返して心を慰めております。拝見すると、目の前で妙論を伺っているかのようで、気持ちがすっきりします。仏説の佳勝を審らかに知る思いがします。

私はお上に仕える身で、お目にかかる機会は今もはやないかもしれないと思うと、紙に向かっていて、茫然としてしまいます。万々自重されますように。

いま書いたばかりの『至遊堂しゆうどうの記』をここに添えます。また近ごろ作った『後の杞菊のち ききくの賦』の一首も写しておきます。どうぞお笑いますように。

【補足】 [ここに記されている『至遊堂しゆうどうの記』は後世に伝わらずに失われてしまった]

## ■ 【05-1-064】 劉貢父見余歌詞数首、以詩戲、聊次其韻

【解題】 劉攽りゆうはん あざな こう ふ [字は貢父] [→作品番号 05-1-056] が蘇軾の最近の幾つかの詩を読み、戯れに忠告する詩を送ってきたのでそれへの返事。

## 【訳文】

私はこれで十年ばかりも都の外でふらふらし、  
これからどうなるのかさっぱりわからぬ身、  
都の花を看着再び詩を詠むことはあるまいと思う。

こんな私が我が家の門の先でうっかり憎まれ口をきいたのを、  
一体どなたが貴君に伝えたのか。

酔って吐き出したふざけた詩など、自分でも知ったことではない。

昔、過激な言論で刑死した男は、息子の舌を錐で刺して口を慎めといった。

昔、権威者の横暴を止めようとした者は、眉毛を火で炙られることも辞さなかった。

一緒に飲むのなら、こういう野暮な話はなしにしようではないか。

まさに春の盛りの最もよい時節なのだから。

【補足】[劉攽<sup>りゅうはん</sup>は戯れの詩で蘇軾を戒め、蘇軾も戯れの詩を返したのだが、実のところは本気であったのだろう。「眉毛を炙<sup>あぶ</sup>られ」でもという覚悟であったから、ついには「嵐」を呼び寄せてしまうのを本章の終わりで見ることになる]

## ■ 【05-1-065】和章七出守湖州二首

【解題】10月、章惇<sup>しょうてん あぎな しこう こ</sup> [字は子厚] が湖州知事に任命されて都を出ることになった。そのことを詩で報せてきたので、それに和した。章惇は同じ年の科挙で合格した「同年<sup>どうねん</sup>」の間柄で、その後、長安<sup>ちょうあん</sup>で意気投合して、互いに親友であると認め合うようになった [→作品番号 02-2-019]。詩題にある「章七」の「七」は「兄弟排行<sup>きょうだいはいこう</sup>」で、兄弟・従兄弟等同世代の中での年齢順を示す。ちなみに蘇軾の兄弟排行は九十二であるらしく、眉州<sup>び</sup>には同世代が大勢いたようだ。

### 【訳文】

#### 其の一

仙人は東の海の渺茫<sup>びょうぼう</sup>たる彼方より現れ出たと聞く。

だから、気高い情は水雲<sup>こころ すいうん</sup>の郷を愛するのだ。

功名は尊ぶべきであつても、  
 さすがに一カ月に三度も勝利を連ねる者はいない。  
 世を過ごすには、  
 なかなかできるものではないけれど、  
 是と非の両方とも忘れて自然に任せるのがよいのだらう。  
 私も貴君も、早くに官を退いて心身を休めたいとの心かもとからある。  
 そうした後に会えたならば、ゆつりと語り合えるに違いない。  
 今はまだ皇帝の重い恩に報いることができていないので、  
 貴君の夢は、時に皇城の奥へと行くことであらう。

【補足】〔(1)「水雲の郷」とは、太湖のほとりにある湖州のことをいう。この詩では、章惇の気高い心が「水雲の郷」に行くことを選んだように歌っているが、実際にはそうではなく、不本意な左遷であった。章惇は、これより4年前に蘇軾が都を出たのと同様に入れ違おうえんせきうようにして王安石によって中央に抜擢され、改革の担い手の一人として活躍していた。熙寧7年〔1074年〕4月、天災の影響で王安石が宰相を辞め、韓絳が宰相、呂惠卿が副宰相という体制で改革を続けて行くようになると、章惇を初めとして多くの朝臣は野心家の呂惠卿のもとについた。先に記したように、韓絳には呂惠卿を抑える力がなく、宰相でありながら自身では何事も決定できない事態となり、密かに神宗皇帝に王安石を呼び戻すよう勧め、熙寧8年5月、王安石は宰相に復帰した。その結果、韓絳はよりいっそう何もできなくなって8月に宰相を辞め、呂惠卿は10月には副宰相を降り、呂惠卿第一の子分と見なされた章惇も朝廷から出されてしまったのだ。〕(2) 続く第二首の訳は省略するが、湖州では俗世間から離れた楽しみを得られるであろうと、章惇を慰めている。政治的立場は異なっているが友情は続いていると蘇軾も章惇もこのころは考えていたのである。(3) 同じ頃に、蘇頌〔字は子容〕〔一作



品番号 04-2-022] に宛てた手紙を書いている。蘇頌は章惇とは逆に都に呼ばれたので、蘇軾は蘇頌が朝廷を刷新してくれることを期待すると書いている]

## ■【05-1-066】上文侍中論榷塩書

【解題】先に見たように、宰相の韓絳<sup>かんこう</sup>に提出した意見書 [→作品番号 05-1-018] で、塩を国家の専売とする政策<sup>みつ</sup>を密州周辺でも厳格化しようとする動きに対して蘇軾は異議を唱えていたが、そのことを改めて論じるこの手紙<sup>ぶんげんはく</sup>を文彦博に出している。文彦博は蘇軾よりも 30 歳年長で、政界の大物で、かつて宰相であったときに王安石<sup>おうあんせき</sup>を高く評価して朝廷で用いるよう推薦したのだが、後に王安石が改革に着手すると疑義を示して朝廷から去り、このときは中央政府の要職に就いていなかった。韓絳には何か言っても埒が明かなかったので、文彦博なら皇帝の信頼を保てていて何らかの影響力を発揮してもらえるのではないかと期待したのであろう。とにかく意見表明をしないではいられないとの切実な思いに駆られてこの手紙を書いたのだった。塩の専売を押し進めようとしていたのは実は章惇<sup>しょうじゆん</sup>で、上で見たように蘇軾と章惇は詩の贈答をし合って友情を保っていたのだが、政治的見解は大きく異なっていた。そのことがよくわかる部分を訳しておこう。

### 【訳文】

……先<sup>さん</sup>ごろ、三司使<sup>ししうじゆん</sup>の章惇<sup>かほくろ</sup>が、河北路<sup>けいとうろ</sup>、京東路<sup>かくえん</sup>でも榷塩<sup>かくえん</sup> [塩の専売] を実施するよう提議し、朝廷は実情を視察する役人を現地<sup>しやうかち</sup>に派遣し、周革<sup>しゅうかく</sup>が朝廷に召されて報告した結果、提議が成案となったのでした。章惇は、「河北路<sup>せんせい ろ</sup>も陝西路も国境防衛上の拠点となる地で、河北だけに榷塩が適用されていなかったのは祖宗<sup>そそう</sup> [宋代初期の制度] が一時的に誤って恩を施したものでありました」と主張しました。しかし、私が見ますに、陝西の塩と、京東や河北の塩は同じではありません。(内陸にある)陝西

の解池かいちの塩池は広さが数十里しかなく、もとから官の所有であるそこを棄てて民に与えるのはよろしくなく、また官がそれを管理するのたやすいことなのであります。……一方で、京東や河北の東北の地は海から採る塩で、それを官が管理して得ようとするなら、やはり海から塩をとる淮南わいなんや両浙りょうせつの地と異なるところがありません。私が(両浙りょうせつ)杭州こうしゅうにいたときに、塩の専売を犯して罪人になった両浙の民を見ましたが、それは一年に一万七千人にとどまるものではありませんでした。奸民かんみんは兵士によって護送され、誰もその近くには近づこうとはしないのですが、そのような者がいつでも数百人はいるような状況でありました。そうした者たちであっても、ほかに盗みなどの悪さをしたということは一切聞かれなかったのであります。

東北の人々は淮南や両浙の民よりもずっと荒々しく、普段から悪さをするのでは他の地域を超えて天下第一であるとされています。もしも塩の専売が実施されましたなら、その禍は一つや二つではとてもすまないであります。このことからして、祖宗以来、河北の塩を専売にしなかったのは、まさしく適切な処置であったといえるのです。それをどけて誤って恩を施したなどといってよいのでありましょか。塩の専売は昔から行われてきた施策ではありますが、王政の要であるとはいえません。陝西、淮南、両浙ではいまやめることはできないでしょうけれど、かえて京東や河北にも広げるのは、譬えていえば、左臂が病のために麻痺してしまい、右臂は完全に使えるのに、酒色によってさらに右臂も駄目にしてしまおうとするようなものでありましょ。……

【補足】〔(1) 改革の大きな眼目の一つは国家財政の立て直しであった。だから、改革派はあの手この手で税金を増やす施策を次々に提案した。それに対して、蘇軾は地域によって条件が異なるのだから、計算通りに税金アップが実現するとは限らないし、場合によってかえて別の大きな問題を引き起こしてしまいかねないと懸念しているのである。(2) 同じ頃に、やはり文彦博ぶんげんはくに宛ててもう一つの政治上の問題を議論する手紙を書いている。それは、犯罪人を捕らえた者に与える報奨金を半分に引き下げるという朝廷の方針に対する疑義を唱えるものであった。当時は十分な給与を保証

された警察組織によって犯罪人の捜査や逮捕が行われていたわけではなく、口利き料や報奨金によって生活を成り立たせている下級役人がそれに当たっていた。犯罪人の逮捕は当然危険を伴うので、報奨金が半減したなら、我が身を危険にさらしてまでそれに取り組もうとする者が減って、盗賊が増えてしまうだろうと蘇軾は懸念し、日照りが続いて飢饉の恐れのあるときに、そのような方針は取り下げるべきだと強く主張したのであった。(3) また、それよりも前に、密州に赴任した直後に、「手実法」という新しい施策を実施するよう報せてきた者に対して強い疑念を呈し、使者がとまどって朝廷に帰ったということもあった。蘇軾は州知事として最大限、改革政治を是正することに努めていたのである。中央からすると、ごちゃごちゃ物を言う面倒臭い奴だと見られていて、いつか黙らせてやろうと画策する連中がいた]

## ■ 【05-1-067】 酔白堂記

【解題】 この年の6月24日に亡くなった韓琦かん き [→作品番号 05-1-053] は11月2日に郷里の墓所に葬られた。その後で、韓琦の息子の韓忠彦かんちゆうげんからの依頼でこの『酔白堂の記』を書いた。韓琦は晩年に改革に反対して相州そうに退き、この文章にある酔白堂を建て、『酔白堂の歌』を作った。『酔白堂の歌』はこの年の2月に詠まれていて、韓琦の最後の詩とされる。なお、冒頭に「魏国忠献韓公」とあるのは、韓琦が朝廷の要職に就いたときに「魏国公」ほうに封じられ、亡くなってからは「忠献」おくりなの諡を皇帝から賜ったからである。

### 【訳文】

魏国忠献韓公ぎ こくちゆうけんかんこうは、私邸すいはくの池はくきょいのほとりに堂はくらてんを作って「酔白」と名付けた。それは白居易ち[白楽天]の『池上じょうの詩』すいはくどうにちなむものだ。公は『酔白堂の歌』を作り、その詩は、白居易を羨んで自分は及ばないとい

っているかのように読むことができる。

天下の士はひとこの詩を聞いて不思議に感じた。公には、遠い昔に国政を補佐して後世の手本となった伊尹い いんや周公旦しゅうこうたんにも取じることのない立派な業績があるのに、どうして白居易を羨んだりするのたろうかと疑問を抱いたのである。

私はこれを聞いて笑っていった。

「公はただ白居易を羨むだけでない。ごく普通の人、特に聞こえることのない人間でありたいと願っているから、そうはなれなかったのだ」

天がこの人をこの世に生んだのは、天下の重い任務に当たらせようとしたからである。天下の人々は、凍える者は衣を求め、餓える者は食を求め、何らかの不足のある者はそれを得ようと求める。民が求める物を与えようとするならば、決して十分ということにはならない。だから、民が求める物を与えようとする者は、常に憂患の内にあつて、利害のからみあう道を進まなければならない。それは公の望むところであつたのだろうか。

公は三代の皇帝のもとで宰相となり、天下を安定させると、水が流れるようにして官界から去り、家において老いの日々を送ろうとした。しかし、天下は皆で引き留めてそれを許そうとしなかった。まさにそのときに、公が白居易を羨んだのは、少しも怪しむことではない。

白居易がその生涯にしたことと同じことが公にもあるだろうかと探し求め、二人の成し遂げたことを比較してみるならば、どちらが厚くどちらが薄いのか、どちらが浅くどちらが深いのか、後世の評価はきつと一つに定まるに違いない。

文においては太平をもたらす、武においては乱れを定め、かくて国家を安定させて、しかもそれを自分の功績であるとはしない。賢才を求めることを急務とし、地位や俸禄などは軽く見て、しかも用いられた人には自分に恩があるとは知られずにいる。殺伐とした戦場で果敢に行動し、軍隊は安心してその指揮に従い、四方八方の外国にその風采が聞こえるところとなり、天下の安危はまさにその人の一身にかかっている。このようなところは公にはあつても白居易にはない。

身体がなお強健のときに官職から退いて隠居すること十五年、日に朋友とともに詩を賦し酒を飲み、山水園池の楽しみを尽し、箏箏にはたくさんの絹があり、倉庫にはたくさんの穀物があり、しかも音楽をもって仕える妓女が家にいる。このようなことは白居易にはあっても公にはない。

忠言を為し、<sup>はかゆごと</sup>良い謀を巡らし、その効果がその時代に現れ、文采は後世にまで現れ、<sup>いかに</sup>死生窮達において節操を守り、<sup>いかに</sup>道徳が古の人よりも高い。このようなところは公と白居易は同じである。

公は、白居易よりも多いところがあるのを自分で多いとは思わず、白居易よりも少ないところがあるのを自分で少ないとは思わず、まさに同じであるところをもって、白居易に思いを寄せたのである。

公は酔白堂を作って、自分の生きる形を一酔の内に寓しようとした。それは、<sup>うしろ</sup>得るも喪うも同じ、禍も福も忘れ、<sup>さ せん</sup>貴も賤も一緒、賢も愚も等しいとして、万物と一体となって、造物者とともに遊ぼうとしたのである。つまり白居易と自分を比べようとしただけのことではないのである。

<sup>いかに</sup>古の君子は己の身の処し方に厳しく、名声を得ようとする気持ちは薄かった。実質こそが大切に、名声などは浮ついたものであるとしたのだ。それで世の人は、その君子のすばらしさを称賛してやまないのである。

我々は孔子は聖人であるのを知っているが、孔子自身は、<sup>けんたい ふ</sup>せいぜい賢大夫といわれた老彭くらいで、<sup>ちゆうほう</sup>歴史家の左丘明と同じになれればよくて、<sup>がんえん</sup>弟子の顔淵には及ばないと考えていた。

ところが、後世の君子とされる人は、実質はそれほどでもないのに、皆に驕る心がある。自分自身で聖人だと言った臧武仲という人がいたし、自分は古の聖天子の禹と同じだと言った白圭という人がいたし、自分は昔の大將軍である藺相如のようであるとして名を相如に改めた<sup>し ば ちゆうけい</sup>司馬長卿という人がいたし、自分は孟子の上を行くと言った揚雄がいたし、自分は漢の高祖を補佐した<sup>ちゆうりよう</sup>張良の再来であるとした<sup>もう し</sup>崔浩という人がいた。しかし、世の人はそれにはまるで同意しないのである。

このようなことを見れば、ごく普通の人でありたいと願った公の賢さは遠く人の及ばないところなのである。かつて公はその子息の<sup>かんちゆうげん</sup>韓忠彦に、「酔白堂」についての文章を私に求めるようにいわれ、それを果たす前に亡くなった。すでに葬儀を終え後に、韓忠彦からそのことを告げられ、私は義として辞退すること

はできないと思い、泣きながらこれを書いたのである。

## ■ 【05-1-068】和張子野見寄三絶句

【解題】張先<sup>ちやうせん</sup>〔字は子野<sup>あざな しや</sup>〕から3首の絶句が送られてきたのでそれに和した。張先は  
杭州<sup>こう</sup>において親しくした風流老人〔→作品番号 04-2-059 など〕。

### 【訳文】

其の一 旧<sup>かつ</sup>て遊<sup>よぎ</sup>んだところを過る

前の世<sup>こゝ</sup>において私は杭州に到った――

杭州で行ったところはすべて、

かつて遊んだところだったのである。

いま想うのは、

杭州役場のしかない小役人となり、

静かな場所に小さな庵を結んで、

この現世に寄せるしれの時を過ごすこと。

【補足】〔張先<sup>ちやうせん</sup>の第一首は、蘇軾と楽しく過ごした場所を再訪して詠んだものであったのだろう。続く第二首は、蘇軾が壁に書いた詩を見たことを詠んでいたのだろう〕

其の二 壁に題したのを見る

狂吟<sup>ばーとんた</sup>ものであるから、

跌宕<sup>はちめちや</sup>で風雅などこれっぽちもないし、

酔ってべたべた墨をしたたらせただけで、

形がまるでなっていない。

張先生ちやうせんのような詩人がとりあえず回顧するにはよからうかと、  
山寺の僧は壁土を塗りたくらずにいってくれたのであろう。

其三 竹閣ちくかくに憶おもわるる

柏堂はくどうの南隣は竹が雲のようにある。

そこの竹閣の主人は誰なのか。

張先生が鶴の羽根の衣を着てそこにおさまるなら、

わざわざ白居易はくきょいの画像を飾っておく必要はないのだ。

【補足】[西湖せいこに浮かぶ島である孤山こざんに竹閣ちくかくと柏堂はくどうが並び立っていることは作品番号  
04-2-060 で見ている。竹閣は白居易はくきょいに所縁があり、かつて蘇軾そしつは張先ちやうせんは妙なところで  
白居易と似ているとからかっていた [→作品番号 04-2-001]

■ 【05-1-069】送趙寺丞寄陳海州

【解題】諸城しよじやう県の知事ちしの趙昶ちやうちやう [字あざなは晦かい之] [→作品番号 05-1-030] が官職を失って郷  
里しよくの蜀しよくに帰ることになり、その送別の詩。趙昶が途中ちゆうちゆうで海州かいしに寄るので、この  
詩は海州ちんの陳知事 [→作品番号 05-1-006] にも寄せた。

【訳文】

貴君かいが海州かいに至ったならば、

陳知事ちんはさっそく景疏楼けいそろうの上に峨眉がび [眉まゆの美しい女性]を集めて、

この詩を歌わせるであらう。

昔ちんじゆんむかしの陳遵ちんじゆんがしたように、

陳知事が貴君の車を井戸に投げ捨てて、

あくまでも引き留めて飲もうとしたならば、  
 貴君は思い出して払い、  
 雪の降る中で君を見送りつつ、  
 故郷の峨眉山[蜀の名山]を想う詩を歌ったことを。

## ■ 【05-1-070】 減字木蘭花

【解題】 同じく諸城県知事の趙昶を見送る詞。

### 【訳文】

賢哉令尹、[『論語』にある言葉通りです——賢なるかな、この知事は]  
 三仕之無喜愠。[官職に三度就いて、喜怒哀楽を見せなかった——]  
 我独何人、[ては、私は何者なのでしょう]  
 猶把虚名玷縉紳。[虚しい名をもっているも官界を辱めているのです]

不如歸去、[よりよいのは帰り去ること]

二頃良田無覓処。[でも、求めることができないのです、わずかな田も]

歸去來兮、[陶淵明の言葉——帰りなん、いざ——を]

待有良田是幾時。[良い田が得られるのを待っていたら、いつ唱えられるのでしょうか]

【解題】 [(1) 趙昶が失官した理由は不明だが、この詞では陶淵明のように自ら帰郷することを決めたとして詠んでいる。(2) 冒頭にある「賢哉令尹、三仕之無喜愠」[賢なる哉令尹、三たび仕えて之に喜愠無し] は、楚の令尹 [知事] であった子文が褒めた『論語』の文章を10文字に要約したもの。後半の「歸去來兮」は陶淵明の『歸去來の辞』にあるのをそのまま用いたもの。蘇軾は古典の言葉を自分の作品の



中に効果的に取り込むのを得意としたが、これはその典型例]

### ■ 【05-1-071】 和蔣夔寄茶

【**解題**】<sup>しょうき</sup>蔣夔という人が茶とともに詩を寄せたのに和した。蔣夔は弟の蘇轍とも交流があり、学者肌の人であったようだ。茶について詠んだ詩は、これまでもいくつか見ているが、特有の語句が用いられてなかなか難解である。この詩も一応の文脈がたどれる程度の大まかな訳である。

#### 【訳文】

私の生き方は、百事すべて縁に随うといもの。

<sup>よち</sup>四方の水域だらうか<sup>りく</sup>陸域だらうかどこでも結構である。

ちっけいな舟に身を任せて、<sup>ちやうこう</sup>長江を渡って<sup>ごえつ</sup>呉越地方に行ってみたら、

三年の間といものは、

飲むものも食べるものも新鮮で旨いものばかりだった。

金のような<sup>あえもの</sup>齏、玉のような<sup>なます</sup>膾、雪のようなご飯、

水中から出たばかりの海の蟹やら川の貝柱、

それらを風に吹かれつつたらふく食べ、

そのままごろんと眠り、

目を覚ましたならば、

「花の乳」ともいべき茶に軽やかに泡が浮かんでいるのを飲んだのだった。

その後、私は舟を捨てて東の野を歩き、

桑や麻の畑を巡る川に到ったところ<sup>みつ</sup>[密州に来たことをいう]、

毛を刈り取った羊が馬ほどの大きさであるのに驚かされ、

ろくかく  
鹿角という魚の生臭さがそらに渦巻くのに驚かされた。

くりや  
厨では粟を蒸し、肉の上にてんに盛りこし、大きな柄杓で酸醬をぶっかけ、  
そのすっぽそうな匂いにもいつしか涎が垂れるようになった。

そしてこの地での茶はどうかというと、

しゃら どうてん  
「柘羅」「銅碾」といったかねからあるお流儀は棄てられて、  
しま はくど ほんけん  
「脂麻」「白土」「盆研」といったものが用いられているので、

私は目をむいてびっくりしてしまい、

人々からは、逆に、

「昔なからのご趣味ですな」

と、私はいわれてしまったのだった。

さけいちや ほくえんちや  
「沙溪茶」と「北苑茶」の区別を、

ほんのひと滴で見分けてやろうと先を争ったりもしている。

貴君は、千里の彼方より、二首の清らかな詩とともに、

一万銭の価値のある紫の茶、金の茶を百餅も送ってくださった。

貴君の詩を吟じて、茶を煮かしても、とにかくどちらもすばらしい。

その茶を「私も欲しい」と、人がいてくる煩わしさをいまから恐れている。

ところが、妻や子供らはせつかくの茶を大切にすることを知らなくて、

我が郷里に昔からある作法によって、薑と塩を入れて煎出してしまう、

すでにもう半分も残っていない。

それはそれとして、

人生においては、出会うものすべてをよしとすべきなのだろう。

北も南もそれぞれに嗜好があり、

いずれが賢でいずれが愚ということはないであろうし、

どちらが甘くてどちらが苦いか、美しいか醜いかを争うことはないでよいだろう、  
死生も禍福もどちらかだけ一方を選ばずにいるよのたろう。

貴君の詩によって、

厳しい境遇に置かれても貴君は自棄することがないのを知った。

この詩は謝礼を申し上げるとともに、いさか自分の思いを述べた次第である。

## ■ 【05-1-072】 光禄庵二首

【解題】 陳師道 ちん し どう あざな り じょう む き [字は履常あるいは無己] から送られてきた光禄庵 こうろくあん の詩に和した。

このころまでに蘇軾の名はすでに天下に鳴り響き、憧れて弟子となるのを希望する若者が大勢いた。蘇軾よりも17年若い陳師道もその一人で、蘇軾に詩文を送って、指導を仰いだのである。蘇軾の詩は、陳師道のもとの詩を踏まえて詠まれているのたろう、この詩だけでを見たのでは十分に意味を汲み取れないところがあるので、第二首だけを訳す。

### 【訳文】

其の二

町にいる知事はどのような人なのかといったら、  
山林に隠れ住む賢者とはまるで違っている。  
では、庵の中の光禄先生 こうろく はと覗いて見ると、  
雪に付いた履の跡、  
あるいは鏡の中の影、  
真の姿は掴めないのである。

## ■ 【05-1-073】 答陳履常

【解題】 上の詩とともに陳師道ちん し どうに送った手紙。

## 【訳文】

遠くから詩を送ってくださり、拝見してすがすがしい気分になりました。詩を読ませせいただく栄を得たのは何の幸いによるのでありましょうか。この詩を作った人の品格、品行が高く、政治について深く考えておられることがよくわかりました。そこで『光禄庵二絶』に和して、貴君きんせんを欽羨する懐なついを寄せる次第です。ひとたび笑って投げ捨てていただければ結構です。……密州みつのあたりは連年の干害こうがいと蝗害で、北の地は紛然として疲弊しております。早く解放されたいものと、遠く天の川の彼方の仙界を仰ぎ見たりしております。……

## ■ 【05-1-074】 趙成伯家有麗人。僕忝郷人、不肯開樽、徒吟春雪美句、次韻一笑

【解題】 冬の始めに新たな副知事として趙庾ちょう じゆ あざな [字は成伯] が赴任してきた。趙庾はなかなか気さくな人であったのだろう、「私のところにいる麗人れいじん [妓女であろう] は君と同じ蜀しよくの人であるから、会ってみるかいい」とかいつて、蘇軾を家に招いた。さすがにその女性と盃を交わすわけにはいかないので、春の雪を詩に詠んで座興とした。

## 【訳文】

刺繍を施した簾すたれ、朱く塗った扉、それらは開いたことがないので、  
春の雪に驚いて鏡台の上に落ちた梅の花を見た者はいない。  
昔、行き倒れになった人の帯に、雪を詠んだ立派な詩が記してあったとか。  
やはり、暖かな部屋で酒を酌みつつ静かに詩を唱える方がよいに違いない。  
老いた者どうしがうなだれて向かい合っているよりは、

美しい人のもとに帰ったらどうだろうか。

昔、卓文君<sup>たくぶんくん</sup>は壁を隔てて司馬相如<sup>しばそうじょ</sup>を覗き見て一目ぼれたというが、  
よもや私を見る人はいないであろう。

【補足】[戯れの詩であるので、訳文が出来なくても大目に見ていただきたい]

## ■ 【05-1-075】 成伯席上贈所出妓川人楊姐

【解説】趙庾<sup>ちやうゆ</sup> [字は成伯<sup>あざな せいはく</sup>] の家にいた妓女は四川 [蜀<sup>しせん</sup>] の人の楊姐<sup>しょうじょ</sup>で、宴席に顔を出したのでこの詩を贈った。

### 【訳文】

坐中に現れたのはまさしく見栄え好き人、

唇は深く閉ざされ、浅く眉が描かれている。

なるほど蜀<sup>しよく</sup>の楊家<sup>ようけ</sup>からは佳麗な女性が生まれ出るのだ。

楊貴妃<sup>ようきひ</sup>が少女のころに落ちた池は後に「浴妃池<sup>よくひち</sup>」と呼ばれるようになったが、

この人によって第二の「浴妃池」が生まれるであろう。

【補足】[趙庾<sup>ちやうゆ</sup>のもとの妓女を同じく蜀出身<sup>しよく</sup>の楊貴妃<sup>ようきひ</sup>になぞらえた詩。さらにもう一首あるのだが、戯れの詩をあまり多く並べるのもさほど蘇軾<sup>そしつ</sup>の名誉にはならないであろうから、訳は割愛する]

## ■ 【05-1-076】 密州通判序題名記

【解説】この文章は蘇軾<sup>そしつ</sup>が密州<sup>みつ</sup>を去ってから後に書いたもの。前の詩に登場した趙庾<sup>ちやうゆ</sup> [字は成伯<sup>あざな せいはく</sup>] とはもっと以前から交流があったことが知れるのでここに掲げる。

## 【訳文】

趙君[趙庚]はかつて眉州の丹稜県の知事となり、町の人はいまに至るも趙君のことを褒め称えている。私はその隣の町の間人であるから、そのことを詳しく知っている。趙君が丹稜県知事を辞めたときに、私はたまたま(父の喪に服して)眉州に帰っていたので、趙君と初めて識り合うことができた。

その後、私が都から杭州に出ることになったとき、趙君は泗州の副知事となり、同じ日に朝廷で辞令を受けた。宮殿の外の門で二人は顔を合わせ、手を取って語った。そして杭州に赴(途中、泗州で趙君と会い、先春亭で大いに飲んで大いに酔って別れた。

そして、私が密州の知事として移った後で一年もしないうちに、趙君が副知事としてやってきた。

私は、本性として言葉の慎みに欠け、親しいか疎いかの区別なく、人に向かって腹の内にあることをそのまますぐに言葉に写して残さず出してしまふところがある。喉から下っていこうとしない腐った物を必ず吐き出してしまわずにはいられないのと同じである。人によっては、私の言葉を胸に刻み、私を怨んで咎めるようになったりもする。そのために私はたさんの人と深く付き合うことができない。

趙君と馴染になってみると、趙君は穏やかにしておおらかで、表も裏もなくいつもかりとしているので、趙君との付き合いを私ははなはだ楽しむようになった。しかも、趙君は役所の仕事に励み、お上の仕事を自分の家のことのように熱心に取り組むので、密州に副知事としてきてくれてからは、私はゆっぴりできるようになった。

趙君はこういった。

「副知事の片舎の壁には、額に掲げた文章がありません」

そして、趙君は、かつてここで勤めを為した者の姓名を集め、一文を添えるように私に託した。

ところが、私はそれを書く暇がないままに他所に移ってしまった。私が徐州に赴任してからも、趙君からの手紙にはいつもこのことが書かれていて、「貴殿に頼むのは不朽のものとしたいからだ」というのである。その訳は、昔、羊祜が襄陽の峴山に登った故事に由来する。そのときに、同行した鄒湛に向かつて羊祜はこのようにいった。「宇宙があるようになって以来、この山がある。これまでに、我等と同じように、

ここに登って遠くを見た者があまたあつただろう。それらの人々は全て埋もれて消えてしまい、誰がいたと聞える人はいない。悲しいではないか」。鄒湛はいった。「公のお名前はきつとこの山とともに後世に伝えられることになりましょう。私のごときの者が公のおっしゃる通りになるだけなのです」。天下の人々がいまに至るも鄒湛が峴山にいたことを知っているのは、羊祜が賢者であったからだ。それと同様のことを趙君は期待しているというのだ。

ところが、私は頑なで野卑で自分勝手に、かつ老いてしまって、後に世の人から顧みられるようなことはまずないだろう。自分自身が言ひに足りない者であるのだから、その上に、趙君が名を残すようなことになろうはずがない。しかし、一言も書かないというわけにもいかない。もしこの文章が、数百年の後に、崩れ去った壁や埋もれた井戸から見つかったりしたならば、茫然と嘆息するくらいのことをするよすがとなってくれるのかもしれない。

【補足】〔(1) 上の詩で見た趙庾の家<sup>ちやう ぐ</sup>にいた楊姐<sup>よう しゃ</sup>はもしかすると、丹稜<sup>たんりょう</sup>県知事であったときに家に入れた女性であったのかもしれない。だとすると、蘇軾に会わせようとしたのも不自然ではなかったと理解できるだろう。(2) ここに触れている峴山<sup>けんざん</sup>を蘇軾は実際に登っていて、そこで詩を詠んでいる [→作品番号 01-2-030]。そのときも羊祜が提示した永遠性がテーマになっている。蘇軾はここで、自分と趙庾の関係は羊祜と鄒湛<sup>そうたん</sup>のようにはないと書いているが、実際には、蘇軾のこの文章によって趙庾の名は後世に伝わるようになった〕

## ■ 【05-1-077】 超然台記

【解題】蘇軾<sup>みつ</sup>は密州の住まいの周囲に手を入れ、官舎の北側にもともとあつた見晴らしのよい高い建物を改修した。弟の蘇轍<sup>ちやうぜんたい</sup>がそれを「超然台」と名付け、『超然台の賦<sup>ちやうぜんたい ふ</sup>』を書いて送ってきた。それに応じて蘇軾は『超然台の記』を作った。最初に弟の作品から序文を見ておこう。

## 【訳文】

そ てつ ちょうぜんたい ふ じょ  
蘇軾：『超然台の賦』の叙

兄は余杭〔杭州〕副知事となって、三年間は交替がなかった。弟が濟南〔齊州〕にいたために、兄は都より東方の州知事になることを希望した。かくて高密〔密州〕を得たところ、その地は大河と海の間にあって、その風俗は鄙びて朴訥で、四方からの賓客が訪れることがない。兄が密州知事に任命された歳は、大旱魃の余波を受けて、蝗の駆除に追われ、盜賊を取り締まり、そして飢えた民を救わなければならず、毎日少しの暇もなかった。ほぼ一年を経て後に少しばかり安らぎを得たので、住まいかひどく荒れていて、気持ちを放つことができないのを顧みて、城の上の廢れた台に新たな建物を作ることにした。

日々にそこから同僚と山や川を見る楽しみを私に告げて、

「この台を何と名付けたらよからうか」

と、いった。

そこで、私はこのように答えた。

「山に住む者は山を知り、林に住む者は林を知り、原を耕す者は原を知り、沢に漁をする者は沢を知り、そしてそこに安らぎます。これは楽しむということとはまた別で、かえってこの台には全ての楽しみが具わっています。一方で、天下の士は是非を争う場において奔走し、榮辱の海において浮き沈みし、そこに力を尽して何もかも忘れ、自ら知るところが何もありません。道に達する者は、この二者がともに物に累りあっていて、超然としていないことを哀れむのであります。老子は『榮觀有り」と雖も、燕処して超然たり』[道に達した者は、たとえ立派な建物に内にあっても、外界から超然として穏やかにしている]といっています。そこで、試みに『超然』と名付けてみてはどうでしょうか」

このことを賦をもって告げるものである。……[以下、賦の本文は省略]……

蘇軾：『超然台の記』



物という物には全て観るべきところがある。観るべきところがあるのなら、どの物も楽しむことができる。怪  
 しい物、奇めずしい物、偉りっ大な物、麗きれいな物でなくても楽しむことができるのだ。酒をしばった糟を食らったって、薄  
 い水のような酒を啜すすったって酔うことができるし、木の実を食べたって、野菜を食べたって、それこそ木を  
 齧かり草を噛んだって、腹をいっぱいにするにはできる。このことから類推するに、私はどこに行こうとも楽し  
 めないということないのである。

福を求めて禍を避けようとするのは、福は喜ぶべきであって、禍は悲しむべきであるからだ。人が欲しが  
 ることには窮りがなく、しかし、物が人の欲を満足させるのには限りがある。心の中で美しいか醜みにくいかの  
 弁別をして目の前の物を取るか去るかの選択をするのなら、楽しむべきものは結局のところ少なくなり、  
 悲しむべき物は結局のところ多くなってしまっただろう。これは福を求めて禍を避けるということになっているの  
 ではなからうか。

禍を求めて福を避けるのは、人の普通の情ではないだろう。物の存在こころによって心が蓋おおわれてしまってい  
 るからこのようなことになるのである。物の存在の内側で右往左往して、物の存在の外側に出て  
 自由に遊ぼうとしていないのだ。物にはもともとは大きいとか小さいとかの区別はない。物の存在の内  
 側にあつて物を観るのなら、全て高く大きくない物はない。物が高く大きなところから人を見下ろしてくるの  
 なら、人は常にくららおろおろしていなければならない。譬えれば、狭い隙間から大きな合戦を覗き見  
 るようなもので、勝負がどのようにしているのかなど知りようがないのである。このようなことから、美びやら  
 醜しゅうやらがやたらと生じ、憂いと楽しさがやたらと出てくるのである。大いに哀しむべきではなからうか。

私は錢塘[杭州]から膠西[密州]の知事に移り、舟に身を任せる安楽さを捨てて、車馬に身を揺ら  
 れる労苦を強いられ、彫刻が施された美しい堀に囲まれた家を出て、丸太で作られた家に住まわね  
 ばならなくなり、湖と山の景観に背を向け、桑と麻の野を歩まねばならなくなった。初めてここに来たとき  
 には、穀物の稔らない年が続いていて、たくさんあるものといったら、野に盜賊が満ち、町に裁判沙汰  
 がやたらとあるくらいで、台所はいつもすっからかんで、杞この葉やら菊の花やらを毎日食べなければな  
 らなかった。

こいうことであるから、きっと私は楽しんでいないと人は思ったようだ。ところが、私はここにいること一年と  
 なって、見た目がふつらとし、髪は白から黒へと日に日に戻ってきた。私はこの風俗が淳朴であるの  
 を楽しみ、この人々は私の拙さつたさにも安心して暮らしているのである。

ここにおいて私は、果樹園や畑を整備し、家や庭をすっきりさせようと思い、安邱県あんきゅうや高密県こうみつの木を伐  
 ち、とりあえず壊れたところを修理する計画を立てた。そして、園の北に城壁に寄り添うようにして古い  
 見晴らし台があったのを、屋根を葺き直して新しくすることにした。

折々に人と連れ立ってその見晴らし台に登ってあたりをみ おおい覧ると、意は放たれ、志を肆こころ じゆうになる。南を望め  
 ば、馬耳山ばじざんや常山じょうざんが、出たり沈んだり、見えたり隠れたり、近くにあるようでもあり遠くにあるようでもある。そ  
 この山にはきつと隠れ住む君子くんしがいることだろう。東を望めば、盧山ろざんがあり、秦の時代に盧敖ろごうが遁れた  
 ところである。西を望めば、穆陵関ぼくりょうかんが黒もっりとして城郭のようで、そこには太公望たいこうぼうや齊の桓公せい かんの武  
 威がここにまで及んだ跡がいまも残っている。北を望めば、濰水いすいの流れがあつて、そちらを見て慨然と  
 嘆息するのは、漢の時代に韓信かんしんが偉大な功績がありながら、その終わりをよくなかったことを残念に  
 思うからである。

この台は高いけれども安定し、奥深くにあるけれど明るく、夏は涼しく冬は暖かい。雪が降る朝にも、月  
 のよい夕べにも、私がそこにいることはなく、客人が一緒に行かないことはない。畑の野菜を摘み、  
 池の魚もちあわを取り、秫かもで酒を醸し、玄米を粥かゆにして食べ、皆でいうのは、

「楽しいかな、この遊びあそい」

この時、私の弟はまたま済南さいなんにいて、このことを聞いて賦を作り、この台に「超然」と名付けてくれた。  
 それによって私がどこに行こうとも楽しまないでいることがないのは、物の存在の外へと超然と脱け出て  
 遊ぶからであるということを示そうとしてくれたのである。

【補足】[(1)「物にももとは大きいとか小さいとかの区別はない」と書いているの  
 はそうし荘子の哲学に基づく。物の大小の区別は相対的なものでしかない、だから「実は荘  
 子は論理を飛躍させているのだが」、物には元来大小の区別などではなく全ては等しい

のだとする。(2) 馬耳山<sup>ばじさん</sup>は作品番号 05-1-021 の詩に詠まれていた。その詩の題にあった「北台<sup>ほくだい</sup>」を修理したのが「超然台」なのだろう。(3) 常山は作品番号 05-1-037 など  
で見たように、蘇軾が雨乞いに行った山。廬山は作品番号 05-1-032 にある]

## ■ 【05-1-078】 書子由超然台賦後

【**解題**】蘇轍<sup>そてつ</sup>の書いた『超然台の賦<sup>ちやうぜんたい ふ</sup>』にこの短い文章を添え書きした。

### 【訳文】

弟の文章は、言葉の使い方が精密で意味が正確であることにおいて、私には及ばないところがある。しかし、全体の構成の妙や格調の高さにおいては、私は弟に及ばない。私も弟もそれぞれに及ばない点を乗り越えようと勉めたのだが、天から授かった資質によるので、足りないところからはついに脱け出ることができなかつた。ところが『超然台の賦<sup>ちやうぜんたい ふ</sup>』を見ると、精確かつ高妙で、弟はふたつともほとんど会得したようである。最も貴いというべきである。

【**補足**】[蘇軾<sup>ちやうぜんたい ふ</sup>は弟の『超然台の賦』と自身の『超然台の記』を記して多数の友人に送った。するとかなりの反響を呼び、大勢の友人が蘇軾に詩賦を寄せてきた。それについては後にまた見るが、その中の一人に鮮于侁<sup>せんうしん</sup> [→作品番号 05-1-059] がいて、このころに蘇軾から手紙を書いていて、「密州<sup>みつ</sup>にきてちょうど一年になります。諸般の状況がほぼわかるようになりましたが、凶作のために民は貧しく、力が及ばずどうにもならないことがたくさんあります。ただ、決して恥じることのないように行動して、ただそれだけです」と記している]

## ■ 【05-1-079】 晁君成詩集引

【**解題**】杭州に赴任している間に知り合った晁端友<sup>ちやうたんゆう あびな くんせい</sup> [字は君成] [→作品番号 04-2-

017] が47歳で亡くなり、その息子の晁補之〔→作品番号 04-3-059〕から、父の詩集に序文を寄せてほしいと頼まれて、この文章を書いた。

### 【訳文】

賢けんを称揚した人からは立派ちやうぱな子孫しが出る。漢かんの時代ちやうとうの張湯ちやうとうがその例だ。張湯は苛酷きこくな人であったから、後継者こうけいがいなくてもよいようなものであったけれど、その子こは名臣めいしんとなった。

実質じしつがないのに名声めいせいだけを竊み取ろうとした者からは立派ちやうぱな子孫しは出ない。漢かんの時代ちやうとうの揚雄やうゆうがその例だ。揚雄は優れた文化人ぶんわにんであったから、後継者こうけいがいなくてもよいようなものであったけれど、その子孫しにこれといった者ものは出なかった。

このことから、賢けんを称揚した者ものには立派ちやうぱな後継者こうけいがあるけれど、賢けんを蔽おほい隠すようなことをした者ものには立派ちやうぱな後継者こうけいがないと私は知った。そして、その実質じしつがなくて名声めいせいを竊むような者ものには立派ちやうぱな後継者こうけいがなく、その実質じしつがあっても名声めいせいを求めようとしない者ものには立派ちやうぱな後継者こうけいがあると私は知った。

賢けんとは、それによって民たみが生いきるもとななるものだ。賢けんを蔽おほい隠すとは、すなわち民たみを絶つことである。

名声めいせいとは、古も今も最も尊うやぶるところで、富貴ふきよりも重いものだ。これを竊み取るとはすなわち天あまを欺あざむくことである。

民たみを絶ち天あまを欺あざむけば、その後継者こうけいがいなくて当然たうぜんである。一方で、賢けんを称揚する者ものと、実質じしつがあっても名声めいせいを求めない人ひとには立派ちやうぱな後継者こうけいがいる。私は常にそのように言ってきた。

私は杭州しんじやうに赴任ちやうしたところ、新城あざなの晁く君せい令いみな、字たんゆうは君成きんせい、諱いみなは端友たんゆうは、君子きんしであった。私は三年間さんねんかん晁君しやうきんとお付き合いし、その君子きんしたることを知った。しかし、晁君しやうきんが文章ぶんしょうをよく書き、詩しをよく詠よむということは知らずにいた。晁君しやうきんはそのようなことは一言も言いわなかったからだ。

その後、晁君しやうきんは都みやこで亡なくなり、その子この晁補之しやうほしが晁君しやうきん令いみなの詩し三百六十篇さんぱくろくじゅうしちほくを私わたしに見せてくれた。これを読んで私は驚おどろいた。

詩しというものは、その指さし示しすところは微妙めいぼうではあるけれど、その美う悪ああるいは高下こうげは、言葉ことばによって表あらわ

現されているので、はっきりと見てとることができる。人が賢であるのか不肖であるのか、深く遠くほうまい茫昧として知り難いことでは、詩よりもずっとはなはたしい。

私が、晁君がよく詩を詠んだことを知らないままでは、果たして晁君が君子であることを十分に知り尽くすことができたであろうか。晁君は科挙の進士科に合格して官員となり、行く先々で民に安寧をもたらすことを楽しみとし、民は晁君が任期を終えて去ってしまうことを恐れた。そして、晁君は自分のしていることを顕彰してほしいと、一言も求めたりしなかった。官員として仕えること二十三年、次の新たな官職を得ようとしているときに亡くなった。そのようなことから、晁君が君子であることを十分に知り尽くしていなかったのは私だけではなく、世の人々も皆そうであったのだ。

晁君の詩は清く厚く静かで深く、その人となりそのままである。しかもどの詩にも新たな情趣の発見があり、際立った語句の使い方がある。それは人が皆愛すべきものであって、晁君が秘匿しておかずにいたならば、勢いとして人が必ず知るべきものであったのだ。

その子の晁補之は、文を書いてよくないところはなく、語彙が豊富で内容も優れ、人々の遙か上を行き、必ず世に頭れないことはないであろう。つまり、晁君父子を見れば、実質があつて名声を求めることがない者には必ず立派な後継者があるということが、ますますはっきりとわかるのである。

昔、漢の時代にりこうしよく李固は蜀の地方の町役人であった。皇帝は二人の使者を派遣し、平民の衣服で蜀に入らせた。二人は李固の家に泊まった。李固は星を見て、二人が皇帝の使者であることを知った。その後、使者の一人はその地方の太守となったけれど、李固はやはり町役人のままだった。世間の人々は李固のことを特に知らずにいたのである。李固が実は博学で徳を己の内に隠していたことは、その子のりこ李固に及んであらわ顕れ出て、李固は漢朝の大官となった。

『詩経』にしきやう「徳の和らげる先祖の霊は、子孫の心を安らかにし、子孫に恵福を与える」とあるのは、まさにこのことを言うのであろう。

【補足】〔(1) 歴史上のよろしくない人物としてここでもかんだい漢代の揚雄が引かれている。揚雄は文章に優れ、学者としても一流で、高く評価されることが多いのだが、なぜか

蘇軾のみならず宋代の人々の間では、上辺の言葉だけが立派で実質を伴わないということで、評判が芳しくない。(2) ここで蘇軾は「賢を称揚する者と、実質があっても名声を求めない人には立派な後継者がいる」と力説しているのは、にわかには納得し難いものがある。しかし、蘇軾は確信をもってこの説を後に再び展開する。なおここにいう「賢」は、知的に優れてかしこいだけでなく、道徳的に優れてかしこい行動をするということも意味し、かしこいという状態をいうだけでなく、かしこい行為とそれを行う主体も含めた広い意味がある。同様に、仁や義や節や孝といった語も、必ず実践を伴って初めて意味を為すものである。なお、いわゆる「ずるがしこい」は「賢」のなかには含まれない]

## ■【05-1-080】与王慶源

【解題】王淮奇 [字は慶源] に宛てた手紙。王淮奇は郷里の人で、妻の王閏之と同族である [→作品番号 03-1-009]。

### 【訳文】

高密[密州]の風土として、食べ物はややよろしいのですが、経費削減のために、儉約に努め、何もないうらいに寂しいあります。こちらに来て、飢饉の歳に遇い、人々は荒々しいため盗みや強奪のない日がないほどで、悪者を捕らえるべく督促して、数十人を捕まえたところ、ようやく静かになり、訴える者も少なくなりました。住まいや庭に少しを手入れ、そこにいて楽しめるようになりました。また、ときに高いところに登って西南を遠く望むと、その日はずっと気が沈んでしまいます。近頃は酒がやや飲めるようになり、一日に盃で十五杯に及ぶこともあります、いつかまたお供をして、かの橋を渡り、道で歌いつつ、酔い倒れたいものです。

【補足】[(1) 西南を望むと気が沈むのは、故郷に長く帰っていないことを思い出すか

らである。(2) ここでも盗賊について触れているのが、民衆が恐れていたのは盗賊だけではなくではなかった。盗賊を討伐する兵士のモラルが低く、民衆に迷惑をかけることでは盗賊と変わりがないということもあった。弟が書いた墓誌銘から、関連する部分を読んでおこう。なお、この問題について、蘇軾はかつて制科の試験の答案の中で議論していた [→作品番号 02-1-009]

### 【訳文】

そ てつ ぼうけい し せんたんめい ぼ し めい  
蘇轍:『亡兄子瞻端明墓誌銘』

みつ密州に盗賊が現れ、ひそかに逃れてまだ捕まえることができなかった。あん ぶ てんうん し安撫転運司はそのことを憂い、一人の役人に猛々しい兵卒数千人を指揮させて密州に向かわせ、それを捕まえようとした。ところが兵卒たちは乱暴をまじいまゝに行き、勝手に民衆をあらぬ罪で捕らえたり物を奪ったり、ついには争って人を殺すに至った。そのことでお上から罰せられることを畏れ、ついには逃亡して反乱を起しそごになった。民がそのことを公こう[蘇軾]に訴えた。公はその書を見ることもなく投げ捨て、「必ずそこまで至るまい」といった。逃亡した兵卒はそのことを聞いて、少し安堵し、それから使者を出して、帰順するよう招くと、兵卒は出てきて公の命令にしたがった。公はその首謀者を死刑にした。

## ■ 【05-1-081】 塩官大悲閣記

【解題】蘇軾は杭州こうにいたときに塩官えんかん県の安国寺あんこくじを訪れていた [→作品番号 04-1-065]。そこの禅僧きよそく だいひかくの居則が大悲閣を建て、それを記念する文章を蘇軾に依頼したので、これを書いた。

### 【訳文】

ふた「羊や豕はうまいものである」「酸しゅうっぱい、苦い、辛い、鹹しんい、甘いまろの五味を調和させる」「秫稻しやくで酒を

つくるには曲まが薬くすりを用いる」。これらのことは天下のどこであっても同じである。材料が同じで、水や火の作用が同じで、寒暖や乾燥、湿潤の気候条件が同じであっても、二人の者が腕をふるったときに、出来のよしあしが等しいとは限らない。

よい出来の人はどこか違うのか。数多く実践するかしないかによるのではないだろうか。古の優れた技の持ち主は数を惜しむようなことはなかった。よくする者は数を経て妙所を得るのだが、よくない者は数をおろそかにして概略だけを得る。要するに数が大切であって、それをよくするかしないかで、出来のよしあしが現れるのだ。人は結果だけを見て、よい方を求めて背後にあった数は見ないし、そこに至った過程を棄てて結果の妙所だけを追いかける。そして「私は酒食のよしあしを知った」というのである。よしあしを分けるのが何であるかをいい加減にし、数を経ることを捨て、大切なのはそこにはないとして、己の思いで造る。世間には数を経る過程を大切にする人は少ない。

いまの学問をする者の病も同じだ。天文・地理・音楽・律暦・宮廟・服器・冠婚・喪紀そうきの法則、史書の『春秋』が記録したかできなかったかの意味、礼がよしとするもの、刑が禁じるもの、歴代の興廃、人の賢・不肖、これらは学ぶ者が力を尽さなければならないものである。ところがいまの学問をする者はこのようにい、「これらは皆学ぶに足りないものだ。書物に載せることができずに、口でのみ伝えられるものを学ぶべきである」

孔子の弟子の子夏し かはこういった。「まだ身につけていないところを日ごとに知り、身につけてできるようになったところを月ごとに忘れないようにする。このようにすれば学ぶことを好むといえるであろう」。古の学ぶ者は、まだ得ていないところとすでにできるようになったことを一つ二つときちんと数えて、日ごと月ごとに見直したのである。今の世の学ぶ者は、果たして何を得ているのか、何ができているのか。

孔子はこういった。「私はかつて昼間は食わず、夜は眠らず、ずっと考え続けた。そして、それは無益であると知った。考えるのは学ぶのには及ばないのだ」。このことから見るに、学ばずに考えるのは孔子の禁じたことであるのだが、いまの世の人はそれがよしとしている。

学問をする者だけでなく、仏の道に仕える者も同じである。齋戒して規律を守り、経典を講誦し、塔廟を



崇めて飾る。これは仏教者が日夜人に教えていることである。しかし、中にはこういう者がある。齋戒して規律を守るよりも無心が大切、経典を講誦するよりも無言が大切、塔廟を崇めて飾るよりも無為が大切だと。そして、無心、無言、無為だといって、その実は飽食して楽に暮らしているのである。これは大いに仏を欺く者ではなからうか。

杭州の塩官県の安国寺の僧の居則は九歳で出家し、十年後に重い病でほとんど死にそうになった。

居則は、戒律を一生守り、千手千眼の観世音像を造り、その名を千万遍唱えると誓った。病は脱したものの力はなく、かろうじて生きること三十余年、ほんのわずかずつ積み上げていって、ついに成就するところとなった。観世音像の高さは九仞、それを容れるのは四重の大屋である。

そして私はこのことについて文章を書くように求められた。かつて私は杭州の人々にここに記したようなことを話したことがあった。しかし、納得して実践しようとした者はわずかであった。居則が勤苦して従事してなしとげるところがあり、志を篤けて節を守り、老いて衰えず、仏を欺く者と大いに異なるのを私は喜ばしく思う。よってこのことを記して、我が密州の人々に知っていただくことと思うのである。

【補足】[この文章には「数」という語が何度となく使われている。大森信徳『書如其人（書は人なり）』蘇軾の書論に関する一考察——文章論・絵画論を視野に入れて』（2015年）にこの文章の一部が引用されていて、『数（度）』は『法度（きまり、規範）』と同義と捉えてよいだろう』と記されている。きっとその通りで、前半はそれに従って理解することができる。しかし、後半とどのようにつながるのか、私にはよい知恵がなく、それでこの訳文では、「数」は「数多くこなす」という珍解釈によってまとめた]

## ■【05-1-082】梟繹先生詩集叙

【解題】梟繹先生こと顔太初の詩集の序文。梟繹先生がどのような人であるからは本文中に記されている。

## 【訳文】

孔子はいった。

「昔の人々は、歴史を記録するに当たって、明らかでないところは欠文のままにした。新しい馬を得たときには、人に貸して乗り馴らしてもらった。いまはこうした慎重さが失われてしまった」

欠文や馬を貸すことは、世の中の損益に特に影響することではない。それでも孔子がこのようにいったのは、世の人が手本とすべきかつての君子や長者が年々遠い存在となって、その人たちの立ち振る舞いを若い人たちがもう見なくなると、日に日に小賢しくて口先だけへと流れてしまって留まることがないと考えていたからだ。先の二つのことは世の中の損益に特に影響しなくても、君子や長者の余沢が後世に及ぶか及ばないかが必ず世の損益につながると孔子は考えていたのだ。

私の父はかつて都しだいふに行き行って士大夫と交わり、帰ってくると私にこのようにいった。

「今のままでゆくと、文章は日に日に巧みになるだろうが、本当に大切なことは失われてしまうだろう。人々は遠大なことを好み、身近なことをおろそかにしている。華やかさを貴んで、実直であることを賤いやんでいる。私は都きやうでこうした兆を見たのだ」

そして、魯の人の覺ふえき繹先生の詩文十余篇を私に示し、

「このことを覚えておけ。これから数十年の間に、天下にこのような詩文はもはや存在しなくなるであろう」覺繹先生の詩文はどれも実践を踏まえて作られたもので、見かけは精悍ではなはだごつごつとしていて、世の中の過ちを言い当てないことはなく、五穀がきつと飢えを癒すのと同じように明瞭で、薬が病を伐るのと同じきつぱりとした物言いである。高く遊離したところで議論をもてあそんだり、半端な言葉で美しく見せたりするようなことは、覺繹先生には一切ない。

それから二十余年が経ち、我が父は亡くなったけれど、そのいったことは的申した。人々が文を作るとき、現実に存在するものから超然と抜け出て、明瞭でない言葉で高邁なことを論じようと、そのようなことばかりしている。漢や唐の文章などは野暮であるとし、正しい議論を軽んじ、やたらと難癖をつけてま

わっている。覺釋先生の文を貴ぶようなことはない。

私は先の孔子の言葉と同じような意味で、このことを悲しむのである。父の遺訓を思っ、私はますます先生の文を求め、先生の子の顔復がんふくからこの詩集を得たので、このことを記録して我が蔵書とする。覺釋先生の諱は太初、字は醇之、姓は顔氏である。孔子の弟子の顔淵がんえんの四十七世の孫であるという。

【補足】[父の蘇洵そじゆんが覺釋かくしやく先生の詩文を蘇軾そくに示したのは、蘇洵が科挙に落第して帰郷したときだったのだろう。蘇洵は空疎な美文がもてはやされる風潮に絶望して故郷で独り研鑽けんざんに励んだ。顔太初がんたいしよの子の顔復がんふくは蘇軾そくより 2 歳年長で、王安石おうあんせきの科挙の改革に反対して都を出ていた。これより少し後に蘇軾は顔復と直接会う]

## ■ 【05-1-083】 書李憲臣蔵墨

【解題】 上の文章に関連する短文を見ておこう。

### 【訳文】

私が覺釋かくしやく先生の詩集の序文を作ると、先生の子の顔復がんふく君が遠くから李廷珪りていけいの墨を譲ってくれた。形も質も絶類で、金で竜と銘が描かれ、「李憲臣りけんしんが所蔵するところの皇帝からの賜り物」とある。この墨は長い年月が経っても実に黒々として、李廷珪が作った真の墨であろう。

【補足】 [(1) 五代十国時代の南唐国なんとうこくの職人であった李廷珪りていけいが作った墨は、中国史上で最高のもといわれるほどの絶品であった。顔復がんふくは父の詩集の序文を書いてもらった謝礼として、秘蔵のその墨を贈ったのである。 (2) 銘にある李憲臣りけんしんは不明]

■ 【05-1-084】 立春日、病中邀安国、仍請率禹功同来。僕雖不能飲、当請成伯主会、某当杖策倚几於其間、觀諸公醉笑、以撥滯悶也。二首

【解題】長い詩の題の大意は次の通り。「今年は十二月のうちに立春となった。体調不良でくさくさするので、文勛〔字は安国〕を呼んで、喬紋〔字は禹功〕を連れてきてほしいと頼んだ。さらに趙庚〔字は成伯〕も呼んで、その三人で酒宴を開かせ、自分は飲めないながらも人々が酔って談笑するのを見て楽しんだ」。文勛は公務を帯びてこのとき密州にきていた。喬紋は作品番号 05-1-020 からたびたび登場していて、趙庚は作品番号 05-1-074 で見ている。

## 【訳文】

### 其の一

ぼつんと一つの燈火が私を照らす。

夜はまだまだ長い。

花の枝を手にしても、見るのは気おくれがする。

まして、簪かんざしの代わりに花を挿すのは、この白髪では恥じらいに耐えない。

立春の日に盤に盛る御馳走も、病にある私には、野菜の粥だけでよい。

この地では、春になると、犬の肉を煮て宗廟に供え、

畦道に牛の形の土の像を競って並べて今年の豊凶を占う。

昔の人はこのようにいった――

「老人だって遊びたかったりするものだ」

というわけで、私だけが部屋の隅の方を向いていたら、

一堂の者だって飲びかないのではないかな。

### 其の二

寒食かんじよくの前の日々を病に伏せて書齋で過ごしている。

去年の春は潔斎を続けていたので、  
名花に背くことすてに一年である。

知事殿[自分のこと]は無理にても喜ばなければ、  
早春の風物もあてやかになってきた甲斐がないであろう。  
青い上着の貴公子が家から千里の地をさまよい、  
白髪の先生が杖に先に百錢だけをぶらさげて放浪する、  
そのような知事殿と諸君等であるのだから、  
皆で集まって酒宴を開かずいてよいはずはないのだ。

【補足】[ちなみに、暦の関係で 12 月のうちに立春がきてしまうことの不思議を詠ん  
だ在原元方ありわらもとかたの「年の内に春はきにけりひととせを去年とやいはん今年とやいはん」を  
巻頭に置く『古今和歌集』の撰進の勅命が下ったのは蘇軾こぞのこの詩の 170 年前のこと  
である]

## 第5章 嵐の訪れ——密州、徐州、湖州

[第5章その二]

熙寧<sup>きねい</sup>9年 [1076年]、蘇軾41歳。

### ■ 【05-2-001】 一叢花

【解題】「春の初めに病より起きる」との添え書きがある詞。最初に前の年のうちに立春があったことを歌っていることから、この年の作であろうと推測されている。

#### 【訳文】

今年春浅臘侵年。[今年の春が浅く始まったのはまだ十二月のうち]

冰雪破春妍。[でも、氷や雪に破られてしまった春の妍<sup>あてやか</sup>さ]

東風有信無人見、[それでも、春の風は人には見えなくてもまことのある信<sup>たより</sup>]

露微意、[かすかな意<sup>こころ</sup>は露にも]

柳際花辺。[柳の際<sup>きわ</sup>にも花の辺に見えます]

寒夜縦長、[なおなお長く寒い夜]

孤衾易暖、[でも、暖まりやすくなった夜具]

鐘鼓漸清円。[鐘の音は少しずつまろやかになってきています]

朝来初日半含山。[朝がきて、まだ半ばは山に含まれている太陽]

楼閣淡疏煙。[楼閣がまどう淡くまばらな霧]

遊人便作尋芳計、[人がいまでも作るうとするのは芳<sup>よ</sup>きところを尋ねる計画]

小桃杏、[小さな桃や杏子]

応已争先。[きつとすてに先を争っているでしょう]

衰病少情、[ても、病に疲れてさえない情]

疏慵自放、[面倒臭いとやけっぱち]

惟愛日高眠。[つまりは日の高くなるまで眠っているのを愛するのです]

【補足】[冬と春の境目、病気と健康の境目、それらの間を行き来している己のもやもやを歌っているのだろう]

## ■ 【05-2-002】 刻秦篆記

【解題】先の詩にあった文勛 [字は安国] [→作品番号 05-1-084] は篆書をよくした。それについての小文。篆書とは漢字の書体の一つで、秦の始皇帝が天下を統一したときに、漢字もまた全土で通用するように制定した標準の書体。現在でも印鑑に使われているのを見ることがある。

### 【訳文】

秦の始皇帝の二十六年、秦は初めて天下を統一した。二十八年、始皇帝は東の海のほとりにまで巡行し、琅琊台に登って海から日が出るのを見た。楽しさに帰るのを忘れ、付き従う者三万人がその台の下に家を建て、秦の徳を称える頌詩を石に刻んだ。秦の二世皇帝の元年、皇帝の詔書をその傍らに刻んだ。

いま頌詩は亡び、始皇帝に従った大臣で名が知れるのはわずかで、二世皇帝の詔書だけが残っている。始皇帝の二十八年は壬午の歳、いま熙寧九年は丙辰の歳であるから、千二百九十五年の隔たりがある。

蜀の人蘇軾は密州に来て、この詔書を写した古い紙を民間に得た。いまそれを見るに、なおも完全な姿をしているのは、存在しているべきものは磨滅する日がないということなのだろうか。

ろ ころ ぶんくん  
 盧江の文勛がたまたま職務を帯びて密州いにしほに来た。文勛は古を好み、篆書てんしよをよき、篆書の祖とされる秦りしの李斯の筆の運び方を会得している。文勛は秦の篆書を模して二世皇帝の詔書を石に刻んだので、それを私は超然台ちやうぜんたいに置いた。

秦は無道で、国家の事業を成就させるために民衆の命を絶つようなことをした。しかし、その時代に文字が巧みであったのは、ほかの時代の及ぶところではなく、それは消えてなくなってよしいものではない。後世の君子はそうしたことをこの超然台の石に見るべきであろう。

正月七日こうし甲子に記す。

【補足】[秦の始皇帝しん しこうていはいわゆる「焚書坑儒はんしよこうじゆ」を行うなど、儒学の伝統からすると最悪の暴君であり、秦の統一の基礎を作った李斯りしもはなはだ評判は芳しくない。しかし、秦が立派な書体を残したことは高く評価しなければならない。そうした矛盾をこの文章は提起しているのだらう]

## ■ 【05-2-003】 満江紅

【解題】ぶんくん あざな あんこく 文勛 [字は安国] は1月13日に都へと帰り、これはそのときの送別の詞。

### 【訳文】

天豈無情、[天はもしかして無情]

天也解、[いえ、天もわかっていて]

多情留客。[行く人を留めようとするあつこころい情があるのです]

春向暖、[暖かくなろうとしている春]

朝来底事、[でも、この朝はどいこと]

尚飄輕雪。[また風に舞い降る雪]

君遇時来紆組綬、[時節ときに遇って朝廷に並ぶ貴君]



我応老去尋泉石。[老いて山や泉を尋ねる私]

恐異時杯酒忽相思、[このさき酒を飲んでふと互いに想うことがあっても]

雲山隔。[私達は雲と山に隔てられてしまっているのです]

浮世事、[浮世のことは]

俱難必。[きっとこうなるようにはなってくれません]

人縦健、[人はたとえ健康でも]

頭応白。[白くなってしまふ頭]

何辞更一醉、[断らないで、もう一杯を]

此歡難覓。[これからは求められないこの歡びですもの]

不用向佳人訴離恨、[佳き人には訴えてはいけません、別れの恨みなどは]

淚珠先已凝双睫。[だって、二つの目に涙がついているのですから]

但莫遣、[そうなつてはならないのは]

新燕卻來時、[燕は帰ってきましたけれど]

音書絶。[手紙が途絶えてしまいましたと]

【補足】[文勛ぶんくんに向けて詠んだ詞がもう一首残っているが訳は割愛する]

## ■【05-2-004】跋赤溪山主頌

【解題】赤溪山せきけいざんの主人しゆうじんが作った頌歌しょうかに書き添えた跋文。赤溪山せきけいざんの主人しゆうじんとは趙棠ちようどうのことで、趙棠しよじようは諸城県知事の趙昶ちようちよう [→作品番号 05-1-070] の父である。

### 【訳文】

道みちに達した者が、達していない者と語るのは、譬えるならば、我等が舌のない人と語って、味について

説くのと似ているだろうか。

舌のない人から、「蜜とはどのようなものか」と問われたなら、我等は「蜜とは甘いものだ」ときつといたくなるだろう。「甘いとはどういうことか」とさらに問われたなら、我等はそれを説くことができるだろうか。我等は蜜の sweetness を知っているけれど、舌のない人は sweetness を一生曉ることができない。

曉りようがないということでは、道に達していない者の問いに応じて、道に達した者が説くのも同様であるのだろう。東を問えば道に達した者は西を説き、あるいは空を指し、地に書き、それは道に達していない者からすると、心が疾んだ人の語りか、寝言であるかのように聞こえてしまう。それでも聴く者はわからないというのを恥じて、説くのに従って得心したようなふりをし、さらには他の人を欺いたりもする。

昔、張魯は病を治すと称して病人から五斗の米を受けた。病の治療を受けた者は「まだ治らない」とはいえなかった。もしもそのようにいったなら、もはや一生治らないとされていたからである。それで当時の人々は張魯が神であるとした。それが真であるかどうかを疑うことがそもそもできなかったのである。このような類のことはよくある。

私は赤溪山主の頌歌十一篇をその子の趙昶から得た。それを読んで、私には上に述べたどちらに相当するのかわからなかった。そこで、楽全先生[張安道]に尋ねたところ、赤溪山主は道に達した者であることに疑いはないとわかった。それでその書の末にこれを記すものである。

熙寧九年正月望日

【補足】〔(1) この短文はなかなか巧みである。神仙の道について説く書物は、我等凡人には何をいっているのかさっぱりわからない。それがでたらめであるのか本物であるのか見分けることができないようなものである。蘇軾は、真偽を見分けることのできる楽全先生こと張安道 [→作品番号 05-1-052] に尋ねて、確かであるとの保証を得たのである。現代の我々からするとその保証も疑わしいのだが。〕(2) 張魯はいわゆる五斗米道の始祖であるとされる張道陵の孫。ただし、張道陵は架空の人物とされて

いる。五斗米道は政治的にも非常に強い力を持った教団であったが、蘇軾はいかさまな教説を振りかざしたとして厳しく批判している [→作品番号 01-1-010]。

## ■【05-2-005】 答李邦直

【解題】李清臣<sup>りせいしん あざな ほうちよく</sup> [字は邦直] の詩に答えた。李清臣は蘇軾よりも4歳年長で、科擧にもやはり4年早く合格している官界の先輩で、その逸話を作品番号 05-1-004 で見ている。李清臣は都から職務を帯びて密州<sup>みつ</sup>にきて、蘇軾と若干の交流があった。この詩は李清臣が密州を去ってからのものである。

### 【訳文】

すてきな人は春風に似ていようか。

春風が吹いてきたばかりのとき、物はなかなかそれに気づかない。

旅の憂いは氷雪に似ていようか。

春風に会えばすぐに融けて流れてしまう。

遠くから春風がやってくると、町の人たちはみなうきうきし始める。

私は病をおしてその様子を見に出ると、

春風は、私が何とも衰えてしまったことに驚いた。

春風は、私が久しくもの憂けているのを知って、

新しい詩を作って私の心を元気にしようとしてくれた。

詩は旨い酒のように全身に薫りを溢れさせ、

詩であるからいくら飲んでも酔うことはないはずなのだが、

和そうとしたところ、心も体もすていことろんとしてしまった。

とにかく懐い<sup>おき</sup>を放とうと、言葉を選ばずに詩を和すと、

春風は手をたたいて笑い、あげくには顎をはずしてしまった。

春風を西の部屋に案内すると、

しばらくえびす蜜の民が作った帳を揺らしていたけれど、

夜になると風雨が激しくなって、どこかに行ってしまった。

春風と別れてから、物はどれも春の姿を見せるようになり、

柳は日に日に暗い蔭をつっている。

貴君が今度またきてくれるのはいつなのか。

そちらは楽しかろうが、

私はいま遊びに出歩くことができないので、

ここのへんでこ知事はどうあっても憂いをとくことができないでいる。

貴君には素敵な奥方がおられ、家門は繁栄を謳歌していると聞く。

ならば、財布をさかさまこして芸妓を揃えて演奏を習わせ、

私のこの詩を歌わせるようにしたらよろしかろう。

【補足】 [(1) この詩は、春風りせいしんと李清臣と李清臣の詩の三者を渾然一体として詠んでいる。残念ながら、この訳文はそれを十分に生かしていない。「西の部屋」とあるのは作品番号 05-1-042 で見た「西齋せいさい」のことで、李清臣をそこに案内したのだろう。(2) 「素敵な奥方」とは韓琦かんきの姪で、もしも作品番号 05-1-004 で見たエピソードが事実であったなら、このときすでにその妻は、夫が孫洙そんしゅの娘に惚れてしまったことを知っていたことになる。(3) 李清臣を見送ったときに詠んだと推測される詞もあるが、訳は割愛する]

## ■ 【05-2-006】望江南

【解題】「超然台ちょうぜんたいでの作」と添え書きのある詞。『望江南』は、もとを遡れば、長江ちょうこう

より南の地への想いを歌った唐代とうだいの曲。原曲はずっと短く、これは長いバージョン。  
詞はほとんどの場合に題名と内容は関係しないのだが、『望江南』はその名が主題と  
なっていることがよくある。蘇軾はこの作品で江南への想いを直接的に歌っているわ  
けではないが、杭州こうの春への憧憬が底にあるとみても間違いではないだろう。

## 【訳文】

### 其の一

春未老、[いまなお盛りの春]

風細柳斜斜。[細やかな風、斜めに揺れる柳]

試上超然台上看、[ふらりと超然台ちようぜんたいに上って見る]

半壕春水一城花。[壕ほりの半ばは春の水、町は一面の花]

煙雨暗千家。[煙る雨に千の家が暗くさざれています]

寒食後、[寒食かんしょくの後]

酒醒却咨嗟。[酒が醒め、ふっと溜め息]

休对故人思故園、[思うのはやめましよう、懐かしい人、故郷の園]

且将新火試新茶。[さあさあ火をつけ、煎れるとしましよう新たな茶]

詩酒趁年華。[詩と酒でもって追い付きましよう、一年の最も華やかな時に]

【補足】[「寒食かんしょく」は清明節せいめいせつの前に、火を使わずに冷たい食事をとる行事。「寒食」が  
終わって最初につける火を「新火しんか」という。清明節は春分から15日目ですでに晩春に  
入るので、うっかりすると季節に置いて行かれてしまう焦燥感を最後に歌っているの  
だろう。なおこの年の清明節は2月29日であったという]

## 其の二

春已老、[すでに盛りを過ぎた春]

春服幾時成。[もうできていてよいはずの春の晴れ着]

曲水浪低蕉葉穩、[曲水の宴の流れは緩やかに、静かに浮かぶ盃]

舞雩風軟紵羅輕。[風は軟らかく、雨乞いの踊りに、軽やかに翻る衣]

酣詠楽升平。[酔って歌って泰平を楽しみましょう]

微雨過、[細やかに過ぎゆく雨]

何処不催耕。[どこでも忙しく野良仕事]

百舌無言桃李尽、[百舌は鳴き終わり、花が終わった桃と李]

柘林深处鶉鳩鳴。[柘の林の奥深くで鳴く鶉鳩]

春色属蕪菁。[春の色はいまは蕪菁のものになっています]

【補足】[曲水の宴は3月3日に行われる行事]

## ■ 【05-2-007】 満江紅

【解題】密州の高密県にある流杯亭で詠んだ詞。詞の内容から推測するに、新たに作られた堤の視察に出たところ、ちょうど3月3日の節句に当たったので、川べりの亭で酒宴を催してこの詞を詠んだのだろう。

### 【訳文】

東武城南、[東武[高密県]の町の南]

新隄固、[新しく作られた堤は堅固で]

蓮漪初溢。[さざ波とともに初めての水が溢れています]

隠隠遍、[水はさらさらとあたりに満ち]

長林高阜、[長く続く林や高い丘には]

臥紅堆碧。[紅が臥し、碧が積まれています]

枝上残花吹尽也、[枝に残っていた花が吹き尽されてどこかに行ってしまったのを]

与君更向江頭覓。[皆さんとともに川のほとりで探し求めるとしましよ]

問向前、[さあ尋ねます]

猶有幾多春、[春はまだどれくらいあるのですか、と]

三之一。[あとは三分の一だけ……]

官裏事、[官の仕事は]

何時畢。[いつ終わるのやら]

風雨外、[雨や風のない日は]

無多日。[多くはないのです]

相将泛曲水、[さあ、曲がくねった水に舟を浮かべようではありませんか]

滿城争出。[町からどっと出て行くではありませんか]

君不見蘭亭修禊事、[皆さんもご存知でしょう、かの蘭亭<sup>らんてい</sup>での宴<sup>うたげ</sup>のこと]

当時座上皆豪逸。[あの場に集まったのは立派な方々ばかりでした]

到如今、[いまに至っても]

修竹滿山陰、[かの山には青い竹が同じようにあるのでしょけれど]

空陳跡。[空しく昔を語るだけなのです]

【補足】[「蘭亭<sup>らんてい</sup>の宴<sup>うたげ</sup>」とは、王羲之<sup>おうぎし</sup>が書いた『蘭亭集<sup>らんていしゅう</sup>の序<sup>じょ</sup>』で名高い永和九年 [353年] 三月三日に行われた曲水<sup>きよくすい</sup>の宴のこと。理想像とされたその宴にも負けない楽しさを流杯亭<sup>りゅうはいてい</sup>で我等も持とうではないかと人々に呼びかけたのである]

## ■ 【05-2-008】 和文与可洋川園池三十首

【解題】親友の文同〔字は与可〕〔→作品番号 04-1-011 など〕はこのころは洋州知事の任にあり、遠く離れていても、『超然台の賦』に和したり、ここに見るように洋川の風光を歌った三十首の詩を唱和したりするなど親密な交流が続いていた。洋川は洋州を流れる川で、その周辺の風光を文同は三十首の詩に詠み、それに蘇軾が和したのである。この連作は、唐の時代に王維と友人の裴迪がおのおの二十首を詠み合った『網川集』をかなり意識しているようだ。『網川集』は、王維の広大な別荘である網川荘にあった20のビューポイントを詠んだもの。宋代の一知事である文同がそれに匹敵するような庭園を構えるのはむろん不可能で、平凡な田舎の風光の奥に、手の込んだ庭園の美にも劣らぬものを見出して詩にしたということなのだろう。なお、詩を和すとは、必ずしも同じ韻を用いなくてもよいので、この連作はそのようになっている。

## 其の一 湖橋

夕暮れ時、

橋の朱い欄干と画を施した梁に湖水が照り映える。

その上を、白い衣に黒い帽子の古めかしい姿の君が行く。

橋の下には、無数の魚やら亀やらが集まってくる。

君が杖を鳴らし、履を引きずりがちに橋を過ぎる音をちゃんと知っているのだ。

【補足】〔連作のオープニングで、湖橋より洋川を巡り始めるのである〕

## 其の二 横湖

横湖に蓮の花が開くとき、



翠の蓋みどり ふたによって守られているその紅い粧あか よそおいを貪り見る。

夜が迫り、霜が降るのも気付かずに……。

横湖から蓮の花が消えるとき、

天が錦の織物を巻き取ってしまったかのよう、

秋の光が注ぐ水面はまっさらな絹となる。

【補足】〔(1) 横湖おうこは洋州ようしゅうの町の西にある細長い湖で、そこに架かる橋が第一首で見  
た湖橋こきょうである。(2) 続く第三首は文同ぶんどうの書斎である書軒しよけんを詠んでいて、書物に関連す  
る語を組み合わせた技巧的な作品で、我々にとっては面白味がないので訳は割愛する〕

#### 其の四 氷池ひょうち

詩人[文同ぶんどう]は氷や雪も嫌わずに池を繞って見続けている。

寒さに耐える一番の工夫は詩を詠むことにあるようだ。

そういえば、王羲之おうぎしは池に臨んで書の稽古に励み、

硯を繰り返し洗ったために、

池の青い水に下に黒い竜が蟠まるまでになったという。

とすると、この池には何が潜むのだろうか。

【補足】〔文同ぶんどうのもの詩は凍り付いた池を主題として、鳥が寒さを恐れることなく  
池のほとりで宿をとると詠んでいる。それに対して、寒さを嫌わないのは文同自身  
の方ではないかと戯れたのである〕

#### 其の五 竹塢ちくお

晩年に至って孤高を保つ人は、

歳としの終わりの寒さの中で、

竹とだけ楽しみをともにする。

かつて名高い詩人がいたけれど、

その詩才は実は粗雑で笑うべきものだった。

竹の林を、十万の軍勢が剣を立てて並ぶありさまに譬えたのだから。

【補足】〔詩題の「竹塙」は竹の生えた土手。原詩では文同ぶんどうのことを「晩節先生」と言い表している。文同は何度も触れているように、竹を友とし、ひたすら竹の画を描いた。ここで粗雑な詩人と評されたのは杜牧とぼくで、その詩に「竹林外裏兮十万丈夫、甲刃縱縱密陣而環侍」〔竹林は十万の兵士が刀を立てて陣を組んでいるようだ〕という句がある〕

#### 其の六 荻浦てきほ

荻は秋に耐えられず、

雨に折れ、霜に乾き、

白い花も黄色い葉も消えてしまうのを人は愁う。

月明かりのもと、小さな舟で湖辺に漕ぎ出す――

詩人はここを江南の鸚鵡洲こうなん おうむしゅうだと見ているのである。

【補足】〔鸚鵡洲は、黄鶴楼こうかくろう〔→作品番号 04-1-045〕を詠んだ唐代の崔顥とうだい さいこうの詩にも、「芳草萋萋鸚鵡洲」〔芳草萋萋ほうそうせいせいたり鸚鵡洲おうむしゅう〕とあるように、長江中流の有名な中州である〕

#### 其七 蓼嶼りょうしょ

秋になると、南の水辺で蟬が鳴き出し、

霜が落ちると、横湖の水は沙を見通せるまでに澄んでくる。

たで  
蓼の花が雨に伏すのは、無限の思いに沈んでいるのか、

蝶が草をじっと草を抱いているのは、情がもはや耐え難くなっているからなのか。

【補足】 [りょうしよ おうこ たで 蓼嶼は横湖にある蓼の繁る小島である]

其の八 ぼううんろう 望雲楼

かげ  
陰ったり晴れたり、朝になったり夕べになったり、

楼台はそのたびこ何度も新たになる。

人は楼台に立ち、その身を虚空にあずける。

虚空に出るときは無心、

虚空から帰るときも無心。

白雲を望んで好しと思ひ、

白雲もまたその人を好しと思う。

【補足】 [てんかんだい これに続く第九首は天漢台を詠み、天漢 [すなわち天の川] の名から天文と関連付けて詩を構成しているが、訳は割愛する。雲から天の川、そして次の月へと進んで行く]

其の十 たいげつだい 待月台

月は志の高い人とあらかじめ約束をしていたのだろう。

軒にかかり、低く戸にさしこみ、そしてその人の眉を照らす。

昨日は十分に満ちた姿があったので、

闇という海から氷輪が出てくるのが、

少しく遅くなった。

【補足】 [実際に見てもいらない洋川ようせんの風光を 30 首もの詩に詠むのは、さすがの蘇軾も

難儀であったようで、いろいろな技を繰り出して詩を構成するのだが、我々にはピンとこないものも少なくない。二楽榭にらくしゃと瀟泉亭とうせんていを詠んだ二首は訳を割愛する]

### 其の十三 吏隠亭りいんてい

人間の世界には憂患が縦横に満ちている。

ところが、おかしなことに晩節先生は日々呑気にしている。

昨日は、清らかな風の入る北の窓辺に眠り、

朝には、西の山からの爽やかな気配に包まれている。

【補足】〔「吏隠りいん」とは、本当の隠者になれないけれど、官職に就きながらも、精神の高潔さは変わらないということ。作品番号 04-1-028 の其の四で見た「中隠ちゆういん」と同じである〕

### 其の十四 霜筠亭そういんてい

ほろりと籜かわが解かれたばかりの筧たけは、

嬋娟なよなよとして自分を支え切らないくらいで、

すでに冬枯れのころの姿にも見える。

秋の風に他の草木がしぼむときになって、

寒さに負けることのない竹の凜凜きりっとした意こころが見えるようになるのである。

【補足】〔(1) 竹は冬でも青々とした姿を変わずに保つので、困難にも負けることのない優れた君子に譬えられる。霜筠亭はそのような冬の竹の姿を愛でるところである。(2) 無言亭むごんていと露香亭ろこうていを詠んだ続く二首は割愛する〕

### 其の十七 涵虚亭かんきょてい

水と花は美しさを競い合う。

秋の月は水をよしとし、春の風は花をよしとして、

それぞれに最良するところがある。

おげまや きよ ひた  
この亭は虚を涵すというからには、

亭のまわりには、実は水も花も何も無い。

何もないければ最良するところもない。

だから、涵虚亭より見るのは――

天の全てを尽した一切欠けるところのない**万景**なのである。  
ばんけい

其の十八 けいこうてい 谿光亭

湖の波が夕暮れとともに去り行くのは情がある。

溪流の輝きが日の出とともに軒に動き出すのはさらによい。

その光を画に描いたのはまだ見たことがないので、

君の詩をたよりに一つ写してみたいものだ。

其の十九 か けいてい 過溪亭

身は軽く、穏やかに歩むと、帰るのを忘れる。

四本の柱だけの過溪亭の前に丸太の細い橋がある。

橋の先の俗界には出ないと君は決めていたのに、

友と話すうちに思わずその橋を渡ってしまった。

二人で大笑いすれば、

水鳥は驚きのあまり、その緑の衣を落としてしまう。

其の二十 ひ きんてい 披錦亭

春、  
 披錦亭からの眺めは、  
 霞は紅く露は緑に、暁の風は香る。  
 春の日は長く、  
 燕はひたすら舞い、鶯はひたすら啼く。  
 知事殿は貧乏な老人だとは誰もいわない、  
 豪華な飾りの屏風や帳とばりに囲まれて、  
 悠悠と笛を吹いているのだから。

【補足】[続く楔亭の詩は割愛する]

其二十二 かんたんてい 菡萏亭

日ごとに床几を移して蓮の葉の下の風を追う。  
 いつまでも続く清らかな香りに思いは窮まるどころがない。  
 どうかしてこの身を亀に変え、  
 蓮の葉の揺れる中で千年という歳月を過ごしたいものだ。

【補足】[(1)「菡萏」とは蓮の花のこと。(2) 続く茶蘼洞と び どうの詩は割愛する]

其の二十四 うんとうこく 簗簗谷

簗簗谷の竹は立派であるけれど、その値よきは蓬のように安い。  
 この筍たけのこは伐り取るのを禁じられている。  
 清貧を自称するこの実は大食らいの知事殿が、  
 いつも竹が胸中にあると言いつつも、

本当は自分だけが腹の内におさめようとしているに違いない。

【補足】〔(1) 筧<sup>うんとうこく</sup>管谷の竹について論じた蘇軾の文を後に見ることになる [→作品番号 05-5-086]。 (2) 続く寒<sup>かんろこう</sup>蘆港の詩は割愛する]

其の二十六 野人<sup>やじんろ</sup>廬

少年のころは鋤<sup>すま</sup>や鋤<sup>くわ</sup>の仕事に苦勞したので、

山に囲まれた故郷の暮らしを嫌ったものだ。

老いてみると、

立派な建物での暮らしなどは意味がないとわかる。

だから、時には野人<sup>やじん</sup>の住むところに行かずにはいられないのだ。

【補足】〔野人<sup>やじん</sup>とは官職に就いていない粗野な非知識人のことであるが、蘇軾が野人というときには世俗の常識に縛られない自由人という意味合いが強いようだ〕

其の二十七 此君<sup>しくんあん</sup>庵

此君<sup>ほうせつくん</sup>庵の前の抱節君[竹のこと]に向かって、

文夫子<sup>ぶんふうし</sup> [文同]は言葉を寄せる、

「君とは到るところで親しくしたいものだ」

竹の真<sup>まこと</sup>を画に描くことでは文夫子が第一だろうが、

私だって竹の真を文に記すことくらいはしたのである。

【補足】〔(1) 「此君<sup>しくん</sup>」とは竹のこと。「此<sup>こ</sup>の君<sup>きみ</sup>なくしては一日も過ごせない」と、晋の時代<sup>おうきし</sup>の王徽之<sup>しん</sup>がいったことを踏まえている。(2) 蘇軾が書いた文とは『墨君堂<sup>ぼくくんだう</sup>記』 [→作品番号 03-3-016] である。竹を愛することでは文同<sup>ぶんどう</sup>に負けないと戯れたのである〕

其の二十八 <sup>きんとうけい</sup> 金橙径

この里の人も<sup>きんとう</sup>金橙[蜜柑の類]の味わいを知ってはいるけれど、

<sup>ろぎよ</sup>鱸魚がなければその価値は低いものである。

<sup>しょうこう</sup>松江の春の煙る雨の中で、

小舟を浮かべて<sup>にら</sup>薙を焼き、

金橙とともに<sup>つ</sup>搗いて、

鱸魚と合わせて食べてこそ最高の味なのである。

【補足】<sup>ぶんどう</sup> [文同]のものとの詩は、土地の人は<sup>きんとう</sup>金橙のよさを知っていないと歌っていた。

<sup>ようせん</sup> 蘇軾は<sup>ろぎよ</sup>洋川には鱸魚がないから、金橙の味わいを十分に引き出せないでいるのだと、戯れの答えを出したのである。鱸魚は<sup>ご</sup>呉のあたりの名物で、非常に美味しい魚とされていた [→作品番号 04-3-038]。蘇軾は<sup>しょうこう</sup>松江で、柑橘類を添えた鱸魚を実際に食べていたのだから]

其の二十九 <sup>なんえん</sup> 南園

南の庭に美しい<sup>やなぎ</sup>桃や緑の楊を植えないということは、

知事殿はきっと桑や麦を育てるつもりなのだろう。

<sup>うね</sup>畦に春の雨が降るころには、

立派な絹が出来上がるのを想い見て、

<sup>うね</sup>壇に夏の風が吹くころには、

麦こかしを焼く香りを想い見るのである。

其の三十 <sup>ほくえん</sup> 北園



漢水もあれば巴山もあって、洋川にはまだまだ楽しみが余りある。

私は、ひとたび手を振って故郷への帰途につくことを思う。

君に頼むのは、

北園の草や木にこのように尋ねてほしい――

「蘇君がこのあたりの主になっても構わないかい」

【補足】〔これが連作の結び。洋川での楽しみを文同から引き継ごうというのである。なお、洋州は漢水の流域にあって、洋川は漢水の支流で、地域区分としては蜀の範囲内である。だから、蘇軾は郷里と一体化して捉えているのだが、広大な中国であるから、洋州と眉州は直線距離で500kmほど離れている〕

## ■【05-2-009】与文与可

【解題】同じころに、文同〔字は与可〕に送った手紙。

### 【訳文】

貴君からは、『鳳唼堂の詩』などの作品や数々の書をしばしば寄せていただき感謝しております。すべて届いております。とにかく遠く離れているために不便ばかりです。先に『超然台の詩』を書いてくださるよう頼みましたが、ぜひ草書で願います。それを模写して石に刻みます。

安南や代北の地は騒然とし、愚かな私も憂っております。我等は閑処に置かれていて、それはそれで天の幸いであるとしても、深く取らぬのであります。このような情勢では緊急の徴発がありましよう。蜀の地ではどうなのでしょう。

私は近ごろ、齊州への異動を希望しましたが、叶いませんでした。今年の冬には任期が満ち、弟もまた交替となりますので、ともに都に上って、蜀に帰ることを強く願ひ出るつもりです。

そちらの洋川の園池はすばらしいところで、他方こちらの密州は田舎臭いところであり。それでも随

分と改修を施しました。町の西北には客人を送る亭あずまやがあり、下に瀨水を臨み、広々と見渡すことができます。こも改修して、「快哉亭かいさいてい」と名付けました。もし一首を寄せていただければ幸いです。……

【補足】〔(1) 冒頭にある『鳳唼堂ほうしゅうどうの詩』については作品番号 04-1-011 で見ている。

(2) 終わりにある「快哉亭かいさいてい」については、文同は蘇軾そくの依頼いんごうに応じて詩を作っている。後に蘇軾は黄州において同じ名の「快哉亭」を作り、そちらの方が遥かに有名になった]

## ■ 【05-2-010】 与程彝仲

【解題】このころに、母の親類筋に当たる程建用ていけんよう〔字は彝仲いぢゆう〕に宛てた手紙が残っているので、その一部を読んでおこう。科挙を受けるために上京することを程建用が報告してきたことへの返事である。

### 【訳文】

貴君のこのたびの挙きよは、きっと合格の報せを携えて西に還ることになるでしょうから、私のところにはお越しになれませんでしょう。東武〔密州〕での私の任期が満ちるのは来年の冬でありますから、都でお会いすることも叶わないでしょう。私の任期が終えるときには、弟もまた職務を解かれるでしょうから、郷里に戻ることを求めて、ともに西に還ろうと思います。ともに蜀で任務に就くことを得て、ついには墳墓を守って死に至るつもりです。私は心も見かけも衰老し、かつての面影はありません。昔馴染みの人々と楽しく飲むことばかりを念っています。……

【補足】〔(1) 程建用ていけんようは翌年の春の科挙で合格し、蘇軾はそれを祝う手紙を書いている。その中に、「合格者の中に郷里の人は貴兄ただ一人であった」と記している。(2) 先の文同ぶんどうへの手紙では、任期を終えるのは今年の冬であるとしていて、この手紙では来年の冬であるとしている。通常の任期は3年なので来年の冬で正しいのだが、実際

にはこの年の終わりに密州<sup>みつ</sup>を離れている]

## ■ 【05-2-011】 寄題刁景純藏春塢

【解題】潤州の大長老である刁約 [字は景純] [→作品番号 04-3-006 など] に送った詩。刁約の家の近くに藏春<sup>ぞうしゆん</sup>という名の塢<sup>つづみ</sup>があり、そこにはたくさんの松があるので、蘇軾は自分の植林技術を提供しようとかつて詩に詠んでいた。

### 【訳文】

先生は白髪になっての後に郷里に帰り、  
丘に一万本の松を植えた。  
松が千尺の高さにまで成長して、  
寒風に揺れ動く姿を見るのを先生は楽しみにしている。  
ということは、己の年齢などというものは、  
造物者が万物をこねて作り出す工程の外に抛り投げてしまったのだろう。  
春は、あたかも先生がつ杖の先から生まれ出るかのようで、  
柳の枝は同じ長さ<sup>じゆん</sup>に垂れ下がって小暗い蔭を作り、  
桜桃<sup>ゆずらんめ</sup>の花はすっかり満開となって紅い色が滴り落ちる。  
いつかは徐君<sup>じょ</sup>を誘って先生のもとを訪ねたいものだ。

【補足】 [詩の終わりは、原詩では「何時却与徐元直、共訪襄陽龐徳公」 [いつか去つて徐元直<sup>じょげんちよく</sup>と与<sup>とも</sup>に、共に襄陽<sup>じょうよう</sup>の龐徳公<sup>ほうとくこう</sup>を訪<sup>と</sup>わん] である。「襄陽の龐徳公」は諸葛孔明<sup>しよかつこうめい</sup>も教えを受けたとされる有名な隠者で、蘇軾はその故事を時折詩文に引用している。徐元直も龐徳公に教わったことのある賢者。刁約を龐徳公に比べ、刁約と蘇軾の共通の友人で徐姓の誰かを徐元直に比べたのである。刁約はこのとき 82 歳で、再会を果た

せなかったことは本章の終わりの方で見ることになる]

### ■ 【05-2-012】 書文与可超然台賦後

【解題】 蘇軾の書いた『超然台の記』と弟が作った『超然台の賦』[→作品番号 05-1-077] は当時の文人の間で評判となり、文同 [字は与可] が『超然台の賦』を作って送ってきた [先に草書でと依頼したのに応じたのでであろう] ので、その後ろにこの短文を書き添えた。

#### 【訳文】

我が友の文同は今どきの人ではなく、古の人である。その文は今どきの文ではなく、古の文である。文同の『超然台の賦』はざらりとした趣で、外界の物と関わるどころがない。屈原の『遠遊』や司馬相如の『大人』の流れを汲む作品であろうか。  
熙寧九年四月六日。

### ■ 【05-2-0013】 書李邦直超然台賦後

【解題】 同じように、李清臣 [字は邦直] [→作品番号 05-2-005] も『超然台の賦』を作って送ってきたので、その後ろにこの短文を書き添えた。

#### 【訳文】

世人の楽しむところを私もまた楽しむのだが、我が弟だけが独りそれを免れているようだ。弦を断って琴の鳴るのを聞く、あるいは酒を退けて芳しい茶を味わう。それとても、声や味からはなお離れていない。だからやはり世人の楽しむところなのである。  
「超然」を得るのは古の道に達した者であっても難しいとされ、私や弟は敢えてそのことをいおうとしたの

であった。りせいしん李清臣君の言葉は、よく本質を掴んだものといってよいだろう。だから、石に刻んで、私はそれに倣おうと思う。

## ■【05-2-014】 零泉記

【解題】 繰り返し雨乞いをした常山じょうざんにある泉を、蘇軾うせんは零泉と名付け、それを石に刻み、4月18日に泉のほとりに建てた。そのことについてこの文章を記した。

### 【訳文】

じょうざん常山は、みつ密州の序舎のある諸城しよじょう県の南二十里にある。常山はさほど大きくもなければ高くない。山から下に町を臨むと、町はちょうど山の真下にあつて、垣根や楼観が一つ一つ数えられるほどにくっきりと見える。町から上に山を望むと、山はちょうど町の真上にあつて、家で食べたり寝たりするときにも、外を出歩くときにも、この山がいつでも見えている。このようであるから、常山の神が町の人からの捧げものを得ているのはごく当然なのである。

密州は海に近くて風の吹くことが多く、水が長く川に留まらない。それでいつも旱害に苦しめられる。しかし、この山に祈るならば、山の神は応えてくれないことはない。民衆はそれで常山の神を信じて頼りこしている。山の神がいつも民衆に対して徳があることから、この山を常山というのだろう。

きねい熙寧八年は春も夏も日照りで、私はそのつど山の神に祈った。いつも響くように応じてくれた。そこで私は常山の神の廟を新しくした。その廟門の西南十五歩のところに泉があり、湧き出る水は車輪のようにぐるぐると回る。清涼な水は滑らかで甘く、冬も夏も変わることがない。泉から溢れ出た水は山の下へと達する。

私が思うに、この山がいつも民衆に対して徳があつて、雲を出して雨を降らせ、民衆に信じられているのは、この泉があることによるのだろう。そつてありながら、泉には名がなく、農民は軽んじて、草や木が生えるがまぢになっている。

そこで、私は石を並べて泉を囲むことにした。その深さは七尺、幅はその三分の二である。そのほりに  
 あずまや  
 亭を作り、泉を「零泉」と名付けた。

古の人は「吁嗟」といって雨を求めた。それで雨乞いの祭りを「零」というのである。

いまの民は、求めて獲られないときに「吁嗟」といたり、痛みに呻吟して「吁嗟」といたりする。官職に  
 ある者で、そのような民衆の声をきちんと聞いて哀れみ、その求めるところに応えようとしていて、常山の  
 零泉のように民に信じられて頼みとされている者がどれだけいるのだろうか。私はこのことを神に愧るもの  
 である。

【補足】 [この後に「吁嗟の詩」が続くが、内容はすでに記されたことと重なり、日  
 本語に訳しにくい韻文であるので省略する]

## ■【05-2015】河満子

【解題】4月23日に馮京 [字は当世] が成都の知事に任命された。馮京の名は作品番  
 号 03-2-010 で見ているが、蘇軾の15年先輩で、慶暦8年 [104年]、28歳のときに蜀  
 の鄂州で科挙の一次試験を首席で突破すると、翌年に都で行われた二次試験も三次試  
 験もすべて首席で合格した。世に稀なこととして馮三元と称賛された [科挙を首席で  
 合格した人を「状元」という]。優秀な若者が独身であると、我が婿にしようとする都の  
 人々は色めき立つのが常で、馮京を射止めたのは富弼であった。馮京は富弼という後  
 ろ盾を得てたちまち中央政界で活躍し、副宰相にまで昇った。王安石の改革には批判  
 的で、改革の問題点を鋭く衝く蘇軾を朝廷の重要な職に推したこともあったが成功し  
 なかった。飢饉のために王安石が宰相を降りると、次の宰相候補として馮京の名が上  
 がったものの、呂惠卿によって阻まれ、都に外に出た。すると、この年の3月に蜀の  
 茂州で少数民族の反乱が起こり、馮京は郷里の危難を救えるのは自分であるとして、  
 成都に赴くことを朝廷に願い出た。馮京はすぐに成都に行き、10月までに治安を回復

させた。そのことを聞いて、蘇軾はこの詞を作った。冒頭の12文字は、蜀の山と川の名を挙げて反乱の顛末をイメージ的に歌っている。

### 【訳文】

見説岷峨凄愴、[見られましたのは、岷山びんざんと峨眉山がびざんの惨憺たるありさま]  
旋聞江漢澄清。[しかし、すぐに聞かれましたのは、長江ちやうこうと漢水かんすいは清らかに澄んだとのこと]  
但覺秋來歸夢好、[これでわかりました、秋に見るべきは故郷こきやうに帰る夢]  
西南自有長城。[蜀しよくには長城といふべきあなたさまが守られるのですから]  
東府三人最少、[都みやこにおいてかつてあなたさまは三人の副宰相で最年少]  
西山八国初平。[西に行かれてはざらりと八カ国を平定されたのです]

莫負花溪縱賞、[必ず存分に愛でていただきたいのは浣花溪かんかけい]  
何妨藥市微行。[庶民しゆりいちに雑じて遊んでください成都の薬市]  
試問当壚人在否、[試しに聞いてみてください、いまいるのかかの酒売り娘]  
空教是処聞名。[たぶんあやふやな名を聞いただけとなるでしょうか]  
唱著子淵新曲、[てもきっとあるはずです、漢かんの王褒おうほうのような埋もれた才人の新曲]  
応須分外含情。[あなたさまがそれを唱えれば格別の情がありましょ]

【補足】[詞の後半では、成都せいとの名所や行事を楽しんだ上で、蜀しよくの地に埋もれている才人を見出してほしいとっている。父の蘇洵そじゆんは、まさに馮京と同じように混乱を收拾しよくほうへいしてきた張方平によって見出されたのであった [→作品番号 01-2-001 の年譜]]

### ■ 【05-2-016】 玉盤盃、并引

【解題】蘇軾は芍薬の一つの品種ぎやくばんろうに「玉盤盃」の名を与え、そのことを詩に詠んだ。

序文がある。

## 【訳文】

引[序文]

東武[密州]の旧くからの習慣で、毎歳四月には、南禅寺と資福寺の両寺に大勢の人々が集まって芍薬の花を仏に供えている。今歳は最も盛んで、およそ七千本余り供えられた。いずれも花びらや葉が重なり合い、繁麗豊碩であったが、その中に白い花で、覆した盃のようにちょうど円形で、その下に十枚余りの葉があり、それがやや大きくて花を承ける盤のようであるのがあった。品格が特に優れ、七千本の中で独り抜け出していた。聞くと、「これは町の北の蘇氏の庭で得たものです。それは、五代十国時代の周朝の宰相であった蘇禹珪の別荘だったところです」という。しかし、付けられていたその名がひどく俗っぽかったので、私は「玉盤盃」と改めた。

### 其の一

春の終わりにこは様々な花が乱れ咲く。

芍薬が開くころには、それらはすっかりなくなってしまう。

二つの寺は、無数の芍薬によってみごとに飾られ、

人々はそのなかのただ一枝の花を争って見ようとしている。

旧くから伝わる画にも見ない優れたその姿に、

私は玉盤盃の佳名を与えることにした。

姑射山の仙人は雪のような白い肌だといひ、

玉盤盃はまさしくその仙人のよう、

姑射山の仙人が行くところ五穀が稔るといひから、

きっとこれからは毎年穀物が大いに熟すであろう。



【補足】[続く第二首は、この芍薬を蘇家の庭で得たと聞いたことから、自分とは縁が深いのだろうといったことを歌っているが、訳は割愛する]

## ■【05-2-017】和路公超然台次韻

【解題】文彦博が『超然台の詩』を詠んで送ってきたので、蘇軾がそれに次韻して返した。詩の題に「路公」とあるのは、宰相経験者の文彦博は「潞国公」に封じられていたからである。なお、蘇軾が文彦博に政治上の問題について記した手紙を作品番号05-1-066で見ている。

### 【訳文】

潞公は富貴を嫌っているのにもかかわらず、  
常に国家のための仕事に苦しみ続けている。  
潞公は実は古の仙人である赤松子と約束をして、  
嶺にかかる白い雲を永遠に見続けることになっている。  
潞公が談笑するだけで清らかな風が生じ、  
天下の人々がそれに共鳴して声を合わせる。  
その潞公が超然台の詩を吟じて、  
雑草が生えたようになってしまっていた私の心を洗ってくださった。  
私はもとはいかなる人間なのかという、  
鹿が無理に官員の装束をまとい、  
身は微小であるのに、志だけは空しく大きい——  
潞公との交わりは浅いにもかかわらず、しばしば深い言葉を寄せてくださる。  
潞公がもしも了承してくださるのなら、

退職した暁には真っ先に潞公のもとに報告に参上したい。

ただ恐れるのは、

そのとき私には酒を買う錢が全くなくて、

潞公が財布を逆さこして振るわなければならなくなること。

【補足】〔(1) 文彦博はこの時代としては驚くべき長寿で、この先 92 歳までさらに 20 年間も政界で活躍する。(2) 同じころに、鮮于侁せん う しんや張耒ちやうらいが『超然台の賦』ちやうぜんたい ふを作って寄せ、司馬光し ぼ こうが『超然台の詩』を寄せてきた。鮮于侁は蜀しよくの人で伯父そ かんの蘇渙そ かんに所縁のあることは作品番号 04-2-002 で触れたが、鮮于侁は長く地方官として主に蜀の地にあつて、改革を批判する意見を朝廷に提出したり、新法の強引な施行に対して抵抗したりしていたが、このころに京東西路、つまり密州みつの近くに赴任し、後に蘇軾そ かくと会うようになる。張耒は後年「蘇門四学士」の一人と称されるようになるが、このころはまだ無名の若者で、蘇軾に認めてもらおうとして『超然台の賦』を送ったのだろう。司馬光は 5 年前に中央政界から退いて、そのまま洛陽らくように隠棲していた]

## ■ 【05-2-018】聞喬太傅換左藏知欽州、以詩招欽

【解題】密州みつにきてからの友人きやうじよに喬紱きやうじよがいる〔→作品番号 05-1-020〕。その喬紱が武官から文官に移って欽州知事を拝命したので、別れる前に飲もうとこの詩で誘った。何らかの事情で失意の内きんにあった喬紱に、いずれよいことがあると蘇軾は励ましていたのだが、それが的中したのである。

### 【訳文】

果たせるかな、今年、もとの將軍は再びに起つことになった。

かねて夢に見て詩に詠んだのは、我ながら神業であつたのだ。

貴君は、戦場で倒れて屍しかばねが馬の皮に包まれるようになったところで、  
ごくさいなことと見なしていた。

そして、必ず大官になる相があるといわれていた。

貴君は、あるときは、風土病の流行る土地で戦争の迫りるなか、  
羽根の扇を悠然と振って軍を指揮しようとしていた。

これからさん欽州に行く貴君と痛飲できる日々はあと幾日あるのか。

西の軒端にさす月の光がいよいよ冴えてきている——

さあ、その光に乗じてここにきてはくれまいか。

【補足】[同じときに喬きやうじよ叙に贈った詩がさらに二首あるが訳は割愛する]

## ■【05-2-019】寄黎眉州

【解題】蘇軾の故郷びの眉州の知事を務める黎錞れいじゆん [字は希声あざな きせい] に送った詩。黎錞は父そじゆんの蘇洵と交流があった人で、孔子が編んだとされる歴史書である『春秋』を深く研究しゆんじゆうして欧陽脩おうようしゆうに認められた。当時の皇帝の英宗えいそうから蜀の地の優れた人物に誰がいるのかと尋ねられたときに、欧陽脩は、「文行は蘇洵ぶんこう、経術は黎錞けいじゆつ」[文章では蘇洵、学問では黎錞]と答えたという。この詩の半ばには、王安石おうあんせきが『春秋』は官報の切れ端を集めたようなものでしかないと暴言[名言?]を吐いたことが詠み込まれている。なお、これより2年後に黎錞のために書いた『眉州遠景楼びしゆうえんけいろうの記き』を作品番号01-2-001で見ている。

### 【解題】

この密州みつの高いところから、故郷はどこかと望むなら、  
一片の千切れ雲へと夕日が落ちていく……

あのあたりであるのだろうか。

そちらでは、春が終わってもなお瓦屋山には堆く雪があり、

雨の後に空に、峨眉山の緑があたりを掃うようにして聳え立っていることだろう。

貴君はそちらで古の経典を研究して、『春秋』を笑う者を嗤っているが、

有望の士を好んだ欧陽脩のような賢者がいま天下にいないのを私は悲しく思う。

いつか私も陶淵明のように『歸去來の辞』を詠んで帰るであろうから、

貴君とともに詩と酒をもって残る歳月を送ろうではないか。

## ■ 【05-2-020】 山堂銘、并叙

【解題】この夏も日照り続きで、5月にはまた常山の神に雨を祈ったのだが、6月には一転して大雨が降った。そのことを記した文章。

### 【訳文】

叙

熙寧九年夏六月、大雨が降り、土地の人がきてこのように告げた。

「東武[密州]の町中の溝が壊れ、無数の岩石が流れ出ました」

そこでそれらを取り集めさせ、知事公舎の北の壁際に積んで、五つの小山を並べた。そこに松や柏や桃や李を植え、さらには北向きの部屋を新たに開いて心をそこに遊ばせ、遠くに思いを託そうと思う。

銘

誰がこの堅い石を集めたのか。

土の神が儲えたのである。

激流が発生したのは、

神が私を畏れさせようとしたからなのか。

よって庇<sup>ひさし</sup>を延ばし、

町から山を見晴らし、

高い木々を蒼蒼と繁らせて、

百年の歳月を俯仰<sup>ふぎやう</sup>しようてはないか。

■ 【05-2-021】 和趙郎中捕蝗見寄次韻

【解説】 趙庾<sup>ちやう ぐ</sup> [字は成伯<sup>あきな せいはく</sup>] [→作品番号 05-1-074] が蝗<sup>いなご</sup>を捕えた詩を詠んだのに次韻した。

【訳文】

麦は、穂が出てその長けは人の背ほどにもなり、

稲は、苗が伸びて牛が埋もれるほどにもなった。

このときに、天はどうしてか、蝗<sup>いなご</sup>が発生するのを抑えてくださらなかった。

農事は一時もゆるがせにてぎず、

蝗は駆除せよと、法令にきちんと定めがある。

我が僕<sup>しもべ</sup>たちは手足が傷だらけになるまで、

我が馬は走りまわって疲れ切るまで、

蝗退治に努めたので、

ようやく飛翔する数は減ってきたけれど、

人も馬ももう力は完全に尽きてしまった。

かくて私はひたすら眠いだけであつたのだが、

貴君からの百篇の詩を得てようやく目の覚める思いがした。

はじめは水がちよろちよろ流れるくらいの感じだったのが、  
 ついには大海を溢れさせるほどの勢いとなり、  
 貴君の詩をもっと読みたくて、  
 貴君のもとに人を十回走らせてもやめようとは思わない。  
 日頃から妄庸ほんくらを軽んじている貴君であるから、  
 私のごとき詩は貴君にじっと見られては笑われてしまうかない。  
 貴君のすぐれた詩の才能はすばらしいのに、  
 世間とはかく批判して詩を切り刻むことばかりする。  
 いま民衆は苦しみにあえいていつ癒えるとも知れない。  
 官職にはそれぞれに役目があってそれを超えてよいものではない。  
 貴君は貴君の任務に励んで世事を口の端に載せることなく、  
 空くうに向かって「咄咄とつとつ」と書く方がよいであろう。

【補足】〔詩の終わりは晋の殷浩しん いんこうの故事による。殷浩は讒言によって左遷されたとき、口では何も言わずに、「咄咄怪事とつとつかいじ」〔実におかしなことだ〕と中空に書いて過ごした。この詩では、職務以外のことを言わない方がよいと趙庾ちようゆに向かって忠告しているようだが、むしろ戒めるべきは蘇軾自身であったのかもしれない〕

## ■【05-2-022】登常山絶頂広麗亭

【解題】常山じようざんの頂上にある広麗亭こうれいていに登ってこの詩を詠んだ。気散じのために山に行っただのではなく、雨乞いの折に広麗亭まで足を伸ばしたのでらう。

### 【訳文】

西に穆陵関ぼくりやうかんを望み、

東あづまに瑯邪ろうが台を望み、

南みなみに九仙きゅうせん山を望み、

北きたに空しく飛とぶ埃ほこりを望む。

我等数人の友は狂飲し、

荒々しく振る舞い、

皆とともに古いにしへの聖天子しやんとしの舜しゆんを追慕して叫び声を上げ、

ついには遠く蓬萊ほうらい島とうに帰ることを想う。

漢かんの時代のこと、帝ていに愛された超飛燕ちやうひえんは紅の裙を翻して舞い、

帝とともに仙人せんじんとなって去ろうと歌い、

その声は雲間に響き、

笛は長く悲しみの余韻を残した。

この山ができてから、

白石はくせきに蒼苔せいたいが生じ続けた。

我等のこのような楽しみはかつてここにあっただろうか、

去ろうとしてなおあたりを徘徊する。

人の生せいは朝の露のよう、

白髪が日夜に増えてゆくのである。

何事も棄て置いてもはや何もうまい。

万劫まんこうの歳月とて灰を飛ばすように消え去ってしまうのである。

【補足】[冒頭に、山頂から見える名所を挙げている。それぞれ歴史的な背景があつて、この詩の内容と緩く関係するのだが、煩瑣になるので説明を加えることはしない]

## ■ 【05-2-023】 薄薄酒二首、并引

【解題】 趙杲卿<sup>ちようこうけい</sup>〔字は明淑<sup>あぎな めいしゆく</sup>〕〔→作品番号 05-1-030 など〕に贈った民謡調の戯れの詩。序文がある。

## 【訳文】

引〔序〕

膠西<sup>こうせい</sup>の趙杲卿<sup>ちようこうけい</sup>先生は、家は貧しく、酒を飲むのを好む。酒は種類を選ばず何でも飲む。いつもいには、「薄い薄い酒でも湯や茶よりはまし。醜い醜い女でも妻がいらないよりはまし」。その言葉は洗練されたものではないけれど、真理に近いところがある。それで先生のこの言葉を推奨して広めようと、東国<sup>がく</sup>風の楽府〔民謡〕を作ってみた。見る人が一発笑ってくれたらと思うだけである。

## 其の一

薄い薄い酒も湯や茶に勝り、  
粗い粗い布も衣がないのに勝り、  
醜い妻も醜い妾も女性がいらないのに勝る。  
朝廷の高官に昇ったところで、  
寒い冬の早朝に霜を踏んで皇帝のもとに伺候しなければならないのは、  
何の用事もなくて、夏の日中も涼しい北向きの窓の下で昼寝をしてくれるのには及ばない。  
皇帝になったところで、  
飾り立てた万人の列に送られて御陵<sup>ごりやう</sup>に埋葬されるのは、  
つぎはぎの衣を着ていても、独り呑気に朝日を背に受けて座っているのには及ばない。  
生前の富貴よりも死後の文章といえけれど、  
百年は一瞬、万世も慌ただしく過ぎるだけ。



大賢人も大盗賊も己の本性を捻じ曲げたら同じこと。

どりあえず酔っ払って、

是非も憂楽も皆忘れてしまうのが一番なのだ。

其の二

薄い薄い酒をふんだんに飲み、

粗い粗い布を重ねて着る。

ものの良し悪しはあるにしても、

酔ったり暖かかったりするのと同じだ。

昔から、醜い妻や醜い妾は主人を長寿にするという、

主人が退隠して志を遂げようとするのを、

そうした妻妾が義として従った例は多いのだ。

宮中の土を踏むのか、隠居所の窓からの風に吹かれるのか、

いずれももともとから計画できることではない。

百年の一生は長いようでも必ず終わりがある、

富貴のうちに死んだ者として、

貧窮のうちに生きた者に勝るわけではない。

遺骸を珠玉で包んで千年も朽ちないようにしたところで、

墓を暴く盗賊にやられてしまう。

文章こそは不朽たとかいったところで、

文字を知らぬ者を驚かせることはできない。

たちまち顔を紅くして富貴の気分にかせてくれるものがあるとしたら、

それは酒であるけれど、

道に達する者は、酒の功などに頼ったりしない。

世の是非や憂楽などは、

つまるところ空しいものなのである。

## ■【05-2-024】同年王中甫挽詞

【解題】嘉祐6年〔1061年〕に一緒に制科に合格した王介〔字は中甫〕〔→作品番号02-1-003〕が亡くなり、それを悼む詩を詠んだ。

### 【訳文】

仁宗皇帝は一代の間に、制科の合格者を自ら十五人選ばれた。

その十五人が、三千里の高さへと飛び上がる鵬鷗のような活躍をするのを、

天下の人々は眼を凝らして見つめていた。

王介君が取り組んだことは、国家の事業としてまことに用いるべき価値があった。

私ごときはぐずぐずと衰えるばかりで、言うべき価値がない。

十五人が出たり退いたり、あるいは昇りあるいは降りること幾十年を経て、

生きるのも死ぬのも一緒にと約束した仲間も、

いまでは一体何人が残っているのか。

いつしか都に行って王介君が活躍した跡を尋ねたならば、

いま都の人々が流している涙の痕がきっとそこらの草にも残っていることだろう。

【補足】〔仁宗皇帝の在位期間は41年に及んだが、その間の制科の合格者はわずかに15人。蘇軾自身の注によると、この詩を詠んだ時点で存命だったのは、富弼、張方平、錢藻、蘇軾、蘇轍の5人だった。富弼は蘇軾が8歳のときに憧れた4人の1人、張方平は蘇父子にとっての恩人、錢藻については作品番号03-3-008で送別の詩を詠んでい

る]

■ 【05-2-025】 七月五日二首

【解題】 副知事の趙庾 [字は成伯] [→作品番号 05-2-021] とともに超然台に上り、趙庾が詠んだ詩に和した。趙庾は先の詩でも見たように、蘇軾と同様に言葉が過ぎることがあったらしく、ここでは訳出しなかった別の詩でも、座中でうっかりしたことを言わないようにと蘇軾は諭している。

其の一

謗そしりを避けて、詩は詠まない、  
病を畏れて、酒は飲まない、  
このように決めて、北向きの窓の下で寂しくしていると、  
この夏の長い一日を、誰も一緒に過ごしてくれる者はいない。  
今年はやたらに暑く、草や木は煮て焦がしたような臭い匂きつい。  
私は早々と衰えてしまった人間で、  
気力は糸のように細く、やつのことで暮らしている。  
秋がきてくれたら佳よい心持ちになりもするだろうか。  
稲にもそろそろ露が宿すであらうから、  
「稲が収穫されるのを見るだけで、  
新酒の汁が滴り落ちる心地がする」  
と、杜と甫はが詠んだのに和して、  
静かに詩を吟じてみるのもよからうか。

【補足】 [詩は詠まない、酒は飲まないという誓い一つも、それは守れないというの

がこの詩の結論であろうか]

## 其の二

新たな秋をどこに求めたらよいのか。

静ちやうぜんたいかな超然台の上だ。

秋が来てまた間もないのに、

超然台の上では、

風はすでにさわやかで、月はすでに明るい。

雲みどりの間に翠の峰が一つ聳え立ち、

林の向こうに遠い山々が浪打つように並んでいる。

新なつめしい棗が次第に摘み取れるようになってきた一方で、

遅い瓜はまだまだ食べることができる。

落ち行く日を送りつつ秋の風が吹くと、

万物が寂しげに鳴り響く。

白髪が一度生じたなら君から離れることはない、

急いで行楽に出ることを思うべきなのである。

## ■【05-2-026】趙郎中見和、戲復答之

【解題】趙ちやう君が上詩の詩に和したので、それにまた答えた。

### 【訳文】

趙ちやう君が詩を吟じるのは、水まを撒くかのようで、

ひとたび手を揮うなら三百六十の文字がぱっと飛び出てる。

私に習って詩をやめようとするのは、  
絶世の美人の西施せいしが人ごみに紛れこもうとするようなもので、  
はなから無理なのだ。  
趙君が酒を飲むのは、灰に水を注ぐようなもので、  
いくらでも吸い込んでしまい、  
一日に三百杯、一年で十万八千杯。  
早いうちに趙君を止めなかったら、  
東の海も呑みつして、海底の赤い土があらわになってしまうであろう。  
私は衰えて、政事に関わっての誤りが多い。  
趙君がきびきびとして秋の鶚たかのようであるのが羨ましい。  
これからは、趙君は『老子』を愛読書として毎日飲んで暮らすのでよろしかろう。  
仕事の方は、私が趙君の秘書として右から左に署名の代筆をして進ぜようから。

## ■【05-2027】和魯人孔周翰題詩二首、并引

【解題】八月十五日の中秋節に詠んだ詩。魯ろ [山東半島さんとう一帯]の人である孔宗翰こうそうかん [字あざなは周翰しゅうかん]がかつて壁に書いた詩に和したもの。序文がある。

孔子は春秋時代の魯国の人で、山東半島には孔姓の人が大勢いる。

### 【訳文】

引いん[序]

孔宗翰君がかつて仙源県せんげんの知事を務めていたときのこと、八月十五日の中秋節に仕事で東武とうぶ [密州]の官舎に留まっていた。ときに陳宗古君ちんそうこ、任建中君にんけんちゅうもその地ちにいた。それから十七年後の中秋

節に、孔宗翰君が公務を帯びて東武を過ると、陳宗古君と任建中君はすでに亡くなっていた。時の経過に感じ、懐旧の念に駆られて詩を作り、それを壁に留めた。それからまた五年後の中秋節に、私は客人と超然台ちゆうぜんたいの上で飲んだのだが、孔宗翰君がこの地に赴任することを願っていると聞いた。客人のなかに孔宗翰君の詩を誦する者がいたので、それに和して二篇の詩を作り、他日の一笑に供するものである。

### 其の一

詩を題してからすでに五年、  
壁は壊れてしまったけれども、  
ゆかりの人も風物ももとのままである。  
来年の中秋の月は、  
孔先生こうせいがここで酒を枕に眠るのを照らすことであろう。

### 其の二

明るい月を迎え、  
来年のことをいっつつ、  
孟浩然もうこうれんの詩を思い起こす――  
「秋の空に明るい月が懸かる、  
鵲かたさぎは何かに驚いて飛び立ったまま、  
今宵の宿とする木をまだ見つけれずにいる」  
公務に旅する身は、  
宿屋から宿屋へと移動するようなもの、  
我が終の枝ついを選び得て眠れるのは、いつなのだろうか。

【補足】[序文に、<sup>こうそうかん</sup>孔宗翰が<sup>みつ</sup>密州への赴任を希望していると記してあるが、実際にこの年の暮れに蘇軾の後任として密州に赴任する]

## ■【05-2-028】水調歌頭

【解題】<sup>へいしん</sup>「丙辰の歳の中秋に、朝まで大いに飲んで大いに酔い、これを作り、兼ねて弟を思った」と添え書きのある詞。丙辰とはこの年で、つまり上の詩と同じときの作品である。

### 【訳文】

明月幾時有、[明月はいつからあるのでしょうか]

把酒問青天。[酒を手に、青い天に問います]

不知天上宮闕、[私にわからないのは、天の上の宮殿では]

今夕是何年。[この夕べはいつの年であるのでしょうか]

我欲乘風歸去、[私は風に乗って天の上に帰り行こうし]

又恐瓊樓玉宇、[でも恐れるのは、天の上の玉の宮殿は]

高處不勝寒。[高くて寒さに耐えられないのではと]

起舞弄清影、[立って月の光とともに舞うなら]

何似在人間。[ここも人間世界ではなくなるのです]

轉朱閣、[月の光は<sup>あか</sup>朱い樓閣の上を転がし]

低綺戸、[美しい戸口から低くさしこんで]

照無眠、[眠れずにいる人を照らします]

不応有恨、[月の光に恨みがあるはずがないのに]

何事長向別時円。[どうしていつも別れているときに限って円まるいのでしょうか]

人有悲歡離合、[人には、悲しみと歡び、別れと合うとがあります]

月有陰晴円欠、[月には、陰かげりと晴れ、円いと欠けるとがあります]

此事古難全。[これらのことがぴったり一致するのは古いにしへから難しいのです]

但願人長久、[ただ願うのは、君よ長く久しくあれ]

千里共嬋娟。[千里離れていても、同じ月の光もとで]

【補足】[前半は中秋の宴に同席した同僚に示したもの、後半は弟への想いを歌ったもの。これは蘇軾の詞の中でも最も優れたものの一つとされる]

## ■ 【05-2-029】 送碧香酒与趙明叔教授

【解題】 趙杲卿 [字は明淑] に碧香酒を贈ったのに添えた詩。これは先の『薄い薄い酒の詩』[→作品番号 05-2-023] を踏まえて詠まれている。碧香酒の由来はこの詩の中にある。

### 【訳文】

聞きくに、貴君の奥方かへこ むよくは賢かしこくて廉むよくで、

素足でもって自ら安酒を買いに行かれるし、

貴君に向かって、

「決して大臣などにはなつてくださるな」

と、いっておられるとか。

貴君も、陛下の御前で珍しい料理を賜ることを羨ましく思ったりなどしない。

私が感心するのは、

貴君がいよいよ風変わりであるのを少しも恥じたりしないこと、



その上、貴君が吟じるのは、

「妻は醜くてもよろしい、

他人が夫あがひを嘲そしり誘そしるのを憎んでくれるならば」

冬の暖かい日にも、貴君の家では、

「寒い、寒い」

と、叫んでいるとか、

それは布団がないからだ。

世間の人はそういうことを聞くと失笑する。

そこで私は、布団の代わりとしては何だが、酒を贈ろうと思う。

これは先帝の嬪殿の家から届けられた碧香酒へきこうしゅというもので、

ヨーグルトのように濃厚である。

私は、ひたすら飲むことをだけを求めたかの有名な大酒呑みとは異なり、

碧香酒を独り占めする気はないので、

貴君の家を和やかにする助けとしてひと壺を贈らせていただくものである。

【補足】 [(1) 先帝の嬪とは王詵おうしんである [→作品番号 03-2-011]。王詵は都の名士で裕福であることから、蘇軾のもとにはしばしば高級な品物が贈られてきていた。(2)

「かの有名な大酒呑み」とは作品番号 05-1-043 で見た劉伶りゅうらいである]

## ■ 【05-2-030】 趙既見和復次韻答之

【解題】 上の詩に趙杲卿ちようこうけいが和したので、さらにそれに和して返した。

### 【訳文】

漢かんの時代の都のある小役人は、

天から自由に解き放たれた人であったのか、

日に夜に酒を飲んで歌い、

宰相の曹参<sup>そうさん</sup>と杯を交わすこともあったとか。

ところが、その曹参の子の曹操<sup>そうそう</sup>は、

凶作の年に禁酒令を出して米を節約しようとした。

趙先生はまだ禁酒国から出ていないからなのか、

酒甕の脇で眠るこけることができずに、

偉そうに詩句を吐いたりするから、

人を誘うように聞こえてしまうことがある。

趙先生は、酒がないと、何度もぼやくので、

先生のために酒を作ってあげようかと思ひもするのだが、

近ごろの法はやたらとやかましいので、

その筋の者に目をつけられてしまうのを恐れなくてはならない。

俸禄の代わりに一日に一斗の酒をもらっても不服だった人がいたが、

それだけあれば昼間から飲んでも十分足りるはずではないか。

趙先生は鋭い言葉でこの衰えた老人を圧倒するのだが、

酒ばかり飲んでいては、ほかに食糧のなくなってしまうのではないかな。

【補足】 [この後、趙杲卿<sup>ちょうこうけい いなご</sup>は蝗退治のために莒県<sup>きよ</sup>に赴き、翌月に帰ってきたところで、酒をひと壺贈って慰勞し、同じ韻で詩を詠んで添えているのだが、それは割愛する]

## ■ 【05-2-031】 蘇潜聖挽詞

【解題】 蘇泳<sup>そえい</sup> [字は潜聖<sup>あざな せんせい</sup>] の死を悼む詩。蘇泳は成都<sup>せいと</sup>の人で、官界の先輩である。

【訳文】

若いころは、百人のうちの第一の人として名誉の名を馳せ、  
晩年には、官職にありながらも私情を離れて隠者のようであった。  
至誠を尽くして、華美なところが一切ないのは、真の役人であったし、  
文章が正しく雅みやびなのは、我が蘇その一族の伝統に適あつたのであったし、  
事に応じて走りまわるときも、本来の志に背くことはなかったし、  
科挙に合格した子があるのだから、実は亡くならないのと同じである。  
静かにこの十年余りの事を思いつつ、  
秋の風に数行の涙を寄せるのである。

■ 【05-1-032】 和晁同年九日見寄

【解題】 杭州こうにいる晁端彦ちやうたんげん [字は美叔あぎな びしゆく] [→作品番号 05-1-051 など] から9月9日の  
重陽ちやうようの節句の詩が送られてきたので、それに和した。

【訳文】

天を貫き刺すようにして渡り鳥が飛んで行く。  
仰ぎ見る私は、  
老いてもはや富貴も功名も思わない。  
病んだ馬には千里を走る志さえない。  
いつの世も、詩を詠む人は、秋がまたやってきたのを悲しむ。  
古来、九月九日はそのような日である。  
私は西湖せいこと別れてから、  
その風光は誰に託したらよいのかと思っていた。

貴君を、愁いを窮めさせる境遇に置いたのは、  
 きっと天の意志なのだろう。  
 なぜなら、<sup>こう</sup>杭州の山水は、  
 貴君によって優れた詩に詠まれることを待っていたのだから。

【補足】 [この詩の終わりは「困窮して後に人は詩に巧みになる」という<sup>おうようしゅう</sup>歐陽脩の言葉 [→作品番号 04-3-047 など] を踏まえている]

### ■ 【05-2-033】 祭常山祝文

【解題】 この年は雨が少なく、<sup>じょうざん</sup>常山の神に雨を祈った文章が幾つも残っている。これは秋の雨乞いのもの。

#### 【訳文】

連年<sup>いねご</sup>の蝗の害と日照りのために、中等以上の農民でももはや蓄えがなくなってしまいました。日々に食べる分量を計ると、もはや熟すのを待っていることはできないので、その前に穀物を刈り取らずにはすまなくなっています。……秋になってから雨がなく、冷気<sup>め</sup>が菽を殺そうとしていて、糜<sup>あわ</sup>も黍<sup>きび</sup>も小さな器に満たすほどもなく、麦はまた耕す前で、人々はおろおろ顔を見合わせ、ただ途方に暮れ、飢えた腸<sup>はらわた</sup>はもはや断ち切れるばかりで、これでさらに五日も雨がなければ、民は墓場に埋められてしまうでしょう。  
 ……

【補足】 [(1) 表現に誇張があるとしても、事態はかなり深刻であったのだろう。

(2) このころに都では蘇軾<sup>かちゅうふ</sup>を河中府に移すと<sup>みことのり</sup>の詔が発せられている]

### ■ 【05-2-034】 送喬施州

【解題】 喬紱<sup>きょうじよ</sup>が欽州知事を拝命したことは作品番号 05-2-018 で見ているが、その後、

赴任先が施州しに変更になり、改めて送別の詩を贈った。施州は蜀しよくの山間部にある。

### 【訳文】

残念なことに、喬敘君には町の近くきょうじよに二頃けいばかりのまじな農地せさえないので、

五台の車に蔵書だけを載せて各地を転々としなければならない。

施州しへと江かわを遡さかって行くと、

絶壁が横たわる向こうは青い山々、

雲の間を登る道は細く、蛇が空に飛び上がるかのようだ。

施州の土地柄は、

黒暗こくあん [犀さいの方言]に向かって鶏が叫び、

蜂がさかんに群こうれんがって黄蓮花から蜜を集め、

南蛮の産物がもたらされるようなところ。

思うに、喬敘君はかつて宰相を務めた呉育殿ごいくの門下生であるのだから、

蜀しよくの片隅に向かうべき人ではないのが……。

【補足】 [先に指示された欽州きんは遙か南方の地で、施州はまだしもいくらか都しに近く、蘇軾しよくも蜀の人であるのだが、ここでは施州をことさらに辺境の地であるかのよう  
に描いているのは、喬敘には中央で働くにふさわしい技量があるといいたいからだろ  
う]

### ■ 【05-2-035】 蓋公堂記

【解題】 密州みつの黄堂こうどう [州庁の中の最も立派な建物である正堂せいどう] の北側に、蘇軾は奥の間がいこうどうを作って蓋公堂と名付け、この文章を書いた。

## 【訳文】

私が郷里にいたときのこと。

寒気がして咳の出る者が医者に見ると、これは腹に悪い虫がいるせいで、治療しないと虫に殺されてしまうといわれた。それで、百金を費やして治療することにし、虫下しの薬を飲んだ。薬が腎や腸を攻め伐ること、体の皮膚を焼くかのようにあって、かつうまいものを飲み食いすることが禁じられた。ひと月ほどすると、いろいろな症状が出てきて、体の内側は熱く、悪寒がし、咳がやまなかった。まことに毒虫にやられてしまったようだった。

それで、別の医者を見つけたところ、その医者は熱を下げるための薬を処方した。薬を飲んだところ、朝には吐き、夜には下し、ついにはまったく食えることができなくなってしまった。

怖くなってその薬をやめ、鐘乳やら烏喙やらあれやこれや試したところ、癩、疽、癰、疥、眩、瞽といった症状で出ないものはなかった。三度医者を変えて、ますます病気がひどくなったのである。

村の老人が病人にいった。

「これは医者が悪い。薬が間違っていたのだ。君には、そもそも疾やまいがかあったのだろうか。人の生命といものは、気が主人公きであって、食しょくがそれを助ける。君はずっと薬ばかりを飲んで、他のものを口にしないかった。薬の臭いが体の外にまで乱れ出るありさまだ。君の体の中で、百の毒が戦い合ったために、主人公である気をすっかり疲れさせてしまったのだ。その上、助けとなるべき食べ物も隔ててしまった。それがまさしく病なのだ。君はこれからはただ静養して、医者を見断り、薬をやめて、好きなものを食べればよい。気が完全になること、うまいものを食べることに、これが最良の薬だ。きっと効果があるだろう」

これに従うと、ひと月で病は良くなった。

昔の国を治めることもこれと同様であった。秦の孝公から始皇帝までの時代を見ると、新たな法を作り、制度を改め、民衆を酷使して処罰することを徹底的に行った。秦が亡んで漢の世になると、宰相の蕭何や曹参は秦が民衆を虐げた禍を実際に見ていたので、戦乱の後に生き残った民に対して何かをさせようとしてもただ嫌われるばかりであるのを承知していて、何はともあれ休息を与えることにした。それに

よって天下は安定した。

曹参は宰相になる前に齊<sup>せい</sup>の地を治めていたのだが、そのときに長老や諸先生を集め、民衆を安定して住わせる方法を尋ねた。齊の地の儒者が何百人もきてそれぞれに異なることをいったので、曹参はどうしたらよいか決められなかった。そのとき、蓋公<sup>がいこう</sup>という者がいて、黄帝や老子の教えをよく知っている<sup>こうてい ろうし</sup>ということを知り、人を使わして教えを請うた。蓋公は、「治道は清浄を貴び、民は自ずから安定する」ということをいい、それを根本命題として、そこからさまざまなことを引き出して述べた。曹参は、自分から正堂<sup>せいどう</sup>の外に出て蓋公を中に招き入れ、その言葉を政事に用いたところ、齊は大いに治まった。その後、齊を治めたのと同じようにして天下を治めたのである。天下の人々は今に至るも曹参は賢者であったと称えている。

私は密州の知事となり、蓋公がこの邦の人であると知ったので、その墳墓を探し、子孫を求めた。しかし得るところがなく、残念に思った。蓋公の言葉から、その人となりを想像し、ぜひとも蓋公のような人に会いたいと思った。

私は州庁の正堂の北側に奥の間を新たに作り、ごたごたしたものを整理し、障壁となるものを除いて、州庁の全ての門をからりと開いたところ、町の南から北まで、一本の縄を引いたように見通せるようになり、これを蓋公堂と名付けた。時々賓客や役人仲間を連れてそこらぶらぶらし、私はそこに住まうことなく、蓋公のような人がきてくれるのを待った。

曹参は漢朝一代の名臣で、蓋公はその師であった。二人が並ぶ姿は壮観であったろう。しかし、史書には蓋公がどこで終焉を迎えたのか記されていない。古の至人<sup>いしにん しじん みち</sup>で道を得た者は死なないということであつたりするのだろうか。密州の東は海で、南に九仙山<sup>きゅうせんざん</sup>があり、北に牟山<sup>もうざん</sup>がある。その三方には昔から隠れた君子が多いという。そのように聞いてはいいても、隠れた君子は実際には見ることはできない。もしも見られたとしても招き入れることはできないであろう。

蓋公は民衆にまじってそのあたりを歩き来しているのだろうか。どうかして会えたりしないだろうか。

【補足】〔(1) この文章が進行中の改革を批判しているのは明らかであろう。(2) こ

の蓋公堂がいこうどうの壁に、蘇軾りくたん びは陸探微げいが描いた猊の画の模写 [→作品番号 04-3-087] を飾ったのである。(3) ついでながら、現代医学に疑義を唱えて、薬や手術に頼るべきではないと主張する人は、ここで蘇軾が述べているのとおおむね類似の論法を用いている。千年前のすぐれた知見であっても、それがいまのまま通用するものではないことはわざわざ付け加えるまでもないだろう]

### ■ 【05-2-036】 李氏山房蔵書記

【**解説**】 李常りじょう あざな こうたく [字は公沢] [→作品番号 04-3-076] のために書いた短文。李常の蔵書九千巻余りが廬山ろざんにある白石庵はくせきあんの僧舎に納められていて、学問を志す人が読めるようになっていた。そのことについて記した文章である。なおこちらの廬山は、密州の廬山ではなく、本家本元の方の有名な山で、仏寺や道観が多数ある霊山である。なお、李常はこのころまでに湖州知事こから齊州知事せいに移っていたようである。齊州には弟がいた。

#### 【訳文】

象の牙、犀の角、珠玉あやといった怪あやしきも珍しい物は、人の耳目を悦ばせはしても、実際の用には適していない。金属や石、草や木、絹糸や麻糸、五穀等々は実際の用に適しているけれど、これらは使えば古びるし、これらは費やせば尽きてしまう。

人の耳目を悦ばせ、実際の用に適していて、これを使っても古びないし、これを費やしても尽きないし、賢い人もそうでない人もおのおのその才能に従って得るところがあり、賢い人もそうでない人もおのおのその身の程に従って仁や智について教えられることがあって、才能や身の程が違っていても求めさえすれば必ず獲られるものがあるのは、ただ書物だけであろうか。

孔子こうしや古の聖人せいじんも、その学問は必ず書物を読むことから始めた。しかし、そのころにたくさんの書物を



持っていたのは老聃<sup>ろうたん</sup> [老子<sup>ろうし</sup>] だけで、晋国<sup>しんこく</sup>の韓宣子<sup>かんせんし</sup>は魯国<sup>ろこく</sup>に行つて初めて『易象』<sup>えきしやう</sup>や『魯春秋』<sup>ろしゅんじゅう</sup>を見る  
 ことができた。呉国<sup>ごこく</sup>の季札<sup>きさつ</sup>は北方の国々を親善訪問して初めて『詩経』<sup>しきやう</sup>の風、雅、頌を聞くことができ  
 た。楚国<sup>そこく</sup>で『三墳』<sup>さんふん</sup>『五典』<sup>ごてん</sup>『八索』<sup>はちさく</sup>『九丘』<sup>きゅうきゅう</sup>といった書物を読んでいたのは倚相<sup>いしやう</sup>だけだった。この時代に  
 生まれた人で『六経』<sup>りくきやう</sup>を見ることができたのはわずかしかおらず、学問をするのは実に難しいことであつた。  
 そうでありながら、その当時<sup>れいがかく</sup>の人々が礼楽に習熟し、道徳を深く身に具えていたことは、後世の君子の  
 とでも及ぶところではない。

秦<sup>しん</sup>や漢<sup>かん</sup>の時代以降は、書物を作る人がますます多くなり、紙も筆記の道具もますます簡便となつて、  
 書物がますます増え、書物を持たない人はいなくなつた。ところが、学問をする者がますます粗略にな  
 つたのはどうしてなのだろうか。

かつて私は老成した儒学の先生方に会うことができた。先生方がいわれるには、「若い頃に『史記』<sup>しき</sup>  
 や『漢書』<sup>かんじょ</sup>を読みたいと思つても書物がなかつた。幸いにも書物があれば、皆自分の手で書き写し、日  
 夜、声に出してそれを読み、理解が十分ではないのをたまたた恐れた」。

近年は、商人が書物をさかんに刷つて、諸子百家の書物が何万という紙によつて日々世に広められ  
 ている。学問をする者にとって、書物はこれほどまでにたくさんあつて、かつ手に入れやすくなつたのであ  
 る。ならば、書く文章にしても學術の水準にしても昔の人の何倍も立派になつてしかるべきであるのに、  
 いまの人たちは書物を手にしてもきちんと読まないで、根拠のないことを適当におしゃべりしているだけであ  
 る。これはまたどうしてなのだろうか。

私の友人<sup>りじやう</sup>の李常君<sup>りさんごう</sup>は、若い頃に廬山<sup>ろさん</sup>の五老峰<sup>ごろうほう</sup>の下の白石庵<sup>はくせきあん</sup>の僧舎で書物を読んだ。李常君が  
 そこを去つてからも、廬山の人々はそのことを思つて、その僧舎を指して『李氏山房』<sup>りしさんぼう</sup>と呼ぶようになった。  
 蔵書はおよそ九千巻余り。李常君はその九千巻の書物からなる學問の大河を渉つてその源を探り、そ  
 こにある華と実を探り、その深い味わいを咀嚼し、それらを自身の内に納め、文章として外に出し、また  
 実践してみせたので、現在の世にその名が知られるようになった。そうしたことがあつても、書物はもとより  
 そのままであつて、少しも減つたりするところがない。来る者があれば与え、無窮の求めにも無尽蔵に応

え、その才能と身の程に従って得ようとするものを十分に満たしてくれる。

李常君はこのような書物を家に内にしまっておくのではなく、もいた僧舎において人々の目に供している。それは仁者の心というべきである。

私はすでに衰え、かつ病んでしまって、世に用いられるところがない。これからは暇な時間を得て、まだ読んでいない書物をことごとく見てみたいと思っている。しかも、廬山はもとより遊んでみたいと願うところであってまだ行けていないのだから、まさに廬山の五老峰に退隠して、李常君の蔵書を開いて見るべきなのである。もしかして、李常君が拾い損なったものも得て我が身を補うような結構なことがあればと思うのである。

私は記念の文を書くよう李常君に求められた。そこでこの文章を書き、この山房に来る者に次のことを知ってもらいたいと思う。昔の君子は書物を見るのが難しかったこと、そして、いまの学問をする者は書物がありながら読まずにいるのは惜むべきであること。

【補足】〔これと『<sup>えんかん</sup>塩官の<sup>だいひかく</sup>大悲閣の<sup>き</sup>記』〔→作品番号 05-1-081〕を合わせて見ることで、蘇軾の学問観を窺い知ることができるであろう〕

## ■ 【05-2-037】 与周開祖

【<sup>こう</sup>解題】 杭州で親しくした<sup>しゅうひん</sup>周<sup>あざな</sup>分<sup>かいそ</sup>〔字は開祖〕〔→作品番号 04-3-079〕に与えた手紙。  
周分はこのころは南方の温州樂清県の知事になっていたようである。

### 【訳文】

お手紙を重ねて頂戴し、直接お話を伺っているかのようであります。日々佳勝の御様子に遠く思いを寄せております。

私は恙なく過しておりますが、<sup>おん</sup>河<sup>ちゅうふ</sup>中<sup>ふ</sup>府に移るようにとの指令を頂戴し、交替の人を待って、十二月下旬にはそこに向かうつもりです。貴君とはますます遠くなります。かつてお供して湖山の風景を楽し

みましたが、またの縁が果たしてあるものなのでしょうか。

お別れして後のあれこれはどれも言うに足りないものばかりですが、陳舜俞君ちんしゆん ゆが逝去されて、この世でまたお会いできないは残念でなりません。あれこれ考えてみても陳君が長寿に恵まれなかった理由はなく、涙が流れるのを止めることができません。陳君の文章を読むと、すべてが美しく善いものばかりです。一首の哀詞を作りたいと思いつつまた暇がありません。作りましたらお送りしましょう。

貴君の筆力はますます長じるばかりで、魏の曹操は「老いてなお学ぶ者は私と袁伯業だけだ」と豪語したと伝えられていますが、年取ってなお長じてゆくのは真に得難いことです。お寄せくださった山の画の詩は、善い画を見たいと尋ねても得られなかったものです。貴君の新しい詩は清絶で、すぐにその二首に和しましたので、笑ってお受け取りください。貴君の浩然亭こうぜんていの詩にも続けて和すつもりです。

今日は大雪で、客人とともに玉山堂ぎょくざんどうで飲みました。たまたま弟のところに行く人がいますので、これとともに手紙を書いています。手が冷えてうまく字が書けません。

どうか御自愛願います。

【補足】〔(1) 陳舜俞ちんしゆん ゆ [字は令挙] は蘇軾そが密州みつに赴任するために杭州こうを発ったときにしばらく同行した人で、大勢の人々とともに湖州この垂虹亭すいこうていで遊んだことを作品番号04-3-077で見ている。陳舜俞はそれから2年足らずで亡くなったのだった。(2) この手紙に記してある山の画の詩に和した作品は次に見る。(3) 終わりにある玉山堂ぎょくざんどうとは先に見た蓋公堂がいこうどうのことである〕

## ■ 【05-2-038】次韻周邠寄雁蕩山図二首

【解題】周邠しゅうひん [字は開祖] から、上の手紙にあったように山の画に添えた詩が届いたので、その詩に和した。画は温州樂清県おん らくせいにある雁蕩山がんとうざんを描いたもので、海に臨んで聳える天下の奇秀とされる。もしかしたら、画そのものも贈られたのかもしれない。二首のうち第二首だけを訳す。

## 【訳文】

## 其の二

西湖せいこでの三年間は貴君と一緒にだった。

いまの私は、塵の中の馬、籠の中の鶴。

雁蕩山がんとうざんの画に入ると――

私は、東の海のほとり、

海のそのまた向こうから日が昇るのを見ている、

山の中にある石の橋を渡り、

そのまた向こうの長い虹を踏み――

いまは遥かに思いを寄せるだけ。

別れて以来、貴君にも白髪が増えたであろう、

ときには酒樽の前で、この病気の翁のことを話したりしているのだろうか。

残念なのは、貴君が蜀しよくの山々を知らないこと。

いつか手を携えて、蜀の山に分け入り、

竹筒に入れた酒を飲もうではないか。

## ■ 【05-2-039】 題鮮于子駿八詠後

【解題】 これまで鮮于侁せん うしん あざな ししゆん [字は子駿] の名は時折見てきたが [→作品番号 04-2-002、05-2-017 など]、その人なりをこの文章から知ることができる。これは、鮮于侁が蜀しよくの利州りにいたときに土地の名勝を詠んだ八首の詩に書き添えたもの。利州の『八詠』はちえいは当時評判となり、司馬光しば こうや范鎮はんちん、文同ぶんどう、蘇轍そてつといった著名人が挙って和している。

## 【訳文】

私が初めて益昌えきしょうの地を過ったよぎときに、鮮于侁せん う しん君は利州路り しゅう ろ〔益昌を内に含む広域行政区〕に赴任したばかりであった。その八年後に、私は膠西あうせい〔密州みつ〕の知事となり、それから鮮于君は京東西路けいとうせい ろ〔密州を内に含む京東東路の隣〕に移った。

朝廷が法を改めてから、法を奉じる役人は、自分自身のなかで折り合いを付けるのが非常に難しくなった。法の通りにすばやく厳格に実行すると民を傷つけ、民に厚く寛大に行くと法に反してしまう。法を重んじることと民を大切ことわりすることの二者の理をともに通すのが難しくなったのである。しかも、利州は山あいの狭く瘦せた土地柄で、民は貧しく役人の責務は重く、二者の理を通すには最も難しいところであった。さらに、鮮于君の家は代々南隆なんりゅう ろう〔閬州〕にあつて、利州路が管轄する範囲のあちこちに親族や友人が住み、親しい関係を配慮すれば法を害うことに、法を重視すれば恩愛を傷つけることにもなりかねないので、親しい者を大切にすることと法を正しく運用することの二者を全うするのもまた難しいことであった。このような困難の全てが鮮于君のもとに集まっていたのである。

ところが、鮮于君はその困難を九年にわたって成し遂げ、その評判は四方に鳴り響いたのだった。上には法を害わず、下には民を傷つけず、中には親しみを廃することなく、法の実施方法を役人に指導し、法に基づき仕組みを作り上げたのだった。役人も民衆も挙って鮮于君の政事を喜んだのである。

その一方で、鮮于君は庭や亭あびまやなどを整備し、詩を賦し酒を飲み、まことに穏やかに時を過ごし、あたかも太古の時代の為政者のようであった。世の君子はそのようなありさまを見て鮮于君が賢者であることを知ったのである。

鮮于君は自ら作った八詠はちえい〔八首の詩〕を私に寄せてきた。私はその詩を甚だ愛し、和そうとしてとて及ばないので、その末尾にこの文章を書くことにした。それを益昌の人に送り、鮮于君のことを忘れないよう石に刻んでもらいたいと思っている。

【補足】〔(1) 最初に鮮于侁せん う しんの赴任地の利州りを蘇軾が過った記してあるのは、父の喪が明けて上京した熙寧元年〔1068年〕の冬のことである。(2) 鮮于侁が京東西路けいとうせい ろの異

動したことで、この後、蘇軾と久しぶりに会うようになる。(3) ここに描かれている鮮于侁の姿はむろん美化されたものであろうけれど、いわば宋代<sup>そうだい</sup>の地方官の理想像である]

### ■ 【05-2-040】 雪夜独宿柏仙庵

【解題】 雪の夜に、密州<sup>みつ</sup>の柏仙庵<sup>はくせんあん</sup>に泊まった詩。

#### 【訳文】

しとすと降り続いていた晩からの雨は、  
いつしかみぞれとなった。  
ゆるゆると小さな庵<sup>いおり</sup>で眠るのはなかなか風情がある。  
ふっと夢から覚めると、窓辺に雪が打ち付けている。  
雪の夜は更け行々につれて静かになり、竹のそよ音だけが聞こえる。  
この冬も暖かさがようやく衰えて、天候がひしとひきしまったようだ。  
それでも、この程度の雪では、  
秋からの日照りを潤すにはまだ足りなくて、  
田畑を耕すのはなお先のことであろうか。  
天がどのような意向であるのか読み取るのはまことに難しい。  
かくして、翌朝には、春爛漫のような晴天になった。

### ■ 【05-2-041】 和孔郎中荊林馬上見寄

【解題】 先に見たように蘇軾<sup>かちゅう</sup>は河中府知事に異動となり、後任として孔宗翰<sup>こうそうかん</sup> [字は<sup>あざな</sup>周翰<sup>しゅうかん</sup>] が密州<sup>みつ</sup>にくることになった。孔宗翰が道の途中で詩を詠んで送ってきたので、

それに答えた。なお孔宗翰の名はすでに作品番号 05-2-027 で見ている。

### 【訳文】

<sup>みつ</sup>  
密州のあたりでは、

今年の稲は眼の高さにも成長しなかった上に、

来年のための麦の種はわずかしかない。

私は知事として、

この邦<sup>くに</sup>の人たちが苦勞ばかりしていて、

肌<sup>はだ</sup>には草の棘がいとも刺さっているのを恥ずかしく思う。

普段から五千巻の書物を読んだと胸を張っていながら、

その一文字も民衆の飢えを救うのに役立たせることができなかった。

民衆は肌着すらないことを怨み、

賢人の訪れを切望している。

<sup>こうし</sup>孔子二十世の孫とは漢代<sup>こうゆう</sup>の孔融、

その堂々の気風は周囲を圧倒した。

孔子四十七世の孫とは貴君、

いまこちらにこられることになった。

貴君が密州の郊外にまだ至らぬうちから、

清らかな風がそちらより吹いてきている。

困苦するこの地の十万の民を、

貴君のような君子を煩わせて託すことになった。

この私は、<sup>どうどう</sup>滔滔と流れる大河に押されて、はたしてこれからどこに行くのだろうか。

いつか蜀<sup>しよく</sup>への帰路をとって、

春の山ほととぎすに子規を聞くことができるのだろうか。

## ■【05-2-042】江神子

【解題】密州みつを離れる前ちようぜんだいに超然台ちようぜんだいに上って詠んだ詞。

### 【訳文】

前瞻馬耳九仙山、[前ぼに見るのは馬耳山じさんと九仙山きゅうせんざん]

碧連天。[天みどりに連なる碧]

晚雲間。[暮れゆく雲の間]

城上高台、[町の上のこの高台]

真箇是超然。[それはまさしく超然ちようぜん]

莫使匆匆雲雨散、[雲も雨もすくりに消えてなくなってくれるでしょう]

今夜裏、[今夜は]

月嬋娟。[さぞや美しい月]

小溪鷗鷺静聯拳。[小さな川で静かに身を丸めている鷗や鷺]

去翩翩、[去り行く一羽二羽]

点輕烟。[淡い雲の彼方に点となります]

人事淒涼、[人間界のことは寂しくて]

回首便他年。[首こうべを巡らす間にもう前の年に]

莫忘使君歌笑处、[忘れないでください、知事が歌ったり笑ったりしたところを]

垂柳下、[柳の垂れる下]

矮槐前。[低い槐えんじゆの前]



### ■ 【05-2-043】 別東武流杯

【解題】 12 月上旬に孔宗翰<sup>こうそうかん</sup>が密州<sup>みつ</sup>に到着し、代わって蘇軾は新たな任地に向かった。  
これは、川のほとりの流杯<sup>りゅうはい</sup>という場所で詠んだ別れの詩。

#### 【訳文】

笑ってしまうのは、  
官僚の住まいなんぞは宿場の旅館のようなもの。  
人の世に生きるのは浮き雲に等しい。  
百年の後になれば、  
いかなる老人だって知りたくない、  
いまこのときに知事だった者がここに立っていたことなどは、  
ただあの二本の松だけは覚えていてくれるのだろうか。

### ■ 【05-2-044】 留別零泉

【解題】 これは零泉<sup>うせん</sup> [→作品番号 05-2-014] で開かれた送別の宴での詩。

#### 【訳文】

酒を挙げて零泉<sup>うせん</sup>に捧げる。  
王維<sup>おうい</sup>は送別の詩に、  
「旅人となって、黄金は尽きはて、  
家に還って、白髪が新たになっただけ」  
と、歌ったが、

雫泉に映る我が姿はまぎにそれだ。

泉の水の中にある空、

それがこの私をまた照らすことがあるだろうか。

二年の間、雫泉の水を飲み、雫泉の魚や鳥と親しんだ。

もう一度、雫泉の水を掬う。

その手をまわして、傾く日を遮る。

これから私は西に向かって行くのだ。

【補足】[新たな任地として命じられた河<sup>か</sup>中<sup>ちゆう</sup>府<sup>ふ</sup>は遠く西方にある。唐<sup>とう</sup>の時代<sup>と</sup>に杜<sup>と</sup>牧<sup>ぼく</sup>は、長<sup>ちやう</sup>安<sup>あん</sup>に向かったとき、「手で西日を遮りつつ進んで行く」と詩に詠んだ。蘇<sup>そ</sup>軾<sup>おう</sup>は王<sup>わう</sup>維<sup>い</sup>と杜<sup>と</sup>牧<sup>ぼく</sup>の2人の詩を踏まえて、即興でこの詩を詠んだのである]

## ■ 【05-2-045】 留別<sup>りゅう</sup>积<sup>せき</sup>迦<sup>か</sup>院<sup>いん</sup>牡丹<sup>ぼたん</sup>呈<sup>てい</sup>趙<sup>ちゆう</sup>倅<sup>せい</sup>

【解題】別れの詩を、积<sup>せき</sup>迦<sup>か</sup>院<sup>いん</sup>の牡丹<sup>ぼたん</sup>に寄せて、副<sup>ちゆう</sup>知<sup>ち</sup>事<sup>じ</sup>の趙<sup>ちゆう</sup>庾<sup>ご</sup> [字<sup>あざな</sup>は成<sup>せい</sup>伯<sup>はく</sup>] [→作品番号 05-2-025] に贈<sup>みつ</sup>った。密<sup>みつ</sup>州<sup>しゅう</sup>を発<sup>はつ</sup>ったのは12月であったから、実際に牡丹が咲いていたわけではないだろう。

### 【訳文】

春の風が、

この次に、小さな寺へと戻ってきたとき、

壁の間に知事殿[蘇軾のこと]の詩を見るだろう。

そして、

「知事殿はどこらに」

と、きっと尋ねるだろう。

花が説くのを聞いて、  
春の風は、知事殿がもういないのを知るだろう。  
毎年毎年、時の流れは窮まることがない。  
花は今年も同じように咲けけれど、人はきっと老いてしまう。  
かの貴君子さいごの崔護は春の郊外に遊んで、  
ある屋敷の庭に美しい女性を見た、  
翌年の春にまたそこを訪ねると、  
門が閉ざされ、誰もいなかった。  
春の風はその崔護のように、  
千里の彼方に行ってしまった知事殿の面影を慕い思うことであらう。

■【05-2-046】董儲郎中嘗知眉州、与先人遊、過安丘、訪其故居、見其子希甫、留詩屋壁

【解題】蘇軾みつは密州しよじょうの諸城しよじょう県を発つと、北に進み、百二十里先の安丘あんきゆうで、董儲とうちよがかつて住んでいた家を訪ねた。この詩の題は「董儲はかつて眉州びの知事となり、父の蘇そ洵じゆんと交流があった。私は安丘を通過した際に董儲の故居を訪れ、子の董希甫とうきほと会い、壁に詩を書いた」。この詩にはたくさんの故事が詠み込まれているので、若干の説明を補って訳す。

【訳文】

白髪に至っても、皇帝に知られることがないままで、  
大きな役目は与えられなかった——  
董知事[董儲]の不遇は、漢代の顔驄かんたい がんしに似ていようか。

顔駟が若かったときの皇帝は文を好み、顔駟は武を好んだために、用いられなかった。

顔駟が壮年になったときの皇帝は美顔を好み、顔駟の顔は醜かったので、やはり用いられなかった。

顔駟が老いてから後の皇帝は若者を好んだので、またしても用いられなかった。

しかし、顔駟はついには報いられた[董儲はそうではなかった]。

人々はいまに至っても、董知事の文章は最も優れていたと記憶している。

魏の曹操は、たまたま橋玄の墓の近くを通ったときに、

自ら祭文を作って墓に捧げ、

今後ここにきたときには必ず二羽の鶏をもって祭ると誓った。

漢の武帝は董仲舒の墓の横を通るときには必ず馬から下った。

この二つの故事には及ばないものの、

私は所縁ある人を忘れまいと、董知事の墓に詣てたのだった。

楚の宰相であった孫叔敖が亡くなると、

その子は貧窮の余り薪を背負って売って歩かなければならなかった。

晋の向秀は若い頃に都で著名人との交流があったが、

その当時の人たちは政敵によって皆都を追われてしまい、

向秀は西に旅する途中で、かつての著名人の旧宅を過り、

たまたま隣人が吹く笛の音に昔を思って泣いた。

董知事の子は、

冬のさなかに薪を背負って売って歩かなければならないような境遇は免れているとはいえ、

私は隣人が吹く笛の音に心を碎かれて耐えることができない。

君主のために命をも捧げる活躍をしたいと、貴君は思っているだろうけれど、

敢えてそのことを言うのはやめよう。

私は董知事の墓に涙を注ぎつつ、

西南の空に浮かぶ白雲を見つめるのである。

【補足】〔西南の白雲とは、都の上の雲であろう。都の人たちが董儲<sup>とうちよ</sup>のことを思い出して、子の董希甫<sup>とうきほ</sup>に活躍の場を与えてくれまいかと願うのである〕

## ■ 【05-2-047】 跋董儲書

【訳文】上の詩に詠まれた董儲<sup>とうちよ</sup>が遺した書<sup>しよ</sup>に記した跋文が二つある。書いた時期は明らかではないが、二つを合体してここに訳す。

### 【訳文】

董儲<sup>とうちよ</sup>は密州安丘<sup>みつ あんきゅう</sup>の人で、詩の名手として宝元、慶暦のころに知られた。書も極めて巧みだったが、人に知られることがなかった。その書を見ると、かつて一世を風靡した李建中<sup>りけんちゅう</sup>よりも勝れている。近年でも董儲の書に比肩するものはなかなか見ない。ところが、人々はそのようには思っていない。私は書を善くする者ではない。ところが、世の中の人々は私の書を良いという。このことから、どれが良くてどれがそうではないのか、どうやら一つには決まらないと私は知ったのである。

【補足】〔李建中<sup>りけんちゅう</sup>は宋代<sup>そうだい</sup>の初めに能書家として知られたが、蘇軾があまり評価していなかったことは後に見る〕

## 第5章 嵐の訪れ——密州、徐州、湖州

[第5章その三]

熙寧<sup>きねい</sup>10年 [1077年]、蘇軾<sup>そせき</sup> 42歳。

### ■ 【05-3-001】 除夜大雪、留濰州、元日早晴、遂行、中途雪復作

【**解題**】密州<sup>みつ</sup>から新たな赴任地<sup>かちゆう</sup>の河中府<sup>かちゆう</sup>に向かう旅<sup>さんとう</sup>は、山東半島の付け根を斜めに横切るようにして北西方向に進み、まずは黄河<sup>こうが</sup>に面した齊州<sup>せい</sup>を目指した。齊州からはそのまま黄河沿い<sup>かちゆう</sup>に河中府<sup>かちゆう</sup>に進むか、あるいは一度都<sup>みやこ</sup>に立ち寄るか、状況次第ということであったのだろう。先に見た安丘<sup>あんきゆう</sup>から北に進んで濰州<sup>い</sup>に至ったところで大晦日を迎え、年越しの夜はかなりの雪であったのが朝には晴れ、元日も留まらずに出発した。ところが途中でまた雪となり、この詩を詠んだ。

### 【訳文】

大晦日は雪によって足止めされ、  
元日は晴天によって送り出される。  
昨夜飲んだ酒に、春になったばかりの風が吹いてきて、  
瘦せ馬の上で、ゆらりゆらりとまだ夢の残りの内にある。  
暁の明かりがまんり開いてきたかと思うと、  
あたりの花の上で光がぐるぐると巡る。  
まことに結構な気分で、馬から下って野で一杯やりたくもなるが、  
相手をしてくれる者は誰もいない。  
にわかに暗い雲が合わざり、

鳥の羽根のような雪が、空からいっぱいに乱れて降ってくる。

そこを私はあたかも白いおおどり鳳になって飛んで行く。

ここに傾いた棟が連なっているのは、

都の東の地方は三年の間旱魃が続き、

逃亡した家がたくさんあるからだろう。

農家の老人は鋤をほうり捨てて嘆き、

涙ははらわた餓えた腸をさらに痛ませることだろう。

春の雪はいずれ終わるとしても、

春の麦をいまから植えてまた間に合うのだろうか。

人々は労働の苦役を怨まずにはいられない。

せめてもの手助けになればと、

農事暦を詠んだ古い童謡でも歌ってみようか。

【補足】[終わりに童謡とあるのは、春にはあれをして、夏にはこれをして、と季節ごとにすべきことを挙げて、秋には米櫃がどっさりいっぱいになると歌いあげるもの。現実にそうなればとの願いを籠めて、蘇軾は歌おうというのである]

## ■【05-3-002】大雪、青州道上、有懷東武園亭、寄交代孔周翰

【解題】濰州いから雪のなかを北へ北へと青州ぜいに向かいつつ、密州みつの園亭を想い出し、新しい知事となった孔宗翰こうそうかん あざな しゅうかん [字は周翰] にこの詩を寄せた。

### 【訳文】

超然台ちょうぜんたいの上に雪が降るときには――

街並みも山も川もすばらしい限り、

海の風が波を砕いて、青いガラス片を空に飛ばすのも、

その向こうに、三つの神山しんざんの白銀の宮殿があるのも、

超然台から見えようか。

蓋公堂がいこうどうの前に雪が積もるときこは――

緑の窓と赤い戸が雪明けいに映えて、

堂の中には一人の美女けいが雪と妍を争い、

粲然さんぜんと笑と、玉のような真っ白な歯が輝く。

それよりも山堂さんどうの雪はもっとすばらしい――

青い松、怪しい石に白い糸が乱れ舞い、

ここに知事殿は遊んで帰らずにいて、

真夜中になってようやく憂い顔で馬に乗る。

君は知っているだろう――

唐とうの時代の李愬りそが大雪の中、

独さいり蔡州城ごげんさいに入って賊の呉元済を縛り取ったのを。

君は知っているだろう――

唐もうこうねんの時代の孟浩然もうこうねんが大雪の中、

独ちやうあんり驢馬ちやうあんに乗って長安ちやうあんに向かう道で詩を吟じたのを。

いつか貴君と雪のなか、戸を閉じて美酒をともにしたいものだ――

人の毀誉褒貶をほしままにする連中がいなくなったときに。

【補足】[(1) 蘇軾は雪の中でいろいろな空想を楽しんでいる。超然台ちやうぜんたい、蓋公堂がいこうどう、山堂さんどうはいずれも密州みつにあつて蘇軾が改修したり造ったりしたものである。(2) 後半では、李愬りそを孔宗翰こうそうかんに、孟浩然もうこうねんを蘇軾に譬えた。孟浩然は雪の中で「落雁らくがんは沙渚さしよに迷う」と、長安ちやうあんに上ったものの皇帝に用いられずに終わったことを予感するような句を詠んだ]



■ 【05-3-003】 至済南、李公択以詩相迎、次其韻二首

【解題】蘇軾が齊州〔済南〕を目指していたのは、そこが交通の要衝であるとともに弟の家族がいたからである。弟は前年の10月まで齊州掌書記としてこの地にいたのだが、朝廷に呼ばれて家族を残したまた都に帰還していた。蘇軾が済南まであとわずかのところまできたときに、齊州知事の李常〔字は公択〕〔→作品番号 05-2-036〕から詩がもたらされた。それに返したのがこの詩。

【訳文】

其の一

よれよれの裘コートに瘦せた馬、  
古いにしへの大河のほとりに立つと、  
野は広く天は低く、白い米粒を撒ふいこして雪が落ちてくる。  
笑ってしまうが、  
私のこのありさまは、雪を噛み毛の敷物を食らった蘇武そぶであろうか。  
これから会うのは、官位りを売って酒を買ったという李白りはくであろうか。  
官遊かんゆうとは到ったところに身を寄せるもの、  
農事を自分の手で行うようになるのはいつのことか。  
新しい詩を作って貴君の詩に和すので、  
昔からよくあるように、  
風雨のために暁の鶏が鳴かなかつたなどと言い訳をしないで、  
早起きをしてこれを読んでもらいたい。

【補足】〔(1) 自分を漢代の英雄である蘇武そぶに、李常りじようを唐の大詩人である李白りはくの譬え

たのは、同姓の偉人を引いた遊びである。(2)「宦遊<sup>かんゆう</sup>」は官僚として各地を転々と移り行くこと。原詩では「宦遊」という表記を用いている。訳詩では他の言葉に置き換えることも多いが、使用頻度の高い語である。(3)「身如寄」[身は寄せるが如<sup>ごと</sup>し]は蘇軾がしばしば用いる表現で、次第に意味するところが深くなってゆく]

## 其の二

夜に霽水<sup>とうすい</sup>のほどりで笙歌<sup>しょうか</sup>を聞いたあの楽しさは、

頭<sup>こづべ</sup>を回<sup>めぐ</sup>らせばすべては塵。

あのとき貴君は湖州知事<sup>こ</sup>になったばかりで、

密州知事<sup>みつ</sup>として赴任する私を見送ってくれた。

いま貴君は齊州知事<sup>せい</sup>になったばかりで、

私は河中府知事<sup>かわちゅう</sup>として赴任するのを見送られる。

私はいつもどこかに行く途中で、貴君を主人として逢うのである。

集まったり散ったりするのは、よく考えればすべてが夢だ。

名声と我が身とどちらが大切かという問いがある。

ようやくそのどちらでもないどわかってきた。

貴君と会って話すときは、夜に蠟燭を継ぎ足す心配はない、

蝙蝠が飛ぶ夕方から鶏が鳴く暁までたちまち時間が飛んでしまうのだから。

【補足】[(1) 霽水<sup>とうすい</sup>は呉興<sup>ごこう</sup> [湖州<sup>こ</sup>] の名所。作品番号04-3077で見た湖州での遊びを回顧している。(2) この詩を返して済南へとさらに進むと、弟の息子の蘇<sup>そ</sup><sub>ち</sub><sup>そ</sup><sub>で</sub><sup>き</sup>が出迎えにきた。甥とは、蘇軾<sup>こう</sup>が杭州<sup>ちん</sup>に赴任する前に陳州<sup>ちん</sup>に立ち寄って以来 5 年半ぶりの再会であった]

## ■ 【05-3-004】 陽関曲

【解題】蘇軾は済南〔齊州〕に着くと、李常や弟の家族とともに1カ月余りをそこで過ごした。これは李常に贈った詞。

### 【訳文】

済南春好雪初晴、〔済南の春はとでもよらしくて、雪が晴れましたから〕

纔到竜山馬足軽。〔さっそく馬足も軽く竜山に遊びに行きましょう〕

使君莫忘霅溪女、〔でも、知事様は霅溪の娘さんたちをお忘れになってはいけません〕

還作陽関腸断声。〔お別れのときに、あんなにも悲しく歌ったのですから〕

【補足】〔(1) 竜山は済南近郊の山。霅溪は上の詩にあった霅水のこと。(2) このとき弟は齊州を離れて都にいた。弟が都に帰還したのは、王安石が再び宰相から退いて政界を引退するという大きな変化があったことと関係していた。王安石は一度は宰相に返り咲いた〔→作品番号 05-1-012〕のだが、神宗皇帝も王安石にいつまでも従い続けるのは不満だったようで、一方で、王安石は最も頼りにしていた長男の王雱が33歳の若さで死んで気力を失ってしまったこともあって、都から去ったのだった。その後は、呉充、王珪の2人が宰相として改革を続行していくことになったのだが、馮京〔→作品番号 05-2-015〕が成都から朝廷に呼び戻されるなどの変化も見られた。蘇轍は都に行くと、これまでの改革の問題点を指摘する文書を朝廷に提出して政策の大転換を訴えた〕

## ■ 【05-3-005】 問養生

【解題】蘇軾は済南〔齊州〕で呉復古〔字は子野〕という不思議な人物と出会った。呉復古は遙か南方の掲陽の人で、二度科挙に挑んで二度とも不合格となり、官職に就

くことを諦め、道士<sup>どうし</sup>となって潮陽<sup>ちようよう</sup>〔南シナ海に臨む町〕に庵を結んだ。呉復古はいつも神出鬼没の動きを見せ、海路で移動する商人ないしはコンサルタント的な一面もあったと見てもよいのかも知れない。この文章は恐らくはしばらく後になって書かれたのであろうが、ここで読んでおくことにしよう。

### 【訳文】

私は養生<sup>ご</sup>について呉先生<sup>ごふくこ</sup>〔呉復古〕に尋ねたところ、二つの言葉を<sup>わ あん</sup>得た。それは、和と安である。

和とは何か。呉先生はこのようにいう。

「天地が暑さ寒さを為すのを見てください。寒さが極<sup>にわか</sup>まると膠も折れ、暑さが極まると金も流れます。それほど寒暑であつても物はそれによって病むことはなく、変化するとしても微小です。寒暑の変化は、日中の日の動きとともに、あるいは夜間の月の動きとともに進み、わずかの間にも実はしばしば変化しているのですが、人はそれを知りません。変化が極めて微小だからです。このように極まることと微小であることの両者をよく理解<sup>てなず</sup>して、手懐けることが『和』であるのです。それができるのなら人の死は久しく遠いものとなるであります」

安とは何か。呉先生はこのようにいう。

「私はかつて<sup>ろうざん きんとう</sup>牢山〔山東半島の海辺の山〕から海に浮か<sup>わいなん ちようこう</sup>んで淮南〔長江下流部〕に向かったときに暴風に遭いました。舟の中の人<sup>やまい</sup>は井戸のつるべにしがみついているかのように上下し、あるいは車輪を踏むかのようにこ<sup>やまい</sup>てくるくとまわり、胃がひびりかえて、目が回るやら、気持ち悪くなるやら、留まるどころがありませんでした。私はその中でもふだんと同じように飲食して過ごしていました。特別に変<sup>やまい</sup>わった術があつたわけではなく、風や舟の動きと争わずに、その為すがままにしていただけ<sup>やまい</sup>でありました。おおよそ病<sup>やまい</sup>のものは自分自身<sup>やまい</sup>にあつて、外物によるものではありません。食べ物の中に蛆があつて、人がそれを見たなら、必ず吐き出します。見なければ食べてしまつて、吐くことはありません。そのようになるわけを考察してみよう。人は旨いものについて語るときにはき<sup>のど</sup>っと咽が動き、汚いものについて語るときにはき<sup>のど</sup>っと

唾を吐きます。私はそのどちらもしたことはありません。唾を吐いたり咽が動いたりするのは何によって生じるのかというと、それは外物が生じさせるのでしょうか、それとも自分自身が生じさせているのでしょうか。私は自分自身が生じさせていると知っているので、物と接しても変わらずにいられます。これが『安』の至りです。『安』であるなら物が私を感じさせることは軽く、また『和』であるなら物に応じて順したがって行くことができます。外には軽く、内では順こわりうのなら、生きることの理は備わっているといえるでしょう。呉先生いにしは古の静かな人[沈思みちし深く道に通じる人]である。ものを観るときに詳細に見極める。私は呉先生の言葉を知ってから、時に応じて思い返して考えているのである。

【補足】 [この短文は達意の文章で養生の極意を記しているので、訳者は十分に理解できていない。例によって「ずっぽ訳」である]

## ■ 【05-3-006】 祭柳子玉文

【解題】 このころに杭州時代に深い交流があった柳瑾りゅうきん [字は子玉あざな] が亡くなり、蘇軾はこの祭文を書いた。原文は1句4文字の韻文で、言外に響く余韻に深い味わいがあるのだが、ここでは普通の散文として訳す。

### 【訳文】

ああ、柳先生りゅうは南国に秀ひいで、はなはだ敏スマートかつ文で、発する声は幼ザンダイであった。武器庫のように縦横の知識を蓄え、文壇において光り輝き、とりわけ詩は鳥が轉ソフトるように天賦のものであった。唐代の詩人の元稹げんしんは軽薄はくきょい、白居易は通俗もうこう、孟郊は寒々かしく、賈島は瘦せているといった欠点があったけれど、先生がひとたび詩を吟じると、他の人のあまたの作品はどれもつまらないものに見えた。古くからの友人にしても、新たに付き合う公卿大臣こうけいにしても、先生のまわりに集まったのは、地位などは青空に浮かぶ雲か何かのように視る者ばかりだった。人は、先生は志を得ないままに白髪が長く肩にまで垂れるようになってしまったという。先生は世俗から高く抜き出で、頓着のない性格であったために、人の誇りを受け

やすかった。思うところがあって、世間から離れ、山の猿を友としようと決め、官服を棄てて帰郷した。山の麓の土地を耕し、夜具には綿がなく、朝飯の釜には粥がないような暮らしを楽しみ、世間の欲しがるものには一切見向きもせず、俗な臭いは一切なかった。これはいわゆる、出世して得るものと失うものを差し引きしたらどうなのか、あるいは、病むところがあってこそ天寿を全うするといったことに当てはまるのであって、不幸ということではなく、誰かに咎められるようなことでもなく、先生にかねてから具わっていた生き方だったのである。

かつて私が杭州こうにいたとき、先生は喜んで私を迎えてくださり、半年の間を一緒に過ごし、毎日酒を飲み交わした。朝に南屏山なんびやうざんに遊び、日暮れに靈鷲寺れいじゆうじに泊まり、雪の窓辺で腹を減らしながら清らかな詩を詠み合ったこともあれば、沙河さかのほとりを夜に歩き、真昼よりに白い月が照らす下で、先生の古めかしい服装が土地の婦人たちを驚かせ笑わせたこともあった。人と人との会合の難しさは、刺繍の糸のようで、ひとたびまどけてしまえば元には戻り難く、あるいは水をひっくり返したならば救いようがないようなものである。先生は老齢に至って名も徳も盛んであったが、厚く付き合う人は少なく、私は先生のもとに来るのが遅かった。

先生には立派な子がいて、先生の後をより大きくしてゆくであろう。特に伸び盛りの二人の孫がいる。それは私の甥に当たる。

先生がすでに永遠のもとに帰ってしまったことを思うと涙が落ち続けて止まらない。この詩を歌って先生に一樽の酒を捧げる。

【補足】〔(1) この文章の初めの方で、唐代とうだいの4人の著名人をおかなりの辛口で批評している。「元げん軽けい白はい俗はく郊こう寒かん島とう瘦そう」はわずか8文字でありながら的確な評としてよく知られる。

〔(2) 柳瑾りゅうきんと半年の間一緒に過ごしたといっているのは、飢饉対策のために奔走した時期のこと [→作品番号 04-2-050]。柳瑾の孫の柳閔りゅうこうと柳闢りゅうへきは、蘇軾そ かんの伯父の蘇渙そ かんの娘の子であるから、蘇軾から見ると甥に相当するという事は作品番号 04-3-009 で見ている。〔(3) 柳瑾は蘇軾と別れて天柱山てんちゆうざんに向かったのだが [→作品番号 04-3-014]、

結局官職には就かなかったのだろうか]

■【05-3-007】僕曩於長安陳漢卿家、見吳道子画仏、碎爛可惜。其後十余年、復見之於鮮于子駿家、則已裝背完好。子駿以見遺、作詩謝之

【解題】蘇軾は齊州せいを発って都に向かい、途中の鄆州うんで鮮于侁せん うしん [字は子駿] [→作品番号 05-2-039] と会った。この詩の題は「私は先に長安ちやうあんの陳漢卿ちんかんけいの家で吳道子ごどうしが描いた仏画を見た。しかし、惜しいことに破れてぼろぼろになっていた。それから十余年後のいま、鮮于侁君の家で同じものを見せられたところ、みごとに修復されていた。鮮于君はその画を私に贈ってくれたので、詩を作ってその謝礼とする」。吳道子とうは唐代だい一とされる絵師。その画を長安の陳漢卿の家で見たのは、鳳翔ほうしやうでの任期を終えて都に戻る途中のことだったと推測され、『醉道士図』[→作品番号 02-4-022]を見たのと同じときであったのだろう。なお、この画を鮮于侁から贈られたのはこの旅の途中でなく、新たな赴任地に着いての後のことだったかもしれないが、ここで訳しておく。

### 【訳文】

世間の貴人は、

お金がたくさんあって体も閑なので、

銭勘定を度外視して書画を争って買ったりする。

梁りやうの時代に殷鉄石いんてつせきが模倣して書いたものを、

かの王羲之おうぎしの真筆しんひつだとしてつかまされたり、

吳道子ごどうしの画えだとして出回っているものは、

ほとんどが唐とうの終しゆうわりに朱繇しゅうが描いたものであったり、

そんなことがよくあるのだ。

仏画といものは、

香の煙くすぶに燻られ、雨漏りに損なわれることも多く、

それを立派な軸で外見ばかりを立派に装って売り買いするのは、

昔、白鹿はくろくの皮で壁を包むたまのが流行ったようなもので、

壁の値はたかたか千数百銭なのに、白鹿の皮の値は四十万銭、

どちらに価値があるのかわかったものでない。

呉道子の仏画の技は神から授かったもの——

呉道子は夢の中で空を飛ぶ仙人となり、

覚めてから筆を下し、

心に何かを思うこともなく、

妙所に迫る神技は線の末端にまで及んだ。

私は昔この画を長安ちやうあんで見、

至宝が無残な姿となっているのに涙をこぼした。

絹の糸が切れ切れとなり、一部の断片が蝶のようにひらひらと飛び去ってしまったありさまは、

見るに忍び難いものがあった。

鮮于君はこの画をよく收拾して補綴したので、

消え失せてしまったところはあっても、

描かれた精神はついに全きを得たのである。

ここで思い出すのは、

ある人とほが杜甫の詩集を得て読み進めたところ、

「身軽一鳥」とだけあって、句末の一文字が欠けていた。

人々と、ああでもないこうでもないと思案したのだが、

後に善い本を得たところ、それは「過」の字であって、



誰一人として当てることはできなかったのである。

つまり、俗眼をもって画の傷んだところを補おうとしたところで、

それはできしないのだ。

貴君に尋ねると、まことこころによく画の意を把握している。

世間の貴人が画を一見して、

これはよいか何たとかいい加減なことを言うのは全く恥ずかしい。

財産をはたいて買ったところで意味がない。

ぼろきれとして使うのにも値しないものをつかまされて、

そんなものは火を付けて煙にこしてしまうのがよいのだ。

【補足】〔(1) 末尾は調子に乗ってややブラックなユーモアをきかせている。(2) 同じころに蘇軾うんは鄆州郊外の汶水ぶんすいのほとりで晁補之ちようほしと会っている。そのことは晁補之が後に詠んだ詩の題に「私は李師中りしちゆうと汶水のほとりで会い、そこに蘇軾も同席し、初めて呉復古ごふくこの名を聞いた」とあることからわかる。晁補之は後に「蘇門四学士そもんしがくし」と称されるようになる人 [→作品番号 05-1-079]。李師中は蘇軾より 23 歳年長の官界の先輩で、呂惠卿りよけいけいに排斥されて都に外に出されていた。蘇軾は父の喪に服するために帰郷する旅の途中で李師中と会っていたようで、蘇軾がその旅で法の禁じる塩の私的な取引をしたとの告発を受けたときに [→作品番号 03-3-023]、李師中はそのような事実はないと証言していた。呉復古は作品番号 05-3-005 で見た人物で、晁補之は名を聞いただけで会ってはいないので、呉復古はすでに南方に帰っていたのだろう]

## ■ 【05-3-008】 満江紅

【解題】蘇軾うんは鄆州から黄河こうがに沿って都に向かい、その一方で、蘇轍は兄を迎えるために都を出て、2 人は廬州せんと濮州ぼくの間で行き会った。これはそのときの詞。兄弟が会

ったのは、<sup>えい</sup>潁州に隠退していた<sup>おうようしゆう</sup>欧陽脩のもとと一緒に訪れて以来で、この詞の前半は、兄弟が<sup>えい</sup>欧陽脩のもとを辞去して、<sup>えいすい</sup>蘇軾が潁水の流れに乗って東に進み、弟が西に帰って行った場面を回顧している [→作品番号 03-4-027]。詞の後半は黄河のほとりでの再会を歌っている。

## 【訳文】

清潁東流、[東に流れる清らかな<sup>えいすい</sup>潁水]

愁目断、[愁いの目はもはや届かなくて]

孤帆明滅。[見えたり見えなかつたりする一艘の船]

宦遊処、[官員として行く先は]

青山白浪、[青い山、白い浪が]

万重千疊。[万に重なり、千に畳まれています]

辜負当年林下意、[背くのは、あどきに<sup>こころ</sup>林の下での意]

对牀夜雨聴蕭瑟。[牀を並べて、夜の雨音を静かに聴こうと決めたのでした]

恨此生、[恨むべきはこの人生]

長向別離中、[長く別離の中にあつて]

添華髮。[増えるのは白い髪ばかりなのです]

一樽酒、[ここに一樽の酒]

黄河側。[黄河のそば]

無限事、[限りないことごとを]

従頭説。[初めから話していきましょう]

相看恍如昨、[逢えばまんやりして昨日のよう]

許多年月。[ても長い歲月]

衣上旧痕余苦涙、[衣の上には涙の古い痕が残っていても]

眉間喜氣添黄。[顔に喜びの色が添えられます]

便当君、[さあ、まぎこいま君と]

池上覓残春、[池のほとりで春の終わりをさかしましょう]

花如雪。[雪のごとき花に]

【補足】[詞の前半にある、牀<sup>ベッド</sup>を並べて夜の雨音を耳にしながらしみじみ語り合うこと、つまり「夜雨対牀」こそが兄弟の最も願うものだということは作品番号 02-1-013 で見ている]

## ■ 【05-3-009】 与眉守黎希声

【解題】蘇軾は弟とともに都へと進み、陳橋<sup>ちんきょう</sup>駅に着いたところで、蘇軾の次の赴任地<sup>じょ</sup>を徐州に変更するとの辞令がすでに2月12日に<sup>び</sup>出されていたことを知った。そのあたりの経過をこれより少し後に眉州知事の黎錞<sup>れいじゆん</sup> [字は希声] [→作品番号 05-2-019] に送ったこの手紙から知ることができる。

### 【訳文】

先に密州<sup>みつ</sup>から河中府<sup>かちゆう</sup>に赴<sup>ちんきょう</sup>こうとして陳橋<sup>ちんきょう</sup>に至ったときに、任地<sup>ほうじゆう</sup>が彭城<sup>ほうじゆう</sup> [徐州] に改まったとの指令を受けました。そこで新たな地へ赴くことになったのですが、息子が妻を娶るために、しばらく都の東<sup>ほん</sup>にある范鎮<sup>はん</sup>殿の園中に留まることになりました。間もな<sup>ちん</sup>谷汴河<sup>べんが</sup>から東に進みますので、そちらとはますます遠くなり、お便りも届きにくくなるかと思うと、悵然<sup>ちやうぜん</sup>としてしまいます。我が家の墳墓<sup>ふんぼ</sup>についていつもお手を煩わせており、ただただ感じ入っています。……

【補足】[(1) 息子が妻を娶るとあるのは、長男の蘇邁<sup>そまい</sup>の結婚をいう。相手は蘇洵<sup>そじゆん</sup>の

友人であった石昌言<sup>せきしょうげん</sup>の孫である。蘇軾は政界の有力者と婚姻関係を結ぶよりも、郷里の人々との絆を大切にしようとした。② この手紙では、息子の結婚のためにしばらく都の東の留まったとしているが、実は政治的な事情によるものであった。蘇轍が改革の大幅な見直しを求めたのに続いて、蘇軾も己の考えを皇帝に伝えようと、陳橋駅<sup>ちんきょう</sup>から進んで都に入ろうとした。しかし、都の門の外で急に足止めされ、中に入ることが許されなかった。蘇軾の影響力を恐れる人々が拒んだのだ。都にいた陳襄<sup>ちんじょう</sup> [かつて杭州知事として蘇軾と親しくした人] らが蘇軾を朝廷で用いるよう運動したが、それも叶わず、蘇軾はやむをえず都の郊外にあった范鎮<sup>はんちん</sup>の東園<sup>とうえん</sup>に居候となったのである。范鎮は蘇軾の大先輩で、重職を歴任した人である [→作品番号 03-3-023 など]

### ■ 【05-3-010】和孔君亮郎中見贈

【**解題**】孔舜亮<sup>こうしゅんりょう</sup> [字は君亮<sup>あざな</sup> くんりょう] から詩を贈られてそれに和した。孔舜亮は、蘇軾の後任として密州知事となった孔宗翰<sup>こうそうかん</sup> [→作品番号 05-3-002] の兄で、都で官職に就いていた。

#### 【訳文】

たまたま先生と向かい合って一樽を尽くすことになった。

酔って見るのは、

万物がからからと崩れて奔る<sup>はし</sup>ありさま。

ゆるゆると人生を終えればよかろうと私は思うのだが、

先生のように門に突っ立って、

つまらないものだと世間を眺めているのがよいのだろう。

ただ恐れるのは、

世の中に長く留まっていられなくなって、  
頭を振って遠くへと行かねばならなくなること。

もっとも深く先生と論じ合わなければならない。

韓愈が孔子三十八世の孫を讃えた文章を私は昔から知っているが、

色白で長身の先生はそのまた十世の孫なのである。

【補足】〔(1) 孔子<sup>こうし</sup>四十七世の孫である孔延之<sup>こうえんし</sup>の挽歌を作品番号 05-1-048 で見ていて、そこでも韓愈<sup>かんゆ</sup>が孔子三十八世の孫を讃えた文章について触れていた。孔舜亮<sup>こうしゆんりやう</sup>は孔子四十八世の孫だと、蘇軾自身の注記がある。孔子の子孫は各地に大勢いた。(2) この詩は、幾つかの故事を引いて、蘇軾の当時の心境をかなり婉曲に詠んでいるようで、その含意と思われるところをやや頭わに<sup>こ</sup>して訳してみた〕

## ■ 【05-3-011】 殢人嬌

【解題】 都に入ることができない蘇軾はいろいろな人の支援を受けながら范鎮<sup>はんちん</sup>のもとでしばらく過ごした。有力な支援者の一人に貴公子<sup>おうしん</sup>の王詵<sup>あざな</sup> [字は晋卿<sup>しんけい</sup>] がいた。王詵はすでに見たように非常に裕福で [→作品番号 03-2-011]、これまでも折につけ珍しいものを都から贈り届けていたのだが [→作品番号 05-2-029]、都の間近にまできた蘇軾に対して特にいろいろと手助けをしてくれた。蘇軾は詩文をもってその謝礼としたのだろう、王詵に贈った数篇の作品が残っている。これは、王詵に招かれた宴席で、王詵<sup>じじん</sup>の侍人 [妓女であろう] に贈ったとの添え書きがある詞。

### 【訳文】

満院桃花、[庭いっばいに咲く桃の花]

尽是劉郎未見。[これらはすべて私が都にいたときには見なかったものです]

於中更、[とりわけすぐれているのは]

一枝織軟。[細くやわらかな一本の枝]

仙家日月、[仙界の日や月のように]

笑人間春晚。[人間世界の春の終わりに笑っているのです]

濃睡起、[深い眠りから覚めたばかりで]

驚飛乱紅千片。[たちまち紅い千片の花びらは乱れ飛んでしまいます]

密意難窺、[心の奥は伺い知れませんが]

羞容易見。[恥じらう様子はすくにわかります]

平白地、[地面を花びらが覆うとき]

為伊腸断。[悲しさ<sup>はらわた</sup>に腸がちぎれるばかり]

問君終日、[あなたにお尋ねするのは]

怎安排心眼。[どうしていつでも心静かにしていないですか]

須信道、[本当のことをいったら]

司空自来見慣。<sup>おうしん</sup>[王誥君だけに見てもらいたいのでしょう]

【補足】[これは即興の戯れの詞で、その場で王誥<sup>おうしん</sup>がにやりとすればよいのであって、訳者にはよくわからない箇所があるのだが、あまり頭を悩ませても仕方ないので、とんでもなくいい加減な訳でごまかしておく]

## ■ 【05-3-012】 洞仙歌

【解説】これは「柳を詠む」との添え書きにある詞。蘇軾が范鎮<sup>はんちん</sup>の東園<sup>とうえん</sup>に滞在するうちに、春は盛りを迎え、3月2日の寒食<sup>かんしよく</sup>に、王誥<sup>おうしん</sup>に誘われて蘇軾は都の北郊外にある四照亭<sup>ししょうてい</sup>のあたりで遊んだ。そのときに詠んだと推定される作品。柳と、柳を人格化し

た女性を、なよなよと情緒的に詠んだ作品。本来の詞らしい詞であるといえるだろう。

【訳文】

江南臘尽、[十二月の終わりの江南]

早梅花開後。[早くも梅の花が開いたその後]

分付新春与垂柳。[新たな春が分け与えられるのは垂れ下がる柳]

細腰肢、[なよなよとした腰つきも]

自有入格風流。[自ずから品格のある風流なありさま]

仍更是、[それはまさしく]

骨体清英雅秀。[芯から具わる清、英、雅、秀なのです]

永豊坊那畔、[長安の永豊坊とはどこ]

终日無人、[そこには一日中誰もなくて]

惟見金糸弄晴画。[ただ金の糸のような柳の枝が春の光のもとで揺れています]

断腸是、[気持ちがちぎれるのは]

飛絮時、[柳の絮の飛ぶとき]

緑葉成陰、[緑の葉がつくる蔭]

無個事、[何事もないままに]

一成消瘦。[ただ痩せてしまうのです]

又莫是、[だってないのですもの]

東風逐君来、[東の風に乗ってあなたが来ることなどは]

便吹散眉間、[眉の間に吹きくる春風によって]

一点春皺。[また一つ春の皺が寄るのです]

【補足】[詩の前半の終わりに置かれた「清英雅秀」の4文字を簡潔に適切な日本語に置き換えるのは簡単ではないので、漢字のまま並べておく]

## ■【05-3-013】送范景仁遊洛中

【解題】都に入れない蘇軾が身を寄せていた范鎮<sup>はんちん</sup> [字は景仁<sup>あざな けいじん</sup>] は洛陽<sup>らくよう</sup>に行くことになり、この送別の詩を詠んだ。范鎮と蘇軾の関係は、蘇軾が22歳で科挙に合格したときからであるから [→作品番号 01-2-014]、すでに20年になる。范鎮<sup>はんちん</sup>は仁宗<sup>じんそう</sup>、英宗<sup>えいそう</sup>の時代に朝廷の要職にあり、神宗皇帝<sup>しんそう</sup>が王安石<sup>おうあんせき</sup>を抜擢して改革を始めようとしたときには強く反対した。熙寧<sup>きねい</sup>3年 [1070年] に、王安石は自分の好みで人事を左右しているなどと批判し、范鎮は朝廷の職を解かれた。そのときに不適切な人事として范鎮が挙げた事例には、蘇軾を要職に推薦したのに用いられなかったこと、孔文仲<sup>こうぶんちゆう</sup>を推薦<sup>せい</sup>して制科<sup>か</sup>の試験に受けさせたのに不合格になったこと [→作品番号 04-1-061]、母の喪にあることを隠<sup>りてい</sup>していた李定<sup>りてい</sup>を用いたこと [→作品番号 03-4-004] などがあった。范鎮が辞職すると、当時都にいた蘇軾は、「公は退かれても名誉はますます重んじられましよう」と、賀意を范鎮に贈った。すると、范鎮は、「天下が害を受けて自分が名誉を受けるなど、自分の本意ではない」と応じたのだった。

### 【訳文】

小人<sup>しょうじん</sup> [つまらない連中]は、事の軽重がまるでわからない。

公<sup>こう</sup> [范鎮]は、地位を軽く見て、暇な地位に退くのも少しも難しいとはしない。

公は、広々とした天下の大道を歩み、心にひっかかることは何もない。

公の言論は深く、聴く者の肝を寒くさせる。

公は若い頃からずっと時事を憂いてきたので、髪が真っ白だ。



しかし、仙薬のお蔭であったりするのだろうか、  
いまも元気にこの俗世に留まっている。  
公は無心であるから、どこいいても安らかで、  
誰と会っても、酒を飲むのを楽しみとしている。  
公は六十三歳で職を退き、  
ある日思い立って万里を旅し、郷里の蜀シヨクの各地を巡った。  
老いて身はいよいよ健やかで、  
そこの山を登ったくらいでは十分に満足しなかった。  
公がおられるところの道は、  
いずれも雲の彼方へと飛び行く鳥の道につながっている。  
このたび公が西の洛陽らくようへと行くのは、  
ゆすらうめ桜桃が咲き、たけのこ筍が熟すころだと思うからだろう。  
くつ杖と履を携えてあちらに着いたなら、  
園亭の客となってここかしこを見て歩くであろう。  
はんちくじ斑竹寺で花を手折り、せきろうたん石楼灘で水遊びをし、  
かつて売られてしまう馬を憐れんだ白居易はくきよいに同情してみたり、  
雷に驚いてやたらと恐れた韓愈かんゆを笑ってみたりするであろう。  
はたまた、すうざん嵩山に登って苔むす洞穴を見たり、  
てんだんさん天壇山に登って松が空を覆うのを見たりもするだろう。  
そして試りゆうしに劉先生を誘って、  
かの靖長官せいに会ってみてはいかがでしょう。

【補足】[例によってたくさんの故事を踏まえた詩であるが、最後の劉先生りゆうと靖長官せいは何のことかわからないだろうと、蘇軾自身が注を書き添えている。「劉幾りゆういくがかつて

このようにいった。『<sup>すうざん</sup>高山の奥深いところで、眼光が猫のような人に会ったのだが、あれはきっと靖長官だったのだらう』。靖長官とは、<sup>とう</sup>唐の終わり頃の役人で、官職を捨ててついに仙人になった人で、その姿を宋代の役人である劉幾（りうけい）が見たのである。それで、<sup>はんちん</sup>范鎮も今回の旅で靖長官を探してみてもはどうだろうかかと戯れたのだ]

## ■ 【05-3-014】次韻景仁留別

【**解題**】上と同じときに、<sup>はんちん</sup>范鎮 [<sup>あざな</sup>字は景仁<sup>けいじん</sup>] が詠んだ別れの詩に次韻した。

### 【訳文】

<sup>こう</sup>公 [<sup>はんちん</sup>范鎮] は古い、我もまた衰えた。

お会いする機会がわずかしかないのが恨まれる。

出発に臨んで一杯の酒を傾ける、

この意は山岳（こうそ）よりも重いものがある。

公の詩の言葉は、白い麻布よりも清いが、

私の詩の言葉は、琴の黄鐘（こうしゅう）の調べの音よりも濁っている。

公の詩が新たにして妙味のあることには和し難いが、

公が酒を飲むことは少ないのでそれはどうにか学べるだらう。

カひとつとっても取り柄もない私であるから、

もとより武人としては役に立たないので、

しど鄙びた東の国（じょう） [徐州] へと出て行くことになった。

千里の遙かな道も憚ることなく、

公がもしも来られると聞いたならば、

大慌てで髪を束ね、下駄をさかさまに履いて出迎えるであらう。

■ 【05-3-015】 書韓幹牧馬図

【解題】 貴公子おうしんの王詵かんかんが、韓幹ぼくぼが描いた『牧馬図』を見せに蘇軾のもとにきて、何か添え書きをしてほしいと頼み、この詩を作った。韓幹は唐代とうだいの有名な画家で、馬を描くのを得意とした。韓幹の画を所有していることから、王詵が極めて裕福であることがわかる。韓幹は画を曹覇そうはに習い、同じ時代を生きた杜甫とほは、曹覇の画について幾つかの詩を詠んでいる。その中で弟子の韓幹について次のように言及している。「韓幹は早くから曹覇について学び、やはり馬を描くのが得意で特別なスタイルを窮めた。しかし、韓幹は肉を描くばかりで骨を描かないので、駿馬しゅんめも気が抜けたようになってしまい、残念である」。馬は、一般的に肉がひきしまつて骨格が顕われ出るのがよいとされていて、肉付きよく描いた韓幹の馬を、杜甫は感心しないといっているのである。

【訳文】

ちやうあん  
長安の南の山の麓、  
けんすい いすい  
汧水と渭水の間、  
とう かいげん てんほう  
想い見みるのは唐の開元、天宝のころ――  
しんせん  
牧場はハカ所に分かれて秦川のあたりにまで迫り、  
四十万匹の馬が雲のように地を覆って広がっていた。  
馬の種類はと見れば、  
すい ひ いん らく り りゆう げん はくぎょ せきと せい こうかん  
騅、駟、駟、駱、驪、騮、駟、白魚、赤兔、駢、皇鞬、  
あたま おおどり くび おそろし あでや  
竜の鬚に鳳の頸、犖げなのもいれれば妍かなのもいる、  
めづら すばしっこ せいかくのおろき  
奇しい姿や逸徳さで、駑頑を隠しているのもいる。

馬を世話するのは碧<sup>あお</sup>い眼<sup>がいにん</sup>の胡兒、

季節がくると、手足の動きも鮮やかに毛並みを整え、

皇帝の御前へと馬を送り出す。

迎える皇帝は礼服を召し、

池のまわりに後宮の美女三千人を並べて待つ。

美女の紅い化粧が日に映え、その光が淵を流れ下る。

そこに馬が現れ出るやいなや、

一瞬にしてあたりは寒いくらいにぴんとひきまり、

馬が往きつ戻りつ、歩んだり跳ねたりするたびに、

早瀬に波が生じて水しぶきが飛ぶばかり。

ここにあまたの画工は筆を執って描こうとするが、

ただ顔料を合わせるだけで手が出ない。

独<sup>そうは</sup>り、曹<sup>かんかん</sup>覇將軍の弟子の韓幹だけが描いて見せたのがまさにこの画。

厩舎で育った馬は、肉が多くて尻の骨が円く、肉の中の骨を描くのは難しい。

馬に、金色<sup>おんがい</sup>の羈<sup>くわ</sup>、玉<sup>つわ</sup>の飾<sup>ししゅう</sup>りの勒、繡羅<sup>しゅうら</sup>のついた鞍を付け、

さらには、鞭<sup>むち</sup>筆<sup>あ</sup>を加え烙印<sup>りやくいん</sup>を刻んだりするのは、

天より与えられた馬としての完全性を傷るもので、

この画に描かれた自然に近い馬の姿には及ばない。

いまかの牧場のあった平原は荒れ果て、草が生い茂っている。

この画中の馬は、そこを自在に駆け廻り、

鴻<sup>おおとり</sup>を驚かし、兔を跳び出させ、己とどちらが速いか争いたいと、

思っているのだらう。

あるいは古代の馬術の名人が行ったように、

万里を超えて、飛んで天にまで昇りたいと考えているだろうか。

いずれにしても、首をうなだれて車を曳くようなことは断じてしないのである。

【補足】〔(1) 詩の冒頭に「開元<sup>かいげん</sup>、天宝<sup>てんぼう</sup>」とあるのは、玄宗皇帝<sup>げんそう</sup>の治世下の元号で、  
ちょうど韓幹<sup>かんかん</sup>や杜甫<sup>とほ</sup>が活躍していた時代である。(2) 途中に「騅<sup>すい</sup>、駉<sup>ひ</sup>云々」と馬へん  
の字が並ぶのは、馬の様々な性質を表す語で、意味はわからずとも、語呂よく専門用  
語が並べられていると見るだけで十分であろう〕

### ■ 【05-3-016】 韓幹馬十四匹

【解題】 事<sup>こと</sup>のついでに、韓幹<sup>かんかん</sup>の馬の画に関する詩と文章を合せて見ておこう。一つ目  
は韓幹が十四頭の馬を描いた画を見て詠んだ詩で、上の詩よりも半年ほど後の作品で  
ある。古来馬を詩に詠み込むのは難しいとされた。若い頃の杜甫<sup>とほ</sup>は、己の才能を世間  
に認めさせて官職を獲得しようと必死だったので、他の人が尻込みするようなテーマ  
にも果敢に挑み、馬の詩も幾つか作って具眼の士をうならせた。当時も科挙はあった  
が、試験の成績よりも、事前にどれだけ有力者に気に入られるかということの方が決  
定的に重要だった。杜甫はたくさんの詩を作って各方面の有力者に献じ、それは涙ぐ  
ましいまでの努力をしたのだが、報われなかった。杜甫の詩才は保守的な実力者には  
理解されなかったのである。杜甫の一連の馬の詩を超えることは誰にもできまいと思  
われていたのだが、蘇軾<sup>そうだい</sup>は韓幹の馬の画に触発されて、宋代の代表選手として馬の詩  
に挑もうと思いついたのだらう。

#### 【訳文】

先頭を二匹の馬が並んで走り、八つの蹄が一つに集まる。

次に二匹の馬が頸<sup>くび</sup>を曲げ、驤<sup>たてがみ</sup>と尾が平行に並び合う。

一匹の馬が前に進もうとして、後ろ脚を挙げる。

一匹の馬がその後ろに退いて嘶く。

ひげ  
鬣の長い老いた異邦人の飼育係が馬にまたがり、後ろを顧りみて何かをいう。

その者は前世には馬であったので、馬の言葉に通じているのだろう。

飼育係の後方にいる八匹の馬は水を飲んだり歩いたりして、  
水の流れが口に入るとき音が聞こえてくる。

八匹のなかで前にいるのは林から出た鶴のように水を涉り終え、  
後方にいるのはこれから水を涉ろうとして佇む鶴のようである。

最後に残った一匹こそは馬の中の竜ともいえ、  
嘶かないし、動かないし、尾が風の中で揺れるだけ。

韓幹が画く馬はまさに真の馬、  
私は詩を作ること画を見るようでありたいと思う。

いまの世には良馬を見出すはくらく伯楽もいなければ、  
この画を描く韓幹もいない。

この詩とこの画は、果たして誰が見るべきものであるのだろうか。

## ■【05-3-017】韓幹画馬賛

【解題】次は四頭の馬が描かれた画に添えた賛。前の詩とよく似た構成になっている。

### 【訳文】

かんかん  
韓幹が描いた馬は四匹。

一匹は陸にあって、首を立て、鬣たてがみを奮い、何か望むところがあるようで、脚を留めて長く嘶く。一匹は水を涉ろうとしていて、尻を高し首を下げ、渡るによいところを選びつつ、いまはまだ進みかねている。残り

の二匹は水にあって、前なるものは後ろを振り返り、鼻で何やら語ろうとしている。後ろなるものはそれに応じるでなく、水を飲むとして留まっているようだ。

厩で飼われている馬かと思えば、前にまわりつく手綱がなく、後ろに叩かれる鞭がない。野生の馬かと思えば、目が張りとして耳がぴんと立ち、胸に豊かに肉が付き、尾が細く、どれも良馬としての基準に当たっている。

この静かなたたずまいは、賢者揃いの貴君子たちが帯を緩め、かぶりものをとって、悠然と水に臨んでいるのにも似ていよいか。

馬も貴君子も想うのは——高く飛んで遠くに遊び、鹿を友として天寿を全うしたい。

しかし、そういうとしても、それはなかなか得られることでない。せめて、あくせくすることなく、悠々と遊んで、ゆるゆる歳月を過ごすことならできであろうか。

## ■ 【05-3-018】 与司馬温公

【解題】<sup>はんちん あざな けいじん らくよう</sup>范鎮 [字は景仁] が洛陽に行ったのは3月の初めで [→作品番号 05-3-013]、その月の終わりには帰ってきたことが<sup>しほこう</sup>司馬光に宛てたこの手紙からわかる。司馬光は蘇軾より17歳年長で、非常に学識があり、<sup>えいそう</sup>英宗皇帝からも<sup>しんそう</sup>神宗皇帝からも厚く信頼された。始め<sup>おうあんせき</sup>司馬光は王安石を高く評価し、国政の改革を王安石に託すことを皇帝に勧めるほどであったのだが、改革の中身が明らかになるにつれて批判的になり、後には鋭く対立するようになった。それでも神宗皇帝は司馬光にはしばしば意見を尋ねていたが、<sup>しじつ</sup>司馬光は次第に政治の実際から離れ、巨大な歴史書である『<sup>しじつ</sup>資治通鑑』の編集に専念し、後に洛陽に退いた。このころ、洛陽には<sup>ふひつ</sup>富弼や司馬光など改革に反対の立場をとる政界の大物が集まり、<sup>はんちん</sup>范鎮が洛陽に赴いたのは、そのような人々と会うのが目的であったようだ。蘇軾はかつて母の墓誌銘の執筆を司馬光に依頼するなどの交流があり [→作品番号 01-2-017]、蘇軾が違法な商行為をしたと告発されたと

きには [→作品番号 03-3-023]、司馬光は皇帝の前で蘇軾を庇う弁明をしたこともあった。

### 【訳文】

春の終わりに、<sup>ほんちん</sup>范鎮様が<sup>らくよう</sup>洛陽からお帰<sup>かたけな</sup>りになり、忝くもお手紙を頂戴いたしました。『<sup>ちようぜんたい</sup>超然台の詩』の雄篇を添えてくださいませ、喜んで日々読み返しております。都を出て職務に就<sup>いさま</sup>つために暇もなく、あれやこれやとあわたししくしております。……

【補足】 [司馬光もまた、蘇軾の『<sup>ちようぜんたい</sup>超然台の賦』と蘇軾の『超然台の記』 [→作品番号 05-1-077] に触発されて詩賦を詠んだ一人であった]

## ■ 【05-3-019】 送魯元翰少卿知衛州

【解題】 蘇軾が都のすぐそばにいと聞いて、大勢の人が蘇軾に会おうとして頻繁に来客や誘いがあったようで、これまでに我々がその名を見ている人物としては、<sup>せんそう</sup>錢藻、<sup>そんしゆ</sup>孫洙、<sup>こそうゆ</sup>胡宗俞、<sup>りんき</sup>林希、<sup>ちようほし</sup>晁補之がいて、特に魯有開 [字は元翰] にはこの送別の詩を贈っている。魯有開とは<sup>こう</sup>杭州時代に交流があり [→作品番号 04-2-079 など]、魯有開が<sup>えい</sup>衛州知事として赴任することになって、都から旅立つ前に蘇軾に会いにきたのである。魯有開は立派な髯を蓄えていたので、この送別の詩では、髯卿 [髯の君] と呼んでいる。また、魯有開はかつて副宰相まで務めた<sup>ろそうどう</sup>魯宗道の甥であることから、「<sup>どうどう</sup>堂堂の元老の後」とも詠まれている。

### 【訳文】

無用な人間は居場所がなくて、<sup>はん</sup>范公の園庭に身を寄せている。

そうこうするうちに、<sup>ゆすらうめ</sup>桃李が蔭を作り、<sup>なづな</sup>薺も麦も伸びて、繁るまでになった。



門を閉ざしていると、春の昼は永く、黄色い蜂がこぎやかに飛ぶだけ。

誰かが酒を携えてわざわざきてくれたりしたならば、

にれ  
榆や柳が群れ立つ村にでも行ってともに酔いたいものたと思っていたところ、

ひげのみ  
この髯卿はどういう人なのか、

これで一カ月に三度も我が門を叩きにきてくれたてはないか。

私から出向いて挨拶することがないのに、

髯卿はきてくださるのでその意はいよいよ敦いものがある。

髯卿はどうどう堂堂の元老の甥で、じんじん げん仁人の言を倦むことなく説き続ける。

おも憶えば、こう杭州にあった年は、髯卿と私の情好は兄弟にひとしかった。

時には氷雪の中であっても、笑って語れば春の温もりを覚え、

時には夜に急に飲もうということになって、

酒を求めて我が家のうちを探してみたものの、箆笥の隅にも酒の肴になるようなものはなく、

かたじけなくも、髯卿が自ら煙の中で火をおこしてくださった。

杭州で別れてから今までにどれほど経ったのか、

向き合っていると、あのころのことが夢のように覚える。

このたび、髯卿は北に行くと私に告げて、

新しい詩とすばらしい酒樽を贈ってくれた。

髯卿が行かれるのはたいこうざん太行山が斜めに連なるところ、

こうが黄河の湧き立つ波を越えた先にある。

それでも、髯卿は官員として不遇というわけではない。

えい衛州は都の西北の垣根に当たる場所だ。

民衆はいわば魚のようであって、網を見れば驚いて逃げ惑う。

水は、千丈の深さまでぐっすり見えるほどに澄んでいるよりも、

一寸先も見えないほどに濁っている方がましてある。

刑罰を司るのは地方官の重要は職務ではあるけれど、

思うに、民の源を養うべきである。

どういことかという、昔のある知事は、

民衆がきちんとした下着を身に付けられるようになる政治をしたところ、

しばらくすると、人々は善政を讃える歌を唱えるようになった。

そのような政治をしていれば、盗賊についてあれこれ言うようなことは必要なくなるのだ。

【補足】[蘇軾は密州での経験から、困窮のあまり追い詰められて盗賊となった者を厳しく取り締まる政治よりも、民衆の生活の基盤を確保する政治をすべきだといっているのである]

## ■ 【05-3-020】次韻子由送蔣夔赴代州学官

【解題】同じころに、蔣夔が代州にある学校の教授として赴任することになり、弟の蘇轍が作った送別の詩に蘇軾が次韻した。蔣夔の名は作品番号 05-1-071 で見ている。代州は北の辺境の地で、改革に批判的な蔣夔はそのようなところにしか居場所を見出せなかったのだろうか。

### 【訳文】

功利を求めて先を争うのは、法を変える端緒となる。

旧来の典型を守るのは、いまや世間の落ちこぼれとなった老成した人だけだ。

人は困窮に置かれて後に立派な詩が作れるようになる——

この説は十分には信じられないが、

凝った刺繍は市場に投じる金額の多寡による——

こちらの説はかねていわれている通りだ。

だい代州の若者は、志は大きく不器用であると聞く。

貴君を困んで種々の議論を戦わせ、心に適う説を求めるとあろう。

貴君が向こうから帰ってきたときには、

「あちらの雁は旨かったかい」

などつまらないことを私は問わない。

世俗を憎んだかの王符おうふが著した『潜夫論』せんぷろんのような著作を、

貴君がものにしてきたのを見せていただくでしょう。

【補足】〔(1) この詩の前半は改革への批判となっている。(2) 刺繡云々は、より精緻な刺繡を求めるのならそれだけたくさんのお金を投じなければならないという昔からの言い回しを踏まえて、何でも国庫の増収に結び付けようとする改革を皮肉ったのである。(3) 最後の雁云々は少々ごかんの解説が必要である。後漢の時代に皇甫規こうほきという人〔蘇軾に比する〕がいて、ある職務を終えて郷里に帰った。同じ時期に官職を金で買って雁門がんもん〔すなわち代州だい〕の知事になって勤めを終えた人物〔改革の時流に乗ってにわか職を得た者を比する〕も郷里に帰ってきて、皇甫規のもとを訪れた。皇甫規は寝たまま出迎えに出なかったが、その者はずかずかと入ってきたので、「あちらの雁は旨かったかい」とだけいった〔私服を肥やす以外に何もしなかっただろうという皮肉〕。一方で、王符おうふ〔蔣夔しょうきに比する〕がくると、皇甫規は驚いて出迎え、歡を尽くして語りあった。王符は郷里に退いて世の中の是非を論じる『潜夫論』せんぷろんを書いたので、蘇軾はそのような著作を書くことを蔣夔に期待すると言って励ましたのである。これだけの内容が「帰來問雁吾何敢、疾世王符解著書」という十四文字に籠められているので、詩を味読する人にはそれなりの読解力を必要とした。蘇軾は複雑な故事の用い方をすることを得意とし、注釈家がいくら頭をひねっても何が言いたいのかいまだに

解明できていない詩句が幾つもある]

## ■【05-3-021】李若之布気

【解題】蘇軾の長男の蘇邁は范鎮のもとに寓居する間に妻を迎えたが、一方で次男の蘇迨は小さいときから病気がちであったので [→作品番号 04-2-053]、この時期に特殊な治療を受けている。そのことを記した文章を見ておこう。蘇迨はこのとき8歳であった。

### 【訳文】

『晋書』[晋朝の時代の史書]の「方技伝」[特殊な技の持ち主の伝記集]を見ると、幸霊という者がいた。

「幸霊の父母は、稲の見守りを幸霊にさせた。牛が稲を食らったのだが、幸霊は牛を追ひ払わなかった。牛がいなくなってから、幸霊は牛が食べ残した稲を起こして元通りに立てた。父母はそれを見て幸霊を叱りつけた。幸霊は、『それぞれのものにはそれぞれに食べたいものがあります。牛は食べたいものを食べただけなのですから、追ひ払うのはおかしいです』と、いった。父母はますます怒り、『そんなふうにするのだったら、食べ残しを起こしてやる必要もないだろうに』というので、『稲は生きようとしています。牛がそれを妨げたのですから、ぼくは稲を助けるべきなのです』

幸霊のこの言葉には理が具わっている。幸霊は子供のときから道を知る者だったのだろうか。

「呂猗の母は痿痺の病[手や足がしびれて萎えてしまう病気]に十年以上にわたって苦しめられていた。幸霊はその治療に当たった。幸霊は、病に伏せっている母から数歩のところの所に座り、しばらく目目を閉じていた。そして、『お母さまを助け起こしてそこに座らせなさい』と、いった。呂猗は、『もうずっと病気なのです。いまいきなり起きることなどできません』『試しに手を添えてみるのだ』。二人で助け起こすと、幸霊は、『立たせてみなさい』と、いった。母は二人に支えられて立つことができた。少ししてから幸霊は

二人を離れさせると、母は自力で歩けた」

道を学び、<sup>き</sup>氣を養う者は、己を十分に満した<sup>き</sup>氣の余りを人に与えることができるのだらう。都の<sup>どうし</sup>道士の  
李若之はそのようなことができて、それを「布<sup>ふ</sup>氣」と称している。

我が子の<sup>たい</sup>迨は小さいときから体が弱くて病気がちである。李若之が迨と向き合わせに座って布<sup>ふ</sup>氣を  
行ったところ、迨は腹の中から日の出の太陽に照らされたような感じかして、ほかほかとした温もりを得  
た。

李若之は<sup>か がく</sup>華嶽でたまたま道を得た異人に会ってこの術を得たという。

【補足】[現代の我々からするとナンセンスな治療法であるが、<sup>き</sup>氣 [宇宙に充滿する  
エネルギーのようなもの] を人から人へと移転できるとするなら、理に適っていると  
考えることも可能なのだらう]

## ■ 【05-3-022】京師哭任尊聖

【解題】都の近くに滞在する間に、悲しい報せも受けた。同郷の先輩である<sup>にん し あざな</sup>任孜 [字  
は<sup>じゆんせい</sup>遵聖] が亡くなったのである。任孜は弟の<sup>にんきゆう</sup>任佺とともに科挙に合格し、郷里の偉人  
として「<sup>だいにん</sup>大任」「<sup>しょうにん</sup>小任」と呼ばれていた [→作品番号 03-2-002]。この詩では任孜のこ  
とを「<sup>ろうにん</sup>老任」と呼んでいる。

### 【訳文】

私は故郷に帰らずにいること十年、

子供達は日夜に成長しているが、

自分はやたらと年齢を重ね、しかも次第に衰え<sup>しほ</sup>凋みつつある。

よしみのあった先輩方が亡くなったと聞くと、

いつも涙を流し、声を放って泣いてしまう。

まして老任先生である……

先生はまれに優れた人で、  
我が父も年長者として敬っていた。

文章ではいささか名誉を得て、  
詩はきわめて清らかで堂々としている。

官員としての能力も高く、  
談笑しつつ万人の上に立った。

問題の多い土地に行くのをむしろ喜び、  
土地のならず者を赤子の腕をひねるようこしてやっつけ、  
鬚をぱりと動かすだけで狡猾な小役人を震え上がらせ、  
悪だくみをする將軍には歯を噛み砕かんばかりの勢いで対峙した。

しかし、哀しいことに不遇の運命であったのか、  
才能があるが故にいつもこらし謗られ、

ついに低い地位のまま、  
遠い山の地、あるいは荒廃した土地に行かなければならなかった。

私は官界に入って久しく楽しまず、  
川や山を隔てて先生を望み見ては、  
いずれ退いて先生のもとで田畑を耕し、  
季節ごとに酒食をもっていた勞わりあいたいと思っていた。

この懐いおもはもはや遂げることはず、  
郷里に帰っても、見られるのはうずたかく土が盛られた墓だけなのである。

泣いて都から西を見れば、  
落日の内に千の峰が含まれる。

先生にはただ一人の男児があって、  
先生は掌中の珠のように大切に、  
七、八歳のころからすでに牛を食らうばかりの気迫を見せていた。  
いつかその人が都にやってきたなら、先生のことを語り合いたいものだ。  
そのときに、  
人はただ息子の優れた器量に驚くであろうが、  
私だけ、それは先生譲りであると知っているのだ。

### ■ 【05-3-023】 与文与可

【解題】4月、蘇軾は都には入れないままに、新たな任地である徐州じょに向かった。その折に親友の文同ぶんどう 文同あざな 与可よか [→作品番号 05-2-012 など] に送った手紙。

#### 【訳文】

私は密州みつから河中府かちゅうに移ることになって都の門外にまできましたところ、改めて徐州じょに赴任することになりましたので、家族を連れて今度は東に向かいます。官に仕えるからには行き先を選ぶものではありませんが、私の見るところでは彭城ほうじょう[徐州]は河中より尤も過ごしやすいところでありましょう。

今日はこれから汴河べんがに沿って任地に向かいます。弟も一緒に、聞かところでは貴君と婚姻について相談しているとか、極めて喜びに堪えません。かつてから貴君とは互いに深く契りを結び、さらにまた婚儀をなすとは無窮の喜びで、まことに美事すばらしい、美事すばらしい！ ただ我等は貧しい家柄でありますから、どうか貴君は我等を粗野な者とは見ませんように。

出発の間際でごたごたとして、ひどく乱雑な手紙となってしまいました。任地に着いてから改めてお便りいたしましょう。

【補足】[この手紙にあるように、蘇轍ぶんどうと文同の間で婚儀の相談が進んでいて、蘇軾

の娘と文同の息子の文務光ぶんむこうが後に結婚する]

## ■ 【05-3-024】代張方平諫用兵書

【解題】上の手紙にあるように、蘇軾べんがは弟とともに船で汴河べんがを東に下った。弟は、南京留守なん [南京応天府の知事] になったばかりの張方平ちょうほうへいの幕僚として招かれていたので、ちょうど同じときに同じ方向に移動することになったのである。都から南京応天府は南東に 100 キロほどで、速い汴河の流れを下って行くので、移動はたやすく、蘇軾もまずは南京応天府に行って張方平に会った。それは蘇軾こが杭州に赴任する途中で陳州ちんに立ち寄って以来で、6 年ぶりであった。張方平はその後は公務から退いて南京応天府に隠棲していたのだが、この年の 2 月に公職に復帰したのだった。張方平は陳州知事であったときにも蘇轍を州学校の教授として招いたので、張方平は蘇轍の人柄を愛していたのだろう。3 人が顔を合わせれば、話題は政治上の問題にも及び、西方での軍事行動 [→作品番号 05-1-044] を止めなければならぬと 3 人の考えが一致し、張方平が皇帝に意見書を提出することになった。それを蘇軾が代筆したのがこの文章である。

## 【訳文】

臣は兵[軍備ならびに実戦]を好むのは色[性的放縱]を好むのに似ると聞きます。色はいろいろな面で生命を損ない、色をやたらと好む者はきっと死に至ります。兵はいろいろな面で民を賊そこない、兵をやたらと好む者はきっと亡びに至ります。これは必然の理であります。

古の聖人は皆やむをえないところから兵を用い、勝つときには完全に安らかであるような福うを享け、勝たないときにも意外なところからわずら患いが生じたりするようなことはありませんでした。後世の用兵は、皆なくともよいのにしないてはいらなくなつての行為であったために、勝つたときにも、後から異変が生じて大き



<sup>わざわ</sup>な禍いとなり、勝たないときには、すぐに異変が生じて小さな禍いとなりました。聖人は勝負によって得るものを算段してそれをあてにするようなことはなく、兵を用いた後の禍を深く戒めました。

これはどういふことかという、十万の軍隊を動かすと一日に千金を費やすばかりでなく、国中が大騒動となります。軍需物質を輸送するための人々が道路を行き来し、農業に携われなくなる者が七十万家にもなります。国庫はたちまち空になり、民衆は窮乏して飢えや寒さに迫られ、その後には必ず盗賊が出没する憂いが生じ、死傷する者、愁い怨む者が多数になり、ついに各地で水害、旱害が頻発するまでになります。すると將軍の中に兵士を擁して跋扈しようとの心を持つ者が現れ、あるいは民衆の中には長く苦役されたのを恨んで反乱を意図する者が現れます。このような異変が百出するのは皆兵を用いることから始まるのです。

このようになったときには、最初に事を興して用兵の議論を始めた者は、最も重い天罰を受けるべきであります。多数の平民が故なくして用兵のために死に、その怨みが天下に充積しているのですから、必ずその咎を受ける者がいなければなりません。だから聖人は兵を用いることには畏れを抱き、重大なこととして、やむをえないときでなければ敢えて兵は用いなかったのです。

古より人の上に立つ君主で、好んで干戈<sup>かん か</sup>を動かし、敗れて亡んだ者は数え切れないほどたくさんいます。臣はそれらについては敢えて申し上げません。陛下のために、勝った者についてのみここで申し上げたいと思います。

<sup>しん し こうてい</sup>秦の始皇帝は六カ国を平定して天下を一つにし、さらに外に対して兵を構えました。そのために徴兵されて辺境に連れて行かれる患いを天下の人々は被りました。新たな領土を広げたことでは古代からかつてないほどでありましたが、始皇帝が死んで間もなく、天下は怨みから秦に離反し、二世皇帝は殺され、三世の王となった子嬰も擒<sup>こ まい とりこ</sup>となり、その滅亡の悲惨さはやはり古代からいまだかつてないものであります。

<sup>かん ぶてい ぶんてい けいてい</sup>漢の武帝は、文帝、景帝の時代の有り余る豊かな富を用いて、<sup>きやうど</sup>まず匈奴に挑みました。戦争は連年続いて終わらなくなり、ついに様々な国へと戦争が拡大していきました。毎年毎年兵士も軍需物資

もたくさん徴発し、兵の向かうところではどこでも成功を収めました。武帝が最初に兵を用いたとき、天には大空いっぱいの長さのほき星が現れ、その春に皇太子が生まれました。それから戦争が続くと三十余年、無数の死者が生まれました。さらには皇太子が反乱を起こして、都におびたたい血が流れ、死者は数万人に及び、皇太子もその子も死んでしまいました。歴史家の班固は、皇太子は用兵の時代に成長し、用兵とともに終始した生涯であったと評しました。武帝は悔んで兵を用いる欲望に自ら克ちましたが、生涯の恨みはついに取り戻すことはできなかったのです。

隋の文帝は南朝の陳を下し、ついで外国との戦争を始めました。皇位を嗣いだ煬帝もその用兵の心は衰えることなく、強国を亡し、その威は万里を震わせました。しかし、民は怨み、賊が起り、隋は瞬間に亡んでしまいました。

唐の太宗は「神武」といわるほどに無敵で、用兵を最も好み、突厥、高昌、吐谷渾などを破り滅亡し、それでも満足しないで、自ら兵を率いて遼東に遠征しました。その志は功を立てることにあって、やむをえず兵を用いたのではありませんでした。その後には則天武後の難が起って唐の皇室は衰え、わずかに一本の糸でつながりやうなありさまとなってしまいました。思うに、兵を用いることの禍いは物の道理として逃れられないものなのであります。太宗は仁聖寛厚にして、己に克ち、人を裕かりして、ほとんど刑罰を用いないですむような治世を実現させました。しかし、その子に皇位を伝えた途端に、子孫は塗炭の苦しみに陥ったのは、太宗のなした善の報いとしてはありえないことであって、それはやはり兵を用いたことの禍いによるものなのであります。

以上のように観てきますと、漢や唐が兵を用いたのは寛大な仁政の後であって、勝利も、用兵の禍いはあってもかろうじて王朝は存続しました。秦や隋が兵を用いたのは暴虐の後で、勝つてついに王朝は滅亡してしまいました。臣は史書を読んでこのようなところに至ると、国家の計の過ちを傷んで、涙を流さずにはいられません。もしも、始皇帝、武帝、煬帝、太宗の四人の君主に、兵を用いる最初のときに、兵を用いることの難しさをよくわからせることができたならば、禍いは歴史に記録されるようなところにまでは至らなかったであらう。四人の君主は不幸にして兵を用いれば毎回勝ってしまったた

めに、功利に馴れて、患いを慮ることがほとんどなかったのです。

だから臣は、勝ったときにも、後から異変があって大きな禍いとなり、勝たないときには、すぐに異変が  
あって小さな禍いとなると、最初に申し上げたのです。このことはよくよく考えなければなりません。

昔我が朝の仁宗皇帝は天下を覆い育み、兵に心を用いることはありませんでした。将士は怠惰にな  
って安楽を偷み、武器は錆びて朽ちてしまいました。西夏の元昊がその隙に乗じて、密かに軍隊を動  
かし、西のはずれの延州、涇州、源州、麟州、府州のあたりに攻め寄せました。宋は破れること数回  
に及び、一万以上の兵士が失われたこともありました。しかし、天下は落ち着いたままで、一時期の戦  
闘が終われば事はやみ、民衆に怨みの言葉はなく、国に患いが残ることもありませんでした。それほど  
礼てかといと、天下の人々は皇帝には兵を好む心がないのを知っていて、天地鬼神もやむをえず兵  
を用いたという実情をよく知っていたからでありました。

いま陛下には天より賜った勇智があり、富強に意を置いています。即位以来、武器を整備し軍団を編  
成し、隣国の動きを探っています。群臣は陛下の意向を窺い見て、多くの者が兵を用いることを言うよ  
うになりました。そのようになってからは、国政を担う宰相には深く憂い遠くを思う心がなく、軍政を担う重  
臣には害を慮り難局に向き合い続ける見識がなく、官僚を監督する職にある者にはよい策を献じて忠  
を納める議論がなく、小さなところから大きなところへと、順に禍いの階段を上るようになりました。

まず薛向が横山における謀をなし、韓絳は深く敵地に入る計画を立て、陳升之や呂公弼等は陰で  
これと力を合わせましたが、軍団は敗れて喪われ、国の財産は消耗してしまいました。このときの敗北  
は、先の仁宗皇帝時代に比べたら十分の一にも及ばないものでありましたが、天は怒り人は怨み、辺  
境の兵士は離反し、都は騒然となり、陛下はこのために一月にわたって身を慎まなければなりません  
でした。どうしてそのようなになったのかといと、兵を用いる端緒を陛下自らが作ったからです。それで、官  
僚も民衆も、敵を怨むよりも陛下の過ちを思ったのでありました。我が朝の歴代皇帝の積み重なった徳  
の厚さと、天が天下を保ととする恩の深さによって、王朝そのものは揺るがずすみましたが、兵を出し  
ても功がないと、陛下を感悟させるように実は仕向けてくださったのでしょ。

ところが、浅はかな連中は、敗れたことを恥として、努めて勝ちを求めて、それで陛下の心に適おうとしました。それで、王韶は禍おうれういを熙河きがに構え、章惇は横山しょうじゅん こうざんに隙を見せ、熊本は渝瀘ゆうほん ゆるで難儀なことをしてかしました。これらは戦果があったように見せかけ、その実はすでに降参したものを殺害したり、老人や病弱な者を捕虜にしたりしたもので、中国本国を疲弊させて空しい無用の土地を取っただけでありました。陛下には勝利の虚名を受けさせ、実際の禍をゆるがせにし、ますます功名に奮い立たせようとするようなことになりました。さらには、沈起ちんき、劉彝りゅういが南方の地で軍事行動を起こし、十余万人が気候の悪い土地に行かされて、死者が半分にも及び、輸送路に当たる民衆は道に倒れ、食糧や軍事物資は敵を見る前に尽き果ててしまいました。これで兵を用いる意は少しは衰えるものと思われたのですが、李憲けん とうが洮州から出兵し、軍団は勝利して、いまは鋭気ますます盛んなありさまとなっています。陛下が一つの勝利を喜ぶのなら、その背後には四方の外国を軽視し、敵国を侮る意があると申せましょう。そのときには、天の意はもはや測り難く、臣は実に畏れるものであります。

戦争の勝った後に陛下が御覧になるのは、凱旋した将軍が勝利を報告し、陛下がお褒めのお言葉を賜り、群臣が祝いを述べるという、実に耳目に目覚まいありさまでありましょう。しかし、遠方の民が白刃のもとに頭や腹を切られ、あるいは餓えて骨と筋だけになり、あるいは財産を失って流浪し、子供を売り、あるいは失明し腕を折り、さらには絶望のあまり自殺するようなありさまは、決して陛下は御覧になることはないのです。慈父、孝子、孤臣、寡婦が泣き叫ぶ声は、決して陛下がお聞きになることはないのです。譬えれば、牛や羊を屠殺し、魚を切り刻んで、御馳走を作るようなものです。それを食べるならはなはだ美味でありましょうが、殺される牛や羊や魚には非常な苦しみがあります。陛下が、刃の下で牛や羊が泣き叫び、魚がまな板の上でもかきのご覧になったならば、最高の料理であっても、きっと食べるのは忍びかたくて箸を置くであります。まして、人の命を奪って、耳目に目覚まいありさまをなすというのはどうなのでしょう。

陛下の軍団が精強で、国庫が充実して、秦、漢、隋、唐の皇帝のようであっても、勝った後には、先に申し上げた通りに、禍乱がきつと起こり、救いかたくなってしまいましょう。まして、現在の将軍や官僚は

軟弱かつ凡庸で、昔の人に比べて全てにおいて及びもつきません。ここ数年来、公私ともに困窮し、長年国庫に蓄積してきたものは地を掃って余りがなく、地方の租税の蓄えも、上納されてほとんど尽きてしまい、官僚の俸給をかるじて払い続けるだけで、国家の重要な儀式を行った際に払われるべき賞与はずっとないままとなっています。このようなことでは、よほどの知恵者であっても、今後よい方向にもって行くことはできないのであります。

しかも飢饉があり疫病もあって、各地に盗賊が蜂起しているのは、京東路、河北路ばかりではありません。もしさらに軍事行動がもう一回起こりましたならば、苛酷な徴発がすぐになされ、民衆にはその困窮を告げる先がなく、勢い大盗賊とならずには、自らの命を全うできなくなってしまいます。外国との争いが深みにはまり、内患も同時に起ったならば、秦が滅亡したときの形勢がまさにいま現出するようになりましょう。これが臣が夜も眠らず、食事の間も嘆息がやまずに憂い、泣くことを止めることができないまでになっている理由であります。

臣はこのように聞いています。大きな事業を成し遂げるには必ず天の心に順わなければならないと。天の向うところに向かって事を挙げれば必ず成功し、天の向かうところに背を向けて事を挙げれば必ず失敗します。天の心がどこに向かっているのかは、災害、祥瑞、豊作、凶作の間に現れます。近年は、日食、星変、地震、山崩れ、水害、旱害、癘疫が連年続いて終わりがなく、民衆の半分が死にさらされています。天の心の向うところはここに現れているのです。しかし、陛下は断然として顧ることなく、事を興してやめようとしません。譬えるなら、父母の前で子が過ちをしているようなもので、子が静かに反省して恭順に自分の失敗を認めて自分を責めるのなら、きっと父母は許すであります。もし子が召使たちを叱責して、ほしいままに鞭で打ち、それで父母に仕えようとしたならば、父母は決して赦してはくれないうでしよう。

臣はこのように願います。遠く先の世の興亡の跡を見て、深く天の心の向うところの道理を察して、兵を用いる意を絶って、国境を保って隣国と仲睦まじくして、静かにして何か事を構えることなく、国家の長久の計画を固くしていたたきたいのです。そして、太皇太后、皇太后のお二人に朝夕に仕え、天下の

億兆の命を済すくっていただきたいのです。そうすれば、臣わたしは溝に倒れて死んでも満足であります。

昔、前漢こうその高祖は群雄を破ってついに天下を一つにし、後漢こうぶていの光武帝は百戦百勝して漢を再興しました。しかし、高祖は白登城はくとうじょうで外敵に囲まれると和親の方針を定め、光武帝は西域諸国から漢の配下に置いてもらいたいとの申し出があるとそれを謝絶しました。この二帝は兵を用いることを知らなかったのではありません。多くの戦乱を潜り抜けて、深く遠く患いを慮ったのであります。いま陛下は深く宮中におられるままで、軽々しく討伐を議論わたしされています。臣は凡庸で臆病であります。ひそかにそれは過ちであると思っています。

臣下の者が主君に意見を申すときに、主君がすでに厭わしく思っていることならそれを止めるのは、力を使わなくても簡単にできます。しかし、主君が銳意行こうっていているときに、それを折るのは非常に成功しにくいことです。およそ血気さかんな者は皆勝つのを好む意があります。その意気盛んなときには、そこらのつまらない人間であっても、それをやめさせることはなかなかできません。智識が特別にあって、度量が人に過ぎたる者でなければ、勇み奮い立っている最中に、自分の考えを捨てて、人の意見に従って、正しい義を聴こうとする者はありません。今陛下は武を用いる意欲が盛んで、その勢いをほかに振り向けることはできません。そのようなことわたしを臣は知らないわけではありません。しかし、意見を献じてやまないのは、陛下がまことに聖徳寛大で、よい考えを聴いて納められるのをこれまでも見ているからであります。衆人が普通に勝ちを好む心を陛下には望まないのです。

さらに臣はこのように思います。陛下が将来自ら兵を用いたことの害を御覧になったときこは、必ず哀あい痛悔恨つうかいこんされて、左右の大臣が一言も言わなかったのをなぜかと追求されるでめししょう。だから敢えてここに申し上げるのです。

臣わたしは老いて間もなく死ぬ身であります。地下で先帝にお会いしたときに、ここで何も申し上げておかないのなら、合わせる顔がありません。そのような臣わたしの思いを察してどうか哀れみください。

【補足】[これは張方平のために代筆したものであったが、蘇軾の用兵論の到達点で、これから後の蘇軾はもっぱら平和主義者として事を論じるようになる]

## ■ 【05-3-025】 宿州次韻劉涇

【解題】張方平ちやうほうへいはすこぶる蘇軾兄弟なんけいおうてんに厚く、蘇軾が南京じよ心天府から徐州に向かおうとすると、蘇轍も一緒に行くのを許してくれた。兄弟は引き続き行動を共にし、南京心天府からさらに 100 キロ余りしゆくで宿州に着き、知事りゆうけいの劉涇あざな きよさい [字は巨濟] と会った。これは劉涇の詩に次韻したもの。劉涇が父親の喪に服していたときに蘇軾が送った手紙を作品番号 03-3-005 で見ているが、その後、劉涇は公務に復帰していたのである。この詩には「劉涇の亡くなった兄りゆうべんの劉汭も文章に優れていた」と添え書きがあり、その兄の死は本意なものであったようで、劉涇は世の中に対して不満を抱いていた。

### 【訳文】

私はいま引退して休みたいとの思いがあって、  
楽器を奏でるような気分になることもはや稀で、  
春に新しい衣服を新調して気の合う仲間とそぞろ歩きを楽しめるようになるのは、  
果たしていつのことだろうか。  
あれこれ愁いがあるために、いわゆるはくほっさん せんじょう「白髪三千丈」で、  
用のない身であるために、皮ばかりがたぶたぶたたるんでしまっている。  
若い頃から、富貴は危機を踏まねば得られないいやなものであると知っていたが、  
いまでは、文章は実につまらない小さなわざ技であると覚っている。  
昔りくき、陸機は刑に臨んで、かつて親しんだ鶴の声を想って嘆息した。  
鶴はいまも大空を飛んでいようが、貴君の兄はもはやいない。  
そのために私はこの詩を吟じつつ涙する。

【補足】 [(1) 陸機りくきの故事のココロは、死に際して、自分にとって本当に大切なこと

が何であるのかをやっと気付いたのでは遅いということ。(2) 劉涇りゅうけいは不満を軽々しく口にする傾向があったようで、もう少し深く物事を考えてはどうだろうか、この詩はかなり遠まわしに言っているのだろう]

## ■【05-3-026】徐州謝両府啓

【解題】蘇軾は4月21日に徐州じょに到着した。徐州は京東東路けいとどうに属し、彭城ほうじょう、沛はい、蕭しょう、滕とう、豊ほうの5県が属し、州の役場は彭城県にあった。すぐに着任報告を兼ねて皇帝に感謝する書状を差し出し、同時に中書省ちゅうしょしょうと枢密院すうみつゐんにも謝礼の文章を提出した。ここでは後者を見ておこう。

### 【訳文】

河中府知事への異動でさえもすでに我が身を越えた昇進はと愧じ入っておりましてところ、泗水しすいを臨む地へと改まり、そこは唐代においては藩鎮はんちんの中でも特に勢いの強かったところですので、まことに忝く存じた次第にございます。すでに土地の人々と会い、風俗を見て回りましたところ、地形の要点としては東南の地が水と陸とが当たるところとなっております。いま民衆の食糧事情は厳しく、春から夏にかけて干害こうがいと蝗害を蒙りつつあり、誠実な官員を得て千里四方の疲れた民を安んじる必要に迫られています。私などは才能は人に及ばず、学んだものは実用的でなく、先に都で御用を務めましたが、まことに拙くて職務を全うするのは難しいと自覚し、しはば地方の知事職に就くことを願い出ましたのは、それが最善の計であろうと思ったからです。かくして三つの州を往き来して合計七年となり、足は常に危機を踏み、風波の陰をかるじて脱してきたのであります。心には行政の実務だけがあって、もはや学問も根本は忘れ去ってしまいました。それでも故郷に帰って農地を耕す決心がつかないままに、敢えてまた別の善い場所を願い出たのであります。伏して思いますに、どのような官職にあらうとも、万物を正しくはか衡はかって、お上と心を一つにして、堅実であることをさらに堅く、陶冶とうやに力を尽くし、悪を正して、民



に恩を施すために、疲れた体にも鞭打って、鈍きを磨いて、天の恵みに酬いる所存にございます。

【補足】[原文は独特のリズムで重々しい言葉を並べていて、具体的な記述はわずかしかない。興味深いのはここで地形の要点として挙げていることで、半年も経たないうちにそれがまことに慧眼であったと知れるようになる]

## ■ 【05-3-027】 徐州送交代仲達少卿

【解題】前任の徐州知事であった江仲達<sup>じょうちゆうたつ</sup>が蘇軾の到着を待って徐州を離れたので、この送別の詩を贈った。

### 【訳文】

この無用の身をもって東に來た。

この不才<sup>こうざん</sup>を慰めてくれる江山があるのを頼みとしよう。

前知事殿は、とっくに衰え切ってしまった私を嫌うことなく、

再三にわたって酒樽を開くのを許してくれている。

町中に満ちているのは前知事殿<sup>のこ</sup>の遺された愛、  
それを誰が継げるのか。

人々は前知事殿が乗る舟を挽いて留めようとする、

しかし、舟は還ることなく、

人々は仕方なく、

舟が遙か彼方に消えるまで見続けるのである。

前知事殿は帰郷して後に、

再び青雲の志を抱くことがあるのだろうか。

故郷の町の景勝地を巡って、

懐かしい人々との交遊に明け暮れるのであろうか。

### ■【05-3-028】和孔密州五絶

【解題】蘇軾と交替で密州知事になっていた孔宗翰〔字は周翰〕〔→作品番号 05-2-041〕から密州の庁舎の近くの景物を詠んだ5首の絶句が送られてきたので、それに和した。5首のうち3首を訳す。

#### 【訳文】

其の二 春歩西園見寄〔春に西園を歩んで寄せ見る〕

庭を開いて人々を招き入れるのは、

徐州知事の毎年の恒例の行事、

春に背くことなくその楽しみが行われてきた。

今年の知事殿の後には、

それを継ぐはひどく難しくなるであらう、

聡明にして、人に恵む慈愛に溢れているからである。

【補足】〔春に西の園を歩いて詠んだ詩に和した〕

其の三 東欄梨花〔東欄の梨花〕

梨の花は淡い白、柳は深い青、

柳の絮が飛ぶとき、町は梨の花に満たされる。

東の欄干のもとで雪のような花を開かせる二株の梨――

悲しく思うのは、

人生においてこのようにして清明節を迎えられるのはあと何回たろうかと。

【補足】 [東側の欄干の傍らにある梨の花を主題とした詩に和した]

其の五 堂後白牡丹<sup>どうご ぱくぼたん</sup> [堂後の白牡丹]

町に西にある千葉<sup>せんよう</sup> [牡丹の一種]もなかなか結構なもの、

酔ったような赤い顔で春の風に笑って舞っている。

しかし、部屋の後ろの白い牡丹にはかなわない。

氷の玉のように潔く、蜂でさえも近づくことができない。

【補足】 [この詩には、蘇軾自身の注で、「孔君には大勢<sup>こう</sup>の声伎<sup>せいぎ</sup>がいるのだが、客人は見ることができない」と、記してある。つまり、白い牡丹は実は歌の上手な妓女を指し、孔宗翰<sup>こうそうかん</sup>がそれを大切に<sup>か</sup>して蜂 [客人] を寄せ付け<sup>か</sup>ないとからかっているのである]

■ 【05-3-029】 和趙郎中見戲二首

【解題】 密州副知事の趙庾<sup>みづ ちよう じゆ あざな せいはいく</sup> [字は成伯] [→作品番号 05-2-045] から戯れの詩がきたので、それに和して返した。趙庾の詩には、徐州<sup>じよ</sup>の妓女は密州の妓女に及ばないだろうという戯れが含まれていた<sup>か</sup>ので、徐州には有名な燕子楼<sup>えん しろう</sup>の故事があると、この詩で応じている。白居易<sup>はくきよい</sup>に燕子楼を詠んだ詩があり、それによると、唐の時代に徐州知事となった張建<sup>ちようけん</sup>は、徐州一の妓女の盼盼<sup>はんぱん</sup>と恋に落ち、燕子楼を建てて盼盼を迎え入れた。後に張建が亡くなると、盼盼はその恩を思<sup>い</sup>って、他所には適かないと誓って燕子楼にひとり住み、後に絶食して死んだ。

其の一

燕子楼<sup>えん しろう</sup>の人が亡くなってから三百年、

簾<sup>すだれ</sup>を巻き上げて見る景色は、

杜牧が愛した揚州に及ぶものではないだろう。

それでも、西の河中府に行っていたなら、

徐州にはとても及ばないということになっていたはずだ。

河中府では楼閣の上で空しく崔徽の歌を唱えなければならなかったろうから。

【補足】[この詩は、白居易、杜牧、元稹という唐代の三人の有名な詩を踏まえていて、それを知る人が読むと、膝を打って感心するというもので、現代の我々がわからないのは仕方がない。徐州の燕子楼は解題に記したように白居易の詩があり、揚州は天下に名高い雅な町で、杜牧はその魅力にとりつかれて一時期その遊里に耽溺した。元稹には崔徽という女性を歌った詩があり、それによると、裴敬中という者が河中に赴任したときに崔徽と親しくしたのが、裴敬中が帰るのに崔徽は従うことができずに河中に残され、悲しみのあまり病になってしまったのだった]

## 其の二

密州で貴君と飲んだとき、

貴君が歌うと、私は藤の牀を叩いて調子を取った。

酔いが回ると、貴君は、

「来年はもう六十、はて、どうらよいのやら」

と、必ずつぶやくのだった。

酔い崩れそうになったときこそ、

風采をしっかりと整えることが大切である。

だからといって、

人前で妙に格好をつけることはないのだが。

## ■ 【05-3-030】 与司馬温公

【解題】 このころに司馬光 [字は君実] に宛てた手紙。冒頭に「再び」とあるのは、作品番号 05-3-018 に続く手紙だからである。

### 【訳文】

再びお手紙差し上げます。貴君の『超然台の詩』は不肖の私にはふさわしくないほどに優れた作品で、東の小さな町にきた者にとってこれ以上にない有難いものであります。ただ、私を褒めてくださるのあまりにも超過しております。長らく貴君の新しい文章を拝見することがなかったのですが、このたび『独楽園の記』を拝受し、繰り返し誦じつつ味わっております。私の力量不足を省みることなく一篇の詩を作りましたので、お笑ください。彭城[徐州]は山水に優れ、江湖には魚や蟹が豊富で、訴訟事は少なく静かで、盗賊は減少に向かい、拙い我が身をばし置けには結構なところす。ただ友人は遠くに離れ、弟は長くは一緒にいられませんので、寂しが増すこととありましょ。

【補足】 [司馬光の『独楽園の記』とそれに応じて作った蘇軾の詩は次に見ることになる]

## ■ 【05-3-031】 司馬君実独楽園

【解題】 司馬光 [字は君実] は洛陽の邸宅の庭を整備して「独楽園」[独りこの園に楽しむ] と名付け、『独楽園の記』を書いた。蘇軾はそれを読んでこの詩を作って司馬光に送った。

### 【訳文】

独楽園の建物の上に青い山があり、

独楽園の建物の下に流れる水がある。

独樂園はわずかに五畝<sup>ほ</sup>の広さ、  
それでも花や竹が秀<sup>ひ</sup>でて、自然の野<sup>おもむき</sup>の趣がある。  
花の香りは、園を巡る人の杖や履<sup>くつ</sup>についてまわり、  
竹の色は、園で憩<sup>どまり</sup>う人の盃や罍<sup>たい</sup>の中に映る。  
春の終わりは樽酒に楽しみ、長い夏は碁を打って過ごす。  
洛陽<sup>らくやう</sup>には古より才子が多く集まり、風俗は今も優雅である。  
先生は独樂園に籠<sup>こも</sup>って外には出ないけれど、  
洛陽の人々を挙<sup>あ</sup>げて先生のもとへと訪れる。  
先生は衆人と楽しんでいるようではあるけれど、  
実は独樂園は独り楽しむところなのである。  
先生は独りで何を楽しんでいるのか——  
自身に備わるものが完全であるとき、  
その徳は形として外には現れ出ない、  
だから、何を貴<sup>た</sup>んでいるのかを知る人は稀である。  
先生はそのように独り楽しんでいるのだから、  
天下の人々は、  
先生がこの世界を正しく鍛錬し直してくれることを望んでいる。  
子供も先生を讃<sup>ほ</sup>えて歌い、  
使い走り<sup>しよべ</sup>の僕に至るまで先生を知らない者はいない。  
このようにあるのに、  
先生は独りで一体どこに行こうとしているのか。  
造物者は決してこのままにしておかないに違いない。  
私などは、いまだに世間の名声を追い掛けているのは、

天が罰として与える病のようなものなのだろう。

それでも、先生がずっとだんまりを決め込んでいるのを、

手を打って笑ってもよいのではなからうか。

【補足】〔(1) この詩の終わりは、<sup>ひと</sup> 独り園で楽しんでいないで天下のために働いてほしいと要望したのである。(2) <sup>しばこう</sup> 司馬光は子どもでもその名を知っているとこの詩にあるが、蘇軾も引けを取らないくらいの有名人になっていた。ちょうどこのころに、<sup>こう</sup> 高麗国からきた使者が杭州を通過した際に、蘇軾の詩集を探して買って帰ったとの話が記録されている。もちろん著作権などというもののない時代であるから、誰かが勝手に蘇軾の詩を集めて本にしたのであって、たくさんの誤りのある海賊版が横行し、むしろ蘇軾のもとに印税が入ったりするようなことはなかった〕

## ■ 【05-3-032】 保母楊氏墓誌銘

【解題】蘇軾と蘇轍にはそれぞれに乳母がいて、2 人とも母が蘇の家に嫁いだ際に連れてきた女性だった [→作品番号01-2-001の年譜]。以来、乳母はずっと兄弟のもとにいた。そのうちの蘇轍の乳母の<sup>ようきんぜん</sup> 楊金蟬が6月11日に徐州で亡くなった。それから8年後に蘇軾はこの墓誌銘を作った。

### 【訳文】

<sup>せん ふ じん</sup> 先夫人[兄弟の母]の使用人であった<sup>ようきんぜん</sup> 楊金蟬は<sup>びざん</sup> 眉山の人である。三十歳のときに初めて蘇の家にきた。柔順で、善いことに素直に従い、弟の轍の乳母になり、<sup>きねい</sup> 熙寧十年[1077年]六月巳丑に徐州で亡くなった。六十八歳だった。臨終に至っても乱れることはなかった。そのとき轍は<sup>なんけいおうてん</sup> 南京応天府で官職に就いていたので、柩を<sup>かいげんじ</sup> 応天府の開元寺に仮に安置した。

それから八年、軾は<sup>こう</sup> 黄州から<sup>じよ</sup> 汝州に異動となった際に南京応天府を通ったので、応天府の東南三

百里ひゃくりににある広寿院こうじゅいんの西に正式に葬むすぶった。元豊八年げんぽう[1085年]二月壬午じんにごであった。

銘めいに曰いはく。

百世ひゃくせいの後のち、陵おかや谷やは位置ちを変えることがあるたろう。しかし、蘇子そしの乳母にのために、ここは毀こわさずにおいでほしい。

## ■ 【05-3-033】次韻子由与顔長道同遊百歩洪、相地築亭種柳

【**解題**】徐州じょには百歩洪ひゃくほこうという景勝地けいしょうちがあった。徐州の州庁しゅうていがある彭城ほうじょうの町から東南二里にある早瀬そうせで、数里にわたって激流が岩に衝突する壯観を呈する。そこに弟と顔復がんふく〔字は長道あざな ちやうどう〕とともに遊んだ。蘇軾は百歩洪のほとりに土地を選んで亭あずまやを築き、柳を植えようと考えたことがこの詩の終わりに見える。顔復は先に見た『晁繹先生詩集叙しゅうじよ〕〔→作品番号 05-1-082〕にその名が記されていた人物で、このとき彭城県知事であった。

### 【訳文】

朝早くに役所に座ったものの、席が暖まる前に帰り、

部屋を閉さし、静かに一日を過ごそうとした。

臥せていると、

客人がきたのが聞こえ、

あわてて履き物をさかさまにこいて迎えに出た。

両眼は朦朧としてまだ半分眠っていた。

町の東の泗水へ歩いて行こうでないかと誘われ、

曲がりぬる路を進んで百歩洪に出てみた。

そこは雪の白さを翻すかのよう。



私は想像する——

駿馬に青い綱を付ける、馬は身を縮める、馬は脚を踏み出す、  
波の上を飛んで、向こう岸の柳の陰の下に行くのだ、  
馬はたとえ激流に落ちてても、両脚を踏ん張るなら、水中より三丈の高さへと飛び上がる、  
鬣たてがみをふるって、声も乾くばかりに長く嘶く。

何かに取りつかれたような興奮、  
少年のころにあったものから私は久しく遠ざかってしまっていた。

私は想う——

故郷けんかんの剣関けんかんを削って巡り流れる嘉陵江かりゅうこうの急流、  
それでも、剣関には車でも通れるような広い道が通じている、  
帰ろうと思えばいつだって帰ることができるのだ。

山中の昔馴染は大いに笑うだろう——

百歩あひまや洪こうに亭ていを築つくいて柳やなぎを植うえる気でいながら、  
いったい還かえるつもりがあるのかと。

## ■ 【05-3-034】 和李邦直沂山祈雨有応

【解題】このころ李清臣りせいしん [字は邦直] [→作品番号作品番号 05-2-005 など] は京東東路けいとうとうろの役人として徐州じょにいた。作品番号 05-3-026 で見たように、この年も干害が心配されていたので、李清臣きざんは沂山いんで雨を祈りに行った。それに応じてすぐに雨が降ったので、そのことを詩に詠み、蘇軾そしつはそれに和した。沂山いんは密州から西に数十キロにあって、徐州とはかなり離れているので、雨を祈りにわざわざ遠くまで行ったのだろうか。

### 【訳文】

日照りが続く、  
 高い土地の田には黄色い<sup>つちぼり</sup>土埃が生じ、  
 低い土地の田には蒼耳<sup>そうじ</sup>[荒地の雑草]が生じるといふ。  
 いまや蒼耳さえなく、麦はどうかと問うまでもない。  
 雨を司る竜は眠りにかけて、少しは恥ずかしいと思ったのか、  
 大麦も小麦も枯れてしまった後になって、  
 地を洗うような雨をようやく降らせたのだった。  
 雨は、いったどこからきてくれるのだろうかと思っていたころは、  
 百歩<sup>ひゃくほ</sup>洪の急流の音を雷かと聞き違えたりだし、  
 試しに町の高台に上って見たら、  
 天の際に至るまで、どこもかしこも菽も粟も枯れ枯れで、  
 飢えからくる火が腸<sup>はらわた</sup>を焼くばかりで、くぐうと牛が吼るよう、  
 秋の稔りのときまでとでも待てるような気がしなかった。  
 半年も雨が降らなかったのは、竜がなまけていたからなのだが、  
 竜はといえば、  
 「わしてはない、わしより偉い天公<sup>てんこう</sup>を怨んでくれ」  
 と、ぼやいたのだった。  
 今朝のひと雨で罪はすっかり償えたと思ったのか、  
 竜も土地の神も、  
 「この雨はわしら功績だ」  
 と、言い立てている。  
 かく言う私も、実のところ、何の功績もなく、  
 天下の倉から毎日穀物を盗み食いしているのであるから、

竜と同じようなものだ。

李君は、その詩で、皇帝のお使いとして竜の怠慢を赦さないとされる。

ならば、私も自分の罪をこの詩で白状しておかないとならない。

## ■ 【05-3-035】 与梁先、舒煥泛舟、得臨釀字、二首

【解題】 梁先 [字は吉老]、舒煥 [字は堯文] とともに舟を浮かべて遊び、詩を詠み合った。蘇軾は「臨」「釀」の二字が割り当てられたので、それを韻に用いて二首作った。梁先は蘇軾の名を慕って教を請いにきた人であるようだ。舒煥は徐州の学校の教授。

### 【訳文】

#### 其の一

彭城[徐州]は古くから戦の多かったところ、  
旅人は所縁の地の数々を眺めることにも厭きてしまう。  
西からは汴水が、北から泗水が流れてきて合わり、  
百丈の深さの潭がここにある。  
なつかしい人は千里の道のりも軽いものと、  
足を傷だらけにして尋ねてくれた。  
このよき客人をどのようにしたら楽しませることができるのか。  
この潭の水で貴君の心を洗うのである。

【補足】 [これは梁先に贈ったもの。この詩によると、梁先とはかねてから縁があったようだ]

## 其の二

老いた知事〔蘇軾〕は書類を厭い、  
 先生〔舒煥〕は、師弟の席は一丈の間を空けるべきだという礼法にこだわらない。  
 二人の風流は魏晋のころの士大夫にも似て、  
 談笑すれば太古の時代に還ったかのような気分になる。  
 百歩洪のあたりもたちまち過ぎ去ると、  
 水の色は緑となって醸された酒のようである。  
 この楽しみは軽々しいものでない、  
 清くかつ自由なのである。

## ■【05-3-036】次韻答邦直子由五首

【解題】李清臣〔字は邦直〕〔→作品番号05-3-034〕と弟が詠んだ詩に次韻した。

## 【訳文】

## 其の一

夢の中でも、役所の書類は乱雑にひっくりかえったまま、  
 これほどまでに間抜けて怠け者であるのなら、  
 たぶん、呆れ返って許してもらえるのではなからうか。  
 門を閉ざせば、僧舎の冷やかなのにも似て、のんびりと詩を作り、  
 そのうち横になって、聞こえてくるのは遠い急流の音。  
 つまらない懐いを忘れるには酒がよく、人と逢ってともにするのはもつとよい。  
 酒を呑めば眠ってしまい、  
 夢の中では、今度は文章が手を翻すように思うがままたにできあがる。

調子に乗って、

<sup>くちばし</sup>喙を三尺<sup>い</sup>ほども伸<sup>い</sup>ばれてとんでもないことをいってしまいたくなるのだが、  
貴君等がお<sup>い</sup>暈<sup>い</sup>りになるのが怖くて、呑みこんでしまった。

其の二

町の南に住む李君は交遊を好む、  
しかし、あくらをかいて狂歌するような放縦なところはない。  
李君は主を尊<sup>か</sup>び民を庇<sup>み</sup>い、道を得た者である。  
私は天から授けられた命<sup>めい</sup>を知り、憂い<sup>い</sup>かない。  
李君は酔うと毎晩のように舞を見て楽しみ、  
静かに秋を送る詩を詠むこともする。  
李君は瀟灑<sup>しょうせい</sup>で俗なところはないのだが、  
果たして私を樽前<sup>そんぜん</sup>の客として迎えてくれるのだろうか。

【補足】 [これは李清臣<sup>りせいしん</sup>に向けて詠んだもの]

其の三

尊敬すべき弟が東からきてくれたけれど、  
ここは何もなくて寂寞としている。  
昔馴染の人と呑んでくさくさした思いを慰めるのである。  
町のすみは草むらに埋もれ、  
そこに新たな道を開いて百歩<sup>ひやくほ</sup>洪<sup>こう</sup>に行く、  
雨で水かさが増え、もとの早瀬がなくなっている。  
君の車馬の跡が消えるより先に僕の手車馬は追いつこうとし、

その間を詩文の応酬が往き来するので、字を丁寧に書いているとまかない。

この詩は君に見てもらってから書き改め、李君に見てもらおうと思っている。

【補足】〔これ以降の三首は弟に向けて詠んだものである〕

#### 其の四

君は僕のためにここでぐずぐずしてしてくれるけれど、  
別れた後の寂しさを思うと、  
僕はいまから憂いてしまうのだ。  
近くいても会わなければ千里の遠くにいるのと同じといひはするが、  
やはり一緒にいるのがよいのであって、  
官職より退いて故郷に帰って、  
十年の歳月は君と遊んで過ごしたいものだ。  
残念なのは僕等にはちつとけな家さえなくて、  
居心地の悪いところで辛抱していないとならないことだ。  
聞くところでは、朝廷には立派な鳥がたくさん飛んでいるようなので、  
鳥を捕らえる網も、岸辺に浮かぶ鷗にまでは及んでこないであろう。

#### 其の五

わずかな俸禄のために塵まみれになる労苦があっても、  
官職に留まっている方がまたましなのだろうか——  
この鬱々とした思いを鎮めようと、戸を閉ざして部屋に閉じこもる。  
囊ふくろの内うちにあっても稲のこの尖った穎ほこりが飛び出すように、  
自分が目立つ存在になってしまうのを僕は恥ずかしく思う。

漢の時代の朱雲しゅうんは、皇帝のお気に入り的人物を批判して罰せられたとき、  
これで古の忠臣いひこしと地下で顔を合わせることができると言った。

僕はその朱雲と地下で遊べるようなことをまたしていない。

特にすべきことがなければ気持ちよく呑むのがよいだろう。

故郷に帰りたいと思ったなら、昔の人の望郷の詩を唱えればよいだろう。

羨ましいのは、君の仕事場が僧舎のように静かであること、

毎日南の方を眺め、鷗が水浴びをしているのを見ていればよいのだから。

【補足】 [(1) この詩の末尾は、弟が務めるのは張方平ちやうほうへいのもとであるから、何の問題もなく治められ、仕事もないだろうということ。(2) 李清臣りせいしんが昔のことを思い出して詠んだ詩にも次韻しているが、訳は割愛する]

## ■ 【05-3-037】 宝絵堂記

【解題】 都の貴公子である王誥おうしん あぎな しんけい [字は晋卿] [→作品番号 05-3-011 など] に請われてこの文章を記した。

### 【訳文】

君子は、意を物に寓せるのはよいけれども、意を物に留めるのはよろしくない。意を物に寓せるときには、ささいな物であっても十分に楽しみとすることができであるが、特殊な物であっても病となるほどのことにはならないだろう。意を物に留めるときには、ささいな物であっても病となってしまふであろう、特殊なものであっても楽しみとするには足りなくなってしまう。

老子らうしはこういっている。

「五つの色は人の目をくらませ、五つの音階は人の耳をこわし、五つの味は人の口を損ない、野を駆けて狩獵することは人の心を狂わせる」。

聖人はこの四つのことが起こるまでにならないように、いさか意を寓せるだけにしたのである。

劉備<sup>りゅうひ</sup>は英雄であったけれども特別な髪型に結うことにこだわり、嵇康<sup>けいこう</sup>は達人であったけれども刃物を鍛錬することを好み、阮孚<sup>げんぷ</sup>は豪放であったけれども屐<sup>くつ</sup>に蠟を塗る趣味があった。これらは先の四つのことはまた異なるけれど、三人は生涯これを楽しみとして厭<sup>あ</sup>くことがなかった。

いろいろと人が喜ぶべき物があるなかで、人を存分に悦ばせて、しかも人を惑わせてしまうようなことがない物といえば、書と画に優るものはない。それでも、意を書画に留めるあまり、執着心から離れられなくなってしまうとは、ひどい禍<sup>わざわい</sup>いになってしまうことがある。鍾繇<sup>しゅうよう</sup>はある人にある筆法を求めて教えてもらえず、悔しさのあまり胸を叩いて血を吐き、その人が死ぬと墓を暴いて得ようとした。孝武<sup>こうぶ</sup>と王僧虔<sup>おうそうけん</sup>は書法を巡って憎み合い、桓玄<sup>かんげん</sup>は書画を惜む余り、走る船の上に保存し、王涯<sup>おうがい</sup>は壁の後ろの秘密の部屋に隠した。これらの児童の戯れのような振る舞いは、その身に不幸にもたらし、国家を損ないもした。これは意を留めることによる禍<sup>わざわい</sup>である。

私は若いころに書と画を好み、家に所有する物については、ひたすらそれを失うことを恐れ、人の所有する物については、それを自分に与えてくれないのを残念に思った。

その後、自分で自分のことを笑ってこのように思った。

「私は富貴を軽んじて、それよりも書を重んじた。死生を軽んじて、それよりも画を重んじた。これは誤った逆さまの価値観で、人としての本心を失ったものではなからうか」

それからは以前のように好むことはなくなり、喜びを与えてくれるようなものを見て、ときにそれを自分の手に蓄えることがあっても、それを他の人が取って行ったところで、惜むようなことはなくなった。それは、雲や霞が前を通り過ぎて目に感じさせ、百種の鳥が鳴いて耳に感じさせるのに譬<sup>たと</sup>えることができるだろう。喜んでそれに接するけれど、自分のもとから過ぎ去っても、それに執着することない。ここにおいて書と画の二物は常に私の楽しみとはなっても、私の病となることはなくなった。

王君<sup>おう</sup>は皇室の親戚ではあるが、その服装、礼儀、学問、詩書はいつも貧窮の士とともに競い合い、普段の暮らしからは美食を除き去り、声色を遠ざけ、もっぱら書と画に従事し、私邸の東に「宝絵堂<sup>ほうかいどう</sup>」を



作り、所有するところの物をそこに蓄えている。そのことについて書くよう私に文章を求めた。私が恐れるのは、王君が不幸にして、私が若いときに好んだのと同じようであることだ。それで、このことを書いて王君に告げることにした。その楽しみを十分なものにして、病から遠ざかることを願うのである。

きねい  
熙寧十年七月二十二日記す

【補足】[蘇軾は、弟が小さいときから書画に執着することがなかったと記していた [→作品番号 01-2-008]。ここに書いているのは、兄もようやく弟の境地に近づいたということであろうか]

## ■ 【05-3-038】 与杭守

【解題】こう杭州知事に宛てた手紙。ここでいう知事は、この年の5月までその任にあったそしやう蘇頌 [→作品番号 04-2-022] であると推定されている。

### 【訳文】

私が近頃せつちやう浙中から来た者に聞いたところでは、こう杭州の人たちがいには、ここ数年の饑饉続きで、もしも貴君がいなかったならば、人は魚の餌になるか蟻に食われるかであったらうと。貴君が杭州を去るに当たっては、泣いて慕う者が数えられないほどにいたと。貴君はいったい杭州の民に何を施してそこにまで及んだのでありますかな。羨ましい限りです。

聞けば、ゆしよぼ俞主簿君が私への遣い物を貴君に託したとか。よもや徐州までお持ちいただきには及びませぬので、全てほんしれい范子礼君に預けてくださいますように。貴君にはいろいろ借りがありますが、天が窮まった人を養う一例であると思ふことにいたします。……

【補足】そしやう こう[蘇頌は杭州での任を終えて都に帰還し、その折に、蘇軾が杭州にいたときに交流のあったゆ俞という人物から蘇軾に渡してほしいと物を託されたことがここに記されている。蘇軾はそれをはんちん范鎮の一族と推測されるほんしれい范子礼に預けてほしいと頼んだの

である]

### ■ 【05-3-039】 送顔復兼寄王鞏

【解題】 顔復 [→作品番号 05-3-033] が都に行くことになったので、その送別の詩を詠み、兼ねて王鞏 [字は定国] に送った。王鞏は名宰相であった王旦の孫で、かつて蘇軾が都にいたころから、蘇軾に教えを請うような形での交流が始まっていた [→作品番号 03-2-010]。王鞏はこの後しばしば登場する。

#### 【訳文】

徐州の官舎は水のように冷ややかである。

ここで私とともに遊ぶのは誰であるのか、

顔淵[孔子の高弟]の遠い子孫の貴君である。

我は衰えかつ病み、貴君は困窮している。

衰窮したとはいえ、ともに正しい道理を守っている。

ところが、貴君はどういうわけで私を捨てて行ってしまうのか。

この暑さのなか、軽い上着をひっかけて千里の旅に出ようとしている。

貴君に問う。

「何か求めるものがあるのか」

貴君は答える。

「そうではなく、成り行きなのだ」

「都では万事日々に新たになって、

知り合いてもとのままであるのは今幾人もいないだろう。

貴君は牛行街のもとの宰相のお宅を知っているだろう。

門を叩いて王居士<sup>おうこじ</sup>〔王鞏<sup>おうきやう</sup>〕に面会を求めるとよい。

王居士は詩も草書も妙所に入った人である。

王居士は別れてから紙を連ねてたびたび私に手紙を送ってきて、

会えないのかわなはた残念であると書いている。

そして、重陽<sup>ちやうよう</sup>の節句にはともに菊の花を愛でようと約束もしている。

貴君が都から帰るときには、王居士を呼んで一緒に連れてきてほしい。

王居士はいまは官職に就いていないので、

どこに行こうかとやかく言われることはないはずだ。

太乙老仙殿<sup>たいいつらうせん</sup>〔張方平<sup>ちやうほうへい</sup>のこと〕は静かに家に籠っておられるだろうから、

王居士がその門に至って道を問うにいまがちょうどよいだろう。

そこから徐州まではわずかな道のりである。

君よ、どうか王居士のお尻を叩いて引っ張り出してほしい」

仲間がそっくり集まって一酔を得るのも実のところ簡単ではない。

いまから羊を飼い、酒<sup>かも</sup>を醸して準備しておくしよう。

【補足】〔(1) 王鞏<sup>おうきやう</sup>は張方平<sup>ちやうほうへい</sup>の婿である。都から南京<sup>なんけい</sup>応天府<sup>おうてん</sup>を経由してくるなら、舅に挨拶をした上で自分のところにこられるというわけである。(2) この詩は7月の終わりから8月の初めのころに詠まれたと推測されている。実はそのころすでに重大な事態<sup>じよ</sup>が徐州に迫りつつあった。雨が少なかったのは一時的なこと、あるいは局所的なことであったのか、それとも竜が頑張り過ぎたからなのか、干害を心配するどころではなくなっていた。7月17日、徐州から北に200kmほど離れた澶州<sup>せんしゆう</sup>曹村<sup>そうそん</sup>埽<sup>そう</sup>で黄河<sup>こうが</sup>が決壊し、溢れた水が完全にコントロール不能になってしまっていたのだった]

## ■ 【05-3040】 書諸公送鳧繹先生詩後

【**解題**】<sup>がんふく</sup>顔復は、<sup>ふえき</sup>鳧繹先生こと<sup>がんだいしよ</sup>顔太初の子で [→作品番号 05-1-082]、40年余り前に、<sup>しよく</sup>顔太初が<sup>ろうちゆう</sup>蜀の閬中県に赴任した折に、人々が贈った送別の詩を集めた書物が残っていて、顔復はそれを蘇軾に見せて、一文を書き添えてほしいと頼んだ。

### 【訳文】

<sup>ふえき</sup>鳧繹先生が亡くなってすでに三十年余り。

その息子<sup>がんふく</sup>[顔復]との交遊が始まったばかりのときは、私は先生の子であることを識らなかつたのだが、その人となりは知ることができた。

鳧繹先生が<sup>ろうちゆうしゅほ</sup>閬中主簿になったとき、餞別の詩を贈る者がおよそ二十人余りいて、皆がその時代の名高い豪傑ばかりであった。その景祐年間から今に至るまでおよそ四十年余り、皆が老いてほとんどの人が亡くなり、残るのは<sup>ちようそうえき</sup>張宗益君だけである。

鳧繹先生の盛徳と、諸賢の遺烈を想い、歲月の留まらないのを悼み、人事の変化の速さを感じ入りつつ、この詩集の終わりにこの文を書き、後の人がこのころの風流を想い見るよすがとなればと思つたのである。

【**補足**】 [ただ一人残ると記されている<sup>ちようそうえき</sup>張宗益がいかなる人であるのか、官員としてのわずかな履歴が記録に残るだけであるという]

## ■ 【05-3-041】 顔樂亭詩

【**解題**】<sup>がんふく</sup>顔復は<sup>こうし</sup>孔子の弟子の<sup>がんでん</sup>顔淵の遠い子孫である。このころ、<sup>みつ</sup>密州知事の<sup>こうそうかん</sup>孔宗翰は顔淵の旧居とされる場所に<sup>あずまや</sup>亭を建て、<sup>がんらくてい</sup>顔樂亭と名付けた。蘇軾はその経緯を記した序文と詩を作って孔宗翰に寄せた。

### 【訳文】

顔淵がんえんの住まいは、狭い路地にあつたと『論語』ろんごに記されている。その後は井戸だけがあつて、顔氏が長くそこに住んでいたわけではない。密州知事みつしゅうしの孔宗翰こうそうかんはその地を得ると、井戸を浚って修復し、そこに亭あずまやを作って、顔楽亭がんらくていと名付けた。

昔、孔子こうしは、竹の器かきごに飯を盛り、小さな瓢ひょうで水を飲むだけの質素な暮らしをしている顔淵の賢を讃えた。しかし、韓愈かんゆはそのようなことは道理に明らかに通じる哲人にとっては小さなことだと言った。本当にそうなのだろうか。

私が思うに、古いにしへの人が人を観るときは、必ず小さなところを観察した。大きなところには偽りがありうるからだ。

人は、千金の価値のある壁たまを砕いて、釜を破るような大声を発することもできなくはないし、猛々しい虎を撃ち、蜂の大群に襲われても平然としているといったこともできなくはない。竹の器かきごに小さな瓢が哲人にとって大きなことであるのを多くの人は知らない。

そこで私は『顔楽亭の詩』を作って孔君に送り、韓愈の説を正し、もって自分自身の戒めとするものである。

天が人間を生んだとき、口と鼻を作った。

口はおいしいものを食べたがり、

鼻は香りのよいものを嗅ぎたがる。

おいしいものがあれば必ずまずいものがあり、

香りのよいものがあれば必ず臭いものがある。

そうした二項対立を離れて天[の道]に遊ぶのでなければ、

口、鼻、耳、目、心、知の六種のむの鑿[で作られた穴]のせめぎ合いに陥ってしまう。

六種の鑿の執着するところに従って一歩ずつ進むうちに、

遠く帰れないところにまで至って大悪人になってしまうのだ。

顔淵の偉大さは、

狭苦しい路地の奥で安らかに暮らしていたことにある。

古代のある勇士は武者震いしただけで虎や豹を走らせたといふが、

顔淵の身の内にはその勇士以上のものがあった。

私は最高の楽しみとは何かを求め、手本となるものを探してきたのだが、

小さな瓢を手にして顔淵に従おうとして、

ふと気づくと、顔淵は我が後ろにいる――

顔淵はあくまでも路地奥につつましく留まっているのである。

## ■ 【05-3-042】 快哉此風賦、並引

【**解題**】 李清臣 りせいしん あざな ほうちよく [字は邦直] [→作品番号 05-3-036] じよ は徐州の町の東南の隅の眺めのよい場所に あずまや 亭を建て、蘇軾はそこを訪れ かいさいてい 快哉亭と名付けた。蘇軾は『快哉此風』と題する賦を作った。賦の本文を訳すのは訳者の力量を超えるので割愛し、短い序文だけを見ておく。

### 【訳文】

いん  
引[序]

時に ごかん じよかん ていきん 呉瑄、舒煥、鄭僅とともに韻を分けて賦を作った。私は最初に「風」の字を韻にして作った。その他の作品はここには記録していない。

【**補足**】 [(1) この序文を訳したのは、蘇軾と交流のあった人物名を見ておきたかったからで、ごかん あざな げんりつ じよ 呉瑄 [字は彦律] は徐州の酒税に関する仕事をする人、じよかん ぎょう 舒煥 [字は堯文] は先に見たように徐州の学校の教授、ていきん げんのう 鄭僅 [字は彦能] は地元の士人である。

(2) 快哉亭の名は蘇軾のお気に入りだったので、すでに密州でその名を用いてい

て、その後、<sup>こう</sup>黄州でもまた用いることになる。なお、現在の徐州市に快哉亭公園があり、その快哉亭にこの賦が刻まれているという]

## ■【05-3-043】蝮虎

【解題】詩の題にある蝮虎とは<sup>かつ こ</sup>守宮の<sup>や もり</sup>こと。宋代の人々はいわゆる「詩的」ではないものをも詩の題材とし、先輩の<sup>ばいぎょうしん</sup>梅堯臣はミミズやドジョウを詩に詠んでいる。

### 【訳文】

鶏は黍を啄むよう<sup>むし</sup>蝮を啄む。

窓の間に<sup>やもり</sup>潜む守宮は<sup>むし</sup>蝮を<sup>かつこ</sup>食らうので蝮虎と呼ばれる。

守宮は暗い中で舌を伸ばして飛ぶ虫を捕る。

虫捕りが成功する工夫は、腰と背骨の使い方にあるようだ。

ずるずるにゆるにゆる壁に張り付いて動き、

そのいやらしいありさまには誰も感心しない。

今年の日照りでは<sup>とかげ</sup>蜥蜴を呼んで雨乞いをし、

子供達が歌ったり踊ったり大変な騒ぎで、

蜥蜴に水をかけたところ、雨が降り注いだ。

蜥蜴が竜に頼んでくれて、雲や雨を呼んだということであるらしい。

守宮が地道に<sup>はえ</sup>努力して蠅を撃つありさまを見ていると、

来年がもし日照りであったならば、

守宮に雨を求めてみたいような気がする。

【補足】[この詩で何がほしいのかよくわからないが、地味に虫を捕って実は人間の役に立っている守宮も頼りなるのではないかということであろう]

■【05-3-044】子由将赴南都、与余会宿於逍遙堂、作兩絶句、読之殆不可為懷、因和其詩以自解。余觀子由、自少曠達、天資近道、又得至人養生長年之訣、而余亦竊聞其一二。以為今者宦游相別之日淺、而異時退休相從之日長、既以自解、且以慰子由云

【解題】長い詩の題を訳すと、「弟はいよいよ南京なんけいおうてん応天府に赴くことになった。逍遙堂しょうようどうと一緒に泊まり、弟は二首の絶句を作った。それを読んで私は思いに詰まってどうすることもできないくらいになった。その詩に和して、自分の思いを少しときほどそうとした。弟は少年のころから心が広く、物事にこだわらず、生まれながらの資質として道みちに近く、しかも仙人のように養生をして長生きをする秘訣も得ている。私はその一つでも二つでも見習いたいと思っている。官職に就いていて弟と別れていなければならない歳月はもう長いものではなく、引退して後に一緒にいる歳月はきっと長いのだろう。そのように考えて、私の気持ちを解き、かつ弟を慰めようと思うのである」。

### 其の一

別れの時期が次第に近づ。

それが何時かと聞くことに僕は耐えられない。

風が寂しげに吹き、雨が寂しげに降る。

僕の魂はすっかり断ち切られてしまう。

それでも、

僕らはかの夏かふく復かせい、夏静の兄弟と比べたら、ずっとまじだと思えば慰めになるかい。

夏復、夏静は迫害に遇ってばらばらになって、姿形がすっかり変わり、

顔を合わせてもそれとはわからなかった。



ただ声の調子だけに昔の面影が残っていたのだった。

## 其の二

あか  
朱い火で仙薬を作る方法があるという。

この別れは、薬を練る車が一回転するようなものなのか。

仙薬によって永遠の寿命を得たらどうなるだろう——

銅で作られた像と会って、

「この五百年の間に誰もいなくなっていましたなあ」

と、一緒に嘆くのが関の山だ。

## ■【05-3-045】記子由詩

【解題】8月4日に蘇軾は弟とともにだいたうじ台頭寺のせきけいいん石経院を訪れたことがこの短文に記されている。

### 【訳文】

八月四日、弟とともにここに来て、私は小詩三首を書き留めた。

「葱蒨門前路……」

弟はそれに和した

「苕嶢山上寺……」

弟の詩は私の詩をはなはだ遠く超えるものであった。

さねい  
熙寧十年八月四日、蘇軾記す。

【補足】[兄弟の詩はさほど興趣を誘うものではないので割愛した]

## ■ 【05-3-046】 留題石經院三首

【解題】 上で省略した蘇軾の三首の詩から第一首だけを訳す。

## 【訳文】

其の一

草があおあおと茂る門前の道から、

木の翠みどりが密集する中を穿くって進む。

堂に上がってから振り返り見ると、

巖いわおに挟はさまれた谷やに無窮こころの意が籠かこっている。

## ■ 【05-3-047】 過雲竜山人張天驥

【解題】 蘇軾は弟とともに雲竜山うんりゅうさんに行き、張天驥ちやうてん き [字は聖塗あぎな せい と] という風変わりな人物に会った。これはそのことを詠んだ詩。張天驥は、この詩にあるようにもともとはよい家柄の人であったようだが、いまは山の麓で、親に孝行しつつひっそりと暮らしている。雲竜山ほうじょうは彭城の町の西二里にある山。張天驥はこの後何度か登場する。

## 【訳文】

野原に雨が十分に足り、風は清く絶好の日和。

病みかちの知事かご[蘇軾]も喜び、轎かこに乗り、町の南の門を出て、道を進む。

荒れた農地いんごで、蝗みみずが飛び、蚯蚓みみずが鳴いている。

村の奥に、梨や棗なつめの実が下がり、訪ねる人の住まいがそこにある。

門は閉ざされ、雀さわが噪さわぐばかり、

秋の風に落ち葉が掃除もされずに積もっている。

斜めになった日ざしのもとに一人の僮僕<sup>ボーイ</sup>が臥し、

衰えた馬が秋の野原に放たれている。

垣根は倒れたまま、近くの村人のほかに訪ね来る者はいない。

貴君の家は、もとは高位に就いた人を出し、

賑やかな音楽がすぐ近くから聞こえてくるようなところに住んでいた。

貴君は名利の世界を脱し、高い道徳で己の身を洗った。

病気を抱えながらも自分で耕し、百歳の老人に孝養を尽くしている。

豆を煮て水を捧げて父母を歓ばせることに努めつつ、

いつも詩や書物を朗読している。

昔の天随先生は餓えと寒さに迫られ、菊を植えて食べていたという。

昔の董先生は親孝行であったけれども、ひどい貧乏で、

鶏も犬も餌をもらえなくて、互いに労わり合っていたという。

私の人生は寄せるようなもの。

帰る計画を失って、もはや遅いのか。

それでも故郷の山は忘れずにいてくれるのか。

ただ恐れるのは白髪<sup>もちあわ</sup>の迫ってくること。

貴君に従って秫<sup>もちあわ</sup>を植えることを学び、

自家製の酒で貴君と慰労し合いたいものだ。

【補足】[この詩の後半にある「吾生如寄耳」<sup>わ せい よ ごと のみ</sup>「吾が生は寄せるが如き耳」という句は、作品番号 05-3-003 で見た「宦遊到处身如寄」<sup>かんゆう いた ところ み よ ごと</sup>「宦遊到る 処 身は寄せるが如し」とほぼ同じ内容で、これから類似表現をしばしば見るようになる]

## ■ 【05-3-048】 徐州与人

【**解題**】張天驥ちやうてん きと会ったことはこの短い手紙にも記されている。徐州じょの誰に宛てたものであるのかはわかっていない。

### 【訳文】

徐州じょの人の張天驥ちやうてん きは志を求めて隠れ住んだ。上は親と離れず、下は俗世間と絶たず、足るをもって嘉よとしている。近ごろ雲竜山うんりゆうざんの下に居を定め、高たかきに憑よって遠みくを覽て、この一州にある景勝の地をこごとく想いのままに見ようとしている。貴君も一酔をとれにすべきで、そのときには早々に帰るようなことは慎んでしないように。

### ■ 【05-3-049】贈王仲素寺丞

【**解題**】王景純おうけいじゆん [字は仲素あざな ちゆう そ] に贈った詩。王景純はもとは官員であったが、すでに辞めて揚州ようの瀟山しんざんに隱棲していた。仙道を求める旅に出て、徐州じょに立ち寄って三日ほど留まり、蘇軾と会った。このとき74歳であったという。

### 【訳文】

氣を養うのは児こを養うようなもの、  
 官職を棄てるのは泥を棄てるようなもの。  
 人は貴君つたなの拙さを笑うかもしれないけれど、  
 事を定めたからは、貴君は誰に何を言われても迷わない。  
 貴君はいう、  
 「帰って農地を耕すつもりです」  
 私は貴君が貧乏をするのではないと心配で、貴君に尋ねる。  
 「故郷に何を持って行くのかい」

貴君はいう。

「一尺四方の家でも己の身を覆うことができます。

一寸四方の農地でも作物は育ちます。

心に明るい珠たまがあるのなら、

よれよれの衣服だって明るく照らしてくれて、

おんぼろの部屋にも虹がかかるのです。

銭に仕えること兄に仕えることししなければならぬことはなく、

妻がなくても、仏法を妻として楽しむことができます」

私の人生といえば、もともとひどく田舎じみでいて、

若いころは、気合で自分をくいくい押しまわり、

ちっ掛けな一艘の舟で大河を遡り、

素手で象や犀を捕えようとするようなものであった。

このところはこした自分の振る舞いを自分で可笑しく思い、

氣きを臍の下あたりに留めておこうとするようになった。

はなはだ残念なのは、

そうした道理を知ることから遅かったために、

何かしら凄まじいなかに置かれてしまっていることだ。

昔ある人は、悪い病気になってからようやく養生の道を問い、

もはや遅かったかと、枯れた梨の木の詩を詠んだ。

——私はそのことを悲しく想いつつ、貴君の決断に敬服する。

【補足】[途中の「仏法を妻として」の後に続く数句はかなり複雑な故事の用い方をしているので、この訳では省略した]

## ■ 【05-3-050】 陽関詞三首

【解説】蘇軾の詩集には『陽関詞三首』として三つの作品が一つにまとめられていて、それらは七言絶句と見なされているのだが、それぞればらばらの時期に詠まれた詞であるものようだ。

其の一 贈張繼愿ちやうけいげん [張繼愿ちやうけいげんに贈る]

唐とうの時代ちやうじんげんに張仁愿じゆこうじやうが受降城じゆこうじやうを築つくく、

西方せいほうからの侵入しんにゅうはおさまり、

紫色むらさきの髯ひげの異人いじんも穏やかおだやかに交易こうぎをするようになった。

ここ徐州じゆには項羽こううの築つくいた戯馬台ぎばだいがあり、

その近くかんに漢りゅうほうの劉邦りゅうほうと争あった古戦場こせんばうがある。

貴君ききんは国境こくけいの守備しゅびに就ついていたのだが、

残念ざんねんなのは契丹きつたんの首くびを取るとることなく、

甲かざや旗かざを使つかわないままままに故郷こきやうに帰かえって来きたことだ。

【補足】 [(1) この詞を贈られた張繼愿ちやうけいげんの詳しいことはわからないが、詞の内容から、国境地域こくけいちよくから帰還きげんしてきた武将ぶじやうであったのだろう。 (2) 戯馬台ぎばだいは徐州じゆの名所ななところの一つで、漢かんの高祖こうそと天下てんかを争あった楚その項羽こううが築つくいた高台こうたいで、項羽こううはそのまわりで馬うまを乗のり回まわしたといわれている。この後のち何度なんどかその名なを見るようになる。 (3) 第二首にじふしゆは李常りじやうに贈ったもので、その訳はすでに作品番号 05-3-004 で見ている]

其の三 中秋月ちゆうしゅうげつ [中秋ちゆうしゅうの月げつ]

暮雲ぼくうん収ひ尽つ溢あふ清寒せいざん。 [夕暮れゆふぐれの雲うんがすっかり消きえると、溢あふれ出でてくるさざえとした光ひかり]

銀漢ぎんざん無な声こゑ転まわ玉盤ぎよくばん。 [天あまの川がはは声こゑなく玉盤ぎよくばんを回まわ転まわさせる]

此生此夜不長好、[この生もこの夜も長いつまでも好いわけではないのです]

明年明月何処看。[明年の明月はどこで看るのでしょう]

【補足】[これはいよいよ徐州から去って行く弟に贈った詞である。ごくあっさりとした作品であるが、これから18年後、蘇軾は都から遙か遠くに流された先で、中秋の月のもとで独りこの詞を吟じることになる]

## ■ 【05-3-051】 水調歌頭

【解題】弟は、兄と中秋の名月を見た後に徐州を離れた。この詞は弟が去ってすぐ後に作られたもの。次のような短文が付いている。

### 【訳文】

去年の中秋は、密州みつしゅうにいて、『水調歌頭』の詞を作って弟に寄せた。今年ことしの中秋は、弟とともに徐州で過ごし、その直後に弟は去った。弟は中秋に『水調歌頭』を作って別れの詞としたが、それは悲しみが勝ち過ぎていると感じた。そこでいまそれに和して、退くのに早過ぎることはないと自分を戒め、退いても楽しむことを慰めとしようではないかと弟に告げようと思う。

安石在東海、[謝安が若くして隱棲していたのは東海のほどり]

従事鬢驚秋。[謝安が国政に従事したのはもう髪が白くなってからの秋]

中年親友難別、[年を取ってからつらいのは親友との別れ]

糸竹緩離愁。[愁いを緩めてくれるのは管弦の音]

一旦功成名遂、[謝安がいったん功成り名を遂げてより]

準擬東還海道、[準備していたのは東の海の道への帰還]

扶病入西。[かえって病をおして入ったのは西の都]

雅志困軒冕、[官服の内みやびで苦しみ続けた雅な志]

遺恨寄滄州。[遺恨を海浜あまに寄せたのでした]

歳雲暮、[暮れくく歳月]

須早計、[早く立てるべき計]

要褐裘。[要るものといえは粗末な衣服]

故郷歸去千里、[故郷は去ること千里]

佳处輒遲留。[留まるべきは佳よき处]

我醉歌時君和、[僕が酔って歌うとき、和せよ君]

醉倒須君扶我、[僕が酔って倒れるとき、助けよ君]

惟酒可忘憂。[憂いを忘れさせてくれるのはただ酒]

一任劉玄德、[雄大な志を抱く劉備りゅうびに勝手してくれと任せたら]

相對臥高樓。[僕なんぞは高樓たかろうの下の地べたに置かれてしまおう]

【補足】[(1) 序文にある1年前みづの密州での詞は作品番号05-2-028で見ている。(2) 詞の前半は、晋しんの時代しやあんの謝安あざな [字は安石あんせき] に焦点を当てている。謝安はいかなる重大事にも悠々と対処し、国難を幾度も救った人物で、蘇軾はこれまでも何度か言及している [→作品番号02-3-014など]。その謝安も、身を退くことは思いのままにならなかった [→作品番号04-2-070]。(3) 詩の最後は、三国時代の英雄りゅうびの劉備げんとく [字は玄德] にまつわる次のような故事を引用している。許汜きよしという人物が、劉備の前で、「陳登ちんとうは世間では評判がよいらしいが、私に言わせたら、傲慢な嫌な男です」とけなした。陳登を批判して、己を高く見せようとしたのだ。「何しろ、かつて陳登に会ったときに、まともに人と話もしないで、しかも、自分だけは立派な寝台の上で眠り、私は床に寝かせたのですぞ」と息巻く許汜に、劉備は「私だったらこうするだろうな。私は



百尺の高楼の上に眠り、君には地べた寝てもらおう」といった。そのころ劉備は雌伏の時期で、高い志を抱いて天下の趨勢について考えていたのに対して、許汜は早くから土地を買って隠棲の地を得ることを考えていた。ということから、隠棲についても言っている自分などは、劉備からしたら実に語るに足りない奴だと自虐的に笑ったのである]

## ■ 【05-3-052】 和孔周翰二絶

【**解説**】<sup>みつ</sup>密州知事になっていた<sup>こうそうかん</sup>孔宗翰<sup>あざな</sup>〔字は<sup>しゅうかん</sup>周翰〕〔→作品番号 05-3-002〕からまた詩が送られてきたので、それに和した。第二首を訳す。

### 【訳文】

其二 <sup>せいけんどう</sup> 観静観堂效<sup>み</sup>韋<sup>い</sup>蘇州詩〔<sup>し</sup>静観堂を<sup>なら</sup>観て<sup>な</sup>韋応物の詩に效う〕

鳥が林に巢をつくるには一本の枝があれば十分だ。

隠者が静かに住むには<sup>かたつむり</sup>蝸牛の殻のような小さな住まいがよく似合う。

<sup>はくきょい</sup>白居易には長い長い作品も含めて三千首の詩があるが、

貴君はむしろ韋応物の一篇の五言詩を愛するのである。

【**補足**】〔これは、<sup>こうそうかん</sup>孔宗翰が<sup>せいけんどう</sup>静観堂〔<sup>とう</sup>隠者の<sup>い</sup>庵であらう〕を見て、唐の<sup>い</sup>韋<sup>おうぶつ</sup>応物に倣って詠んだ詩に和したもの。韋応物の作品は淡白な味わいの短い詩が多い〕

## ■ 【05-3-053】 答任師中、家漢公

【**解説**】<sup>にんきゅう</sup>任<sup>あざな</sup>伋〔字は<sup>しちゅう</sup>師中〕と<sup>か</sup>家<sup>きんこく</sup>勤国〔字は<sup>かんこう</sup>漢公〕から送られてきた詩に答えたもの。2人とも<sup>び</sup>眉州の人で、任伋は、先に亡くなった<sup>だい</sup>「大任」〔→作品番号 05-3-022〕の弟。家勤国は、<sup>か</sup>家<sup>あんこく</sup>定国、家安国兄弟の従弟で、少年時代にこの3人は<sup>りゅうきよ</sup>蘇軾とともに劉巨先

生について学んだことのある同門の友 [→作品番号 01-2-008、そこでは三兄弟と記したが、家勤国は従弟のようである]。家定国は蘇軾と同じ年の科挙に合格したが、家勤国は合格しなかった [後に家勤国の息子の家愿かげんが国家の重職に就くようになる]。このとき任扱ろは瀘州ろにいて、官職に就かない家勤国がしばらく身を寄せていたのだろうか。

### 【訳文】

昔わが父がまだ出仕する前の皇祐年間こうゆう[蘇軾の幼少の頃]、  
父は門を閉ざして家に籠っていた。  
父は高い道徳を保って貧賤であることなど気にかげず、  
その立派な態度は郷里に照り輝いていた。  
父自身がつまらない人物たちを疎んじることはなかったけれども、  
つまらない人物たちは自分から父とは距離を取るようになった。  
父がたまたま門から歩み出て行くところといえば、  
町はずれの丘にある史経臣先生しけいしんの家だった。  
その門前に万本の竹があり、家の内にはぎっしりと書物があつた。  
紅消梨こうしょうり[実の大きな梨]が高々とそびえ、小さな池に白い蓮があつた。  
いつも素足で走りまわる下女が一人だけいて、  
雨の中でも畑の野菜を採ってきたりしていた。  
これより少し後に、  
任扱先生にんきやうが高い志を抱いたまま、官を罷めて旧居かえに還ってきた。  
このときに村里の子どもたちは、  
任扱先生にんきやうの家の門に向かって車の轍が幾重にも付くのを見て、

初めて「長者の車」[有徳者のもとに土地の名士が集まり]の意味を知ったのだった。  
任佖先生は人がくると鶏を煮て酒を酌み交わし、  
客人と相對して大いに楽しんだ。  
ときに古の隱者いんしよのような人がいると聞くと、任佖先生は自らそのもとに訪れ、  
逆にその人がくると、任佖先生の妻がいかいしく接待し、  
どちらが主であるのかまるでわからなかった。  
私はこのときまだ幼く、漢の司馬相如かん し ぼ そうじょを慕って賦の勉強をしていた。  
任佖先生が話をするのを傍らに立って聞き、  
先生の精悍なありさまに私は発奮させられた。  
それから歳月はどれほど経ったのか、  
あのころの老人たちは逝ってしまって、もはやいない。  
思えば、史経臣先生が最初に亡くなり、  
その墓おひるに植えられた桑や樗は一抱えほどの太さにまでなった。  
私は官職に就いて万里を旅する身となり、  
父を喪って衣服を涙でぬらしつつ一度だけ帰郷し、  
各地を漂流すること二十年に及び、  
人間界ばんぜんの万縁の虚しさを知った。  
ただ喜ばしいのは、  
任佖先生が老境に至って知事に就任し、  
威信が未開の地にも及んで、中華の風俗に靡よりになったことだ。  
任佖先生は任期が満ちても、特に再任が許されて俸禄も増し、  
都に出て朝廷に業績報告をした姿は、まことに盛んなものがあった。  
ところが、任佖先生はこれ以上の榮譽を望まず、

田園に帰る意志は少しも緩まない。

それはなぜかというと、

かつて蔡州さいにいたときに土地の人に慕われてよい農地を寄贈されたからで、

そこには肥えた土に水路が走る百頃の稲田があり、

安心して十年の儲えを得ることができる。

昔蔡州さいの地に、鹿や猪を狩って楽しんだ宰相がいたけれど、

任佖先生も十斤の重さの鷹を連れ、驢馬ほどもある猛犬を伴って、

猟にいそむことができるであろう。

陶淵明とうえんめいが隠退してから、自ら鋤を手に農作業に苦勞したのとは同じではない。

私は今や四十二歳、

髪くしげずが衰えて、梳るだけの量がない。

ここ彭城ほうじょうは歴史に名高い町であって、

人材の乏しさからたまたま私が任命されただけで、

私のこれから先はもう知れたようなもの、

遠きこりからず、樵すなどりや漁を我が仕事とするようになるであろう。

となれば、任佖先生のもとに従って、

草鞋わらじを穿いて荒地を開墾して老いていくのがよいだろう。

任佖先生はいま蔡州から遠い瘴江しょうこうのほとりにいて、

その思うところを誰に述べたらよからうかと困っていたところに、

幸いにも私の同門の友である家勤国君かきんこくが訪れた。

家勤国君と私は、飲んで一つの乗り物に乗って語り合うほどの仲で、

氷の上に刺身を並べ、酒を酌み交わしたこともある。

近ごろ、家勤国君は酔ってふと私のことを思い出したのか、

玉を連ねたような清らかな詩を送ってきてくれた。

家勤国君は、思い通りに適うことが私には少ないのを知っていて、

その詩で私の気持ちをほくしたり伸ばしたりしてくれた。

世間のことは、風の中で翻る旗のよう、

日々にあちらからこちらへとひっくり返る。

高位にあって訪問客が絶えなかった大臣も、

ひとたび地位からすべり落ちると、門の外に雀取りの網が張れるほどにひっそりとしてしまい、

皇帝の寵愛を一身に集めていた後宮の美女も、

ひとたび愛情が他に移ると、秋の扇の悲しさに沈んでしまう。

昇るも落ちるも一瞬のこと、

そのたびに人は喜んだり怒ったりする。

私がこの詩を作って任佶先生と家勤国君に送るのは、

我が父以来の故郷の人々を見てきて、

「国に道みちが行われているときは智者として振る舞い、

国に道が行われていないときは愚者として振る舞う」

あるいは、

「国に道が行われているときは官に仕え、

国に道が行われていないときは退いて帰る」

という古の人々の教えを師いしとすることを学んだからである。

【補足】[蘇洵そじゆんの友人としてここに詠まれている史経臣しけいしんについては、作品番号 01-2-004 で見ている]

## ■ 【05-3-054】 初別子由

【解題】弟が行ってしまったからの思いを詩に詠んだ。

【訳文】

僕は若い時分に、君がどういう人物であるかを知った。

天然の資質として、君は温和で清秀である。

学問を好み、成長するとともに好学の心はますます堅くなった。

表も裏もなく、どこまでも明るく見通せる人になった。

僕にとって君がかけがえのない存在であるのは、

君が我が弟だからというだけでなく、要するに賢友であるからだ。

僕が杭州こうに行ってから、君を見ないことを六七年に及び、

微妙な言説を語り合う相手がいなかった。

僕は率直にものを言ってしまう性格であるから、

程ほどというのをわきまえないで身勝手に振る舞ってしまうのを、

僕は自分でずっと恐れていた。

君と会ってみたら、黙はかりって秤の前はかりにいるような気分になった。

僕の妙な意気を鎮めてくれて、よからぬことが萌したりしなくなった。

君には六人の娘がいて、

皆女性としての振る舞いを得ていて心配がない、

それはひとえに君の賢夫人によるものだ。

家庭内がきちんとしていれば、粗末な食事くそまなも正式の御馳走ごちそうに等しいというは、

まさに君の家のことで、

君は内のことを気にしないで、外で思いのままに行動することができる。

ところが、出来の悪い官員である私は、明日の朝に炊く米もなく、

それでいながら、雷鳴のごとき軒を叩いて平気で眠っている。

秋になって東の部屋で眠って、夜に風雨の音を聴くと、

別れは長くは続かないと思えてくる。

それはどうしてかと聞かれても困る、

妙理は細かく分析することはできないのである。

この前、君はほうじょう彭城の町の門から出て、一艘の舟に乗って西に行ってしまった。

君はなんけいおうてん南京応天府に帰ってから、

高殿に上って、古い建物が聳え立つのを空しい気持ちで眺めたり、

家にいて、僕とともに官職に就いたのは誤りでなかったかと、

ふとそういう考えにとりつかれて驚いたりしていることだろう。

南京はまことに繁華なところで、人事は水と火のように争い合っている。

僕が思うに、まずは門を閉ざして静かに座し、

身を無きもののようにして、見ざる聞かざるを決め込むのがよいだろう。

家族を養うなど小さなこと、

文章に励んでも虚名を得るだけ。

成り行きのまま白髪を靡かせるのでよろしく、

長生きの薬など用いる必要はさらさらない。

## ■ 【05-3-055】 与劉貢父

【解題】 弟が8月16日に徐州じょを発ったことは、劉放りゅうほん [字は貢父あぎな こうふ] [→作品番号 05-1-064] に宛てたこの手紙からもわかる。

### 【訳文】

回文の短詩をお示しくださり、精緻な構成で、しかも悠然としていて、和そうしましたけれども、とても及びませんので、ただ歌って味わっております。

おうけいじゆん 王景純君はまことにみち道を得た人で、その至術をいろいろと教わりました。王景純君に贈った詩がありますので、写してここに添えましょう。御笑覧ください。

弟もまたやや知るところがあって、私はいつも感化されています。弟は嗜好に淡く、行いは常に一定で、それは得ているところがあるからなのでしょう。

我らはいふたことにおいて、秘訣を得られないのを残念からずにはいられません。たとえ得られるようなことがあってもさと暁らずにいるのでしょう。自ら守るものが堅くなく、思考の賊が浄め尽くされることがないのは、はてさてどうしたものでしょうか。

弟は十六日に出発して南都[南京応天府]に赴きました。

【補足】おうけいじゆん [王景純は作品番号 05-3-049 で見た人物である]

## ■ 【05-3-056】 次韻呂梁仲屯田

【じよ 解題】徐州の町から東南に五十七里にあるりょりょう呂梁の地に住むちゆうはくたつ仲伯達の詩に次韻した。

### 【訳文】

葉は雨のために、花は風のために、日夜稀になりゆくこの季節、  
花や葉に一杯の酒を託すのはいつになるのかと気が気でない。  
花や葉がないからといって、ほうぎよく宝玉がその代わりをしてくれるわけではない。  
それでも、枯れ朽ちたとしても、きのこなお菌が出てきてくれたりはするであろう。  
町の外のりょりょう呂梁のあたりは川の流が急であるとか、  
我が胸の内は何やらもやもやとして出渋っている。



ともあれ、九月九日の重陽ちやうようの宴には必ず来るように、

謝靈運しゃれいゆんにも負けぬ貴君の筆力をそこで是非見せていただきたい。

【補足】[終わりの部分は、昔、劉裕りゅうゆうが徐州じょの戲馬台ぎばだいで九月九日に遊び、人々が詩を賦したなかで、謝靈運しゃれいゆんが最も優れたいたという故事を用いている。戲馬台は作品番号 05-3-050 にもあったが、徐州の町の南方にある名所]

■ 【05-3-057】王鞏おうきやう屢約重九見訪、既而不至、以詩送将官梁交且見寄、次韻答之。交頗文雅、不類武人、家有侍者、甚惠麗

【解題】都みやこにいる王鞏おうきやう [字は定国あざな ていこく] [→作品番号 05-3-039] からは9月9日に重陽ちやうようの節句に間に合うように徐州じょに行くとの手紙が届いていたのだが、その日が近づいてもまだくる気配がなかった。この詩の題は、「王鞏君からはしばしば重九ちやうきゆうには訪れると言ってきているのだが、すでにその日になろうというのにまだやってくる。王鞏君は、将官りやうこうの梁交君を見送る詩を作り、合わせてそれを私に寄せてきたので、それに次韻して答える。梁交君は武人でありながら文雅にすこぶる優れ、家には非常に美しい侍者がいるという」。この詩はもっぱら梁交について詠んでいるのだが、宴席の座興として作りでもしたのだろう、酔っ払いのたわごとのように支離滅裂な印象であるので訳は割愛する。

■ 【05-3-058】台頭寺雨中送李邦直赴史館、分韻得憶字人字、兼寄孫巨源二首

【解題】李清臣りせいしん [字は邦直あざな ほうちよく] が都での職を得て徐州じょを去ることになった。この詩の題は、「台頭寺だいたうじで雨の中、李清臣が都の史館しかんへと赴くのを見送った。韻を分けあって憶の字と人の字を得た。合わせて孫洙そんしゅ [字は巨源あざな きよげん] に寄せる」。台頭寺だいたうじは戲馬台ぎばだいの上に築かれた寺で、作品番号 05-3-045 でも見ている。李清臣と孫洙の仲がよいことは作

品番号 05-1-004 で引いたエピソードで見ている。「憶」の字を韻とした第一首を訳す。

### 【訳文】

其の一

葉が枯れ始めた林に、秋風がずっと強く吹き寄せ、  
 都に行く貴君を送る老いた私に、百の憂い<sup>い</sup>が集まってくる。  
 人々が歌う送別の詩は、遙か遠くに行こうとする雲の中に入り、  
 詩の悲しみのために、雲は進まなくなり、天は泣く。  
 紅葉に黄色い菊、秋はまさに色の乱舞、  
 白い魚に紫の蟹、秋の美味にも貴君は立ち去り難<sup>がた</sup>れている。  
 貴君に依って美しい髯<sup>そんしゅう</sup>の將軍[孫洙]に告げるのは、  
 私はもう病み衰えてしまって、逢ってもきつとわからないくらいになってしまったよ——

### ■ 【05-3-059】 代書答梁先

【解題】 梁先<sup>りょうせん</sup> [字は吉老<sup>あざな きちろう</sup>] [→作品番号 05-3-035] はこのころに徐州<sup>じょ</sup>から去ったよう  
 で、蘇軾はこの詩を贈っている。

### 【訳文】

我が身もこの世も悠久の流れのうち<sup>うち</sup>にあり、  
 顔が衰え髪が白くなることから誰も免れはしない。  
 私は無理<sup>じょ</sup>して徐州知事の名を得ているのだが、  
 このまま故郷の帰らない<sup>かえらぬ</sup>ようでは猿にも劣るといものだろう。  
 孔子<sup>こうし</sup>は生きていたときには、

故郷の人からさえも冷たい仕打ちを受けたのだが、  
さて私はどうなのかと思っていると、  
心が清く身をしっかりと修めている梁君は、  
珍しいことに千里も遠くないと私のもとにやってきた。  
胸の内の正しさは瞳に現れるという通りで、  
世間の流行に走ることなく、  
かんだい漢代からの儒学の伝統をきちんと受け継いで、  
おうようこう おうようしゅう 欧陽公[欧陽脩]の書を学び取ろうとしている。  
私はもはや衰えて学ぶことを廃して時を盗んで過ごすだけ、  
貴君からものを問われるのを畏れるばかりであった。  
貴君と別れるいまは紅葉、黄花の秋、  
これからは夜の夢に貴君を見て愁うようになるだろう。  
貴君は山の谷に生まれた宝玉、  
さらに磨けば王公のもとにあっても恥ずべきものではない。  
学問とは広く求められる商品のようなものとか、  
人はそれを仰いで取り、俯いて拾い、余すところがない。  
みち道は天のように大きく、求め尽くすことができない。  
その見るべきところを修めて、その奥深いところを追求すべきである。  
願うのは、貴君が篤実であって、身を慎み、浮わつかないこと。  
学問は心の底より発して、食を忘れ、楽しみのあまり憂いを忘れるものである。

## ■ 【05-3-060】送楊奉礼

【解題】楊という人を見送った詩。詩の題に「奉礼」とあるので、官員であるような

のだが、詳しいことはわからない。

### 【訳文】

楊よう氏の系譜かんゆうは関右かんゆうの地に興きより、

天下一てんかと称せうえられた楊よう氏の風流ふうりゅうは靖恭里せいきょうりから出たのであった。

いまの世情せじやうは険けんくなるばかりであるが、

楊よう氏の家法けはうはもとよりおらかである。

いまある酒しやうは一鐘しやうだけ。

誰たれがこの老人らうじんが気ままきままに振ふるる舞まひうのを許ゆるしてくれるのかというと、

貴君ききみだけなのである。

【補足】[この詩には、蘇軾自身の注で、「大水の中で別れた」と記してある。7月17日に黄河かうがが決壊けつわいし、溢あふれた水みづがじわじわと南下なんがして徐州じょ州しゅうへと迫せまってきていたのだった]

### ■ 【05-3-061】 九日邀仲屯田、為大水所隔以詩見寄、次其韻

【解題】作品番号 05-3-056 で見たように、呂梁りりやうの仲伯達ちゆうはくたつを重陽ちやうやうの宴えんに誘いざなっていたのだが、大水おほいづのために行けなくなったとの断りの詩うたが送られてきた。それに次韻じきんした詩。

### 【訳文】

重陽ちやうやうの節句せつかうといえは、晋しんの時代じだいの賢人けんじんの孟嘉もうかの故事こうしを思い起おぼこす。

今年の重陽ちやうやうの宴えんに貴君ききみがこれらこれらないのではその孟嘉もうかを欠かくののに等おなしい。

西せいからきた黄河かうがの神様かみさまは、どうもおのれの力の大きさを誇こほり過ぎだ。

船頭せんとうの黄色きいろい帽子ぼうしも吹き飛ば飛ばしてしましまって貴君ききみはこられなくなるし、

せっかくの樽酒も浪の花に浮かぶはうなありさまだ。

貴君は鯉を使わして、大水のなかでも詩を送ってきてくれたのだが、

その珠玉の文字に対して、私は瓦礫のような文字を並べて答える。

何時か貴君と会って、老い去ってからの秋の悲しさを語り合いたいものだ。

重陽の宴の酒に酔って詩を作ったので、

字が斜めになっているのを許してもらいたい。

【補足】〔(1) 孟嘉<sup>もうか</sup>の故事は作品番号02-2-021で見ている。孟嘉の帽子からの連想で、船頭の被る帽子が導き出されているのだが、その帽子が黄色であるのは、陰陽五行説<sup>いんようごぎょうせつ</sup>で「水は火に勝ち、火は金に勝ち、金は木に勝ち、木は土に勝ち、土は水に勝つ」という関係があり、土の色である黄色を身にまよえば水を自在に制御できるという意味によるのである。(2) この詩は酔っ払って書いたことになっているが、実際は迫りくる洪水を前にそういう状況にはなかったはずで、わざと余裕のあるポーズをとったと見るべきだろう〕

## ■ 【05-3-062】 獎諭勅記

【解題】1873年〔明治6年〕に来日したオランダの土木技術者のデ・レーケは日本の河川を見て、大陸で培われた河川工学の常識が通用しないことに驚き、「これは川ではない、むしろ滝である」といったと伝えられているが、逆に我々が大陸の大河川の洪水のありさまを想像するのは容易ではない。7月17日に決壊した黄河<sup>こうが</sup>の水は行き場を求めて延々と旅を続け、数十日をかけて遠く200km先の徐州<sup>じょ</sup>にまで至った。蘇軾は徐州周辺の地形の要所として、東南の地が水と陸の当たるところであると記していたが〔→作品番号05-3-026〕、黄河の水はそこで山地に阻まれて滞り、あたり一面を水浸しにしたのだった。蘇軾がそれにどのように対処したのか、弟の蘇轍が記した二つの

文章から知ることができる。一つは翌年の秋に書いた『黄楼の賦』の序文、もう一つは25年後に書いた兄の墓誌銘。両者は重複するところもあれば補い合うところもあるので、適宜合成してここに訳す。

## 【訳文】

蘇轍：『黄楼賦叙』および『亡兄子瞻端明墓誌銘』から

熙寧十年七月十七日、黄河が曹村で決壊した。水は梁山泊〔黄河の南の低湿地帯〕を水浸しし、南清河に溢れ、さらに泗水に溢れ、彭城〔徐州〕の南を取り囲む二つの山で止められて呂梁と百歩の間で滞り、八月二十一日、彭城の町にまで及んだ。たまたま徐州知事として彭城にいた兄の蘇軾は、水がくる前に人々に指示し、土を運ぶための畚や鍬を用意し、土や石を蓄え、干し草で城壁の穴を塞ぐ備えをした。水は町のまわりを囲み始め、いまにも城壁から入り込んで町が破壊されそうになったために、富豪たちは浮足立って町から出て水を避けようとした。

兄はいった。

「もしも富む者が出て行ったなら、民心が動揺してしまう。私は誰と町を守ったらいいのか。私はここに留まる。水は決して町を壊しはしない」

使いを出して人々を説得して町に呼び戻した。

兄は兵士のいる宿舎に行き、その隊長を呼んでいった。

「水はまさに町を害なおうとしている。事は急である。諸君等は皇帝の兵士で、中央からの命令に従う者ではあるけれども、私に力を貸してほしい」

隊長はいった。

「知事殿が洪水から逃げずにいるのですから、我等ごとき者はその指示に従うまでです」

兄は隊長とともに、短い衣を付けた裸足の兵士たちを率い、砂袋をもって町の外に出ると、町の南東の戲馬台から始めて城壁に至るまでの長い堤を築いた。堤が完成すると、水がその下にまできたが、

町に害は及ばなかった。民心はこれで静まった。

しかし、雨は日夜やまず、水は勢いを増して暴れ、九月一日、町に及んだ水は深さ二丈八尺にもなり、東門も南門も北門も塞ぎ、水は町から山までを浸した。

兄は城壁の上に小屋をつかってそこに寝泊まりし、草鞋を履いて町を駆けまわって官吏のそれぞれに受け持ちの場所を与えて守らせた。

水は千余里にわたって漲り、人家を漂わせ、墓所を破壊し、老弱な者は川に浮かんで流され、壮強な者は必死に走って水を避けたが、木や高台で孤立して食べる物がなくて餓死する者があった。兄は水に慣れた者に命じて船を出し、食糧を配って大勢の者を救った。

朝廷は黄河を塞ぎ、ようやく水が引いたのだが、朝廷には徐州について考慮する余裕がなかった。

兄はいった。

「黄河が本当に塞がれたのなら徐州にはもう害が及ばないだろう。しかし、塞がれるか塞がれないかは天の定めにもよるだろう。徐州の人々を重ねて被災させるわけにはいかない」

城壁を補強し、水害の要となる場所を見定めて木製の堤防を作り、たとえまた水がきても町は安全であるようにしようとした。朝廷に労働力を調達することを請い、朝廷はそれを許し、事が終わると、詔みことりをもって褒められた。

徐州の人々は兄とますます親しみ、町の東門の脇に高い楼閣を築き、「土が水に勝つ」との意味を示すために壁を黄色く塗ることを勧めた。完成すると兄は黄楼こうろうと名付けた。

【補足】 [この文の終わりにあるように、水害への対応が完了した後に蘇軾は皇帝から褒められ、また黄楼こうろうと名付けた楼閣を建てた。それを黄色く塗ったのは、先の詩で見たのと同じく、土は水に勝つ意味からである。黄楼の完成は洪水から 1 年後の秋で、そのことについては後で見ることにし、ここでは皇帝から褒められたことについて蘇軾自身が記した文章『獎諭勅記』しょうゆちよくき [獎め諭す勅書ほさとちよくしよについての記] を見ておこう。前半は皇帝の勅書の写しで、後半に弟の文章にはなかった幾つかの具体的な記述がある

## 【訳文】

蘇軾ちよくしよ いわに下された勅書ちよくしよ いわに曰く。

「京東東路安撫使けいとうとうあんぶし司しならびにちん轉運司てんうんしの奏そうするところを見ると、昨年こうが、黄河じよの水が徐州城下じよに至ったとき、汝は自ら官吏を率い、兵夫を駆り、監督して、城壁を救い護まもった。一城の人民ならびに倉庫、廬舎ろしやにいたるまで、漂流、水没の害を免れることができ、ついに全てかもと通りのままであることを得た。黄河は中国にとって長く患いとなっており、その堤が潰えて水が東に注ぎ、溢れて徐州にまで及んだのだ。汝がいたことで、民は住居に留まり、城郭を増強して、安らかであることができた。朝廷への使者がしばしばこのことを告げ、朕ちんは甚だ喜ばしく思っている」

熙寧十年[1077年]七月十七日、黄河は澶州曹村埽で決壊し、八月二十一日、徐州城下に水が及んだ。九月二十一日に至って、水の深さはおよそ二丈八尺九寸にまでなり、東西に広がり、北は山に触れて止まった。皆清水で濁流ではなかった。水の高さは城壁の内側の平地よりも一丈九寸ほども高くなり、外壁の東南の隅では水沈ぼんするところまであと三版となった。

土地の古老がこのようにいった。

「かつて天禧年間に二つの堤を築きました。一つは、小市門外の壕を絶って南に向かい、少し西に振まって戲馬台ぎばだいの麓ふもとに至るものでした。もう一つは、新牆門外の壕を絶って西に向かい、折れて城下の南京門なんけいもんの北に至るものでした」

急遽人夫五千人を集め、武衛奉化牢城の兵士も合わせて、昼夜兼行で堤を作った。堤が完成した翌日、水は東南の隅から溢れてきたが、堤に当たるとそこで止まった。

徐州には水門が六カ所あり、また水の至らないうちに、薪まきや芻くさで土囊つちのぶくろを作って城壁の外側から塞いだ。水が至ってから後は、城壁の内側からも塞いだのだが、どれも恃むに足りないものであった。

城中にはもともと土を掘った大きな坑あなが十五あり、外の水と呼応して坑の水位が変化し、水が溢れ出るものもあった。徐州は三方を水に囲まれてしまったために、垂父あふの塚の東側だけから工事用の土を



取ることができた。

町の附城ふじょうの部分から始まる昔の長堤の址があり、それを大きくして長さ九百八十四丈、高さ一丈、そして幅を倍にした。

公私の船数百艘が風浪のために動けなくなっていたのを城下に繋ぎ、それで河の勢いをそいで水の怒りを鎮めた。

十月五日に至ってようやく水は退き、城は全きを得た。

翌年二月、朝廷より錢二千四百十万が支給され、人夫四千二十三人を集めた。また、備えていた常平錢じょうへいせん六百三十四万と米一千八百余斛こくを放出して、人夫三千二十人を募集し、城外の小城を改築した。木で堤防を四カ所に作った[石が調達できなかったので木を用いた]。一つは天王堂てんのうどうの西、一つは彭城楼の下、一つは上洪門じょうこうもんの西北、一つは大城の東南隅である。十五あった大きな坑は皆塞いだ。

一方ですでに澶州せん靈平の堤防が完成したので、黄河の水はもはやこなくなった。

臣わたしが思うに、黄河は常に五六十年来一度は決壊する。徐州は古汴河と泗水こべんがしすいの下流にあって、上下二百余里にわたって皆山に阻まれ、水が最も深くなり、そして排水が難しいことでは、他の地域と異なっている。恐れるのは、久しい後にまた緊急事態になったときに、役人も民衆もそうしたことをきちんと知らないということだ。そこで、皇帝から詔書を頂戴した機会に、この大略を記して、石に刻もうと思う。そして詳細は文書にして役場に納めておく。これを『熙寧防河録』という。

【補足】[次の災害に備えて今回の経験を石に刻んで残しておくところまで、蘇軾の措置は実に行き届いたものだった。詩にしばしば詠んでいるように、病み衰えて酒を呑んでばかりいたわけではないのである]

## ■ 【05-3-063】 河復

【解題】 以上は災害への対応がひとまず終わってから書かれた文章であったが、時間

を戻して、洪水が引いた直後に詠んだ詩を見ておこう。さすがに蘇軾といえども、町が一面の水の中で孤立して対応に奔走していたときには詩を詠むような余裕はなく、<sup>こうが</sup>黄河の流れが戻ったことを聞いて、ようやくその喜びを歌うことができた。次のような序文が付いている。

### 【訳文】

<sup>じょ</sup>叙  
<sup>きねい</sup>熙寧十年秋、<sup>こうが</sup>黄河は<sup>せんえん</sup>澶淵で<sup>きよや</sup>決壊し、<sup>りょうざんぼく</sup>鉅野[梁山泊あたりの旧名]に<sup>わいすい</sup>注ぎ、<sup>し</sup>淮水から<sup>なんせい</sup>泗河[南清河の旧名]に入った。澶の<sup>き</sup>南、魏より北のあたりでは黄河の水が本来の川の流れを絶って溢れ、甚大な被害となった。<sup>ほうじょう</sup>彭城[徐州]の<sup>じょ</sup>城門の下に深さ二丈八尺の水が迫り、七十余日間退かなかった。役人も民衆も懸命に水を防いだ。十月十三日、澶州で強い風が終日吹き、それが止むと、黄河の流れの一筋がもとの道へと戻った。これを聞いて私は非常に喜び、できうれば黄河が塞がれるようこと願った。そこで『河復』の詩を作った。これを人々が道々で歌うことで、民衆の願いが神に届けばと思ったのである。これはつまり土地を治める者の<sup>こころ</sup>志なのである。

皆は知っているだろうか、

<sup>かん</sup>漢の<sup>げんこう</sup>元光年間に黄河は<sup>こうが</sup>瓠子で<sup>こし</sup>決壊し、

それから二十年ほど後の<sup>げんほう</sup>元封年間にまたしても瓠子で決壊した。

<sup>きよや</sup>鉅野は東に傾いて水が溢れ、<sup>わいすい</sup>淮水、<sup>し</sup>泗河は水でいっぱいになり、

南方の人々は、黄河の魚を飽きるほど食べることになった。

皇帝は予定されていた国の重要な儀式を取り止め、

<sup>えつ</sup>越の<sup>ふ</sup>巫を使わし、河の神を鎮めるために白馬を水に沈めた。

しかし、河の神は、人力を使い果たすまで努めても許そうとせず、

堤防を塞ぐために投じた薪や芻を数限りなく流し下してしまった。  
我が宋朝の皇帝の徳は古の堯のように盛んで、  
神々もそれぞれに役目を皇帝から受けるようになったのに、  
黄河の神だけかなお驕りたかぶっていた。  
天帝は風の神を遣わして黄河の神に命令したので、  
ようやく、夜のうちに、水は澶州橋から北に向けて流れることになった。  
東の風も氷を吹いていささか助かしたので、  
これ以上の土木工事をしないでよくなった。  
こうして南方の人々は水が引いた後の土地で、  
黄河の水がもたらした泥の上に麦を蒔き、  
大木にひっかかっている筏を仰ぎ見るのである。

■ 【05-3-064】 登望◆亭 [◆は谷+共という字]

【解題】 高いところにある亭あずまやから洪水の痕を見て詠んだ詩。

【訳文】

黄河の水が西から漲みなぎりきたときは、  
大きな谷間のようなこの地勢が全く失われ、  
水の光のただ中に、徐州の城じよだけかもぼんと存在していた。  
突然退くや、水はどこかに消えてしまい。  
残された千里の土地では、稲も麻もみな空しくなっていた。

■ 【05-3-065】 有言郡東北荆山下、可以溝畎積水、因与吳正字、王戸曹同往相視、以

地多乱石、不果。還、遊聖女山、山有石室、如墓而無棺槨、或云宋司馬桓魋墓。二子有詩、次其韻二首

【解題】長い詩の題の前半は、「ある人が徐州の東北の荆山の下に溝があって、ここに水を流すことができるだろうというので、呉瑄と王文誥と一緒に見に行った。しかし、石がごろごろして、思うところを果たせそうになかった」[以下は略す]。次の洪水に備えて、蘇軾はできる限りのことをしようとしていたのだ。2首のうち詩の題の前半部分に関連する第一首を訳す。

### 【訳文】

#### 其の一

「手を立てて黄河の水を遮る」ということわざがある――

ちっぴけな素手で遮ることなどできるはずかない。

黄河の奔流は、一瞬にして千の家を巻き込んでしまった。

昔、智伯は趙の町を囲んで水攻めをした――

そのようなことが実際にできるものか私は疑っていた。

しかし、張湯は蜀への道を整備するのに、

山をまわる坂道を繋ぎ合わせるのではなくて、

谷を穿って水路を通じさせたのだから、

やり方次第では、水を制御することも可能なのだろう。

私は世事に疎いためにこの徐州の地に出され、

苦勞の日々を送らなければならなくなった。

私のごとき知事があれこれ対策を立てたところで、

ごろごろと雷様の車の引かれる音が轟いて、大雨が降ったならば、

何の役に立ちもしないと笑われてしまっただけなのだろうか。

【補足】 [以上、洪水に関連するいくつかの詩文を見てきたが、この先しばらく別のテーマの詩文が並んで、また洪水に戻る]

## ■ 【05-3-066】 表忠観碑

【解題】 杭州知事の趙抃ちようべんからの依頼で、表忠観ひょうちゆうかんという道教の寺院の由来を記したこの碑文を作った。趙抃は蘇軾より28歳年長の大先輩で、かつて副宰相も務めた官界の大物。王安石おうあんせきが神宗皇帝しんそうによって初めて副宰相に抜擢されたとき、趙抃は先輩副宰相として、王安石が進めようとする改革を強く批判した。しかし、王安石に国政を任せようとする皇帝の意志は固く、熙寧3年 [1070年] 4月、副宰相を辞して杭州知事に転出した。それは蘇軾が改革を批判する意見書を皇帝に提出したすぐ後のことだった [→作品番号 03-3-004]。それから1年ほどたった熙寧4年 [1071年] 年6月に、蘇軾も都にいられなくなって杭州副知事として転出した。蘇軾が杭州に着任したのは12月で、その直前に趙抃は他州へと移り、すれ違いとなった。そして、この年の5月に、趙抃は再び杭州知事になった。この碑文の大半は、趙抃が朝廷に提出した文章の写しで、蘇軾が作ったのは最後の銘文だけである。ここで主題となっている錢氏せんの呉越国ごえつこく [唐と宋の間に興った地方政権の一つ] について、蘇軾が肯定的な見方をしていたことは作品番号 04-2-039 などですで見ている。趙抃と歴史認識 [ならびに政治的立場] を共有することから碑文の執筆を依頼されたのだろう。銘文は韻文としての体裁が見えやすいように訳してみた。

## 【訳文】

熙寧十[1077]年十月戊子、資政殿大学士、右諫議大夫、知杭州軍州事の趙抃は朝廷に次の

ように申し上げた。

「もとの呉越国の王の錢氏の墳廟と、その父祖、妃、夫人、子孫の墳で錢塘県にあるもの二十六および臨安県にあるもの十一は、どれもが荒廃したままに放置され、土地の父老はそこを通るたびに涙を流しております。

臣が謹んで考えますに、呉越国の最初の王であった錢鏐は、民衆を兵士として集め、唐末に大乱を起こした黄巢を破って走らせ、江淮地方にその名が知られるところとなりました。次に、唐朝に背いた劉漢宏を八組の兵団を率いて破って越州を平定し、それを董昌に捧げ、自分は杭州を拠りどころとしました。ところが、董昌が越州をもって唐朝に反したために、すぐに董昌を討ち取り、越州も合わせて、浙東、浙西の地を平定しました。唐が亡んだ後には呉越国の王となり、その子の錢元瓘に王位を伝え、孫の錢仁佐に至って南唐国の兵を破って福州を取りました。錢仁佐の弟の錢俶が王位を継ぎ、再び南唐国を攻め、周朝の世宗皇帝の軍団を迎え入れました。その後、ついに宋朝に仕えるようになりました。

呉越国の三世四人の王は、五代十国時代の天下が大いに乱れた時代を過ごしました。このとき各地に豪傑が蜂起し、ほんの数州ばかりの土地に拠って勝手に王を名乗る者が大勢いました。今ではそれらの一族のほとんどが滅び去り、ひいてはそれに従わせられた無辜の民も子孫が残らないようなことになってしまいました。しかし、呉越国ばかりは千里四方の土地に兵士十万を擁し、山から金属を採り、海から塩を煮て取り、象牙、犀の角、真珠といった富にも恵まれ、天下第一といわれるほどに繁栄し、それによって臣下としての節義を失うことなく、その時その時の皇帝に絶えることなく貢物を献じ、その地の民は老いて死ぬまで戦争を知らずに過ごし、四季の遊びを楽しみ、歌や鼓の声がいつも聞こえ、今に至ってもそれがそのままに続いています。呉越国の王が民に徳あることはなほだ厚いものがあつたのであります。

宋朝が天命を受けて四方の乱れを順次平らげて行ったときに、蜀国の孟氏や南唐国の李氏はその堅固にして遠く離れていることをたのみとして、宋の兵団に城下にまで迫られ、ついに力に屈して勢い

が窮まって後になってようやく降参しました。また漢国かんこくの劉氏りゅうは死を賭して宋の軍団に抵抗して百回戦い、味方の遺骸を積んで城壁とし、池ができるまでに血を流して抵抗し、ついには宋が天下の力を尽してようやく勝利したのでした。ただ呉越国だけは、宋朝からの命令を待つこともなく、府庫に封印をし、土地と人民の帳簿をともに宋朝に提出し、宋朝から統治するための官吏を派遣してくれるようお願い、銭氏は駅舎から旅立つ旅人のように王の地位から去ったのでした。宋朝に功績があったこと、実に大きなものがあります。

昔こかん、後漢の時代とうゆうに竇融かせいが河西地方を漢朝に献じたとき、光武帝こうぶは竇融の父祖の墳墓を治めて厚く祀るみことりよう詔を下しました。今の銭氏の功德はほとんど竇融を超えるものがありますのに、百年に及ばない歳月の間に銭氏の墳廟は荒れ、道行く人は傷み嘆くありさまとなっています。これは忠臣を褒め、民心を慰めるといふ道理に反するものであります。

臣わたしが願いますに、竜山りゅうざんにある廃れた仏寺の妙因院みょういんの址を道教の寺院とし、そこに銭氏の子孫で道士じねんとなっている自然という者を居させ、銭塘県にある墳廟をこの自然しぜんに管理させるとともに、臨安県りんあんにあるものはその県じょうの浄土寺じょうどの僧で道微どうびという者に管理させ、一年にそれぞれその弟子から一人ずつを道士、僧侶にし、世々この仕事を掌らせて、その土地からの収入をもって建物を維持させるようにしたいと考えます。もしそれらの者がきちんと仕事をしない場合には、県の役人が監督指導し、ひどい場合には管理者を交替させるようにします。こうすれば永久にこのことが続き、朝廷が銭氏を優遇こうごする意を表すのに適いましょう。臣わたしは死を犯して以上のことを申し上げます

これに対して朝廷からは「よろしい」との裁可が下り、妙因院には改めて表忠觀ひょうちゅうくわんの名が与えられた。

銘めいに曰く。

天目之山、苕水出焉。しやうけい [苕溪の水が流れ出る天目山] てんもくさん

竜飛鳳舞、萃於臨安。そこ [そこは竜が飛び鳳凰が舞い集まる場所]

篤生異人、絶類離群。せんにゅう [ここに生まれ出たのは、人と大きく異なる者[すなわち銭鏐]]

奮挺大呼、従者如雲。[かの者が奮起して呼べば雲のように集まり従う人々]  
 仰天誓江、月星晦蒙。[天を仰ぎ川に誓うとき、月も星も暗く、ただ輝くのはかの者]  
 強弩射潮、江海為東。[かの者が潮を射るなら、海も東に退く勢い]  
 殺宏誅昌、奄有吳越。[劉漢宏を殺し董昌を誅し、樹立した吳越国]  
 金券玉冊、虎符竜節。[その功を刻むのは金券、玉冊、虎符、竜節]  
 大城其居、包絡山川。[大きな町を作り、取り囲む山と川]  
 左江右湖、控引島巒。[町の左は大河、右は湖、遠くに控える島々]  
 歳時帰休、以燕父老。[時に故郷に帰って、父老を集めての酒宴]  
 曄如神人、玉带球馬。[玉帯を纏って馬にまたがった姿は神のよう]  
 四十一年、寅畏小心。[己を戒めて天に仕えて在位四十一年]  
 厥篋相望、大貝南金。[吳越国には次々に集まりくる宝玉を納めた箱]  
 五朝昏乱、罔堪托国。[ときは五つの王朝が乱れ立ち、民には生命を託す国はなく]  
 三王相承、以待有徳。[ただ吳越国だけは民に徳があり、継承した三代の王]  
 既護所歸、非謀非咨。[すでに帰順すべき皇帝を得れば、謀ることなく即決]  
 先王之志、我維行之。[後代の王が行ったのは先王錢鏐のもとからの志]  
 天胙忠孝、世有爵邑。[天は錢氏の忠孝を褒め、代々保つ爵位と領地]  
 允文允武、子孫千億。[錢氏は文武に優れ、繁栄する子孫は千億]  
 帝謂守臣、治其祠墳。[ここに皇帝は大臣に命じる——錢氏の祠墳を治めよ]  
 毋俾樵牧、愧其後昆。[樵や牧人によって荒らされ、錢氏の子孫が恥じぬようにせよ、と]  
 竜山之陽、歸焉新宮。[竜山の南に新たに築いた堂々の宮]  
 匪私於錢、唯以勸忠。[それは錢氏を特に最賈するのではなく、忠を勧めるため]  
 非忠無君、非孝無親。[忠がなければ君はなく、孝がなければ親はない]  
 凡百有位、視此刻文。[あらゆる官吏はここに刻んだ文章を見るがよろしい]



## ■ 【05-3-067】 与劉貢父

【解題】 劉<sup>りゅうはん</sup>放<sup>あざな</sup> [字は貢父] [→作品番号 05-3-055] への手紙。

### 【訳文】

さきに貴君<sup>ききみ</sup>が曹州を離れると聞きましたが、いまは旅の途中でありましょか、きっと転送されて届くでありましょ。……[劉放<sup>りゅうはん</sup>の今後の境遇について記す]……私はお蔭<sup>つうが</sup>で恙なく過しておりますが、秋には水の患<sup>わざら</sup>いがあって、かろうじて魚の仲間になることだけは免れました。来年かどのようになるのか気がかりで、予測はできません。あるいは他の地への転出を願って脱け出すこともできるのかもかもしれませんが、それでは後からくる人に患<sup>わざら</sup>いを遺すことになり、識者から譏<sup>そし</sup>られてしまいましょ。すでに朝廷に使者を出して、石甃<sup>いしがわら</sup>を使って城脚をぐるっと一丈の高さに固めることを求めています、その労役は甚だ大きくて困難でありましょ。もし完成すれば百年以上にわたって民の利となります。これより昼夜に労苦すれば半年でできるでしょう。完成後には退官を乞い願って、郷里に帰ることをようやく謀れるでありましょか。……

## ■ 【05-3-068】 贈写御容妙善師

【解題】 徐州に肖像画<sup>じょうざうが</sup>を得意とする妙善<sup>みょうぜん</sup>という僧<sup>そう</sup>がいた。その妙善<sup>みょうぜん</sup>が画<sup>え</sup>いた仁宗皇帝<sup>じんそう</sup>の肖像<sup>じょうざう</sup>を見ての詩。

### 【訳文】

おも  
憶い出すに、

私は昔、仁宗皇帝<sup>じんそう</sup>の御前<sup>ごぜん</sup>で制科<sup>せいこ</sup>の試験を受けた。

たま ずたれ ひ すい ひさし  
珠の簾に翡翠のカーテンのかかる廂のところで、

紫の衣を着た皇帝の使いの者からみことのみ詔が下され、  
ひざまず跪いて捧げ持つと、天からの香りがほんのりただよってきた。  
仰ぎ見ると眩い光に目がくらみ、  
ただ東の海から暁の色が開かれるかのようにだった。  
試験が終わると、  
皇帝はお帰りになるべく迎陽門から歩み出られ、  
皇帝に付き随う前後の飾りが廊下を明るく照らした。  
私のような野人やじんは皇帝のお顔を見知ることにはできなかったが、  
それでも皇帝の瞳の光ばかりは記憶に刻まれた。  
私は制科ほうしやうに合格すると鳳翔で三年間の任に就き、  
帰ってくると、真に一つの夢、  
仁宗皇帝ごりやう せいぜんの御陵に凄然と風が吹いているのだった。  
仁宗皇帝てんやうぎやくしやくの天容玉色は誰にも描けるものではなく、  
老先生みやうせん[妙善]は古寺に籠って昼も戸を閉ざし、  
夢の中で神から技を授けられて心に得るものがあり、  
覚めて後に、筆のあるのを忘れて手に任せて描いたのだった。  
私は老先生の庵に入れていただき、  
仁宗皇帝が普段のお召し物で、  
げん巖として動かずにお立ちになっているのを見て、  
涙が止まらなかった。  
傍らには立派な髯や眉の元老が控え、  
虎のような武臣が長い剣を持って立っている。  
老先生は竜や鳳のような高貴な方だけを画き、

草の間に住む猿やら鹿やらを画くとは決してないので、  
都の人が老先生の鉄の門を踏み破ぶって頼みにこようが、  
黄金やら白い壁たまを床に山と積んで頼んだところで聞くことはない。  
ところが近ごろ私を画いてくださることになったのは、  
私が仁宗皇帝にお仕えたことのある白髪の老人の一人だからであろうか。  
かくて老先生の画いてくださった絵を見て、  
鏡を見るまでもなく了解したのは、  
かように老いぼれになったのでは、  
明年にも身を引いて故郷に帰るべきだということ。

【補足】〔(1) 蘇軾そ かじゅうは蘇州で何充に肖像画を描いてもらっていた〔→作品番号 043-081〕。どちらかでも後世に伝わっていたならば大いに珍重されたであろう。(2) 宋の時代の大きな特色の一つは、試験制度を整備して優秀な人材を中央に集め、合わせて社会の流動性を保つことにも成功した点にあり、それは宋代前半の皇帝が熱心に取り組んだ成果であった。明代の文人である謝肇淛しやけいせいが編んだ巨大な隨筆『五雜俎』ござつそには、仁宗皇帝じんそうがどれだけ科挙と誠実に向き合っていたかということが記されているので、その部分を見ておこう]

## 【訳文】

いわきひでお ござつそ  
岩城秀夫訳『五雜俎7』(東洋文庫 640)、平凡社、1998年。

そう ちゆうせいけんこう ぎょうしにっき かゆう  
宋の趙清獻公に『御試日記』一卷の著がある。おそらく嘉祐六年天子が親しく進士の試験を行われたときのことであろう。公はちようど右司諫の役にあり、賈直孺・范貫之かちよくじゆ はんかんしといっしょに編排官に充てられた。日記は二月二十六日に始まり、三月九日に終わっている。考校所(試験場)に行幸されたのが二度、覆排所(再試験所)に行幸されたのが四度、詳定所(成績審査所)に行幸されたのが二度、

編排所(順位決定所)に行幸されたのが一度である。上巳や寒食の休暇の日であっても、孜々として訓勅を廃されることがなく、慰労の茶と果物や酒肴を賜ることは、一日として欠けたことがなかった。

【補足】〔(1) 趙清猷ちやうせいけんこうとあるのは先ほどその名を見たばかりの趙抃ちやうべん〔→作品番号05-3-066〕である。(2) ここには嘉祐六年〔1061年〕春の科挙のありさまが記録されているのだが、奇しくも蘇軾そい かくは同じ年の秋に制科の試験を受け、上の詩はそのときのことを歌っているのである〕

### ■ 【05-3-069】 哭刁景純

【解題】杭州時代に親しくした潤州の刁約じゆん ちやうやく あざな けいじゆん〔字は景純〕〔→作品番号05-2-011および04-3-006など〕の訃報を聞いて詠んだ詩。刁約は蘇軾よりも42歳上の大先輩。

#### 【訳文】

書物を読んで先人に思いを馳せると、

いつももっと早く生まれなかったのを残念に思う。

それでも、何かと道を誤りやすい若い時分に、

私はこの老先生に会うことができた。

老先生は松や柏のように霜や雪にあっても枯れることなく、

ごく小さな芽から、自分自身を養って、ひと抱えもある大木に到った人である。

宏材こうざい〔優れて汎用性のある木材〕は手近な用にはなかなか役立たないので、

千年間も抛っておかれたままで、枯れて倒れてしまうようなことが多い。

魏ぎ しょうしの正始年間しょうしは学問が盛んで、

後に学術が衰えて再び興ってきたときに、

また「正始の音」を聞けるようになったといわれたものだが、

老先生の文章はまさにその趣があり、  
白髪になるまで変わらない風節を貫いた。  
普段から人のために努めるばかりで、  
自分自身のためにすることはほとんどなかった。  
是か非かは一つには決めがたいもので、  
老先生の論じるところは反覆して看るとますます好いとわかってくる。  
私は先に呉越<sup>こえつ</sup>地方を巡り、  
酒<sup>と</sup>を把って老先生の長寿を祝った。  
朝でも夜でもかまわずに老先生の門を叩き、  
かの龐徳公<sup>ほうとくこう</sup>のようにどちらが主人であるかわからないほどに親しく接してたゞり、  
老先生のもとに百度立ち寄っても、  
かの漢<sup>かん</sup>の高祖<sup>こうそ</sup>が若いころに友人を連れて伯母のもとにたびたび立ち寄って、  
疎まれてしまったようなことはなかった。  
最後に別れたときに老先生はすでに八十歳、  
後にまた会えることは保証し難いと思った。  
昨日友人からの手紙で、  
昨年は老先生の奥様が亡くなり、  
今年は老先生が亡くなったと知らせてきた。  
潤州<sup>じゆん</sup>の人々は、范橋<sup>はんきやう</sup>から下を覗いて、  
冷たい水に藻が所在なく揺れ動くのを見て、  
心を傷めているであろう。  
飼われていた馬は、  
家の内に主人がいないので、

瘦せて空しく老先生を慕って嘸いでいるであろう。

<sup>ゆかり</sup>所縁の水辺にもはや老先生の姿が映らないのを想うと、

遠くこで私は慟哭するばかりである。

私はそちらに行き、<sup>ひさご</sup>匏に水を酌んで墓に詣りたいと思うのだが、

老先生が親しく岡に植えた一万本の松が、

手入れする人もなく秋の草に埋もれてしまっているのを、

見るに忍びない。

## ■ 【05-3-070】 答呂梁仲屯田

【解題】 先に<sup>ちょうよう</sup>重陽の節句に大水に阻まれてくることのできなかつた<sup>ちゅうほくたつ</sup>仲伯達 [→作品番号 05-3-056] から詩が届いたので、それに答えた詩。

### 【訳文】

<sup>ほうじょう</sup>彭城県の周りを、多数の山が折り重なるようにして囲っている。

<sup>ちゅう</sup>仲君の官居は、その山の一つ、<sup>りょりょう</sup>滝のかかる呂梁にある、

そこはもの寂しいところで、民は鹿とともに暮らしている。

小さな市場はさびれて鶏や豚さえ売られていない。

<sup>こうが</sup>黄河の水が西からきたときに、初めはそうたとはわからなかった。

いつもは清らかな<sup>しすい</sup>泗水がなぜか濁って勢いを増したのを訝しく思ったのだった。

夜には、沙の岸辺でおうおうと鳴るのが聞こえ、

暁には、雪のような白い浪頭の上に巨大な魚が浮ぶのが見えた。

呂梁は昔からこのあたりの<sup>かなめ</sup>要の地とされてきたのだが、

<sup>けい</sup>万頃もの広大な土地があつと思う間なく呑み込まれてしまった。

水はたちまち町に流れ入り、村をも巻き込んだ。  
役人も民衆も走って逃げ、ただ仲君だけが留まった。  
打つ手はなく、路は断たれてどこにも行けず、  
仲君は壊れた家で愁いに沈む鶯のように蹲うずくまって詩を歌礼かなかった。  
冬の寒さがきて、霜が重く降るころになって、  
屋根の瓦に沙の痕を留めて、水は退いていった。  
人々が町に戻ってきて顔を合わせると、  
あたかも夢であったかのようで、  
かろくて魚や大亀の餌にならなかったのを喜んだのだった。  
仲君は惜しまずに酒や食べ物を用意して、  
人々と笑って話して歌って踊った。  
念おもうに、いま仲君の官舎は冬の氷雪の寒さ、  
私のこの詩とともに酒を送るので、少しでも温まっていたきたい。  
人生とは寄せるようなものであるのだから、  
いささかでも楽しむべきではなからうか。  
昔からいのように、黄昏時から蠟燭をたくさん灯して遊ぶのがよいのだ。  
堤防はまだ築かれておらず、淮水、泗水わいすいには水が満ちている。  
黄河の以前の道は消えてしまって、洪水の傷が残っている。  
来年の労苦は、きっとほよりも甚しくなるであろう。  
私も人々の先頭に立って土を運ぶつもりだ。  
仲君に頼みたいのは、  
万の指とともに、千の鎚つちを雷のように鳴らして固い岩を撃って、  
山の根を切ってもらいたい。

そうすれば、町は高鉄のような壁で守られ、水路が快く通って、  
 水が勢いよく流れるのを笑って眺められるようになるであろう  
 農民が臂を振って働いてくれれば、飢饉を脱して、  
 秋には野に雲がむらがるように穀物が稔るのを見るようになるだろう。  
 そのときには、仲君ために、脚をへなへなしてしまうような強い酒を置いて、  
 太鼓を叩いて囃し立てながら、金の樽を傾けようではないか。

### ■【05-3-071】 答宋寺丞

【解題】<sup>そ</sup>宋という姓のある官員に送った返書。

#### 【訳文】

……<sup>そ</sup>宋氏が蘇軾に賛辞を贈ったことに対する謙遜の辞を並べる]……<sup>じょ</sup>徐州に来ましてからは、夏には日照りの害があり、秋には洪水があつて、続けての災いで、人は流されたり疫病に見舞われたり、百もの害が起り、公私ともに騒然としていまもおさまりません。算段を立てても治まりはしないという者が大勢います。しかし、仁を具えた君子は、人の過ちを指弾するのではなく、その人の及ばないところを教え、さらにはできるところを誉めるものであるといひます。<sup>こうし</sup>孔子は、弟子から仁の実践について問われたときに、「どの邦にいても、賢者といわれている大夫に仕え、仁者といわれている士を友とせよ」と答えました。これより貴君と手紙の行き来がありますのは、ただ楽しいばかりではなくて、私を教え導いてくれる者を得るということになりますので、願ってもないことであります。たまたま工事が起り、わずかの閑もなく、意を尽して書くことができません。どうか深くお察ください。

### ■【05-3-072】 祭任鈴轄文

【解題】蘇軾が人格的に優れていると感じるのは、上の手紙やここで見る祭文のよう<sup>さいぶん</sup>



に、いわば無名に人に対しても謙虚に温かく接していると知れる事例が多々あることだ。これは洪水対策に奮闘するなかで命を落とした任にんという姓の人物を悼む文章である。

### 【訳文】

ああ、君は青年になってより兵員として従事すること四十年余り、町を守る大黒柱となり、世事に明るく、物事に練達し、我が軍を治めること厳格にして公平であった。君のもとで役人も兵士も肅然として、争い事が起こることはなかった。汴水べんすいと泗水しすいが氾濫し、町を囲む壁が傾き壊れ、風に埃が巻き上がり、雨露に冒されるなかで、君は町を救うために奔走し、ついやまいに病かかに罹こしって輿こしに担がれて町の中に還ってきた。それでもなお君は起きて働こうとしたのだが、もはや死の訪れを止めることはできず、君が亡くなったと聞いて人は驚き嘆いたのだった。君の子孫はたくさんいるけれど、皆は粗末なものを着て、粗末なものを食べているだけで、君は生きていたときには勤めただけに励み、亡くなってからはまことに清廉であったと知れたのである。觴を挙げて、涙とともに君と訣別するものである。

### ■ 【05-3-073】 臨江仙

【解題】王緘おうかんという人物が帰郷するのを見送った詞。王緘は蘇軾の妻の王氏おうの親族であらうかとの推測もあるので、それに従ってここでは訳す。

### 【訳文】

忘却成都来十載、[故郷のことをすっかり忘れてしまってもう十年]  
因君未免思量。[あなたよに因って、免れることのできないこの感情が戻ってきてしまいました]  
憑将清淚灑江陽。[あなたよに憑って、故郷の川に私の涙を注いでほしい]  
故山知好在、[故郷の山はもとより好よいままにあるのですが]

孤客自悲涼。[私は独りここで悲しみ傷むのです]

坐上別愁君未見、[送別の席上でのこの愁い、そしてあなたがまだ見ていないのは]

帰来欲断無腸。[あなたが帰った後で、跡形もなくずたずたに断ち切られた私の腸]

慇懃且更尽離觴。[さらに尽くしましょう、離れがたき別れの觴を]

此身如伝舎、[私の身は宿場の駅舎のようなもの]

何処是吾郷。[どこであってこそそこが故郷なのです]

【補足】[この詞の終わりは作品番号05-2-043の詩にあった「官僚の住まいなんぞは宿場の旅館のようなもの」というのと発想が共通している。官舎も駅舎も次々に人が通過していく場であるのだが、ある種の思考の飛躍をもって、官舎や駅舎とそこを通過する人とを同一視し、さらに飛躍して、どこもが故郷であるという思いが生まれるのだろう]

## ■【05-3-074】答孔周翰求書与詩

【解題】密州知事の孔宗翰 [字は周翰] [→作品番号05-3-052] から書と詩を求められて、この戯れの詩を返した。

### 【解題】

閑な折があればと、貴君から書と詩を求められたのだが、

口は禍のもと、閑な身であるなら、じっと口を閉ざしているのがよい。

ましていまは厳しい寒さの季節、

手は懐の奥深くにしまっておきたい。

詩を吟じたり、字を写したりして忙しんでいるようでは、

塵と垢にまみれた俗世から幾世にもわたって離れられない。

りゅうそうげん  
柳宗元は、詩と書を好むのは困った病癖であると言った。

私にもその病癖があるのを貴君は誇るのではなく、

かえって書や詩を求めてこられたのは、

どうしようもない愚か者であるという烙印を私に押したも同然だ。

次に貴君と会うのは、いつのことであろうか、

春風に花の開くころであろうか。

昔、とほ杜甫と再会したりほく李白は、

「君は詩に打ち込み過ぎだ、ひどく痩せたてはないかい」

と、笑った。

昔、ゆりょう庾亮の書は、飼われて肥えた鶏のようで、

痩せた野生の鳥のようなおうぎし王羲之の書よりも一段劣るとみられた。

貴君は私と会ったなら、

きっと私は太ったと思うであろう。

何はともあれ口は禍のもとであるのだから、

会っても何も語らずにいるのがよい。

こうし孔子も百杯のさかずき觚の酒を飲んだというから、

我等もひたすら杯を重ねようではないか。

## 第5章 嵐の訪れ——密州、徐州、湖州

### [第5章その四]

げんぽう  
元豊元年 [1078年]、蘇軾 43歳。

#### ■ 【05-4-001】 思堂記

【解説】 元号が元豊げんぽうに変わり、蘇軾じょは徐州知事として新しい年を迎えた。大洪水の後始末と、次の水害への備えに奔走しながらも、多数の詩文を作り続ける。これは章しょうほう◆  
[字は質夫あざな しつふ] [◆は次の下に呆という字] に依頼されて書いたもの。章◆は塩税を管理する役人であった。

#### 【訳文】

けんあん しょう  
建安の章君が官舎の西に部屋を築き、それを「思堂」と名付けた。

章君が私にいうには、

「私は、朝夕にここにおいて、およそ自分のすること全てについて、必ず思ってから、後に行くようにしています。私のためにこのことを文章に記していただけないでしょうか」

天下のおよそ思慮のない者は、事に遭遇するとすぐに言葉や行動に出し、思う暇がない。言葉や行動に出す前に思ったところで不十分でしかなく、言葉や行動に出してから思ったのはすでに間に合わない。このようにして一生を過ごしてしまって、思うということを知らずにいる。

天下のおよそ思慮のない者は、心に言葉が浮かんですぐに口から出す。そうすると、人と衝突してしまう。口から出さずに呑み込もうとすると、自分の心に逆らってしまう。自分に逆らうよりは他人と衝突した方がましだと、結局は言葉を吐き出してしまふ。

君子が善を好むのは、人が美女を好むくらいに強いものがあるといわれる。不善を嫌うのは悪臭を憎

むのと同じである。だから、君子は事に臨んでから、小さな思慮を働かせて、善か不善かの判断をして、それを避けるか就くかを決めたりはしない。義に臨んで、小さな思慮の結果、利を思ふなら、義を果たすことはできない。戦いに臨んで、小さな思慮の結果、生きることを思ふなら、戦いで力を出すことはできない。そうであるから、失敗するも成功するも、得るも失うも、死も生も、禍も福も、結局は自分自身にそのもつがあるというのである。

私は若いころにある隠者に遭った。隠者はこういった。

「小僧、道に近づきたかったら、思慮を少なく、欲を寡なくすることだな」

「思慮と欲を同じように少なくするのでしょうか」

「思慮のほうかひどいものだ」

といって、隠者は、水をいっぱい溜めた二つの甕が庭に置かれているの指さし、

「こちらの甕には蟻があけた穴があって漏れている。こちらの甕からは一日に一升ずつ汲み取って棄てる。どちらの甕が先にからになると思うか」

「きっと蟻の穴のあるほうでしょう」

「小さな思慮が人を損なうこと、それはこのようなものなのだ。少しずつ、そして休みなく損なっていくのだ」

隠者のこの言葉に私は得心し、それから実践するようになった。

思慮を働かせない楽しみは名付けようのないものだ。虚にして明、一から万事に通じ、安らかで怠りなく、恐れずして静か、酒を飲まずして酔い、目を閉じずに睡る。

以上のようなことを書いて「思堂」の記念の文章とするのは変であろうか。私のいう「思慮」と、章君のいう「思」とはそれぞれに意味するところがきつとあるのたろう。天地間の万物は様々あって互いに損なうことはないし、道理はいろいろにあつてそれで反目するものでもないたろう。

章君が賢人であることから、章君の「思」は私のような者が考える「思慮」とは異なつて、むしろ「無思」ないし「無為」に近いのたろう。私は章君に学ばなければならぬ。つまり、『詩経』にいう「邪のない思ひ」、それを章君は実践しているのだ。

げんぽう

元豊元年正月二十四日記す

【補足】[この文章は「思」ということを巡ってかなりひねった議論をしている。「思」の多義性を、むしろ明確に区分けしないで曖昧なまま議論を展開することで、読む者に広く深く考えさせようとしているようだ。しかし、単純に日本語に置き換えると、何を言っているのかさっぱりわからなくなってしまうので、「小さな思慮」という語を持ち出して無理に若干の整理を試みたのだが、蘇軾の本意を損なうものであるのかも知れない]

## ■ 【05-4-002】 与文与可

【解題】親友の文同〔字は与可〕〔→作品番号 05-3-023 など〕に宛てた手紙。正月二十八日の日付が記してある。

### 【訳文】

徐州の者が帰ってきて、重ねてのお手紙を頂戴しました。貴君が少々体調を崩されて、しかしすぐに平癒し、ただまだ以前のように多くは食べられずにいると知りました。また蒲宗孟君の手紙も得ていまして、貴君のお顔が削ったように精悍であると記してありました。それは道気が身中に充滿しているからであって、わずかばかりの病気があってもそれ以上には進まないのでしょう。もしなかなか患いから免れないようであれば、医薬をよくよく選ばれるとよろしいでしょう。痛みを加えるのもよいことがあり、艾を燃やしてみるのもいかがでしょうか。私は近ごろいろいろな病がありますが、老いたためであって、少しも怪しむには足りません。偃竹の画を寄せていただき、まことに古今に冠たる作品で、その後ろに黄絹を綴り合わせ、十句ばかりの賛を作るかと思っています。聞けば石康伯君父子は貴君の画を三十軸以上も得たとか。私にもそれと同じくらいはありましてもきつと望み過ぎではありませんように。……

【補足】〔(1) 文同が竹を好み、よく画に描いていたことは前に見ていて、偃竹〔伏

せた竹] は得意の画題であった。(2) 蒲宗孟 [字は伝正] の名は作品番号 04-2-049 で見ていて、このころは都で官職に就いていた。石康伯 [字は幼安] は、蘇洵の友人であった石昌言の子で、作品番号 05-3-009 に記した通り、蘇軾の長男の蘇邁は石康伯の娘と結婚していた。郷里の縁でつながる人々で気心の知れた仲であるから、石康伯が三十もの画を得たのなら自分だってと蘇軾は戯れにすねてみせたのである]

## ■ 【05-4-003】 与劉貢父

【解説】 蘇軾が洪水対策に奔走していたことは劉攽 [字は貢父] [→作品番号 05-3-067] に宛てたこの手紙からも知ることができる。

### 【訳文】

先日はお手紙とともに王景純君の詩を頂戴しました。読んで喜びが湧き、得るところがありました。長らくおれを申し上げることもせず、ひとく恥ずかしく思っております。……

ひとかたならない御恩によって水は退き、町は全きを得て、しばほっと肩の荷が下りた気がしました。しかし、次の稔りが果たしてどうなるのか心配であります。曹村口で黄河を塞ぐことが議論されていますが、もう水が来ることはないと思えるわけにはまたたかないでしょう。

一つの計画をお上に申し上げております。石の堤防を作ることを画に描き、必要とする銭は二万九千五百余貫、人夫は一万五百余人、食糧は七千八百余碩と算出した工事計画を立て、去年の十月のうちに朝廷に使者を出しました。十二月までに認めていただければ、技術者等を集め、物資を調達し、一月の初めに着手し、四五カ月間で完了する予定でありました。費用はかなりのかかりますが、これが万全の策で、百年の利があります。いますでに春になっていますが、杳として御返事がなく、日に日に期限が迫り、人や物を集めるのが困難になってきています。……

今はまた別の計画を立てています。木で堤防を作ることで、工費を半減でき、人夫は六千七百余

人、食糧は四千三百余碩、錢は一万四千余貫ですみます。恒久的な安全を図るものではありませんが、ある程度の歳月は支えることができるでしょう。その間に黄河がたとの河道に戻るのを待つのです。もしこの計画も実行できないのならば、吾が州の憂いはどれほどであるのか量ることもできません。……[以下、この計画が実現するよう、劉放とその甥の劉奉世の助力を願うと記される]……

私は土木や水利について詳しい者ではありません。職務に迫られ、やむを得ず計画を立てたまでで、いつも自ら笑っています。もし朝廷がもっと立派な官員を選んで、私に代わってこの州に利を興し、害を除いてくれるのなら、この州にとって幸いであります。しかし、それを自ら要望するのは、この困難から避けようとしていると思われてしまうのを嫌うからです。言うだけなら軽くてきますが、信を取るの難しいものです。この町の人々を魚の餌として棄ててしまうのが忍び難い一心であります。いまの朝廷において私が訴えられるのはただ劉放君との友情があるだけで、きっと力を貸していただきますと思っています。私の計画の可否を見ていただくために、詳しく書いたものを付します。……

【補足】[(1) 冒頭に挙がっている王景純 [字は仲素] の名は作品番号 05-3-049 で見ている。(2) 土木や水利について詳しくないと記しているが、実際にはその方面のセンスが当時の官僚の中で群を抜いていたのは間違いないだろう。(3) 朝廷は、結局、木造の堤防を作る案を認め、閏正月に着手して、夏までに完成している]

## ■ 【05-4-004】送李公恕赴闕

【解題】李察 [字は公恕] が都に行くことになり、その送別の詩を詠んだ。李察は京東西路の役人として徐州に赴任していた。なお、細かいことではあるが、この年の初めから徐州は京東西路に属するよう変更になった。

### 【訳文】

貴君の才は玉をも切断する刀、



見るだけでふるっと震えて毛がびんと逆立つ。

貴君が願うのは、

昔の壮士のように民を苦しめる化け物を斬り殺すこと、

貴君が願わないのは、

当世の色男のようにちゃらちゃらした錦の帯をまとうこと。

貴君はその才に反して志を展<sup>の</sup>ばすことができなくて、

小役人たちと一緒に事務処理に疲れるばかりだった。

忽然と貴君の眉の上に黄色い<sup>き</sup>気が現れたのは、

まこと喜びのしるし、

お上はようやくこの英俊を身近に置こうとお考えになったのである。

朝廷において貴君が立って話すだけで左右の者は顔色を変え、  
たった一語で、千言のつまらない無駄な言論を破ってしまうだろう。

私はこのごろはお上の命令<sup>とらふ じょ</sup>によって東武[徐州]にいるのだが、

万事を抛り出してひたすら遊び呆けている。

塀や壁を取り払って内外の風通しをよくて、

騎曹<sup>きそう</sup>か馬曹<sup>ばそう</sup>か、肩書なんぞは無頓着に呼び合っている。

貴君はそのような私を見ても問いただすことをしないで、

かえって、蟹を手と一緒に飲んでくれる。

酒<sup>たけなわ</sup>酣にして足を投げ出し、

周囲を驚かすほどの大声を上げ、

俗人を嘲笑する語を交えた詩を吟じる。

世間のつまらない連中はあれこれ禁忌<sup>タブー</sup>を設けるのだが、

貴君だけは私をそのまま容れてくれる真の賢豪<sup>けんこう</sup>である。

別れに際して私わたくしには、  
 「君のために汶水ぶんすいを臨むあたりにても田を買ってやろうか。  
 そこで雑草退治に励んだらよいだろう。  
 塵まみれの世間よにいつまでもいて、  
 人に対してへいこら頭あたまを下げてばかりで、  
 老いさらばえる気はないのだから」

### ■【05-4-005】張寺丞益齋

【解題】大恩人ちやうほうへいの張方平ちやうほうへい〔→作品番号 05-3-024〕の息子の張恕ちやうじよが書齋えきさいを作って「益齋」と名付けた。それに寄せた詩。「益」は『論語』にある次のような話からとったもの。孔子こうしのもとに、客の取次ぎをする少年せうねんがいた。ある人が孔子に、「あの少年は益する者〔向上する者、進歩する者〕でしょうか」と尋ねた。孔子は少年の日頃の態度を挙げて、「あれは益する者ではなく、速成そくせいしよう〔すぐにも先輩と並ぼう〕としている者だ」と答えた。

#### 【訳文】

張君ちやうは書齋えきを作り、「益」をもってその名とした。  
 私は孔子こうしの言葉を聞いている――  
 学問がくもんにおいて益えきすることを求めるのは、  
 学問がくもんにおいて速成そくせいを求めることではない。  
 これを譬えれば、  
 遠く旅する者が、昼も夜も少しずつ進もうとするようなもの。  
 旅人はその積み重ねによって、

今年は遙か北に行き、来年は遙か南に走り、

東に大海を見極め、西に大河を渉る。

旅から帰って戸を閉ざして部屋の内に座ると、

旅した八方はすべて軒端の庭の内にあるようになる。

また譬えれば、

医を学ぶ者が、病を識るために徹底してたくさんの経験を積むようなもの。

天の六種の気が乱れると人に六種の疾が生じ、

六気の不足と充実は人の脈に表れ、

六気の静と躁は人の情に表れ、

六気の榮と枯は人の顔色に表れ、

そして寿命の長短は人の体に表れる。

そのようなことを、千人の病人を見て知るならば、

離れて見ただけでも、人の死生がわかるようになる。

学問を修めるには、日に日に益するよう努めなければならない——

このことは自分でよく考えて実行すべきことである。

逆に、道を修める者は、日に日に失っていくことを貴ぶ——

それは知識はすでに十分にあって、

次には根本に立ち返って行かなければならないからである。

私が願うのは、この詩を書いて、貴君の益齋に掲げてくれること。

【補足】[学問を修めるには、少しずつ向上、進歩していくことが大切であるということとは、蘇軾はこれまでもしばしば述べている。この詩でおもしろいのは、道を修める[自然界の法則ならびに人間界の道徳と自己とが一体化して、それを意識することなく振る舞えるようになる]には、むしろ一度得た知見を捨て去るようなことが必要

になると言っていることだ。漸進的理解と直観的理解の両者が大切なのだろう]

## ■ 【05-4-006】 春菜

【解題】 春の野菜について詠んだ詩。

### 【訳文】

春になると、

冬に一度は枯れた蕪かぶらの根から葉が出たり、

韭にらの芽わらびが蕨わらびそっくりのかたちで土を持ち上げたりする。

薺なずなを蒸してよく肥えた白魚に添え、

蓬よもぎを砕いて入れた小麦餅をつると食べると、

昨日の酒はすっかり醒め、春の眠気も飛んでしまう。

ちよいと畦のあたりを歩いてみると、

香りのよい花いんちん、茵陳かんぎく、甘菊、あれやこれやがあり、

それらを細かくして堆うずたかく盤ばんに盛り上げて春のサラダにする。

それでも、この地の寒さはまだまだ終わらず、

雪の季節てつかいせに備えておいた赤い根菜は鉄甲のように硬い。

思えば、我が故郷しよくの蜀しよくの地に、たくさんの冬野菜があるのには到底及ばない。

蜀の地では、寒さの中でもどンドン芽を出し、

菊は秋から枯れないままほったらかしでよいし、

筍たけのこは出てくるし、江豚こうとんは旨い——

思い出すともう居ても立ってもいられない。

来年はきつともう官職を投げ捨てて帰るべきだ。

髪が抜けるのはまだしも、齒がぐらぐらになってからでは遅すぎるのだ。

## ■ 【05-4-007】 祭老泉焚黄文

【解題】父の蘇洵そじゆんの墓前に捧げ、そこで焚くために書いた文章。燃やすのは冥界に届けるため、黄色い紙こうぶんに書いたので、「黄文を焚く」というのである。題にある老泉ろうせんは蘇洵の号。

### 【訳文】

熙寧七年と十年に、お上は二度にわたって南郊なんこう〔都の南に出て天を祀る重要な儀式〕を行われ、先に亡くなった功臣にも遍く恩沢を施された。我が先君〔蘇洵〕には、太常博士の称号を、重ねて都官員外郎とくわんがいりやうの称号も贈ってくださった。息子の軾と轍はたたちに墓前に走り、お上の御恩をお伝えすべきであるのだが、お上の御用を勤める身としては敢えて私事を申し上げることができない。そこで、謹んで人を派遣して、黄文二軸を届け、中外の親しい者を集め、日を選んで焚いて納めるものである。西を望んで涙を限りなく流す。

【補足】〔熙寧十年とはこの前の年である。故郷に帰る見通しが立たないので、使いの者を送ったのである〕

## ■ 【05-4-008】 送鄭戸曹

【解題】彭城ほうじやう県の人、鄭僅ていぎん〔字は彦能あざな げんのう〕が職を得て北京大名府に行くことになったのを見送った詩。

### 【訳文】

私はかつて杭州の湖と山を遍く巡り、

知らず知らずに我が詩文は新鮮な香りを帯びるようになった。

しかし、いま私に従うのは疲れた僮僕と瘦せた馬だけである。

狭い路地奥に住まう貴君以上の賢人はここにはいない。

かん ていさい  
漢の時代の鄭太は広い土地を持ってはいたけれど、

賢豪と交わるのを好むあまり、いつも食べる物にも事欠りきりさだだった。

とう ていけん  
唐の時代の鄭虔はやはり客人を好むあまり、家には敷物さえもなかった。

貴君も鄭姓の一人として同じように振る舞うことだろう。

貴君は、これから花が咲こうという時節に西に行く。

春風がここに美しい花を開かせても、

それは誰に見てもらえばよいのだろうか。

## ■ 【05-4-009】 読孟郊詩二首

【**解題**】とう もうこう唐の時代の孟郊の詩を読んでの感想。孟郊はかん ゆ韓愈の弟子で、先に蘇軾は、  
「元げん軽けい白はい俗はく郊こう寒かん島とう瘦そう」と、その詩の特徴を「寒」の一文字で表していた [→作品番号  
05-3-006]。

### 【訳文】

其の一

もうこう  
夜に孟郊の詩を読む。

牛の毛先のような細かな字を、

燈火の光に目をちかちかさせながら、読み進めてゆくと、

時によいところに遭う。

荒れた土地から芳しい花が抜きんてきたかのよう、

嘯みしめるべき語句が我が詩心を騒がせる。

とはいえ、その詩は、

澄んだ水がごうごうと岩場を流れ下って、

その激しきはさお篙を受け入れようとはしないようなもの、

あるいは、骨だらけの魚か小さな蟹を煮たようなものか。

師匠のかん 弁韓愈には到底及ばず、

か とう賈島と弟子同士で競うのでちょうどよい。

人生は朝の露のようにはかなく消えてしまうもの、

あるいは、火が油を費やしつつ燃えているようなもの、

その貴重な時間に、

何も両耳でこの寒さにおせぶ虫の声をわざわざ聴くまでもないだろう。

しはし詩集を脇に置いて、

玉の色をした濁り酒を傾ける方がよほどよいのだ。

【補足】もう ころ蘇軾はもう ころ孟郊の詩にあまり感心しなかったようだ。「げん けい はく ぞく ころ かん とう せう元軽白俗郊寒島瘦」と4人をまとめて評したのだが、詩人としての著名度でいうと、げん しん元稹はBランク、はく きょ い白居易はAランク、もう ころ孟郊とか とう賈島はCランクといったところであろうか]

## 其の二

私は孟郊の詩を嫌っていながら、

自分では孟郊とそっくりの語を放ちもする。

腸は空っぽになると自ずと鳴くものであるし、

壁の中の空洞では腹を空かせた鼠が必ず走り回ることになっている。

詩ははい ふ肺腑[身と心]から出てきてしまうものであって、

詩が出ると肺腑はさらにまた愁うのだ。

黄河には己の身から膏を出して、それによって煮られる魚がいるというが、

詩を詠むというのはまさにそのようなものであろう。

「銅斗」の語から始まる孟郊の送別の詩は愛すべきで、

俗っぽいようてかえって古に近いものがある。

……[以下、孟郊の詩を踏まえた八句が続く]……

孟郊のこの曲を歌うとき、

私は長く旅にあることに感じ入るのである。

## ■【05-4-010】訪張山人得山中字二首

【解題】雲竜山の張天驥 [字は聖塗] [→作品番号 05-3-047] を訪ねた詩。「山」と「中」の字を韻に用いて作った。

### 其の一

大水によって貴君の家は流され、

水が引いて魚たちがいなくなるとともに、

貴君が還ってきたので、

猿や鶴が喜んだ。

貴君の旧居は岡の外にあったが、

貴君の新居は山の中腹にある。

鹿はすでに貴君の足音に馴れ、

雑多な茂みの中から桂の木が伸び出している。

門前の路はきれいに掃除され、



そこを辿る私もまた山を愛する人間の一人である。

其の二

万木に鎖うんりゅうざんされた雲竜山は、

天が貴君に与えたようなもの。

山の前後の路に人は迷い、山の東西にだけ人家がある。

春の雪なすなの後に薺や麦が成長し、

夕暮れゆすらうめの風に桜桃の花が落ちる。

町に戻ってきてみると、

はつきりとした記憶が残っていないのは、

帰路は酔っての眠りの中にあっただらう。

■ 【05-4-011】 送孔郎中赴陝郊

【みつ 解題】 密州知事であった孔宗翰 こうそうかん あざな しゅうかん [字は周翰] [→作品番号 05-3-074] が せん 陝州知事として新たな任地に赴くことになり、旅の途中に じょ 徐州に立ち寄ったので、この送別の詩を作った。

【訳文】

とほ せん 杜甫は陝州に行く人を見送ったときに、

その地の風光を、強風が顔に撃ち、黄色い沙が走ると歌った。

に こうざん かんこくかん 二嶠山や函谷関を越えてそちらに行く、

むしろ世間の塵や垢から脱した気分となるであらう。

新たな知事殿が じょ 徐州のあたりから来ると聞いて、

河か潼どうでも関かん右ゆうでも大評判だいへいはんとなって、  
 十里じゆことの駅亭えきていでは歓迎する鼓角こかくの音が響き、  
 川も花も柳も面目めんもくを新たにあらたにして明るく輝きらいて待つてあろう。  
 陝州せんしゅうに着いた貴君ききみは、  
 欄干らんかんに倚よって北きたに臨こんで黄河こわうがの激流げきりゅうを眺め、  
 南みなみに望のぞんであの青あおい山さんは岷山へんざんかと見るてあろう。  
 春はるの風かぜに、谷やは錦にしんを織おり為なす光景こうけいを見せ、  
 緑きよの水みづに、川かわには葡萄ぶどうの酒さけが波打なみつかのようであらう。  
 貴君ききみが赴任しゆにんしてからは訴訟しんじ事もなくなり、  
 しはしば酒樽しゆざんを開ひらか用もちもなくなり、  
 客人きやくじんが大勢おほし押し寄よせるたろけれど、  
 妙なことを言いわないよう、口くちは堅かく閉しめておくべきであらう。

## ■ 【05-4-012】 虔州八境図八首並引

**【解題】** 孔宗翰こうそうかん [字あざなは周翰しゅうかん] はかつて虔州けんしゅうの知事ちじだったことがあり、その折まがひに虔州けんしゅう [南康なんこう] の8カ所の風景ふうけいを描えいた『南康八境図なんこうはちきやうず』を作つくった。それを蘇軾そしつに見みせて、詩しを添そえてほしいと頼たのみ、それに応こたじて8首はつしゆの詩しを作つくった。虔州けんしゅうは遠とほく南方なんぽうの地ちで、蘇軾そしつはむろんまだ行いったことがなく、画えから想像さうぞうをふくらませて詠よんだのである。遙とほか後のちになつて蘇軾そしつも実際じつじに虔州けんしゅうに行くことになるので、ここでは序文しよぶんだけを読んでおき、詩しは第11章だいじゅうしちやうで見みることにしよう。

### 【訳文】

引いん[序文]

『南康八境図』は知事の孔宗翰の作である。孔宗翰は町を石で固め、その上に建つ高い建物から見えるありさまを図にした。東に七閩の地を望み、南に五嶺の山々を望む。山が高く低く連なるのが見え、草水、貢水の奔流を下に覗く。雲煙 出沒し、草木 蕃麗し、邑屋 相い望み、雞犬の声 相い聞ゆ。この図を観るなら、茫然として思い、粲然として笑い、慨然として嘆息するのである。

ここで私はいう。

「この画は南康の『一境』ではなからうか。何をもって『八』とするのか」

私が答える。

「観えるものが自ずと異なってくるのである。君が太陽を見る。朝には槃と観えて、昼には珠と観えて、夕べには破れた壁と観える。これをもって三つの太陽があると君はいうのかな。かの南康に『八境』があるとするのは、寒暑、朝夕、雨暘、晦冥によって異なるのもってするのではなからうか。あるいは、坐作、行立、哀樂、喜怒の変化によって、目に入ってくるものが吾が心に感じさせるものが変わるであらう。そうなると、それは『八』どころではなくってとても数えきれない。『八』が『一』から出るのがわかったならば、この世界の外にあるとされる詭詭譎怪の事柄、『禹貢』に記されていること、鄒衍が語ったこと、司馬相如が賦したこと、およそ千万にもなろうというこもこのことも、もとはといえば『一』であると知れるのである」

後世の君子はこの『南康八境図』を見てきつと感じるものがあるだろう。

八章の詩を作って、図の上に題する。

## ■ 【05-4-013】 禱靈慧塔文、告賜靈慧諡号塔文

【解説】 徐州が水害から脱することができたのは、人々の力だけでなく皇帝の恩や神仏の助けもあったからだというのが、蘇軾も含めた当時の人々の認識であった。唐の終わりに真寂大師という僧が讎乱から逃れて徐州にきて、人々の信仰を集め乾明寺を開いた。洪水の最中に、蘇軾は人々とともに乾明寺の靈塔に詣で、水害から救い出し

てほしいと真寂大師に祈っていた。そのことに関連する文章を見ておこう。

### 【訳文】

#### 禱靈慧塔文 其の一

武寧軍[徐州]は、黄河が決壊して水が溢れ、それが淮水、泗水に流入して、いまや町を囲んで水が浸し、月を越えても退こうとしません。一州の人々は真寂大師の化身である靈塔に誠を捧げてお祈りいたします。慈悲を垂れ、護持を賜って、陰雲を駆除し、積もった水を導き流していただきますように。もしも十日のうちに水が引き、町が全きを得ましたならば、必ず靈異の迹を記して朝廷に具申し、諡号を加えてくださるようお願いをいたします。かくてこの地の者は永遠に帰依いたすであります。

#### 禱靈慧塔文 其の二

……いま兵士や人夫数千人が水没から免れるための工事を進め、ようやく完了しようとしています。しかし、止まずに降り続く雨は人力ではどうすることもできません。町の中にも水がみなぎり、至る所から水が漏れて入ってきています。人々は病を患い、敢えてまたお祈りする次第でございます。……

【補足】[二度にわたる祈りを真寂大師は聞き入れてくれたのか、洪水は引いたのだが、水害の後には疫病が広がり、また冬になっても雪が降らなかったので、蘇軾はまたしても人々を救ってくださいと乾明寺で祈った。こうして民の祈りにその都度靈験を示してくれたことから、最初に蘇軾が約束した通りに、朝廷より諡号を贈るようお願いを出て、翌年の春に認可された]

#### 告賜靈慧諡号塔文

徐州に勅令が届き、本州乾明寺の真寂大師に特に靈慧大師の号を追賜し、塔の名を靈慧之塔とするようにあります。至人は無心をもってこの地に縁を結ばれ、ここに妙法が常住し、時によって顕れ

たり隠れたりしてきました。それは我等凡庸の者の量り知るところではありませんが、靈慧大師の仏慈を長くここに付して下さるよう深く願つたのであります。

靈慧大師はもとは淮南わいなんの地に現れ、千里を越えてこの地に来られ、唐の世に涅槃ねはんに入られ、五代にわたって号を改められ、いま詔書を奉じて諡号を一新いたします。……慧智をさらに開かれることを願って我等は倦むことなく祈りを続けます。水害、干害が萌す前に消して、もって聖明こころ[皇帝]の意に適うようにしてくださいませうに。

### ■【05-4-014】与梁左藏会飲傅国博家

【解題】梁交りょうこうとともに傅揚ふせき〔字は子美あざな しび〕の家で会飲したときの詩。梁交の名は作品番号 05-3-057 で見ている。傅揚は徐州じょの副知事である。

#### 【訳文】

梁君りょうは自ら檄文を書いて賊を破るような文武両道の武人で、  
詩を説いても、剣を説いても、天下第一である。  
彭城ほうじょう〔徐州じょ〕の老知事に学問があるとされるのはただの虚名で、  
字は識るのは自分の姓名が書ければ十分だといった項籍こうせきをわずかに上回るだけだ。  
副知事殿は風流な貴公子、  
笙ふえを吹くかと思えば、いつも鋒を手元で温めていて、  
朝あさには紅い旗を押し立てて猛士とともに勇んだかと思うと、  
夕暮れゆふぐれには翠の帷から佳人が出て歌うのを聞くのである。  
私は副知事殿の座敷で酔って眠ってしまい、  
呼んでも起きないでいるうちに、  
鳥の鳴き声とともに花が落ちて春も終わってしまった。

私の耳元で笛を長く吹いても、その鋭い音にさえ私は起きないでいて、  
かえって階段の前の石が裂けてしまった。

## ■【05-4-015】徐州蓮華漏銘、并叙

【解題】上の詩で傳揚ふせきのことを「貴公子」と呼んでいたのは、かつて朝廷の要職にあった燕肅えんしゆくの曾孫であるからだ。燕肅には発明の才があり、特に蓮華漏れんげろうという名の精密な水時計を製作したことで知られ、中国の技術史において必ずその名が挙げられる人物である。蘇軾は傳揚に頼まれて蓮華漏の銘を作った。ここではその序文だけを見ておこう。

### 【訳文】

叙  
もとの竜図閣直学礼部侍郎の燕肅えんしゆく公は、器物を創作する智恵で天下にその名が知られた。蓮華漏れんげろうを作り、その精密さに世人は感服した。公が事に臨んだときには、必ずそれを為し遂げた。今でも各地の州郡には蓮華漏があり、巧みな者であっても、それを改良することはできない。ところが、徐州では盲人の衛樸えいぼく【宋代の数学者】が作った時計を使っている。衛樸は己の意に任せて時計の設計を変え、蓮華のように並べた壺はあるのだが時を指す箭はない。衛樸は盲目であったので、天下の人々が視るということに気を使わなかったのである。その時計を守る者は、壺に水が満ちたのを見てから、水を流し落とし、改めて水を注ぐのである。その不便さを人は皆笑っている。

国子博士の傳揚君ふせきは公の外曾孫で、蓮華漏の作成法に詳しく、徐州の副知事となったので、徐州の時計を改めて作り、私にその銘を作るよう請うた。

【補足】【衛樸の時計がどのような仕組みであったのかはわからないが、ユニバーサルデザインなど思いつきもしない時代のことであるから、多くの人にとって不便など

ころがあるということでその価値が低く見られてしまうのはやむえないところであったのだろう。蘇軾の好んだ『莊子』には障害があるが故に真の己を全うできるという寓話が幾つもあるのだが]

## ■【05-4-016】寒食日答李公択三絶次韻

【**解題**】せい齊州知事であった李り常じょう [字は公あざな択こうたく] [→作品番号 05-3-003] が寿春じゅしゅんに異動になり、南に旅する途中で徐州を訪れた。3月の寒食かんしよくの節句に李常りが詠んだ絶句に答えた。

### 【訳文】

#### 其の一

昔から蘇と李はペアとしてよく並べられ、

李君をここにお迎えするのは嬉しい限りではあるけれど、

せい齊州じょに比べて徐州じょが小さく田舎臭いと笑われてしまうのを恐れる。

李君の詩は空に懸る滝のようで、私の目はただぐらむばかり。

私の詩も滝の勢いがあると李君はいつてくれはするが、

それは人を欺いた言葉で、

せいぜいちよろちよろ流れる程度である。

【**補足**】かん漢の武将の蘇そ武ぶと李り陵りょう、唐の文人蘇そ和み味どう道と李り嶠きょうなど、「蘇李」と並び称される例は多い]

#### 其の二

書類に埋もれ、時の太鼓に急かされ、

春が来たのも知らずにいた。

貴君に促されなかったならば、

詩句の一つを作ることもなかっただろう。

ほうとくこう かんしよく  
昔、龐徳公が寒食の日に墓参から帰ってくると、

親しい友が家に上がって食事を用意して待っていた。

どちらが主人でどちらが客人であったのか、

貴君と私もそれに似た仲である。

【補足】ほうとくこう 龐徳公は、世に出る前のしょかつこうめい 諸葛孔明とも交流があった有名な隠者で、これまでも何度かその名を見ている]

### 其の三

私は町を巡って工事の督促に歩き回り、

じんあい  
塵埃が目に入りるのに苦しめられつつ、

鞭を執って怠ける者を打たなければならない。

忙しさの余り着替えることもままならないので風が湧いてしまう。

り  
李君がきて久しぶりに衣を改めた。

手を携えて黄色い蓮の花を見ようと、

いま病んだ眼を見開こうとする。

### ■ 【05-4-017】 約公扱飲是日大風

【解題】り じょう あざな こうたく 李常 [字は公扱] は硬派の人物であるが、生まれて間もない子の誕生祝い  
の詩 [→作品番号 04-3-076] で見たような冗談も通じ合う気の置けない仲であった。

じょ  
李常は徐州にしばらく滞在し、その間にたくさんに詩を詠み合っている。これは、飲



む約束をしたものの、当日になって風が強く吹いたために果たせなかったという詩。  
詩の冒頭に、李常が若いころに廬山ろざんの僧坊に籠って勉強したことが歌われているが、  
そのことは作品番号 05-2-036 ですで見ている。

### 【訳文】

李先生りは廬山ろざんで成長し、山中で書物を読むこと三十年に及んだ。

孔子こうしの弟子の顔淵がんえんを範とし、水を飲んで学問に励んだと聞く。

李先生が、治めるのが難しい土地にばかりに行くのは、

自分から好んでしているわけではない。

盗賊ともが悪い役人と結託して、取り締まりにきた者に復讐するようなことは、

李先生は絶対に許せないので、

齊州せいに赴任するや、不良の役人ともを震え上からせ、

半年間に七百人もの盗賊を捕えた。

それを見るなら、

李先生が家に九千巻もの蔵書がある文人であるとは誰も信じないだろう。

盗賊を一掃すると、春から秋は何事もなくなり、

時折は豪快かつ艶やかに歌舞の宴を催したりして過ごした。

冬に私が旅人となって行く、

李先生は錢を惜しまずに歓待してくれた。

齊州の人々は李先生を慕い、

今回、李先生が齊州から離れたときには、

子供等が道に泣いて行く手を遮ろうとしたという。

私は、恥ずかしいことに、この山がちの土地にたたいてるだけで、

あまりに貧乏なので、兵士にも役人にも笑われている始末。

李先生を迎えて、何とかして酒を御馳走しよう……

こんなものしかないのかとっかりさせまい……

官妓にきてくれるよう約束を取ったり……

それなりに着飾って歓待しようとしたり……

夜も眠らずに準備した。

詩を作って、今日の酒宴はやめにしようと思断りに行かせたのは、

どうせ出費を渋ったのだらうと、笑うようなことだけは決してしないでほしい。

明け方から風が強く吹いて、土埃で空が真っ暗になってしまったからなのだ。

酒宴を中止にして、どうも気が縮まって仕方がない。

思えば、昔、天下第一といわれた牛を豪気にも賭け事的にした人がいたといけれど、

李先生ならそういう大胆なことをして、このもやもやをすっきりさせてくれるであらう。

【補足】[その後、李常りじょうとの約束を果たした宴席で詠んだ詩があるが、座興の作であるので、ここでは割愛する]

## ■【05-4-018】夜飲次韻畢推官

【解題】畢仲孫ひつちゆうそん [字は景儒あぎな けいじゆ] と夜に飲み、畢仲孫ひつちゆうそんの詩に次韻した。畢仲孫ひつちゆうそんは徐州じょの役人。

### 【訳文】

簿書の深い叢くむらのなかで過ごすうちに、

春の風はどこかへと過ぎ去ってしまった。

時には酒と出会うことくらいはあってもよからうと、

燭台の紅い光が照らす庭を眺めつつ飲んでいると、  
いつしか暁を催す鶏の聲が高らかに響き、  
それに応じて馬が勇んで嘶き始める。

老いと「金釵きんさきの興きよう」[女性への関心]は減じるらしいが、  
畢仲孫ひつちゆうそん君は酔って後にもみごとな筆を揮って人を驚かせる。

酒宴というものは、  
月が上らないうちに早々と散会するのがよらしいのだろう、  
夜が更けると知事殿はどこかで眠りの深い谷間に落ちてしまって、  
役所の従者たちが探さなければならなくなってしまうだろうから。

【補足】[畢仲孫ひつちゆうそんは書が巧みであったと蘇軾自身が注記している]

## ■ 【05-4-019】 与文与可

【解題】親友の文同ぶんどう [字は与可あざなよか] [→作品番号 05-4-002] に宛てた手紙。

### 【訳文】

……水害の後で、年を越えて労役に従事し、いまだこゝが黄河の決壊箇所は塞がれていないと聞き、は  
てさて何時になったらおさめますのやら。文彦博公ぶんげんはくこうの詩に和した作品を寄せてくださり、みごとな出来  
栄えに驚き、それに継いで作りたいと思いつつも、私にはほとんど無理であります。お会いする  
縁はまだありませんが、万万自重されますように。……三月二十六日。

【補足】[文彦博ぶんげんはくの詩とは超然台ちょうぜんたいを詠んだ作品のことである [→作品番号 05-2-017]]

## ■ 【05-4-020】 芙蓉城并叙

【解題】王迥おうけい [字は子高あざなしこう] は、さしずめ宋代のほら吹き男爵で、違いがあったとした

ら、蘇軾を始めとしてその話を聞いた人が、かなりの程度で真実であると受け止めたことであろう。これは王廻の語った不思議な旅行を詩に詠んだもの。原詩は含蓄のある難しい語句を並べているが、ほら話だとしか思うことのできない訳者としては苦勞して真面目な訳文を作る気が起こらないので、ごくいい加減なふざけた日本語に直しておく。

## 【訳文】

叙

世間では王廻おうかいが仙女しゅうようえいの周瑤英しゅうようえいとともに仙界せんがいの芙蓉城ふようじょうに遊んだと伝えている。元豊元年三月、私は初めて王廻に会ったので、それについて問うと、その通りだという。そこでこの詩を作った。この詩は、仙界のあることの意味を追求して、何が正しいかを明らかにしようとするものである。不思議な話でも礼法に適う助けになることもあるであろう。

芙蓉城の中は花がどっさり、  
 その主人は誰かと申しますと、  
 皆様ご存知せきの石先生ていか丁先生か。  
 石先生は死んだ後に友人の夢に出て、  
 「わしはいま芙蓉城ふようじょうおるのだが、遊びあそびにこないかい」  
 と、いったのですが、  
 何とその友人は断ってしまったとか、  
 石先生はぶいぶい怒って帰ってしまったのであります。  
 丁先生はある朝道を歩いておられますと、  
 美しい女性ばかりを乗せた馬の群れがきて、

さっと連れ去られてしまったのであります。

町の人が、最後に行く女に尋ねますと、  
「丁先生を芙蓉城の館主としてお迎えするのです」

と、答えたとか。

芙蓉城のあたりの様子を申し上げますと、

雲が巻き、霞がたなびくその中に、

珠の簾に玉の机に翡翠の屏風、

そこに千人の美しい女性たち、

とりわけ青く長い眉、きらり輝く雲か、淡くまたく星か、

このお方こそは周瑤英さま、

三つの世を往来して、

つまらない人間の形になってしまったときに、

うっかり『黄庭経』を読んでしまったのが運のツキ、

天の門が夜に開いて周瑤英さまの霊は虚空を飛びまして、

芙蓉城へと来られたのであります。

ところが、俗縁というものはなかなか尽きないものなのでありますよ、

仙人の翠の衣がまらりと落ちたかと思うと、

またしても人間界に降りてきてしまったのでございます。

そのときちょうど王廻は、

何を隠そうこの我が輩でありますか、

天帝のもとにどうにかして詣りたいものだと、

縑氏山で笙を吹いていたのでございます。

そこに飄然とやってきた女性がありまして、

月の光のように窓よりすっと入ってきました、  
はて誰かと思う間もなく、また去ってしまい、  
その後には、  
冷えびえとした風がカーテンに吹き付けるだけであつたのでございました。  
残念、我が輩のためには仙宮の扉は開かないのかと、  
がっかりして眠りにつきますと、  
はてさてそれからは夢かまことか、  
我が輩は鳳凰の翼に乗っておりまして、  
周瑤英さまに導かれて、  
雷が走るかのようにたちまち万里を超え、  
玉の楼閣が空中に幾重にも浮かぶところへとやってきたのであります。  
見上げる額にはいずれも天の文字が記され、  
高い楼閣をあちらからこちらへと、  
飛ぶのか歩くのか、  
芙蓉城を見て回りますと、  
静かに鈴が鳴るかのように仙宮の風が吹いてまいりまして、  
にわかに酒が醒めたかのような感じかし、  
はてさて我が輩はいまどこにいるのやら、  
周瑤英さまが丁寧に列れを告げまして、  
かめ瓶より覆り出た水は元に戻らないという通り、  
もはやここには入れられないのだと知りまして、  
ハンカチ羅巾は涙でぐっしょりと濡れたのでございます。  
かくて芙蓉城を見てきた吾輩が思いますに、

春の風に花は開き、秋の風に葉はしぼみ、  
世間の栄華も鼻をふさぐべき腐った臭いでしかなく、  
人の一生は、大海の浪に漂いつつ、  
たまたま出会った浮き草にしがみついているようなもの。  
我が身の内をよよく観て、  
本性を害虫に食われてしまわないようにすれば、  
一念のうちに三千年が過ぎるような長生も得られることでありましょう。

### ■【05-4-021】続麗人行并引

【解題】杜甫に『麗人行』[美しい女性の歌]という詩がある。美人を称賛したのではなく、楊貴妃の一族が栄華を極めていることを嘆いた詩である。杜甫のその作品に続こうとの意気込みで蘇軾はこの詩を作った。短い序文がある。

#### 【訳文】

引[序文]

李仲謀の家に、唐の周昉の画があり、背中を向けて欠伸をしている宮女が極めて精緻に描かれている。それを見て戯れにこの詩を作った。

宮中の奥深くには人影がなく、春の日がゆったりと過ぎてゆく。

玄宗皇帝が建てた沈香亭の北に、百花が美しく咲いている。

美人は、いま眠りから起き上がり、髪を軽く梳かして顔を洗う。

燕が舞い、鶯が啼き、美人は独り心を傷める。

画工は、窮まることのない美人の意を写し取るうとして、

起きたばかり、春の風に背を向けているところを画いたのだろう。

もし首をこちらに向けて微笑んだならば、

町の貴公子たちは風に靡くようにこの美女に魅せられるのであろうか。

ようきひ げんそう  
楊貴妃が玄宗皇帝の寵愛をほしままにしていたとき、

とほ  
杜甫は飢えたさすらい人で、その眼差しは冷たく鋭かった。

杜甫は、脚の萎えた驢馬に乗り、破れた帽子を頭に載せ、

楊貴妃一族の、馬には金色の鞍を載せた豪華な行列の後ろに付いて行った。

花を隔て、水をはさんで、ほんの一目だけ、美女の後ろ姿を見た。

心は酔っぱかりになって、

人間の世界には、かの伝説の美女である西施のような女性が実際にいるのを知ったのだった。

れいじんこう  
茅葺の小屋に帰って、『麗人行』の詩を作った。

ああ、画の美女、杜甫の見た美女、

それぞれに正面を向いたらどうであったろうか。

思うに、二人はいくら美しくても、

かん りょうこう もうこう  
漢の時代に梁鴻の妻となった孟光には到底かなうものではない。

孟光は世間で評判になるほどの不美人であったけれど、

あれこれ選り好みをして嫁に行かずいた。

父母が訳を尋ねると、

「梁鴻のような賢人でなければ私は夫としないのです」

と、答えた。

それを伝え聞いて梁鴻は娶ったのだった。

孟光は膳を必ず眉の高さにまで持ち上げて夫に差し出し、

春の光に背を向けて心を傷ませるようなことはしなかった。



【補足】 [序文にある李仲謀<sup>りちゆうぼう</sup>がどのような人であるのかわからないという]

## ■ 【05-4-022】 章質夫寄恵崔徽真

【解題】 上の解題で触れた杜甫の『麗人行』には、「慎莫<sup>つつし</sup>近前<sup>まえ</sup>丞相<sup>ちか</sup>嗔<sup>ちん</sup>」 [慎んで前に近づく莫かれ丞相が嗔らん] という句があつて、美しい女性をもっと見たくても近づいたりしたら、丞相<sup>しょうきひ</sup> [楊貴妃の一族の楊国忠<sup>ようこくちゆう</sup>] の怒りを招くであろうと詠まれていた。蘇軾はそれを少し変えて、「近前<sup>まえ</sup>試看<sup>ちか</sup>丞相<sup>ちか</sup>嗔<sup>ちん</sup>」 [前に近づいて試みに見たなら丞相が嗔るだろう] という句を含んだこの詩を作っている。これは、章<sup>しょう</sup> ◆ [字は質<sup>あざな</sup>夫<sup>しつ</sup>] [◆は次の下に呆という字] [→作品番号 05-4-001] が崔徽という女性の肖像画を贈ってくれたので、そのことを詠んだもの。崔徽については作品番号 05-3-029 で見ている。

### 【訳文】

たま かんざし む  
玉の釵が半ば脱け、

雲のような髪が崩れて耳にまで垂れさがっている。

さい き ふよう  
崔徽は秋の水に映る芙蓉の花のよう、

生きているときはまことに辛い思いをした薄命の女性、

いまでは君子の立派な部屋にその肖像画が飾られている。

このような麗人が水辺にいないとは限らないが、

近づいて見ようとしたならば、

必ずその主人<sup>いか</sup>の嗔りに触れてしまうだろうから、

画中の人の方がきっとよいのだろう。

しかも、言葉を発することもない、

世間の人の言葉にはもとより真はないのだから。

崔徽の画を贈られて、

その人の絶望の深さに驚かされた私には、

崔徽のために何ができるのだろうか。

冬の寒さにも屈することなく花を咲かせる梅を讃える詩を作ればよいのか。

でも、鉄のように強い崔徽の心は、何ものにも害われることはなかったのだ。

## ■【05-4-023】聞李公択飲傳国博家大二首

【解題】<sup>り</sup>李<sup>じょう</sup>常<sup>あざな</sup> [字は公択] [→作品番号 05-4-017] が<sup>ふ</sup>傳<sup>せき</sup>楊<sup>あざな</sup> [字は子美] [→作品番号 05-4-014] の家で飲んで大いに酔っぱらったと聞いて蘇軾はこの詩を詠んだ。

### 【訳文】

#### 其の一

昔むかしの大酒の飲みの山簡<sup>さんかん</sup>は習家<sup>しゅうけ</sup>の園を訪ねると、

酔ってぶっ倒れたので、

子供等が手を打って笑ったという。

李君<sup>り</sup>も、いくら何でもそこまではしなかつただろうね。

昔むかしの大酒の飲みの淳于髡<sup>じゆんうこん</sup>は一斗を飲ませてもらって酔い、

主人はほかの客人を帰らせてからさらに飲ませてみたところ、

どうとう一石<sup>せき</sup>を飲んでしまつて大いに酔つたという。

傳君<sup>ふ</sup>は、いくら何でもそこまでのもてなしはしなかつただろうね。

【補足】<sup>り</sup>李<sup>じょう</sup>常とはまことに気の置けない仲だったようで、第二首もまた酒に関する故事を引いたおふざけの詩で、訳は割愛する]

■ 【05-4-024】 傅子美召公扞飲、偶以病不及往、公扞有詩、次韻

【解題】 上と同じときの詩。李常〔字は公扞〕が傅楊〔字は子美〕の家で飲んだときには、実は蘇軾も呼ばれていたのだが、たまたま病気のために行けなかったのである。そのことを詠んだ詩。

【訳文】

樊素はんそに阿蛮あばんといえば白居易はくきょいが可愛がっていた妓女、

傅君ふがそのような女性を出して演奏させると、

李君りはたちどころに詞を作って歌ってみせる。

哀れなのはこの病人である、

我が家の西の窓の下で

一晚中たんてん、丹田きすのあたりを手で摩っているのである。

【補足】〔丹田は下腹部にあると信じられていた謎の臓器で、気がそこに集中し、体内の循環を司っているとされていた。その部分をさすのは病気を治そうというのである〕

■ 【05-4-025】 観子美病中作、嗟嘆不足、次韻

【解題】 李常〔字は公扞〕が上の詩を見て、病を嘆くという詩を作って送ってきたので、それに次韻した。

【訳文】

李君りの嘆きとは、

百尺の高い松が砕けて谷の下へと落ちるときの叫びか。

その松はといたら、

寒さのために枝がぽっきりと折れ、

根元が崩れて露出してしまい、

そこに、狂ったように風が吹きつけて、

さらにはどしゃぶりの雨……

## ■【05-4-026】起伏童行并叙

【解題】詩題は「寝ている竜を起こす歌」。どうして竜を起こすのかというと、雨を降らせてもらいたいからだ。短い序文が付いている。

### 【訳文】

叙

徐州の町の東二十里に石潭があり、土地の父老はこのようにいっている。「潭の底は泗水に通じています。水の増減、清濁は泗水と呼応して異なることはありません。時に潭には川の魚が出現します」。元豊元年の春は日照りが続き、ある人が言うには、「石潭に虎の頭を置くと雷雨を呼ぶことができます」と。その説に基づいてこの詩を作る。

昔むかしのこと、

白い竹で作った千鈞ひどくつよ弩ゆみで、

南山なんざんにいる雪のように白い虎を射殺した。

その虎の頭は鋭い牙を付けたまいまもどこかにあり、

天下の虎は、皆その虎を先祖として生じたものだという。

都の東の地方は久しい日照りのために土が赤くひび割れし、

この三カ月の間は、道行く人の口の中は土だらけになっている。

あお せきたん 碧い石潭は町の東にあり、そこはしんぶつ わたかま 神物が蟠るところとして崇められている。

上には岩が切り立ったいわあな 巖穴があり、

下には川に応じて地底の水が通じている。

ここには竜が棲んでいて、

眼光は稲光きんこうとなって金蛇きんだを走らせ、

鼻息は雲えんとなって煙縷えんるを降らせるという。

太古の時代には、竜は天帝の命令を伝えたというが、

それからは宝玉を抱いて情眼をむさぼっているのか。

竜の腹にはたつぷりと雷が貯まっているはずなのに、

竜はそれを吐き出すことなく押し黙っている。

明日は、赤い竜と白を虎を闘わせようと人々は考えている。

そうなれば、ここうが 黄河の水が逆巻いて、豪雨となるからだ。

しかし、私は両雄を闘わせることには気が進まない。

ちよいとだけ竜に怒ってもらって、ひと雨降らせてもらうくらいでよいのだよ。

## ■ 【05-4-027】 徐州祈雨青詞

【解題】 上の詩と同じときに神にこの文を捧げて雨を祈った。

### 【訳文】

ここうが 黄河がもとの道を失い、それによるわざらい 患が東方へと及び、じょ 徐州は下流に位置するため、他郡よりも最も害を受けました。農地も家も水に漂い、親子はばらばらに流され、多くの者が飢えと寒さのために溝

や坑あなに落ちて命を失いました。盗賊が横行し、牢獄は罪人で溢れています。人は窮迫し、生きる計がなく、理は極まり、もはや言葉もありません。望むのは、五穀が稔こどわって、死にかけている飢えた民が救われることだけあります。しかし、天は禍わざわいをもたらしたことをいまなお悔いしないのでありましょうか。天候は大きく乱れ、水がまだ落ちないうちから旱魃の恐れが生じたのです。冬は雪がなく、春には雨がなく、もうとう塵が降って、草木も焦げたように枯れてしまいました。この春はすでに麦が稔る時期が過ぎつつあります。しかし、得られるものは植えたものを償ないそうにありません。稲が生長しなければ、憂うれいは来年にも及んでしまいましょう。

臣わたしどもは恭しくもきたりに従ってもろもろの神々に祈り回っておりますが、水害や干害にはきと定まるところがあって、鬼神が自在に制御できるものではないのでありましょうか。ここに頭を下げ、哀れを告げますのは、天に悲しみを伝えて、その命を請うためであります。あるいは政事に過ちがあって、それを咎めるために陰陽を狂わせたのでありましょうか、あるいは神に仕えることが恭しくないのを咎めるのでありましょうか。それらの罪があるとなれば、すべては臣わたしの一身わたしにありまして、臣は罰を受けるのを辞するものではありません。民衆は何も知りません、天の咎めは臣わたしにとどまるべきであります。

どうか雷の神に命令を下し、山や川の神々にもそれぞれ命令を下し、朝に小さな雲を湧かせ、夕べには千里にわたる雨を降らせてくださいますようお願いのたためです。歳なかばにして穀物の熟すのを見るならば、人々は小康を得ることができるとありましょう。

## ■ 【05-4-028】 浣溪沙

【解題】「雨に感謝するために石潭せきたんに行く途中での作」という添え書きのある詞。石潭で祈った効果があったのか、雨が降ったので、そのお礼を告げに出かけたのである。

其の一

照日深紅暖見魚。[夕日に深く紅く暖かく照らされて潭ふたに魚が見えています]

連溪緑暗晚蔵鳥。[溪に暗く緑が連なり、夕暮れの鳥が隠れています]

黄童白叟聚睢盱。あかいかみ [ここに 黄 の子供と しろいかみ 白 の老人が集まって、くりくり 睢盱と目を動かしています]

麋鹿逢人雖未慣、[鹿はまだ人と出会うのに慣れていません]

猿獠聞鼓不須呼。[猿は太鼓を聞くと呼ばずともやってきます]

帰家説与采桑姑。[鹿[老人]と猿[子供]はここで見たことを家に帰って桑を摘む女たちに話すのです]

【補足】[この第1首は、せきたん 石潭で蘇軾が行った儀式の様子を描写している。第2首以下は、石潭に着くまでの間に見た村々での幾つかの光景を詠んでいる。詞は、何度か記してきたように、宴席で男女の情を歌うものとして発展してきた。農村のありさまをさらりとスケッチした蘇軾のこの作品は過去に類例のない画期的なものであった]

## 其の二

施抹紅妝看使君。[化粧を施した村の女性たちが知事殿を見ようと]

三三五五棘籬門。スカー [三々五々、枝で編んだ門の脇に突っ立っています]

相挨拶破舊羅裙。スカート [互いに身を乗り出し、赤い裙を踏み合っています]

老幼扶携収麦社、[老人と幼子が手を携えて麦の神様の社へと行き]

烏鳶翔舞賽神村。[村の上を舞い飛ぶ烏や鳶の下で神様にお供え物をします]

道逢醉叟臥黄昏。たそがれどき [黄昏時に道で逢うのは、酔い臥した男どもです]

## 其の三

麻葉層層翳葉光。いとば [重なり茂る麻の葉、光り輝く翳の葉]

誰家煮繭一村香。[どこの家からなのかでしようか、繭を煮る匂い村全体を覆っています]

隔籬嬌語絡糸娘。[垣根を隔てて糸を繰る娘たちがはしゃべりをしています]

垂白杖藜擡醉眼、<sup>あかさ</sup>藜の杖を手にした白髪の人が酔ったような眼で見えています]

杼青桴麩饑腸。[その餓えた腹がはしかっているのは採れたての麦で作った麦こがしです]

問言豆葉幾時黄。[そしていつには、豆はいつごろ成熟するのかね、と]

#### 其の四

簌簌衣布落棗花。<sup>なつめ</sup>棗の花が<sup>そくそく</sup>簌簌と衣に落ちてきます]

村南村北響繰車。[村の南からも村の北からも、糸車の音が響いてきます]

牛衣古柳売黄瓜。[麻の衣をまとった瓜売りが柳の下で休んでいます]

酒困路長惟欲睡、[道の遠さに悪酔いしたかのようにひたすら眠くなり]

日高人渴漫思茶。[日が高く喉が渴き、ひたすらに一杯の茶だけを思います]

敲門試問野人家。[試しに農家の門を叩いてみましょう]

【補足】 [これは蘇軾自身をスケッチしたものであろう]

#### 其の五

軟草平莎過雨新。[雨が降ってすっかり新たになったような一面の柔らかな草々]

輕沙走馬路無塵。[軽やかに馬を走らせても路には塵が立ちません]

何時收拾耦耕身。[人々と一緒に耕す身にいつ私はなれるのでしょうか]

日暖桑麻光似澗、[日は暖かく、桑や麻からははしけるような光]



風来蒿艾気如薰。[風は高く、蒿艾の薰<sup>よもぎ</sup>りが充満しています]

使君元是此中人。[知事殿は元来この風光の中の人なのです]

【補足】[蘇軾は、為政者側の人間として農村を見ているのではなく、もともと自分は農村の中に暮らす人間であって、いつかはそこに回帰するのだという眼差しで見ている [→作品番号 04-2-017]]

## ■ 【05-4-029】 聞公扱過雲竜張山人、輒往従之、公扱有詩、戯用其韻

【解題】李常<sup>りじょう あざな こうたく</sup> [字は公扱] が雲竜山の張山人<sup>うんりゅうざん ちょうざんじん</sup> [張天驥<sup>ちやうてん き</sup>] [→作品番号 05-4-010] を訪ねたと聞いてすぐに後を追い、李常が詠んだ詩に和した。

### 【訳文】

私はもともと心配事が多いたちなのだろう。

昔から、肉を食べない者は顔色が悪いというけれど、

私は肉は食べているのに、いつも顔色がさえない。

李君<sup>り</sup>に会って少しでも笑い、さらに酒を楽しく飲んで力を得たいと思っていたところ、

李君<sup>うんりゅうざん</sup>が雲竜山<sup>ちょうざんじん</sup>に行き、張山人と静かに黙って酒を飲んでいると聞いた。

急遽、歌の上手な女性を連れて、町を飛び出たところ、

まだ日が傾く前に着いた。

たった一つの飲みだつてかついで得られるものではなく、

期せずしての巡り合せといふものがなければならぬ。

春の終わりの花にぎやかに蜂が集まり、

草むらの中で雀が乱れ騒いでいる。

張山人はこゝした自然の事物の巡り合せを楽しみ、

いつもは誰もそばにいない静けさのうちに過ごしている。

李君は独り憤慨することがあり、誰もわかりあえる者がいない。

三者三様でこのような次第であるから、

ここは皆で養生を学んで、

天地のき気を我が内に納めるようにするのがよいであろう。

## ■【05-4-030】送李公択

【解題】しばらく滞在していた李常りじょう あざな こうたく [字は公択]が徐州じょを離れることになり、この送別の詩を詠んだ。

### 【訳文】

私には兄弟が少なく、天地間にたった一人の蘇轍そてつがいるだけだ。

かつて友人だった者はたくさんいるけれど、

その出処進退は、私と考えを一つにするものではなく、

手で招いて呼ぼうとしても、向こうに行ってしまうと留まろうとしてくれない。

わずかに残った友人はいま幾人なのか、

それぞれ天下の片隅にいる。

そうした友人は、

暁に至って多くの星が消えてゆく中で、

ただ明けの明星ぼかりばかりが明るく輝いているのに似ている。

私りと李君は、気持ちが一つであるのは、まことに手と足のようだ。

去年も今年も会えて、

客と主人の立場を替えて盃を応酬することができた。

この十日間の楽しさといったら他にないものだった。

「和して流れず」とはこのことだ。

議論をかわして深夜に至ったときこは、

下僕達が立眠りをして倒れてしまった。

かつて知事のもとに、このような客人がきたことがあったらどうか。

別れようとして言葉を出すことができない。

百の憂いが集まってきて痛くてならない。

思うに李君には兄上がわられる。

その名が天下に知られること三十年になるが、

李君を見てすでに兄上の人となりわかった。

馬と牛を並べて見るまでもないのだ。

李君兄弟、そして我が兄弟、

いつしか皆が会うことがあるのならば、

時を忘れて髪が真っ白になるまで語り続けることだろう。

【補足】[ある注釈家によると、この詩で、「故人雖云多、出処不我謀」<sup>ゆかりのあるひと おお</sup> [故 人 は多  
いと云いは雖、<sup>い</sup> <sup>するが</sup> <sup>しゅっしょ</sup> <sup>われ</sup> <sup>はか</sup> <sup>ない</sup> 出処は我に謀ることは不] といっているかつての友人とは、具体的  
には章惇 <sup>しょうじゆん</sup> [→作品番号 05-1-065]、李清臣 <sup>りせいしん</sup> [→作品番号 05-3-058]、張琥 <sup>ちやう こ</sup> [→作品番号  
02-3-032] らであるという。確かに章惇は早くから改革派に加わっていたのだが、親  
しい友人であるとの意識は持ち続けていたし、李清臣はこのころから次第に改革の担  
い手の一員となっていたのだが、この時点ではまださほど距離が離れていたわけ  
ではないだろうし、張琥は本章の終わりに見る「嵐」に加担するほどに遠く離れた間柄  
になっていたのだが、むしろ距離が離れすぎて意識に上ることもなかったらうから、  
ここで具体的な個人名を詮索するのはさほど意味があることだとは思えない]

## ■ 【05-4-031】 蝶恋花

【解題】<sup>りじょう</sup>李常との別れにこの詞も贈った。

## 【訳文】

簌簌無風花自墮。<sup>はらはら</sup>〔簌簌と風もないのに花は勝手に落ちてゆきます〕

寂寞園林、〔静まり返った庭の林の〕

柳老桜花過。<sup>ゆるらうめ</sup>〔老いた柳と、花の過ぎた桜桃〕

落日有情還照坐。<sup>こころ</sup>〔情があるかのように、落ち行く日は別れの座を照らします〕

山青一点横雲破。〔横雲を破るようこしてたった一点だけ山の青さがのぞいています〕

路尽河回人轉舵。〔見送る私の路はここで尽き、あなたの船は河とともに向きを変えます〕

繫纜漁村、<sup>とせむ</sup>〔そして、纜を繋ぐのはどこかの漁村〕

月暗狐燈火。〔月は暗くて、たった一つの燈火だけがあるのです〕

憑仗飛魂招楚些。〔私は杖に頼って、飛んで行ってしまったあなたの魂を招き寄せようとしています〕

我思君処君思我。〔私はあなたのところを思い、あなたは私を思うのです〕

【補足】〔(1) 前半の最後の句「山青一点横雲破」〔山青の一点横雲を破る〕は、日が沈んで行くとともに、横にたなびく雲の中に隠れていた山が姿を現し、その青さが際立ってくるありさまを歌っているのだろう。(2) 終わりの部分の「飛んで行った魂」は屈原の故事を用いている。屈原は讒言によって楚の都を追われたときに、南の地をさまよう自分の魂を呼び戻してはくれることはもうないのかと嘆いた〔後に絶望して投身自殺した〕。改革に反対して地方勤めを余儀なくされている<sup>りじょう</sup>李常を屈原になぞらえたのである。(3) 最後の句「我思君処君思我」が上から読んでも下から読んでも同

じ回文になっているのは蘇軾の遊び心]

■ 【05-4-032】送筍芍薬与公択二首

【解題】李常<sup>りじょう</sup>との別れの席で、蘇軾<sup>たけのこ</sup>は筍<sup>しゃくやく</sup>と芍薬を出して与えた。

【訳文】

其の一

長らく山東<sup>さんとう</sup>の地にいる者は、

このもっさりとした料理には飽き飽きて、

とかく南方の御馳<sup>ごち</sup>ばかりを想ってしまう。

そんな私の心を知るある友人が千里の遠<sup>たけのこ</sup>から筍を贈ってくれた。

そのつやつやとした輝きは、

錦の産着から出たばかりの玉のような赤ん坊。

調理人にはまたこの旨さがわかっていないのだろうが、

私の目にはもう明らかに見えている。

我が家の拙い厨房にあったのは、

豚肉やら蕪やら大根やらを雑多に煮たもの。

そんなものはうちちゃって、

李君<sup>り</sup>には、筍を焼いて、香ばしいご飯に添えて出そうではないか。

【補足】[「もっさりした料理」と訳した原文は「鹵饌<sup>ろぜん</sup>」で、蘇軾自身の注で、「蜀<sup>しよく</sup>の人々は東北の人を『鹵子』と呼ぶ」と書き添えている。蜀の人々は黄河<sup>こうが</sup>下流域<sup>さんとう</sup>や山東半島の人々は武骨でやぼったいと見ていたのだろう。逆に、蜀<sup>しよく</sup>の人々は軟弱で浮ついていると見られていたようである。そうした地域感情の違いが、政治的対立に発展し

てしまうことを後に見るようになる]

## 其の二

今日は何やら面白い気分だったので、  
 庭中の花を折り尽くして飾ってみようとした。  
 いまは何の花があるのかと見ると、  
 わずかに芍薬しやくやくの花びらが残っているだけ。  
 長らく日照りが続いた後で急に雨に遭い、  
 枝や花が泥に乱れ落ちている。  
 またある芍薬は、用いるためには手折らなければならないが、  
 手折ってしまうと嘆きのもとになる、  
 だけれどこのまま抛っておくこともできない、  
 ならば李君に贈ろうではないか。  
 一枝の春をさしあげるから、  
 おたくのお嬢様の髪にどうぞ挿してくれたまえ。

## ■【05-4-033】和孫莘老次韻

【解題】孫覚そんがく [字は莘老あざな しんろう] から送られてきた詩に次韻した。孫覚とは杭州時代に交流があり、密州みつに赴任する途中で、母の喪に服して帰郷していた孫覚を高郵こうゆうに訪ねたこともあった [→作品番号 05-1-002]。孫覚は喪が明けてこのときは蘇州その知事になっていた。

## 【訳文】

故郷を離れると、  
光陰は春の雪のようにたちまち消えてゆき、  
故郷に還ると、  
たどってきた跡は野に飄る雲のように空しい。  
功名はきっと行楽を妨げる。  
役所勤めがよいのはたった一つ、  
早朝に起きるのが平気になることとか。  
もう一つあるとしたら、  
友人とは離れてゆく一方となって、  
役所の部下と親密になれることか。  
さらにもう一つあるとしたら、  
地方に出れば世間の讒諂を避けられて、  
その土地の民衆の歌を知ることができることだ。  
来年あたりは、貴君に倣って私もまた江南に行ってみたいものだ。  
問題山積の地だろうか、片田舎だが構いはしない。

## ■【05-4-034】遊張山人園

【解題】雲竜山の張山人 [張天驥] をまた訪ねた。

### 【訳文】

壁に掛かっているのは煙蘿子を描いた一つの軸。  
盆に投げ込まれているのは錦被堆の千本の枝。  
私は、張先生の酒の伴になるのにすっかり慣れ、

先生は、知事さんがいつ来ても嫌わずに笑ってくれる。

いまは、麦の穂先が細くがって黄色い花が乱れ、  
それを詩に詠もうとしているうちに、さっとわか雨がくる。

聞くに、先生の家の井戸は好い水であるとか。

帰るときに、どうか瓶かめにたっぷりいいただきたいものだ。

【補足】[一句目の煙蘿子えんらしとは仙術を会得した昔の人の名。錦被堆きんひたいとは、高さ一丈ほ  
どで、小さな紅い花をたくさんつける木。そうしたものが部屋に飾られているという  
ことで張山人ちやうさんじんの暮らしぶりをスケッチしている]

## ■ 【05-4-035】 杜介熙熙堂

【解題】杜介と かい [字は幾先あざな きせん] の熙熙堂き きどうについて詠んだ詩。杜介はすでに官界から退いた  
人で、揚州よう 州に住んでいた。熙とは喜び楽しむ意味。この時期にこの詩を詠んだ経緯は  
わからないが、杜介のことは後にまた見るようになる。

### 【訳文】

険しく困難な世間の路から貴君は先に去り、

奥深いところに美しい堂を自ら開いた。

晋しんの殷浩いんこうは朝廷から追放されたときに、

口を閉じし、中空なんとおかしなことだに「咄咄怪事」の四字を書き続けたのだが、

貴君は高台から春の景色を眺めているかのよう、いつも熙熙うきうきしている。

朝廷の命令こうしを記す黄紙も、官軍こうきの前に立てる紅旗も、

貴君の心を動かすことはもはやなく、

仙人が奏でるとい『碧玉へきぎよくの曲』を琴で弾き、



仙薬を作るために白砂はくさと親んでいる。

遥かに想見するのは、

客人が帰らないように門を閉ざし、

雷のように賑やかすぎる宴を催していること。

## ■ 【05-4-036】 次韻答劉涇

【しゆく 解題】 りゆうけい 宿州知事の劉涇 [字はあざな 巨濟] [→作品番号 05-3-025] から送られてきた詩に次韻したもの。劉涇には心にわだかまるものがあって、それを詩文に書き表そうとしているのに対して、抑制することも必要なのではないかと蘇軾はこの詩で助言しているようだ。

### 【訳文】

詩を吟じて、秋の虫のように鳴いたりしないのがよいだろう。

てんこう 天公[造物者]は、貴君が物から情を引っぱり張り出し過ぎるのを怪しんで、

貴君がまだ若いのに白髪を生じさせてしまったのではないだろうか。

れいし らんそう 靈芝と蘭草は香りよく気高い草だ、

雨に潤うと青さが増してさらに香りがよくなる。

自分自身を焼き焦がして香りを立てようとはしない。

貴君は千枚もの紙に細かく字を書き、みことな行書もその中にある。

貴君の新しい詩は姿を百変させ、鶯のように巧みに囀っている。

しかし、言葉が過剰になると、蜂の巣をつついたような言い争いを引き出し、

ついには、舌先三寸で七十余城を落としてみせると放言するようなことになる。

万巻の書物を、胸の内にどっしりと動かないように積み上げ、

詩文の楽しみなどは病のようなものだと思うことはできないだろうか。

私には至上の味わいがある。

煮たり焼いたりする料理の味ではない。

その楽しみは名付け難い——

緑の槐えんじゅが山のように繁かげって庭に小暗い蔭を作り、

虫が耳のあたりを巡って細やかな音を立てる、

おんぼろむしろの筵むしろに寝転がり、臥して音を聞き、起きて蔭を見る、

かといって立派な敷物を毛嫌いするわけではない、

出て歩くときは、

溝あながあろうか坑あながあろうか、足に任せて行き、

道で権勢家に出会っても、へいこら世辞を言ったりしない、

役人や民衆は私が老いて頭も鈍いのを哀れんで、

互いに戒めて、面倒な訴訟事で私を煩わさないようにしてくれている、

時に泗水しすいの流れに臨めば、

微かな風も起こらず、鏡のように平らな水面にわが白髪を映し、

葉のように軽い舟を得て、

そこに臥していると、もう着きましたぞという声に起こされる、

そのときに、ふと故郷のあの味のために帰ろうかと思う——

やはり腹が減っては何もできないので、

腹の虫をなためるためにたっぷり食べるとしよう。

【補足】[「故郷のあの味」と訳したところの原文は、有名な蕁菜じゅんさいの故事 [→作品番号 04-1-080] を用いている]

■【05-4-037】携妓楽遊張山人園

【解題】雲竜山の張山人〔張天驥〕のところに妓女や楽人〔演奏家〕を連れていったらどのような反応をするだろうかと戯れた詩。

【訳文】

あんず  
「杏の実が大きく黄色に熟しましたなあ」  
  
「小麦の穂がたっぷりふくらんでよく稔りましたなあ」  
  
「巢から落ちた鶺鴒かきさきの雛が竹をよじ登ろうとしておりますぞ」  
  
そんなことを言い合いながら、  
  
飾り立てた馬に乗った知事殿が、  
  
紅く化粧した女性やら、  
  
ことさら俗っぽい大勢の連中とともに、  
  
ひっそりと山に住んでいる先生を驚かせてみよう、  
  
うんりゅうざん  
雲竜山の谷を満たして押し寄せた。

「呑め、呑め」

と、鳴く声は提壺ていこ〔鳥の名〕——それは我等の心。

「帰ろう、帰ろう」

と、鳴くのは杜鵑ほととぎす——それは速やかに退散していただきどの先生の心。

それで酒盛りはお開きとなって、人が帰ってしまうと、

先生はひたりと門を閉ざす。

あたりは何もない静寂に返り、

斜めになった日が木の枝に掛かっているだけ。

## ■【05-4-038】種徳亭并叙

【解題】蘇軾<sup>こう</sup>は杭州<sup>こうちやうもん</sup>にいたときに、町の候潮門の外に住む王復<sup>おうふく</sup>の住まいを訪ね、そこにある二本の檜<sup>ひのき</sup>を詩に詠んだことがあった [→作品番号 04-1-090]。何かのきっかけがあったのだろうか、再び王復のことを詩に詠んだ。

## 【訳文】

叙  
 処士<sup>しよし</sup>[官に仕えない知識人]<sup>おうふく</sup>の王復<sup>こう</sup>は代々杭州に住み、いろいろな技能を持ち、特に医術に精通している。王復が目指すのは人を活かすことで、利益を得ようなどとは思っていない。候潮門の外に住まいがあり、庭や畑を整え、亭<sup>あざまか</sup>を建て、賢人たちを招いてそこに遊ぶ。王復はもてなしが十分でないかということだけを気にかけ、人に何かを求めることは一切ない。人は王復が花を育て、実を稔らせることに努めているのは知っているけれど、本当に王復が植えて育てているのは徳だということを知らない。私は王復の亭<sup>しよとく</sup>を「種徳」と名付け、詩を作って贈ることにした。

おう  
 王君の小さな庭は城郭沿いにあり、  
 門を閉ざしていても草の香りが溢れ出る。  
 王君の名は町の人々の中に埋もれて隠れているが、  
 その徳は庭の佳き木とともに長く伸びあがっている。  
 王君は、<sup>かんだい</sup>漢代の名医の<sup>かた</sup>華佗のように、人の本来の力をよく養い、  
<sup>いしえ</sup>古の名医の<sup>そうこう</sup>倉公のようにたぐさんの薬方を用い、  
 助けて活かした人は数知れない。  
 しかし、道で逢っても王君は誰であるのか忘れている。  
 酒を置いて賓客を招き、花の間に人が満ちるのを王君は喜ぶ。

王君の庭には蒼く聳える二本の檜ひのきがある。

私は東南に旅して、再びそれを見たいと思う。

山茶さざんかはきっと庭からはみ出るまでに花を咲かせ、

橘は牆を超えて繁っていることだろう。

木は老いて徳もまた熟す——

この言葉はきっと荒唐無形ではないはずだ。

## ■【05-4-039】書鮮于子駿楚詞後

【解題】鮮于侁せん うしん あざな ししゆん [字は子駿] [→作品番号 05-3-007] が楚詞そしというごく古風なスタイルの詩を作って送ってきたので、この文章を書き添えた。

### 【訳文】

鮮于侁君せん うしん そしは楚詞の体裁で『九誦』という作品を作って私に見せてくれた。私はそれを読み、茫然ふーぶと考  
え、喟然ふむむと感心して、このように思ったのだった。

「ああ、この声は長く作られなかったものだ。作ったとしても、聴く者は誰もいなかっただろう。音楽に譬え  
ていうならば、古いにしえの音楽は乱れに乱れて現在に至ったために、いま世俗の間で演奏されているのは、  
夷よそのくにの楽器を用いた夷よそのくにの声で、昔の(文化の先進地であった)鄭や衛の国で演奏されていたものは  
求めようとしても得られないし、まして本物の音はすっかり消え去ってしまったのと同じであろう。学者は古  
の楽器を並べて、古の音楽を演奏しようとしてみせるのだが、それは勝手に鍋やら壺やらを叩いて得  
意がっているようなもので、笑いをこらえて聴いていられる者はいないのである。古の音楽を好んでも学  
ぶ師はなく、これを知って伝えようとしても弟子になろうとする者はいない。悲しいことではないわ」

いま、鮮君は独り吟じては考え、寝ても覚めても千年前の屈原くつげんや宋玉そうぎょくの後を追おうとしていて、その人  
たちと遠く隔てた友となり、衰えて亡んでしまったものを継いで、さらには極めようとしているのである。ところ

が、鮮君の作品を見る者はそれが貴いものであるとは知らない。鮮君はひたすら作ることに励み、その難しさを知り、そして巧みになったのである。学ばない者は何もできない。

げん ほう 元年 四月 九日、 ちょう 郡の 蘇軾が書く。

## ■ 【05-4-040】 和鮮于子駿鄆州新堂月夜二首

【解題】 鮮于侁 [字は子駿] が鄆州の新堂で月夜に詠んだ詩に和した。

### 【訳文】

#### 其の一

私が鄆州の新堂に遊んだのは、  
 去年の春風に雪が消えた後だった。  
 池にはたっぷり水があって、  
 柳は千尺の高さから枝を垂らしていた。  
 貴君は桃や李の花のように輝き、  
 蝶が誘われるようにして貴君の袖へと入ったのだった。  
 あのときの風光はどこにあるのかい、と、  
 遠く境界を分かっ向こうである。  
 歳月の流れを思うのは詮無いこと、  
 急流に放たれた船のようにたちまち遠ざかってしまう。  
 繁栄もまたまことに一つの夢、  
 盛るも朽ちるもいずれも寂しいものである。  
 月ばかりはそのときのままだに、  
 同じ光で杯の酒を照らしている。

羨むべきは、大河に浮かぶ船の上で、  
時が行くのも知らずに穏やかに座っている人。

其の二

明るい月の光が池に入り、  
かえ  
反って池のほとりの部屋を照らす。  
部屋には机によりかかる人、  
その心は水に映る月のように涼し気である。  
風に流れていた螢の光の跡はもはやなく、  
草に宿る露が時に光を放っている。  
銀河が流れるのを見ようと、  
立って歩む貴君の足音が長い廊下に響く。  
どこかの都会では、  
賑やかに笛を吹き歌っていることだろう。  
先生は病んで飲むことさえしないので、  
かたわらで童子が香を焚いている。  
先生は静かに五言の詩を作り、  
それはい おうぶつ韋応物の詩のように清らかである。  
詩ができあがるころには月が傾いていて、  
先生と月とが互いに照らし合うように向き合っているのである。

【補足】〔蘇軾にしては、二首ともあっさりとしたわかりやすい作品である。「清絶如  
韋郎」〔い おうぶつ韋応物のようにせいぜつ清絶である〕と評したせん うしん鮮于侁の詩風に合わせたのだろう〕

## ■ 【05-4-041】 跋楊文公書後

【解題】宋代初めの文人である楊億そうだいの書ようおくの後に記した短文。

## 【訳文】

楊文公ようぶんこう〔楊億〕が亡くなったのはそれほど遠い昔ではないが、その筆跡はすでに得難いものになっている。その人となりは筆跡よりもさらに貴重である。この人のような風流はまた見る事ができないのだろうか。

元豊戊午四月十六日題す。

【補足】〔楊億が没したのはこれより 58 年前である〕

## ■ 【05-4-042】 徐州賀河平表

【解題】4月25日、黄河こうがの決壊箇所を塞ぐことに成功し、そのことを聞いた蘇軾が祝賀する文章を作って朝廷に提出した。

## 【訳文】

臣蘇軾わたしが申し上げます。聞こくところによれば黄河こうがの決壊した口が、ついに塞がれましたとのこと。……〔民が大災害から救われた喜びを述べる〕……大河が災いをなすことは昔から続く病で、禹〔伝説上の聖天子〕も兗州の野で奮闘することを十三年でようやく黄河を定めることができました。漢の時代にも黄河の決壊地点を塞いで、その記念せんぼうきゅうに宣房宮を立てるまでに二十年余りかかりました。今回のように黄河が狂瀾きやうらんして崩れたところから溢れ、もとの河道が喪われてしまってから、神のような速さでもとにもどせたのはかつてないことで、恭しく皇帝陛下しじんの至仁が広く施され、限りない神智によるものであります。……〔皇帝を讃え、徐州の民もそれによって救われた喜びを述べる〕……



## ■ 【05-4-043】 浣溪沙

【解題】「徐州の蔵春閣の園中で」との添え書きがある詞。末尾にある「錦薰籠」は花の名で、香りが高く、瑞祥を表すとして喜ばれた。

### 【訳文】

慚愧今年二麦豊、[今年の大麥、小麦は驚くほどに豊かに稔りそです]

千畦細浪舞晴空。[晴れた空の下で、千の畑が舞うように細やかな波を立てています]

化工余力染天紅。[余りある自然の力は若い紅色を染め出します]

歸去山公応倒載、[園から帰るときには、昔の山簡のように酔い潰れ]

闌街拍手笑兒童。[道のあちこちで子供らが手を打って笑っています]

甚時名作錦薰籠。[こうして錦薰籠はさらにその名を高めるのです]

## ■ 【05-4-044】 文与可有詩見寄云、待将一段鵝溪絹、掃取寒梢万尺長。次韻答之

【解題】親友の文同 [字は与可] から詩が送られてきて、そこに「一段の鵝溪の絹を將られるを待って、寒梢の万尺の長さを掃い取らん」[高級品である鵝溪の絹の布を得たなら、一万尺の長さの竹を画いてみせよう]とあったのを見て、次韻して答えた。なお鵝溪は品質のよい繭を産することで知られる谷である。このころ文同は洋州から都に還ってきていた。

### 【訳文】

鵝溪の絹の輝く光沢を貴君は愛するあまり、

鷄距の筆[鷄のけつめのように堅い筆]の紫色の先端でかきかきと裂いて、

ためにしてしまおうというのかな。

だいたい世の中に千尋<sup>じん</sup>[すなわち万尺]の竹というのがあるのだろうか。

いやいや、それどころではない、

月が傾いて、広い庭に影がどンドン伸びたならば、

鵝溪の絹がどれほどあっても写しきれないだろう。

【補足】<sup>ぶんどう</sup>[文同とは仲がよいだけに、このような戯れの詩を贈ったのだ]

## ■【05-4-045】徐州上執政謝奨諭啓

【解題】5月4日、蘇軾は洪水対策の功績をもって皇帝からお褒めの言葉をももらった  
[→作品番号 05-3-062]。これは宰相、副宰相に宛てた謝札の手紙。

### 【訳文】

事が有れば勤めに服す、これは<sup>まこと</sup>実に臣下としての職務であります。功績があったところで記録するまでもないことであるのに、俄かにお褒めのお言葉を頂戴する栄誉の浴しました。そのことを聞いてただただ驚き、我が身を顧みて恥じ入っております。

<sup>こうが</sup>黄河がもとの道を失ってより、<sup>わずらい</sup>患は東方に及び、<sup>じょ</sup>徐州は下流にあるために他郡を超えて最も大きな害を受けました。私は人々の力を結集して町を保ち、災いを軽くしましたけれども、洪水のもとを塞いだわけではなく、低いところをやや高くて、水をどうにか下流へと流しただけでありました。それは敢えてお上のお耳にお入れするまでもないことであるのに、<sup>かたしげな</sup>忝くも<sup>ぎよく</sup>玉璽の書<sup>しよ</sup>を賜ったのであります。

徐州において私は知事の職にあつて、左右に優れた者を得て、万民を保つことができしております。

人々がお上よりお言葉を賜ったのを喜んでいるのを見て、我が拙い身でありながらもはや恥じらうことはせず、縁によって過分の御恩をいただいたことも敢えて辞退することではないと考え、ますますこの職に努める所存にございます。己の鈍さに自ら鞭打ち、<sup>まつりご</sup>わずかでも政を補うために片時も休むことはな

いのであります。

## ■【05-4-046】聞弁才法師復帰上天竺、以詩戲問

【解題】詩の題は、「<sup>べんさいほうし</sup>弁才法師がまた<sup>じょうてんじく</sup>上天竺に帰ると聞いて、詩をもって戯れに問う」。弁才法師とは<sup>こう</sup>杭州の<sup>じょうてんじくれいかんおんじ</sup>上天竺靈観音寺の<sup>げんじょう</sup>元浄である〔→作品番号 04-2-053〕。弁才は上天竺寺に17年間いたのだが、<sup>ぶんしょう</sup>文捷という僧がその地位を羨み、権力者を動かして弁才から奪い取り、弁才は<sup>げてんじくじ</sup>下天竺寺に落とされてしまった。すると上天竺を訪れる人がぱったりといなくなり、しかも文捷の不行跡が明らかになって、弁才が復帰したのである。

### 【訳文】

<sup>どうじん</sup>道人〔<sup>べんさい</sup>弁才〕が山を出て去ってしまっから、

山は火の消えた灰のようになってしまい、

白い雲はもはや笑わなくなり、

青い松は悲しみに沈んでしまった。

道人が帰ってくると聞こえると、

たちまち鳥がわっと声を上げ、

山はぱっと顔を輝かせた。

道人の額からは<sup>しんこう</sup>神光が出て、

<sup>ほうう</sup>法雨を降らせてこれまでの埃を洗い流した。

遠く想い見るのは、

南の山も北の山も、前の台も後ろの台も、

どこでも花が開くありさま。

私はかつて道人にお尋ねした、

「禅問答とは諧謔をなすものなのでしょうか。

昔、ある人がある僧を尋ねました、

その人は僧の脇に立ち、

僧は鍛冶の仕事をしていました。

その人は立ったまま、僧もまた仕事を続けたまま、

かくてその人が去ろうとすると、

僧は尋ねました、

『何か聞くことがあってここにきたのかな、何か見たものがあるのかな』

その人は、

『聞くことを聞き、見ることを見ました』

この問答の意味は、いったいどこにあるのでしょうか」

いま道人はきっとこのようにいわれるだろう。

「昔もここに住んでいなかった、だからいま再びくるということもない」

はてさて何が是なのか、何が非なのか。

まあ、大事なことが一つあるとしたら、

杭州名物の白楊梅を食らうことであらう。

## ■ 【05-4-047】 和子由送将官梁左蔵仲通

【解題】 武官の梁交 [字は仲通] [→作品番号 05-4-014] は南京応天府に行っていた  
 ようで、弟の蘇轍が梁交を送る詩を携えて帰ってきたので、それに次韻した。

### 【訳文】

このごろは雨がたっぷり降っているので、  
この春の麦の成長が遅いとは誰もいわないだろう。  
町の堤防は堅固にできあがったから、  
この秋に高い浪が立っても恐れることはない。  
事もなく、日が長いときは、居眠りするのが最もよく、  
頭巾が半分ずれて、扇がほとりと落ちる。  
庭の草は気ままに伸び続け、  
珍しい鳥が降りてきても見る人がいない。  
はっと覚めて、  
この身もこの世もなるほど夢だと思いつつ、  
ぼんやりと座ったままいて、  
顔についた枕の痕はいつまでも消えない。  
町の西の方から報せがきて、  
親しい友がきたと告げたので、  
急いであたりを掃除し、麦飯を焼き始める。  
昔の伏波<sup>ふくは</sup>將軍<sup>りょう</sup>のような梁君が現れ、  
いまもお嬰<sup>かしく</sup>鑠として武を論じる。  
我が弟の詩を見れば、  
昔の竹林の七賢人のように仙道を談じてさらに清遠である。  
南都<sup>なんと</sup>〔南京<sup>なんけい</sup>応天府<sup>おうてんふ</sup>〕にいる君は道<sup>みち</sup>を学んで、  
腹が減ることなどは何とも思わず、  
ただ脳が満たされるのを誇っているのである。  
【補足】〔この詩の終わりには、仙人になった黄初平<sup>こうしよへい</sup>と俗人のままだったその兄の伝

説を引いて、なかなか気の利いた感じの句が置かれているのだが、もともと説明を加えるとごくつまらない訳文にしかならないので割愛した]

### ■【05-4-048】次韻秦觀秀才見贈、秦与孫莘老、李公択甚熟、将入京応挙

【解題】この詩の題は、「秦観しんかんから贈られた詩に次韻する。秦観そんがくは孫覚りじょうや李常とかねてからよく知る間柄で、都に上って科挙を受けようとしているところである」。秦観あざな [字は少游しょうゆう]は作品番号05-1-002ですすでに記したように、後に「蘇門四学士そもんしがつし」の1人に数えられるようになるのだが、このとき30歳で、科挙を受験するために上京する前に、徐州じょに立ち寄って蘇軾そくに会ったのだった。

#### 【訳文】

光たまを発する珠を暗くがりていきなり取り出したら、

人を驚かせ、警戒させてしまう。

貴君は、ちょうどよいときにちょうどよい人に向かって、

珠のような詩を見せたのだから何の心配もない。

昔のとある將軍は百回勝利しても昇進しなかった。

昔のとある將軍は一斗の酒を袖の下として贈っただけで出世した。

貴君には腕力がまるでないようだから將軍には向かないだろう。

貴君が繁華な都会に十年間足を踏み入れなかったのは結構なことだった。

この前りじょう、李常君じょが徐州じょにきたときに、

貴君の文章いしほを見て、古の人が書いたものかと思ったと言っていた。

貴君の詩は万物こころの情を説きつし、書は王羲之しよ おうぎしのさなからであるので、

新しいものか古いものかの区別が難しかったのだ。

李常君が徐州を去ってしまってから、  
河畔の草がただ青々と生い茂るばかり、  
人はおのおの生きることを異にするという諺の通りだと、  
嘆いていたところ、  
天は私の願いを入れて、貴君をここに連れてきてくれた。  
ひとたび貴君の詩を読んで貴君の心を知ると、  
我が眼中には、  
貴君に重なって小柄な李常君と髯そんがくの孫覚君が見えるかのようだ。  
江湖こうこに放浪する間に貴君は真しんを全う、  
忽然こつぜんとしてひと声鳴くや人を驚かせることになった。  
縦も横も自由に進んで可ならざるはなく、  
新しいものを出すことを貴君は少しも恐れなくてよい。  
しかし、世間やほげには破れ箒と千金の価値の違いがわからない者もいる。  
この私にしても、役人生活を続けているのがよい算段とはいえない。  
山中に帰る計画さえまだ決められていない私が言うことであるから、  
まあ軽く耳に入れるだけは入れておいてくれたまえ。

【補足】[秦観しんかんはこの年の秋に科挙の一次試験を都で受け、その結果は後で見ることになる]

## ■ 【05-4-049】 王元之画像賛

【解題】王禹偁おううしやう あぎな げん し [字は元之] の肖像画さうざいに添えた賛さん。王禹偁は蘇軾より 82 年先輩で、科挙に合格して国家の重要な仕事を担うようになった者はいかにあるべきかを実践的に示し、宋代士大夫の手本となった人物。この画賛を書くようになった経緯は本文中

に述べられている。

### 【訳文】

魯の文公の十二年[紀元前 615 年]、新興国の秦からの使者を迎えた魯の公子遂は、その使者が礼節を十分にわきまえているのを見て、

『君子がいないと国は成り立たない』といわれますが、秦はすでに立派な国になっております」

と、秦を対等の相手として認めた。

私は『春秋左氏伝』を読んでここに至り、「君子がいないと国は成り立たない」というこの言葉を唱えて、三度繰り返すと、涙を流して大きく嘆息しないではいられなくなる。

君子とはどのような人なのか。漢代の汲黯、蕭望之、李固、呉張昭、唐代の魏徵、狄仁傑は、皆身をもってどこに義があるかを示し、仲間に引きずり込もうとする者がいても近寄らず、排撃して去らせようとする者があっても動かず、毅然とした姿で朝廷に立ち、大悪人と小悪人もが互いに相手を潰し合うように仕向け、国家の禍が形にならないうちに消し去り、国が亡びるような危機に至る前に救った。

それと似て非なるのは公孫弘、張禹、胡広といった連中で、弁を弄して皇帝に迎合するだけで、百千の議論を重ねたところで、国家の緩急に役立つことは何一つとしてなかった。

公[王禹偁]は雄渾な文章、真直ぐな言説で、当時においてただ独り抜きに出ていて、汲黯、蕭望之、李固、呉張昭、魏徵、狄仁傑の六君子の次に並ぶべき人物であった。このとき朝廷は幸いにも清明で、大奸人も大悪人もいなかった。それでも公は人々の輪に加わることなく独り立ち、いわゆる「秋霜烈日」の厳しきで、周囲と慣れ親しまなかった。三度朝廷の外に出され、そのまま死に至った。

もしも公が邪佞の衆の間に置かれ、あるいは国家存亡の際に遭遇したならば、公の為すところは必ず世俗を絶して時代を驚かし、安易を好む連中の心臓を破裂させたばかりでなく、実に大きな事績を残したに違いない。

私はかつて初めて蘇州の虎丘寺に立ち寄って公の肖像画を見た。なおも烈しい遺風がそこにあるの



を感じて、願わくば公の僕しもべとなって仕えたいと思った。しかし、自分はその時代は及ばなかったのである。それから七年が経って私は徐州じょにきた。公の曾孫おうふんの王汾えんが兗州に向かう途中で立ち寄られ、公の墓碑を見せてくださり、何か文章を添えてほしいと頼まれた。そこで蘇州虎丘寺の肖像画の画賛を作ることにした。

昔から聖賢は己を知る者がいないのに苦しまねばならない。

公は太宗皇帝たいそうに出会い、その時代において認められた。

皇帝は公を用いようとしたが、公は少なからずおとし貶められた。

三度辺地に追いやられ、ついに無念の死を遂げた。

それ以降、名臣といえば公たということになった。

一時の不遇も万世まことに信を残したのである。

いかなる者も公の肖像を拝すべきである。

それを見れば己を取じて誰もが冷や汗を流すに違いない。

公は取じることを教えてくれても、人々は公のようにはなれない。

公がすでに茫茫ぼうぼうとした地下の人となってまた起つことのないのを悲しむ。

【補足】〔(1) 一読してわかるように、蘇軾は現在の政治情勢を踏まえてこの画賛を書いている。(2) 蘇州の虎丘寺で肖像画を見たのは杭州に赴任する途中でのことであった。(3) これと同じころに、作品番号01-2-001で見た『眉州遠景樓の記』を眉州知事れいじゆんの黎錚〔→作品番号05-3-009〕のために書いている〕

## ■ 【05-4-050】 滕県公堂記

【解題】徐州じょに属する滕県とうの公堂〔知事公舎〕について記した文章。このときの滕県知事は范純粹はんじゆんすいで、8歳の蘇軾少年が憧れたスーパースター范仲淹はんちゆうえんの58歳のときの子

で、蘇軾よりも10歳下であった。この文章で、范純粹の行為は保守本道の立場から見て正当であると論じている。

### 【訳文】

君子が天下に仕えるということは、その才能と引き換えに天下によって養われることを意味する。才能の大小によって、養われた方には厚い薄いがある。人に益をもたらすような君子であれば、民衆から搾り取って自らを養ったりしたのでは、心穏やかにしていることはできない。だから、君子を養うときには、(そのようなことをしないですむように)飲食は必ず豊かに与え、車服は必ず十分に与え、公舎は必ず立派なものを与えるのである。そうしたものをきつと君子に給するならば、君子は自分の家から容易に去るだろうけれど、国からはなかなか去ることはない。もしも君子を養うために与える衣食が君子が自ら得られるものよりも粗末でわずかであり、公舎が君子自身の廬よりも貧相であったならば、君子に我が家の召使にも及ばない粗雑な扱いをされていると思わせることになり、君子といえども安らかてはいられなくなる。人が父母のもとから離れて、先祖を祀る墳墓を見棄ててまで遠く官の仕事に出て行くのは、安逸を嫌って労苦を求めるためであつたりしないのだ。

そもそも公舎は受け渡しされて、無窮に伝えられて行くものであって、ある人が独り自らを養うためのものではない。いま修理しないでおく、必ず後日には倍の費えとなる。近ごろは、とかく儉約ばかりに努め、とりわけ土木工事や建築工事を最も嫌い、建物が傾いても腐っても次にくる人に押し付けて、一本の棟木さえも取り換えないでいる。それには、いったい何の意味があるのだろうか。

滕は古くからの町で、宋と魯の間にあつて治めにいとこざされてきた。滕県の公舎がひとくみすばらしくて、屋根を葺くことさえしていなかったのは、敢えて何もしないのではなく、政事に忙しくて暇がなかったからである。天聖元年に、県知事の張太素が實際上初めて改築し、それから五十二年後に、范純粹君が都から出されて県知事となつて、公舎をまた一新したのだつた。公舎にはおよそ百十六の部屋があり、高く明るく大きく堂々として、古代の子爵や男爵の住居にも匹敵するものである。しかし、知事の

私用で使う部分は元のままであるのは、范君が自分自身に奉仕するのを嫌っているというわけではなく、「吾が力をそれに使う暇がないだけだ」といっている。

昔、魏の時代に、毛孝先と崔季珪が権力を持ったときに、ことさらに清廉の士を貴んだので、人々は車服を粗末なものに変えて、よい評判を得ようと務めた。しかし、徐邈だけはそれまで通りにして改めることがなかった。それで天下が動揺することなくすんだのだった。その後、世俗が日々に奢靡に流れたとき、徐邈だけは自若として何も変わらなかったで、天下の人々は徐邈はけちであると言った。君子はただ一つを貫くだけであつたのに、時勢が勝手に二つに分かれたのである。

元豊元年七月二十二日、尚書祠部員外郎直史館権知徐州軍事蘇軾が記す。

## ■【05-4-051】雨中過舒教授

【解題】雨の日に、徐州の学校の教授を務める舒煥〔字は堯文〕〔→作品番号 05-3-035〕を訪ねた詩。舒教授はこの後しばしば登場する。

### 【訳文】

簾の外では、竹をつたって、疏疏として滴が流れ下り、

瀏瀏として雨が風とともに竹の間を通り過ぎる。

窓辺からこちら側には、動くものは塵一つない、

机の上の硯はひんやりとして、霧の中に置かれているかのよう。

舒教授は奥深い孤独を楽しみ、

外界に慕うものがなく、内に得るものがたくさんにある。

座るのは簡素な禅の椅子、立って耳にするのは甌に湧く湯の音。

私が来てももてなすものはなく、

淡いその接し方に、

頭のとっぺんから足の先まで涼しさを感じる。

濃い茶によって、私の心に積み上がった昏いくらものが洗われ、

妙たえなる香こうの薫りによって、浮かびきよるつまらぬ思慮が浄められる。

家に帰ると、

微かすかな螢の光が、暗くがりの中を一つ二つと渡ってゆく。

人生は憂患の中にあるものなのか。

そうではあるまい、

一回の食事の中にこそ安閑のところがあるのか。

人は何かのきっかけで大切なことを知る――

ある人は、飛たこ鶯がたこぼりと落ちるのを見て、先に笑い飛ばしたことを悔い、

ある人は、犬の吠え声を聞いて、悟るのが遅すぎたと後悔した。

静かな時間の内にある真の趣は、

舒教授のような人でなければわからないのだろうか。

【補足】[飛たこ鶯は、遠くに行つて功名を求めより故郷で穏やか人生を送りたいと言つた弟を笑つたのを悔いたという故事。犬の吠え声は、処刑場に向かう途中で昔の飼ひ犬と似た声を耳にして、人生の過ちを悟つた故事]

## ■【05-4-052】次韻舒教授寄李公択

【解題】舒じよかん煥教授が李り常じよう [字は公あざな択こうたく] に寄せた詩に次韻した。李常は新しい赴任しに向かう旅にすでに出ていた [→作品番号 05-4-030]。

### 【訳文】

李君の草書は妙絶で、私は兄として仰ぎ見ている。

楷書ならば、少しは頭を上げて、李君とも並ぶことができようか。

しかし、文を論じても詩を作っても李君には敵わない。

結局は李君が余裕で笑っている前で、降参の旗を挙げなくてはならない。

去年は、私は齊州せいしゅうに一カ月余り滞在し、

昼間から貴君と劇飲し、首までどっぷりと酒につかった。

今年は、貴君が来て徐州じゅうにしばらく留まってくれたけれど、

李君は寂しむ酒に病んであまり多くを飲まなかった。

李君と別れたとき、これまでの飲びが虚しく墜ちてしまうのを知って、

涙を流して李君の髭を引張った。

松の下を縦横に歩いた足跡を残して、

李君の車は、門の前からはこころと走り去ってしまった。

李君の一身はすべて徳から成り立っているのだろうか。

だから李君に近付くと、肌から骨から、清らかに潤おしてくれる。

ただ細かく考えると残念なことが一つだけある――

李君は国を傾けるような美女に少々心を奪われたりする。

【補足】[最後のところは、李常と蘇軾の間だけでわかることで、蘇軾自身の注で、「李常のもとには雲英うんえいという名の婢はしためがいて、李常はそれを外に出して自由の身にしようと考えつつ、まだできずにいる」と書き添えてある。雲英の名は、ある伝説の美女にちなむもので、それを娶った裴航はいこうは夫婦ともに仙人になった。李常に何か執心するところがあるのを蘇軾がたしなめたのだろう。一方で蘇軾のもとには、杭州こうを去る前に引き取った王朝雲おうちやううんという少女がいた [→作品番号 04-3-069]。この時点で王朝雲がどのように暮らしていたのかは何もわからない]

## ■ 【05-4-053】送鄭戸曹

【解題】先に鄭僅〔字は彦能〕が北京大府府に行くのを見送った詩を見たが〔→作品番号 05-4-008〕、このころに再び送別の詩を贈っている。恐らく、何らかの事情で出発が遅れていたのだろう。この詩の最初にある戲馬台はすでに見ているように、漢の高祖と天下を争った項羽が築いた高台で、そこから歴史を回顧して前年の大洪水に及び、洪水対策の終わった後に築きつつあった楼閣〔黄楼〕へと焦点を合わせてゆく。黄楼の詳しいことについてはこの後で見ることになる。

## 【訳文】

水は彭城〔徐州〕の楼閣をめぐり、山は戲馬台を囲む。

古来、この地には豪傑が多く、千年経っても哀しみを誘う余韻が残っている。

鼻筋の通ったいわゆる「隆準」の相をもった高祖は天上へと飛び上がり、

瞳が二重であつたいわゆる「重瞳」の項羽は敗れて灰になった。

徐州の地に拠った呂布〔三国時代の群雄〕は、白門楼に囲まれて曹操に降り、

徐州の地を治めた李光弼〔唐代の名将〕は、この地に星が墮ちると間もなく死んだ。

劉裕〔南北朝時代に皇位に駆け上った人〕はかつて戲馬台で酒宴を開いたのだが、

それからは、劉裕が独り徘徊したところもすっかりさびれてしまい、

荒れた田に苔が生じるまでになり、

いまや、百歩洪から響く川音を聞き、九里山のあたりで山並みが折れるのを見るだけである。

かの洪水のとき、

山と水とが激しくぶつかり合って夜も雷のような音が轟きわたり、

蕩蕩として清河から水が溢れ出てきた。

水の引いた後に、私は東の門に黄楼を築くことにした。

黄楼に登れば、  
秋には城の隅へと月が落ちてゆくを見て、  
春には盃の酒を風が揺らすであろう。  
貴君を黄楼の客として招けば、  
貴君は珠玉のような詩を示してくれるであろう。  
黄楼は完成しようとしているのに、  
貴君はすでに徐州を去ってしまう。  
人間界はとかくまならない。

いつの日か、  
貴君が官界の旅に疲れて、白髪頭となってここに帰ってきて、  
黄楼に登って詩を賦して長く吟じるときに、  
果たしていまの知事はどこでどうしているだろうか。

【補足】<sup>ていさん</sup>〔鄭僅の送別の詩はもう一首残っている。席上にあつた果物を題にしておのおのが詩を作り、蘇軾<sup>かや</sup>には榲<sup>かや</sup>の実が割り当てられた。榲<sup>かや</sup>の実に関連する様々な故事を織り込んだ詩をたちまち作り上げたのはさすがの腕前であるが、詳しい注釈が添えられても訳者には理解がとれも及ばないところがあるので割愛する〕

## ■ 【05-4-054】 次韻答舒教授觀余所藏墨

【解題】<sup>じょかん</sup>舒煥教授の「所有する墨を見て思う」という詩に次韻した。墨に関して蘊蓄を傾けた詩で、故事来歴のてんこもりであるので、適宜説明を加えたり逆に省略したりして訳す。

### 【訳文】

庾翼ゆよくという人は、若いころは王羲之おうぎしの書しょを笑い、  
「あんなものは野生あひるの鶩あひるで、生臭けがくて刀けがの汚れになる」

と、いていたのだが、

晩年には、家で飼かい馴ならされた鶏けいのような書しょを嫌きらって、

王羲之おうぎしの書しょを見習みまうようになった。

王羲之おうぎしと庾翼ゆよくの二人は歴史に冠かんたる風流人ふうりゅうじんであったが、

子供が好き嫌すききらいを争まうようなところもあったのだ。

唐とうの太宗たいそうは十八歳で天下統一てんかの大事業だいじぎやうに乗り出したのだが、

晩年には書をひどく好このむようになった。

私わたしはというと、読書よみかきを好このんで、他のことは一切眼まなこに掛かけない。

ところが、世の中よの人は誤あやまって私わたしが書かきに巧たくまみであるかのようにいっている。

世間よの人には誰たれにても偏ひとへった癖くせがあるものだ。

祖約そやくという人はとにかく財物ざいぶつを好このみ、箱はこから出しては勘定かんじやうするのを楽したのしみとし、

ある日、突然とつぜんの来客らいきゃくに財物ざいぶつを箱はこに納いめるのが間まに合わなくて、

からたをしねらせて隠かくそうとした。

同じ時代おなじじだいの阮孚げんぷという人は履はき物ものに凝こって、

自分でせせと蠟ろうを塗ぬって磨こき立てるほどであったが、

人は生きてる間にどれほどの履はき物ものを使うというのだろうか。

ごくつまらないものから心こころにこだわりが生いじてしまうのだ。

私わたしにしても、墨すみを収集しゆじゆし、三十年間さんじゅうねんかんは十分に足りるくらいはあるので、

その前に自分が老おいてしまうのを心配しんぱいしなければならない。

誰たれかがいっていたように、

人が磨こって墨すみが減へるよりも、人の寿命じゆんめいが磨こり減へる方が速すみいのだ。



おおもとが尽きてしまったのでは何もならない。

ここは官服を棄てて故国に帰ることを真剣に考えなければならぬ。

小さな畑を自分で耕して、たまに書を作って貴君に送るのもよいだろう。

王羲之わいぎんせいりに習って「来禽青李」の四文字だけを書きから、  
笑って眺めてくれたらよい。

それならいくら書いたところで墨は使い切れない。

唐りふぼの李駙馬りふぼの邸内には数々の美しい建物が並び、  
大勢の美しい女性がいいて、

李駙馬は女性たちの求めなら何でも応じて百金も千金も惜しむことなく、  
墨には麝香じやくこうを混ぜて入れる贅沢をした。

墨に御執心ごしやくしんというのなら、そのくらいをすべきではないだろうか。

貴君はこの詩を見てきっと大笑いをし、

冬の窓辺に置かれて硯に張った氷が、笑い声ではげりと割れ、  
春の水が生じることだろう。

## ■ 【04-1-055】 答黄魯直書

【解題】これは黄庭堅こうていけん〔字は魯直あざな りちやく〕から送られてきた手紙への返事。黄庭堅は、後に「蘇門四学士そもんしがくし」の筆頭に挙げられ、詩や書において蘇軾ほくそくと並ぶ北宋の大家と称せられる人。この手紙の前半部分はすでに作品番号 04-1-075 で見ているが、改めて全体を読んでおこう。

### 【訳文】

蘇軾そくより頓首再拜して黄庭堅教授長官殿こうていけんに差し上げます。私が貴君の詩文を初めて見たのは、孫

覚君のところででした。私は詩文を見て居住まいを正し、これは優れたものであると感じ入り、いまの世の人の作ったものではあるまいと思いました。

孫覚君はこのようにいいました。

「この人のことを知る者はまだ少しかいませぬ。貴君はぜひともこの人の名を称揚していただきたい」  
私は笑っていました。

「この人は純金か美しい玉もいえる人で、人によって名を挙げたりするのではなく、自分自身で名を挙げず、評判になるまいと逃げようとしてもそれはできないのです。どうして私などが称揚する必要があるでしょうか」

その文を観てその人となりを考えるに、身の外にあるものを軽んじて、身の内側にあるものを重んじる人であるとわかります。それは今の君子諸君にはできないことです。

その後、李常君<sup>りじょう さいなん</sup>を済南に訪ねましたときに、貴君の詩文がたくさんあるのを見て、貴君の人となりをますます詳しく知ることができました。世俗の塵から超逸し、万物の外に独り立ち、風に駢<sup>ぎよ</sup>し、氣にまたがって造物者と遊ぶかのようで、今の世の君子たちことでもできることではありませんし、私のように放浪自棄で、世間と疎い者はとても友人にはなれません。ところが、いま詩を書かれた幾枚もの紙幅を忝<sup>かたじけなく</sup>頂戴し、あまつさえ甚だ恭しくされて、あたかを畏れるかのようであるのはどうしてなのでしょう。私の方から貴君との交際を求めても、それは得られないと懼れるべきであっても、貴君がそうされることは全くありません。貴君とこうしてお手紙を交わすことができて、胸に喜びが溢れるばかりに湧いてまいります。このところ夏に入りましてから家の者が病に伏せたりしているうちにたちまち今に至ってしまい、御返事が甚だ遅くなってしまいました。きっと深く訝しく思われていたことであらう。

『古風』<sup>こふう</sup>の二首は物に托して類を引いて、真に古の詩人の風格があります。私はそれに類するような者ではありませんが、ともあれ次韻してみましたので、一笑に付してください。

秋なお暑いころ、いかがお過ごしでしょうか。なおまたお会いすることはできませんが、万万自重されますように。

【補足】〔<sup>こうていけん</sup>黄庭堅は<sup>そんがく</sup>孫覚の婿で<sup>りじょう</sup>李常の甥である。孫覚のところでは黄庭堅の詩文を見たことは作品番号 04-1-075 で見ていて、<sup>さいなん</sup>済南に李常を訪ねたことは作品番号 05-3-003 で見ている〕

## ■ 【05-4-056】 次韻黄魯直見贈古風二首

【解題】 上の手紙にあった<sup>こうていけん</sup>黄庭堅の『<sup>こふう</sup>古風』の詩に次韻したもの。

### 【訳文】

#### 其の一

よ  
佳き穀類は風雨によって倒されてしまって、  
我が農園は雑草ばかりが伸び、  
私の前に置かれている膳の上に、玉のように輝く米の光はない。  
天の空の下は広く、  
よ  
美しいことと悪いこと、香りがよいものと臭いものどが交互に生じる。  
夏に、蚊がそこらを自由に飛び回っている間にも、  
時は少しも容赦することなく、  
たちまち葉は黄色くなって落ちてしまう。  
<sup>せいおうぼ</sup>  
貴君は西王母の桃といってよく、千年に一度の実を結ぶてあろう。  
<sup>ずも</sup>  
この私は苦い李で、道ばたに成っていても誰も採ろうとしないので、  
どうにか生きていることだけはできている。  
こうしたことは言うに足りないことで、  
しおしおと自分一人で傷ましく思っていればよいのだろう。

【補足】〔<sup>せいおうぼ</sup>西王母は伝説の女仙で、その桃は千年に一度だけ実を付け、不老長生の妙

薬であるという。黄庭堅こうていけんの詩はそれほどまでに優れていると絶賛したのだ]

## 其の二

人のいない奥深い山で、

仙人みちの先生に道を学ぶ……

町の中ちやうにいても、

笙簫ふえの声こゝろのうちに意わすを忘れることができる。

千金を費やして仙薬を取り寄せる……

開いて視たらどれも豨苓しりやう[よくある下剤]であった。

市中の人の中にだって、

古いにしへの安期生あんきせいのような仙人がまざっているかもしれない。

その人はいま俗世よこよにいて、

霜に落ちた花の痕をじっと見つめ、

あるいは、遠い昔に作られた銅像を撫でて、

おまえとどれほどの歳月を過ごしたのかと数えている。

私はその人に尋ねよう、

閩風みんふうの仙山はどこにあるのかと。

## ■ 【05-4-057】 密州宋国博以詩見紀在郡雜詠、次韻答之

【**解題**】孔宗翰こうそうかん [→作品番号 05-4-012] の後みつで密州知事となった宋国博そうこくはくから密州の様々なことを詠んだ詩が送られてきたので、それに次韻して答えた。宋国博おうようは、歐陽脩しゅうとともに名文家として名高かった宋庠そうしやうと宋祁そうきの兄弟の子世代である。

【訳文】

そうしやう そうき

宋庠と宋祁の文章を観ると、

一字一字が絹を照らして輝いている。

難しい言い回し、類を見ない句法、

それらの語句にも皆考えるべき淵源がある。

後にその文章を継ぐ者はいなかったが、

ただ貴君だけがほとんどそれを嗣ついでているといってよいのだらう。

ところが流落とうとを尚なほふというわけではなからうに、

用捨には定められた命運があるからなのか、

これまで貴君が地位に恵まれずいたのはどうしてなのだろうか。

りはく とほ  
李白も杜甫もやはりそうであって、

当時権勢を誇った李林甫などはてんで字を知らぬ人物で、

ひどい読み間違えをして、誰も謹んで笑いをこらえていたのだった。

国家の難に直面したときに、

手を懐に入れて素知らぬ顔をしている者もいれば、

身の危険を顧みずに飛び込む者もいる。

みつ  
密州のような田舎町では、

我が後を継いでくれた貴君を辱めるようなものであるが、

有難いことに私の不行き届きをざりと覆い隠してくれている。

かつて私は密州で詩を詠みましたが、

どうせ聞く人もないだらうと、

瓦を黄金のように装ったままで、

貴君の絶唱をその後<sub>に</sub>に得たのでは、

あまりに不釣り合いで恐懼するばかりである。

いずれ我が家に伝えて、

長く読み継がせていきたいと思っている。

## ■【05-4-058】答范淳甫

【**解題**】<sup>はん そ う あざな じゆん ぽ</sup> 范祖禹 [字は淳甫ないし夢得] [→作品番号 04-1-046] に答えた詩。范祖禹は、蘇軾が都に入れなかったときに滞在場所を提供してくれた<sup>はんちん</sup>范鎮 [→作品番号 05-3-009] の甥で、<sup>し じ つ がん</sup>『資治通鑑』の編集に携わった歴史家である。この詩は作品番号 05-4-053 の詩と合わせて読むと理解しやすいだろう。范祖禹のもとの詩には唐の時代に<sup>とう</sup>徐州に<sup>ちやうけんほう り こうひつ</sup>張建封や李光弼がいたことが詠み込まれていた。それを踏まえてこの詩は作られている。

### 【訳文】

我が徐州のはずれに、<sup>かん こうそ</sup>漢の高祖の生地がある。

そのことさえ挙げておけば、

<sup>とう</sup>唐の時代に<sup>ちやうけんほう り こうひつ</sup>張建封や李光弼にいたことなどは取り上げるまでもないだろう。

<sup>こうう</sup>瞳が二重だった<sup>じんあい</sup>項羽の遺跡はすでに塵埃に埋もれ、

いまはただ<sup>こうろう しすい</sup>黄樓が泗水を臨み見るだけである。

いまの知事は老いてかつ貧乏である。

遊侠の気はいくらもあるものの、

学問の士にありがちな臍抜けただらしなさを払拭するほどではない。

それでも、<sup>はくもんろう りよふ</sup>白門樓に囲まれた呂布が、とにかく命だけは長らえたいと、

<sup>そうそう</sup>敵だった曹操の馬の手綱を曳くのもよとして仕えたのよりはましだろう。

【補足】[末尾は、出世のために改革派に靡くようなことはしないといっているの  
らう]

## ■【05-4-059】送胡掾

【解題】徐州の獄を司る役人であった胡掾〔字は公達〕を見送った詩。父の胡允文が  
この地で亡くなったために、柩を携えて故郷に帰るのである。胡允文と蘇軾はかつて  
鳳翔時代に交流があって、胡允文の依頼を受けて『鳳鳴駅の記』〔→作品番号 02-2-  
023〕を書いていた。

### 【訳文】

空に糸を投げて散らすようにして雨は降り続き、  
無数の葉が雨に和して音を立てている。  
歲月はまさにこのようにして流れてゆくのか。  
旅人はこの雨の中、ここを去ってどこへゆくのか。  
節義は昔から人の重んじるところ、  
そこから艱難が始まるのである。  
後にきつと貴君は清徳を世に顕わし、  
むしろ人に知られることを畏れるようになるだろう。

【補足】〔(1) 親が亡くなったら、官職を離れて足掛け3年の喪に服するのが子の果たす  
べき当然と節義であるとされていた。しかし、官僚は限られたポストを巡って争う状  
況にあったから、喪が明けて後に次の仕事を得られる保証はない。親を喪った悲しみ  
に加えて将来の不安も抱きながらの帰郷であるから、投げかける言葉を選ぶのは難し  
い。(2) 最後に「人に知られることを畏れる」とあるのは、真の君子は、自らの信念

に從って節義を守り、世間の評判になることをむしろ恥じるからである]

## ■ 【05-4-060】 祭胡執中郎中文

【解題】 胡允文<sup>こ いんぶん</sup>を祭る文章を息子の胡掾<sup>こ えん</sup>のために書いた。

### 【訳文】

胡君<sup>こ</sup>の靈に捧げる。

貴君は若いときに、父君に從って蜀<sup>しよく</sup>にきた。蜀<sup>しよく</sup>の士で賢<sup>けん</sup>であろうとする者はみな貴君と友人なろうとした。私は貴君の名を聞いていたのだが、そのときは会うことができなかった。後に、鳳翔<sup>ほうしょう</sup>で官の仕事をしたときに初めて貴君と面識を得た。ともに話して大いに喜び、百年の知己を得た思いがした。そのとき貴君の子息を見て、駿馬<sup>おおどり</sup>の子、鳳の雛であると感じた。貴君は罪なくして官職を失い、私より先に鳳翔を離れた。後に私が鳳翔での任を終えて都に向かう途中、華州<sup>か</sup>の旅宿で貴君と逢った。貴君は何日も続く雨に濡れて、車が泥に埋もれるような境遇にあつたので、人は貴君のために泣いたのだが、貴君は一人ゆとりがあつて楽しんでいるかのようだった。その七年後、貴君は都で職務を得て、ひとたび安堵の笑いをもらはずのところを、歓びはさまではないようだった。後にまた七年、私が徐州<sup>じょ</sup>に赴任すると、獄を司る役人となつた子息とともに貴君がそこにいた。いよいよ鳳の雛が大空を翔け、駿馬の子が千里を行くばかりのときになって、私と貴君はすっかり老けてしまつたのだつた。老人には友がないのが常であるから、私と貴君は徐州で会つてからますます親しくなつた。およそ鳳翔時代に一緒だった人々で今も生きているのは幾人いるのだろうか。貴君は仁に厚い人であるから、貴君こそはたとえ病になつたとしても、必ず長生きをするはずのものと思つていたのだが、どうしたことか、運命というものわからない。

ああ、胡君の靈に告げる。

人として誰か死なない者があろうか。貴君のように賢であつても現世にいつまでも留まることはできない。



貴君はあたかも百回鍛え抜いた剛刀のように、一日に千頭の牛をさばいてもたゆむことなく仕事に励んだ。宝玉のごとき貴君の才能を世間は十分に活かさずに箱の内に置いてしまった。しかし、貴君の予息はきっと世に高い名を挙げることだろう。貴君に一杯の酒を送る。永遠の世界へ帰り、この世に恨みを残すことなかれ。

## ■ 【05-4-061】 次韻答王定国

【解説】 都おうきょうにいる王鞏あぎな [字は定国ていこく] [→作品番号 05-3-039] から届いた詩に次韻して答えた。詩の後半に出てくる清虚堂せいきょどうは王鞏の書齋で、後に少し詳しく見ることになる。

### 【訳文】

貴君の詩を得るたびに、近況を綴った書簡を受け取ったような気になる。

それでも、心の内のを宣べて妙所を写すには、書簡はやはり詩に及ばないだろう。

眼の前のあるとあらゆるものは、心に何かを生じさせずにはおかない。

憂いが生じても、貴君の詩を見れば必ず駆除してくれる。

貴君の詩によれば、

都は十日以上も雨が続いて、馬の脚が泥に沈み、魚が街路で泳いでいるとか。

長い雨は、よくわれるように、来るべき人を来なくさせてしまうのだ。

貴君はゆったりと独せいきょどうり清虚堂で酒を酌んでいることだろう。

太守となって郡を治めるのは、昔から楽しいことであるといわれている。

徐州じょの山川はまことに美しいけれど、

残念ながら、我が故郷ではない。

願うのは、

重陽ちゅうようの節句せきごには来てくれるという前々からの約束を廢てることなく、

衰えて心が冷え冷えとしているこの知事の前に現れて、  
思い切って気合を吹き込んでくれたまえ。

【補足】〔重陽ちやうようの節句に会いにくるといのは、2年越しの約束である〕

## ■【05-4-062】送将官梁左藏赴莫州

【解題】武官の梁交りやうこう あぎな ちゆうつう〔→作品番号 05-4-047〕が今度は莫州ぼくに行くことになったので、その送別の詩を詠んだ。莫州は北の国境地帯にあって、後漢ごかんの終わりに公孫瓚こうそんざんが堅固な城を築いて籠ったところで、この詩にはそのことが詠まれている。

### 【訳文】

燕えんの地の南、

趙ちゆうの地の北、

その間の土地は籠るによいと歌われ、

公孫瓚こうそんざんは石を固めて城を築き、

鉄の門をびたりと閉ざしたのだが、

今に至るもその愚かさを人は哀れんでいる。

公孫瓚は城の中に三百万石の穀物を積み、

勇猛な士を集めて大いに氣勢を上げた。

城の外で攻め太鼓が鳴り響いたときに、

公孫瓚のために戦おうとする者はおらず、

公孫瓚のまわりには顔をおおってうなだれる女性だけだった。

本当に大切なのは堅固な城などではなく、

平安の時であっても千騎を率いて風のようにやってきて、

からからと雷のように笑って語り合うことができる友がいることだ。

悠然と振る舞い、清らかに歌う貴君こそはまさにそのような人、

ほうじょう じょ  
彭城[徐州]の老知事[蘇軾]は貴君を見送る悲しみに、

貴君の家の人たちが歌う姿を見ることもできなっているのである。

【補足】[同じときに梁交を見送った詞もあるが、何をいつているのか訳者にはさっぱりわからないので割愛する。実は、上の詩も意味不明の個所が多くあり、訳文が一見するとなめらかそうであるのは、見かけだけのまやかしである。それでも、一番大切な詩のココロは掴み損ねてはないはずである]

## ■ 【05-4-063】 答仲屯田次韻

【解題】 ちゅうはくたつ 仲伯達 [→作品番号 05-3-070] の詩に次韻して答えた。

### 【訳文】

秋になってもまだ水辺で遊んでいないので、

千里の彼方の詩の友[ちゅうはくたつ仲伯達]を訪ねたいと思っている。

貴君が耳を傾けているのは、

遠くの巨木がざわさわと響かせる古の琴のような音。

清らかな風が、なおも残る暑さを巻き取り、積もる雲を掃き清めて、

天には月が白い光を流すであろう。

そのときに貴君が歌う絶唱を誰が継ぐのかといったら、

きざし  
階を埋め尽くす桐の落ち葉の中で鳴く虫たちである。

## ■ 【05-4-064】 次韻子由送趙叡歸觀錢塘、遂赴永嘉

【解題】弟の蘇轍そ てつ ちょう きが趙屺あざな けいじん [字は景仁] を見送った詩に次韻した。趙屺は先に見た趙抃ちようべん [→作品番号 05-3-066] の子で、永嘉えい かに赴任するに当たって、まず父親が知事を務める杭州こう [銭塘せんとう] に立ち寄ることになっていた。趙屺の故郷は杭州ではないが、父がそこにいるので、この詩はあたかも趙屺が帰郷するかのよう<sup>1</sup>に詠んでいる。

### 【訳文】

帰り行く貴君の舟は河とともに幾度か曲り、  
 次第次第に故郷の山々が青く見えてくる。  
 土地の役人が旅人を出迎えてくれると、  
 すでに貴君も故郷のなまりを帯びるようになる。  
 貴君はかの謝靈雲しゃれいうんのような父上に会い、  
 かの王延寿おうえんじゅうが父のために代作したような名文を献じるであろう。  
 四十歳での出仕は遅いなどと世間ではいいが、  
 三千里の高さへと飛翔する勢いを具えた貴君であるから、  
 そんなことは気にするまでもない。  
 貴君は風流にして清絶、  
 永嘉えい かに至れば、  
 衣を濡らして溪谷を尋ね、  
 草鞋をはいて薬草を採り、  
 折々に詠む詩はすくに一巻の書物になり、  
 繭紙けんしを広げて王羲之おうぎしのような筆を揮うことだろう。  
 貴君を迎えて永嘉は安らかに治まり、  
 海は穏やかで魚や鯨が泳ぎ戯れ、

山は静かで草木が自ずとよく成長することだろう。

官職にある限り、遠近を問わずに行かねばならない。

民を治めるには、種々の困難を嘗めなければならない。

貴君はお家の伝統をよく継いで

父上のように権威を恐れず不正を糾す人になってもらいたい。

【補足】 [挙げられている名はいずれも歴史上の著名人であるということだけわかっていれば、いちいち詮索しなくてもよいだろう。謝靈雲しゆれいうんは特に永嘉えいがかに深いゆかりのある人物である]

## ■ 【05-4-065】 書子由黄楼賦後

【解題】 何度かその名を挙げてきた黄楼こうろうが8月12日に完成した。その日付がこの短文に記されている。

### 【訳文】

子城しじょう [徐州の町を囲む城壁に付属する小さな城]の東門とうもんは、ちょうど水がぶつかる所に当たっていて、そこに徐州府の倉庫がある。土地が狭いためにその部分を完全に囲って固めて甕城おうじょうという形にはできないので、門を大きく改築して、磚石で護ることにした。州の庁舎には廃屋となった建物があって、俗に項籍こうせきが作ったものだとわれているのだが、それが正しくない。実のないことがみだりに伝えられているのを嫌い、それを壊し、その材料を取って東門の脇こうろうに黄楼げんぼうを築いた。元豊元年八月癸丑さちゆう [十日]に楼は完成し、九月庚辰こうしん [九日]に大いに集まって落成式を行った。私は始めはそのことを記念した文章を書こうと思っていたのだが、弟が賦を作ってくれて、書くべきことはほぼそこに尽きているので、それを石に刻んでここに置くことにした。

【補足】 [弟が書いた『黄楼の賦』の序文は作品番号 05-3-062 ですで見ている]

## ■ 【05-4066】 中秋月寄子由三首

【解題】8月15日に中秋の月を詩に詠んで弟に寄せた。1年前の中秋の月は弟と一緒に見ていた [→作品番号 05-3-051]。

## 【訳文】

## 其の一

去年、心をこめて君と見た月、  
 今年は、古い町の東にきらめいている。  
 去年、君とともにいた僕、  
 今年は、憔悴<sup>やまい</sup>して病の床に臥っている。  
 月はあちらこちらを探し求めたのか、  
 しとやかに窓辺より入り込んでくれた。  
 月は僕が病であることなど知るはずもないのだけれど、  
 楼台に月を愛でる歌声がないのを訝しく思ったのだらう。  
 僕は枕を撫でて三度嘆息し、杖にすがって立ち、  
 せっかく入ってきてくれた月の光に誘われて外に出る。  
 夜の露が冷たく胸に入り込み、  
 秋の虫のように僕はかすかに詩を吟じる。  
 こんな病人を哀れまなくてよいので、  
 天の風よ、  
 手荒く吹いて月の宮殿へと連れて行ってくれまいか。  
 僕も李白<sup>りはく</sup>のように豪放に振る舞ってみたい。

でも、かえって孟郊もうこうのように鬱屈した言葉を発してしまう。

僕に許された歳月はあとどれくらいなのだろうか。

この佳よい月ともしばしば逢えるものではあるまい。

魚もこの夜は睡ねむらずにいるのか、

さかんに水上で口をばばとさせている。

【補足】もうこう [孟郊の詩を論じた詩をすでに見ている [→作品番号 05-4-009]]

## 其の二

この間に中秋の月に逢ったのは六回、

そのうち五回は君と離れて月に照らされ、

去年だけは一緒に、

しかし、そのときに君は別れの曲を歌い、

満座の人々は咽び泣いた。

南京なんけい応天府おうてんは繁華で美しいところだろうけれど、

あの夜のことは忘れずにいてほしい。

今夜南京で君が見る月は、

広い湖に銀を流し込み、高い楼閣に鏡を掛けたかのよう、

夜遅くまで歌声が続き、

清らかな木のもとに人影が散り散りになって、

ようやく君は家に帰り着くのだろう。

葉の上にはすでに露が宿り、

月の光が翻ひらされることだろう。

君は酒を呼び、

細君とともに飲み、子供たちに向かって僕の話を話したりするだろう。

しかし、君は知らないのだ、

僕が病後で酒が飲めずに梨や栗に対してののを。

僕がいま見ているのは、

川の東の蕎麦の花が、月の光を受けて雪を敷いたかのよう。

去年の君の曲に和そうかと思っていて、

そうすると心がずたずたに断ち切られてしまうだろうかと、

僕はいま怖がっている。

### 其の三

去年の中秋の月を共に見たのは、

舒煥君、鄭僅君、頓起君、趙杲卿君……。

舒煥君はいま鄆州にいて、

科挙の試験監督として閉ざされた門の内で、

この清らかな月に対してなのか。

鄭僅君は北京大名府に赴任するために、

夜の間も独り舟を進めているのか。

頓起君は同じ徐州にいるけれど、

やはり科挙の試験監督として門で閉ざされた内側にいる。

趙杲卿君からは手紙が届き、

僕が作った中秋の詞について書いてくれた。

四人は離れ離れてあっても、

千里を照らす月明りのもとで心を一つにしている。



明月は人が老いることなど理解しないし、  
良い夜に人々が揃うのはもとより難しい。  
座を一つにする人々も、  
ふと顧みる間に水に流れる浮き草のようにばらばらになってしまう。  
かつて僕はこういうことを聞いた——  
各地を旅する商人が集まって話をしたところ、  
中秋の日ばかりは、晴れも曇りも、どこもかしこも同じ天候なのだ。  
とすれば、君も四人の者も同じ月を見ているのだらう。  
天はそれだけの意を使ってくれているのだから、  
中秋の会はとりわけ軽んじてはいけけないのだ。  
明年もまた各自が離れて月を望むであろうが、  
一瞬ごとに変化する僕らであっても、  
永遠に変わらない情を知るであらう。

【補足】 [去年ともに中秋の名月を見たとき名を挙げている4人のうち、<sup>ごかん</sup> 吳瑄と<sup>じょかん</sup> 舒煥は徐州にいる人であるが、<sup>とんき</sup> 頓起は<sup>せい</sup> 青州の学校の教授 [→作品番号 05-1-036]、<sup>ちようこうけい</sup> 趙杲卿は<sup>みつ</sup> 密州の学校の教授 [→作品番号 05-1-030 など] である。

## ■ 【05-4-067】 中秋見月和子由

【解題】 同じ中秋の月を、弟は<sup>なんけいおうてん</sup> 南京応天府で見て詩を詠んだ。それに兄が和した。

### 【訳文】

山の高みから明月がまだ出ないうちに、  
<sup>ぶつ</sup> 仏陀の<sup>びやくごう</sup> 白毫から発するような<sup>ずいこう</sup> 瑞光が千丈の長さに伸びる。

一杯の酒が尽きる前に銀鬨が湧き出し、  
雲の乱れが波頭のように崩れ去る。  
天の川の千斛の水が天の眸子を洗い去ったのか、  
ぞくぞくとさせられるばかりの月の光に、  
私の心はかえって水のように静まってゆく。  
いつもなら弾丸のような光芒を放つ星も、  
竜がわたかまるような星座も、  
今宵は眼を凝らしても見えない。  
清く澄んだ月の光に螢の火は争いようがない。  
誰が川に舟を浮かべているのか、  
千の燈火が魚のように動いている。  
ある舟は浪のきらめきを無心に追い、  
ある舟からは歌声が高くあるいは低く聞こえてくる。  
浪はいつまでも揺れ、風はいつまでも回り、  
舟の青い明かりは山の前に明滅する。  
明月が低く落ちてゆくと人々は散り散りになり、  
私は家に帰って酒を呼び、  
もう一度月を見る。  
月の色はいよいよ清く好ろしく、  
露に湿った草の中で秋の虫が咽び鳴く。  
簾を捲いて戸を推して静まり返った家に入ると、  
窓辺でぐずる孫の声だけかしている。  
南京なんけいにいる君よ、

貧乏であるのを恥じることはない。

君のように、月に対して詩を詠む人はそうは多くあるまい。

明日の朝になれば、人はそれぞれに用事があって出てゆく、

美しい月の楼台での夢から覚めてぼんやりとした気分のままに。

【補足】〔(1) 川に見えた無数の燈火は、中秋の夜に舟に燈火を掲げる習慣があったことによる。(2) ぐずる孫は蘇軾の長男の子で、近頃誕生したばかりで、楚老と名付けたと、蘇軾自身の注記がある〕

## ■ 【05-4-068】 与子明兄

【解題】 従兄の蘇不疑〔字は子明〕〔→作品番号 04-1-070 など〕に宛てた手紙。

### 【訳文】

長らくお手紙を差し上げずにおりましたのは、兄上もよく御存知の怠惰の本性によるもので、たぶんまだそれほど罪深きは思っておられないことであらう。……私は交替の者が来たら移ることになります。こちらは二年続きの水害と旱魃で、よい場所を得て行きたいものです。お別れてからすでに十年、いつお会いできるのかと思うと、何ともいえない気持ちになります。……八月十八日。

建茶、寃墨を少しばかりお送ります。……中秋に詠んだ三首も添えますので、笑ってお納めください。

蘇軾再拜。

【補足】〔故郷にいる従兄に、近況を知らせつつ、高級品の茶と墨を贈ったのである〕

## ■ 【05-4-069】 永遇楽

【解題】 このころに詠んだと推測される詞。徐州の燕子楼にまつわる盼盼の物語があ

ことはすでに見ているが [→作品番号 05-3-029]、蘇軾はあるとき燕子楼に泊まり、夢に盼盼を見てこの詞を作ったという。

### 【訳文】

名月如霜、[霜のように明るい月の光]  
 好風如水、[水のようにさわやかな風]  
 清景無限。[無限に清らかな光景]  
 曲港跳魚、[入り江に飛び跳ねる魚]  
 円荷瀉露、[露を瀉ぐ円い蓮の葉]  
 寂寞無人見。[寂寞として人を見ることはありません]  
 紉如三鼓、[紉紉と三回叩かれる太鼓]  
 鏗然一葉、[葉が落ちる響き]  
 黯黯夢雲驚斷。[暗いぼんやりとした夢の雲はそこで断たれます]  
 夜茫茫、[夜はなお茫茫]  
 重尋無処、[夢を重ねて尋ねるところはなく]  
 覚来小園行徧。[覚めて小さな庭をくまなく歩きます]  
  
 天涯倦客、[天の涯の疲れた旅人]  
 山中無路、[山の中で見失った路]  
 望断故園心眼。[心の眼でも望み見ることのできない故郷の家]  
 燕子楼空、[からんとした燕子楼]  
 佳人何在、[かの佳き人はどこに]  
 空鎖楼中燕。[楼中に虚しく閉ざされた一羽の燕]

古今如夢、[昔も今も夢]

何曾夢覚、[いつまでも覚めない夢]

但有旧歡新怨。[ただあるのはかつての歡びと今の怨み]

異時対、[次に対するのは]

黄樓夜景、[樓閣から見る夜景]

為余浩歎。[私は深く歎くのです]

## ■ 【05-4-070】 答王鞏

【**解題**】徐州じょに来ると何度もいつていた王鞏おうきやう [字は定国あざな ていこく] [→作品番号 05-4-061] が  
いよいよ都を出ることになって、詩を送ってきた。その中で、王鞏は自身のことを  
「悪客あくきやく」と称していた。それに答えた戯れの詩。

### 【訳文】

汴水べんすい、泗水しすいが彭城ほうじやう [徐州じょ]を繞り、

城壁は鉄を磨いたように堅い。

李光弼りこうひつ [唐代の武将とうだい]がここにいたときは、

その号令が人々の肝を裂くほどに厳しく轟いた。

そうした伝統のある彭城の主人が、

「悪客あくきやく」ごときを恐れるなどとは聞いたことがない。

「悪客」と称するのは誰かといと、

祥符しょうふ年間に宰相となった人の孫、

その家からは豪逸の人々が輩出し、

気に入ればたった一つの盆にも千金せんげんも擲ち、

旨い酒しか飲みたくないと、  
 お気に入りの酒を載せた車を連ねて遠く人を訪ねたりもする。  
 貴君に千の瓶かめの酒があるならば、  
 私には万の株の菊があるから、  
 頭に挿したければ好きなだけ挿したらよいであろう、  
 多すぎると貴君の顔は見えなくなり、  
 酔って帰るときに、花の重さに体の軸が折れてしまうかもしれない。  
 客人に私は尋ねよう、  
 「何が嬉しくくるのかい」  
 客人は答える、  
 「私は山を愛するのです」  
 「それにそうってつけ、  
 町のまわりを青い山々が巡っているから、  
 わざわざ山中に土地を買い求める必要はない。  
 それにここには黄楼こうろうがあって、  
 下にはさらさらと流れる美しい川があって、  
 つまらないことを聞いてしまった耳を洗ってくれるし、  
 飢えも癒してくれるのだ」  
 彭城の遊びは楽しい上にもさらに楽しい。  
 貴君は「悪客」といけれど、主人の悪にはどうせ及びはしない。  
 【補足】[王鞏おうきようが徐州じよに向かう途中に馬上で詠んだ詩に次韻した作品もあるが、軽く返事をしただけの詩であるので、訳は割愛する]

■【05-4071】与頓起、孫勉泛舟、探韻得未字

【解題】科挙の監督官として徐州<sup>じょ</sup>にきていた頓起<sup>とんき</sup>と孫勉<sup>そんべん</sup>とともに舟を浮かべて遊んだときの詩。蘇軾には「未」の字が韻として割り当てられた。頓起の名は作品番号 05-4066 にあり、孫勉は孫覺<sup>そんがく</sup> [→作品番号 5-4033] の弟である。

【訳文】

窓の前<sup>あおざり</sup>には梧桐の葉が高く積み上がり、  
牀<sup>ベッド</sup>の下ではさかんに絡緯<sup>こおるぎ</sup>が鳴いている。  
そこに貴君等からの手紙がきたのは、  
貴君等にもまた夜に嘆<sup>なげ</sup>ことがあるからなのだろう。  
朝になって、  
私は一樽の酒を携えて、  
貴君等と舟に乗り込んだ。  
貴君等との一語一語、  
それを味わいながら我が心を慰める。  
すでに秋の蠅は消え去り、  
冬の蟹が初めて旨くなるこのとき、  
小さなことを思っ<sup>おも</sup>てなよなよ歌うのはよそうではないか。  
目をかっと見開き、髯<sup>ひげ</sup>を逆立てて、  
豪壮に勇んで歌うべきである。  
山がちのこの町に何かあるのかといったら、  
この風光は貴君等を十分に楽しませ、  
旨い魚だっ<sup>あ</sup>た<sup>た</sup>たくさんある、

とにかく笑って貴君等の腹のうちに納めてくれたらよい。  
 たとえ十日の間飲み続けたところで、  
 私にとってはさほどの費えにはならない。  
 我等はいずれにしても老い行く身、  
 己自身を貴く思っ、  
 他人に取り入るために猿踊りをして笑いを取るなどではならぬのだ。  
 百篇の詩を作って、  
 我等の意気を千丈の高さへと吐き出そうではないか。  
 この年も次第に暮れ、  
 雪の降るときが迫ってくるであろうから、  
 明日は、町の南に出て遙か昔の遺跡を訪ねようではないか。  
 秋の風のもとで菊が湧き出るように咲き乱れているだろう。  
 諸君等は帰るなどといってはならない、  
 私が嫌うのは、  
 別れを軽んじることなのだ。

### ■ 【05-4-072】 次韻答頓起二首

**【解題】**<sup>とんき</sup>頓起の詩に次韻して答えた。この詩には蘇軾自身の注で、「頓君が科挙に及第したときに、私は<sup>でんし</sup>殿試の<sup>へんはいかん</sup>編排官〔成績の順位を決める役〕で、頓君の答案を読むとすこぶる率直であると思った。その後、弟は合格者たちとともに<sup>せいけい</sup>西京〔<sup>らくよう</sup>洛陽〕に行き、<sup>すうざん</sup>嵩山の絶頂に登った。そのときに唱酬した詩十余首をかつて見たことがあり、頓君の詩もその中に入った」と書き添えている。それは、<sup>きねい</sup>熙寧3年〔1070年〕のことであった〔→作品番号 03-3-007〕。



【訳文】

其の一

袖を引かれ、腰を押されるようにして貴君が貴紳の仲間入りをすると、  
貴君は我が弟等と手を携えて天への門に登った。

そのときに山の中で聞かれた声と似ていると、  
私は貴君の詩を見たときに感じたのだった。

思い出を語ろうとして、

その前に、歳月の走る速さに驚かされてしまう。  
あのときすでに新しい学問に皆が従うようになり、  
人々は今もなおその筋の人たちを畏れている。  
あところに宮中で当直したのもいまは夢のよう、

それでも、貴君が時世を憂いて書いた論文ははっきりと記憶している。

【補足】 [(1) 新しい学問とは、王安石<sup>おうあんせき</sup>が提唱したもので、それに則って答案を書いた人物を首席で合格させたことを蘇軾は強く批判していた。(2) 続く第二首は、2人にはわかる事情を踏まえているのか、訳者には理解が及ばないので割愛する]

■ 【05-4-073】 九日黄楼作

【解題】 洪水対策が一段落した後に着工した黄楼<sup>こうろう</sup>は 8 月 12 日に完成していた。しかし、8 月 15 日の中秋には蘇軾が体調不良であったために、大勢の人を呼んでの月見の宴は催されなかったようだ。これは 9 月 9 日に重陽<sup>ちやうよう</sup>の宴を黄楼で行っての詩。

【訳文】

去年の重陽ちようようはいいようのないものだった——

前日の夜中に、町の南方に千の渦が湧き立ち、  
城壁に向かって水が押し寄せ、雷のような音を立てた。

町中が泥だらけになり、そこに雨も降ってきた。

重陽の節句だからといって、菊の花とか酒どころではなかった。

日暮れには泥だらけになった履くつを洗い、

そのときに、

今年の重陽の節句を迎えられるようになるとは思いませんでした——

さあ、花に向かって盃を挙げようではないか。

酒は薄いし、もてなしはまずいものだが、

これだって土囊ど のうをかついで泥の中をはいずりまわるよりはましではないか。

この黄楼こうろうはてきあがったばかりでまだ壁は乾いていない。

霜が初めて降りようとするいま、今年の川は水量を減らしている。

今日は細かな雨のような霧に包まれ、南方の山並みは隠され、

黄楼の前には茫茫ほうほうと海が広がっているかのようだ。

下からはぎしぎしと舟を漕ぐ音だけが聞こえてくる。

秋のうすら寒さは老人の体にはよろしくないというから、

まずは熱い酒を腸はらわたに注いで、我が内なる気きを奮い立たせようではないか。

すると、いい塩梅に霧が消え始め、日が出てきて漁村が見えてきた。

遠く、水は鱗鱗しんしんと流れ、山は巖巖ごつごつと聳え立つ。

ここに集まった三十余人、

詩人もいれば猛士もいれば、それこそ竜だって虎だってまがっている。

楚その舞い、呉ごの歌を披露して、それこそ鶯鳥や鴨の大宴会だ。

さあさあ、もう一杯、皆の衆よ、辞退するでないぞ。

この景色は天下第一の名勝にだって引けを取るものではない、

それはこの私が保証する。

【補足】〔(1) ちょうど1年前には洪水との格闘が始まっていた。(2) 最後の句は、もっと具体的に、ここは若溪ちようけいに匹敵するほどに美しいと詠んでいる。若溪は江南こうなんの名所で〔→作品番号 04-1-073〕、かつて蘇軾は訪れたことがあるので、いかにそこが美しいかを一座の人々にさんざん語り、しかしこども劣らないといったのだろう〕

## ■ 【05-4-074】太虚以黄楼賦見寄、作詩為謝

【解題】秦觀しんかん あざね〔字は太虚たいきょ〕〔→作品番号 05-4-048〕が『黄楼の賦』を作って寄せてきたので、その謝札に詩を返した。

### 【訳文】

私は黄楼こうろうの上で黄楼の詩を作ろうとしていた。

そこに友人から手紙からきて、中になんと『黄楼こうろうの賦ふ』が入っていた。

黄楼は高さ十丈、その下に五丈の旗が立つ。

楚山そざんをもって黄楼を守る城とし、

泗水しすいをもって黄楼を巡る池とする。

私が作ろうとした詩にはこれといってよい句がない。

すべての風景がそれぞれに己を主張するので、

私の意に従って詩の中におさまってくれないのだ。

貴君は、何とも知れぬ妙技をもってして、

雹を自在に降らし、雷をやすやすと鎮めてしまう。

貴君の堂々とした詩句は古今の傑作の中に雑ぜることができる。

なんざん 南山の石は磬<sup>けい</sup>[打楽器]を作るのによく、清く脂を流すかのようになめらかである。

朱<sup>ろうせき</sup>い蠟石は印を刻むのによく、くわすかな線もきめ細かく作ることができる。

貴君の詩は、磬石や朱蠟の原石のように、

どれほどのすばらしさが内に具わっているのか、

いまはまだわからない。

後の人々が真価を知るであろう。

### ■ 【05-4-075】 九日次韻王鞏

【解題】王鞏<sup>おうきやう</sup> [字は定国<sup>あぎた ていこく</sup>] [→作品番号 05-4-070] はようやく徐州<sup>じょ</sup>に現れ、王鞏の九月九日の詩に次韻した。

#### 【訳文】

私は酔ったのもう眠ろうと思う。

貴君もそろそろ止めたらよいだろう。

酒がもうなくなってしまったので、

青州<sup>せい</sup>から従事を走らせたところだ[青州従事という名の酒があることによる洒落]

見れば、鬢の白髪は貴君の方が三千本は多いようだが、

詩の品格は私の方が一百等は劣りそう。

貴君は高位に昇ったなら、

楼閣の扉を開く暇もはやなくなってしまうだろうから、

今日ばかりはこの老人と楼上にあるのをよしとしてくれている。

せっかく逢えたのだから、

帰ることなど言わないようにしてもらいたい。

それを聞いたら、黄色い花のようなあの蝶だって悲しむだろうから。

## ■【05-4-076】送頓起

【解題】試験監督のために徐州<sup>じょ</sup>に来ていた頓起<sup>とんき</sup>がいよいよ帰ることになり、この送別の詩を作った。

### 【訳文】

旅路にある者同士が逢うのは難しく、

いつも満足に楽しむことができない。

貴君が旅立とうとするので袖を引いて、

重陽<sup>ちやうよう</sup>の節句に折り残した菊を愛でようではないかと勧める。

貴君はいま何を念<sup>おも</sup>うのか、

送別の歌は悲しさを増す。

酒<sup>たけなわ</sup>闌にしてまだまだ別れる気になれず、

もうしばらく、蠟燭を一寸伸ばす。

留めても限りがない、

いつかは別れを促すことになるのだ。

貴君が行く先には、泰山<sup>たいざん</sup>が見えてくるだろう。

貴君は先人に習って踏み登り、

四十里にわたる山並みの向こうから湧き出る朝日を浴びるだろう。

そして、頭<sup>こうべ</sup>をめくらせてこの徐州のあたりを望むなら、

大海に浮かぶ一粒の粟、

そこに貴君の友がいて、塵土の上をあぐせく歩き回っているのだ。

貴君は黄楼の詩を残してくれた、

私はその名篇をずっと大切にするだろう。

## ■【05-4-077】送孫勉

【解題】同じく試験の仕事できていた孫勉の送別の詩。詩の冒頭に北海道について言及しているのは、孫勉がかつてそこにいたのだろう。途中に「髯の將軍」とあるのは立派な髯を蓄えた孫覚、つまり孫勉の兄のことである。

### 【訳文】

私は先に密州の職を辞めたときに北海道を通過した。

河では、雪のような白い浪が暴れ、

黄土は蒸し饅頭のようにひび割れていた。

そのあたりは桑や麻の一大産地で、

そこが豊作になると天下の桑や麻の値が下落するといわれている。

ところが、このところ毎年のように饑饉に見舞われ、

盗賊の難にもずっと苦しめられている。

気の毒なのは盗賊を追捕する役人で、

顔が裂けるような烈風の中でも野宿をしなければならぬ。

貴君は淮南出身の秀才で、

首席で科挙に合格するほどの文才の主でありながら、

筆を投じ、腰に箭を束ねて武事に奔走するようになり、

髯の將軍の薰陶もあってか、

戦を促すような豪快な詩文を作るようになった。

私は州知事として近隣の三つの州を対象に科擧の地方試験を行った。

私には、受験生の中の玉石を見分ける能力がない。

貴君には、しかるべき人物を見分ける力が具わっていることはよく知られているから、

試験に落第しても、貴君の判定ならばきっと受験生も善しとしてくれるだろう。

貴君の才能には可ならざるものはないが、

さらに百煉すればますます立派なものとなるう。

私の詩は咀嚼するに耐えるものではないけれど、

貴君との別れの酒の肴として贈ろうと思う。

## ■ 【05-4-078】 李思訓画長江絶島図

【解題】唐代の李思訓が描いた画を見ての印象。李思訓は宋代の山水画の基となるような画風を拓いたといわれる人。画には、長江に浮かぶ二つの小島が描かれていた。

### 【訳文】

山は蒼蒼く、

江は茫茫い。

江の中央に浮かぶ大孤山と小孤山、

崖は崩れ、路は絶たれて、猿も鳥もない、

ただあるのは天を刺すばかりの高い木々。

旅人の舟はどこから来たのか、

ふと画中より、

抑揚のある棹歌の声。

画の外の遙か遠くより、

江かわべりの平らな沙へと、

軟らかな風が吹き寄せる。

二つの島は姉と妹だとか——

たちまち島は女性の豊かな鬢まげに変わり、

暁の鏡の前で化粧が終わったばかりのあでやかさ、

舟の上の旅人よ、

むやみに恋に落ちてはいけぬ、

妹は先年、彭郎ほうろうというよい男のもとに嫁したのだから。

【補足】〔山水画には、舟に乗る孤独の人物がよく描かれ、それは俗世間から超越した隠者であるとするのが普通の見方である。ところが、この詩では、他所の女性に岡惚れしてしまう俗人として詠んでいるのが蘇軾の遊び。悪ふざけがすぎると、この部分を酷評する人もいたが、杓子定規の堅いことばかりをいう者は蘇軾の友人にはなれない〕

## ■ 【05-4-079】張安道見示近詩

【解題】王翬おうきゆう〔字は定国〕が携えてきた張方平ちやうほうへい〔字は安道〕の新しい詩を読んでの感想。王翬は張方平の婿である。

### 【訳文】

世の人物の質がひとたび衰え出すと、奥深い言葉が聞かれなくなる。

かつてそのような時代があった後に、

再び正しい言論が聞かれるようになったと讃えられた人がいた。



それとて、張公ちょうこうが時に感じて深い意こころから発する言葉にはとても及ばない。

私は少年の頃に奇特な志を抱き、古代の琴の音に和そうとした。

ところが、林は荒れて蟬が勝手にがんがん鳴き叫び、

沼は廢れて蛙みだが淫りがわしく鳴き叫び、

ついには両耳を覆い、ただ黙って嘆息することとなった。

ここに王君おうくんが颯爽とやってきて、

「僕は山に仙人を見ました、

月明かりのもとで嶺に笛を吹き、

その音は淮水わいすい、泗水しすいに落ちて、

水の生き物も感動して唱和します」

ならば、さらに公に願うのは、

王者の徳を正して、古代の正しい音を後世にもつなぐようにしていただきたい。

【補足】[張方平ちやうほうへいは蘇軾にとって大恩人であることから、過剰とも思えるような贅辞を贈るのを常としている。蟬がギャンギャン、蛙がゲコゲコと戯画化されたのは改革の担い手たちで、これを読んだらさぞ不快であろう]

## ■【05-4-080】次韻王鞏顔復同泛舟

【解題】王鞏おうきやうと顔復がんふくが舟を浮かべて詠んだ詩に次韻した。顔復 [→作品番号 05-3-039] もことのとき徐州じょにいた。

### 【訳文】

顔復がんふくは瘦せに瘦せて、

衣の重さにも耐えられないよう……

おうきょう

王翬は肥えに肥えて、

帯の長さは十人分はある……

顔復の身の軽さはびよんびよんと山を走り、

王翬の身の重さは舟もたくたくに酔ったようになる。

妓女たちは雪のように舞って金の釵かんざしを落とすかたわらで、

二人は雲が湧くように談じ合って限りがない。

思うに、銭塘せんとう [杭州]こうにいたときの私がまさにそのようであった。

回顧すれば、我が四十二年間はおよそろくでもないものであったのだ。

## ■ 【05-4-081】次韻張十七九日贈子由

【解題】張方平ちょうほうへいの息子の張恕ちやうじよ [→作品番号 05-4-005] が九月九日の重陽ちやうようの節句に蘇轍そだくに贈った詩に次韻した。重陽ちやうようの当日に南京なんけい応天府おうてん ふでは兵士を並べて勅使を迎える儀式が行われ、もとの詩はそのことを詠んだものであった。王翬おうきょうがその作品を携えてきて蘇軾そしつに披露したのだろう。

## 【訳文】

城壁ほこに千の戈ほこ、万の槊ほこを城壁の下に並べる。

重陽ちやうようの節句であってもそこに酒樽しゆそんを持ってゆくわけにはいかない。

官の仕事は無む限げんにあって終わる日はない。

それでも菊きくの花はなには信まことがあって必ずこの日には咲いてくれる。

貴君が御父上ごふじょうのもとの悠然と暮らしているのは羨ましい限りで、

塵まみれの官員の印ひもの纓ひもにはまた繫ひもがれてしまうべきではない。

いまこの余裕のある日々の間は痛飲いたうんすべきである、

いずれは長い剣に頤を載せて国の大事を論じるようになるだろうから。

## ■ 【05-4-082】 登雲竜山題名

【解題】 王鞏等と雲竜山 [→作品番号 05-3-047] に登った記録。

### 【訳文】

げんぽう おうきょう うんりゅうざん ちやうてん き がん ふく おうきょう  
元豊元年九月十七日、張天驥とともに、蘇軾、顔復、王鞏が初めてこの山に登った。

## ■ 【05-4-083】 登雲竜山

【解題】 上の記録にある雲竜山に登ったときの詩。一句目にある黄茅岡は雲竜山の北側の斜面にある。

### 【訳文】

酔った勢いで黄茅岡を走って上る。

羊の群れのように、岡いっばいに岩がごろごろしている。

岡の高みにまできて酔いかまわり、

岩を牀にして、ふっ倒れる。

仰ぎ看れば、白い雲が天に茫茫と浮かんでいる。

我等が歌う声は秋風とともに遠く谷へと落ちてゆく。

道行く人は何事かと首を挙げてこちらを見て、

「知事様はすっかりに機嫌じゃわい」

と、手を拍って大いに笑うのである。

【補足】 [(1) 蘇軾は庶民に酔態を笑われると詩に詠むのを好んだ。実際に、路傍の

人々にもにこやかに接していたのは間違いないだろう。(2) 同じときに雲竜草堂<sup>うんりゅうそうどう</sup>

[張天驥<sup>ちやうてんき</sup>の住いであろう]に掛けられている石磬<sup>せきけい</sup>について詠んだ詩があるが、訳は割愛する]

## ■【05-4-084】次韻王鞏留別

【**解題**】<sup>おうきやう</sup>王鞏<sup>じよ</sup>は徐州に十日間ほど滞在して都へと帰っていった。そのときに王鞏が詠んだ詩に次韻した。

### 【訳文】

私は都を去ってすでに八年、  
いま私の知る人は誰がいるのか。  
あゝころ交流があった人々のなかに、  
いま肩で風を切って都を歩いている者は一人としていなかった。  
あゝころに私をただ知っていたくらい<sup>くらい</sup>の者ならいなくはないだろうけれど、  
好い地位の餌に釣られて、  
権勢の者に仕える役人として繋<sup>つな</sup>がれの身となり、  
故郷の山々をもはや顧みることはないのだらう。  
貴君だけは独り立ち、  
世間とはすこぶる異なるところを馳せている。  
千里の遠さも構うことなく、  
今回の珍しい旅を成し遂げた。  
昔<sup>とうちやう</sup>、唐朝のある王子が、餅売りの妻<sup>ピン</sup>の美貌にひかれ、  
夫に厚く酬<sup>むか</sup>いてその女を我がものとしたのだが、

女は元の貧乏な夫を想い続けたので、  
当時の人々の涙を誘ったのだった。  
貴君にはその妻の心がわかるであろう。

私はいけば餅売りの夫、  
牀を支える四柱の亀の飾りだけを伴として過ごしていた。

貴君はこれから帰って、誰とともに詩文を楽しむのだろうか。  
まずは張先生[張方平]にこの詩を見せていただきたい、  
大きく笑って頤に結んだ紐が切れてしまうであろう。

【補足】[王鞏は南京応天府を経由して舅である張方平に会ってから都に帰るのである]

## ■ 【05-4-085】 与鮮于子駿

【解題】鮮于侁 [字は子駿] [→作品番号 05-4-039] に宛てた手紙。友人の劉恕 [字は道原] [→作品番号 04-1-019、04-3-019] がこの9月に47歳で亡くなり、その弟の劉格 [字は道純] が帰郷する途中で徐州に立ち寄った。蘇軾は、この手紙で劉格の後押しをしてくれよう鮮于侁に頼んでいる。

### 【訳文】

古くからの友人の劉格君は、かつての友の劉恕君の弟であります。書物を多く読み、該博な知識を蓄え、文章は粲然と輝いて観るべきものがあります。節義を立てて強く主張し、公務に厳格でありますことは、司馬光君もよく御存知であります。ほかの人にはあまり知られていません。貴君に特にお願いしたいのは、劉君を門下に置かれて、もしも国の仕事を任せてもよい人物であると見ていただけて、御推薦いただけましたならまことに幸いであります。劉君はいまはこちらに立ち寄って、間もなく故郷の

みなみこうぐん

南康軍に帰ろうとしています。貴君が劉君のことを認めてくだされば、願いは十分に叶います。このようにするのは、私的な思いからではなく、才能が埋もれてしまうのを惜しむからであります。

## ■【05-4-086】次韻僧潜見贈

【**解題**】道潜〔字は参寥〕から贈られた詩に次韻して返した。道潜は、杭州時代に蘇軾が何度か足を運んだ於潜の僧で、そのときには会う機会がなかったようで、道潜が何かの旅の途中で徐州に立ち寄ったのが2人の最初の出会いだったようだ。これより極めて親密な間柄になる。

### 【訳文】

さんりょう

参寥師の胸中は水の鏡のように清く、

森羅万象がそこに映っては消え、一切の形を残さない。

独り古い寺に住んで菊を植え、詩を詠む人とともにその花を食らう。

人間世界にはどうして南と北の差異があるのか、

渡り鳥はどうして遠くに飛んで行くのか。

師はかつて門を閉ざし、穴の深みに禅榻を置いて座し、

その頭の上に歳月が高く積み上がって行った。

今年になってたまたまそこから出て、

智慧の剣をもって煩惱の賊に刑を加えようと、

僧衣を新たにして仏法を求める山水の旅に出た。

路傍の子どもたちは、髭を全く翦らずにいた師の姿に驚き、

お歴々は師に逢おうとしたが、師は民衆の内に隠れて捜し出せなかった。

あたかも夢の中の出来事のようにして、

わいすい

淮水のこちら側へと吹き寄せる秋風とともに、

殺風景な庁舎の庭に、たわわに実の成る橘柚きつゆの木[參寥師]が現れた。

ほうじょう

彭城のこの老知事は誰にも顧みられることなく、

古い友人は互いに天空の片隅に分かれ、暁に残る星を望むかのよう、

ただ棗なつめの林や桑の野だけが迎え入れてくれる。

師は千の山の遠さも憚らず、

荒野には家がないのをも厭わず、

二本の脚は飛ぶ猿のように軽やかに旅をする。

世には虚飾の言葉がごろごろしている、

その中にいくらかなりとも詩人の情といふものがあるのだろうか。

猿が鳴き鶴が叫ぶのは本来何かの意があつてのことではなく、

その下を心を傷める旅人が行くなど知りもしない。

夜の雨が石段に降り注ぐのは自ずから清らかなだけで、

人の心を悲しみに満たして泣かせようとするものではない。

私はもう詩などは廃して、山に入って筐はこいっぱいはこの仙草を採ろうかとも思う。

しかし、現実には公文書が堆積し、鞭打ちの刑罰を加えなければならない。

昼間は無理でも、せいぜい夜の間くらいは、

茶を煮て栗を焼いて過ごし、

師とともに傾く月を見つめつつ、

師の珠玉のような智慧で、私の濁った水のような心を照らしていただきたく思う。

## ■ 【05-4-087】 次韻潜師放魚

じょ

きよはくさい

さんりょう

【解題】徐州の虚白齋で參寥と話をしていると、ある人が蘇軾のために魚を持ってき

た。蘇軾は、この魚を水に放ってみてはと参寥に勧め、そのようにしてから参寥が詠んだ詩に、蘇軾が次韻した。

### 【訳文】

参寥さんりょう師しは、泗水しすいのほどりに立って魚を放ち、仏法を説く。

師ほつすの松子しょうしに天から無数の花が降ってくる。

師きよは、浄らかな行いをして西方浄土に行く種を植えよと教える。

夢のおおげげに、命の終わるときがきたと知ってからでは遅い。

悲しいかな、私は魚のように年中口をぱぱきさせているだけ、

ろくな目に遭わず、退くべき時期もつかめずにいる。

かつて、案外知恵のないお人しさんだと笑われた子産しさんどころではない、

本当にぼんくらな知事で、

尾が赤く変色したくびれた魚のような状態に民衆がなっているのに、

目が細か過ぎる網を取り除いてやることもしないで、

ただ額たまに油汗を流しているだけなのだ。

師たまはもとより衣の内に仏法という珠たまを有しているので、

泥の底に潜って真珠を探し求めなくてもよいのだ。

【補足】〔1〕 会って間もない参寥さんりょうとたちまち心の波長が合ったのだろう、すぐにこのような戯れの詩を詠むようになった。魚を放したので、魚に縁のあるいろいろなことが詠み込まれている。〔2〕 途中にある子産しさんの故事は次のようなこと。賢人としての誉れ高い大臣の子産にある人が魚を贈った。子産はその魚を水に放てと池の管理人に命じた。管理人は魚を煮て食べて、子産には池で悠々と泳いでいると報告した。子産はそれを聞いて管理人を褒めたので、管理人は、子産は知恵者だと聞いているが、そ



れほどではないと笑った。(3) 目の細かい網とは、改革に伴って作られた数々の新法をいうのだろう]

### ■【05-4-088】浣溪沙

【解題】かつて蘇州で会ったことにある閻丘孝終 [→作品番号 04-3-036] が徐州に立ち寄ったので、この詞を作って見送った。

#### 【訳文】

一別姑蘇已四年。[姑蘇[蘇州]でお別れしてすでに四年]

秋風南浦送歸船。[秋の風は、南の岸辺で歸舟(船)を見送ります]

画簾重見水中仙。[画のような風景のなかで、再び仙人のあなたと会ったのでした]

霜鬢不須催我老、[白髪よ、私をもう老いさせないでください]

杏花依旧駐君顔。[杏の花はあのとときと同じあなたのお顔に留まっています]

夜闌相對夢魂間。[夜が更け行き、あたかも夢の中にいるかのようです]

### ■【05-4-089】滕県時同年西園

【解題】徐州の管轄下の滕県 [→作品番号 05-4-050] には蘇軾と同時に科挙に合格した時君 [名は不明] がいた。その人の庭について詠んだ詩。

#### 【訳文】

人はみな成長の早い榆や柳を種えて、

十畝の陰がすくにも作られるのを待つのだが、

私は自分のちょっとした信念として松や柏はくを種くえることにしている。  
 村里を見ても、それぞれの家はせわしなく盛衰を繰り返し、  
 木を種くえても徳を種くえないのなら、飛び去る鳥のように雲散霧消してしまう。  
 時じ先生のことを私はいままで知らなかったのだが、  
 その用意するところのものは実に深く、  
 千金よりも義を重んじ、数人の友だけがいる。  
 先生の自らの手せいえんで西園を開き、千の峰から珍しい木を持ってきた。  
 霜にも雪にも耐える根を養い、  
 遙かな高みで鶯おおどりや鳳が吟じるようになるのを待っている。  
 池に水を引き、亀や魚が自由に浮き沈みしている。  
 桂の木が日夜成長し、歩む人の肩に白い花が乱れ落ちる。  
 繁るのは草や木だけではない、  
 先生の子孫もすでに林を成すまでになり、  
 両手に余るまでに大きくなった子がたくさんいて、  
 必ずや千尋の高さにまでもなるであらう。  
 昔、漆を種くえて長い歳月の後に富豪となった者がいた。  
 私はこの西園の詩を作って、  
 近隣の人々に先生を見習うよう勧めるものである。

【補足】[徳を種くえるということは先に『種しゅ徳とく亭ていの詩』で見ている [→作品番号 05-4-038]]

## ■ 【05-4-090】次韻王廷老和張十七九日見寄

【解題】張ちやうじよ恕が九月九日の重ちやうよう陽の節句に詠んだ詩 [→作品番号 05-4-081] に王おうはくよう伯●

あざな ていろ  
[字は廷老] [●は易+爻] が和したので、蘇軾がそれに次韻した。王廷老はこのころは不本意ながら官職から離れて南京応天府なんけいおうてん ふにいて、蘇轍としばしば詩の応酬をしていた。

## 【訳文】

### 其の一

霜に枯れた葉が空に飛び、雀が籠かごに遊ぶいま、  
筋力を使って楼閣を上り、  
菊の花に向かって酒を手にするのは、  
まだまだ老いに甘んじまいとするからで、  
鬚あざむを黒く染めて、自らを欺くらしい気である。  
貴君が事も無く過ごしているのは、  
酒好きであるからだとわかってはいる。  
多才な貴君であるから、世間は貴君を手放しはしないだろう。  
いまは呑気に杯を含んでいられる口だって、  
役人の冠を結ぶ紐で堅く括られてしまうであろう。

【補足】おうていろ [王廷老はいずれ要職に復帰するであろうと励ました詩で、第二首も同様の趣旨であるので訳は割愛する。王廷老に贈った詩がもう一首あるが、その訳も割愛する]

## ■ 【05-4-091】鹿鳴宴

【解題】科挙の地方試験に合格した人々を集めて開く祝宴を鹿鳴宴ろくめいえんといい、蘇軾じょは徐州で行われた試験に及第した人々を黄樓こうろうに集めて9月30日に盛大に祝宴を行った。

これはそのときの詩。

【訳文】

騎を連れて走り来る使者、  
 太鼓を叩いてそれを盛大に迎えると、  
 諸君等がみごとに科挙の最終試験に合格したとの報せなのである。  
 金の盃に菊を浮かべていまここに宴を催すのは、  
 春の合格を目指して都を行く諸君等を送るためである。  
 いつの日か諸君等が地方を巡視しにくるのを私は出迎えて、  
 白髪頭で再びここで詩を賦すことになるであろう。  
 そして、月夜に笛の音を聞きつつ、  
 昇平の時を楽しむのである。

【補足】〔(1) このときに人々が詠んだ詩を集めた詩集に蘇軾は序文を記している。それは優美な技巧的な文章でかなり訳しにくいので割愛する。(2) なおこの詩は出来が悪くて蘇軾の作ではないと疑う説もあるようだ〕

■ 【05-4-092】 次韻參寥師寄秦太虚三絶句、時秦君挙進士不得

【解題】 都で科挙の一次試験に挑んだ秦観<sup>しんかん</sup> [字は少游<sup>あざな</sup>、太虚<sup>しょうゆう</sup>] [→作品番号 05-4-048] は不合格となり、參寥<sup>さんりょう</sup> [→作品番号 05-4-086] が慰めの詩を寄せ、それに次韻した。參寥はかねてから秦観と親しくしていたようである。

【訳文】

其の一

秦君が文字を自由に使うことは世から超然と抜き出でいて、  
仙人が大空を凌ぎ上るありさまがある。

ところが、どうしたことか秋の試験に及第しなかったので、  
私は座禅を組んでそのわけを諸天の菩薩に尋ねようと思う。

【補足】〔(1) 菩薩が出てくるのは、参寥の詩に次韻したからだ。(2) 参寥と唱和した詩は、仏教に関わる概念や故事を引いて、常人の理解を超えて思考を飛躍させているので、訳者には甚だ解しがたいものが多い。第二首は割愛する〕

### 其の三

得ると喪うとは毛筋の先ほどの差さえもない、  
だから参寥師はそんなものには目を向けないし、  
意気揚々と挙げる声を聞いてみたいとも思わない。  
何はともあれ、  
参寥師とともに、  
唾を吐くように新しい詩を次々に作ってみたらよいだろう。

## ■ 【05-4-093】 答秦太虚

【解題】 科举に落第した秦觀に、蘇軾はこの手紙を書いている。

### 【訳文】

お別れしてから何度もお手紙をいたたいいながら、怠け癖と便宜がないことから、一度もお答えしておらず、慚愧の至りであります。参寥師がこちらに来て、貴君の様子をいろいろと楽しく聞いております。しかし、科举の一次試験の合格者の名簿に貴君の名がなかったのは、甚だ嘆かわしいことであり

ました。これは貴君の損益をいよりも、その筋の方々の不幸をいべきであります。

その後の日々はいかかしょうか。参寥師は真に立派な人で、貴君が親しくされたのもなるほどと思えます。いつまた貴君とお会いできるのかと思うと、紙に臨みつつ呆然としてしまいます。万万御自愛されますように。謹んでお手紙差し上げます。

参寥師に問うと何でも知ることができます。夜になって書いているので疲れが出て何を書いているのかわからなくなってきました。貴君の試験の答えは非常によいもので、いまの君子たちに書けるようなものではありません。私は遠からず交替となり、次の任地はまだわかりません。東南の一郡に行きたいと思っていて、もしそれが叶えば、きっとお会いできましよう。

【補足】[同じ所に秦観しんかんに宛てた手紙がほかにもあるので、その一部を読んでおこ  
う]

### 【訳文】

昨夜はたまたま客人と数杯の酒を飲み、その後で燈火りしぎの下で李之儀君しんかんと秦観君への手紙を書きました。そのまま眠ってしまい、今日になって二通の手紙を読み返してみると、李之儀君への手紙はまだしもどうにか整っていましたが、秦観君への手紙はひどく乱れていました。まことに昨夜の酔いかひどかだったのでしょう。本来なら別に書き改めるべきですが、また思いますに、秦観君はこれを読んで千里の彼方にあつて我が酔態しんかんを笑ってくれることでしょう。暇な折に一字でも寄せてくださるなら、はなはだ寂寥が慰められます。

【補足】[李之儀りしぎ あざな たんしゆく [字はお端叔] の名は作品番号 04-3-090 で見ている]

## ■ 【05-4094】 与舒教授、張山人、参寥師同遊戯馬台、書西軒壁、兼簡顔長道二首

【解題】この詩の題は、「舒教授じょ、張山人ちやうさんじん、参寥師さんりょうとともに戯馬台ぎばだいに遊び、この詩を西軒せいけんの壁がくに書き、兼ねて顔長道がんちやうどうに手紙で送った」。舒教授は徐州の学校の教授の舒煥じょかん

[→作品番号 05-4-051 など]、張山人は雲竜山の張天驥 [→作品番号 05-4-082 など]、  
參寥師は僧の道潜 [→作品番号 05-4-086]、戲馬台は徐州の町の南にある旧跡でその上  
に台頭寺があり [→作品番号 05-3-058]、西軒はその一角にあったのだろう、顔長道は  
顔復 [→作品番号 05-4-080 など] である。

## 【訳文】

### 其の一

長い回廊を歩いて、古い寺の隅々まで見てまわる。  
とりわけこの西軒は旅人の情を慰めてくれものがある。  
西側を断たれたような楚山は客人を迎えるありさまで立ち、  
汴水は南へと流れ来て町を巡ってその姿を客人に見せている。  
かつて作られた玉鉤斜の道はすでに草に埋もれ、  
かつて築かれた白鶴観もすてになく泉だけがある。  
この淡い遊びの何が学校の先生[舒煥のこと]のお気に召したのかというと、  
こうして坐して磬を叩く音が野原に響くの聞いたことなのであった。

### 其の二

竹の杖をつく者、芒の草鞋を履く者、  
順に並んで道を行き、  
下に官道を臨むと、  
そこにこの土地の人情を見てとることができる。  
寒い季節になっても、畑には豆や粟が実り、  
日の暮れに向かって、牛や羊が自ずと町へと帰ってゆく。

酒を買うのは、とにかく陶淵明先生<sup>とうえんめい</sup> [張山人<sup>ちやうさんじん</sup>のこと]を酔わせるため、  
 詩を詠んでいるのは、誰よりも清らかな言葉<sup>きやうぜん きんりやう</sup>を発する皎然<sup>きやうぜん</sup> [參寥<sup>さんりやう</sup>のこと]である。  
 さあ、路地奥<sup>ろちおく</sup>に住んでいる顔回先生<sup>がんかい</sup> [顔復<sup>がんふく</sup>のこと]を尋ねて、  
 この詩を継ぐ微妙な言葉を聴こうではないか。

【補足】 [(1) 途中に挟まれている「天寒菽粟猶棲畝、日暮牛羊自入城」<sup>てんさむ</sup> [天寒<sup>てんさむ</sup>くして  
 菽粟<sup>しゆくそく</sup>は猶<sup>な</sup>お畝<sup>うね</sup>にす<sup>す</sup>み、日暮<sup>ひぐ</sup>れて牛羊<sup>ぎゆうやう</sup>は自<sup>おの</sup>ずと城<sup>しろ</sup>に入る] は、平穏な田園風景を詠ん  
 だ淡白な味わいの美しい対句である。(2) 以上の二首のなかに友人四人を巧みに詠み  
 込んでいる]

## ■ 【05-4-095】 夜過舒堯文戯作

【解題】 夜に舒煥<sup>じょかん</sup> [字は堯文<sup>あざな</sup>] 教授<sup>ぎやうぶん</sup>を尋ねて戯れに詠んだ詩。

### 【訳文】

舒<sup>じょ</sup>先生の部屋に冴え切った月の光が差し込み、  
 両側<sup>ひさし</sup>の廡からは、弟子たちが本を読む声が賑やかに響いてくる。  
 門を押して先生の部屋に入り込むと、  
 書物が乱雑に置かれ、  
 蠟紙<sup>ろうがみ</sup>を貼った燈籠<sup>とうろう</sup>が雲母のように白く輝いている。  
 先生は骨の髄まで清らかな人であるから、  
 横になって眠るのはごくわずかで、  
 長い夜も、坐って時を告げる太鼓の音を数えている。  
 石の硯に氷が張りそうな寒さであっても、  
 銅の瓶の水を使い切って雨の滴りが残るだけとなる。



先生がそそくさと出てこられて挨拶しようとするので、  
私は襟を正してより丁寧に応じる。

明日の朝は私はある友を訪ねる気でののだが、  
その人は先生の方を重んじたと羨むことだろう。

【補足】[終わりの部分は二つの故事を用いて、何かジョークを言っているようなのだが、訳者はそのココロを読み取ることができないので、仮にこのようにしておく]

### ■【05-4-096】次顔長道韻送傳倅

【解題】副知事の傳楊ふせき あざな しび [字は子美] [→作品番号 05-4-024] が他の地に移ることになったので顔復がんふく あざな ちょうどう [字は長道] が送別の詩を詠み、蘇軾が次韻した。

#### 【訳文】

貴君とは、菊の花が開き、菊の花が落ちるのを二度見た。

貴君とは、南の山々の寺を遍く巡ってそこに名を記した。

私は公務において貴君に頼っていただけでなく、

あたかも兄弟のように親しくさせてもらった。

一年前には、雲のように押し寄せてくる沫水べんすい しすい、泗水の波に浮かび、

貴君も私も衣服がすっかり泥だらけになってしまった。

別れの酒にとことん酔おうではないか、

いまは穏やかに流れる川の水音に耳を傾けながら。

### ■【05-4-097】百歩洪二首并叙

【解題】徐州の名所、百歩洪ひゃくほこう [→作品番号 05-3-033] で詠んだ詩。この詩には序文が

付いている。2首のうち1首を訳す。

## 【訳文】

叙

王鞏が彭城[徐州]の私のもとに訪ね来て、ある日のこと、王鞏は顔復とともに小さな舟に棹さし、盼、英、卿の三人の妓女を携えて泗水に遊んだ。北に聖女山に上り、南に百歩洪に下った。笛を吹き、酒を飲み、月に乗じて帰った。私は事情があって行くことができなかったが、その夜は、私は黄樓の上に立って、舟の上の人と互いに見て笑い合ったのだ。このような月の光のもとの楽しみは李白が死んで三百余年の間、ほとんどなかったものではないかと思った。王鞏が彭城を去って一カ月を超えてから、私は参寥師とともに百歩洪に舟を放ち、先の遊びの跡を尋ねて追懐した。そして長嘆息してこの二首の詩を作り、一つを参寥に贈り、一つを王鞏に寄せ、かつ顔復と舒煥に示し、その二人を迎えて詩に和してもらおうと思う。

【補足】 [王鞏と顔復が舟を浮かべて遊んだことは作品番号 05-4-080 で見ている]

其の一

百歩洪の長い流れに、

北斗星が天から水を注ぎ落としたように波が跳ねる。

舟は、機織りの梭を投じる速さで南に下る。

船頭が、

「朧か雁が飛び立ちました」

と、叫ぶ間に、

無数の岩のつるつるの面が、一本の線のようになって過ぎ去る、

鷹に追われて走る兎か、千丈の堤を走り下る駿馬か、

切れた絃が飛び、矢が手を離れ、飛電が一寸の隙間をよぎり、  
とにかくすばやく四方の山が目の中を転がり、  
風が耳を掠め、  
ついには流れの中に千の渦だけを見る。  
危うい中に楽しみを得るのは一つの快感であるけれど、  
黄河の神が己の大きさを誇ったのにも似て、  
より広大な世界から見れば、それほどたいしたことではないのであろう。  
我が生は常に変化して日夜に過ぎ逝き、  
世情の紛紛とした争奪は酔った夢の中のこと、  
銅の駱駝もいずれは草の下に埋もれ、  
千劫の歲月とても俯仰の間に失われ、  
万事はこの水がうねり流れるのを見る間のことなのであろう。  
岸辺の青い岩の上には、釣棹を立てた穴が蜂の巣のように開いている。  
昔から無数の釣り人がそこに座し、  
いずれの人の心も定住するところを得なかったのだろうか。  
造物者は速やかに時を過ぎ去るものとしているが、  
しかし、私は必ずしもそれに流されるだけのものではないのだらう。  
かくて、舟を回らし、馬に上っておのおの帰り去る。  
これ以上がやがやと多言を用いたならば、  
参寥師に叱られてしまうだらう。

【補足】〔(1) 前半の軽快な急流描写だけでも詩として成り立ち得るのだらうが、その後には思索を巡らさないと気がすまないのが宋代の詩、特に蘇軾の詩、の特徴である。〕(2) 第二首は訳者の理解が及ばないために割愛する。また参寥と一緒に黄耳蕈を

見て詠んだ詩があるが、それも同じ理由で割愛する]

## ■【05-4-098】送参寥師

【解題】参寥さんりょうが徐州じょを離れて南に帰るのを見送った詩。

### 【訳文】

上人は「苦」「空」を学び得て、

世の人が有する百の思念などは灰のように冷え切っている、

目の前で剣を振り下げられても動じないし、

焦げた稲からは穎のぎが出ないように雑念なども生じない——はずである。

それなのに、どういわけて、

我等のような者と詩文の華美を争ったりするのだろう。

上人の新しい詩は玉の雪のようにきらびやかで、

語はいずれも鋭い警句ばかりである。

唐の韓愈とう かん いくは、ある上人の草書を評して、

万事を斥けることなく、

憂愁を抱くときはやはり書も平静ではなく、

筆の騁はすところに全てを寓まかせているといった。

しかしながら、

仏門の人は、己の内みを視るなら、

井戸の底の水のよう、淡く静まり返って、猛々しく波立つことはないという。

よく考えてみると、そのどちらでもないのたろう。

真に巧みであるものは、

瞬時に生じて瞬時に消えたりするようなものではない。

だから、「空」にしてかつ「静」であっても、

絶妙な詩語が生まれ出てくるのだ。

「空」であるなら「万境」を納め、「静」であるなら「群動」を了させることができる。

俗世を闊して人間世界の中で走っていても、

仏法の高い雲の嶺の上に臥しているのと同じである。

鹹いも酸っぱいも衆人の好みの中に雑じてこそ、

詩語に永遠の「至味」が含まれる。

つまり、詩と仏法とは妨げ合つたのではないのだ。

このようなことが当たっているのかどうか、

さらに教を請うたのである。

【補足】 [この訳はそこそこ読めるように日本語にしてみたまでで、仏教用語を多用して展開している詩論が果たして何をいつているのか、参寥でも蘇軾でもない私にはさっぱりわからない]

## ■ 【05-4-099】 与参寥

【解題】 参寥が去ってから後に出した手紙。

### 【訳文】

お別れしてからの思いは言葉にしようとしてもできません。逍遙堂に行つたたびいつも悵然としてしまいます。……三首の詩はいずれも清妙で、読んで手から離すことができません。一篇に和して御返事といたします。御所望の真贄はまだできていません。お使いの方が長くは留まっていられないというので、今回は残念なから間に合いませんでした。秦観君とともに温泉に遊ばれたとのこと、まことに結構であ

ります。私は来春には江浙こうせつのあたりに赴任することを願いますので、そちらに行くときにはまたお手紙をお出します。……

【補足】〔(1) 一篇に和したとあるのは上に詩のこと。(2) 参寥さんりょうが温泉に遊んだことについては次の文章に詳しく記されている〕

## ■ 【05-4-100】 書游湯泉詩後

【解説】秦観しんかんと孫覿そんがくと参寥さんりょうの三人が惠済泉けいさいせんという温泉に遊んで詠んだ詩を見て、蘇軾はこの後書きを記した。

### 【訳文】

私が聞いている温泉は七カ所である。そのうちの第五泉は今回、三君が遊んだところである。

第一泉から第四泉は、秦観君しんかんが賦したこの詩にある匡廬ふ、汝水きょうる、尉氏じょすい、驪山うっしの温泉である。

第六泉と第七泉は私が鳳翔ほうしょうの駱谷らくこくと渝州ゆの陳氏ちんの山居で見たものである。

いずれの温泉も奥深い山の中にあつて、山寺の僧や土地の人が浴びたり、鹿や猿が飲んだりするところで、驪山の温泉だけは交通の便がよいところにあることから、立派な堂宇が建てられ、独り名所として知られていた。ところが、唐の玄宗皇帝とう げん そうの政治が乱れたときに、楊国忠ようこくちゆうや李林甫りりんほ、安祿山あんろくざんによって驪山の温泉は汚されてしまい、弁舌の士が筆を使って温泉が亡国の原因となったとして唾罵し、ひどく辱められてしまった。

第五泉が惠済泉で、三君がこれほどまでに詠嘆したところである。僻遠の地にあることによって、有力者によって辱められることなく、隠逸こうじんの高人によって見いだされ、世俗とは趣を異にする者の楽しむところとなったのであろうか。あるいは惠済泉が驪山の温泉のようになってしまふのを嫌ったのだろうか。つまりは、温泉は奥深い僻遠の地にあるのを嘆いたりしないのである。

もとより温泉は榮辱とは無関係で、ただ人が自分の意をもって推し量るだけである。いわゆる道具は使

われるところを選ばないという戒めと同じなのであろう。

げんぼう

元豊元年十月五日。

【補足】〔(1) 驪山<sup>りざん</sup>の温泉<sup>げんそう</sup>は玄宗皇帝<sup>ようきひ</sup>が楊貴妃<sup>ようきひ</sup>を連れて遊んだことで知られ、そのことを詠んだ詩を作品番号 02-4-024 で見ている。(2) この短文はひどく理屈っぽいけれども、科挙<sup>しんかん</sup>に落第した秦觀<sup>しんかん</sup>を励ます意図で書かれたものであるのだらう〕

## ■ 【05-4-101】 日喩

【解題】 呉瑄<sup>ごかん あざな げんりつ</sup> [字は彦律] に贈った文章。呉瑄の名は作品番号 05-3-042 以下何度か見ている、徐州<sup>じょ</sup>で酒税に関する仕事に就いていたのだが、それは下級官吏としてであったようで、徐州での科挙の一次試験に合格して、都での二次試験を受けるために上京することになった。この文章の主題となっている「道<sup>みち</sup>」は中国の思想史において極めて重要かつわかりにくい概念である。「道」とは何か、『中国思想文化事典』（溝口雄三・丸山松幸・池田知久編、2001年）には、「人が通行する道というのが原義だが」「宇宙・自然・万物の普遍的規律や根源的真理として、また社会・政治・道徳の当為や規範として、高い位置づけが与えられた」と記されている。この説明からその位置づけはわかるとしても、「道」に達すること、つまり理解して実践することはできない。「道」に達するにはどうしたらよいか、蘇軾はそれをこの文章で書いている。

### 【訳文】

一つの譬え話がある。

生まれながらに目の見えない人がいて、太陽がどのようなものであるのかわからなかった。そこで、目の見える人に尋ねた。

ある人は、

「太陽の格好は銅のたらいのようだ」

と教えた。

そこで、たらいを叩いてみると音がした。後に鐘の音を聞いて、それが太陽であろうかと思った。

別のある人は、

「太陽の光は蠟燭のようだ」

と教えた。

そこで蠟燭を触ってみて、その形状を知った。後に、笛に触れて、それが太陽であろうかと思った。

太陽と鐘や笛は遠くかけ離れたものであるが、目の見えない人はその違いがわからなかった。見たことのないものを、人に尋ねて答えを求めたのでこのようなことになったのである。

「道」というものは、太陽よりもずっと見えにくい。そして、人がまだ道に達していないときは、目が見えないのと異なるものではない。達した者が、巧みな譬えを用いて善く導いたとしても、それはたらいや蠟燭よりもましということにはならない。たらいから鐘に進み、蠟燭から笛に進み、鐘やら笛やら堂々巡りをしていつまでたっても終わらない。

世間の「道」についていう者は、ある者は見えたと思ったところから「道」を説明し、ある者は見えてもいないのに適当に憶測する。

こうした過ちは、いずれも「道」についての答えを人に求めることから生じたのである。

ならば、「道」はどうあっても答えを求められないものなのだろうか。

私が考えるに、道は「到す」ことはできても、「求める」ことはできないものなのだ。

それでは「到す」とはどういうことなのか。

孫子はこのようなことをいっている。

「上手に戦う者は、人を『到し』て、人に『到され』ない」

孔子はこのようなことをいっている。

「職人は作業場において、自分の仕事を成し遂げる。君子は学問をして、道を『到す』」



この二つから「到<sup>いた</sup>す」の意味を考えると、人に「求める」のではなく、自ずとやってくるのが「到<sup>いた</sup>す」といことなのである。だから、道は「到<sup>いた</sup>してこそ達するものなのである。

もう一つの譬え話がある。

南方には潜水の得意な人がたくさんいる。南方の人は毎日水辺で生活をし、七歳になると水を歩いて渡れるようになり、十歳になると泳げるようになり、十五歳になると上手に潜水ができるようになる。潜水はたやすくできることではない。きっと水の「道」を会得した者が潜れるようになるのたろう。毎日水と一緒にいるから十五歳で「道」を会得するのである。

生まれてから水に馴染みのない者は、立派な大人になっても、舟を見ただけでも怖がるという。

水に縁の薄い北方の勇者が、南方の潜れる人に潜り方のコツを求めたという話がある。北方の勇者は答えを聞いて、それを川で試してみたところ、皆が溺れてしまった。

つまり、日々に学ぶことをしないで、「道」についての答えを人に求めよとするのは、北方の人が潜水を求めると同じなのである。

さて、以前は科挙において詩賦を課してしかるべき士<sup>ひと</sup>を採用していた。士は音律も含めて様々なことを学び、安易に「道」を知ろうと志すことはなかった。いまは試験で經典について問い、それによって士を採用しているので、士は「道」について規範的な答えを知ることを求め、いろいろなことを学ぶ努力をしなくなった。

渤海<sup>ぼっかい</sup>の吳瑄君<sup>ごかん</sup>は学ぶことを志す者である。そして科挙を受験するために上京しようとしている。そこで私はこの「日の喩え」<sup>たと</sup>の文章を作って、吳瑄君に告げるものである。

【補足】〔(1) 王安石が科挙と学校の大改革を志向し、その手始めとして試験で詩賦を課すことをやめようとしたときに、蘇軾が反対意見を皇帝に提出したことは作品番号 03-2-006 で見ている。經典の理解度を一つの尺度で正確に測ろうとしたら、その前提として、經典の正しい解釈が一つに定まっていなければならないだろう。正しい解釈が提示されれば、受験生は当然のことながらそれを丸暗記して試験に臨むようにな

る。実際にそのように事が進み、いわば潜り方のコツを教わっただけの人間が官僚として採用されるようになり、道に達することが疎かになってしまったと、蘇軾は憂慮していた。吳瑄は蘇軾の考え方に共鳴する人物であったので、この文章を書いて送った。(2)「君子は学問をして、道を『到す』」というのは孔子の言葉でなく、弟子の子夏の言葉である。広く様々なことを地道に学び続けることで、自ずと道に達する[人として大成する]という考え方は『塩官の大悲閣の記』[→作品番号 05-1-081]や『堯禪先生の詩集の叙』[→作品番号 05-1-082]とも共通する。たくさんの知識を蓄え続けるとどこかで飛躍がおこるとというのは、現代のAIでも見られる現象である]

## ■【05-4-102】十月十五日観月黄楼、席上次韻

【解題】十月十五日に黄楼で月を観て、誰かが詠んだ詩に次韻した。

### 【訳文】

中秋の空は期待していた通り、  
 燈火をつけて座の隅を照らす必要がないほどに明るい。  
 山の下に絹のような白い雲が横たわり、  
 水の中から明るい月がふわりと浮かびあがった。  
 舟を三峡へと進めて故郷に帰る計画はまだ立たないけれど、  
 退隠して洞庭湖に舟を浮かべて見上げると、月との約束はすでにしている。  
 この好風景に尋ねよう、  
 来年はこの知事のことを思い出してくれるのだろうか。

【補足】[即興の詩で、手慣れた発想の目新しさのない作品である。対話型AIはおそらくこのような漢詩を蘇軾並みの素早さで作れるようになるのだろう]

## ■ 【05-4-103】 与文与可

【解題】親友の文同〔字は与可〕に宛てた手紙。たまたま散逸を免れたのが多かったのか、この年に文同に与えた手紙が6通残っている。そのうちの3通を選んで訳し、これが3通目。

### 【訳文】

……秋の科挙の結果をみると、八郎君〔文同の長男〕は合格したとのことで、まことに喜びに堪えませ  
ん。一方で、十一郎君〔蘇轍の婿となった文瓘〕はたまたまうまくいかなかったようで、はなはだ残念  
い思います。千里の道を行くのに、一度つまずいたからといって終わるものではありません、どうか思い  
患いませぬように。

……近ごろ、道潜という名の僧と知り合いになりました。字は参寥で、杭州の人です。わざわざ来てく  
れて会ったところ、詩句は清絶で、林逋〔宋代初期の著名な詩人〕とほぼ並びます。しかも道義に通  
じていて、説くのを聴いて人は肅然となります。ここに書き添えておきますので、御笑覧ください。……十  
月十六日

## ■ 【05-4-104】 徐州上皇帝書

【解題】徐州知事になって1年半、徐州においていま何が最重要課題であるかを記して  
皇帝に提出した。何度か見てきたように、各地で盗賊が出没していたので、その中  
から強大な盗賊集団が現れ、ついには内乱状態にまで陥ってしまうようになることを  
蘇軾は強く危惧していた。為政者側から見れば社会秩序を乱す盗賊集団ではあつて  
も、民衆側から見れば正義のために決起した「起義集団」ともなりうる。歴代の王朝  
は、おおむね盗賊集団ないし起義集団が全国的に同時に多発することで崩壊した。宋

王朝の場合は、蘇軾が死んでからの後のことではあるが、内乱状態に陥りかけると同時に、外敵が攻め込んでくるという最悪の事態となって、北宋は滅んだのだった。蘇軾はこの文章で、治安維持のためにいま打つべき手を提案している。それはあくまでも徐州知事の立場から言い得る範囲のことで、国家の根本を問うものではない。州知事としてはおそらくこれでもかなり異例の提言であったのだろう。なお、訳者は当時の政治の仕組みについて疎いので、訳者の理解できる範囲での大まかな抄訳である。

### 【訳文】

げんぼう 元豊元年十月、しょうしよし 尚書祠部員外郎直史館権知徐州軍州事蘇軾、ぶ いんがいろうちよくし かんげん ち じょしゅうぐんしゅうじ 謹んで死を覚悟して再拜して皇帝陛下に上書いたします。

わたし 臣は凡庸な人間でありながら官員の一人として二つの州の知事にしていただき、かなめ どちらも東方の要の地であります。臣がわたし ひそ 竊かに思いますに、法令を守り、公文書进行处理し、租税を期限内に納めるだけでは、任命していただいたことに万分の一も報いたことにはならないでしょう。伏して思いますに、東方における要務として陛下が承知されていてしかるべきことが一つ二つございしますので、ここに記してお耳に入れておく次第であります。

わたし 臣は前任地の密州において、みつ 河北と中原の離合は古より常に国家の存亡と関係し、か ぼく ちゅうげん また京東は河北への物資の供給地となっていることから、唇が失われれば齒が寒いので、いしよ 譬えの通り、京東の民がもしも盗賊に変じたならばその患いは最も激しいことになってしまいますので、盗賊対策を立てることが肝要であると申し上げました。わたし 臣は徐州知事に移りまして、山川の形勢を見て、風俗の状況を考察し、また書物に照らし合わせて考え、いしよ しかる後に知りましたのは、徐州は南北を結ぶ要の地であって、京東の諸郡の安危が依拠するところであるということであります。その昔、こうう かんちゅう 項羽は関中に攻め入って秦の都であった咸陽を焼き払うと、かんよう 東に帰って彭城[徐州]に都を置きました。戦略に優れた項羽が咸陽を捨てて彭城を取ったのは、ほうじょう 彭城の堅固な地勢を以として、天下を統治する志を諸侯に思い知らせるのに

適した場所であると判断したからです。臣がその地を觀ますに、三面を山に囲まれ、西側だけが數百里にわたって平坦で、梁、宋の地に通じていますので、項羽が手勢の楚の兵士を使って敵から守り、また物資を周囲から集めるのは、あたかも高い屋根の上から水を流すかのように容易なのであります。また土地は穀物を栽培するのによく、一度の豊作で數年の蓄えが得られます。徐州の城は三面を水に囲まれ、樓閣の下にある洙水、泗水は堀として守りによく、南側だけは車馬の通じるところとなっていますが、そこには戲馬台があって、高さは十仞、広さは百歩で、戦争のときにはその上に千人を集め、武器を備えておいたら、城と表裏の関係で互いに支え合うのでありますから、城中に三年分の食糧を蓄えておいたら、十万人で攻めても取ることはできませんでしょう。さらに、徐州の民は体格がよく、胆力は絶人で、喧嘩っ早く、少しでも意に合わないところがあれば、勇躍して跋扈する心があります。漢の高祖は沛の人であり、項羽は宿遷の人であり、劉裕は彭城の人であり、朱全忠は陽山の人であって、いずれもが徐州から數百里の間から出た人々であります。この地の人々はそれを自慢として、凶桀の気がいまでも民衆の風俗となっています。かつて魏の太武帝は三十万の大軍で彭城を攻めましたが下すことができませんでした。唐の時代に王智興は兵卒の間からのし上がっただけの凡庸な人物でしたが、徐州において勝手気ままなことをして、朝廷は討伐できませんでした。地形が優れ、人が勇悍であったからです。

徐州の東北七十里余りのところに利国監[監は県と同レベルの地方行政の単位]があり、古くから製鉄の官署が置かれ、商人が集まり、その地の民は富んでおります。いま三十六の製鉄所があり、いずれの冶戸も巨万の富を蓄える大家で、常に盜賊に狙われています。しかしそこを守る兵士はわずかで、子供の戯れのように弱いものです。臣は夜にこのことを思つと、心中に寒さを覚えます。もし十人余りの死をも顧みない乱暴な盜賊が白昼に町に突入したならば、護衛の兵士は町を棄てて逃げただけであります。その地はよい鉄を産し、その民は鉄を鍛える技に優れ、冶戸の財産を放出して無頼の徒を集めたなら、たちまち數千人の軍勢ができあがるのであります。そこから流れに乗って朝に発てば昼前には徐州に至り、そのときに、残念ながら徐州は守り切れないでしょう。賊の中に不幸にして呂布

や劉備りゅうびのような人より優れた技量の者がいて、徐州を得てより志を逞たくましくしたならば、京東の安危はもはやどうなるのかわからないであります。……[利国監および徐州の治安を守るための策を述べる]……このようにすれば数年のうちには守りが堅固となり、利国監を狙おうとする賊はいなくなり、徐州は無事で、徐州が無事であれば、京東にはもはや虞おそれはないのであります。

また、沂州さんは山や谷が複雑に入り組み、捕縛を逃れた盗賊が逃げ込み、そこから出てきては徐州の境界へと入り込んできています。もし陛下わたくしが臣の提言を採用して下さって、臣が不肖の人物ではないと見て下さいましたなら、徐州知事としての任期をさらに三年延ばして、沂州の軍事をも兼任させてくださるようお願いするものであります。必ずや成果を挙げてみせるであります。

京東の盗賊の多くは軍から逃げ出した者であります。軍から逃げて盗賊になる者が多く続くと、民衆は軍を恐れるまでになっています。どうしてそのようなことになるのかというと、兵士の技が優れていて、また法規が厳重だからであります。技が優れているから戦えば敵いませんし、法規が厳重なので逃亡兵はいずれにしても死は免れないのだからと何も恐れることなく戦います。陛下が将官を置かれて、軍政を引き締めてから、兵士は精鋭になった一方で、逃亡する兵士がいなくならないのはどうしてであるのか、臣はその理由を考えました。近年は、罪人を各地の軍に兵士として配属するとき、役人を使って送り出すのではなく、禁軍きんぐん[中央に属する軍隊]の兵士を使って送り出しています。禁軍の兵士は送り出すよう命令を受けてすぐに出発して、往復で十日以上はかかります。その間の旅費は金を借りなければまかなうことができません。一般の人々は法規を畏れて貸してはくれませんし、貸したとしても返ってくるとは限らないので、つまるところ上司である将校や役人から利息を付けて借りて、帰還したときに与えられる報酬から返すことになります。上官と部下がこのような関係であると、軍政は弛緩し、博打をしたり飲酒をしたり好き放題となり、果ては錢に困って逃亡して盗賊となってしまうのです。臣は徐州わたくしにきてから、金をやりくりして別に儲えて、兵士を送る者の遠近に応じて、三カ月を期限として、利息を取らずに貸すようにしました。将校や役人で利息を得ていた者はその方法を嫌いましたが、軍政は引き締め、飲酒や博打を禁じ、一年にならいうちに兵士は暮らしに余裕が生じて、技芸に練熟し、諸郡の

なかでも第一とされるようになったのでした。このことは、陛下の勅使が視察にきて、具体的に御覧になつた通りです。臣が願いますのは、この方法が諸郡にも広められることで、軍政が修修まって逃亡する者が少なくなるなら、盗賊をなくす一端となるてあります。

……[漢の時代の政策を挙げて検討する]……この施策をいまに当てはめて考えますと、地方知事の権限はもとより制限されるべきものなのであります。いまは、上からは監司が知事に過失がないかを見て、下からは役人たちが知事の長短をあげつらい、朝廷からは規定の任期が満たないうちに交替の命令が下されます。盗賊を捕らえるために人を使おうとしても、規定外の費用はわずか一銭でも出すことができません。凶悪な盗賊は情に重く法を軽んじる者たちで、知事が盗賊を配流にしたり死罪にしたりしようとしても、法は冤罪を招いた知事に対して厳しいために、盗賊が反復して上告して罪状がなかなか定まりません。そのようでありますから、役人は死力を尽くすことはなく、盗賊はいつもまで破れないのです。盗賊がはびこっている一因は、陛下のもとにある知事の権限がはなはだ軽いことにあるといえるのではないのでしょうか。臣が願いますのは、陛下が少しばかり知事の権限を重くして、大綱を守ることに責任を負わせ、小さな過ちは緩くみることであります。京東の盗賊が多い青州、鄆州から徐州、沂州、齊州、曹州などには慎重に知事を選び、盗賊を捕らえるためであれば法外の処置も許すようにし、特に盗賊を捕らえるための部下を養う費用を賜り、……それらが盗賊を治めるための一つの術となりましょう。

しかし、これらは実は小さな事柄です。大きな事柄は臣ごときが申し上げるようなことではありません。しかし、黙っているのは、陛下の英聖によって特に用いられている者としてはよろしくなく、為すべきことを尽くさないのは忠臣の義にもとるものであります。それ故に死を覚悟してさらに申し上げます。士を採用するとき、以前は詩賦をもって取り、いま陛下は経術をもって用いています。詩賦と経術と名は同じではありませんが、しかし文詞をもって採否を判定する点は同じです。文詞によって考査して取るところの士は、呉、楚、閩、蜀の人が多数を占めています。京東、京西、河北、河東、陝西の五路の地は古から豪傑の出るところで、沈思して勇敢に事に当たるにしろい者が多くいて、一方で、声律を操り、経義

を読むことでは、呉、楚、閩、蜀の士が優れています。もしも後者の点で争うなら、五路の人々はほとんど官に仕えることができません。それでその地から出た官員は常にわずかしかないのであります。忠孝礼義の士は、たとえ出世しなくても君子たることを失いません。もし徳が足りなくて才能ばかりが余っているような人物は、出世できないときには何をするかわかったものではありません。ですから、陛下に特に願うのは、五路の士には別に官に仕える道をどうか開いていただきたいのです。……[実際にどのように採用するのかを提案する]……

昔、晋の武帝が呉を平定した後に、天下に軍役を止めるように詔を出し、州郡の武備をことごとく取り去ろうとしました。そのときに山濤だけが反対しました。皇帝は山濤に会ってその論を聞き、「天下の名言である」といったのですが、用いることはできませんでした。その後、永寧年間からは盗賊があちこちで蜂起し、どの地も備えがなかったために制圧することができなくて、山濤が論じた通りになったのでした。臣はこの平和なときにはしばしば盗賊について申し上げ、憂いがか過ぎて、対策もひどく過剰のようにみえることでありましょう。政策を議論する者たちに笑われてしまうでしょうが、陛下におかれてはどうか緩やかに見てくださいますように。天下が無事であるならば臣が笑われるのは少しも構いません。重大事に至ってから図ったのではすでに遅いのです。……

【補足】〔(1) 事前の備えが重要であると、蘇軾は一貫して主張している。(2) 中ほどで戯馬台に関連して記していることについては作品番号 05-4-053 でも触れていた〕

## ■ 【05-4-105】 答王定民

【解題】王定民〔字は佐才〕が手紙や詩を送ってきたので、それに答えた。王定民は蘇轍や顔復と若干の交流があった人物。

### 【訳文】

封を開くと奕奕として目の覚めるような貴君の草書が出てきて、



その終わりには力強い語を並べた詩があった。

貴君の書は、草書の祖とされる張旭<sup>ちやうきょく</sup>を師として、

貴君の詩は、韋応物<sup>い おうぶつ</sup>の五言詩にそっくりである。

貴君の書を台頭寺<sup>たいとうじ</sup>に留めおこう、

その評判が天子の耳にも届き、

貴君を召す隊列の行進が遠くからも聞こえるようになるであろう。

鼠鬚<sup>そしゅ</sup>[上等な筆]と蘭紙<sup>らんし</sup>[上等な紙]を差し上げるので、

黄楼<sup>こうろう</sup>の詩を詠んで書いてくれたまえ。

## ■ 【05-4-106】 放鶴亭記

【解題】 これまでに何度も登場した張天驥<sup>ちやうてん き</sup> [字は聖塗<sup>あざな せい と</sup>] [→作品番号 05-4-034 など] が新しい住まいに移り、その近くの高所に亭<sup>あずまや</sup>を作った。蘇軾はその亭を「放鶴亭<sup>ほうかくてい</sup>」と名付け記念の文章を書いた。

### 【訳文】

熙寧<sup>きねい</sup>十年の秋、彭城<sup>ほうじやう</sup>県は洪水に襲われ、雲竜山人<sup>うんりゅうさんじん</sup>こと張君<sup>ちやう</sup>の草堂にも水が及び、扉の半ばほどまで水につかった。水が引いた後、翌年の春、もとの住まいよりも東、東山の麓<sup>とうざん</sup>に居を移した。そこから高みに昇ると、とりわけ優れた眺望が得られたので、雲竜山人は上に亭<sup>あずまや</sup>を作った。

彭城県の四方は岡と嶺で、大きなこんもりとした環<sup>わ</sup>に囲まれているかのようである。ただ西のところ、十分の二ほどの欠けた箇所がある。雲竜山人の亭はちょうどその欠けたところに当たる。

亭から見ると、春と夏の境目のころは草や木が天の際にまで伸び上がり、秋と冬の月や雪のときには千里にわたって一つの色に染まり、風雨の折りには暗くなったり明るくなったり、一瞬のうちに風景が百変する。

雲竜山人は二羽の鶴を飼い、よく馴れていてよく飛ぶ。朝に西山の欠けたところに向かって放つと、鶴は行きたいところへと自由に飛び、田に立ったかと思うと雲の上へと翔け上がる。夕暮れになると東山に向かって帰ってくる。

それでこの亭を「放鶴亭」を名付けた。

知事の蘇軾は時どき賓客や同僚の役人を連れて雲竜山人に会いに来て、この放鶴亭で酒を飲んで楽しむ。

知事は雲竜山人に会釈して、このようにいう。

「先生は隠れ住むことの楽しみをよくご存じてありますから、いまさら言うまでもないことではあるのですが、天子となつての楽しみも、これには替えられないものであろうかと思ひます。『易経』に『鶴が岩蔭で鳴くと、その子も声を合わせる』とあります。また『詩経』には『鶴は奥深い自然の中で鳴き、その声は天に聞こえる』とあります。鶴が「清遠開放」[清潔で俗を離れ、静謐で自由]で、塵埃の外に超然と脱けていることから、このように歌われたのであります。『易経』と『詩経』は鶴を賢人、君子、隠徳の士になぞらえています。ですから、鶴と狎れ親しみ、鶴と遊ぶのは、益するところがあつて、損なうところがないようであるのですが、昔、衛国の懿公は鶴をあまりにも可愛がりすぎたために、家臣に背を向けられて国を亡ぼしてしまいました。その一方で周公は『酒誥』を作つて酒を慎むよう訓戒し、衛国の武公は『抑戒』を作つて自ら酒を慎みました。「荒惑敗乱」[荒さみ惑い、人倫を敗り乱す]であることで酒以上にひどいものはないと考へたからでした。しかし、劉伶や阮籍は酒の内に隠れることで自身の眞実を全し、後世にまでその名が伝えられました。天子は、鶴のように「清遠開放」のもので自分の思うままに好むことができなくて、好み過ぎて国を亡ぼしてしまうことがあります。一方で、世を逃れて山林に住まう者は、酒のように「荒惑敗乱」のものであつても、害がなくてすむことがあります。まして、隠れ住む者が鶴を好むのです、その楽しみはいくら尽くてもよろしいのです。このように考へますと、隠れ住むことの楽しみは天子の楽しみとはとても同日に語れるものではありません」

雲竜山人が楽しげに笑つて言うには、

「そうでございまいしょうかな」

そこで知事ほうかくは「放鶴」しょうかく「招鶴」の歌を作った。

鶴飛去兮、[鶴は飛んで行くぞよ、兮]

西山之缺。せいざん[西山の欠けたところから]

高翔而下覧兮、[高く翔んで、下を覧るぞよ、兮]

扱所適。ゆ [適く所を扱ふんだ]

翻然斂翼、[翼を翻し、翼を斂め]

婉将集兮、[婉しくも集まるぞよ、兮]

忽何所見、[たちまちどこかに見えなくなり]

矯然而復撃。勢 [いよく翼をまた撃つぞよ]

独終日於澗谷之間兮、[一日中、谷の間いそにいるぞよ、兮]

啄蒼苔而履白石。つば [苔を啄み、白い石の上いにゐるんだ]

鶴歸來來兮、[鶴が帰ってきたぞよ、兮]

東山之陰。とうざん [東山の陰かげに]

其下有人兮、[その下いそに人がゐるぞよ、兮]

黄冠草履、[黄色い冠、草の履き物]

葛衣而鼓琴。葛 [の衣で、琴を弾くぞよ]

躬耕而食兮、[食いそべるものは自分で耕しているぞよ、兮]

其余以汝飽。そ [そして余ったもので、鶴の腹を満たすぞよ]

歸來歸來來兮、[帰ってきたぞよ、帰ってきたぞよ、兮]

西山不可以久留。西山 [西山にずっと留まっているんだぞ]

【補足】[後に、蘇軾の弟子がこの文章について、「張天驥ちやうてん きはふつうの村人でしかないのに、古いにしえの隠者の仲間であるかのように讚えたのは、褒めすぎなのではありませんか」と尋ねると、蘇軾は「話をちよいと盛ったまでだ」[装舗席耳]と答えたという。蘇軾の詩文は、事実をありのままに記述するよりは、言いたいことをより印象的に伝えるために、舗席みてくれを装うところがあるのは、この文章に限らずここまでに訳した諸作品からも知れるところであろう]

## ■【05-4-107】 莊子祠堂記

【解題】蒙もう県知事おうきやうの王兢のために書いた文章。王兢は蘇軾と同世代の官員である。短い文章ながらも、蘇軾が『莊子』をどのように読んでいたのかよくわかるだろう。なお、思想家としての莊子は「そうし」と読み、その著作物とされている『莊子』は「そうじ」と読む習慣になっている。

### 【訳文】

莊子そうしは蒙もうの人で、蒙の漆畑の管理人であった。莊子が亡くなって千年余りになるが、蒙にはこれまで莊子を祀る人がいなかった。蒙県知事おうきやうの王兢が初めて祠堂しじやうを作り、その記念の文章を記すよう私に求めてきた。

司馬遷しばせんの『史記』を見ると、

「莊子りやうこくは梁国の恵王けいおうや齊国の宣王せんおうと同じ時の人で、その学問は広く、学ばないことはなく、その根本は老子らうしの言説に基づく。その書いたものは十万言余りで、おおむね寓言である。『漁父』、『盜跖』、『胠篋』の諸篇きよきやうを作り、孔子こうしの仲間をそり、老子の術を明らかにした

と、ある。

これによって莊子のあらましを知ることができる。しかし、私は莊子は孔子を助ける者であると考えての

で、司馬遷の見解を定説とすることはできない。

楚国の公子が粗末な衣服に身をやつし、軟禁されている町から逃げ出そうとした。門番は怪しみ、留め置こうとした。公子の従者は鞭を振り上げ、「このろくてなしめ。わずかな荷をかつぐ力もないのか」と罵り、公子を叩いた。それを見て、門番は公子は従者の奴僕であると思って、門を通した。

これは方便として逆さまのこをしたものである。従者は公子を愛していなかったから公子を叩いたのでのではない。公子への仕方として従者が叩くのはよろしくない。

莊子の言説は実はみな孔子に賛同しつつも、表現としては逆になっているのである。表には罵りつつ、陰で助けているのだ。だから、正しいことを言っている点ではほとんど変わるところがない。孔子をひどく誇っているところで、莊子のそのような意図が見えないところはない。

莊子は天下の道術を論じて、墨翟から始まって禽滑厘、彭蒙、慎到、田駢、閔尹、老聃の弟子に至るまですべてを一家として、孔子に同調しないようになって、実は孔子を最も尊んでいる。

『史記』では莊子が書いたとしている『盗跖』と『漁父』の二篇は、真に孔子を誣るものであろうかと私は疑っている。さらに『讓王』と『説劍』に至っては内容が浅はかで道に関わるところがない。

繰り返し『莊子』を観て、その『寓言』篇の終わりにこのようにある。

「陽子居が西に秦へと旅に出て老子に会った。老子は(陽子居を叱った後で)いった。『君はもって睢睢、盱盱するんだな。(そんなに偉そうにしていて)誰とともいようというのかい。最も潔白な人は泥まみれのようにあって、最も徳のある人は脳足りんのように見えるのだ』。陽子居はそれを聞いてにわかに様子を改めた。すると、陽子居が秦にきたときには、宿屋の人々が総出て迎え、主人が席を勧め、妻が身づりを手伝い、同宿の者は席を避け、火にあたる者は場所を譲った。しかし、秦から帰るときには、同宿の者はみなが陽子居とよい場所を争ったのだった。」

この『寓言』篇の後に続く、『讓王』、『説劍』、『漁父』、『盗跖』の四篇を去って、『列禦寇』篇に繋ぐとよい。そこにはこのようにある。「列禦寇は齊にゆき、途中で引き返してきて、このようにいった。『驚いたことに、私が宿で食事をとると、十軒のうちの五軒までが、他の客をさおいて私のところに最初に持って

きた』。

私はこの箇所を見て、悟るところはあつて笑っていった。

「これはもともと一つの章だったのだ」

『莊子』のももとの論述が終わっていないのに、ものを知らぬ連中がその途中に四編を押し込んでしまったのである。よく吟味してみなければならぬ。莊子の著作とされているものは、章を分け篇に名をつけたのは世俗の者であつて、莊子自身の本意ではないのである。

げんぽう

元豊元年十一月十九日記。

【補足】 [今では、蘇軾がここに挙げている諸篇はいずれも莊子自身の手によるものではないとするのが定説になっている]

## ■ 【05-4-108】 雲竜山観焼得雲字

【解題】 張天驥の隠棲する雲竜山で「焼」[火を使った祭り]を観て、何人かで詩を詠んだ。蘇軾には韻として「雲」の字が当たった。

### 【訳文】

火の神の丁女ていじょは実は水の神でもある。

冬、山に霜が降りて草が枯れる時季に、火を焚たいて丁女を祀る。

麻を束ね、石を敲たたいて火を付ければ、

たちまち、国家の急を告げる烽火のろしのように熠耀ほうほうと燃え立ち、

決戦場を覆う戦雲もうまうのように氤氳いんくんと煙が横たわる。

火に追われて、蛇は木に上り、蛟みづちは雲へと飛び出し、

煙に追われて、雁おは驚いて墮ち、鹿は狂ったように走りまわり、

山の妖けしんしいもの、木や石の化身はあわてて隠れ、

竹は破裂してばちばちと音を立て、桂は燃えてよい香りを翻し、  
ふと悲しくなるのは、秋の蟹が赤く焼かれたかのよう、  
ふと心地よくなるのは、夏の蚊が全部退治されたかのよう、  
たいまつ のろし  
松明を付けた牛、烽火をまとった象が敵陣に駆け込むばかりの勢いで、  
谷のかげほり、山の陰にも火が迫り、  
強い風に紅い衣を翻すようにして、溪谷の絶壁へと至る。  
私はもともと山中の人で、山のことは見慣れているが、  
このような火の祭りは聞いたことがない。  
たまたま二三の友とちやういんくんともに、張隠君を訪ねてこれを見ることになった。  
君の家に何かあるのかというと、季節のままに移り変わるものだけ。  
酒を把って燃え終わった痕を眺めやると、庭にはらはらと灰が落ちてくる。  
かくて悪いものがすっかり焼き尽くされたので、  
来年は農事が盛んであるのを見ることになるだろう。  
冬の厳しい霜は雑草を倒し、春の細やかな雨は発芽を促すというが、  
一本のたいまつ炬の力で一切の悪いものを焼き尽くしてしまうとは初めて知った。

## ■【05-4-109】祈雪霧猪泉祝文

【解題】この年は百日余りにわたって雨がなく、蘇軾だいかんざんは大観山むの霧猪泉ちよせんで雪を祈った。霧猪泉ちよりゆうは猪竜〔豚と蛇が合体した想像上の生物〕の形をしていることからその名があり、雨を降らせる靈験があるとされていた。

### 【訳文】

ああ、我が民は天に対して何か罪でもあるのでしょうか。水が下らないために、日照りの害が二年にも

なります。天はまだ禍わざわいを与えることを悔いていないのでしょうか、百日も雨がありません。雪が降って塵を収めてくれないと麦は土に覆われません。天子は山や川に祈るよう私に命じられました。伝え聞くところではこの山には神竜しんりゅうの淵こけがあるとのこと。頭を垂れて深く拝み、ぜひとも一勺の水をお願いするものがあります。一尺の深さの雪がもしも得られましたなら、御馳走に酒を添えてお供えいたしましょう。

## ■ 【05-4-110】 祈雪霧猪泉出城馬上作贈舒堯文

【**解説**】霧猪泉むちよせんで雪を祈りに行った折に、馬上でこの詩を詠んで舒煥じょかん [字は堯文あざな ぎょうぶん] ]

[→作品番号 05-4-095 など] に贈った。

### 【訳文】

私がかつて三年の間、呉越ごえつ地方を走りまわり、  
遍く千重せんちゆうの山を踏んだ。

朝には白雲の湧くのに従って出発し、  
暮れには時ねぐらに向かう鴉からすとともに還った。

木を得た猿のように身を翻し、誰よりも早く歩み、岩もよじ登った。

それからいまでは、

公文書に埋もれ、罪人を罰する鞭の傍らで老いる身となってしまった。

それでも今回ばかりは、

足腰が固まってしまったのをいささかほぐすことができた。

町から遠く西南に進んで行けば、

山々は半円形の玉のように環めぐり、

山の下さくらの農民の家には、桑、柘、榛はしばみ、菅が生い茂っている。

年の暮れても、風も日さしも暖かく、人と牛が呑気に向かいあっている。



しかし、土を覆うまでの雪が降ってくれないので、

これでは麦の苗の成長が期待できない。

貴君よ、どうか豪快な詩句を発して、

造物者を思わず笑わせ、

雪を降らせまいとしている頑かたくなその心を破ってくれたまえ。

【補足】 [ある人がこの詩を批判して、天に雪を祈るのであれば誠心誠意であるべきなのに、こういうときにも諧謔を交えてしまうのは蘇軾の悪い癖であると記している。そのようなところで、蘇軾を好むか嫌うかが分かれるのだろう]

#### ■ 【05-4-111】 次韻舒堯文祈雪霧豬泉

【解題】 上の詩を舒煥じょかんに送ると、早速、詩が返ってきたので、蘇軾はそれに次韻して返した。その詩は「故事運用の力を見るのみ」という厳しい評もあるので、この訳詩では「運用の力」は全て省略し、全体の流れだけを見ておくことにする。

#### 【訳文】

雨乞いにもいろいろあって、

笑ってしまうのは、頼みにするのが蛇の一寸の腹、

そこから雹ひょうが吐き出されるというのだが、

はてさて、いつになったら水が足りるのやら。

気の毒なのは青い鷺鳥、

雨を祈るために頭をちょんぎられてしまって、

しかも誰も憐れんでくれないのだ。

泉の底に潜む豬ちゅうりゅう竜こそは、

雷を鳴らす車を引っ張っているのがあって、  
 先にこの知事であったふきょうゆう傅堯翁が日照りのときに祈ると、  
 豆を撒くような音を立ててたちまちその人に向かって雨が降ったのだった。  
 その知事が国に帰ってしまうと、  
 猪竜も泉の底に帰ってしまい、  
 いま私はこの日照りに悩まされ、  
 疲弊した民が溝に倒れ伏すばかりになった。  
 人々は先の知事の徳をいまでも慕い、  
 私はその旧跡を尋ねて、  
 神の泉の門を叩いたのである。  
 先の知事に同行した人でいまいるのはじよ舒君だけ、  
 舒君の詩の力は私の及ぶどころではなく、  
 猪竜に迫って飛び立つ気にさせて、  
 牛が埋もれるまでに雪が積もるであろう。  
 そして春になってからもまた舒君の詩によって、  
 十分な雨を得たいと思うので、  
 私と詩の応酬などして詩の力を疲れさせないでくれたまえ。

## ■ 【05-4-112】和田国博喜雪

**【解題】** むらちよせん霧猪泉で祈った甲斐があったのか雪が降ったので、副知事のでんこくはく あさな田国博〔字は  
しゆくつう叔通〕が詩を詠み、それに和した。

### 【訳文】

昨夜は月が昼間のように明るかった、  
今夜は雲が天を暗く閉ざし、  
夜中になって玉の花のように雪が飛ぶ。  
ならば、来年は麦畑に青い波が舞うであろう。  
雪によって螟蝻<sup>めいとう</sup>〔穀類に害をなす虫〕が残らず退治されて、  
流民となった人々も自分の田を得られるようになるだろう。  
貴君はわけあって遊興は慎まないといけなしいいけれど、  
このようなときに楽しまなくていったいどうする気なのだろうか。

### ■ 【05-4-113】 宋復古画瀟湘晚景図三首

【**解題**】宋迪<sup>そうてき</sup>〔字は復古〕が描いた『瀟湘晚景図』<sup>しょうしょうばんけいず</sup>に添えた詩。「瀟湘八景」<sup>しょうしょうはっけい</sup>とい  
えば中国の山水画のよく知られる画題で、それが日本に伝わって「近江八景」とか  
「金沢八景」とかの各種八景<sup>ごうたいていこ</sup>が生まれた。洞庭湖<sup>じょうすい</sup>に瀟水<sup>しょうすい</sup>と湘江<sup>しょうこう</sup>が合流するあたりは  
美しい風光で昔から知られ、宋迪がこの地に赴任したときに画に描いたのが「瀟湘八  
景図」の始まりとされる。

#### 其の一

<sup>そうてき</sup>宋迪君は西に旅をして南国を憶い、  
部屋<sup>しょうしょう</sup>で瀟湘の景色を描いた。  
宋迪君の眼は山を出る雲に照らされ、  
野の水は空に浮かぶかのように遠くへと流れてゆく。  
かつて遊んだところを心のうちに省みて、  
すべてを忘れ、手にした筆に任せたのである。

たまたま衡陽こうようからきた人がいて、  
その画が瀟湘の真を写しているのを見て呆然としてしまった。

## 其の二

貴君の胸の内が大きく広いことは、  
この画に描かれた山や川のありさまと同じである。  
繰り返し深く見て心に適うのが得られたなら、  
筆を揮って描くのは何の難しさもない。  
川辺のあたりは人家が少なく、  
水に煙る村には古い木が集まっている。  
貴君がこの画に込めた思いを、  
細やかに尋ね看るのである。

【補足】[第三首は訳者の理解が及ばないので割愛する]

## ■【05-4-114】跋宋漢傑画

【解題】上の詩に詠んだ『瀟湘晩景図』は、蘇軾そうてきが宋迪そうてきと直接会ってその画を見て詠んだことが、この短文からわかる。とすると、「瀟湘八景」が山水画しょうしょうはっけいの題として定着する端緒を開いたのが蘇軾だったということになるのだろうか。これは、宋子房そうしぼう [字は漢傑] の画に添えた跋文で、宋迪の画を見てから10年後のことである。

## 【訳文】

私がかつて宋迪君と遊び、その画『瀟湘晩景』を見て三首の詩を作った。  
それを見て宋迪君は言った。

「君も画を描くのだね」

その甥の宋子房そうしぼうもまた画を学んでいる。これから数年もすれば宋迪君に並ぶようになるだろう。

元祐三年四月五日書。

【補足】[宋迪が蘇軾にいった言葉の意味するところは、宋迪は蘇軾の詩を見ただけで画を描く人かどうか分かったということで、詩と画は芸術として一致するものがあるとの哲学を宋迪もまた共有しているのである]

### ■ 【05-4-115】 贈狄崇班季子

【解題】かつて宮中に仕えていた狄てきという姓の人物の末の子に贈った詩。蘇軾の好みに合う人物であったのだろう。

#### 【訳文】

狄君は臂に鷹を載せて現れ、  
客人を見て会釈しない。  
床几にどっかと坐ると、  
客人が使っていた箸を取り、  
大きな声で仕留めた禽とりを一羽一羽数えあげる。  
後ろが短い豹皮コートの裘をはおり、  
そこに注がれた獲物の赤い血がまだ湿っている。  
指で示して酒を求め、  
たちまち鯨のようにごくぐと飲み干す。  
半ば心地よくなると、  
戦について論じて、髪が逆立つばかりになる。

「北方の猛犬ともめ、

また捕まえることができなくて、

狂ったように駆け回っておるではないか」

ひょうかん も さ  
この剽悍の猛者の気概でもって、

国境で事があったときには圧倒すべきであろう。

夜に走り出て敵を追い詰め、

敵将をたちまち斬り捨てるのだ。

勝利を持ち帰って天子に献じるなら、

侯爵の位も道に捨ように容易に手にできるだろう。

そうであるのに、

狄君は獵師とともに走って、

毎日鳥や獣を泣かせているのである。

## ■ 【05-4-116】 石炭

【解題】 石炭を主題にした詩。短い序文が付いている。

### 【訳文】

いん  
引[序文]

ほうじょう 彭城県にはもともと石炭いんがなかった。元豊元年十二月、徐州じょの西南の白土鎮はくどちんの北で初めて発見された。それで鉄を鍛えて刀剣を作ってみたところ、他の石炭よりも鋭利なものが作れた。

去年の冬は雪が降り続き、

道を行く人の姿がぱったりと絶え、

町中の民は、すねの骨を裂くばかりの風に、布団にくるまり、  
半束ほどの薪に火を付けようとしたけれど、湿ってしまって燃え立たず、  
どこを探しても乾いた薪と取り換えることができなかった。  
今年は、思いがけず、山の中に宝ものを見つけることができた。  
黒い石がごろごろとして、一万の車でも運び出せないほどにある。  
黒い油のような液を流し、怪しげな風を吹き出していたのに、  
これまで人に知られることがなかった。  
その根元が一度発見されると、際限なく存在し、  
千人が見に行き、万人が歓び舞った。  
石炭を泥に投げ入れると水をはいてますます黒光り、  
石炭を燃やすと勢いよく金色の焰を立てる。  
南の山で炭焼きのために木が切り出されることはもうなくなるだろう、  
北の山で鉄を鍛えるのに悪い石炭に苦勞させられることももうなくなるだろう。  
新たに得た石炭で、かの「百鍊剛刀」<sup>ひゃくれんごうとう</sup>のような名刀を鑄て、  
巨大な鯨を叩き切って見せよう。

【補足】 [去年の冬に乾いた薪がなかったのは、洪水の後だったからなのだろう]

## ■ 【05-4-117】 与枢密侍郎

【解題】 朝廷の要職である枢密侍郎<sup>すうみつじろう</sup>に宛てた手紙。具体的に誰に宛てたのかについては、蘇軾との距離関係からして呂公著<sup>りよこうちよ</sup>であったろうと推測されている。呂公著の名は作品番号 02-1-009、03-3-025、04-1-025 で見ていて、名門出身の政界の重鎮である。

## 【訳文】

御門下より去ってすでに八年となります。愚かな私でありますから、人付き合いも絶え、手紙の行き来も欠け、怠惰の罪は叱責されて当然であります。……私は数カ月ほどで任地替えとなりますが、貧乏のために都に行くことはできません。江浙の一郡を願っております。幸いにもそれを得ましたなら、お目にかかる日はいつになるのかわかりません。……

【補足】〔(1) 冒頭に八年とあるのは、都を出てからの歳月をいつている。(2) 蘇軾が次の任地として長江の南に地を希望していたことは參寥に宛てた手紙にも記されていた〔→作品番号 05-4-099〕。〕

### ■ 【05-4-118】謝張太保撰先人墓碣書

【解題】大恩人の張方平〔→作品番号 05-4-079〕が蘇轍の依頼を受けて蘇洵の墓に掲げる文章〔墓表〕を書いてくれたので、それに対する礼状を蘇軾が記した。この礼状では、墓表のある部分についてもつばら記しているので、最初にその箇所を読んでおこう。なお、蘇洵が亡くなった際に歐陽脩が墓誌銘を作り、蘇洵の生涯のあらましはそちらにすでに記されていたのだが〔→作品番号 03-1-006〕、張方平の墓表にはより詳しい記述がある。

#### 【訳文】

張方平：『文安先生墓表』から

……嘉祐年間の初め、王安石の評判が始めて高まり、その仲間が大きな勢いを持つようになった。王安石を大臣に任命する辞令には「人が生じてより数人しかいない逸材である」と書かれ、議論を構えることで王安石は人より優れていた。歐陽脩も王安石を高く評価し、先生〔蘇洵〕に王安石と交友するよう勧め、王安石もまた先生と交わることを願った。しかし、先生は、「私はその人となりを知っている。本性として人情に近くないものがあり、いずれ天下の患いとなるであろう」と、いった。王安石の母が



亡くなると、士大夫は挙って弔問に行ったのだが、先生だけは行かずに、『弁姦論』一篇を作った。その文に曰く「……」。当時、それを見た者は穏当ではないとみて、「まったく度を超している」といった。先生が亡くなって三年、王安石が政治を見るようになると、そこに書いてあった通りになった。……

【補足】[上の墓表では、蘇洵の『弁姦論』の全文を引いていて、以下にそれを訳す]

### 【訳文】

蘇洵：『弁姦論』

物事が動けば必ず行き着くところがあり、物事の背景にはそれが始まる前から定まっている何らかの原理がある。

人々は、月に暈が浮かれば風が吹き、敷石が湿り気を帯びれば雨が降るといことなら知っている。しかしながら、それよりも前のごわずかな徴候の段階において、原理と行き着くところを知るのは、天下の最も冷徹な者だけである。

人間界の物事の推移には、原理と時の勢いとは複雑に絡み合い、その関係が見えにくく、変化を予測するのが難しい。恐らく宇宙の変転を予測するよりも難しいだろう。しかも、いかに賢者であっても、好悪の情が心を乱し、利害の有無が判断を左右してしまうことがあるのだから、なおさらである。

昔、晋の時代に、山濤はまだ少年だった王衍を見てこういった。

「天下の人々を誤らせるのはきっとこの者だろう」

昔、唐の時代に、郭子儀は盧杞を初めて見てこういった。

「この者が思うように振る舞うようになったら、我が子孫は一人も生きられないだろう」

この二つの事例を挙げると、山濤と郭子儀はこれこれこのような訳でいったのであって、さすが二人は大した眼力の持ち主であったと、人々はすくりにいうだろう。実際に王衍が国を滅ぼし、盧杞が国を乱した結果を知っているからだ。

私はそうした人々とは少々別のことをいま考えている。王衍の人となりを見ると、容貌も言動ももとより、世間を欺き虚名を盗もうとするに足るところがあった。それでも、敢えて貪り、敢えて害を為そうとするような者ではなかった。世間と同調するのが単に巧みだっただけなのだ。当時の皇帝がもしも英明であったなら、王衍のような輩がたとえ百人、千人いたところで、国を滅ぼすには至らなかつたはずだ。盧杞は国家を混乱させるに十分なねじれ者ではあつたけれど、学問がなくてろくに文章が書けず、容貌も弁舌も人を引きつけて感心させるようなところではなかつた。当時の皇帝があそこまで愚かではなかつたならば、盧杞などを用いることにはならなかつたはずだ。だから、私の考えては、王衍や盧杞を批評したくらいでは、山濤も郭子儀も大したものだということにはならないのである。

いまもしもこのような者がいたらどうだろうか。それは、口に孔子や老子の言葉を唱え、身は古の賢人と同じ振る舞いをし、名声を好む人、志を得ない人を集め、ともに言論を構成し、自分達で評価基準を立て、古の聖人の再来だと言い募り、しかし、陰険で根性曲りであることにかけては人から抜きん出ているというような者だ。要するに、王衍と盧杞を合せて一人にしたような人物である。そのような者がいたら、そのもたらす禍は一体どうなのだろうか。

顔に垢が付けば洗い、衣に垢が付けば濯ぐのは人として当たり前の情である。ところがそれしないで、卑しい僕の衣を着て、犬や豚の餌のような物を食べ、髪はぼさぼさ、顔は垢にまみれ、それでいて聖人の経典を談じるのは、人として普通の情であるのだろうか。人の情からかけ離れた者で、大姦人、大悪人ではなかつた者は少ない。歴史にあまたの例を見ることがができる。

世間を覆いばかりの名声を得て、また形としては現れていない害悪が萌しているということがいまるのではないだろうか。国をよく治めようとする君主も、優れた人を好む大臣も、皆がこの者を用いようとしておるときに、私だけ、天下の患いが起こるのは必然であると思うのだ。危険性は王衍や盧杞の比ではないのだ。

孫子はこのようにいっている。

「よく兵を用いる者は特に目立った功績はないものだ。」

いま私が指摘した人が用いられなければ、私がいったことは過ちだったことになり、その人は己は不遇であると嘆くであろう。そして、禍が行き着くところに至ろうとしていたことなど誰も知らないままに終わる。もしもそのようにならなければ、天下は禍を被り、私はよく未来を知っていたと称賛されるであろう。それは悲しいことではないか。

【補足】〔張方平は、『墓表』において、この『弁姦論』は王安石について記したものであって、天下の誰よりも早くに王安石が危険な人物であることを蘇洵だけが見抜いていたと書いている。しかし、まことに不可解なことに、蘇洵が『弁姦論』を書いたことはこの『墓表』が出るまでは全く知られておらず、張方平が『墓表』に『弁姦論』の全文を引用したことで、人々は初めてそれを読んだのである。また、おうようしゅう 歐陽脩が蘇洵に王安石と付き合うよう勧めたと『墓表』にあるのは、事実としてかなり疑わしいとされている。次に蘇軾の礼状の訳文を掲げる〕

### 【訳文】

私軾、頓首再拜して感謝申し上げます。再び父の『墓表』を示していただき、特に『弁姦論』の一篇を載せていただき、それを見て、涙がこぼれ、言うべき言葉もありません。ひそか 竊かに思いますに、父は若いときは不遇に沈み、晩年に至ってその名が聞こえるようになりました。当時の学ぶ者には父を師として尊ぶ者もいましたが、父が記した文章の全てが読まれたわけではなく、世に形として現れなかったものもありました。父の書いたものを全て知り、然るべき評価をされたのは、世の中でたまたま張公〔張方平〕が知られただけでした。それは不幸であるようにいて、「我を知る者は稀である」とは、老子が貴んだことでありました。『弁姦論』を父が始めて作ったときに、私と弟はそれを見て、「まったく度を超えています」と諫め、他の人も同様でありました。しかし、独り張公はそれを見て、我が意に合致すると思われたのでした。張公はもとより先朝〔えいそう 英宗皇帝の治世〕のときにこの論を評価して、史冊に載せて、いまの世においては認められず知られなくても、後の世において失われてはならないものだとされたのでした。父のこの言説は、張

公が公表して出して下さらなかったならば、人々はそれがあつたとは信じないでありましょう。それが信じられるか信じられないかはさほど深い意味がありません。しかし、かの人がわずかな人数の連中を使って天下を欺いたのを、天下にそれを知る者が誰もいなかったと、後世の人が嘆くのを残念に思うのであります。

この『墓表』が作られたのを、私は涙を流し、再拜して感謝するものであります。……[故事を引いて張方平の行為を讃えて、感謝の言葉を重ねる]……

【補足】〔(1) 『<sup>べんかんろん</sup>弁姦論』は偽作であるとの疑いが強く持たれていて、その説を唱える人々の中には、<sup>ちようほうへい</sup>張方平の『<sup>ぼひよう</sup>墓表』も蘇軾の「礼状」も偽作であると主張する人もいる。確かに、『<sup>べんかんろん</sup>弁姦論』には疑問が多々あるのだが、三者とも偽作であるとするのはさすがに極論すぎるであろう [近藤一成『宋代中国科学社会の研究』、汲古書院(2009年)]。ここでは、三者とも偽作ではないと考えて訳文を掲げた。(2) 蘇軾はこの礼状で、張方平が『墓表』に『<sup>べんかんろん</sup>弁姦論』を収録しなかったならば、その存在が知られないままに終わってしまっただろうと書いている。蘇洵が『<sup>べんかんろん</sup>弁姦論』を書いたときに、蘇軾兄弟は「まったく度を超しています」[原文は「<sup>そじゆん</sup>嘻其甚矣」]と諫めたとあるが、その言葉は『墓表』に記されているのと同じである。張方平が偽作に関わつたと疑わせもするのだが、それはここでは否定し、蘇洵が書いたとしておこう。しかし、『<sup>べんかんろん</sup>弁姦論』を書いたときに、蘇洵が王安石について深く知っていたとは極めて考えにくく、『<sup>べんかんろん</sup>弁姦論』は特定の人物をターゲットにしたものではなくて、寓話的な史論であつたとするのが妥当なところであるのだろう。寓話としても極端すぎるので、蘇洵は広く人々に見せることなく、他の著作とともに張方平のところだけに残されたのだろう。王安石と政治的に対立して閑職に追いやられた張方平が、何かの折に『<sup>べんかんろん</sup>弁姦論』を読み直してみると、まさしく王安石について予言していたのだと強く感じ、いつしか『墓表』に書いたような経緯があつたと思ひ込むようになったのだろう。蘇

轍も蘇軾も、事実とはやや異なるとは思っても、大恩人が父を激賞してくれているのに対して敢えて物を申すのは控え、ただし『弁姦論』そのものは父の真作であることを保証しておこうと、この「礼状」において特にそれについて言及したのであろう]

## ■【05-4-119】祭歐陽仲純父文

【解題】この年の終わりに歐陽脩おうえいしゅうの次男である歐陽奕おうえいえき あざな [字は仲純ちゆうじゆん] が急死し、この祭文を蘇軾が作った。まだ33歳であった。

### 【訳文】

おうえいえき  
歐陽奕君の靈に捧げる。ああ哀しいかな。

ぶんちゆうこう おうえいしゅう 文忠公[歐陽脩]の徳が盛んなことは、そうだい 子孫が千億にも増え、宋代とともに無極に続くとしても人は十分ではないといつたろう。歐陽奕君が賢者であって、寿命が百年に及び、一年に九回昇進しても人は当然であるとするだろう。それがどうして、最低の官位に留まり、寿命は四十に至らなかったのか。その亡骸は百に一つも報われていない。ああ哀しいかな。いづべき言葉もない。

歐陽奕君が生きていたときのその進退および得喪は人から羨ましがられるようなことがなく、亡くなってしまつと、死生および短命であったことは神を責めるべきであろう。人はただ文章の優れた家に生まれ、振舞いはその門かどに称なづつたのであったのを知るだけで、その志気が豪健で議論が剛果であって、大事に臨んだならば、大節を立てて、身を殺して仁を成す者であったのを知らない。造物者は人の死生を左右する権限を使ってどうして貴君を病にしまったのか。先にえいすい 潁水のほとりで貴君に会い、去年には都の門の東で貴君に会った。夜に話をし、朝になつても尽きることがなかった。道の実践を謀り、世を憂い、禍を避けて身を保つよに私に教えてくれたのは、まさしく文忠公に似ていた。いまははっきりと思ひ出せるのに、貴君は忽然と消えてもう会えないのである。長く泣き声を上げて、繰り返し慟哭しないてはいられない。道が行われるのが難しいのは、それをする人がいないからなのか。人がいないのではな

いだらう、利害が人を変えてしまうのだらう。欧陽奕君は世を畏れず人から慕われることなく、独り立って懼れず、そのまま死に及んだのだった。ああ哀しいかな。

【補足】[欧陽奕おうようえきと潁水えいすいのほとりで会ったのは蘇軾そうしつが杭州に赴任する途中のことで、都の門の外で会ったのは、都に入るのを許されなかったときのことで]

## ■ 【05-4-120】 与欧陽仲純

【解題】この1年ほどの間に欧陽奕おうようえき [字は仲純あざな ちゆうじゆん] に宛てた手紙が5通残っている。上の祭文にもあったように、都の東で会ったことや、詩のやりとりがあったことや、亡くなる少し前に陳州ちんに向かっていたことなどが記されている。ここでは、まだ本年の初めの段階で徐州じょの水害について触れている手紙を読んでおこう。

### 【訳文】

……弟は南京なんけい応天府おうてん ぶにいて、時折手紙がきていて、恙なく過ほうじゆうこしております。彭城ほうじゆう [徐州]は最も下流の地で、水の患あやいを受けることでは都から東北の地で第一であります。この夏から秋の備えをするための労働者を集める錢を得たいものと、しほれば願ねがい出でていますが、まだよい応答こうがありません。黄河がが曹村そうそんで塞ふさがれるのはもとより大いに善いことあります。そうならないのならば、朝廷の御沙汰を待つまでもなく緊急に労働者を雇こわなければなりません。費用は必ず大きくても、事に先立まって十分な備えをすることが最も大切です。人は軽々しくものをいいうこともありますが、私は信念を持ってこのよういいうのです。貴君は私を深く知しってくれている人でありますので、またこのことについて言及したまでです。

## 第5章 嵐の訪れ——密州、徐州、湖州

[第5章その五]

げんぽう  
元豊2年 [1079年]、蘇軾44歳。

■ 【05-5-001】 人日獮城南、会者十人、以身軽一鳥過、槍急万人呼為韻、得鳥字

【解題】 詩の題にある「人日」とは1月7日のこと。その日に、10人が集まって町の南で獮をした。「身軽一鳥過、槍急万人呼」の句をばらばらにして1人に1字ずつ配り、それを韻として詩を作った。蘇軾には「鳥」の字が当たった。

【訳文】

町の子供等は知事殿を笑いものにしている、

いつだって、何やら憂いてさえない顔をしているからだ。

そんな知事殿の頭を白い布で包み、

金の鞍を置いた馬にまたからせたのは誰なのか。

浅い春の風が湿った雪を吹き上げたので、

知事殿は、手が凍えてしまうと、朝の早さにおびえている。

それでも、知事殿が音高く二本の鏑矢かぶらやを放ったので、

それを合図に、人々は虫のような小さな獲物も逃すまいと追いかけてまわす。

知事殿は弓を大空に向かって引き、

一羽の鴻おおどりが渡って行くのを目で追いつつ、

長くうそぶ嘯く。

知事殿はもっぱら詩を案じて、

手綱を取るのも忘れ、黙って頭を振っている。

知事殿は粗食を好み、芹や蓼を味噌で煮たものを食べる。

こんな知事殿であるから、

顔に六本の矢を受け、両眼を怒らせて立ち続けた昔の将軍には似ても似つかない。

それでも、若いときには武将になろうと考えたりしたらしい。

若いころの大きな志をいまも持ち続けて、百戦するくらい意気込みがあると示そうと、

獲った兎が焼き上がるのを待つことなく、馬上で銀の酒瓶を飲み倒してみせたりするのだが、

実際には百の憂いのまわりをよたよた巡っているのである。

考えてみれば、英雄といわれるような人でも、

むなく老いて死んでしまった例も少なくはない。

青春は一つの夢、

余すところの歳月は飛ぶ鳥のように過ぎ去ってしまうのだ。

## ■【05-5-002】将官雷勝得過字代作

【解題】上の詩と同じときに、将官の雷勝らいしょうには韻として「過」の字が当たった。雷勝は自分は武人で詩は作れないと辞退したので、蘇軾が代わりにこの詩を作った。

### 【訳文】

連日のろし、烽火が上がる。

外から騎兵が侵入してきたとの急な報せだ。

このときばかりに、刀を振り上げて敵陣へと突っ込み、

貂てんの裘コートに返り血を浴びる。

皇帝に仕える兵士となってから、



そのように活躍する機会もなく、  
ただ悶悶<sup>もんもん</sup>と伏せてばかりの日々。  
今朝は知事殿が獵をするのに従い、  
久しぶりに天の広さを感じる。  
鉄の糸を巻いた二本の矢、  
まずは手に唾を吐きつける。  
雪毛の狐を射殺して、  
腰にはまだ一本の矢が残っている。

## ■ 【05-5003】 獵会詩叙

【解題】 このときの獵で詠まれた詩をひとまとめにし、蘇軾が序文を書き添えた。

### 【訳文】

雷勝<sup>らいしょう</sup>は隴西<sup>ろうせい</sup>の人である。勇敢であることをもって応募して将官<sup>けいとう</sup>となり、京東路の第二将となった。腕の力は絶人で、騎射<sup>た</sup>に長けて敏妙<sup>びんめう</sup>である。徐州に視察にきたので、徐州の人々はその腕前を見たいものだと、町の西で小さな獵を行った。このとき鄭亮<sup>ていりやう</sup>や繆進<sup>りゅうしん</sup>もいて、皆が馬に乗って従い、いずれも弓矢<sup>とうさく</sup>、刀槊<sup>とうさく</sup>の技に精通している。さらに、黄宗閔<sup>こうそうびん</sup>は普段の振る舞いは書生<sup>しよせい</sup>のようであるが、戎装<sup>じゆうさう</sup>してひらりと馬にまたがると、走る速さは衆に抜きん出ている。そのようにして人々の技量に皆が驚き、大いに笑い楽しんだ。この日は小雨が降っていたが後に晴れて、土は潤い、風は穏やかで、観る者が数千人であった。

昔、曹丕<sup>そうひ</sup> [曹操<sup>そうそう</sup>の子]がこのように書いた。「建安十年、始めて冀州<sup>けいしゅう</sup>を平定すると、その地の者が良い弓や良い馬を献じた。時に春、木の神は穏やかな風を吹かせ、弓を操る手は柔らかく、草は茂って獸は肥え、諸君らとともに鄴<sup>ぎやう</sup>の西に獵をし、鹿を九頭、狐や兔を三十得た」。

馬を走らせる楽しみは、国境の地にいる武人たちの日々の楽しみである。曹操、曹丕の父子は楽を横たえて詩を賦し、それは喜ぶべきこととして後世に伝えられた。

いま我らは獵をし、おのおのが詩を作り、自ら書いた。その終わりにこのことを記し、もって異日の笑いの種とするものである。

## ■ 【05-5-004】三槐堂銘

【解説】都にいる王鞏〔字は定国〕〔→作品番号 05-4-084〕の家の庭には三本の槐が高く聳え、その脇に「三槐堂」があった。王鞏に頼まれてその堂の銘を書いた。中国の古代、周の時代に、三本の槐の前に三公〔国の最高レベルの三つの官職〕の座席を設けたことから、三槐は三公の異称となった。この文章の最初で、「仁者には必ず立派な後継者がいる」と、それが普遍的な法則であるかのように記しているのは、我々にとっては納得しがたいのだが、蘇軾は別の文章でも同じ趣旨のことを書いていた〔→作品番号 05-1-079〕。

### 【訳文】

天は必ずかくあるべきようにするものなのだろうか。実際には、賢者は必ずしも貴くはならないし、仁者は必ずしも長寿ではない。ならば、天は必ずしもあるべきようにしないのだろうか。しかしながら、仁者には必ず立派な後継者がいる。この二つの事実の関係はどのようになっているのだろうか。

私は申包胥がこのように言ったと聞いている。

「人は天の定めを破ることがあり、天は人の定めを破ることがある」

申包胥はこのように宣言して、起死回生の一発勝負にかけた。

世間の天を論じる者は、天の定めを待つことなしに、自分の望む通りのものを天に求めるために、天の為すところは茫茫としてわからないとぼやく。その論に従うならば、善い者は怠り、悪い者は肆に振る

舞ってしまう。

大盗賊<sup>とうせき</sup>の盗跖<sup>とうてき</sup>は長寿<sup>ちやうじゆ</sup>を全<sup>く</sup>し、孔子<sup>こうし</sup>やその弟子<sup>でし</sup>の顔回<sup>がんかい</sup>は不遇<sup>ふぐ</sup>であった。それは、天<sup>あめ</sup>がいまだ定める前に起こったことなのである。松<sup>はく</sup>や柏<sup>はく</sup>が山林<sup>さんりん</sup>に生<sup>は</sup>じて、その始めのころは雑草<sup>ざくそう</sup>に苦しめられ、動物<sup>どうぶつ</sup>の害に遭<sup>あ</sup>いもする。しかし、その終わりに至<sup>いた</sup>ると、四季<sup>しき</sup>に栄<sup>さか</sup>え、千年<sup>せんねん</sup>も変<sup>か</sup>わらない姿<sup>すがた</sup>になる。それは天<sup>あめ</sup>の定めによるのだ。善<sup>よ</sup>悪<sup>わる</sup>の報<sup>はら</sup>いが子孫<sup>こそん</sup>に至<sup>いた</sup>って現<sup>あら</sup>われるのは、同じ<sup>おな</sup>ように、天<sup>あめ</sup>の定めには久<sup>ひさ</sup>しい時間<sup>じかん</sup>がかかるからである。

私は自分で見<sup>み</sup>るところ、あるいは伝<sup>つた</sup>え聞<sup>き</sup>くところから考<sup>かんが</sup>えるに、以上のこと<sup>こと</sup>はきつとその通り<sup>とおり</sup>であるのだ。

国家<sup>こくか</sup>がまさ<sup>まさ</sup>に興<sup>おこ</sup>ろうとするとき<sup>とき</sup>には、世<sup>よ</sup>に徳<sup>とく</sup>のある大臣<sup>だいじん</sup>が必<sup>かな</sup>ず現<sup>あら</sup>れ、厚<sup>あつ</sup>く徳<sup>とく</sup>を施<sup>ほ</sup>すのだが、それによつてその人<sup>ひと</sup>自身<sup>みづか</sup>が報<sup>はら</sup>われるとは限<sup>かぎ</sup>らない。しかし、その子孫<sup>こそん</sup>は後<sup>あと</sup>の太平<sup>たいへい</sup>の主<sup>あるじ</sup>とともに平和<sup>へい</sup>を守<sup>まも</sup>つて、天下<sup>てんか</sup>の福<sup>ふく</sup>を享<sup>あ</sup>受<sup>う</sup>する。

かつて兵部<sup>へいぶ</sup>侍郎<sup>じやうろう</sup>晋国<sup>しんこく</sup>公<sup>こう</sup>の王<sup>わう</sup>祐<sup>ゆう</sup>は五代<sup>ごだい</sup>十国<sup>じゅうこく</sup>時代<sup>じだい</sup>の漢<sup>かん</sup>朝<sup>てう</sup>、周<sup>しゅう</sup>朝<sup>てう</sup>のころから活<sup>かつ</sup>躍<sup>やく</sup>し、宋<sup>そう</sup>の太祖<sup>たいそ</sup>皇帝<sup>てうてい</sup>、太宗<sup>たいそう</sup>皇帝<sup>てうてい</sup>に仕<sup>つか</sup>え、文<sup>ぶん</sup>武<sup>ぶ</sup>、忠<sup>ちゆう</sup>孝<sup>かう</sup>に秀<sup>ひ</sup>で、大臣<sup>だいじん</sup>となることを望<sup>のぞ</sup>まれた。しかし、公<sup>こう</sup>が直<sup>ちやく</sup>言<sup>げん</sup>の士<sup>し</sup>であることが時代<sup>じだい</sup>に遇<sup>あ</sup>わなかつたために、つい<sup>つい</sup>にそれ<sup>それ</sup>は叶<sup>かな</sup>わなかつた。そこで、公<sup>こう</sup>は手<sup>て</sup>づから三<sup>さん</sup>本<sup>ほん</sup>の槐<sup>えんじゆ</sup>を庭<sup>てい</sup>に植<sup>う</sup>え、「吾<sup>われ</sup>が子孫<sup>こそん</sup>に必<sup>かな</sup>ず三公<sup>さんこう</sup>となる者<sup>もの</sup>が出<sup>で</sup>るであらう」とい<sup>い</sup>つた。実際<sup>じつじ</sup>に、その子<sup>こ</sup>の魏<sup>ゑい</sup>国<sup>こく</sup>文<sup>ぶん</sup>正<sup>せい</sup>公<sup>こう</sup>の王<sup>わう</sup>旦<sup>たん</sup>は真<sup>しん</sup>宗<sup>そう</sup>皇帝<sup>てうてい</sup>の景<sup>けい</sup>徳<sup>とく</sup>、祥<sup>しやう</sup>符<sup>ふ</sup>年間<sup>ねんかん</sup>に宰<sup>さい</sup>相<sup>さう</sup>となり、朝<sup>てう</sup>廷<sup>てい</sup>は清<sup>せい</sup>明<sup>めい</sup>、天下<sup>てんか</sup>は何<sup>なに</sup>事<sup>じ</sup>もな<sup>な</sup>く安<sup>やす</sup>らかに治<sup>ち</sup>まつた。王<sup>わう</sup>旦<sup>たん</sup>が多くの禄<sup>ろく</sup>を受け名<sup>な</sup>を輝<sup>か</sup>かすこと十八<sup>じゅうはち</sup>年<sup>ねん</sup>に及<sup>およ</sup>んだ。

もしも物<sup>もの</sup>を人<sup>ひと</sup>に預<sup>あづか</sup>り、翌<sup>あした</sup>日<sup>にち</sup>にそれ<sup>それ</sup>を返<sup>かへ</sup>してもらつたなら、新<sup>あらた</sup>に得<sup>え</sup>るものはない。王<sup>わう</sup>祐<sup>ゆう</sup>が身<sup>み</sup>に徳<sup>とく</sup>を修<sup>しゆ</sup>めたのは、天<sup>あめ</sup>に報<sup>はら</sup>われるところのものを預<sup>あづか</sup>り、数<sup>かず</sup>十年<sup>じゅうねん</sup>後に返<sup>かへ</sup>してもらつたとい<sup>い</sup>うことなのであらう。いわば債<sup>せう</sup>券<sup>けん</sup>のやりとり<sup>やりとり</sup>のようなものたともい<sup>い</sup>える。

このようなこと<sup>こと</sup>から、私<sup>わが</sup>は天<sup>あめ</sup>の果<sup>は</sup>が必<sup>かな</sup>ずあると知<sup>し</sup>つたのである。

私<sup>わが</sup>は王<sup>わう</sup>旦<sup>たん</sup>の時代<sup>じだい</sup>には間<sup>ま</sup>に合<sup>あ</sup>わなかつたが、その子<sup>こ</sup>の懿<sup>い</sup>敏<sup>びん</sup>公<sup>こう</sup>の王<sup>わう</sup>素<sup>そ</sup>を見<sup>み</sup>ることができた。王<sup>わう</sup>素<sup>そ</sup>は皇<sup>てう</sup>帝<sup>てい</sup>を諫<sup>かん</sup>める役<sup>やく</sup>目<sup>め</sup>を負<sup>お</sup>つて仁<sup>じん</sup>宗<sup>そう</sup>皇帝<sup>てうてい</sup>に仕<sup>つか</sup>え、朝<sup>てう</sup>廷<sup>てい</sup>に出入<sup>しゆつにん</sup>りすること三十<sup>さんじゅう</sup>年<sup>ねん</sup>余<sup>あ</sup>り、しかし、その地<sup>ち</sup>位<sup>ゐ</sup>はその徳<sup>とく</sup>に十分<sup>じふぶん</sup>に見<sup>み</sup>合<sup>あ</sup>つたのではなかつた。とすると、天<sup>あめ</sup>は王<sup>わう</sup>氏<sup>し</sup>を再<sup>また</sup>び興<sup>おこ</sup>そうとしてゐるのではないであらうか。事実<sup>じつじ</sup>、

その子孫には実に大勢の賢者がいるのである。

世には王祐どうだい りせいんを唐代の李棲筠りせいんと比較する者がいる。その雄才、直気は真に互いに譲らないものがある。

李棲筠の子には李吉甫りきちほが、孫には李徳裕りとくゆがいて、功名、富貴は現代の王氏わしに乱ぼ等しい。ただし、

忠恕ちゅうじょ じんこう、仁厚の点では、李吉甫、李徳裕の父子は、王旦、王素の父子には及ばない。このことを見れば、王氏の福はまだ十分には稔りを得ていないのである。

王素の子の王鞏おうきやうは私と交流があり、徳を好み、立派な文章を書く。きっと家を栄えさせるであろう。それでこの文章を作ったのである。

【補足】 [(1) 以上が序文で、この後に韻文の銘が続く。それは王おうの家の徳を称揚するだけのものなので訳は省く。(2) 王鞏おうきやうの父の王素おうそと交流があったことは、早くは作品番号 01-2-021 で見ている。(3) この序文は一見すると、名門の息子に頼まれてヨイショをただけに思ってしまうのだが、この文章には当時の政治状況、蘇軾の置かれた立場が反映されていると見るべきであろう。王鞏がいずれ家を栄えさせるであろうと、将来に期待を託しているのは、現在はそうなる条件が整っていないからだ。王鞏に実力がないからではない。当時の官界で出世の坂道を勢いよく駆け上っているのは、改革の時流に乗ってにわかに台頭した連中だけとなっていた。蘇軾はそうした連中を「新進」と表現している。「新進気鋭」といえばよい意味になるが、暗に「成り上がり者」という意味合いで蘇軾はこの語を使っている。先にみた王禹偁おうしやうしやう [→作品番号 05-4-049] やここに見た王旦おうたん、あるいは欧陽脩おうようしゆうといった先人が築いてきた宋代士大夫そうだいし たいふの伝統を全く踏まえない「新進おうあんせき」が、王安石の去った後の朝廷の枢要を占めていることを蘇軾は憂い、いつか王鞏が家を栄えさせるような本来の姿に戻ることに期待を籠めてこの文章を書いたのである。(4) この文章と同じ時期に、王鞏の父の王素の肖像画に添える賛を、やはり王鞏の依頼を受けて作っている。その訳文はすでに作品番号 03-4-011 で見ている]

## ■ 【05-5-005】 和参寥見寄

【解題】徐州<sup>じょ</sup>を発つて南に向かった参寥<sup>さんりょう</sup> [→作品番号 05-4-098] が淮河<sup>わいが</sup>のあたりから寄せてきた詩に次韻した。

### 【訳文】

黄楼<sup>こうろう</sup>の南、戯馬台<sup>ぎばだい</sup>の東、  
雲の間にさやさやと月が現れ、  
趣き深い人<sup>さんりょう</sup> [参寥] とともに筆硯を洗い、  
水の流れのささやきを文字に留めようとした。  
貴僧はしばし谷の奥に尋ね入るといが、  
山の僧に学んで遥かな峰で老いようとはしないでくれたまえ。  
私が西湖<sup>せいこ</sup>に行くのを待って、  
うまい一杯の湯餅<sup>うどん</sup>をいっしょにすすろうではないか。

## ■ 【05-5-006】 台頭寺歩月得人字

【解題】戯馬台<sup>ぎばだい</sup>にある台頭寺<sup>だいたうじ</sup>で、月を見つつ歩み、蘇軾<sup>そしつ</sup>には「人」の字が割り当てられて詩を詠んだ。

### 【訳文】

天の川にかかっていた雲がさっと吹き払われ、  
中庭を歩く人の後を追って月の光が差し込んでくる。  
爐<sup>いろ</sup>から涓涓<sup>せんせん</sup>と香の煙が暗<sup>くろ</sup>の中へとただよひ始め、

花の影がちらほら離離と春の中で揺れようとしている。

いま宮中とも、この清らかな風光を一つにしているのだろうか、

かすかに聞こえるのは、

天子の乗る車がわずかな塵を上げつつ進む車輪の軋る音か。

こうべ めぐ首を回らすと、かつて遊んだのは真に夢、

頭巾を止めるかんぢ簪を挿す髪もいまでは真っ白である。

### ■【05-5-007】種松得來字

【解題】松の苗を植えて人々と詩を詠み、蘇軾には「徠」の字が当たった。この詩の前に、訳は割愛したが、台頭寺で宋希元だいたうじ そうきげんという人を見送る詩があり、そこに蘇軾自身の注で、「人々と松を植えた」と書き添えてあるので、この詩はそれと同じときのものなのだろう。とすると、前に訳した詩も同じときの一連のものなのかもしれない。また、この詩には、やはり蘇軾自身の注で、「苗の四割は懷古堂かいこどうに、六割は石經院せきけいいんに植えた」とある。詩中にある「山の僧」は石經院あるじの主なものだろう。

### 【訳文】

春の風がにれ榆の林を吹き、

榆の英がさや乱れ飛んでうずたか堆く積もった。

そこをさっと雨が通り過ぎた後に、

いそいそ戢戢と千本、万本の松の苗を植える。

青い松は植えてもなかなか成長しにくい。

百株から一本でも立派な幹になれば御の字である。

一本の幹でも十分で、

千畝ほの広さの槐えんじゆの林ろより堂々とした存在感がある。

これらの苗はいわゆる魯ろの地の「徂徠そらいまつ松」で、

穀物一斗で一本の苗を買ったのだった。

魯の人たちはこの松の価値を知らないので、

惜しみなく竈かまどで燃やして灰にしてしまう。

松の苗がどのようにしてここに運ばれてきたのかというと、

縄で束ねてぐるぐるに縛り、車にぎゅう詰めぎゅうにされたのだった。

それを見て悲しく思い、

縛りをほどき、清らかな水で埃を洗い流した。

しかし、枝は傷み葉は縮れ、生気がなかなかもどってこない。

山の僧は老いて子がなく、この稚おきない松いとを愛おしんで赤ん坊のように大切にする。

これらの松が、竜が走るような姿となって、大きな清らかな蔭を作り、

その根が山の岩をも裂き、その太い幹が雷をも斥けるほどになるには、

どれだけ待たなければならぬのだろうか。

私はこの地こゝにいるのも残り百日の旅人、

それでいながら千年を生きよとする松を養うのである。

千年の松の根元には、不老の靈葉ぶくりようとなる茯苓ふくりようが生じるといふが、いまは景純形もない。

茯苓を待てない私の髪は日々に抜け落ちて行く。

古今いちふぎようは一俯仰の間、

この詩を作ってわが哀しみをここに託す。

【補足】〔(1) 地方知事の任期は3年の定めであったが、それを満たすことはほとんどなく、徐州じよにいるのもあと百日ほどだろうと蘇軾は考えていた。(2) 「一俯仰いちふぎよう」とは下を向いて上を向く間のわずかな時間のことで、蘇軾は頻繁に用いている。(3) この

ころに杭州知事であった趙抃〔→作品番号 05-3-066〕が政界を引退し、蘇軾はそれを慶賀する手紙を送っている]

■【05-5-008】遊桓山、会者十人、以春水満四沢、夏雲多奇峰為韻、得沢字

【解題】10人の者と桓山に遊び、「春水満四沢、夏雲多奇峰」の句から1字ずつを分けて韻として用い、10人が詩を作った。蘇軾には「沢」の字が当たった。桓山は徐州の町の東北二十七里にあって、下に泗水を臨む山で、遠く春秋時代に桓魋を葬ったことからその名がある。桓魋は孔子を嫌って殺そうとした人物。

【訳文】

東の郊外に春を尋ねようとしたものの、  
 まだ鶯も見ないし咲いた花もない。  
 春の風はいまはまだ流れる水の中にあるのだろうか。  
 その春の水を水鳥が拍拍と打つのに誘われて、  
 篙半分ほどの深さの川に舟を浮かべる。  
 ゆらゆらと流れに任せ、桓山の下で纜を繋ぐ。  
 詩を長く吟じつつ軽やかに山に登り、  
 古い墓所と思われるところで、  
 泉下の人を吊おうと琴を奏で、  
 かそけき音が磔磔と響く。  
 昔の人を偲ぶものは何も遺されておらず、  
 人間世界は真実の永遠の住まいではないと悟る。  
 暮れ方に百歩洪に回り、おのおの岩の上に座る。



ここに皆の顔ふれを見て、

私はこの仲間にふさわしい人間ではないのを恥ずかしく思う。

月が現れて、

流れに臨んでふえ簫を吹く二人を照らし出す。

このときの歓びこそは不朽のもの。

首を回らせば遠く歳月を隔てて「斜川での遊び」が想像され、

この詩を陶淵明に寄せるのである。

【補足】 [(1) 琴を奏でたのは戴日祥たいにちしょうという道士で、笛を吹いたのは王適おうてき、王適おういつの兄弟であることが、次の文章などから知れる。(2) この詩の終わりにある「斜川での遊び」とは、陶淵明が 700 年ほど前に郷里の川で遊んだことをいう。陶淵明がその日の遊びを詠んだ詩は、淡々と叙述する中に深い味わいを湛え、叙景詩の新たな世界を拓いた名作とされる。蘇軾のこの詩もそれに近いものがあり、後に、陶淵明の詩境に迫る先駆けとなる作品であるといえるだろう]

## ■ 【05-5-009】 游桓山記

【解題】 上の詩で見た桓山かんざんでの遊びについて記した文章。

### 【訳文】

元豊二年正月己亥の晦、春の新しい服もてきて、数人の仲間とともに泗水のほとりに遊び、桓山に登った。

石室に入り、道士の戴日祥たいにちしょうが雷氏らい [唐代の有名な琴の製作者] の琴を弾いて、『履霜りそう』の古い音を聞かせてくれた。

「ああ、ここは(春秋時代の宋の国の)司馬桓魋しほ かんたいの墓ではなからうか」

と、私が嘆じつついつと、ある人が、

「墓で琴を弾くのは、礼に合致するものなのでしょうか」

と、いった。

私はこのようにいった。

『礼記』には、季武子の葬儀のときに、(孔子の弟子の)曾皙がその門に倚って悲しみの余り歌ったとある。孔子はあたかも日や月のような人であったのに、桓魋はその命を害おうとした。桓魋は己のために立派な石の棺を用意しておこうとし、三年たっても完成しなかった。つまりは、桓魋は古の愚人であったのだ。我らはこの間にその墓を弔ったのだが、桓魋の骨も毛も爪も歯もすでに塵と化して、風に吹かれて飛び去ってしまった。石の棺もなくなり、桓魋に付き従った者も、副葬品もすべて消え去った。我らが琴を弾こうが歌おうが、桓魋が知ることなどはありえないのだから、構いはしない。もしも桓魋が知るのであれば、我らが琴を弾き歌うのを聞いて、哀樂の常ならざること、自然の変化のやむことがないのを知って、己の愚かさを少しは治すことができるのではないだろうか」

人々はふむとうなった。

私は歌った。

「桓山之上、維石嵯峨兮。[桓山の上に大きな岩]

司馬之悪、与石不磨兮。[桓魋の悪は岩とともに消えずにある]

桓山之下、維水弥弥兮。[桓山の下には水が広がる]

司馬之蔵、与水皆逝兮。[桓魋の棺は水とともに流れ去った]

歌い終わると、石室から立ち去った。

このとき一緒だった八人は、畢仲孫、舒煥、寇昌朝、王適、王遙、王肆、軾の子の邁、煥の子の彦

拳であった。

【補足】[最後に名が挙がっている8人に、蘇軾と道士の戴日祥<sup>たいにちしょう</sup>を合わせて10人である。畢仲孫<sup>ひつちゆうそん</sup> [→作品番号05-4-018] と寇昌朝<sup>こうしょうちやう</sup> 朝<sup>じョ</sup>は徐州の役人、舒煥<sup>じょかん</sup>は何度も見ているように徐州の学校の教授、王適<sup>おうてき</sup>、王適<sup>おういつ</sup>、王肆<sup>おうい</sup>は徐州の学生で、王適と王適は兄弟であるが、王肆との関係は明らかではないようだ。王適は蘇轍の娘と結婚し、この後、何度も登場するようになる。なお、王兄弟の祖父も父も朝廷に仕える者であった]

## ■ 【05-5-010】 戴道士得四字代作

【解題】これも桓山<sup>かんざん</sup>に遊んだときの作品。同行した道士の戴日祥<sup>たいにちしょう</sup>には「春水満四沢、夏雲多奇峰」の句から「四」の字が当たり、蘇軾が代わりに詩を詠んだ。

### 【訳文】

某<sup>それがし</sup>は子どものころは江南<sup>こうなん</sup>のあたりにおったのだが、  
世俗を脱する道士の跡を慕い、  
たまたま白雲に従って郷里から流れ出て、  
いまは彭城<sup>ほうじやう</sup> [徐州] で薬草を売っておる。  
いつか雪や霜が髪を侵すようになり、  
冠や衣はいつも塵や土に汚れている。  
幸いなことに、三尺の長さの桐の琴があり、  
その音の中に山水<sup>こころ</sup>の意を籠めて過こしておる。  
夏<sup>か</sup> [中国] の音楽が夷<sup>い</sup> [外国] の音楽によって乱されてから、  
七弦の琴はすっかり棄てられてしまい、  
古<sup>いにしへ</sup> の『鹿鳴<sup>ろくめい</sup>』の曲はその名は知られてはいても、  
四弦<sup>こきん</sup>の胡琴で弾かれる曲のように好まれてはいない。

ところが、知事殿は独り古を慕い、  
 ともに孟嘗君の墓に詣でて涙を注ぎ、  
 桓魋の墓では某が弾く琴の音に耳を傾けてくれた。  
 庵に帰って琴を匣に納めつつ、  
 知事殿が去った後には誰がまた聴いてくれるのだろうかと嘆き、  
 石の壁にこの詩を掲げつつ、  
 遙か遠く千年の後に思いを馳せるのである。

【補足】[千年後の我々は、この詩によって戴道士の姿を偲ぶことができ、史書にその名を残した桓魋よりも、戴道士の方に心を惹かれるのである]

## ■【05-5-011】乞医療病囚状

【解題】州知事は地方行政のトップで、裁判権も警察権も有し、蘇紳試はさらに軍政も兼務していたので、かなりの広大な権限を持っていた。それだけに管轄する業務は多岐にわたり、真面目に取り組めば解決すべき課題が次々に出てくる。これは、獄中で病死する者を少なくするための対策を考えて朝廷に提出したもの。昔の牢獄の環境は極めて劣悪で、罪状が定まる前に病死する者が少なくなかった。政治が安定しているときには、為政者もそのようなところにまで目を向けて改善を試みようとするのだが、実効性はかなり限定的であったようだ。

### 【訳文】

元豊二年正月……[獄中で死ぬ者が多いことを憂慮する漢の宣帝の詔を最初に引用する]……  
 囚人が拷問によって死ぬことに対しては嚴重な法の定めがありますが、病死する者に対しては法の定めがなく、官吏は誰も責任を負っておりません。病死者があったことをただ報告するだけで、検視もなく、

たとえ百人が病死しても官吏が処分されることはありません。飲食が与えられず、病気になっても薬がなく、かくて死に至る者は数えきれないくらいたくさんいます。罪に応じて死ぬのであれば、深く哀れむまでもありませんが、罪は軽いのに繋がれたために死んでしまったのでは、その者を殺したと何ら異なりません。故なく殺された痛みが積もるならば、自然の陰陽の和をも乱すことにもなるでありません。……

[十年余りに獄中で病死する者に対する方策が建てられたが、役人たちが不便さを訴えてすくなくやむやみになってしまったことを述べる]……<sup>わたし</sup>臣が考えますに、獄囚が病死したことを獄官の罪とするのはまことに無理があります。なぜかといいますと、獄囚の生死は必ずしも人が左右できるものではないからです。必ずしも左右できるわけではないことなのに、官吏の責任としたならば、官吏は罪を恐れて、何とかして罰せられることから逃れようとするでありません。囚人にも少しも少しでも疾病があったならば、療養所に留め置いて、治療を施さずに放置するでありません。親族がいない者、いても遠くにある者は、療養所で死ぬことになり、その数は獄中で死ぬ者よりも甚だ多くなるでありません。……[上に述べた問題を解決するために獄に医者派遣する方策を提案する]……

【補足】[蘇軾の提案は、役人たちが結託して責任逃れをするのを防ぐことまでも考えた非常に綿密で具体的なもので、正確に上手に訳せると極めて面白いはずなのですが、残念なら訳者の力量は到底及ばないために肝心の部分を割愛せざるをえなかった]

## ■ 【05-5-012】 往在東武、与人往反作粲字韻詩四首、今黃魯直亦次韻見寄、復和答之

【解題】詩の題は、「先に東武<sup>とうぶ</sup> [密州<sup>みつ</sup>] にいたときに粲<sup>さん</sup>の字を韻として人と詩のやりとりをし、四首を作った。いま黄庭堅<sup>こうていけん</sup> [字は魯直<sup>ろちよく</sup>] [→作品番号 05-4-056] がそれにまた次韻して寄せてきたので、和して答える」。密州での詩は作品番号 05-1-023 以下で見ている。

## 【訳文】

昔、苻堅が荊州を破ったときに、  
それで何を獲たのかと問われたときに、  
立派な一人の人物と、その半分の人物、つまりは一人半だけだと答えたという。  
昔、蔡邕は不遇のままに老いたのだが、  
晩年に一人の知己を得たのを喜んだという。  
退隠後の友となるような我が同好の士を得たいものと、  
老いてからあわてて探し求めたところで、  
見つかるはずがない。  
いま私は、独り何の幸いがあることなのか、  
天下の才人をここに得たのである。  
文字をいたずらに遊ぶのは好みはしないのだが、  
この人の詩文を読むと百の憂いも消え去ってしまう。  
世間に詩文を作る人は少なくはないが、  
私の眼にはどの詩も空っぽの杯のようなものばかりで、  
ただこの人の詩を誦するときには、  
その音節を緩やかに味わうことができるのである。  
夜光の珠は一つでも価値ある宝だとされているが、  
この人の詩はそれに匹敵するような文字が幾つも連ねられている。  
この人は私を思っただけで瘦せるばかりだと歌っているので、  
私はたまたちに行かなければ真に怠惰な者になってしまうのだが、  
いまはわずかな禄を恋い慕って、  
寒い夜に一寸の炭で暖を取るような身であるので、

我が住まいをその人の傍らに定めるのは、  
はたしていつになるのだろうか。

想い見るのは、飄然と東南へ行くと、

江水は清く、かつ暖かで、

ともに名山を訪い、

かの僧忍そうにんや僧粲そうさんのような人から奥深い言葉を聴こうではないか。

【補足】 [この詩もそうであるように、<sup>こうていけん</sup>黄庭堅のことになる]と蘇軾はいつもほぼ手放しで褒めている。それが全体の主旨であるのは明らかなのだが、次韻詩の制約から無理に作ったとしか思えないと評されるような句もあって、読み取りにくい部分があるために、この訳文はかなりおおざっぱで、しかも途中の四句を割愛している。「粲」の字の処理にも頭を悩ませたのだろう、さほど有名ではない僧の名として用いていて、苦し紛れのような気がしないでもない]

## ■ 【05-5-013】 祭文与可文

【解題】 蘇軾の大切な親戚であり先輩であり親友である文同ぶんどう [字は与可あざな よ か] [→作品番号 05-4-103 など] が1月20日に陳州ちんで亡くなった。62歳だった。文同は前年の終わりごろに都を出て新しい任地である湖州こに向かう途中であった。蘇軾は2月5日にこの祭文さいぶんを作った。

### 【訳文】

ここに元豊二年二月五日、従弟に当たる朝奉郎尚書祠部員外郎直史館権知徐州軍州事騎都尉ちようほうろうしやうしよ し ぶん いんがいらうちよく し かんけん ち じよしやうぐんしやう じ き との蘇軾は、謹んで清らかな酒を捧げ、湖州文府君の文同の霊を祭る。

その祭文さいぶんに曰く、  
い わ

ああ、哀しいかな。文君はまた酒を飲むことができるのだろうか。文君はまた詩を賦して自ら楽しむことができるのだろうか。文君はまた琴を弾いて自らくつろぐことができるのだろうか。

ああ、哀しいかな。私はなにお忍びつつこのように言って、気が塞ぎ、胸が填まって嗚咽する。涙が下って止まらず、衣が濡れる。

涙を収めて自問する。人は誰のために慟哭するのか。道が行われな<sup>みち</sup>いとき、私は哀しまずにはいられない。ともに悲しんでくれる友がい<sup>か</sup>ないわけではない。しかし、激しくもなく鈍くもなく、人に招かれて靡くもなく、人に排撃されて去く<sup>い</sup>てもなく、親しくしようとしてもできるものでもなく、疎んじようとしてもできるものでもない、そういう人はただ文君だけであった。

ああ、哀しいかな。徳に則り義を乗るに当たって、文君のように和<sup>わ</sup>にして正<sup>せい</sup>だった者が他にいたのだろうか。民を養い風俗を厚くするに当たって、文君のように寛<sup>かん</sup>にして明<sup>めい</sup>だった者が他にいたのだろうか。詩を詠み賦を作るに当たって、文君のように婉<sup>えん</sup>にして清<sup>せい</sup>だった者が他にいたのだろうか。世に称賛されても辱められても、得<sup>う</sup>ようが喪<sup>あ</sup>お<sup>う</sup>が、文君のように安<sup>あん</sup>にして軽<sup>けい</sup>だった者が他にいたのだろうか。

ああ、哀しいかな。文君の死を聞いてから三日間、夜は眠らずにずっと座っていて、ふと夢に文君と一緒にいると見て、驚いて目覚め、夜具が涙でいっぱいになった。

念<sup>おも</sup>えば生ある者は必ずことごとく帰行き、百年生きても必ず至るのである。ただ文だけが不朽で、その中で人は不死でいられるという。いくら富貴でもいくら長寿でも不朽にして不死ということはない。

しかし、私はかつて文君からこのように聞いた。「この身は浮き雲のようだ。去くこともなく来ることもなく、亡びることもなく存することもない」。ならば、不朽だとか不死だとかはいかに足りないことなのだ。

ああ、哀しいかな。

【補足】[文同の人となりをいうのに、蘇軾は、和、正、寛、明、婉、清、安、軽の8文字を並べている。これらの先にどのような人物像が見えてくるだろうか]

## ■ 【05-5-014】題文潞公詩



【**解題**】政界の大物である文彦博<sup>ぶんげんはく</sup> [→作品番号 05-1-066] の詩を書き、短い感想を記した。文彦博は宰相の経験者として潞国公<sup>ろこくこう</sup>に封じられていた。

【**訳文**】

文潞公<sup>ぶんろこう</sup>の『時郎中<sup>じろうちゆう</sup>を送る』という詩がある。

……[詩の本文は省略]……

私はかつて潞公のお言葉を聞いたことがあった。遠くまでも見通す潞公の雄才は、もとよりちっぽけな人間が窺い見て測りうるようなものではなかった。学問の豊饒<sup>かんたい</sup>さに至っては、漢代以降の典籍をほぼ遺すところなく自在に読みこなして、それぞれの専門家でも及ぶものではなく、詩についても、ごく小さな技巧までももことごとく極めつして、やはり専門にするような者でも及ぶものではない。しかし、詩に関して潞公を称賛する者がいないのは、潞公の政治上の功績と徳の大きさに覆い隠されてしまっているからなのだろう。

上に記したのは潞公の幼いときの詩であって、これを観ると、精しく緻密に考え抜いて、一つ一つの句に典故がある。まことに長く研鑽を積み上げてこられたことがわかる。

元豊二年二月二十九日に書く。

【**補足**】 [ここに記されている文彦博<sup>ぶんげんはく</sup>の詩は、故事てんこ盛りの難しい詩で、まさしく「ちっぽけな人間が窺い見て測りうるようなもの」ではないので割愛した]

■ 【05-5-015】 作書寄王晋卿、忽憶前年寒食北城之遊、走筆為此詩

【**解題**】 都の貴公子である王詵<sup>おうしん</sup> [字は晋卿<sup>あざな しんけい</sup>] [→作品番号 05-3-037 など] に寄せた詩。寒食の日 [この年は2月30日であった] に、前年の同じときに王詵と北城<sup>ほくじょう</sup>で遊んだことを思い出して、この詩を詠んだ。「前年」とはいつなのか。1年前には王詵とは会っていないが、2年前に都の東で同じ時期に何度か会っている [→作品番号 05-3-

011] のでそのことかもしれないし、かつて都にいたときのことかもしれない。

【訳文】

かんじょく  
寒食の日、

都の北に上がる煙はわずかだけ、

落花と蝶かかたまりを作って飛んでいた。

遊びに出ると帰るのを忘れるという貴公子おうしん[王詵]の門前には、

立派な馬が繋がれていた。

貴公子は帳カーテンのうちにあって笙ふえを吹いていて、

ふわふわ  
霏霏と煙のように音が流れ出てきて、

道を行く人も頭こぶを垂れて聞き入っていた。

きょうきやく  
狂客[蘇軾]が門を叩いても、

貴公子は笙に没入したまま、

けいせい  
傾城[王詵のもとにいる歌妓]を出して客を迎えさせた。

書生[蘇軾]の老いた眼が美しい女性を見るのは稀で、

昔の画から抜け出てきたのではなからうかと思った。

お別れしてから、春はまた盛りになりつつある……

しかし、西の方を見ても、

貴公子の紅い日のような輝きを見ることはできない。

退隱の喜びを歌うときかいつかきたならば、

さかずき  
盞を手にして、貴公子の曲を聴きたいと思う。

■ 【05-5-016】 月夜与客飲酒杏花下

【**解題**】月夜に杏あんずの花の下で酒を飲んだときの詩。このときの客人は王適おうてき、王適おういつ [→  
作品番号 05-5-009]、張師厚ちようしこうらであった。張師厚は次の詩に見えるように蜀しよくの人であるが、詳しいことはわからない。

【**訳文**】

残りの春を散らすようにして、杏あんずの花が簾すだれへと飛んでくる。  
月の明も、風雅に遊ぶ人々を尋ねようと、簾から入ってきた。  
我等は衣をたくし上げ、月の光のもとへと歩み出す。  
明るい光が水草をひたすように流れる中で、花の影を踏む。  
酒を置くと清らかな香りが漂い、枝を曳いて花を雪のように散らせるまでもない。  
山辺の町の酒は薄くて飲むに耐えないものだが、  
諸君等に敢えて勧めよう、  
杯の中の月を吸うようにして飲んでみたまえ。  
憂うのは、ほかでもない、  
洞簫ふえの音が終わり、  
月が落ちて、  
酒杯が空になってしまうこと、  
そして、明日の朝にもも強く風が吹いたなら、  
緑の葉の中に見るのは、  
わずかに残る紅だけになってしまうこと……。

【**補足**】 [洞簫ふえを吹いたのは王適おうてき、王適おういつの兄弟だったようだ]

■ 【05-5-017】送蜀人張師厚赴殿試二首

【**解説**】<sup>しよく</sup>蜀の人である<sup>ちよう し こう</sup>張師厚が<sup>でん し</sup>殿試 [科挙の最終試験] を受けるために都に行くのを見送った詩。詩の内容から上るときと同時の作と思われる。

## 【訳文】

### 其の一

ここには、帰るのを忘れたままで、  
髪が白くまたらになってしまっているのも気づかずにいる者がいる。  
故郷のどれほどの物好きなのか、  
わざわざここにまで来てくれた者がいる。  
そびえ立つ山も、私が西を望む眼を遮ることはできない、  
<sup>そ おうざん よぎ</sup>貴君が楚王山を過ってからもずっと送り続けるであろう。

【**補足**】<sup>そ おうざん かんざん</sup> [楚王山は桓山 [→作品番号 05-5-008] の別称であるようだ]

### 其の二

<sup>うんりゅうざん</sup>貴君とは雲竜山の下で新しい春の衣に袖を通し、  
<sup>ほうかくてい</sup>放鶴亭の前で落ちる夕日を見送った。  
いまこのあたり十里は杏の花のひと色に埋められている。  
その中を貴君は馬を飛ばうように走らせて行くのだ。

【**補足**】 [(1) この詩を見ると、<sup>ちよう し こう</sup>蘇軾は<sup>ほうかくてい</sup>張師厚を連れて放鶴亭 [→作品番号 05-4-106] を訪ねていたことがわかる。(2) ここで少々疑問なのは、科挙の最終試験を前にして徐州にまで来る余裕が果たしてあったのかということ。<sup>あんず</sup>杏の花が咲いているので、これは2月ごろであったはずである。科挙は通例、1月に二次試験が行われ、3月初めごろに最終試験の殿試が行われる。その間に1カ月余りあるから日程的には可

能ではあるのだが…….]

## ■ 【05-5-018】 雪斎

【解題】 杭州の僧の法言が、西林法恵院に石を積み上げて「雪の山」を作り、その傍らの建物を雪斎と名付けた。法言がそのことを詩に詠んで寄せたので、この詩を返した。

### 【訳文】

貴僧が造った雪の峰はかの峨眉山、  
頂から西側は千里の雪、  
北に成都[実は杭州]を見下ろすと、井戸の底にあるかのよう。  
春の風が百日吹いても雪は消えない、  
五月になっても旅行く人は凍てつく身を震わせる。  
町の人々は名利の争奪を日々繰り広げ、  
人間世界は洗い流すことのできない熱い悩みに満ちている。  
貴僧はその傍らで、  
西の軒端で、雪の峰と向き合っている。  
私は夢に小舟に乗って呉越に行く、  
静まり返った長い廊下の先、  
月の光なのか、燈火の光なのか、  
門を押し開いて庭へと進むと、  
雪に埋もれた山だけがある。

## ■ 【05-5-019】 以双刀遺子由、子由有詩、次其韻

【解題】 ふたふりの刀を弟に贈ったところ、それについて弟が詩を詠んで返してきたので、次韻して答えた。

## 【訳文】

刀を納める<sup>はこ</sup>匣はなかつたけれど、

古代の「竜雀鑲」のような宝刀だと僕は見た。

これまでに<sup>うわばみ</sup>蛟蛇も堅い岩も斬ったことがないとしても、

こそ泥どもかこれを見たら、ぞっと首をすくめるに違いない。

僕の刀がどれほどのものであろうかと君に問いはしないが、

心の内に<sup>は</sup>愧ずべきものがある人間は肝を冷やすであらう。

そのような刀であるから、虎の皮に包んで僕は秘蔵していた。

この刀を見るとき、心は古井戸の水のようで、一切波立つことがない。

この刀が用いられずに置かれていることを、刀のために残念がることはないだろう。

用いることのできる者を選ぶのが難しいのを、僕は憂いていたのだ。

これを<sup>おび</sup>佩るのかしかるべき人でなければ、刀はきっと長く嘆息するだろう。

僕自身はといえば、

老いて衆人に軽んじられ、しばしば思いもよらない目に遭わされている。

昔、<sup>おうしょう</sup>王祥は、<sup>らん</sup>庭の蘭が香しく成長するように我が子がきっと大きな人間になると知って、

特に選んで刀を与える相手とした。

僕も同じようにして君に贈ることにしたのだ。

これでちまちま肉を切って、年に六回も七回も研ぎ直すようなことはしないてほしい。

じっと秘め置いて、いざというときに宝刀たる所以を示してくれたまえ。

この詩をもって刀の背に刻む銘とし、後に知者が見るのを待とうと思う。

■ 【05-5-020】 次韻田国博部夫南京見寄二絶

【解題】 田国博 [字は叔通] [→作品番号 05-4-112] が南京応天府で詠んだ詩を寄せてきたので次韻した。田国博は徐州の副知事で、何かの用事で南京応天府に出張していたのだろう。二首のうち一首を訳す。

其の一

歲月ころころは翩翩と坂を下る輪、  
貴君が帰あんずるころには、杏はすでに実を結んでいるだろう。  
杏の紅い花を落してしまったのでは、  
春の風だって憎たらしい。  
柳の花も榆にれの葉ももう春の姿ではなくなってしまった。

■ 【05-5-021】 再次韻答田国博部夫還二首

【解題】 田国博 [字は叔通] が徐州じょに帰還したので、上の詩に再び次韻した。やはり二首のうちの一首を訳す。

其の一

西の郊外では黄色い土が車輪を沈めるほどに積もり、  
土ぼりかまるで旅人を笑うかのように顔を覆う。  
貴君は仕事を終え、  
三千人の役夫も放たれたのだから、

これからは雨がたっぷり降って、  
残りの春を洗い尽くすのに任せるとしよう。

【補足】〔田国博<sup>でんこくはく</sup>は石炭を主題に詩を詠み、蘇軾が次韻しているが、訳すにはいろいろな典拠の処理が煩わしいので割愛する〕

## ■ 【05-5-022】 答郡中同僚賀雨

【解題】役所の同僚と「雨を賀す」ということについて話し、蘇軾は自分の考えをこの詩で示した。

### 【訳文】

水害あるいは早害<sup>かんがい</sup>が十年にもなり、  
飢えと疫病が全土に遍く広がり、  
困窮してますます悪い方に向かいつつあるときに、  
私は、毎年毎年、よい天候を祈り続けている。  
それは自分のために天の恵みを求めるものではないのだが、  
何度も天に請うのは、民に責任のある者としては、古<sup>いにしへ</sup>から恥ずべきこととされ、  
私が祈るしかできない無策であるのは鬼神もわかっているであろう。  
私は老いて腰も背も病んでしまい、人に向かってるくにお辞儀もできないのだが、  
さすがに天は祈る意<sup>こころ</sup>を無視はしないで、  
乾いた空に雲が重なり合い、石段が微かな潤いを帯び、  
蕭蕭<sup>しとしと</sup>と雨が降り、止んではまた降り、雨音は真夜中に及び、  
明け方に役人が集まってきて、その履き物ほど見ると泥にまみれている。  
私は人々とともに高樓に上ると、



麦畑に風が緑の浪を立てるかのように見える。

人々は雨を賀すのだが、

私は、諸君等が立派な賢策を論じているのに対して恥ずかしく思う。

豊作の年には五日に一度風が吹き、十日に一度雨が降るといふ。

天地はもとより常に完全に整っているわけではないから、

いくら祈ったところで、実は何の足しにもならないのではないだろうか。

優れた長官が治める土地には蝗も虎も入らないといふけれど、

そもそも蝗も虎もいなければよいだけの話だ。

まして、白い鵝鳥を殺して雨を祈るなど無意味なことでは、

そうした下策は取ってはならないのである。

【補足】 [これまで何度か見てきたように、蘇軾はしばしば天や神や仏に雨を祈ってきたのだが、それ以上に、人が何らかの対策を講じことが重要だと考えていたようだ]

## ■ 【05-5-023】 題逸少書

【解題】 3月3日、王羲之の書を模写して、この短文を書き添えた。

### 【訳文】

王羲之の『蘭亭』、『楽毅』、『東方先生』の三帖はどれも妙絶で、模写を繰り返して伝えられたもので

あっても、昔の人の筆の用い方の心を知ることができる。これを『遺教経』と比べると大きな差がある。

元豊二年上巳の日に写す。

【補足】 [王羲之の真筆は、唐の太宗皇帝が『蘭亭の序』を酷愛する余り自分の墓に持って行ってしまってからにはもはや地上には残っておらず、模写したものから王羲之

の書法を学ぶしかなかった。蘇軾は、模写として伝わるもののうちのどれがより本物に近いのかを見分ける眼力を持ち、ここでの指摘の通り、『遺教経』は王羲之の筆の運びを伝えるものであるかは疑わしいとされている]

## ■ 【05-5-024】 淵明非達

【**解題**】陶淵明は音楽を深く理解する者ではなかったという説。

### 【訳文】

陶淵明は『無弦琴』の詩を作って、このように歌った。

「但得琴中趣、[琴の趣を得るには]

何劳弦上声。[わざわざ弦を鳴らすまでもない]

私が思うに、陶淵明は音楽の神髄に通達した者ではなかったのだろう。音楽の基本である五音六律は音楽の神髄に通達するのを妨げるものではない。通達するなら、琴などなくてもよし、弦のあるなしにこだわりはしないのである。

【**補足**】[陶淵明は究極の音楽は弦のない琴の曲であるといい、これぞ真の音楽を知る名言であるとされていた。異説を唱えたがる蘇軾はこの短文を記したのだが、20年後にこの自説を否定する]

## ■ 【05-5-025】 留別叔通元弼坦夫

【**解題**】3月、朝廷から湖州知事に任じる辞令が下り、蘇軾は徐州を去ることになった。田国博 [字は叔通] [→作品番号 05-5-020]、寇昌朝 [字は元弼] [→作品番号 05-5-009]、石夷庚 [字は坦夫] の3人に見送られてこの詩を詠んだ。3人は徐州在任中ずっと蘇軾の仕事を支えてきた人々である。石夷庚は眉州の人とあるので、石康伯

[→作品番号 05-1-035] と同族でないかとの推測もある。

【訳文】

田君は、昔、同僚となったことがあり、

私に向かっていつも敬意を払ってくれた。

徐州にきてからはいろいろ間違っただけにしても、

その都度、ますますよく私のためにしてくれた。

寇君は、私と同じ蜀の人で、

孝悌の道をもって近隣の人々を感化し、

老いに至っても学問に努めている。

石君は我が眉州の後輩で、

強い風の中でも真直ぐに立ってしようとする草に似ている。

官職に就いてからは、

釜に塵が生じ、父母に炊事してもらわなければならない貧窮に甘んじている。

私は窮して旧くからの交わりを絶ち、世過ぎの計が拙いので、

私のまわりに集まるのは枯れ枝のような人々ばかりである。

その中で三君は最も厚<sup>よしみ</sup>誼を保ち、

互いに衣服を融通し合うような仲であることを続けてくれた。

三君は、私が徐州にきたときには、淮水<sup>わいすい</sup>の北で迎えてくれ、

三君は、私が徐州を離れるときには、睢陽<sup>きよう</sup>の道を送ってくれる。

願わくは、金石<sup>きんせき</sup>のような堅い契りを保ち、

白髪に至るまで凜凜<sup>きっちり</sup>と友情を貫きたいと思う。

## ■ 【05-5-026】 江神子

【解題】 同じく徐州<sup>じょ</sup>を去ったときの詞。

## 【訳文】

天涯流落思無窮。[天の涯<sup>はて</sup>に流れてきて窮まることのない思い]

既相逢。[逢ったばかりで]

却怱怱。[たちまちの別れ]

携手佳人、[妓女と手を携え]

和淚折殘紅。[涙とともに折り取る名残の紅い花]

為問東風余幾許、[花のために問う、春風が吹いているのはあとどれくらい]

春縦在、[たとえ春がまたいてくれても]

与誰同。[私は誰と一緒にいけばよいのでしょうか]

隋堤三月水溶溶。[ゆらゆら揺れる三月の運河の水]

背歸鴻。[北に帰る雁に背を向け]

去吳中。[南の国に行く私]

回首彭城、[振り返れば彭城<sup>ほうじょう</sup>の町]

清泗与淮通。[泗水<sup>しすい</sup>と淮水<sup>わいすい</sup>が一つになってそちらへと流れて行きます]

欲寄相思千点淚、[水に思いを託して寄せる千点の涙]

流不到、[流れて彭城に行ってくれるでしょうか]

楚江東。[つれなくも川は東に行ってしまうのでしょうか]

## ■ 【05-5-027】 減字木欄花

【**解説**】<sup>ほうもんりゅうべつ</sup>「**彭門留別**」との添え書きがある詞。同じく徐州を発ったときの詞である。

【**訳文**】

玉觴無味。<sup>さかずき</sup>[美しい觴も味がしません]

中有佳人千点涙。<sup>なみだ</sup>[だって中にあるのはあのお方の涙なのでから]

学道忘憂。<sup>まなぶみち</sup>[学問をすると憂いを忘れるとか]

一念還成不自由。<sup>いちねん</sup>[でも、別れの辛さの一念はどうにもなりません]

如今未見。<sup>いま</sup>[これからはもうお会いできないのでしょうか]

歸去東園花似霰。<sup>はな</sup>[もしもお帰りになったら、ここにはたぐさんの花のつぼみ]

一語相開。<sup>いっご</sup>[あのお方の一言でいっせいに開きます]

匹似当初本不来。<sup>あ</sup>[あのお方がいないときはまるで違うのです]

■ 【05-5-028】 罷徐州、往南京、馬上走筆寄子由五首

【**解説**】<sup>じょ</sup>徐州を発った蘇軾は、まず弟のいる<sup>なんけいおうてん ふ</sup>南京応天府を目指した。その馬上で作った詩。

【**訳文**】

其の一

<sup>じょ</sup>徐州の人々よ、そんなに引っぱ張らないでくれたまえ。

歌も笛も、そんなに悲しい響きを立てないでくれたまえ。

僕の生は<sup>せい</sup>寄せるかごときもの、別れはただこれだけではない。

別離は随所にあり、愛を結ぶからこそ悲しみ悩みがあるのだ。

僕はもとより皆に恩を施したことがない。

いったい誰のために皆は泣くのか。

子供ではないのだから、

鞭や鞍が裂けるほどに引っ張るのはやめてくれたまえ。

ほら、あそここの道ばたに、二人、石に刻まれた人が並んでいる、

あの石人は知事が去るのを何度となく見てきたはずだ。

いまこのありさまが知れたなら、

石人は手を打って大笑いし、冠を結ぶ石の紐も切れてしまうだろう。

【補足】[(1) この詩で、例の「吾生如寄耳」[吾が生は寄せるが如きのみ]を用いている。地方官としての移動を繰り返して、「寄せる」ということにますます実感が籠るようになったのだろう。(2) 徐州の人々が蘇軾との別れを惜しんだと、ユーモラスかつやや大げさに詠んでいるのだが、弟に向かって実態とかけはなれた自慢をしたわけではないのだろう。蘇軾は洪水との闘いで顕著な功績があっただけでなく、その他にも重要な施策を朝廷に具申して実施している。分け隔てなく多くの人と交わる大らかな人柄と世に抜きん出た文才は非常に魅力的で、真実別れを悲しんだ人々が大勢いたのだろう]

## 其の二

どこから土地の父老たちはやってきたのか、

たくさんの赤い花束を抱え、

僕の馬の前で盃を洗って捧げ持ち、

僕の長寿を祈りたいという。

「かの年に知事殿がおられませんなら、

我等はみな魚の餌になっておりました」

僕は鞭を挙げて父老に頭を下げる。

「諸君等はこの知事を困らせないでくれたまえ。

この知事はひどく外聞の悪い困った人間で、

行く先々で災害、凶年を招いてきたのだ。

たとえ、水害がきたのは知事が怠けていたのが原因ではないとしても、

水害が去ったのは明らかに知事の功績ではないのだ」

【補足】[「行く先々で災害、凶年を招いてきた」というのは、<sup>こう</sup>杭州時代には飢饉と蝗害、<sup>みつ</sup>密州時代には日照りと<sup>こうがい</sup>蝗害、盗賊の難に見舞われたことをいうのだろう]

### 其の三

西から流れてくるのは古汴河、

<sup>なんけい</sup>南京に向かう僕を迎えてくれる。

古汴河は東に流れて<sup>わいすい</sup>淮水、<sup>しすい</sup>泗水に入る。

僕が徐州に向かったときに、

古汴河は僕を見送ってくれた。

しばらく僕は古汴河と別れていたけれど、

またここで見ることになった。

古汴河はずっとここに余情を湛えていたかのようだ。

春の雨は古汴河をさざ波でいっぱいにし、

一夜を経て<sup>こうろ</sup>彭城へと至るであろう。

古汴河の水は僕の<sup>こうろう</sup>黄樓の下を通過し、

あの朱い欄干と高い<sup>こうろう</sup>蕞を水の光で照らすことだろう。

ひやくほこう  
そして百歩洪へと至り、

かの月の夜に川音を聞いたあの人がいないのを悲しむのである。

#### 其の四

なんけい よぎ 前年、南京を過ったときには、ゆずらうめ 麦が稔り、桜桃の実が熟していた。

いまかつて遊んだところにきてみると、

桜桃の実も麦の穂もまだ黄緑色である。

三年の歳月も遠い昔のよう、

人間世界にはどれほどの変化があっただろうか。

しかない下級官吏のまま老いてしまった人もいれば、

活躍の場もなくいたずらに筋肉がふやれしまった將軍もいるだろう。

僕は羽根を翻すように三度任地替えとなり、

迎えられたり送られたり、車を転じるようなせわしなさを。

郷里に帰ると決めるのは何時になるのか。

でも、ここに住もうと決めた場所はかの田舎にあるのだ。

#### 其の五

ぼく 僕がどの地を卜して行こうとしているのかというと、

せきぶつさん 石仏山の南の路、その下に川があるだろう、

けい そこらあたりに千畦の土地を得て、

食べるための稲と酒を醸すための稲を植えるつもりなのだ。

竜が棲んでいるといわれてきた山の泉に湧く水は、

流れ下って豊饒の土地を育み、



かつては一畝が一金の価値を生んだのだが、  
近ごろでは破綻して逃亡した農家が多いと聞く。  
僕は官服を棄て去り、剣を売って牛と農具を買い、  
廢屋に丈高く草が生えてしまっているその山の地に行くのだ。  
僕はそのように思っていて、ひとつ恐れているのは、  
帰ろう帰ろうとずっと願っていないから、  
墓所に永遠に祀られるときになってようやくそれを果たす身となることだ。

【補足】 [石仏山は蘇軾の郷里の眉州眉山県にある]

## ■ 【05-5-029】 答呂熙道

【解題】 蘇軾は南京応天府に行き、そこで蘇轍や張方平に会い、半月ほど滞在したことがこの手紙からわかる。表題に呂熙道とあるが、これは呂希道 [字は景純] [→作品番号 03-3-012] に宛てた手紙であろうとされている。実際に書いたのは新しい赴任先である湖州に到着した後である。

### 【訳文】

南都[南京応天府]に半月滞っていたのは、恍然と一つの夢のようです。徳義を企てよと思っ  
いつも悵然としてしまいます。我が弟は朴訥で寡黙な人間でありますから、時勢を軽んじ道を重んじる  
長者でなければ、誰も厚く親しくはしてくれません。湖州の江山、風物は人間世界に類がないほどで  
す。それに加えて、事が少なくて眠りが十分に足りるのなら、拙い者にとってはまことに慶賀すべきありま  
しょう。

【補足】 [南京応天府では、黄河が決壊したときに鄆州で治水に功績があった応言と  
いう僧に会っている。そのことについて記した文章を第7章で見ることになる]

## ■ 【05-5-030】 与文郎

【解題】 これは、親友の文同ぶんどうの子の文務光ぶんむこうに出した手紙。

## 【訳文】

非常な苦しみを受けてより、我が気力は、以前とはすっかり変わってしまいました。あれからニカ月、追慕の念は窮まることなく、どうすることもできません。先にそちらに参った者が帰って、お手紙を頂戴し、おせび泣くことをさらに重ねております。我等が親しくするところの貴君の孝誠は深く篤く、哀しく打ち砕かれておられることは我らの思いの及ぶどころではなく、何も手につかずにおられることでありましょう。貴君のお心を何らお慰めすることもできません。何はともあれお体を大切に、よく召し上がりますように。

【補足】 [この手紙は、文同ぶんどうが亡くなった悲しみについて記している [→作品番号 05-5-013]。文同ぶんどうは陳州で亡くなり、息子の文務光ぶんむこうは、父の棺を郷里に持ち帰るための準備を陳州で進めていた。実際に棺を船に載せて故郷に向かったのは翌年の春で、そのことについては第6章で見ることになる。文務光は蘇轍の娘と結婚していたので、その間を行き来する人が蘇軾宛の手紙が届けたのだらう]

## ■ 【05-5-031】 靈壁張氏園亭記

【解題】 蘇軾は3月末に南京応天府を發ち、王適おうてき、王遙おういつの兄弟 [→作品番号 05-5-009] が同行した。2人は半年ほど蘇軾の近くで過ごし、結果として後に大きな役割を担う。南京からは運河を使った船旅で、三泊して靈壁鎮れいへきちんに至り、そこで張碩ちようせきに会い、この文章を書いた。張碩については本文中で触れている。

## 【訳文】

都から東に道をとると、水路を選べば濁流に浮かび、陸路を選べば土埃を浴びながら見渡す限りの田の中を行くことになり、どちらにしても行く者をうんざりさせる。およそ八百里で、靈壁<sup>れいへき</sup>の張氏<sup>ちやう</sup>の園庭が汴河<sup>べんが</sup>の北側にあるの見えるに及んで、初めてほっとした気分になる。

外に向かってたぐんの竹がすりと飛び出し、背の高い木々がこんもりと繁っている。中に汴河の水を引き込んだ池があり、そのまわりに山から取ってきた奇岩が険しい丘のように積まれ、水辺には蒲や葦や蓮があって江湖の景観を作り、椅、桐、檜、柏が並んで山林の気配を生み、珍しい花や美しい草は都会的な雰囲気を出し、華やかな大きな建物は呉蜀の巧みの技を見せている。

この園庭の奥深さは身を隠すに十分で、その豊かさは身を養うのに十分である。収穫される実や野菜は近隣の人々をも満足させ、魚や筍を茹でれば四方からの賓客をもてなすことができる。

私は彭城<sup>ほうじやう</sup> [徐州] から呉興<sup>ごこう</sup> [湖州] に移るに当たって、宋 [南京] 宍<sup>せき</sup> 天府<sup>てんふ</sup> から舟に乗り、三泊してその園庭のもとに至った。輿に乗ってその門を叩き、張氏の子の碩君に会って、碩君は私に文を求めた。

張氏は代々世に顕れ、碩君の伯父の殿中君と碩君の父の通判府君が初めて靈壁に住まいを構え、この園庭を作り、蘭皇亭を建てて親を養った。その後、朝廷に出て仕えて、その当時に名声をもって聞こえ、その余力をもって、日に日に園庭を豊かにして今に五十余年に及ぶ。木々はどれも十人が腕を伸ばして抱えるばかりになり、岩壁は暗く聳えるまでになった。およそ園中の百物は、人の意に適わないものは一つもなく、長くいろいろな用途に用いられてきた。

古の君子は必ずしも仕えたわけではなく、必ずしも仕えなかったわけでもない。仕えるときはその身を忘れ、仕えないときはその君を忘れた。これを飲食に譬えると、たまたま餓え、たまたま飽くといったけのことである。

いまの士で、義を踏み行い、節に赴く者は希である。郷里に安らかに処る者は出るのは難しく、出て利に狃る者は帰るのを忘れる。前者は親の期待に背き世間との交わりを絶つとの譏を受け、後者は俸禄を慕って事なかれて過ごす弊害を生む。

張氏の父君が子孫のために計画し、慮ったことは遠大かつ行き届いたものだった。場所を汴河と泗

水の間に選すいび、舟も車も集まりやすく、朝廷に仕えるにしても、宴遊を楽しむにしても、他に求めることなくここで足りるのである。その子孫が門を開いて仕えるのなら、半歩で都に行け、門を閉ざして帰って隠れるのなら、山林を仰ぎ見て過ひごすことができる。生を養うにしても、性を治める[心の本源を鍛える]にしても、義を行いうにしても、志を求めて適じとくころ可いならざるはないのである。それ故に、その子孫で仕える者は皆官員として優れた能力があると称賛され、園庭にいる者は節を有して潔く退いたとされるのである。このようであるのはまさしく先祖の君子の余沢によるものである。

私は彭城にいること二年、その風土を楽しみ、そこを去るのは忍び難いものがあった。彭城の父老が私を厭うことがなければ、泗水のほしすいどりに田を買って、そこで余生を送りたいと思う。そうなれば、南に靈壁を望み見て、鶏や犬の聲が互いに聞こえ合う距離にあり、ふらりと歩いては張氏の園庭に往き来して、季節ごとにその子孫と遊べるであろう。必ずその日があるに違いない。

元豊二年三月二十七日、記す。

【補足】〔(1) 弟に送った先の詩では、退隱する場所として郷里の石仏山せきぶつざんの南の路の川辺を思い描いていた。蘇軾は張氏の園庭を見て、退隱のもう一つのイメージをここに思い描いた。都から遠く離れた蜀の地でなくてもよいのだ。(2) 「仕えないときにはその君を忘れた」〔原文は「必不仕則忘其君」〔必ず仕えざれば則ち其の君を忘れる〕〕とは大胆な言い方ではなかろうか。蘇軾は、国家の隅々にまで皇帝の威令を浸透させることを任務とする官員である。孔子の教えを学び、8歳とのきに4人のスーパースターに憧れ、科挙を受け、制科せいこにも合格して、己には国のため民のために働く使命があると固く考えてきた。しかし、その皇帝の威令の多くが蘇軾がよしとはしない新法に入れ替わり、自分の信念と職務の実態との矛盾に深く悩むようになった。詩文においてしばしば退隱を言いつつも、それはいますぐに実現してよいものではないと考えていた。杭州こう、密州みつ、徐州じょで矛盾に苦しみ続けつつも、官員としての責務を果たそうと懸命に努めてきたのだが、張氏の園庭を見て、「必不仕則忘其君」の言を吐

くに至ったのであろうか。(3) このころ蘇軾は自分の置かれている状況をどのように認識していたのだろうか。徐州に赴任する前に都に入れなかったことは、政治的にかなり危険な状況にあると思い知らされた出来事であった。その一方で、徐州での洪水対策では皇帝から褒められ、新たな任地である湖州は蘇軾が希望していた江南こうなんの地で、すでになじみのある美しい場所であった。まだ希望はあると思いつつ湖州に向かっていたのであろうか。実は、蘇軾の政敵たちは靈壁鎮れいへきちんで書いたこの文章をすぐに手に入れ、「必不仕則忘其君」の句を見て、蘇軾が人臣としての責務を忘れて不穏当な言辞を振りまいているまぎれもない証拠をまた一つ掴んだと、大いに色めき立ったのだった]

## ■【05-5-032】書泗州孫景山西軒

【解題】蘇軾を乗せた船は南へと向かい、宿州しゆくを経て、淮河わいがに面する泗州しに至った。泗州は水運上の重要な場所で、蘇軾がここを通過するのは3度目であった [→作品番号 03-4-032]。泗州では孫奕そんえき あざな けいざん [字は景山] に会い、その西軒せいけんにこの詩を書いた。孫奕の名は作品番号 05-1-008 で見ている。

### 【訳文】

落ちゆく日の明るさの中にぼつんと塔が建っている。

我が病身を取り巻くように青い山々が連なっている。

貴君がこの西軒から西方を望む心中には、

塔の中の人に恥じるようなものは何もないのだらう。

【補足】 [この詩に詠まれている塔は、僧伽塔そうがとう [→作品番号 03-4-032] で、「塔の中の人」とは、高僧の僧伽その人である]

## ■ 【05-5-033】 泗州過倉中劉景文老兄戲贈一絶

【解題】 泗州の倉中で劉季孫 [字は景文] に会って、戯れにこの詩を贈った。劉季孫はその地の名士であったようだ。

## 【訳文】

貴君には昔の大將軍のような遠大な策があり、  
 貴君には昔の大名手のような弓射の技がある。  
 だから、この蘇夫子[蘇軾]が、  
 湖州知事になれたのを大変な僥倖のように思っているのを、  
 笑わずにはいられないのである。

【補足】 [(1) 湖州の知事になったのは僥倖であると、ここの文脈ではやや自虐的に歌っているのだが、願っていた江南の、しかも極めて美しい地に行けるのは、まさしく僥倖に他ならなかったのであろう。(2) 泗州では、これより6年後に科挙に合格する張大亨 [字は嘉父] にも会っている]

## ■ 【05-5-034】 過淮三首贈景山兼寄子由

【解題】 淮河を渡ってさらに南に行くときに、孫奕 [字は景山] にこの詩を贈るとともに弟に寄せた。

## 【訳文】

其の一  
 ご機嫌うるわしいかな、大河、淮河よ。  
 ここを往来するのはこの十年に三度目。

功名を挙げる気などすでに消え、

故郷に帰る計画は遥かに遠い。

今日の風はこの旅人を憐れむのか、いつもの高い浪はない。

夕方こうたふに向かう洪沢の入り口では、

船の停泊場所を求めて捍索がんさく[船を岸に繋ぐ綱]の音が雷のように響き合っている。

【補足】[船着き場のある入り江で、よい場所を確保しようと、たくさんの船がひしめきあっていたのだろう。洪沢湖こうたくこの名は作品番号 03-4-035 で見ている]

## 其の二

淮河を過ぎると山はやや山らしくなり、

松や檜も立派な姿に繁るようになる。

藹藹ぼんやりとした霧の中に隠れる一つの寺、

そのあたりを訪ねると、

冷冷さらさらと小さな泉が流れ出る。

巖いわおに寄り添うように巡らされている小さな欄干、

そこに住まう友人はまことに吏隱りいんの人である。

振り返って臨淮りんわいの町を望むと、

東風に乗って町のさざめきが聞こえてくる。

【補足】[「吏隱りいん」とは、官職に就きながらも隱者いんの精神を有する人で、この詩では孫奕そんえきを指す]

## 其の三

首こうべを回らせば、君は南京なんぎんの役場やくばにいて、

高く積まれて簿書の中に埋もれている。  
 いつか淮河の水で、人を汚す塵を洗い流してしまうとよいだろう。  
 ここから僕の旅はよいよ佳境へと入って行く。  
 しかし、独りであるから長く寂しい思いをしなければならない。  
 だから、君が百首の詩を作って、そちらの春を写して送ってくれるのを、  
 僕は心待ちにしているのだ。

### ■【05-5-035】舟中夜起

【解題】上の詩にあった洪沢に停泊した夜のことだろうか、舟の上で目覚めて詠んだ詩。

#### 【訳文】

微かな風まこもに、孤がまや蒲さくららが蕭蕭と音を立てている。  
 雨であろうかと、舟の戸を開けて見る。  
 湖に月の光が満ちている。  
 舟の上の人も水の上の鳥も同じ夢の中。  
 何かに驚いたのか、大きな魚が狐のように走る。  
 夜は深まり、人と物とはもはや関わりを持たない。  
 私だけが、自分の影と喜びを共有している。  
 渚すみずの蚯蚓ミミズが悲しげに鳴くのは、  
 ひそやかに潮が上がってきたためだろうか。  
 月が柳に落ちかかって、蜘蛛の糸が浮かび上がる。  
 生きとし生けるものは、



あわただしも憂患の内にあるのだろうか。

この清境よいときが眼よぎを過るのはほんの一瞬でしかない。

鶏が鳴き、鐘が鳴り出せば、鳥たちが峙を離れて行くだろう。

そして、船頭が太鼓を撃って呼び合い、

舟はまた出て行くのである。

【補足】 [(1) 後半にある「此生忽忽憂患裏、清境過眼能須臾」 [此の生こは忽忽せいたる憂患ゆうの裏、清境せいの眼こつこつを過るは能く須臾ゆう] の二句は当時の蘇軾の心境をよく表すものであるのだろう。湖州こに行く僥倖を得たけれど、美しい町にいられるのもわずかの間かもしれないという恐れをもしかしたら蘇軾は抱いていたのだろうか。(2) 泗州しから揚州ように至る途中で高郵県を過り、そこで参寥さんりょうと秦觀しんかんが合流したようである。参寥は徐州を発ってから [→作品番号 05-4-098]、なおこのあたりに留まっていて、いよいよ杭州こうに帰る気になったのだろう。秦觀 [→作品番号 05-4-093] は高郵県の人で、科挙に落第した鬱憤晴らしというわけでもないだろうが、この機会に杭州からその先の越州えつも見てまわろうと旅に出たのだろう]

## ■ 【05-5-036】跋欧陽家書

【解題】欧陽脩おうようしゅうが甥に書いた手紙を筆写して、その後ろのこの短文を添えた。最初に欧陽脩の手紙の本文がある。

### 【訳文】

「南方が多事になって以来、日夜、君のことを案じておりました。昨日、お手紙が届き、新婦も諸孫も皆が安らかで、官の仕事も事なきを得ていると知り、遠く想う気持ちはほゞ解ほどけました。

このように心配するのは常のことです。我が欧陽氏は南唐国から宋朝に帰して何代にもなり、朝廷の

官禄を蒙り、私もまた栄えて名を顕し、諸君等も官品に列なり、御恩に報いることを思わなければなりません。たまたまこのように多事となったときには、朝廷の指示によって心を尽して前に向かうべきで、事を避けてはならないのです。難事に臨んで節に死ぬのは、諸君等の栄えとすべきことであって、公のため心を尽すならば、おのずから神明の祐けがあるでしょう。事を避けようなどと、慎んで思ってはならないのです。

昨日のお手紙では朱砂しゅさ〔仙薬の原料になるとされていた硫化水銀〕を買って送ってくださるようなことが書いてありました。しかし、私はこの物を欠いておりません。君は官員として廉潔を守るべきで、官の立場で物を買ってはならないのです。私は官員として地方に赴任したときに、飲食に必要とする物のほかには一つの物も買ったことはありません。君もこのことを戒めとするように。……」

これは欧陽文忠公〔欧陽脩〕が甥に与えた手紙である。

元豊二年四月十二日、蘇軾が題す。

【補足】〔これは、これより 27 年前に南方で反乱があったときに、甥の欧陽通理に宛てた手紙であると推定されている。湖州に向かう途中で特にこれを筆写したのは、地方官としての心構えを新たにするためであったのだろう〕

## ■【05-5-037】西江月

【解題】続けて欧陽脩と関わりのある作品。蘇軾は長江まであとわずかの揚州に至り、平山堂へいざんどうでこの詞を詠んだ。平山堂はかつてこの地の知事であった欧陽脩が建てたもので、詞の冒頭にあるように、蘇軾がここを訪れるのは 3 度目であった。1 回目は杭州こうに赴任する途中で、そのときは直前に欧陽脩に会っていた。2 回目は杭州から密州みつに移る途中で、欧陽脩はすでに亡くなっていた。2 回目のときに詠んだ詩は作品番号 05-1-001 で見ていて、それから長江以北の地を回ってまた同じ場所に戻ってきたのである。

【訳文】

三過平山堂下、[三度通り過ぎる平山堂の下]

半生弾指声中。[人の半生などは指を弾く音のうち]

十年不見老仙翁、[老仙翁[歐陽脩]を見なくなって十年]

壁上竜蛇飛動。[しかし、翁が書いた字は壁の上で竜のように勢いよく飛んでいます]

欲弔文章太守、[文章を一生の仕事としたかの知事を弔うために]

仍歌楊柳春風。[歌うのはかの名詞『楊柳春風』]

休言万事転頭空、[いうのはよしましよ、万事は頭を回らせる間に空しくなるなどは]

未転頭時皆夢。[なぜって、頭を回らすより前にみな夢となってしまうのですから]

【補足】『楊柳春風』は、歐陽脩が平山堂で作った詞で、そのなかに「手づから種  
える堂前の楊柳、別れ来て幾度の春風」の句がある。歐陽脩が植えた楊柳が蘇軾が訪  
問したときにも残っていたかどうかはわからない]

■ 【05-5-038】 余去金山五年而復至、次旧詩韻、贈宝覺長老

【解題】蘇軾は長江を渡り、南岸の鎮江 [潤州] に至った。ここからは蘇軾にとつても我々にとつてもすでに馴染みの土地である。この詩の題は、「金山を去ってから五年、ここにまた至り、かつての詩に次韻して宝覺長老に贈る」。鎮江にあるいわゆる鎮江三山の一つである金山は何度が訪れていて、5年前に柳瑾や刁約とともに登ったときには、酒を飲み過ぎて宝覺の禅榻で眠りこけてしまったという詩を詠んでいた [→作品番号 04-3-013]。その宝覺がいまも金山にいたのでこの詩を贈った。

## 【訳文】

その昔、一斗の酒を贈ってまんまと知事の地位を射止めた者がいた。

私は、酒よりも、寺の厨房なっとうの法鼓ほふくの香りを愛するものである。

かつてここに来たことは、真に一つの夢として過ぎ去り、

師おんの高譚たかたんによって、五年間のせわしなさが洗われる。

時折、山ひたの折れ曲がりまがりのあたりから風が吹いてきて、

ゆっくりと、明るい月が寺の屋根に沿って動いて行く。

頭を深く下げ、師に願うのは、

この旅人を憐れんで、遙かな「帰路」を指し示されよ。

【補足】〔(1) 法鼓ほふくは大豆を発酵させた、納豆と同様のもの。(2) 「旧事真成一夢過、高譚たかたん為洗五年忙」〔旧事きゅうじ 真まことに成なる一夢いちむすの過すぎるに、高譚こうたん 為ために洗あらう五年ごねんの忙いそがしさ〕の二句は、5年ぶりに江南こうなんに戻ってきた実感なのだろう。かつての日々はすでに夢のようであるが、いままたその夢の続きに繋がるのである。(3) 最後の「帰路」は、金山きんざんからの帰り道に重ねて、心の究極的な安定へと帰り行く道をいうのだろう。蘇軾は迷いのある「旅人」なのである〕

## ■ 【05-5-039】 大風留金山両日

【解題】宝覺長老ほうがくちやうろうに帰路を教わった蘇軾そくであったが、強い風のために金山きんざんに足止めされてしまった。

## 【訳文】

塔の上方にぶらさがる鈴が、何やら独り言をいっていた。

「明日は顛ひんするような風。川は渡れやしないよ」

朝になってみると、

白い浪が山の崖に打ち付け、軒や窓へと、下から雨を飛ばしている。

万斛こくをも載せる竜驤おおぶねも敢えて江かわに出ようとはしない。

むしろ、木の葉のような一艘の漁船が、波にもまれるがままになっている。

よく考えてみると、赴任先の町で急ぎの用事が待っているわけではない。

竜王は誰に腹を立ててこの風を吹かせているのやら、

笑って見ていけばよいのだ。

それほどのことでもないのに、金山きんざんに留まると決め込んだので、

下僕たちは意外に感じているが、

それでもこの風であるから、私が町に戻ってこなくても、妻子は許してくれるだろう。

こうした騒ぎのなかでも、

参寥さんりょう師しだけは、朝の粥の時刻を報せる太鼓が鳴るまで、

一晩中眠らずにいたのはどうしてだったのだろうか。

【補足】[参寥 [道潜] は高郵県で合流していたのだが、現存する詩ではここで初めて同行していることが詠まれている]

## ■ 【05-5-040】 祭弔景純文

【解題】5年前に一緒に金山きんざんに登った刁約ちようやく [字は景純あざな けいじゆん] も柳瑾りゆうきんもこのときにはすでに亡くなっていた。刁約が亡くなったのはこれより2年前、84歳だった [→作品番号05-3-069]。蘇軾ちんこう じゆんは、鎮江 [潤州] にある刁約の墓に詣で、この祭文を読み上げた。なお、柳瑾を悼む祭文は作品番号05-3-006で見ている。

### 【訳文】

ああ、私は貴君よりも年少であること四十二歳。貴君は私を年少者として扱わずに、兄弟のように思ってくれた。いま私はすでに老い、髪が白くなってしまった。貴君は永遠のもとへと帰り、もう年を取ることがない。服喪の期間は過ぎてしまったけれど、私は悲しみのあまり泣かずにはいられない。

貴君が亡くなり、この地の風俗を私は哀しむ。長江を渡って東にきて、美しい風光の中に、見上げる一万本の松がある。鬱蒼と繁り、青く勢いが盛んである。なお想うのは、この松の下で、ゆったりとした衣をまとい、杖をついて、貴君が私を門に迎え入れてくれたときのこと。手を取り合って笑ったのに、まさか、たちまちにして、貴君がこゝに墓の中に納まってしまふとは。山はかつてのまま、草木には再び春が巡り戻ってくる。親しくしてきた人のうち、天下にいま半分も残っているだろうか。日中は心が乱れ、夜は眠れない。私は道に通じた至人ではないので、心が右往左往してやまない。

ここにあるのは一斗の酒と二羽の鶏だけ。いささか私の哀しみをここに写すものである。

【補足】 [刁約が家の近くにたくさん松を植えていたことは何度か見ている]

## ■ 【05-5-041】 遊恵山并叙

【訳文】 大運河を使って潤州 [鎮江] から湖州に向かうルートは、杭州の副知事だったときに幾度も通っていた。見るもの全てが懐かしく、あちこちに知り合いがいた。湖州への赴任の旅は、実際のところなかなか楽しいものであった。無錫県の西にある恵山も懐かしい場所で、幾人かの知り合いがいた [→作品番号04-2-102など]。この詩には短い序文がある。

### 【訳文】

叙  
私はかつて杭州の副知事となり、杭州から無錫へと往来するたびに、恵山に行かないということはない。それから過ぎ去ること五年、私は湖州の知事となり、高郵県の秦観、杭州の僧の参寥も一

緒に、また恵山に登った。ここには、唐の時代の処士<sup>どう</sup> [官に就かなかつた読書人<sup>しよし</sup>] の王武陵、竇群<sup>おうぶりよう どうぐん</sup>、  
朱宿<sup>しゆしゆく</sup>が賦した詩が残され、その語は清簡<sup>せいかん</sup>にして蕭然<sup>しやうぜん</sup>として俗塵から抜け出た姿がある。それを愛し、そ  
の韻を用いて三首を賦した。

其の一

過ぎ去つた五年の夢、  
覚めると、左右の鬢の毛は白い。  
塵土にまみれた足で、漪瀾堂<sup>いらんどう</sup>へと歩む。  
下に松の影が落ちるのを見て、上に鶴が飛び行くのを見る。  
堂に置いた我が身に、氷の玉のような光が差し込み、  
肺と肝臓の間が炯然<sup>からり</sup>となる。  
虚明<sup>こめい</sup>の中に「色<sup>しき</sup>」があり、清浄<sup>せいじやう</sup>から自ずと「香<sup>かう</sup>」が生じる。  
世俗の世界へとまた還るとしても、  
この光があるなら、永く世俗を忘れることもできようか。

【補足】 [「氷玉の光」 とは何なのだろうか。蘇軾独特の感性で仏教の奥深い教説を  
詠んでいるのだろうか]

其の二

薄い雲は山を遮るほどではなく、  
まばらな雨は人を濡らすほどではない。  
滑らかな松<sup>みち しずしず</sup>の径を蕭蕭と歩むと、新しい芒鞋<sup>わらじ</sup>が策策<sup>さくさく</sup>とよい音を立てる。  
嬉しいことに、  
同行するのは、黒く暗いところがなく、白く明るい人々ばかりである。

この勝地しょうちは昔と異なることなく、  
 塵にまみれずに清らかな句がそのまま残っている。  
 古い歴史さんげんに泣き、讒言を憎むその詩、  
 しかし、それを詠んだ人も、真の隠者の隣に棲む人にはなれなかったのだ。

### 其の三

木が重なり覆うところで山の泉を汲み、  
 明るい窓辺たで火をたててに茶を煮る。  
 紫ちやさんの茶盞を傾けると、色も味も絶妙である。  
 私の人生は食くべることと眠ること、  
 ひとたび満腹まんぷくになって眠りに入るなら、  
 一万の想念が消滅する。  
 笑ってしまうのは、茶を好むあまり、  
 何も食くべずに茶葉三百片を飲み尽した御仁ごにんがいたとか。  
 それよりも、山中で眠りから覚めると、花が開き、  
 そこに一杯の茶。  
 さて、誰かこの茶を共にする者がいないかを見ると、  
 門の外かどにはどこにも轍わだちがついていない。

### ■ 【05-5-042】 贈恵山僧恵表

【**解説**】 恵山寺けいさんじの恵表えひょうという僧に贈った詩。

### 【訳文】



天下を遍く巡ったところで満足するわけではなく、  
心が定まるなら、どこであろうと安らかりしていただける。

この老僧はいま山中にあって、  
机の上の『楞嚴經』<sup>りやうごんきやう</sup>を見ることもない。

枕もとには幾片かの落花がそのままにあり、  
閉ざされた門の内では新たに千本もの竹が生えてきている。

客人が来て、茶を飲み終わると、あとはもう何もなし、  
盧橘<sup>びわ</sup>も楊梅<sup>やまもも</sup>もその実はまだまだ酸っぱい…………。

### ■ 【05-5-043】 贈銭道人

【解題】 恵山寺<sup>けいざんじ</sup>には銭道人<sup>せんどうじん</sup> [鉄道人<sup>てつどうじん</sup>、恵山老<sup>けいざんろう</sup>] [→作品番号 04-2-102 など] がいた。銭道人に贈った詩。

#### 【訳文】

世間の書生さんは、  
書物を読んでも何を信じたらよいかわからなくて、  
あれこれ勝手な憶測で物事を考える。

自分の力量もわかっていないから、  
「こいつはおいらが成し遂げて見せるぜ」  
と軽々しく広言する。

そのときは結構な心持ちであるけれど、  
後で格好のつかないことになる。  
いまやどこでも、なまらかな鉄を鑄型に流し込んで、

できそこないの書生さんばかりを作っている。

そのような時代を生きていると、

自分はいつも憂患の中にあって、

己の罪悪を助長しているだけではないかと恐れを抱く。

泥に突っ込んだ足がまだ浅ければ、たやすく退くこともできるだろう。

静観すること、いやそれ以上に、

せん 銭先生が初めから何もしていないのを、喜ぶべきなのだろう。

無病なら無薬、銭道士と逢っても何も言うことはない。

【補足】[冒頭にある「書生さん」とは、改革の潮流に乗ってにわかには手を振って歩くようになった連中をいうのだろう]

## ■ 【05-5-044】 与秦太虚、参寥会於松江、而関彦長、徐安中適至、分韻得風字二首

【解題】詩題は「しんかん 秦観とさんりょう 参寥としょうこう 松江で落ち合い、そこにかんけいじん 関景仁 [字は彦長] と徐安中じょあん がたまたま来たので、五人で韻を分け合って詩を詠んだ。私は風の字を得た」。松江は、そ 蘇州の南でたいこ 太湖に注ぐ川でごこう 呉江ともいい、風光明媚なところとして知られていた。関景仁はこのときしょうこう 松江県の知事で、徐安中はいかなる人物であるかは不明。

### 【訳文】

其の一

ごまつ 呉越の溪と山おしろ の興おもしろ ぎに「は窮きゆう まりがな い。

わが衰病をいたわりつつ、

東西百余丈のすいこうきょう 垂虹橋を渡ると、

天に浮かぶ心地、

ここ東南の地は古いにしへからの水みづの郷である。

今朝の西北の風に送られ、

千里の遠さも忘れて、この絶景の地にきた。

この五人が次にまた揃ってすばらしい遊びをともにするのは難しい。

船頭は、我等がいつまでもぐずぐずしている気持ちをわかってくれない。

夕日ゆいが万頃の水を紅く染めるのを橋の上から見たいのである。

【補足】[垂虹橋すいこうきょうは松江しょうこうに架かる橋で、アーチ型であったのだろう]

## 其の二

秦観君しんかんと参寥師さんりょうは詩の巧みさをさらに窮めようとしている、

人間世界には、長い虹のような句を吐けるところはないだろうに。

私はというと、人に笑われてばかり——

このところ三度続いた左遷にも慣れて、

岸边からの風に揺れる舟の中で、

一日、雨音を聞きつつ、たっぷりと眠っている。

天はありかたいことに、ひとつの酒樽のもとに皆を集めてくれた。

さあ、銀盤ぎんぱん[水面]に紅い魚の尾と馬の鬣たてがみが翻るのを見て、

その感動を詩に詠んでくれたまえ。

【補足】[最後は、垂虹橋すいこうきょうから、赤く染まった波頭が複雑に動くのを見ての感動をいうのであろう]

## ■ 【05-5-045】次韻答参寥

【解題】参寥さんりょうの詩に次韻して答えた。王鞏おうきやうに答えた作として伝えられてきたが、内

容的には参寥の方がふさわしいという。

### 【訳文】

私には世界の外に遊ぶ友がいる、  
 顔は瓊のように英ている。  
 十年の間、塵土の窟のなかにあっても、  
 一寸の心は氷雪の清らかさのままだ。  
 先ごろから私とともに遊ぶ友になり、  
 飾り気がなく、真情をそのまま見てとることができる。  
 私はこの友に慕われるに足るものはないので、  
 友が慕うのはこの山水の清らかさなのだろう。  
 新しい詩は、あたかも弾丸のよう、  
 一瞬も留まることなくたちまち手から離れる。  
 昨日は一緒に魚を放ち、  
 衣にたくさんの浮き草を付けて帰り、  
 今日友は小さな舟に、酒を乗せて烏程から去ってゆく。  
 友は山に月が出るのを見つつ、  
 川べりで鼃が鳴くのを聞くてあろう。  
 そのときに友が唱えるのは何の歌だろうか。  
 悲哀の籠った屈原の詩ではなく、  
 私のこの詩がもしかすると友の心に適うのではなからうか、  
 船べりを叩いて歌う友の声を私は想うのである。

【補足】[参寥は杭州へと帰ったのだろう]

## ■ 【05-5-046】 次韻関令送魚

【解題】 二つ前の詩の題にその名が記されていた関景仁<sup>かんけいじん</sup> [字は彦長<sup>あざな げんちよう</sup>] が詩を添えて魚を贈ってくれたので、それに次韻して謝礼とした。

### 【訳文】

網を挙げ、

「でっかい魚がかかったぞ」

と、叫ぶ声。

聞いたとたん、よたれがたらたらと垂れてくる。

ならば、長い鬚のはだしの老人をさらに煩わせて、

西風<sup>がま</sup>に蒲が揺れる川べりでもっと魚を追わせることにしよう。

## ■ 【05-5-047】 次韻秦太虚見戲耳聾

【解題】 秦觀<sup>しんかん</sup> [字は太虚<sup>あざな たいきよ</sup>] が、蘇軾の耳が遠くなったことを戯れに詩に詠んだので、それに次韻した。詩の題には「耳聾<sup>じろう</sup>」とあるが、蘇軾はこのとき44歳で、実際に耳が聞こえないようになったわけではないだろう。

### 【訳文】

詩を詠むような人は、貴君もよく知っている通り、

転居するに際して車を借りたところで載せるような物は何もなく、

手元に留めているのは何の頼りにもならないわずか一銭ほどだ。

<sup>とほ</sup>杜甫は晩年になると、そればかりではなく、

右臂は痛いし、耳は遠くなったと嘆いたのだが、  
 私はいまはまだ耳だけがわずかに杜甫に似ただけですんでいる。  
 耳がよすぎる人は、蟻が動くのも牛が闘うほどに聞こえたりするのだろけれど、  
 私はありがたいことに、雷だって天のあくびくらいしか聞こえない。  
 耳からつまらない煩悩を刺激されることもないから、  
 汚らしいことを聞いたと、清い流れで耳を洗う手間はいらさない。  
 耳だけでなく、そもそも目とか鼻とか口とかの穴があるのが問題で、  
 渾沌こんとんは、人と同様にそうした穴を穿たれたために死んでしまったのだし、  
 それらの穴から出入りするものによって人は争いに及んでしまったりもする。  
 酔えば眼がちかちかしてわけがわからなくなり、  
 口からは詩が飛び出てつまらないもめごとを背負い込むようになる。  
 つまり、人の五感というものはすべてが賤なのであって、  
 耳が遠くなった私は、人としての病の一つがまずは癒えたのである。  
 それでも、こうしたことを心の内で完全に納得していないと、  
 聞かないこと、あるいは見ないことが、かえって妨げにもなるだろう。  
 貴君は、私が耳の遠いのを偽っているだけではないかと疑い、  
 奇怪な詩を作って私を笑おうとしたのだろけれど、  
 自分だけが心持ちよく筆を走らせているうちに、  
 嘘八百を並べた罪で、きっと閻魔様に叱られてしまうのではないかな。

## ■【05-5-048】湖州謝上表

【解題】蘇軾は4月20日に湖州に到着し、新しい任務を与えてくださったことを皇帝に感謝するこの文章を書いて提出した。

【訳文】

わたし  
臣軾が申し上げます。

御恩を蒙って前任地より移動し、今月二十日に着し終りました。こちら東南の地は風俗が安らかで、何事もなく治まり、山水が美しく、もとより朝廷の優賢とされる方がこられるところでもありますのに、どうしたことかわたし臣のような者をここにお選びいただきました。

伏して思いますに、わたし臣は本性が頑なでいなか鄙びて、低い身分の出で、議論するところは粗雑な大風呂敷で、学問は浅い加減です。凡人でも必ず一つは取り柄のあるものでありますが、わたし臣には一寸たりとも長じるところがありません。かつて先帝がうっかり御恩を下しおかれたのでありましょ、三館[朝廷のアカデミー]のメンバーに加えていただき、さらに陛下の過剰なお許しによって密州、徐州の知事にしていただきました。我が尻を激しく叩いて、少しでも御恩に酬いなければと奮闘いたしました、何といっても才能が限られているために、功績のないままに終わってしまいました。国にはきちんと法令が具わり、わたし臣のような者が勤めても何ら補完のはなく、この罪は大きいとわたし臣はよく存じ上げております。それなのに、諸賢を超えてこのすばらしい場所をお選びいただき、さらに何をいたせばよろしいのでありましょか。この残念なありさまを顧みますと、恩知らずと言わざるを得ません。

皇帝陛下が天下を御覧になること、天を覆い海をひたして全てのものせいの生を全うさせ、人を用いるに当たっては、才能の及ばない者であっても受け入れてその善いところを嘉しとされています。臣が愚かで時代に合わず、新進の者に付いていけないことを御存知で、私が老いて事を構えることがないのを察せられて、民衆を養うことを委ねられたのでありましょか。

わたし臣は先頃、杭州にあつてその風土を楽しみ、自然界に生きる魚や鳥の本性をその湖や川で知ることができました。そうしたわたし臣の指導を、湖州の人にも安心して受け入れてくれることでありましょ。わたし臣は職務に努め、できうるならば訴訟事をなくして刑罰を用いないですむようこたいと思っております。

陛下におかれましては朝廷の真心をさらに広められ、父老の望みを慰められますように。

【補足】[己を卑下してこれより勤務に励むと、皇帝に提出する文章として当たり前のことが書いてあるだけのように見えるが、後半に置かれている「難以追陪新進、察其老不生事」[新進に追陪すること難く、老いて事を生ぜざるを察し]の部分が、蘇軾を嫌う人々をひどく刺激したとされる。「新進」は、通常はよい意味に用いられるが、蘇軾は以前から「改革の時流に乗ってにわかにかい面をするようになった不学不才の連中」という意味を暗に含ませて用いていた[→作品番号 05-5-004]。つまり、上の12文字は、「新進は事を生じる[政治を乱す]恐れがあるけれど、蘇軾は新進に追従することがないのでそのような心配はないと、皇帝は承知している」という意味にとることができなくもない。この文章が朝廷に届くと、「新進」はすぐに動き出し、3カ月後に大きな嵐となって蘇軾に襲いかかったのだった]

## ■ 【05-5-049】 跋銭君倚書遺教經

【解題】湖州は両浙路に属し、湖州には烏程、歸安、長興、安吉、徳清、武康の6県が属した。なお、湖州の州庁のある町は呉興と称することが多い。そこには銭世雄[字は済明][→作品番号 04-3-032]が主簿として勤めていた。この文章はこれより4年ほど後に書かれたものであるが、銭世雄について触れているのでここで見ておこう。

### 【訳文】

人の貌には好し醜しがあるだろう。君子や小人の態[行動として現れるもの]は貌と同じように覆い隠すことができない。言葉には弁と訥があるだろう。君子や小人の氣[本性]は言葉と同じように欺くことができない。書には工と拙があるだろう。君子や小人の心はそれと同じように乱すことはできない。[以上は、見かけでごまかすことはできないことをいっている]



銭公〔銭公輔〕は書を特別に学びたしなかったが、その書を観れば、挺然て忠信、礼儀を為す人であったと知ることができる。

私は湖州にあってその子の銭世雄と同僚となり、銭公が書いた『遺教経』を石に刻んだのを見た。

峭く峙って動じない勢いがあった。孔子は「仁者の言は訖である」といった。銭公の書はまさしく訖とい  
ってよいだろう。

【補足】〔(1) 孔子の言葉は『論語』にある。司馬牛という口数の多い男が、「仁とは何か」と尋ねたときに、「仁者の言は訖である」と孔子は答えた。駄洒落みたいな答えだが、同じ音の言葉は深く奥で繋がっているというのが昔の中国の考え方であった。訖とは、もごもごと言いよどむありさまで、司馬牛は「訖であることが仁といえるのか」と問い返した。孔子は、「言葉通りに実行するのは難しいのだから、言葉は重く、言いよどまらずにはいられないのだ」と答えた。(2) 銭世雄は、この時点では誰も知る由もなかったが、後々に蘇軾の臨終の場に居合わせる人物である〕

## ■ 【05-5-050】 謁文宣王廟祝文

【解題】湖州にある孔子〔文宣王〕の廟に詣でて、この文を捧げた。

### 【訳文】

聖人の至りである文宣王〔孔子〕は、竊かに惟うに、仁義を根本に置いた政治を為そうとされて、民の教化を急務と考えらえた。私は湖州で事を視るようになって三日、まず先聖、先師にまみえて、真っ先に学ぶべきことを問うのである。それは従来から尚ばれているもの、敢えて旧いことを忘れてはならないのである。

【補足】〔ここでも儒者の保守本流を自認する蘇軾の姿勢は明確である〕

## ■【05-5-051】端午遍遊諸寺得禪字

【解題】5月5日の端午の節句、呉興ごこうの町の寺を巡り歩き、蘇軾には「禪」の字が当たったので、それを韻にして詩を詠んだ。詩のなかほどにある「塔」は飛英寺ひえいじの高塔である。

## 【訳文】

輿かこにかつがれ、連れて行かれるがまま、

景色がよろしければそこにしほ留まる。

香を焚いて静かに歩み、筵めいちやを敷いて茗茶を酌む。

かすかな雨が止んではまた降り、小窓からの眺めは、明るくなったり暗くなったり。

庭に築かれた小山しんざんには草木がよく茂り、本物の深山のように日が射し込んでこない。

塔の一番上まで登り、大千世界の涯はてまで眼を窮めよとする。

下山べんざんの峰に街並みたいこが映り、雲間に太湖が浮かぶ。

深沈しんちん〔寺の趣〕をすてに喜び、曠蕩こうとう〔あたりの風光〕を楽しむのもよろしい。

奥行きおくの深さをまだ尋ね終わらないうちに、

村里からは夕餉の煙が昇り始める。

官舎くわんに帰ってからこのように書いていると、

歴へたところが耿耿ありありと戻ってきて眠れなくなる。

寺どうじんの道人もまたまた眠らずにいて、孤燈のもとで夜の禪に務めていることだろう。

【補足】〔(1) 卞山べんざんは呉興ごこうの西にある姿のよい山。太湖〔原文は震沢しんたく〕は呉興の北に広がる大きな湖。(2) このときの遊びには秦觀しんかんや、王適おうてき、王適おういつの兄弟〔→作品番号05-5-031〕が同行していたとされている〕

## ■ 【05-5-052】 自記吳興詩

【解題】 上の詩について記した短文。

### 【訳文】

私は吳興<sup>ごこう</sup>に来て、飛英寺<sup>ひえいじ</sup>に遊んで詩を詠んだ。そこに、

微雨止還作、[微雨 止んで還た作り]

小窗幽更妍。[小窗 幽にして更に妍]

盆山不見日、[盆山 日を見ず]

草木自蒼然。[草木 自から蒼然]

とあった。吳越に至らなかつたならば、この景を見ることはなかつたのである。

【補足】 [再び江南<sup>こうなん</sup>の地<sup>ち</sup>にきて、潤いのある風光<sup>ふうこう</sup>にまた触れることができたのがよほど嬉しかったのだらう]

## ■ 【05-5-053】 送劉寺丞赴余姚

【解題】 劉摯<sup>りゅうき</sup> [字は行甫<sup>あざな こうほ</sup>] に贈った詩。劉摯<sup>こ</sup>は湖州<sup>ちようこう</sup>の町の北西の長興<sup>ちようこう</sup>県の人で、これから杭州<sup>こう</sup>のさらの東の余姚<sup>よよう</sup>県に赴任する途中で湖州<sup>こ</sup>に立ち寄った。劉摯の名は作品番号 04-1-050 で見ていて、蘇軾が杭州副知事であったときに科擧の一次試験の監督業務と一緒に携わり、7年ぶりの再会であった。詩の冒頭にある中和堂<sup>ちゆうわ どう</sup>は試験期間中に缶詰めになっていた場所である。

### 【訳文】

中和堂<sup>ちゆうわ どう</sup>の後ろ<sup>しろ</sup>にあった石楠<sup>しゃくなげ</sup>の樹、

貴君とは夜に牀を並べて、

そこに降り注ぐ雨の音を聴いたのだった。

人と逢えない哀怨を籠めた笙ふえの音が遠くから聞こえきたが、

我等もまた香の煙が碧く横たわるのを見るだけで、

帰るすべもなく、笙に合わせて吟じつつ、

妻子の部屋こおろぎで蟋蟀が空しく鳴いているのを想ったのだった。

その翌朝、ようやく我らを閉じ込めていた鎖が放たれ、

遡り潮を観に行ったのだった。

潮は大地を揺るかし、銀の山を動かすように押し寄せ、

見る人々は興奮して、潮と争うばかりに怒り立ったのだが、

貴君ばかりは、静かに香の煙が立ち上るのを見るのを愛したのだった。

貴君と別れてからの聚散は遠い昔のこのようで、

私は老いて人間世界の万事が終わったような気がして、

貴君は心を洗って仏の道に従うことを願っている。

手づから香を焚いて仏典を写し、

眼まゆを淨らかりきよにして、女性を窺い見るようなことはない。

これから行く余姚よよの古い町には何かあるのかというと、

竜泉寺りゅうせんじの白泉はくせんの水はまことに甘く、

顧渚こしよで春に摘む茶は千金の価値があるというから、

土地の人と日々にその味わいを楽しむのであろう。

## ■【05-5-054】南歌子

【解題】「湖州こでの作」という添え書きのある詞。杭州方面へ旅立つ人〔例えば上の詩で見た劉攽りゅうきん〕を見送った詞であると解釈して訳した。

【訳文】

山雨瀟瀟過、[山からの雨が瀟瀟と通り過ぎてゆくと]  
溪橋瀏瀏清。[溪にかかる橋のあたりでは瀏瀏と清しい風]  
小園幽榭枕蘋汀。[川べりの小さな庭のかわいい榭]  
門外月華如水、[門の外には月の光が水のようにひろがり]  
彩舟横。[色あざやかな小舟が横たわっています]

菖岸霜花尽、[岸边の菖花はみな飛び尽して]  
江湖雪陣平。[あたりはすっぴり雪に埋もれたかのよう]  
兩山遙指海門青。[ふたつの山の間から遙かに海の青を目指します]  
回首水雲何処、[首を回らせつつ、水と雲の間のどこであろうかと]  
覓孤城。[この町を探すことでしょう]

【補足】[菖は葦ちやうの類で、その白い花が岸边を埋める光景は湖州この名物であった [→  
作品番号 04-1-073]]

■ 【05-5-055】 与久上人

【解題】杭州こうの僧かきゆうの可久かきゆうに宛てた手紙。可久は詩を得意とし、親しくしたことは作品  
番号 04-2-045 などで見ている。

【訳文】

お手紙を頂戴しました。法体ほうたい[可久かきゆうのこと]の安穩あんゑんを承り、気持ちかはなはだ慰められました。私は北あきに  
遊ぶこと五年、塵ちりをかぶり垢あかにまみれ、すっかり俗吏りんかとなり果て、林下こうじんの高人こうじんはなおまだ忘れずいて

くださるのか、わからずにおりました。いまだお目にかかることはできませんが、万万自重されますように。

五月二十日。

【補足】[湖州と杭州の間は数十キロ、運河で繋がっていて、かつては何度も行き来した道筋である。もしかしたら、また西湖を見て可久との再会も叶うかもしれないときっと思っていたことだろう]

## ■ 【05-5-056】 祭陳令挙文

【解題】可久とはなお再会の可能性はあったのだが、江南から離れている間に、もはやこの世では会えなくなった人もいた。これは陳舜俞 [字は令挙] の死を悼む文章。陳舜俞は湖州の人で、親しくしたことは作品番号 04-3-077 などで見えて、陳舜俞が亡くなったことは3年前に密州にいたときにすでに聞いていた [→作品番号 05-2-037]。

### 【訳文】

嗚呼、哀しいかな。

天が陳君を生んだのは、初めは特に學術に厚い才能を与えたかのようにであったが、実際には多方面の才があって、あたかも百人の器を兼ねているかのようにであった。まずは科挙においてそれを發揮し、ついで政治を補佐することで名を高め、天下の人々に重んじられ、まさに高い位を授かるであろうと思われた。陳君は天より与えられたものを日々に新たにし、身をもって天下の事に当たろうとした。それは自分で思うだけでなく、世の士大夫が挙って望むことであったのだ。しかし、陳君がひとたび奮起しても顧みられることがなく、かえって排斥され、ひとたび排斥されてからはそのままに死に至ったのだ。

嗚呼、哀しいかな。

天が付与するものは偶然であって、意味はないのだろうか。もしも意味があるのなら、人はそれを十分

に使い切って、天の成そうとするものを遂げるべきであるのだらう。天がすでにその人に授けたものを人がもそも用いようとしないのなら、天はそれを奪って自ら使おうとするのだらうか。陳君の賢は何のためにあって、どうして発揮されなかったのか、わずかに発揮されただけで、どうしてすべてを遂げられなかったのか。世に現れたのはわずかで、残りの棄てられたしまったものは、きっと世を驚かす類のないものを生んだはずなのだ。

陳君と別れて二年後に陳君は亡くなり、いまは亡くなって三年、私はようやくその墓所に哭し、その子に弔問することができた。

嗚呼、哀しいかな。

## ■ 【05-5-057】 祭張子野文

【解題】 湖州の人で、陳舜俞ちんしゆん ゆよりもさらに親しくしたのが張先ちやうせん [字は子野] であった [→作品番号 04-1-080、04-3-077 など]。張先も前の年に亡くなっていて、残念ながら再会を果たすことができなかった。89歳だった。蘇軾は張先の家を訪ね、この祭文を捧げた。

### 【訳文】

張郎中ちやうろう じゆう [張先ちやうせん] 殿の靈に捧げる。

人は官に仕えると本心が蔽おほわれて帰るのを忘れ、たとえその志があっても果たせないままに月日が過ぎ去ってしまう。ただ張先生ちやうせん だけはなお壮健のうちに帰り、故郷で優雅に遊び、もう一つの人生を送った。人に対して開けっぴろげで、古の「愷悌」がいいてい [和らぎ楽しむ] という言葉がぴったりであった。大らかに老成し、敏しんにして多芸、詩は俗臭を絶って甚だ典雅で華麗、物の真髓を捉え、生き生きとして陰影いんえいに富み、わずかな言葉にも曲折しきよくがあり、『詩経』の伝統を受け継ぐものであった。窮乏きゆうぱに陥って塩や米がなくなっても、嘯しやう歌して慌あわてず騒さわがず、酒のあるところへと出かけて行った。

私は杭州こうに赴任して初めて張先生の客人として迎えていただき、年齢の違ちがいを忘れ、細かいことを気にすることなく、欣よろこび合った。私が北方に移ることになると、張先生は黙って指を折って数え、生きている間に会えることはないだろうと、泣きながら私の袖を曳いた。

私が先生の故園に再びやってきたのは実に五年を経てからで、病のために少し遅くなってから先生のお部屋をお訪ねすると、遺影が置かれ、先生に仕えていた女性たちはもはや残っていないかった。友を喪しなった者は、琴を手にとって奏でることはないという。私は空しく鶴のように泣くばかりである。觴うけづきを捧げて再拝し、目に涙が溢れる。

### ■ 【05-5-058】 雪上訪道人不遇

【解題】雪水のほとりである道人を訪ねたが、会えなかったという詩。雪水は美しい川として知られていた。

#### 【訳文】

花の光、花の紅が欄干に満ちている。  
 岸边は草の色、どこまでの果てなく続いている。  
 青い眼の道人に逢えないまま、  
 白い石に波が立つありさまを長く歌い続けている。

### ■ 【05-5-059】 李公枳過高郵、見施大夫与孫莘老賞花詩、憶与僕去歲會於彭門折花饋筍故事、作詩二十四韻見戲、依韻奉答、亦以一戲公枳云

【解題】長い題は、「李常りじょう [字は公枳あざなこうたく] が高郵こうゆう県を過り、高郵しこうよ県知事の施せん広こう誉よと孫そん覺かくが花をめでて詠んだ詩を見て、蘇軾と昨年徐州で花を折り筍を食べたことを思い出し、戯れに二十四韻の詩を作り、それを送ってきた。その詩に次韻して李常に送



る」。李常が1年前に徐州に蘇軾を訪ねて1カ月ほど滞在し、別れに際して筍を贈ったことは作品番号 05-4-032 で見ている。李常が高郵県に立ち寄ったのは公務による旅で、高郵県が孫覚の郷里であることは作品番号 05-1-002 で見ている。この作品は二十四韻、つまり四十八句からなる長いもので、全句に故事をちりばめた過度に<sup>ペダンチック</sup>学術的な作品であるので最後の四句だけを訳す。

### 【訳文】

この世に生きるとは、すなわち幻、  
こして戯れの言葉ばかりを並べたところで、  
どうか怒らないでくれたまえ。

<sup>かんじょ</sup>『漢書』<sup>いえない</sup>にだって<sup>そらごと</sup>亡是侯爵が子虚先生を笑ったと、  
ないことないことが書いてあるのだから。

【補足】[訳者が非常に頼りにしている岩垂憲徳・釈清潭・久保天随訳解『蘇東坡詩集』(1927年)には、この詩に対して次のように評している。「王若虚の説に、次韻<sup>おうじやくきょ</sup>は作者の大病なり、詩道宋人に至り、已に自から衰弊す、才識東坡の如きも、亦波<sup>せつ</sup>蕩<sup>じいん</sup>して之に従うを免れず、集<sup>さくしゃ</sup>中次韻する者、幾んど三の一、技巧<sup>たいびょう</sup>を窮極し、一時<sup>しどうそうひと</sup>を傾動すと雖も、而かも天を害すること全く多し、蘇公をして此れ無からしめば其<sup>いた</sup>れ古人<sup>すで</sup>を去る何ぞ遠からんや。明清間の大家は皆此の説である。蘇公の為に<sup>おのず</sup>実に千秋<sup>すいへい</sup>の恨事である」。明代や清代の人は宋代の詩に対して厳しい評を加えることが多く、またこの文を記した釈清潭は蘇軾に対して厳しい評語を付記するのを好むのだが、現代の我々にとって、故事てんこ盛りの次韻詩をねじり鉢巻きで読み解くことは、とんでもなく酔狂な暇つぶし的手段としても、あまり推奨できるものではない。しかし、三分の一にも及ぶ次韻詩を省いてしまうと、蘇軾の心情の変化を十分に追うことはで

きなくなってしまうだろう]

## ■【05-5-060】王翬清虚堂

【解題】都おうきょうにいる王翬あざな [字は定国ていこく] [→作品番号 05-5-004] が、自分の書齋せいきよどうを清虚堂と名付けたので、それに詩を寄せた。

### 【訳文】

清虚堂せいきよどうの中ちゆうにいるのは王居士おうこじ[王翬おうきょう]

眼を閉じ、心を観ているようすは静止した水のよう。

その水に映される万事くわうは、つまりは空であるう。

さて、こちらの堂で机にもたれているのは誰なのか、

老こいかつ病びやうんだ呉興ごこう[湖州]の知事殿である。

山積みになった書類の前で、

眠ることだけを渴望している。

これでは自身の心こころを観るのからはほど遠いと、

貴君に笑われてしまったらう。

心というものには夢幻がやむことなく去来し、

謝安しゃあんでさえも妓女に音楽を演奏させないと安らげなかつたといひ、

犀首さいしゅという人は酒をひたすら飲むことで事を無きを得たというのだから、

「我は清虚の住人である」と、

すました顔をしているのはどうなのかなと、

私はいささか疑っているのだ、

何しろ王居士の本心が私と同類であることはとうに知っているのだから……。

【補足】 [これは実は仏説を詠んだ偈のような詩で、上の補足で触れた釈清潭は、「公の詩として最下乗なるものである」と酷評しているのだが、訳者なりに意を汲んで楽しく訳してみた]

## ■ 【05-5-061】 和孫同年卞山竜洞禱晴

【解題】 先に作品番号 05-5-051 で見た卞山には黄竜洞という水の湧くところがあった。蘇軾と同じ年に科挙に合格した孫氏 [名は不詳] が黄竜洞に晴れることを祈り、その詩に和した。密州や徐州ではしばしば雨を祈ったのだが、湖州の 5 月は雨の季節で、逆に晴れを祈らなければならなかった。

### 【訳文】

呉興のあたりは一月続雨、釜や甑で魚が泳ぎ蛙が鳴く。

「どうして己の住処でじっとしていないのか」

竜に問いたたしてやろうと、孫君は下山に登る。

空に梯を掛けなければならない陰しき、

下をみると、ぱっくりと谷が開いている。

雲に覆われたところに神々しい水が湧き、

暗い崖に苔の花が垂れ下がる。

蛇の群れのように、百の流れが谷に向かって走り、

その先はどこに落ちて行くのか、

糸車を回すような音が低く聞こえている。

孫君は洞の前に来て、石の戸を叩く。

蝙蝠が飛び出し、頭の白い鳥が翼を翻す。

孫君は竜にいう。

「睡眠は、結構な味わいだと思うよ。

雨を司る君よ、柄杓ひしやくを振るのをちよいと止めたらどうなのかい。

雷を司る君よ、太鼓を撃つのをちよいと止めたらどうなのかい。

大地に溢れた水が谷に戻ってくれたなら、

泥に埋もれた稲の苗が伸びてくれし、

農夫は顔に血の気が通うようになるし、

竜君だって、お供えものの豚肉にたんまりありつけるではないかい」

この願いの通りになるなら、孫君は間もなく公務が暇になり、

夕刻前に早々と役所から引き揚げて、

ゆったりくつろいでぐっすりと眠れるようになることだろう。

## ■ 【05-5-062】 乗舟過賈収水閣、収不在、見其子、三首

【**解題**】湖州こには旧知の賈収かじゆう [字は耘老あざな うんろう] [→作品番号 4-1-081] がいた。舟に乗って賈収の水閣を訪ねたところ、賈収は留守で、その子の賈添丁かてんていがいた。

### 【訳文】

其一

酒を愛した人といえばかの陶淵明とうえんめい、

詩を得意とした人といえばかの張志和ちやうし わ、

その二人の隠者を合わせたような貴君、

貴君の水閣の欄干には青い山が挨拶にきて、

貴君のまどう漁師の蓑には白い雨が注がれる。

貴君のもとには、垢にまみれて働く息子がいて、  
貧乏であっても礼儀をわきまえた妻もいる。

果たして何が楽しいのだろうか、  
タペになると、貴君はいつも一人楽しく飲むのである。

【補足】<sup>かしゅう</sup>〔賈収が再婚を意図していたことは作品番号 04-1-081 で触れたが、ここの詠まれているのはその女性なのだろう〕

### 其の二

<sup>さやさや がま</sup>風に嫋嫋と蒲が乱れ、

<sup>ゆらゆら あさぎ</sup>水に猗猗と荇が長くのびる。

小さな舟を緑の水に浮かべ、

大きな柄杓で黄色い酒を注ぐ。

貴君が得意とするのは詩と酒の集まり、

この稲と魚の郷<sup>さと</sup>で一生を送るのである。

煩わしいことは一つもなく、

清涼でないところはどこにもない、

これほど楽しいことはないのである。

### 其の三

舟を古びた柳の根元に繋ぎ、

杖を突いて青い苔のむす岸边を歩いてきた。

<sup>ほうとくこう</sup>龐徳公のような隠者である貴君は墓参りに出たので、

<sup>しろう</sup>子路のような親孝行者である貴君の子息に私は言を託す。

貴君の水閣は、蒲と魚の入り江を占め、  
さらに、松と菊の庭を作ろうとしている。

これから足繁くこちらにこよと思うが、

貴君が留守でも、すでに親しくなった子等が迎えてくれるであろう。

【補足】〔(1) 龐徳公は三国時代の諸葛孔明とも交流があった著名な隠者。蘇軾はしばしばその名を詩に引いている。(2) 子路は孔子の弟子で親孝行で知られた〕

### ■【05-5-063】次韻孫秘丞見贈

【解題】孫そんという姓の秘書省丞ひしよしょうじょうの位にある人から贈られた詩に次韻した。

#### 【訳文】

老いて耳は遠くなったが、

詩句に対してなら耳はますます聴かっている。

貴君の詩を唱えると、

古いにしえの詩を読むときと似た清らかな感慨が湧き上がる。

迂疏でくのぼろであるによって何ら成すものはないと貴君は己を笑うが、

冷めた淡い心でどうしてこの巧妙な詩が作れるのだろうか。

豹のような勢いで蚊が食らいつこうとするのも恐れずに、

貴君すいこうていに随って垂虹亭に行こうと思う。

詩を吟じ合えば盛夏の暑さも忘れるというもの、

まして、湖州こは雪宮せつきやうとも称されるところなのだから。

【補足】〔(1) この詩には、蘇軾自身の注で、「湖州には蚊ぶよや蝨ひょうきやくが多く、豹脚ひょうきやくという虫は最も毒がある」と記されている。水が豊かで美しい湖州であるが、よいことばか

りではないのだ。(2) 湖州の名所として垂虹亭すいこうていがあることは作品番号 04-3-077 で見ている]

## ■ 【05-5-064】 与客遊道場何山、得鳥字

【解題】 ある客人かざんと何山せしんじにある正真寺せいしんじに遊び、「鳥」の字を得て詩を詠んだ。何山は湖州この南にある山 [→作品番号 04-1-085]。

### 【訳文】

清らかな溪川たにがわが尽きて山に到り、

小さな路が飛ぶあがって空を盤る。

木の枝先こうてい はくとうに紅亭と白塔が見え隠れする。

途中で休みいおりたいと思つと、雲に寄り添うようにして小さな庵いおりがぽつんとある。

北の扉たいこの下は太湖さほ、天の際まで雲と水が広がっている。

庵の僧は、俗界ごう きよとの縁を断って業を浄めつつあるが、

まだ完了していないのだらう、

十年にわたって鶴かきぎや竹を画き、自分から詩まといに繞つかれている。

御仏の像を置いた高堂も、禅を組む部屋もそれぞれに奥深い趣がある。

泉水はどこからくるのか、庵を通って溪へと流れ、

何山かざんは谷と向き合つて清く静かである。

高い松に蔓草がかかり、絶壁で鳥が啼いている。

杭州こうからきた友は、まだ十分に見ていないと嘆くのだが、

帰途につくと、風雨が起り、

紅い夏の日差しの燎けるような熱さを洗ってくれたかと思つと、

俄かに山は乱れて大騒ぎとなり、  
 川べりの草の上では黒い霧が渦を巻いている。  
 舟に乗る人々の顔はすっかり青ざめ、  
 鷗が平気な顔をしているのを羨ましく見ている。  
 私は独り酒杯を呼び、  
 「溺れ死ぬより酔死の方がよほどました」  
 と、例によって書生の強がり、訳のわからないことをあれこれ並べ立てる。  
 これで明日になれば、  
 いま辿ってきた道も、美しい風光も、香としてどこかに消えてしまうのだから、  
 詩を作って、この歓びを記しておこう。  
 遙か昔から現在までの時間だって、  
 この暮れ方から暁までの短さと変わりはないのだ。

■【05-5-065】 僕去杭五年、吳中仍歳大飢疫、故人往往逝去、聞湖上僧舎不復往日繁麗、独浄慈本長老学者益盛、作此詩寄之

【解題】長い詩の題は「私が杭州を去ってから五年、吳のあたりでは毎年のように飢饉と疫病があり、知り合いの多くが亡くなり、西湖周辺の僧舎にもかつての賑わいはないという。ただ浄慈寺の本長老ばかりは健在で学びに来る者がたくさんいると聞き、この詩を作って寄せる」。浄慈寺の本長老に仏教を教わったことは作品番号 04-2-055 で見ている。

### 【訳文】

杭州、湖州あたりの三吳地方を往き来する間に、



一つの夢が過ぎ去り、

知る人の半ばは高く盛られた塚の中に帰ってしまった。

ただ独り、以前のままの寺で真の仏法を伝える人がいる。

飢饉から生き残った人々と、この災害の歳月を乗り越えてきたのだ。

近ごろ、趙抃知事は官の印を返されたと聞くが、

本長老はかねてから俗世を離れた林泉のもとにおられる。

いつかは私も師に従って、

我が本性のままに「不学の禪」のうちに逍遙したいものである。

【補足】〔(1) 一時期杭州知事の任にあった趙抃〔→作品番号05-3-066〕は半年ほど前に政界から退いていた。(2) 最後にある「不学の禪」とは、そういうものがあるらしい〕

## ■ 【05-5-066】 送表忠観錢道士帰杭、并引

【解題】趙抃のために、表忠観という道教の寺院の由来を記した碑文を作ったことは作品番号05-3-066で見たが、その道観の主となったのが錢道士〔名は自然〕である。その錢道士が湖州にきてまた杭州に帰って行くのを見送ったときの詩。短い序文がある。

### 【訳文】

引〔序〕

熙寧十年、詔をもって竜山の廢れた仏寺を改めて表忠観とした。元豊二年、通教大師〔錢道士〕が杭州から来て、呉興〔湖州〕で私と会った。私が「道観の工事は終わったのでしょうか」と尋ねたところ、「またなのです。杭州ではこのところ作物が稔らないので、私を助けてくれる人がいないのです」と、

答えた。私は、「それは妙なことです。杭州の人々は施すことを重んじ、財産を軽んじると聞いています。僧侶や道士が生きられるようにするためだけではなく、不朽の善行に自身を託するためでもあるのです。今年はきっと稔るでしょうから、貴君の事業は成し遂げられるに違いありません」と、私はいった。錢道士が帰るに及んでこの詩を送った。

先王せんおう [呉越国ごえつこくを建てた錢鏐せんりゅう]の徳はいまも民の心に残り、  
特に勅令をもって道観に「忠」の字を与えた皇帝こうていの意は深いものがある。

いまはまだ破れた建物に塵が積もり、

錢氏の子孫である貴君は憔悴し、髪は雪のように真っ白である。

表忠観ひょうちゅうかんが完成すれば、杭州の人々はそこに集まって涙を流すのであって、

表忠観の碑の裏に我が名が刻まれるのを争って求めるはずである。

貴君きこうを助けるのは杭州の人々で、

他県の人より千金せんごうを施されることを求めるまでもないであろう。

【補足】 [錢道士せんどうしは表忠観ひょうちゅうかんを建てるための寄付を仰ぎに湖州こうしゅうにきたのだらう]

## ■ 【05-5-067】 舶越風、并引

【解題】 詩題の「舶越はくたくの風」とは何か。蘇軾の序文に記されている。

### 【訳文】

引いん [序]

呉の地では梅雨が終わると、颯然さつぜんと清風せいふうが吹いてきて十日間ほど続く。これは毎年まいねんのことで、湖州こうしゅうの人々はこれを「舶越はくたくの風」と呼ぶ。このころこのころに越と外洋を巡る船舶が回まわってきて、海上からのこの風が船舶とともにくるのでこのようにいうのだ。

梅雨からすてに三十日が過ぎ、  
万里の彼方から初めて船漣の風が吹いてきた。  
風はあちこちを回り巡って、山の隅々にまで入り込みながら、  
一息に疾走して江東の地を満たしてしまふ。  
葉を驚かせて、秋にならないうちに簌簌と落としてしまい、  
昏昏と眠っていた翁が飛び起きる。  
この風のよさを昔の宋玉に習って詩に詠もうとして、  
風には雌雄の違いがあるとか、分別臭いことは言わないでおこうと思う。

【補足】[屈原の弟子とされる宋玉に『風の賦』という有名な作品があった。そこに風には雄風、雌風の違いがあると詠まれている。この詩の末尾は、誰よりも分別臭いことを詩に詠み込むことを好む蘇軾がこういうことをいうとおかしいよねというオチなのかもしれない]

## ■【05-5-068】丁公黙送蝓蟬

【解題】丁隲 [字は公黙] が蝓蟬を送ってくれたので、その謝札にこの詩を作った。  
蝓蟬とは、和名でガザミとかワタリガニとかいう浅い海にすむ蟹である。

### 【訳文】

溪のあたりにすむ石蟹は錢のように小さい。  
大きく立派な赤玉盤のようなこの蟹を喜んで見る。  
殻が黄色味を帯びているとき、  
酒を加えるとまことに結構な味となり、

両方の蟹はさみには雪を切ったような身がたっぷり入っていて、  
 食欲が大いに進むのである。  
 南方には珍味がたくさんあると昔から聞か、  
 この蟹は見るだけで、  
 怪しい雨が降り、腥なまぐさい風が吹くかのようで、  
 ぞっと寒さを覚える。  
 笑ってしまうのは、呉興ごこうの欲張り知事さんで、  
 二匹の立派な蟹と、  
 つまらない一首の詩を交換しようというのである。

## ■【05-5-069】送孫著作赴考城、兼寄錢醇老、李邦直二君、於孫処有書見及

【解題】詩の題は「孫著作郎そんちよさくろう [著作郎は職名] が考城県こうじょうけんに赴くことになり、この詩を作って、合わせて錢醇老せんじゅんろうと李清臣りせいしん [字は邦直あざな ほうちよく] に寄せる。錢君と李君からは孫君とのところに手紙がきていて、私についての言及があった」。ここに名が挙がっている3人のうち李清臣について作品番号05-2-005などで見ている。

### 【訳文】

知事というものはまことに閑で、  
 出かけようとして、誰が一緒に行ってくれるのかというと、  
 やはり何事もないのは風だけであるから、  
 ひゅうと呼んでみたら、  
 白蘋洲はくひんしゅうから来てくれて、明月めいげつ観へと吹き送ってくれた。  
 その門前にいるのはこれから遠くに行く人で、

青<sup>あざ</sup>い<sup>あざ</sup>衫<sup>あざ</sup>に白<sup>あざ</sup>い<sup>あざ</sup>汗<sup>あざ</sup>をい<sup>あざ</sup>っぱい<sup>あざ</sup>に流<sup>あざ</sup>している。

「どうしてそんなに急いでいるのかね」

「お上のためですから、ゆっくりなどしてられません」

旧<sup>せん</sup>く<sup>り</sup>からの友人<sup>せん</sup>である<sup>り</sup>錢<sup>せん</sup>君<sup>り</sup>と李<sup>り</sup>君<sup>せん</sup>は、

宗廟<sup>せん</sup>に置<sup>り</sup>かれて天子<sup>せん</sup>のために使<sup>り</sup>われる宝<sup>り</sup>物<sup>せん</sup>のよう<sup>り</sup>な人<sup>せん</sup>であり、

貴<sup>せん</sup>君<sup>り</sup>もまた東<sup>せん</sup>南<sup>り</sup>の珍<sup>せん</sup>宝<sup>り</sup>で、その価<sup>せん</sup>値<sup>り</sup>は計<sup>せん</sup>算<sup>り</sup>するこ<sup>せん</sup>とも<sup>り</sup>でき<sup>せん</sup>ない。

この別<sup>せん</sup>れの気<sup>り</sup>持<sup>せん</sup>ちを何<sup>り</sup>によ<sup>せん</sup>って慰<sup>り</sup>めたらよ<sup>せん</sup>いのか、

もう酒<sup>せん</sup>は尽<sup>り</sup>き果<sup>せん</sup>ててしま<sup>り</sup>って、テ<sup>せん</sup>ーブル<sup>り</sup>の上<sup>せん</sup>には何<sup>り</sup>もな<sup>せん</sup>い。

「さあ、そこ<sup>せん</sup>に腰<sup>り</sup>か<sup>せん</sup>けて、冠<sup>り</sup>を傾<sup>せん</sup>けて、ゆ<sup>り</sup>ったり<sup>せん</sup>ろ<sup>り</sup>ぎ<sup>せん</sup>たま<sup>り</sup>え。

私<sup>せん</sup>に伴<sup>り</sup>ってきた風<sup>せん</sup>が、貴<sup>り</sup>君<sup>せん</sup>に涼<sup>り</sup>しさを送<sup>せん</sup>るであ<sup>り</sup>ろうから」

北<sup>せん</sup>の地<sup>り</sup>を吹<sup>せん</sup>く風<sup>り</sup>には何<sup>せん</sup>がある<sup>り</sup>のか、

塵<sup>せん</sup>や土<sup>り</sup>に灰<sup>せん</sup>も炭<sup>り</sup>も混<sup>せん</sup>ざ<sup>り</sup>って飛<sup>り</sup>ぶ<sup>せん</sup>であ<sup>り</sup>ろう。

二<sup>せん</sup>君<sup>り</sup>が孫<sup>せん</sup>君<sup>り</sup>を留<sup>せん</sup>めよ<sup>り</sup>うと<sup>せん</sup>した<sup>り</sup>ところ<sup>せん</sup>で、

この風<sup>せん</sup>のもと<sup>り</sup>へき<sup>せん</sup>っと戻<sup>り</sup>って<sup>せん</sup>きて<sup>り</sup>しま<sup>り</sup>うであ<sup>り</sup>ろう。

## ■ 【05-5-070】 泛舟城南、会者五人、分韻賦詩、得人皆苦炎字四首

【**解題**】湖<sup>せん</sup>州<sup>り</sup>の町<sup>せん</sup>の南<sup>り</sup>に舟<sup>せん</sup>を浮<sup>り</sup>か<sup>せん</sup>べて遊<sup>り</sup>んだ。5人<sup>せん</sup>で韻<sup>り</sup>を分<sup>せん</sup>け合<sup>り</sup>って詩<sup>せん</sup>を詠<sup>り</sup>み、蘇<sup>せん</sup>軾<sup>り</sup>には「人<sup>せん</sup>皆<sup>り</sup>苦<sup>せん</sup>炎<sup>り</sup>」[人<sup>せん</sup>皆<sup>り</sup>炎<sup>せん</sup>に苦<sup>り</sup>しむ]の4文字<sup>せん</sup>が当<sup>り</sup>た<sup>せん</sup>たので、4首<sup>せん</sup>作<sup>り</sup>った。実<sup>せん</sup>際<sup>り</sup>にひ<sup>せん</sup>ど<sup>り</sup>く暑<sup>せん</sup>か<sup>り</sup>ったのだ<sup>り</sup>らう。

### 【訳文】

#### 其の一

強<sup>せん</sup>い日<sup>り</sup>差<sup>せん</sup>しに、町<sup>り</sup>の楼<sup>せん</sup>閣<sup>り</sup>は魚<sup>せん</sup>の鱗<sup>り</sup>のよう<sup>せん</sup>にざ<sup>り</sup>らざ<sup>せん</sup>らと輝<sup>り</sup>き、

水草にさえ風が立たない。

ちよたにがわいと溪川の一番奥まで行くなとして、

我等やんちやを不羈な人と呼ばせてみようか。

この舟の顔ふれでは、

鶴が舞い降りてきてくれる気配はなく、

燈火に向かつて勝手に馴れ馴れしく虫かぐるだけだ。

町を繞る蓮の花の広さはけい一千頃、

六月でも蓮の葉の下だけは春である。

## 其の二

この厳しい暑さはどこに行っても同じで、

じっと座って心を鎮めることを学ぼうとしても、

これではとてもできやしない。

せめて海の蟹でも味わいたいもので、

どうせなら詩を詠む人と一緒にがよいだろう。

谷間で月を見るのもよいかもしれない、

霧雨でも降ってくれたらなのことよろしい。

暑い土地でこしてふらふらしているので、

故郷からの手紙もすっかり絶えてしまい、

兄ちようこうと弟わいは長江と淮河を隔てて離れ離れである。

いちようけいっそ茗溪のほとりに家を構えることにしようか、

門前はすに荷の葉が翻り、階段をひたひた水が浸すような……

其の三

紫の蟹も鱸魚も土くれのように値が賤く、  
錢を渡せば数えることなく売ってくれる。  
蓮の葉を丸めて盃に見立てると、酒は少し苦みを帯びる。  
板前が肘を運らせると、  
風が起こって、白い雪が飛ぶようにして刺身がてきあがる。  
酔った勢いで新しい詩を作ろうとしても、  
満腹で腹鼓を打つことしかできない。

其の四

橋の上で遊ぶ人々は、夜になっても飽きることなく、  
欄干に依って蓮を吹く風の音を聞いている。  
楼閣の上で遊ぶ人々は、蓮根を肴に酒を呑み、  
化粧が終わったばかりの妓女が簾から月を覗き見る。  
町の南で遊ぶ我等は、南朝貴族の風雅を受け継ぎ、  
さらには家に帰って後に、北の窓辺で大の字になって眠るなら、  
太古の朴訥な人々と等しくなるのだ。  
人間世界は熱さ寒さの窮まりがないところで、  
自分で自分を笑うような疏頑ことでもしなければやっつけられない。

【補足】〔(1) 北の地を巡ってきた蘇軾には、湖州の夏はことのほか暑く感じられたのだろう。それをやり過ごすことをいろいろ考えて詩に詠んだのである。(2) このときに一緒に遊んだ 5 人の中に秦觀しんかんがいたことは別の手紙などからわかる。秦觀はこの後、參寥さんりょうを追って杭州からさらに越州えつの方に行った〕

## ■ 【05-5-071】 与王郎夜飲井水

【解題】蘇軾こに同行して湖州にまで来ていた王適おうてき [字は子立あざな 立しりつ] [→作品番号 05-5-051] とともに夜に井戸の水を飲んでこの詩を詠んだ。

## 【訳文】

呉興ごこう [湖州] の六月、

泉の水は温かすぎると、

広がる菰まこや蒲がまのあたりには蚊かひどく集まっている。

この井戸は深さが一丈もあって、

その水の凜然きりつとしたところは、

私と君のようなだね。

## ■ 【05-5-072】 次韻李公挾梅花

【解題】李常りじょう [字は公挾あざな 公こう 挾たく] [→作品番号 05-5-059] が梅の花を詠んだ詩に次韻した。李常から送られた詩を見直して、たまたま梅の詩を選んで次韻したのでらう。

## 【訳文】

詩人といふのはもとより長く貧乏であり続ける。

昼になっても飢えのために動くことができないのが普通で、

たまたま満腹になれたりすると、

そんなつまらないことで喜んでいるとはなど、

万物から嘲弄されているような引け目を感じて苦しむのである。



詩人といふものは花を尋ねてよい詩を詠むためなら命も気にしないし、  
雪を愛してよい詩を詠むためには凍えることも平気で辛抱するのである。

<sup>てんこう</sup>天公[造物者]だって詩人を憐れまないものではないのだが、  
満腹していると聞いたら、がやがややかましく笑ってしまうのだ。

貴君ときたら、

三つの州の知事を経て、

行く先々で賓客やら従者やらが満ち満ちていたし、

眼は常に世の中をよく見通して、

詩も酒も気ままに豪放に楽しんだのだった。

貴君がかつて湖州こにいたときに、

妓女ちやざんを連れて茶山の下で春に茶を作ったことは永く語り草となり、

貴君せいは齊州せいにいたときに、

檻泉亭かんせんていで頭が重くなるほどに髪に花を挿して遊んだことは今も慕わしく思われている。

貴君じよは舒州じよに来て、

静かにしんざん瀟山の麓に伏し、春の鳥が轉るのを聞いて何やら愁いを覚え、

ふと早咲きの梅を目にして、独り詩を吟じたのだった。

私に寄せてくれたその詩を見ると、

一字ごとに我が頭の痛みを癒してくれる。

ああ、貴君はもとは皇帝の近くに仕える者であったが、

事によって都を遠く離れ、

その流落の思いを慰めてくれるのは、

この美しい花なのであった。

いつまでも官遊の旅の身であることに、

時に思いを巡らせるのは貴君も私も同じで、

私はというと、花に桐花やとうか 鳳ほうほう [どちらも鳥の名]が集まる我が故郷の風光を想い、

貴君はというと、故郷のろざん 廬山にある蔵書を収蔵した建物を想うのであって、

いずれにしても、帰郷して植えるべきは、この梅の花なのだろう。

【補足】 [(1) 李常りじょうは中央から地方に出て、三つの州で知事を務めた後で、このときは舒州じょに置かれた広域の行政機関に勤務していた。(2) 李常ろざんが廬山に多数の蔵書を所有していたことは作品番号 05-2-036 で見ている]

### ■ 【05-5-073】送淵師帰径山

【解題】澄慧大師 [淵師えんし] が径山けいざんの帰るのを送った詩。径山は杭州副知事時代に何度か登っている [→作品番号 04-1-033、04-2-065 など]。

#### 【訳文】

私は昔、径山けいざんの客となり、

山の風景は私の詩筆には手に負えないものだったと、今も思っている。

淵師えんしはその山に住むこと三十年、

山の真髄を得ているので、師は妙語を発せられるのである。

湖州の町の六月は水に蒸され、蚊が猛然と鷹のように襲いくる。

師の方丈では、御明かしみあかしが動かずに灯り続け、

氷雪に閉ざされたように冷ややかであるのを羨ましく思う。

径山の人々は私が湖州にまで来ていると知って、

私はどうしているのかと、争うようにして尋ねるだろう。

そうしたら、いってほしい、

「あの男は何をやっても一人前ではないけれど、

ただ眼だけは利いて、いまも細かい字を書くことができる」

【補足】〔この詩の終わりは、<sup>けいざん</sup> 径山に<sup>りゅうせい</sup> 竜井という井戸があって、その水で洗うと眼病が治るとされていて、かつて蘇軾が径山に遊んだときの詩に、老人になっても細かい字が読めるように眼を洗っておこうと詠んでいたことにちなむ 〔→作品番号 04-1-033〕

## ■ 【05-5-074】 答周開祖

【解題】 <sup>こう</sup> 杭州にいた時期に親しくした<sup>しゅうひん</sup> 周邠 <sup>あざな</sup> [字は開祖] <sup>かい</sup> [→作品番号 04-3-079 など] への返書。

### 【訳文】

長篇の詩はまことに優れています。……いまそれに一首を和しますが、よい出来ではありません。お笑ください。こちらに来て<sup>ちんしゆん</sup> 陳舜俞君に会えないのは残念<sup>まつ</sup> 窮まりありません。その墓所で<sup>まつ</sup> 奠るに当たって 覚えず慟哭しました。祭文は石に刻みましたので、きっと御覧になられるでしょうから、ここに録してお目に かけることはしません。……

【補足】〔<sup>ちんしゆん</sup> 陳舜俞を祭った文は作品番号 05-5-056 で見ている〕

## ■ 【05-5-075】 次韻周開祖長官見寄

【解題】 上の手紙にあった<sup>しゅうはん</sup> 周邠 <sup>しゅう</sup> [周長官] の詩に和した作品。

### 【訳文】

一度うなずく間に東西数州を旅して道に老いる——

それは旅芸人だけではない。

地方勤めの身は、

惜まれつつ父老と別れたかと思うと、

すぐに子供等の出迎えを受けるのだ。

私の政は拙く、水害だ日照りだと年々祈るだけ、

民衆は疲れ、私を嘲笑する声を避けて歩かなければならない。

河が広大な野を呑んだときは水を塞げなかったし、

盗賊が山に入り込んだときは捜し出せなかった。

お上に仕えてこんなことでは、

孔子、孟子の教えに取じなければならぬし、

国家の急に役立たずであった昔の人々を偉そうに責めることなどできない。

田舎に帰ることを思いつつも俸禄に魅かれ、

世間の風濤から脱けられずに州知事をしている。

隣れにも家を喪った犬のように惘惘し、

人の乗っていない舟のように行き当たりばったりである。

これまで経てきたことは全て夢のようで、

今はただ楼閣に身を寄せて水を見ているだけ、

味も香りも抜けてしまった酒か、

はたまた落ちぶれた楽工が風に空の瓶をたたいっているようなもの。

遠くは唐朝や晋朝の名臣を思ってみたり、

近くはかつて交流があった人々を思ってみたりする。

湖州では、風がないと豹脚が窓から入り込み、

雨の後には蝸牛が欄檻を這い登ってくる。

昔どもに遊んだ人の多くは昔むす土の下となり、

ただ同年の貴君どうねんだけがいまも黒々とした頭のままだ。

貴君とは湖山の名勝を尋ね、酒杯を重ねて二人とも憂いを忘れた。

酔って雪の中で梅の花を見たこともあるし、

夏の夜に舟を浮かべてみたものの汗が流れて仕方なかったことも、

山の上で百首の詩を詠んだことも、

月と貴君と私の三人で遊んだこともあった。

貴君は本来、翼を翻して朝廷の高官として飛ぶべき人であるのに、

南の地の谷底で県令の座についている。

貴君は春風のような詩を送ってくれたけれど、

私の筆は老いてろくな返事ができない。

歲月はいよいよ速く過ぎ行き、

晩節を全孔て功名を立てるといこともきっとできないのだろう。

とりあえずは事無く飲むのがよいであろうか。

この地の魚は旨いからと留まるのもよし、

この地の酒は薄いと笑いながらも留まるのもよいだろう。

【補足】 [この訳詩では「かつて交流があった人々」と、あいまいに訳したが、原詩には、「近憶張陳与老劉」 [近ごろ憶う張、陳と老劉を] と、具体的に名を挙げている。すなわち、張先ちやうせん、陳舜俞ちんしゆんゆ、劉述りゆうじゆつである。三人の名はかつて周邠しゅうはんに与えた手紙 [→作品番号 04-3-0079] で挙げていて、先に見たように張先と陳舜俞はすでに他界し、劉述 [→作品番号 05-1-044] もまた亡くなっていた]

■ 【05-5-076】 林子中以詩寄文与可及余、与可既歿、追和其韻

【解題】 かつて林希 [字は子中] が蘇軾と文同 [字は与可] に寄せた詩があった。

林希はかねてからの友人であり [→作品番号04-1-091 など]、文同はこの年の初めに亡くなっていた [→作品番号05-5-013]。何かの折に林希の詩を思い出して、文同のことを偲んでその詩に和したのだろう。

### 【訳文】

この人[文同]が甚だしく嫌ったのは、  
 餌のように投げ与えられたものを受け取ること。  
 このようなことをするのもほんのわずかな間だからと、  
 人に後れまいと奪い取り、  
 得たもの[地位]を死んでも守ろうとする者がいる。  
 天賦の才には大きい小さいがあり、  
 斛と斗のように単位が異なりもするのだから、  
 それぞれの分に安んじるのがよいのに、  
 外物に誘われるがままに、時節到来と見てとると、うごめき出し、  
 誰かれかまわず意気を合わせて、結構な場所を占拠し、  
 本当ならそこにふさわしい人を、鶏小屋のようなところに押し込めてしまう。  
 こうして文同君は五百人もいないような土地の長官になっていたのだが、  
 いざ亡くなると、一万もの人々が泣いた。  
 私は文同君の死を聞いて以来、胸の内に大きなわたかまりがある。  
 世俗と絶つその意を、一度手を執り合って語りたいと思っていた。  
 遙かに隔たったまま、その窓辺に寄ることができなかった。  
 文同君は遺文を弟子に、後事を諸友に託した。  
 文同君には一人のよい息子と、よく釣り合った妻がいる。

世の人は目の前で見えているものを軽んじる傾向があり、

一方で、自分のものはぼろぼろの箒ほうきでさえ大切にする。

文同君の詩文はいずれ識者によって必ず価値あるものとされるはずだが、

ただ墨竹の画だけが愛されているのを、

私は以前からずっと残念に思っていた。

我等の昔からの知り合いは、いまや皆が厚禄を受ける身となっているが、

その中の誰が文同君のことを哀しんでいるのか。

むろん、林某りん なにかれ やら蘇某そ なにかれ やらが饑寒に迫られて走り回っていることなど見向きもしないのだ。

【補足】 [(1) この詩には「新進」を嫌う気持ちがかかなり強く籠められているようだ。

(2) 文同の一人息子の文努ぶん ぶ光こうについては作品番号 05-5-030 で見ている]。

## ■ 【05-5-077】 与王郎昆仲及兒子邁、繞城觀荷花、登峴山亭、晚入飛英寺、分韻得月 明星稀四首

【解題】王適おう てき、王適おう いっの兄弟 [→作品番号 05-5-031] と、長男の蘇邁そ まいを伴こって湖州の町のまわりに連なる蓮の花を見てまわり、峴山亭けんざんていに登り、晩ひ えい じに飛英寺に入った。そこで、韻を分け合って詩を詠み、蘇軾には「月明星稀」の字が当たったので4首を詠んだ。

### 其の一

昨夜は水路で雨音がしていた。

暁ごろに風が月を吹き現した。

蕭然さやさやと秋の気配を覚え、

城を環まわる三十里の水は清すすく澄すんで啜すすれるほど。

蓮の葉が海のように広がり、どこもがすばらしい景色。

その中に一艘の舟が見え、  
 青い笠を深く被るのは、真に世を避ける人であろうか。  
 逢って話をしようと思ううちに、飛び去る鷗とともに消えてしまった。

### 其の二

この清らかな風はいったい何物なのだろうか、  
 愛すべきもの、そして言葉でたたくべきものではない。  
 風が行くのは君子が行くと同じ、  
 草や木やさわやかな声を上げて出迎える。  
 我等一行にはもとより何の目的もなく、  
 斜めに行くのも横に行くのも舟任せである。  
 流れの中央で風を迎え、  
 ともに上を向いたり下に向いたり、  
 広々とした空間に対して杯を挙げる。  
 この楽しみをともにするとき、  
 風はもとより人もすでに情を離れた存在となる。  
 帰り来るのは二つの谷の間、  
 雲も水も夜でありながら自ずから明るく見えている。

### 其の三

ここの流れは漢水かんすいに似て、鱗鱗きらきらと鴨の頭の青色である。  
 ここの町は襄陽じょうようよりも勝り、万の家の瓦が青い空に浮かぶ。  
 私はかつての羊祜ようこの足元にも及ばないので、



この峴山亭けんざんていに登るのは面はゆ思われるのだが、  
それでも歳月が流星のように消え去るのを悲しみ傷む意こころは同じである。  
私と同道する王兄弟おうはいままさに羽ばたこうとする鴻おおとりのようで、  
羊祜じやうたんと一緒にいただけでその名を残した鄒湛とは違い、  
自分自身の徳をもってその名を歴史に刻むことだろう。

【補足】[蘇軾はかつて都に上る旅で襄陽じやうやうに立ち寄り、漢水かんすいを見て詩を詠み [→作品番号 01-2-028]、峴山けんざんに登った [→作品番号 01-2-030]。峴山はかつて羊祜じやうたんが山頂で悠久の時の流れを嘆じたことで知られる。そこにちなむ湖州この峴山亭けんざんていで、自分は羊祜に及ばないが、いま一緒にいる王兄弟おうは、峴山で羊祜と言葉を交わしただけで名を残した鄒湛じやうたんとは大違いであると戯れたのだ]

#### 其の四

湖州の役人と民は私がものぐさなのを憐れんで、  
訴訟事などは減多に起こすまいとしてくれている。  
それで何事もないので、酒を食らって夜も遊んでいられる。  
さらに飛英寺ひえいじを訪ねて、月の光のもとでの楽しみを尽くそうとする。  
知事殿の到来を告げる鐘かねが撞つかれると、履はきものの音がにわかはに集まってくる。  
中にはあわててさかさまに衣を付けた者もいる。  
私に来るのは決まった時節がなく、杖の自ずと向かうところで扉を推すのだ。  
どうか私のことを知事だとは見ないでほしい。  
外見はそうであっても、中身は似て非なるものなのだから。

#### ■ 【05-5-078】次韻章子厚飛英留題

【解題】前の詩で訪問した飛英寺ひえいじの壁に章惇しょうじゆん [字は子厚あざな しこう] が書いた詩があったので、それに次韻した。章惇が一時期湖州知事であったことは作品番号 05-1-065 で見ている。その後、都に復帰して改革派の主要メンバーとして活躍していた。

## 【訳文】

足の遅い馬に乗ってかつて一緒に遊んだ貴君は、  
いまは仙宮のような皇城の内こにいる。  
宰相御用達の酒店ごようたしで昔を思い出したら、  
蓮の花が天にまで続くの場所へと飛んで来るがよい。

## ■ 【05-5-079】城南県尉水亭得長字

【解題】町の南けん い すいでいの県尉水亭に遊んで、長の字を韻として詩を作った。

## 【訳文】

聳え立つ二つの水亭すいてい、  
東と西に百歩ほど離れている。  
一方に旗が立つのは、蒲と柳に囲まれた市いち、  
一方に太鼓が鳴るのは、水と雲の挟まれた村。  
一方の水亭には魚を観る欄干が廻らされ、  
一方の水亭には鴨を射る部屋が設けられている。  
どちらにも、美しく飾られた船が寄り添い、  
見渡す限り、紅く化粧した蓮の花が乱れる。  
激れんれん激なみがけらとして波頭こまは細やかに、

そ　そ　あまあし  
疏<sup>そ</sup>として雨脚<sup>あまあし</sup>は長い。

ここに来て静かに足<sup>すず</sup>を濯ぐと、

溪<sup>みなぎ</sup>に水が漲って床が浮かび上がるかのよう。

ここは山に囲まれた水の国、

町は水に影を落としている。

我が帰路はどこにあるのかと尋ねると、

葦の外に風<sup>はれ風</sup>に揺れる檣がある。

## ■ 【05-5-080】 与胡祠部游法華山

【解題】 胡<sup>こ</sup>という人と法華山<sup>ほっけさん</sup>に遊んでこの詩を詠んだ。胡氏の詳しいことはわからない。

### 【訳文】

湖の尽きるところは山との境、

高い峰から滝が落ちるのが見える。

知事殿は年老いてもなお子供の遊びを好み、

緑の棹と紅い船、

ゆらゆらと水の間<sup>すず</sup>に揺れる。

杯に水を汲んで裾にかけて、

「ほらほら、足<sup>すず</sup>を濯ごうではないか」

さらに、湖面に注いで、

「ほらほら、波がここから始まる」

と、笑い興じる。

山の松は、天を衝いて竜が立つかのよう、  
 谷の藤は、雲が崩れて逆さまに落ちてくるかのよう、  
 上を仰ぎ見て、うっそうと繁った中を穿ち、  
 広々としたところに出て、震沢しんたくたいこ[太湖]を一望する。  
 ああ、すばらしいではないか、  
 その広さは四万八千頃けいとか、  
 渺渺びょうびょうとして東の日の昇るところまで続いている。  
 法華山ほっけさんの道人が来てくれるより前に、  
 泉の水が先に出て迎えてくれる。  
 曲まがが折ひねった道の先に、  
 さっぱりとした趣いかりきの庵がある。  
 帰りの十里の途は、  
 ことごとく風かぜに揺ゆれる荷は、  
 楽工らくこうが『露薤るかい』の曲を静かに歌ってくれる。  
 私は少年のころより真の隠者になることを慕っていたのだが、  
 天は何なにの械がせを課しているのか、  
 白髪になっても役人の青い衫うわぎを身にまとっている。  
 たまたま佳士かしか[胡氏]とともに名山みやまにくることができたのは、  
 馬うまがかりかいところを枯かわれた楊やなぎにこすりつけることができたようなもの。  
 貴君きくんは鸞らんや鶴つるのような身でありながら、  
 たまたま地上に墮おちてしまっただけ、  
 翼を鍛えていずれまた雲の上を飛翔するであろう。  
 新句あたらを求めてこの遊びをこのように歌うのは、

山中の清浄さを体感した者が果たすべき勤めであるからだ。

■【05-5-081】又次前韻贈賈耘老

【解題】上の詩に次韻して賈収〔字は耘老〕〔→作品番号 05-5-062〕に贈った。

【訳文】

太湖は、三つの州のちまちました境界などはすっかり呑み込み、

浩浩としたところから湯湯と流れる千の支流を納め込んでしまう。

万斛の荷を積むようなばかばかしく大きな船などはなく、

一枚の葉のような漁舟が素早く奔りまわっている。

湖の地下には仙界があるといけれど、

波が湃湃と鳴るのが聞えるばかりで、そこに到ることはできない。

今朝はたまたま法華の嶺を上り、

太湖を払いままに観て、

人間界の隘さをまざまざと覚った。。

……〔山中の景物を詠んだ四句がある〕……

私は高い松の木の下を歩いて、

茯苓〔靈能のある茸〕を掘ってみようかと思いついたのだが、

この山には奇れた薬がふんだんにあって、

野の草の中にはしばしば靈芝〔靈能のある茸〕が混ざっているという。

杜甫は貧窮に陥って空腹を抱えていたときに、

どうにかして黄精〔靈妙な仙薬〕を得ようとして、

この長い鑰に我が人生を託すと歌った。

貴君によれば、  
 今年は虫による食害はわずかであるというから、  
 大いに稔るであろうから、  
 杜甫のようにはならずにはすむはずだ。  
 稲の白い花が落ちるころには、  
 紫の稔すいからよい香りが立ち、  
 私は臂を揮って鎌を磨くであろう。  
 この山のどこかで泉の水が酒に変わるところをみつけたなら、  
 そこで杯を洗って、貴君と遊興する約束を果たそうと思う。

### ■【05-5-082】趙闕道高齋

【解題】趙抃ちやうべん あざな えつどう [字は闕道] は、作品番号05-5-065などで触れたように政界を引退し、その後、衢州くに隱棲して高齋こうさいと名付けた書齋を作った。それにちなんで詩を詠んで送った。

#### 【訳文】

公こう [趙抃ちやうべん] が奔走するのを見ては公の労苦をいい、  
 公が隱退するのを見ては公の高潔をいう。  
 我等はその時その時であれこれいっけれど、  
 公の心は高くなったりひくくなったりすることなく、  
 この世は夢幻あ、遭うところに従って去来するだけなのである。  
 だから、「高齋こうさい」の意味などは公の関知することではなく、  
 人が勝手にその名を設けたのだ。

公は、孟子が「四十歳で心動かず」といったのと同じく道を得ていたのだが、  
俗縁がまだ尽きなかったために政事に関わっていなければならず、  
功名も富貴もほんのそのときだけ身を置く旅館のようなものと心得、  
黄金をいくら積んでも公の袖を取って引き留めることはできなかった。  
超然と一大事を成し遂げ、瞬時に官職から去ったのだった。

猿が網に落ちても手に掴んだ物は決して放すまいとするのとは大違いである。

賢達と愚陋とは、九頭の牛の毛を一行列に並べたくらいけんたつ ぐろうの差があり、  
百尺の松は己の高さを気にもかけないが、蓬は羨んで同じ高さになろうとする。  
私は自分の食い扶持を担いで公に道を教わりに行きたく思うが、  
どうか肘だけ上げて追い払ったりするようなことだけは勘弁いただきたい。

【補足】 [末の句は、このような無作法な仕草で面談を断られた昔の人がいたのである]

## ■ 【05-5-083】 送兪節推

【解題】 兪温父を見送った詩。兪温父は湖州の人で、これからどこかの任地へと向かうのであろう。蘇軾自身の注で、「兪温父は兪汝尚ゆじょしょう、字は退翁たいおう、の子である」と記されている。兪汝尚は上の詩に見た趙抃ちようべんと深い親交のあった人。

### 【訳文】

呉興[湖州]にはかつて君子がいて、  
淡泊な人柄は朱い糸の琴のようで、  
ひとたび奏せられると聞く人は三度嘆息し、  
いまに至るもその余韻がこの地に残っている。

ああ、私とその人とは、

しんさん  
辰と参の星のように擦れ違ってばかりであった。

なお喜び見るのは、

息子たちが清らかにも奥深いありさまであること。

かつては立派な士であった者が、

末には初心を喪ってしまうことが多い。

我等にはきっと天の定めた命があるのだから、

ひとたび曲がるときがあろうとも、

必ずまた真っ直ぐに伸びるのである。

【補足】ゆおんふ〔愈温父の父とは擦れ違ってばかりであったということについて、蘇軾自身の注で、ゆじょしょうしよく「愈汝尚が蜀に赴任していたときには私は都にいて、私が帰郷したときには愈汝尚はすでに蜀からさっていた。私がこ湖州に赴任したときには、愈汝尚はすでに亡くなっていた」と記されている。愈汝尚が蜀に赴任したときにその上官だったのがちやう趙抃べんで、以来、厚い信頼を得たのだった〕

## ■ 【05-5-084】次韻答孫侔

【解題】そんぼう あざな しょうじゆつ孫侔〔字は少述〕の詩に次韻して答えた。孫侔は母に仕えることを第一として官職に就かず、おうあんせき王安石とは深い親交があった。

### 【訳文】

貴君は朝廷に至ることなく十年を過し、

私のような者を伴って落花の詩を賦そうと思われた。

乱も貴君の前に我が頭を垂れることができるのなら、



陶淵明とうえんめいに会おうと酒を用意して道で待ち受けた王弘おうこうの真似をするのも辞さないであろう。

唐とうの時代ちやうけいに若溪じやくせいや霽水じゆうすいのあたりに舟を浮かべるのを終生の望みとした人がいたが、

貴君はかねてからこの地に家を構える計を立てたのだった。

千里の遠くにあっても、

一言通じれば十分に心に足りるというから、

貴君と何も会わなくてもよいであろう。

【補足】 [この詩を見ると、孫侔そんぼうとは詩のやりとりをただけで会ってはいないようだ。孫侔に贈った詩はもう一首あるが訳は割愛する。なお、孫侔はこの翌年に 66 歳で没している]

## ■ 【05-5-085】 次韻和劉貢父登黃樓見寄並寄子由二首

【解題】 劉攽りゅうはん あざな こう ぼ [字は貢父] [→作品番号 05-1-056 など] が徐州じょにある黃樓こうろうに登って詩を詠んで送ってきた。それに和して、一首を劉攽に一首を弟に寄せた。

### 其の一

淮河わい がへと連なる清らかな流れ、

そこに、海辺かい べんの地で第一とされる黃樓こうろうが建つ。

貴君りゅうはん [劉攽] が黃樓を詠んだ詩はまことに雄大であるから、

詩を詠んだ人もさぞかし魁梧どでかいと人は思うのである……。

世俗は本物の宝よりも見掛け倒しの物をなぜか重んじるので、

貴君は馬に乗って各地を奔走しなければならぬ。

貴君との邂逅かいこうの機会を失ったままであるので、

私は誰とともに次に黃樓に登るのだろうか。

貧乏であるがために、倉に貯め込まれている米をむさぼりたくなるが、  
造化が自在に万物を生み出す技に任せておくのがよいのだろう。  
つまり、これからどうなるのかあらかじめ見定めることはできないのだから、  
我らができるのは、退隠して休むところを探しておくくらいであろう。  
私は洒水しすいのほりに田を買おうと思いついたものの、  
結局は行き場のない鬼き[亡霊]になってしまうのだろう。  
黄樓の下の水に舟を浮かべることができるとはいずれの年であろうか、  
いまはせいぜい夢の中で、  
天呉てんこ[体が虎で八つの首がある神獣]を鞭打って空を飛ん行くのを見るだけである。

【補足】〔(1) この詩には蘇軾自身による注で、「劉攽は背が小さい」と記してある。詩の大きさと身体しんたいの大きさは別であるというジョーク。(2) 洒水しすいのほりに退隠の場を定めようと考えたことは作品番号 05-5-031 で見ている〕

## 其の二

君[弟]と一緒に故郷を去って十年、  
僕も君も天の片隅にいる。  
歳の巡り合わせが悪いのか、生きる算段が拙いのか、  
枯れた梧あかざりにしがみついている。  
窮状に陥った人との交際は普通は嫌なのだが、  
劉君りゅうのように、ちゃんとした地位ちゐにあることを誇ったりせずに、  
僕等のことを好んでくださる人もいる。  
劉君の清らかな句は金の糸いとを繕とり合わせたようなもの、  
吟じると、高い樓閣で白い月の光を浴びている気分になる。

このような新しい意匠の詩が生まれたのも、  
君が徐州のあの場所に楼閣を建てるとよいといってくれたからだ。  
近ごろ君は、君が作った『黄楼の賦』を六幅の図に写したところ、  
一座の者は身をそばだててそれ見て、  
一文字でもいから自分のために筆を執ってほしいと頼んだと聞く。  
僕から君に頼むのは、  
僕のまわりの人々に怨みを抱かせないようしてくれること。  
だって君はどうせここらには来てくれないんだろうね。

## ■ 【05-5-086】 文与可画筧管谷偃竹記

【解題】 蘇軾の手元に、文同 [字は与可] が描いた筧管谷の偃竹 [横に寝そべった竹] の画があった。筧管谷は洋州にあり、その竹を主題とした詩を蘇軾はかつて詠んでいた [→作品番号 05-2-008 の其の二十四]。7月7日、梅雨が明けて空気が乾燥してきたのだらう、書画の虫干しをしたところ、この画が出てきたので、思うところを記したのがこの文章である。

### 【訳文】

竹が生まれたばかりのときはたった一寸ばかり。そこに節も葉も具わっている。筧がごく小さいうちは蟬の腹に似て、少し大きくなると蛇の腹のようになり、いつしか十尋[20メートルほど]もの長い剣を抜き放ったように高く伸びあがる。しかし、竹の全ては生まれたときに具わっているのである。

いま竹を画く者は、節を一つずつ作り、葉を一枚ずつ累ねてゆく。これでどうして竹となるのだろうか。竹を画くときには、必ず先に、胸の内に成長した竹を得ておかなければならない。筆を執ってそれを熟視し、画こうとするものが見えてきたなら、さっと始め、見えたままに従って筆を揮って、直ちにやり遂げる

のである。見えたものを追うのは、兎が跳んで鶺鴒が急降下するような具合で、少しでもぐずつくと、見えたものは逝ってしまう。

このように文同は私に教えてくれた。私は、自分ではそのようにはできないけれども、心にはそうであることを識った。

心にそうであることを識っても、そのようにはできないのは、心の内と外とが一つになっていなくて、心と手が応じ合わないからである。それはよく学ばないことからくる過ちである。心の内に見えているものがあるけれども、これを習熟するまで繰り返して行っていない者は、普段は自分ではっきりわかっていると思い込んでいたところで、実際に事に臨むと、たちまち見えていたはずのものを喪ってしまうのである。

これは竹に限ることではない。

弟の蘇轍は『墨竹の賦』を作って文同に贈った。そこにはこのように記してある。

「古の庖丁は牛を上手に解体する職人で、その技を見て、人は命を養う極意を得た。古の輪扁は車輪を削って作る職人で、その技を見て、人は書物を読む極意を得た。先生は竹を画くことに託して、道を会得して生きるありさまを示されているのではないだろうか。

弟は絵を画いたことがない。だから、文同のしていることの意味だけを理解した。私のような者は、その意だけでなく、あわせて画く方法も得た。

文同は竹を画いて、それが価値のあるものだとは全く思っていなかった。あちこちから画いてほしいと白い絹を持って頼みにくる者が足を踏み合うようにして門に押し寄せると、文同はそれを嫌って、絹を地に投げつけ、罵っていった。

「こんなもの、わしの襪にしてやる」

士大夫[官僚仲間]はこれを言い伝え、語り草にした。

文同が洋州の知事から都に還ったとき、私は徐州にいた。文同は私に手紙でこのように言った。

「近ごろ私は士大夫連中に入ってやった。『吾が墨竹の一派が都に近い彭城[徐州]にいる。行って頼んたらよいだろう。』だから、そのうち、君のところには襪の材料が集まることでしよう」

手紙の終わりに詩が一首書き添えてあった。そのさわりの部分は、

擬将一段鵝溪絹、[一段[長さ一尺]の鵝溪<sup>がけい</sup>の絹[高級な絹織物]を用いて]

掃取寒梢万尺長。[長さ一万尺の冬の竹を画こうと思う]

私は文同にいった。

「竹の長さが一万尺なら、絹織物にしたら二百五十匹分の長さに相当します。これに画となると筆を動かすのを墨を磨るのも大変でしょうから、その絹を頂戴したいものです」

文同は答えようがなくて、こいって来た。

「私はてたらめを言ったのだ。世の中に一万尺の竹などあるはずもない」

私は自分がいったことを真実とするために、詩で答えた。

世間亦有千尋竹、[世間にはよく千尋<sup>じゆん</sup>の竹があるとされる]

月落庭空影許長。[月が傾いて広い庭に落ちるその影はどれほどの長さであろうか]

文同は笑っていった。

「蘇君はああいえばこいいたな。しかし、二百五十匹もの絹があったら、私は田を買ってすぐに隠居するよ」

そして箕簞谷の偃竹を画いて私に贈ってくれて、こいいた。

「この竹は数尺しかない。しかし一万尺の勢いがある」

箕簞谷は洋州にある。かつて文同は私に『洋州三十詠』を作らせたことがあり、箕簞谷もその一つだった。そのときの詩は、

漢川修竹賤如蓬、[箕簞谷の竹は立派であるけれど、その値は蓬のように安い]

斤斧何曾赦籜竜。[この筍は伐り取るのを禁じられている]

料得清貧饑太守、[清貧を自称するこの実は大食らいの知事殿が]

渭浹千畝在胸中。[いつも竹が胸中にあるといいつつも、本当は自分だけが腹の内におさめようとしているに違いない]

私の手紙が届いた日、文同は妻と眞管谷に遊んで、採ってきた筍を焼いて晩のおかずにしていた。手紙の入った箱を開き、この詩を見ると、笑いをこらえることができなくて、ご飯が卓上いっばいに飛び散ってしまった。

文同は元豊二年正月二十日に陳州で亡くなった。

同じ年の七月七日、私は湖州にあつて書画の虫干しをしてこの竹の画を見て、巻き物を置き、声を失って泣いた。

昔、曹操[三国時代の英雄]は、『橋玄を祭る文』を書き、そこに「車過」「腹痛」の語があつた[橋玄はかつて曹操に向かって、「私が死んだ後、もしも君が私の墓の近くにまできて、車に乗ったまま知らん顔で通り過ぎようとしたら、三歩も行かないうちにきつと腹が痛くなるだろう」と冗談をいっていた]。私もまたここに文同との昔の戯れの言葉を載せるのは、文同と私が親密で隔てるものがなかったことを示すためである。

【補足】 [(1) 一万尺の長さの竹に関するやりとりは、作品番号 05-4-044 にあつた。

(2) この文とは関係ないが、蘇軾にまつわる一つのエピソードをここで読んでおきたい]

### 【訳文】

朱弁：『曲洧旧聞』から

東坡[蘇軾]は本性として事を耐え忍ぶことができなかつた。

東坡は晁端彦に会うと、いつもこのようにいっていた。

「食べているものの中に蠅がいたなら、吐かずにはいられないだろう」

東坡はこのようにもいった。

「私は仁宗皇帝によって制科の試験で拔擢され、そのころの第一級の方々と知己となりました。また、

便殿において神宗皇帝と対面するのを許され、思うところを述べましたところ、すべてを胸に納めてくださった

いました。皇帝にしばしば上奏し、激しく論じることもしましたが、皇帝は一度もお怒りにはなりませんでした。もし私の発言を止めたなら、もはや誰も物をいわなくなってしまうであろうということであったのでしょう。私が心配しているのは、朝廷が私を殺すということだけです」

晁端彦はそれを聞いて、黙って何もいわないしていると、東坡はしばしば嘆息して、「朝廷がもし私を殺すのなら、この微々たる命など惜しむものではありません。ただし、ここに一つの気がかりがあります。私が殺されたなら、きっと君は、たからはいわんこっちゃないと鼻を高くするんだろかね」それで二人で大笑いしたのだった。

【補足】〔(1) これは、朱弁しゅべんの随筆きよくい きゅうぶん『曲洧旧聞』に収められている記事で、晁端彦ちやうたんげん〔字は美叔あざな びしゆく〕は蘇軾と同年の科挙で合格した人である〔→作品番号 05-1-051〕。ここに記されている晁端彦との会話がいつなされたのかということ、確証はないが、もしかしたらこのころであったのかもしれない。なお、晁端彦の子が晁説之ちやうせつしで、朱弁は晁説之の弟子である。つまり、朱弁は師匠からその父の話を書いて記録したのであって、信憑性はそれなりに高いのであろう。(2) 最初の蠅の話は、思い付いたことは言葉にして出してしまうずにはいられない蘇軾の本性をよく言い表して、それが危険なことであるのは重々承知していながらも止められないのである。同じ趣旨のことを蘇軾自身が書いているのを作品番号 05-1-076 で見ている。(3) 後半では、皇帝からは厚く信頼されていると、蘇軾はゆるぎない自信を持っていて、もしもこの身に危害を加える者があるとしたら、朝廷に巢食う新進の連中であると考えていたことが語られている]

## ■ 【05-5-087】書楊樸事

【解題】着任してようやく3カ月を超えたばかりの7月28日、湖州での蘇軾の日々は突然に終了した。都からきた皇甫遵こうほじゆんが州庁に現れ、たちまち蘇軾は逮捕され、知事の

職を解かれ、都へと送還されたのである。それより先、御史台〔官員の不法行為を取り締まる部署〕の李定、舒亶、何正臣が、蘇軾は詩文をもって皇帝を誹謗したとして告発し、皇帝は蘇軾を取り調べるよう命じた。皇帝の命令が下されたのは7月4日、蘇軾が文同の画の虫干をしていた7月7日より3日前であった。ここでは舒亶による告発状を見ておこう。

### 【訳文】

太子中允集賢殿校理權監察御史裏行の舒亶の札子

臣が伏して見ますに、湖州知事の蘇軾が近ごろ提出した『謝上表』〔→作品番号 05-5-048〕には、時事をひどく咎める言葉があり、それを俗人たちが挙って争うようにして言い広め、忠義の士は誰もが憤っております。

陛下がうろわしくも法制度を新たにされて以来、異論を唱える者はもとより少なくはありませんでした。その大きなものは、文章をもって事実を乱し、讒説を作り上げて、新法を破壊しようとするものであり、その次のものは、面従腹背して座して様子をうかがい、新法が成功しないようにするものであります。ただそれだけであって、禍を起さうとの心を内に抱き、お上を怨望し、訕謔慢罵して、人臣としての節義を一切持たないという蘇軾のような者はいなかったのであります。例えば、陛下が錢を貸し与えて貧民の生業を助けられていることについて、「贏得兒童語音好、一年強半在城中」〔→作品番号 04-2-018〕と詩に詠み、陛下が法を明らかにして官員の試験を行われていることについて、「読書万卷不読律、致君堯舜知無術」〔→作品番号 04-1-007〕と詩に詠み、陛下が水利を興されていることについて、「東海若知明主意、応教斥鹵變桑田」〔→作品番号 04-2-063〕と詩に詠み、陛下が塩の専売を厳格にされたことについて、「豈是聞韶解忘味、邇來三月食無塩」〔→作品番号 04-2-018〕と詩に詠んだのであります。そのほかにも、物に触れ、事に即し、口に応じていうことは、いずれもお上を譏諷しないものは一つもないのであります。それらは、あるいは板に刻まれ、あるいは石に刻まれて、朝廷の内



外に伝え広められ、それをもって蘇軾は己の才を誇っているのです。最も甚だしいのは、遠く過去の王朝が衰退したときの故事を用い、あるいは小説や雑多な伝承の語を使って、それをいまの大臣に引き寄せ、さらには陛下を誇ろうとしていることでありまして、大いなる不恭と言わざるを得ないのであります。

臣が歴史を顧みて、古来の書物に載せられているものを見ますに、世の中を憂う者は、上に徳を失った行いがあり、道に反した政治があり、逆節不軌の大臣がいたときであっても、人心を揺るがすことがないように、必ず忠順であるよう諭してから後に批判したのであります。恭しく陛下は身をもって道徳を実践され、政治を導き、士を採用して、天下後世の幸いになるよう、堯舜の心を用いておられます。このようなときに、蘇軾は無用の曲学をもって虚名を克ち得ようとして、官は省郎となり、職は文館に在って、知事となって大きな権限を得たのであります。臣としては、蘇軾が陛下に背いて、悻慢を行って、畏れず忌むことのない振る舞いをどしうてできるのか、全く理解できないのであります。人の道の立つところには必ず義があり、天地の間で逃れられない最も大切な義は君臣の間のものであります。蘇軾の行為は、それを踏み外し、君臣の義をまったく知らないかのようであります。そもそも人臣として、義の心がないのならば、利をもって行うようになり、その悪は留まるところを知らないのです。蘇軾をこのままにしておいてよいのでありましょうか。

昔より、勝手に異説を唱える者に対しては、民衆をばらばらに奸佞の者と親しくして風俗を乱したことをもって責め、決して許すことはありませんでした。臣が按じますに、蘇軾が天を怨む心を抱き、お上を誇る語を造り、深く理を害していることは明白であります。万死をもってしても、聖時を乱した罪を償うには足りません。決して許してはならないのであります。伏して望みますのは、陛下は先王の義を体し、治世の重典を用いて、蘇軾をしかるべき部署に付して、その大不恭について取り調べ、天下の人臣の戒めとしてくださいますように。忠憤に耐えず、心より願うのであります。

元豊二年七月二日、崇政殿に進呈し、中書省へと送付いたします。

【補足】〔(1) 蘇軾が湖州に着任したときに皇帝に提出した文章 [→作品番号 05-5-048]

が告発の第一のターゲットになっていて、その他にここでは四つの詩句が取り上げられている。獄中ではさらに多数の詩文が取り調べの対象となった。(2) この告発状の核心は、蘇軾が皇帝個人を誹謗するという、人臣としてあってはならない大不敬を働いたとするところにある。新法や王安石おうあんせきを批判することは許され得るとしても、矛先を皇帝に向けることは絶対に許されないのだった。蘇軾にはもちろん皇帝を批判する気はなかったのだが、告発者たちは多くの詩文をその証拠として突き付けたのである。

(3) この告発状を書いた舒亶じょたんは蘇軾よりも5歳若く、蘇軾よりも8年遅れて科挙に合格した人で、科挙の二次試験を主席で通過し、その才能が高く買われた。剛直な性格で、御史台ぎょしだいの職務に忠実であったようで、蘇軾が詩文をもって朝政を誹謗したと確信をもって告発したのであろう。(4) もう一人の告発者である李定りていは、蘇軾よりも16歳上で、王安石が改革を始めたのを好機と見て、母の喪に服すべき期間中であることを隠してよいポストを獲得した人物で、蘇軾はそのことをある詩で揶揄していた[→作品番号 03-4-004]。蘇軾が批判する「新進」の典型的な人物で、蘇軾への個人的な憎しみが告発の大きな動機になったであろうことを否定するのは難しい。(5) 何正臣かせいしんは蘇軾よりも3歳ほど若く、神童の誉れ高く、早くも8歳のときからその名を皇帝に知られ、蘇軾よりも10年遅れて科挙に合格し、その後は官員として仕事をそつなくこなしていたようで、蘇軾を告発したのは単に職務を忠実に果たしたということであつたのだろう]

【補足】[蘇軾の逮捕がどのように行われたのか、孔平仲こうへいちゆうの隨筆『孔氏談苑』こうしだんえんに詳しく記されている。孔平仲は蘇軾と交流のあつた孔文仲こうぶんちゆう[→作品番号 04-1-061]の弟で、逮捕の現場に居合わせた祖無頗そむはが目撃したことであるとして記録しているので、いかにも信憑性が高そうなのだが、孔平仲は「諧謔狂放」かいぎやくきやうほうで、書いたものの史料的価値は怪しいとされる。つまり話を面白く盛る癖があるようなので、そのつもりで用心し

て読む必要があるようだ。以下に『孔氏談苑』の一節を訳すが、いわば講談の類だと思って見ていただくのがよいであろう]

### 【訳文】

こうへいちゆう こうし だんえん  
孔平仲:『孔氏談苑』より

蘇軾が詩で朝政を誹謗し、お上を侮る言動があったことをもって、朝廷は御史台に対して、役人を派遣して逮捕するよう命じた。このとき李定は御史台の長官として人に対して荒く、蘇軾を逮捕することに熱心であった。

ここに皇甫遵が派遣されることになり、皇甫遵は息子と御史台の役人二人を連れて湖州へと急行した。一方で、王誦[→作品番号 05-5-015 など]はこのことを知ると、蘇軾と日頃から親しくしていたので、密かに人を遣わして南京応天府にいる蘇轍に報せた。蘇轍はすぐに兄のもとに人を走らせた。皇甫遵は通常の二倍もの速さで飛ぶようにして湖州に向かったために、追いつくのは難しかった。ところが、皇甫遵が長江を渡って潤州に至ったところで、たまたま息子が病気になる、医者を求めて半日そこに留まった。それで蘇轍の使者がわずかに先んじることができた。

皇甫遵が湖州に到着した日、蘇軾は休暇を取っていて、祖無頰が知事代行を務めていた。皇甫遵はただちに州の庁舎に踏み込んだ。皇甫遵は長いブーツを履き、笏を乗って中庭に立った[朝廷の使者としての姿]。従う二人の役人は白い衣に黒い頭巾で、獐猛そうな顔であたりをねめつけた。湖州の役場の人々は何が起こったのかわからず恐れおののいた。

蘇軾も恐れ、すぐに外には出ないで、祖無頰に相談した。祖無頰はいった。「事態がこうなったからにはどうすることもできません。すぐに出て使者に会うべきです」。蘇軾はいかなる服装で出るべきかと祖無頰に相談した。罪人として使者の前に出るのなら、官員としての正式の服装はふさわしくないのではないかと思ったのである。祖無頰はいった。「まだいかなる罪であるのかわかっておりません。正しい服装でお会いするべきです」。そこで蘇軾もブーツを履き、笏を乗って中庭に下り立った。祖無頰と湖州

の役人も蘇軾の後ろに並んだ。

御史台の二人の役人は朝廷からの書状を衣の内に抱え持ち、それはあたかも剣がそこに潜んでいるかのように見えた。皇甫遵はしばらく何もいかなかったのが、人々はますます恐れた。ようやく蘇軾がいった。「私は朝廷の政事に激しく悩むところがあり、今日は必ず死を賜るものでありましょう。死はもとより辞すものではありません。どうか、家人と訣別するために家に一度帰らせていただきます」。皇甫遵は初めて口を開き、「そこまでのことではない」。祖無顔が前に進んで、「何か朝廷から授けられた文章がございましょう」と、いった。皇甫遵は尋ねた。「そちは何者か」。祖無顔はいった。「知事の代行です」。皇甫遵は朝廷からの文章を祖無顔に渡した。それを開いてみると、蘇軾を都に連れて来るようにだけあった。

皇甫遵がすぐに発つよう蘇軾を促すと、二人の役人はとうとう蘇軾を捕えた。即座に町を出て、蘇軾は舟に乗せられた。湖州の人々はそれを見送って、雨のように涙を流した。わずかの間に、州の知事を犬か鶏のように掴まえて、連れ去ってしまったのだった。

**【補足】** [(1) 一読しておわकारの通り、読む人をハラハラドキドキさせる、うまくできた物語である。皇甫遵こうほじゆんが初めに何もいわずにいたのは、蘇軾が恐れて勝手に自殺してしまうよう暗に仕向けたというのが、書かれてはいないけれど、このいかにも講談調のこの文章のミスである。弟の使者が一瞬早くに着いたというのは出来過ぎた話で、それでも、蘇軾はなすすべもなく朝廷の使者を迎え、祖無顔に相談しなければ何もできないほどまでに動揺してしまったよう描かれている。これが事実なら、かつて母の前で自分は漢かんの時代の范滂はんぼうのようになると誓った蘇軾としてははなはだ面目ないであろう [→作品番号 01-2-001]。范滂は、逮捕しにきた朝廷の使者の前へ自ら進んで出て行ったのである]

**【解題】** この項の表題に掲げた『楊樸ようぼくの事を書く』は、この事件からずっと後になっ

て蘇軾自身が記したもの。

### 【訳文】

かつて洛陽らくようを通過した際に、李東之りかんしに会って次のような話を聞いた。

真宗皇帝しんそうが泰山たいざんで封禪ほうぜんの儀を行って都へと帰還する際に、皇帝は天下の隠者きんを探し求めた。杞の人で楊樸ようぼくという隠者がいて、巧みに詩を詠むというので、皇帝は楊樸を呼び寄せた。楊樸は詩など上手に作れないことは自分でよく知っていたけれど、皇帝のお召しに応じないわけにはいかなかった。皇帝は楊樸にいった。

「そちが出發するに当たって、誰かそちに送別の詩を贈ってくれなかったかな」

「妻が贈ってくれた一首だけがございます」

「どいう詩だ」

楊樸が吟じた。

更休落魄耽盃酒、[酒に耽溺して魂を落としちゃだめよ]

且莫猖狂愛詠詩。[詩に凝り過ぎて頭をパーにしちゃだめよ]

今日捉將官裏去、[そうだったのに、今日は引っ立てられてお上のもとに連れられ]

這回斷送老頭皮。[その老いぼれ頭の皮をべりっとむかれちゃうのよね、かわいそうね]

皇帝は大笑いして楊樸を山に還した。

私は湖州こにいたときに、詩をもって罪を問われ、獄に連れて行かれた。妻子は私を見送って門の外で大泣きをした。妻子に語る言葉もなかったのだが、つい妻を顧みて、

「何かい、君は楊樸の妻のように詩を作って僕を送ってくれないのかい」

妻は思わず笑ってしまい、私はそれを背に出て行ったのである。

【補足】[蘇軾にも話を面白く脚色する癖があるので、本人がこのように書いていてもこれがそのまま事実であったかどうかはわからない。一つの有力な解釈としては、

動揺して為すすべを知らない人々を目の前にして、蘇軾は不意にジョークを思い付き、楊樸ようぼくの話をもしかしたら即席で作って、笑わせたのではなからうか。『孔氏談苑』こうしだんえんには、知事代行にいちいち尋ねないと何もできなかつたと書かれていたが、それよりは蘇軾の実像に近いように思われる]

## ■ 【05-5-088】 杭州召還乞郡状

【解説】蘇軾は逮捕され、船中に軟禁され、都へ連れて行かれた。弟の蘇轍に後を託す手紙を書き、そのときまでずっと湖州こにいた王適おうてき、王適おういつの兄弟が蘇軾の家族を蘇轍のいる南京応天府なんけいおうてん ふにまで送り届けることになった。蘇軾の長男の蘇邁そまいは父が護送される船の後を徒歩で追った。ここでは、蘇軾自身が12年後にこの事件をどのように回顧しているかを、時の皇帝しんそう、つまり神宗の子の哲宗てつそうに差し出した次の文章で見ておこう。

### 【訳文】

元祐六年五月十九日、

臣わたくしは昔じ へい、治平年間に鳳翔の職から替わって朝廷に入り、初めて英宗皇帝の知遇ちうぐを被りました。皇帝陛下わたくしは臣を用いようとしてくださいましたが、当時の宰相の韓琦かんきは臣がまだ若く資質に浅いところがあり、官の任に耐えられるか試められてもいないことから、しばらくの間はと館職を与えてくださいました。

臣わたくしは父の喪に服するために官職を去ることとなり、喪が終わって改めて朝廷に参内いたしました。そこで、神宗皇帝のお招きをいただき、面と向かって激励のお言葉を賜り、臣が職掌外のことについても申し上げることを許してくださいました。そのとき臣は、遠国からきた臣下はまだこれほどまでの優遇を受けるはずがないので、これはきっと英宗皇帝が臣を知っていてくださったことによるのであろうと思いました。

このとき王安石が新たに政治を司り、法度を変易しました。臣がもしも少しばかりでも王安石に擦り寄りわたくしましたならば、きっと昇進して用いられたであらう。しかし、臣は朝廷から遠い人間でありながら、英

宗皇帝、神宗皇帝の特別な知遇を蒙り、それでいて天を欺き自分の心に背くようなことはできないと、王安石がしようとしていて施行してはならないことを具さに論じて、万に一つでの国政に補うところがあればと考えました。しかし、神宗皇帝の御心が<sup>わたし</sup>臣のことをどれほど認めてくださっているのか、その浅い深いをまだ測ることができませんでした。折しも、<sup>じょうげん</sup>上元の節に四千の灯籠をお買い上げになって、しかも役目の者が理由もなく価を値切っているということでありましたので、<sup>わたし</sup>臣はそのことを論じて意見書を出したところ、<sup>わたし</sup>先帝[神宗皇帝]は大いに喜ばれて、即時に<sup>わたし</sup>臣が申し上げた通りに施行していただきました。<sup>わたし</sup>臣はこれによって、先帝が聖明にして、言葉を尽くした意見を受け入れてくださると知り、六千余言にわたって新法のよろしくないことを詳しく論じた意見書を提出いたしました。また、科挙についても意見を申し上げ、王安石には人を見る力がなく、王安石が勧める人間は用いてはならないことを申し上げました。<sup>わたし</sup>先帝はそれを聴いて従ってくださったわけではありませんでした。臣の愚直をよしとして、<sup>けんもん</sup>譴問されることはありませんでした。しかし、王安石は大いに怒り、その仲間は皆齒嚙みをして怒り、<sup>わたし</sup>臣を傾けようとした。<sup>ぎょしだい</sup>御史台の謝景温が首謀者となって<sup>しゅくし</sup>必死にあら捜しをして、<sup>わたし</sup>臣が父の喪に服して帰郷した際に、舟の中で私的に塩を販売したとの告発をしました。そして、各地に指令を下して、当時の舵取りから竿さしまでも捕えて拷問にかけて、証拠を集めようしました。しかし、その実体はなく、罪をでっちあげることはできずに終わったのでした。

<sup>わたし</sup>臣はこれによって禍を懼れ、都の外に出ることを乞い、三回連続して地方官に任せられました。それでも、<sup>わたし</sup>先帝は臣を大切に思ってくださることは衰えず、<sup>わたし</sup>臣が差し出す文章が届くと、それを左右の者に示して褒めてくださいました。それで、<sup>わたし</sup>改革派の人々は臣がまた朝廷で用られるのではないかと疑い、<sup>りてい</sup>李定、<sup>かせいしん</sup>何正臣、<sup>じょたん</sup>舒亶の三人が、<sup>わたし</sup>飛語を組み合わせて、いろいろな罪状を作り上げて、必ず<sup>わたし</sup>臣を死罪にしようしました。先帝は初めは許されませんでした。この三人が訴え続けてやまなかったために、<sup>わたし</sup>臣は罪を得て獄に下ることになりました。<sup>こうほじゅん</sup>李定らは乱暴な役人である皇甫遵を派遣し、<sup>わたし</sup>皇甫遵は吏卒を率いて<sup>こ</sup>湖州にきて、<sup>わたし</sup>臣を盗賊のように捕えました。<sup>わたし</sup>臣は妻子と訣別し、手紙を弟に留めて後の処置を託しました。自分で思うに、必ず死ぬであろうと考え、<sup>ちようこう</sup>長江を過る際に、江中に身を投げようしました。

しかし、吏卒が監視していたために果せませんでした。獄に到ると、何も食わずに死のうとしました。しかし、先帝は使者を獄に遣わしてお命じになるところがあり、獄吏は敢えて非道な仕打ちを加えるようなことはなくなりました。それで、臣は、先帝に臣を殺すお気持ちはないと知ったのであります。それによって、余命を留めて今日に至ることを得ました。……[後略]……

【補足】〔(1) この文章も、本人が書いているのだからこれがそのまま事実であったとは限らない。歳月を経てから書いていることと、皇帝に提出した文章であることからすると、露わな意図はなくても、筆を飾ったところが全くないとは言い切れなだらう。(2) 先に見た孔平仲の「講談」では湖州を離れて以降、獄中で何があったかまでを語っている。これこそはかなりの眉唾物と思うべきであろうが、同じ時代の人たちがどのようにこの事件を認識していたかがわかるだらう。ここでは護送中の様子を読んでおこう〕

### 【訳文】

孔平仲：『孔氏談苑』より

蘇軾が皇甫遵に逮捕され、太湖の蘆香亭の下にまでくると、乗っていた船の舵が破損したので修理をした。その夜は、風と波があり、月が昼間のように明るかった[7 月末であったはずなので明らかに事実に反する]。

蘇軾は考えた。

「慌ただしく捕まえられ、これからどうなるのか。きっと厳しい取り調べをされて、連座する者が多数になるだらう。目を閉じて水に入るなら、すぐに事は終わる」

そうしようと思って、また考えた。

「弟を困らせたくない」

つまり、自分にもしものことがあれば、弟はきっと独りでは生きられないと思ったのである。



それで、水には入らずに都ぎょしだいに行き、御史台の獄に入れられたのである。

## ■ 【05-5-089】 呉江岸

【解題】蘇軾は獄に送られてゆく船上で、この詩を詠んだと伝えられている。場所は、太湖たいこの近くの川岸で、孔平仲こうへいちゆうの随筆を信用すれば自殺を思いとどまったすぐ後ということになる。

### 【訳文】

暁の色はそのまま秋の色、  
蝉の声に鳥の聲がまざる。  
大きな志はすっかり消え去ってしまい、  
首こうべを回めぐらすだけで心は動揺する。

## ■ 【05-5-090】 黄州上文潞公書

【解題】上で見たように、蘇軾たいこは太湖たいこのほとりか、長江ちやうこうを渡るときか、入水することを考えたものの、湖州こに赴任した際に通った道を逆にたどるようにして揚州やうに至った。このときの揚州知事は、蘇軾が親しくしてきた鮮于侁せんうしん [→作品番号 05-4-085 など] で、鮮于侁は蘇軾に面会しようとした。

### 【訳文】

『宋史』卷三百四十四「鮮于侁伝」より

蘇軾こが湖州から獄に赴いたときに、親族も友人も交わりを絶った。蘇軾こは揚州やうを通過し、鮮于侁は行って会おうとした。御史台ぎょしだいの役人は面会を許さなかった。

ある者が、「公<sup>こう</sup>[鮮于侁]は蘇軾とは長い知り合いで、往来する文書がありましようから、それらは留めずに焼くのがよろしいでしょう。そうしなければ、罪を獲てしまおう」と、いったので、鮮于侁はこのように答えた。「主君を欺くと、友人に背くと、いずれも私のできることではありません。忠義をもって譴責されるのなら、私の願うところです」。鮮于侁は役人の取り調べの対象となり、揚州知事を辞めることになった。

【**解題**】蘇軾は大運河を北上して、揚州から宿州<sup>しゆく</sup>に至ると、役人がきて船を囲み、文書類の捜査を受けた。そのことについて、事件から2年後に文彦博<sup>ぶんげんぱく</sup> [→作品番号 05-5-014] に宛てた手紙に記しているので、その部分を読んでおこう。

### 【訳文】

私が逮捕されて獄に赴いたときに、長男はすでに長じておりましたので、徒歩でついてきましたが、その他の者は湖州<sup>こ</sup>の官舎に残りました。いずれも婦女人いし幼稚の者でありました。

宿州<sup>しゆく</sup>に至りますと、私<sup>わが</sup>が家に所蔵する文書を取り集めるよう<sup>きょしだい</sup>の御史台の命令が下り、各地の役所はそれに従って役人を捜索に派遣し、私の乗る船も役人に囲まれ、文書類を持ち去っていきました。

家でも捜査を受けて、老人や幼い者は死ぬばかりに怖がり、役人が去ってから、女たちは、「こんなことになったのも日ごろからものを書くことを好んでいたからで、書いていったい何を得たかといったら、私たちをひどく怖がらせただけではありませんか」と、怒り罵り、残ったものごとく焼いてしまいました。事が定まって後に調べてみますと、書いたもののうち十に七ないし八は失われてしまっていました。

【**補足**】 [ここでも蘇軾一流の誇張はあるのだろうが、蘇軾の書いた物は没収されて、取り調べの対象となったことは間違いない]

### ■ 【05-5-091】 御史台榆、槐、竹、柏四首

【**解題**】蘇軾が都ぎよしだいに着いて御史台の獄に入れられたのは8月28日、取り調べを担当したのは、李定りていと張璪ちようそうであった。張璪は、かつて蘇軾から、収穫を早く得ようと焦るのはよろしくないという助言を受けた張璪ちようこと同じ人物である [→作品番号 02-3-032]。李定も張璪も、個人的に蘇軾を憎んでいたようで、取り調べは苛烈で、蘇軾は最初は自分にかけてられた嫌疑を全面的に否定していたのだが、後に、詩文に朝政を誹謗する意図があったと認めるに至った。獄中の様子をまずは例の孔平仲こうへいちゆうの「講談」で見よう。

### 【訳文】

孔平仲：『孔氏談苑』より

李定りてい、舒亶じゆたん、何正臣かせいしんは、蘇軾を罪に陥れようとして、はなはだ厳しく取り調べた。蘇軾はきっと死罪になると思い、死を言い渡されたなら飲んで自殺しようと、毒薬を獄の土の中に埋めて備えた。

一人の獄卒が思いやりがあり、蘇軾を礼儀正しく扱った。夕方になると、毎日蘇軾の足を湯で洗った。

蘇軾はその獄卒まことに誠をもって向き合い、

「私はきっと死ぬことになる。私には弟がいる。弟との別れに、そなたに詩を託したい」

獄卒はいった。

「きっとそのようなことまでにはなりませんでしょう」

「万一死を免れるのなら、恨むところは何もない。しかし、もしも免れず、詩が弟に渡らなかつたなら、私は目をつぶることができない」

獄卒はその詩を受けとった。……[中略、その詩は05-5-094で見ることになる]……

皇甫遵こうほじゆんが蘇軾を逮捕しに行ったとき、夜は厳しく監禁して連れてこようとしたが、皇帝はそのようなことは許さず、詩についての告発が事実かどうかを調べるためにだけ、知事の職を解いて蘇軾を都に呼んだのだった。御史台において始めは蘇軾を弾劾することが厳しく、扱ひも乱暴であったので、人々は蘇

軾のことを心配した。しかし、皇帝の真意が知れると、人々は蘇軾は死罪にはならないだろうと思い、果たしてそうであった。天子は聡明かんこうにして寛厚で、臣下に対して礼儀正しかった。しかし、小人しょうじんどもは天子の意向を勝手に伺い見て、酷いことをしてしまうのだった。皇甫遵のような人間はたくさんいるのだ。

【解題】この項の表題に掲げたのは、蘇軾が秋の終わりのころに詠んだ詩。御史台の庭に植えられている榆にれ、槐えんじゆ、竹、柏はくの4種の植物それぞれに託して、獄中にいる自分の思いを歌っている。

### 【訳文】

#### 其の一 榆にれ

私は、汴河べんがの堤の上を行くときに、  
 榆の緑の蔭を見るのは好きではなかった。  
 榆は千株あってもその蔭ほは一畝にも満たない広さで、  
 斬伐きったところで一束の材にしかならない。  
 私は、幽囚の中に置かれるに及んで、  
 またこの木を見ることになった。  
 虫に食われた皮に秋の雨が乳たり、  
 病んだ葉かきが落ちて牆の曲がったあたりを埋めている。  
 霜や雪の厳しさはよくいわれるが、  
 生意が足りないのはそれだけによるのではない。  
 春風がくるまで待つことができるのなら、  
 その榆からも花が飛んで、  
 からっ皮になったこの部屋のあたりを覆うようになるのだろうか。

其の二 槐えんじゅ

思えば、私が初めてこの獄に来たのは、  
草木が衰えに向かう時季であった。  
槐の高い枝には、秋であるというのに、  
季節に後れた蝉が葉を抱いていた。  
私も蝉もここに居続けるのもういばもないだろうと、思った。  
いま、槐にはまばらに莢さやが残っているだけ。  
寒くなってきてもまた棲みついている鴉からすがいる。  
雪を啄んで餓えに哀しく叫ぶようになるのだろうか。  
槐に壊れた巢の枝が空しくかかっている。  
そこに沈み行く月が影を宿す。  
鳥には両の翼がないわけではない。  
この我が愁絶しゅうぜつに寄り添うためにここにいてくれているのか。

其の三 竹

今日は南の風が来て、庭先の竹を吹き乱した。  
刃やいば [竹のこと]と刃がさかんに触れ合って、低く高く音階に適った音を立てた。  
雪をもたらす蕭然さびしげな風に、  
たとえ竹を折るような意こころがあっても、  
竹が辱められることはない。  
風が止めば竹はもとに戻り、  
猗猗うるわし佻緑の光の玉をあたりに散らすのである。

故郷にはいま何があるのだろうか。

荒れた籬まがきの菊に秋の雨が注いでいるのだろうか。

竹は健やかでいてくれているのだろうか。

帰って南の軒端でその緑の葉に触れてみたい……。

#### 其の四 柏はく

この庭には珍しい木が多くあり、

緑の柏がまるで葦原のように林立している。

幽囚の身には楽しみがなく、

百日の間この柏を見続けている。

時に幹に流れる樹液に触れ、

落ちた実を踏むのは忍びない。

誰がこの木を植えたのか。

私と同じくらいの年齢なのではあるまいか。

蒼蒼たかだかと幹を見上げる。

柏はたくさん囚人を見てきたのだろうか。

思えば、

唐の世に武勇で名を馳せた李祐將軍も、

御史台おんぞうの温造の厳しい調べに胆を落としたのだった。

【補足】〔(1) この一連の詩から、蘇軾は獄中において死を覚悟していたことがわかる。(2) 御史台ぎょしだいにおける蘇軾の取り調べでは、67の詩文が証拠として挙げられ、逐一誹謗の有無を問われた。告発者が蘇軾の詩文をどのように解釈し、蘇軾がそれに対してどのように応じたのか、詳しい記録が残っている。告発者の言い分にはひどいこじ

つけが多く、蘇軾としては、政治の過ちをきちんと指摘しただけで、それは士大夫の正しい伝統に則るものだと思し胸を張りたいところであったのだろうが、朝政を批判する意図があったことは否定しようがないので、尋問を長引かせて多くの人を巻き添えにするのを回避するために、蘇軾は己の罪であると全て認めたのだった]

■ 【05-5-092】 己未十月十五日、獄中恭聞太皇太后不予、有赦、作詩

【**解説**】ぎょしだい 御史台での厳しい取り調べが続いていたころの 10 月 15 日、たいこうたいごう 太皇太后が重い病に陥り、その平癒を願って大赦が行われると、獄中の蘇軾の耳にも聞こえてきた。太皇太后はじんそう 仁宗皇帝の皇后であったそう 曹氏 [建国の功臣そうひん 曹彬の孫] で、しんそう 神宗皇帝にとっては祖母に当たる。ただし、仁宗皇帝には男子がなく、仁宗皇帝の弟の子 [英宗] が皇太子となって皇位を継ぎ、神宗はその子であるから、太皇太后と神宗とは血縁関係はない。蘇軾は自分も大赦の対象になるのではないかと期待してこの詩を詠んだ。

【訳文】

ぎょしだい 御史台の庭の柏は陰陰く昼も門を掩っている。

鳥は大赦があると知っているのか、たそがれ 黄昏の空に騒いでいる。

かん 漢の宮殿では罪を赦して三世にわたる恩を施したことがあり、

そ 楚の王宮では遠く流して九回死ぬべきであった魂を呼び戻したことがあった。

もしも、私も赦されて、鋤をもって田を耕す身になれたとしても、

故郷の人々には面目なくて顔を合わせることはできないだろう。

ぎょう しん 堯や舜のような聖主が治めておられるこの世界であるから、

私を赦してなおも官員の一人に加えてくださったりするだろうか。

【**補足**】 [このころに、たいこうたいごう 太皇太后としんそう 神宗皇帝の間に、次のようなやりとりがあったと、

方勺ほうしゃくの随筆ずいひん『泊宅編』は伝えている。方勺ほうしゃくは北宋ほくそうの終わりのころの人物で、その随筆は当時の噂話を記録したものであるようで、信憑性は先の『孔氏談苑』よりさらに低いであろう]

### 【訳文】

方勺ほうしゃく：『泊宅編』より

蘇軾そしが御史台だいに置かれていたある日、太皇太后たいこうたいごうが皇帝にいった。

「官家かんけ[皇帝]はここ数日、気分がすくれない様子ですが、何かあったのでしょうか」

「幾つか決着しない問題があり、その中に蘇軾という者が、朕を誹謗して、そのことがはっきりと文字に出ているというのです」

「それは、蘇軾、蘇轍兄弟のことでしょうか」

「二人を御存知なのですか」

「私ははっきりと覚えています。仁宗皇帝じんそうが制科せいこの試験をなさったときに、嬉しそうにこのようにおっしゃいました。『朕は今日、二人の文士を得た。蘇軾と蘇轍という者だ。しかし、朕は老いたので、たぶんこの二人を用いることはできないだろう。しかし、将来のためにこの二人を遺すのだ。よいとは思わぬか』

太皇太后は泣いて、いまその二人がどうしているかを皇帝に尋ねると、皇帝は、

「まさにその蘇軾が獄中ごくちゆうにいるのです」

太皇太后が再び泣いたので、皇帝は心を動かし、蘇軾を赦す気になった。

【補足】陳鵠ちんこくの随筆『西塘集せいとうしゅう 耆旧統聞ききゅうとうぶん』には、皇帝と皇后の間で次のようなやりとりがあったとされる。陳鵠がどのような人物であったのか記録が一切なく、記事の信憑性は保証されていない]

### 【訳文】



ちんこく せいとうしゅう ききゅうぞくぶん  
陳鵠：『西塘集耆旧統聞』より

たいこうたいごう  
太皇太后の病が悪化し、いよいよ危うくなったときに、しんそう  
神宗皇帝は純孝の心から大赦令を出そうとした。  
皇后がいった。

「天下の凶悪な人間たちを赦す必要はありませんでしょう。ただ、蘇軾一人を放免すれば十分なので  
はないでしょうか」

【補足】 [真偽のほどはわからないが、たいこうたいごう  
太皇太后や皇后に蘇軾を救う気持ちがあった  
のだが、りてい  
李定等が強く抵抗したために、蘇軾は大赦の対象にはならなかった]

■ 【05-5-093】 十月二十日、恭聞太皇太后升遐、以軾罪人不許成服、欲哭則不敢、欲  
泣則不可、故作挽詞二章

【解題】 詩題は、「十月二十日、うやうや  
恭しくもたいこうたいごう  
太皇太后が亡くなられたと聞き、私は罪人  
の身であることから喪に服すことを許されなかった。こくせい  
哭声を挙げることは敢えてしな  
いとしても、普通に泣こうとしても、それも許されなかった。そこで挽詞を二つ作っ  
た」。

### 其の一

そうちよう  
宋朝が初めて開かれたとき、いさお  
高く聳える勲があったそうひん  
曹彬。

まことに優れた人は得難く、

そのときの宋朝にも賢臣は十人ほどしかいなかった。

たいそ  
曹彬は太祖の廟の脇に祭られ、

こうなん  
江南を平定した際に数多の命を救っただけではないその功績は、

百世にわたって語り継がれるべきものである。

たいこうたいごう  
その曹彬の孫の太皇太后は、

かんだい  
漢代の優れた皇后を遙かにしのぐお方であった。

とう たす  
鄧皇后は幼帝を輔けてよく朝政をみたものの、位を貪る心があり、

は  
馬皇后は皇帝をよく支えたものの、その恩徳は民にまでは及ばなかった。

月が落ちたのを風も悲しみ、天は雨を降らせて泣く。

誰か、大きな筆で太皇太后の光溢れるお姿を写してはくれないだろうか。

## 其の二

せい か じん そう  
私は制科の試験で仁宗皇帝の御恩を受けていながら、

まだ何も報いないうちに、

はく  
御陵を廻る松や柏が高く聳えるまでになってしまった。

ひと声慟哭することも、ここはそれができる場所ではなく、

万死をもって御恩に酬いるのに、私にその時間があるのだろうか。

夢に天の道を歩もうとしても、

狭くて私は通ることができないので、

人間世界に留まって、

とばり  
白い帷が赤く変色するまで涙を流し続けるのだろうか。

平生より私は、

太皇太后が仁宗皇帝を追慕するお心に感嘆していたのだが、

三代にわたってお仕えてしてきたこの老臣は、

詩のために罪に落ちてしまった。

■【05-5-094】予以事繫御史台獄、獄吏稍見侵、自度不能堪、死獄中、不得一別子由、故作二詩授獄卒梁成、以遺子由、二首

【**解題**】長男の蘇邁そまい こは湖州から連行された蘇軾の舟の後に付いて都にきて、獄中の蘇軾に食物を送るなどして、蘇軾の獄中生活を支えていた。それについては葉夢得ようぼうとくの隨筆『避暑録話』に記事がある。葉夢得は蘇軾よりも少し後の文人で、改革派につながる人物である。蘇軾の逮捕は当時の人々にとって一大事件であったので、真偽不明ながら様々なエピソードが伝えられたのである

### 【訳文】

ようぼうとく ひしょろくわ  
葉夢得：『避暑録話』

蘇邁そまいは食糧を送るのに、野菜と肉だけを添え、もしも不測の事態になった場合には、野菜と肉を止めて魚を添えることで、外の様子を伝えると決めていた。蘇邁は一月以上にわたって決めた通りしていたのだが、食糧の蓄えが尽きたので、補充しに出かけることになり、ある親戚に代わりを頼み、その決まり事を伝えるのを失念した。親戚はたまたま魚が手に入ったので、それを獄中に送った。蘇軾はそれを見てひどく驚き、皇帝の慈悲にすがってもそれは皇帝に耳に達することがなく、死は免れないのだと思い、弟に向けて二つの詩を作り、獄吏に渡した。きっと獄吏はそれを隠すことができなくて、皇帝の耳に達するであろうと思ったのだ。

【**補足**】〔蘇軾が獄中から弟に詩を寄せたことは、先に見た『孔氏談苑』にも記されていたが、その経緯はかなり異なっている。話がより劇的である『避暑録話』の方が怪しいだろう〕

【**解題**】この項の表題に掲げたのは、獄中から弟に送った詩。その題は、「私は事をもって御史台の獄ぎょしだいに繋がれ、獄吏によっていささか酷い扱いを受けた。自分で推量するに、これに堪えることができなくて、獄中に死んで、弟に会って別れを告げることはできないだろうと思った。そこで二つの詩を作って、獄卒の梁成りょうせいに授けて、弟に遺

った」。

### 【訳文】

#### 其の一

聖主は天のよう、万物はそのもとで常に春。  
 小臣だけが愚暗にして自ら身を亡ぼしてしまった。  
 人としての百年の寿命を満たす前に、  
 前世の罪業を死をもって償わなくてはならない。  
 僕の十人の家族は帰る場所がなく、  
 さらに君を累わすことになってしまう。  
 いたるところの青山、そのどこでも僕の骨を埋めてくれたまえ。  
 いつか夜の雨に、君は独りで心を傷めるのか。  
 君とは世世、兄弟でいようではないか。  
 この現世では尽くせなかった縁を、  
 きっとまた次の世で結ぶのだ。

#### 其の二

御史台ぎよしだいの夜は凄凄ぞっとするばかりの霜の気に満ち、  
 風が罪人の瑯瑯くさりに冷たく吹き寄せる間に月が低くなる。  
 夢は故郷の山を繞って、心はあたかも鹿のようになるが、  
 熱湯や火に責められて魂は飛び、命はあたかも料理前に鶏のようだ。  
 眼に浮かぶ額の形が賢者の相を示しているのは、  
 まさに我が子のことであろう。

僕が死んだ後で、牛にかける襤褸の麻布を衣として着なければならなくなるのは、  
恥ずかしいことにそれが僕の妻なのだ。

死んで僕の魂はどこを彷徨うのか。

杭州、湖州の人々が、きっとその地に葬ってくれることだろう。

【補足】[この詩の末尾について、蘇軾自身の注記がある。「獄中で聞くに、杭州や湖州の人々は、寺社において私のために厄を解くことを何カ月にもわたって祈っていると」。蘇軾も杭州、湖州の風光を愛し、民衆も蘇軾を慕っているのであれば、その地に葬られたいと思ったのだ]

【補足】[蘇軾の厳しい尋問と審理は4カ月にわたって続いた。罪を問われたのは蘇軾だけではなく、蘇軾と詩文のやりとりをした39人も取り調べの対象になった。それらの人の多くが、自分が罰せられることは恐れないけれども、蘇軾が死罪になることだけは赦してほしいと朝廷に願った。李定と張璪は何としてでも蘇軾を死罪にしようとしたのだが、改革政治の重要な担い手として活躍していた章惇は、蘇軾のかつての親友として、弁護を買って出ている。また、蘇軾父子の大恩人である張方平は、蘇軾を救おうと皇帝に直訴する文書を記した。それについては馬永卿の隨筆『元城語録』[→作品番号 01-2-007] が伝えてくれている]

## 【訳文】

馬永卿：『元城語録』

劉安世先生はこのように話された――

……元豊二年の秋と冬のころ、東坡[蘇軾]が御史台の獄に下された。天下の士は痛み、しかし、見守るばかりで敢えて救おうする者はいなかった。時に張方平は引退して南京応天府にいたのだが、憤然と上書して蘇軾を救おうとした。張方平は書いたものを南京の役所の飛脚に託そうとしたのだが、

南京府の役人は受け取ろうとはしなかった。そこで、張方平はその子の張恕ちやうじよに持って行かせ、登聞鼓院とうぶんこに投げ込ませようとした。張恕はもともと愚かな臆病者であったので、登聞鼓院いんの前でぐずぐずして、父の上書を提出することができなかった。しばらくするうちに、東坡は出獄した。

その後、東坡は張方平の上書の写し見ると、舌を吐いて、顔色を変え、じっと動かなかった。人がそのわけを尋ねても東坡は答えなかった。

その後、弟の蘇轍もそれを見て、「兄上あにさまが舌を吐いて驚いたのも無理はない。張恕のお蔭で助かったようなものだ」と、いった。ある人がそのわけを尋ねると、「……兄上あにさまに何の罪があるのかといったら、名をもって朝廷と争っただけです。いま張先生の上書を見ると、『まことに天下の奇材である』と、兄のことを書いています。これでは、お上のお怒りを余計に激しくさせてしまいましょう。一時の危急の際に、とにかく救おうとしてこの語が出たのでしょけれど」。

——私ぼく〔馬永卿ばえいけい〕は劉安世先生りゅうあんせいに尋ねた。「では、このときに東坡が救われたのはどのようなわけであったのでしょうか。』。先生はいわれた。「本朝ではそれまで士大夫しだいふを殺すことはなかった。いま士大夫を殺したなら、神宗皇帝しんそうがそれを始めたことになる。後世の皇帝の子孫は、優れた士大夫を殺すたびに、神宗皇帝の例を引くことになるだろう。神宗皇帝は名を好み、義を畏れる人であったから、後の事を考えて殺すのをやめたのだ」。

【補足】〔(1) 張方平ちやうほうへいは引退したとあるのは、この年の7月に政界を退いて、そのまま南京応天府で悠々自適の身となっていた。(2) 登聞鼓院とうぶんこいんは、蘇軾もその一員だったことがあるが、皇帝への直訴を受け付ける役所である [→作品番号 03-1-001]。(3) 張方平ちやうほうへいの息子ちやうじよの張恕ちやうじよについて作品番号 05-4-081 などで見ているが、さえない人物であったかどうかはわからない。劉安世りゅうあんせいの個人的な見解である。(4) 終わりに記されている神宗皇帝しんそうの心中は劉安世による憶測でしかない]

【補足】〔蘇轍ちやうほうへいは張方平の書いた文章を見て、かえってこれでは兄の命を縮めてしまったらうと冷や汗を流したのだが、では皇帝にはどのように願い出たらよいか、

そのあるべき文章を蘇轍は自ら書いて皇帝に提出していた。それをこの章の終わりで見ておこう。これが、弟に遺した 2 首の詩を読んで後に書かれたものなら、一段と感動的であるのかも知れないが、実際は蘇軾が獄に下ってすぐに書かれたものであろうと推測されている。沈着冷静な蘇轍にしては、文章に乱れや重複があって、相当に慌ただしく書かれたものようであるからだ]

### 【訳文】

蘇轍：『為兄軾下獄上書』[兄の軾が獄に下った為に上書する]

臣はこのように聞いています。

困難、危急のときに天を呼び、疾病、痛苦のときに父母を呼ぶのは人の至情[純粹な心]からくるものであると。

臣は草芥の微[身分卑しいごくまらない者]ですが、危うも差し迫った願いがあります。ただ天地、父母だけが哀しんで憐れんでくれるのでしょうか。

臣は早くに父母を失い、ただ兄の軾一人だけを命の頼みとしてきました。いまひそかに聞きますところでは、兄は罪を得て逮捕され、獄にあるとか。一家中が驚き叫び、いかなることになるかと憂えています。

臣がひそかに考えますに、兄は家にいても官職にあっても、大きな過失、大きな罪悪はありませんでした。ただ、生来愚直であり、古今の政事の得失を議論するのが好きで、しばしば意見書を朝廷に提出し、いろいろな事を論じてきました。その言論は一定していませんでしたが、陛下の御聖徳は広大で兄に譴責を加えることはありませんでした。兄は狂狷[思い込みが強くそのままに行動してしまう]で、思慮が足りず、天地をも包み込む陛下の恩を恃みとして、自分を抑制して畏れることをしませんでした。

兄は先頃は杭州の副知事であり、密州の知事でありましたが、何か物に触れて興を發するたびに、それを託するに詩歌を作り、ときに軽はずみな語を出すこともありました。先に臣下の者がそれらを集めて

陛下の御覽に供しましたが、陛下はそのまま置いて問われることをなさいませんでした。兄は御恩を頂戴したことに感じ入り、深く後悔し、それからは決して再び行うようなことはありませんでした。しかし、以前に作った詩は自ずと広まってしまいました。

臣は兄のことをまことに哀れに思います。兄は自分を信じてしまうほどに愚かで、軽々しく言葉を出し、それが不遜の域に達してしまったことに気付かなかったのです。過ちを改めて自身を一新しようとしたときには、すでに刑罰に陥るまでになり、救いようがなくなっていました。

兄は逮捕されましたときに、使いをよこして臣にこのように言いました。

「私はすでに衰え、病いがかちである。きっと牢獄で死ぬだろう。もとより死は定めとしてあるものだ。しかし、残念に思うことがある。若くて抱いた志があった。世に稀な優れた天子様に巡り合えて、いまは失敗ばかりしてはいても、死ぬまでの間にほんのわずかも節義を尽したかった。いまこの禍に遭い、過ちを改めて自分自身を一新して、心を洗って明主にお仕えしたいと思っても、もはやその道がなくなってしまった。まして、朝廷において私は最も孤立し、皇帝の左右の親近に、自分のために弁護してくれる者はいない。ただ、兄弟の親しみのある者だけが、陛下に哀れを求めようとしてくれるのだろうか」

臣は兄の心を哀れみ、手足ともいべき兄弟の情を抑えることができないままに、死を冒してこのように一言申し上げる次第です。

昔、漢の時代に、淳于意が罪を得たときに、その末娘の緹縈は、自分の身を官の奴隷に落として、父の罪を贖いたいと願ひ出ました。漢の文帝はこのことから身体を害う肉刑を用いることを止めました。

臣の誠などは虫けらのもの、緹縈には遥かに遥かに及びません。しかし、陛下の聡明、仁聖は漢の文帝を遠く超えるものであります。臣はいま頂戴している官職をお返して、兄の罪を贖うことをお願いいたしたく思います。兄の罪を軽じていただくまでを願うものではありません。ただ、獄で死ぬことさえ免れられるのなら幸いです。

兄の犯したことが文字にはっきりと明らかであるのなら、罰を受けることを拒み続けて、さらに罪を重ねるようなことはありませんでしょう。



もしも陛下の哀憐を蒙り、その万死が赦されて、牢獄から出ることができましたならば、それは死んでまた生き返ったようなもの、いかりして御恩に報いたらよろしいでしょうか。<sup>わたし</sup>臣が願いますのは、兄とともに心を洗い、過ちを改め、骨を粉にして御恩をお返し、ただ陛下のお使いになるままに行動して、死んで後に終えるものであります。

<sup>わたし</sup>臣は孤り危難の迫切したことに堪えられず、苦しさを訴えるところもなく、誠の心を陛下に捧げるものであります。この狂わしい振る舞いを見逃され、この乞い願うところをとくにお許し下さい。

<sup>わたし</sup>臣は天に祈り、命に代えて請い、<sup>げきせつゐんえつ</sup>激切隕越[激しく死ぬばかりの思い]の至りに堪えることができません。

## 第5章 原文

詩のテキストは孔凡礼点校『蘇軾詩集』（1982年）に、賦のテキストは李之亮箋注『蘇軾文集編年箋注』（2011年）に準拠し、その他の散文類は省略する。

### ■ 【05-1-001】 平山堂次王居卿祠部韻

高会日陪山簡醉、狂言屢發次公醒。

酒如人面天然白、山向吾曹分外青。

江上飛雲來北固、檻前修竹憶南屏。

六朝興廢余丘壘、空使奸雄笑寧馨。

### ■ 【05-1-002】 書許敬宗硯

### ■ 【05-1-003】 更漏子

水涵空、

山照市。

西漢二疏鄉里。

新白髮、

旧黃金。

故人恩義深。

海東頭、

山尽處。

自古客棹來去。

槎有信、  
赴秋期。  
使君行不歸。

■ 【05-1-004】 永遇樂

長憶別時、  
景疎樓上、  
明月如水。  
美酒清歌、  
留連不住、  
月隨人千里。  
別來三度、  
孤光又滿、  
冷落共誰同醉。  
捲珠簾、  
淒然顧影、  
共伊到明無寐。

今朝有客、  
來從睢上、  
能道使君深意。  
憑仗清淮、  
分明到海、

中有相思淚。  
而今何在、  
西垣清禁、  
夜永露華侵被。  
此時看、  
回廊曉月、  
也忘暗記。

■ 【05-1-005】 二疏囚贊

■ 【05-1-006】 次韻陳海州書懷

鬱鬱蒼梧海上山、蓬萊方丈有無間。  
旧聞草木皆仙藥、欲棄妻孥守市闌。  
雅志未成空自歎、故人相對若為顏。  
酒醒却憶兒童事、長恨双鳧去莫攀。

■ 【05-1-007】 次韻陳海州乘槎亭

人事無涯生有涯、逝將歸釣漢江槎。  
乘桴我欲從安石、遁世誰能識子嗟。  
日上紅波浮碧嶼、潮來白浪卷青沙。  
清談美景双奇絕、不覺歸鞍帶月華。

■ 【05-1-008】 次韻孫職方蒼梧山

蒼梧奇事豈虛傳、荒怪還須問子年。  
遠託鰲頭轉滄海、來依鵬背負青天。  
或云靈境歸賢者、又恐神功亦偶然。  
聞道新春恣遊覽、羨君平地作飛仙。

■ 【05-1-009】次韻孫巨源寄漣水李、盛二著作並以見寄五絕

其一

南岳諸劉豈易逢、相望無復馬牛風。  
山公雖見無多子、社燕何由恋塞鴻。

其二

高才晚歲終難進、勇退當年正急流。  
不獨二疏為可慕、他時當有景孫樓。  
〈〈巨源近離東海、郡有景疏樓。〉〉

其三

漱石先生難可意、齧氈校尉久無朋。  
感知客路愁無奈、故遣吟詩調李陵。

其四

雲雨休排神女車、忠州老病畏人誇。  
詩豪正值安仁在、空看河陽滿鼎花。

其五

膠西未到吾能說、桑柘禾麻不見春。  
不羨京塵騎馬客、羨他淮月弄舟人。

■ 【05-1-010】 浣溪沙

長記鳴琴子賤堂。  
朱顏綠髮映垂楊。  
如今秋鬢數莖霜。

聚散交遊如夢寐、  
升沈間事莫思量。  
仲卿終不忘桐鄉。

■ 【05-1-011】 王莽

漢家殊未識經綸、入手功名事事新。  
百尺穿成連夜井、千金購得解飛人。

■ 【05-1-012】 董卓

公業平時勸用儒、諸公何事起相凶。  
只言天下無健者、豈信車中有布乎。

■ 【05-1-013】 沁園春

孤館燈青、

野店鷄号、  
旅枕夢殘。  
漸月華收練、  
晨霜耿耿、  
雲山摘錦、  
朝露溥溥、  
世路無窮、  
勞生有限、  
似此區區長鮮歡。  
微吟罷、  
憑征鞍無語、  
往事千端。

當時共客長安。  
似二陸初來俱少年。  
有筆頭千字、  
胸中万卷、  
致君堯舜、  
此事何難。  
用舍由時、  
行藏在我、  
袖手何妨閑處看。  
身長健、

但優游卒歲、  
且斗樽前。

■ 【05-1-014】 虎兕

旧聞老蚌生明珠、未省老兔生於菟。  
老兔自謂月中物、不騎快馬騎蟾蜍。  
蟾蜍爬沙不肯行、坐令青衫垂白鬚。  
於菟駿猛不類渠、指揮黃熊駕黑羆。  
丹砂紫麝不用塗、眼光百步走妖狐。  
妖狐莫誇智有余、不勞搖牙咀爾徒。

■ 【05-1-015】 密州謝上表

■ 【05-1-016】 与滕達道

■ 【05-1-017】 答水陸通長老

■ 【05-1-018】 上韓丞相論災傷手實書

■ 【05-1-019】 論河北京東盜賊狀

■ 【05-1-020】 鉄溝行贈喬太博

城東坡隴何所似、風吹海濤低復起。



城中病守無所為、走馬來尋鉄溝水。  
鉄溝水浅不容輶、恰似当年韓与侯。  
有魚無魚何足道、駕言聊復写我憂。  
荒村野店亦何有、欲發狂言須鬥酒。  
山頭落日側金盆、倒著接●搔白首。 [●は皿の下に離]  
忽憶從軍年少時、輕裘細馬百不知。  
臂弓腰箭南山下、追逐長楊射獵兒。  
老去同君兩憔悴、犯夜醉歸人不避。  
明年定起故將軍、未肯先誅霸陵尉。

■ 【05-1-021】 雪後書北台壁二首

其一

黄昏猶作雨纖纖、夜静無風勢轉嚴。  
但覺衾裯如潑水、不知庭院已堆塩。  
五更曉色來書幌、半夜寒声落画簷。  
試掃北台看馬耳、未随埋没有双尖。

其二

城頭初日始翻鴉、陌上晴泥已沒車。  
凍合玉樓寒起粟、光搖銀海眼生花。  
遺蝗入地心千尺、宿麥連雲有幾家。  
老病自嗟詩力退、空吟冰柱憶劉叉。

■ 【05-1-022】 謝人見和前篇二首

其一

已分酒杯欺淺懦、敢將詩律鬥深嚴。  
漁蓑句好應須畫、柳絮才高不道鹽。  
敗履尚存東郭足、飛花又舞謫仙簷。  
書生事業真堪笑、忍凍孤吟筆退尖。

其二

九陌淒風戰齒牙、銀杯逐馬帶隨車。  
也知不作堅牢玉、無奈能開頃刻花。  
得酒強勸愁底事、閉門高臥定誰家。  
台前日暖君須愛、冰下寒魚漸可叉。

■ 【05-1-023】 除夜病中贈段屯田

鼉鐘三十九、勞生已強半。  
歲暮日斜時、還為昔人歎。  
今年一線在、那復堪把玩。  
欲起強持酒、故交雲雨散。  
惟有病相尋、空齋為老伴。  
蕭條燈火冷、寒夜何時旦。  
倦僕觸屏風、飢鼯嗅空案。  
數朝閉閣臥、霜髮秋蓬亂。  
伝聞使者來、策杖就梳盥。

書來苦安慰、不怪造請緩。  
大夫忠烈後、高義金石貫。  
要當擊權豪、未肯覩衰懦。  
此生何所似、暗尽灰中炭。  
歸田計已決、此邦聊假館。  
三徑粗成資、一枝有余暖。  
願君留信宿、庶奉一笑粲。

■ 【05-1-024】 喬太博見和復次韻答之

百年三万日、老病常居半。  
其間互憂樂、歌笑雜悲嘆。  
顛倒不自知、直為神所玩。  
須臾便堪笑、万事風雨散。  
自從識此理、謝少年伴。  
逝將遊無何、豈暇誦城旦。  
非才更多病、二事可並案。  
愧煩賢使者、弭節整紛亂。  
喬侯瑚璉質、清廟嘗薦盥。  
奮髯百吏走、坐變齊俗緩。  
未遭甘鷓退、並進恥魚貫。  
每聞議論余、凜凜激貪懦。  
莫邪當自躍、豈復煩爐炭。  
便忘朝秣越、未暮刷燕館。

胡為守故丘、眷戀桑榆暖。  
為君叩牛角、一詠南山粲。

■【05-1-025】二公再和亦再答之

寒雞知將晨、飢鶴知夜半。  
亦如老病客、遇節常感嘆。  
光陰等敲石、過眼不容玩。  
親友如搏沙、放手還復散。  
羈孤每自笑、寂寞誰肯伴。  
元達号神君、高論森月旦。  
紀明本賢將、汨沒事堆案。  
欣然肯相顧、夜閣燈火乱。  
盤空愧不飽、酒薄僅堪盥。  
雍容許著帽、不怪安石緩。  
雖無窈窕人、清唱弄珠貫。  
幸有縱橫舌、說劍起慵懦。  
二豪沈下位、暗火埋濕炭。  
豈似草玄人、默默老儒館。  
行看富貴逼、炙手借余暖。  
忘念苦思歸、登樓賦王粲。

■【05-1-026】蘇州姚氏三瑞堂

君不見董邵南、隱居行義孝且慈、天公亦恐無人知。

故令雞狗相哺兒、又令韓老為作詩。

爾來三百年、名與淮水東南馳。

此人世不乏、此事亦時有。

楓橋三瑞皆目見、天意宛在虞蹕後。

惟有此詩非昔人、君更往求無價手。

■ 【05-1-027】 莫笑銀杯小答喬太博

陶潛一具縣令、獨飲仍獨醒。

猶將公田二頃五十畝、種秫作酒不種杭。

我今號為二千石、歲釀百石何以醉賓客。

請君莫笑銀杯小、爾來歲早東海窄。

會當芘衣歸故丘、作書貸粟監河侯。

萬斛船中著美酒、與君一生長拍浮。

■ 【05-1-028】 蝶戀花

燈火錢塘三五夜。

明月如霜、

照見人如畫。

帳底吹笙香吐麝、

此般風味忒無價。

寂莫山城人老也。

擊鼓吹簫、

乍入農桑社。  
火冷燈希霜露下、  
昏昏雪意雲垂野。

■【05-1-029】江神子

十年生死兩茫茫。  
不思量。  
自難忘。  
千里孤墳。  
無處話淒涼。  
縱使相逢應不識、  
塵滿面、  
鬢如霜。

夜來幽夢忽還鄉。  
小軒窗。  
正梳妝。  
相顧無言、  
惟有淚千行。  
料得年年腸斷、  
明月夜、  
短松岡。

■ 【05-1-030】 送段屯田分得於字

勸農使者古丈夫、不惜春衫踐泥塗。  
王事靡盬君甚劬、奉常客卿虬兩鬚。  
東武鼎令天馬駒、泮宮先生非俗儒。  
相与野飲四子俱、樂哉此樂城中無。  
溪邊策杖自携壺、腰笏不煩何易於。  
膠西病守老且迂、空齋愁坐紛墨朱。  
四十豈不知頭顱、畏人不出何其愚。

■ 【05-1-031】 出城送客、不及、步至溪上、二首

其一

送客客已去、尋花花未開。  
未能城裏去、且復水邇來。  
父老借問我、使君安在哉。  
今年好風雪、會見麥千堆。

其二

春來六十日、笑口幾回開。  
會作堂堂去、何妨得得來。  
倦遊行老矣、旧隱賦歸哉。  
東望峨眉小、廬山翠作堆。

■ 【05-1-032】 遊廬山、次韻章伝道

塵容已似服轅駒、野性猶同縱壑魚。  
出入巖巒千仞表、較量筋力十年初。  
雖無窈窕馭前馬、還有鷗夷掛後車。  
莫笑吟詩淡生活、當令阿買為君書。

■ 【05-1-033】 廬山五詠

其一 廬敖洞

上界足官府、飛昇亦何益。  
還在此山中、相逢不相識。

其二 飲酒台

博士雅好飲、空山誰與娛。  
莫向驪山去、君王不喜儒。

其三 聖燈巖

石室有金丹、山神不知秘。  
何必露光芒、夜半驚童稚。

其四 三泉

皎皎巖下泉、無人還自潔。  
不用比三星、清光同一月。

其五 障日峰



長安自不遠、蜀客苦思歸。  
莫教名障日、喚作小峨眉。

■ 【05-1-034】 与滕達道

■ 【05-1-035】 与石幼安

■ 【05-1-036】 和頓教授見寄、用除夜韻

我笑陶淵明、種秫二頃半。  
婦言既不用、還有責子嘆。  
無弦則無琴、何必勞撫玩。  
我笑劉伯倫、醉髮蓬茅散。  
二豪苦不納、独以錡自伴。  
既死何用埋、此身同夜旦。  
孰云二子賢、自結兩重案。  
笑人還自笑、出口談治乱。  
一生混塵垢、晚以道自盥。  
無成空得懶、坐此百事緩。  
仄聞頓夫子、講道出新貫。  
豈無一尺書、恐不記庸懦。  
陋邦貧且病、數米銖稱炭。  
慚愧章先生、十日坐空館。  
袖中出子詩、貪誦酒屢暖。

狂言各須慎、勿使輸薪粢。

■ 【05-1-037】 祭常山祝文

■ 【05-1-038】 次韻章伝道喜雨

去年夏旱秋不雨、海畔居民飲鹹苦。  
 今年春暖欲生蠓、地上戢戢多於土。  
 預憂一旦開兩翅、口吻如風那肯吐。  
 前時渡江入吳越、布陣橫空如項羽。  
 農夫拱手但垂泣、人力區區固難禦。  
 撲綠髮毛困牛馬、啖齧衣服穿房戶。  
 坐觀不救亦何心、秉畀炎火伝自古。  
 荷鋤散掘誰敢後、得米濟飢還小補。  
 常山山神信英烈、擒駕雷公訶電母。  
 忘憐郡守老且愚、欲把瘡痍手摩撫。  
 山中歸時風色變、中路已覺商羊舞。  
 夜窗騷騷鬧松竹、朝畦泫泫流膏乳。  
 從來蝗旱必相資、此事吾聞老農語。  
 庶將積潤掃遺孽、收拾豐歲還明主。  
 鼎前已審八千斛、率以一升完一畝。  
 更看蠶婦過初眠、未用賀客來旁午。  
 先生筆力吾所畏、蹙踏鮑謝跨徐庾。  
 偶然談笑得佳篇、便恐流伝成樂府。

陋邦一雨何足道、吾君盛德九州普。

中和樂職幾時作、試向諸生選何武。

■ 【05-1-039】 謝郡人田賀二生獻花

城裏田員外、城西賀秀才。

不愁家四壁、自有錦千堆。

珍重尤奇品、艱難最後開。

芳心困落日、薄艷戰輕雷。

老守仍多病、壯懷先已灰。

殷勤此粲者、攀折為誰哉。

玉腕揜紅袖、金樽瀉白醅。

何當鑷霜鬢、強插滿頭回。

■ 【05-1-040】 惜花

吉祥寺中錦千堆、前年賞花真盛哉。

道人勸我清明來、腰鼓百面如春雷、打徹涼州花自開。

沙河塘上插花回、醉倒不覺吳兒咍、豈知如今雙鬢摧。

城西古寺沒蒿萊、有僧閉門手自栽、千枝萬葉巧剪裁。

就中一叢何所似、馬腦盤盛金縷杯。

而我食菜方清齋、對花不飲花忘猜。

夜來雨雹如李梅、紅殘綠暗吁可哀。

■ 【05-1-041】 和子由四首

其一 韓太祝送遊太山

偶作郊原十日遊、未忘回首厭籠囚。  
但教塵土驅馳足、終把雲山爛漫酬。  
聞道逢春思濯錦、更須到處覓菟裘。  
恨君不上東封頂、夜看金輪出九幽。

其二 送春

夢裏青春可得追、欲將詩句絆余暉。  
酒闌病客惟思睡、蜜熟黃蜂亦懶飛。  
芍藥桜桃俱掃地、鬢糸禪榻兩忘機。  
憑君借取法界觀、一洗人間万事非。

其三 首夏官舍即事

安石榴花開最遲、絳裙深樹出幽菲。  
吾廬想見無限好、客子倦遊胡不歸。  
坐上一樽雖得滿、古來四事巧相違。  
令人却憶湖邊寺、垂柳陰陰画掩扉。

其四 送李供備席上和李詩

家聲赫奕蓋并涼、也解微吟錦瑟傍。  
擘水取魚湖起浪、引杯看劍坐生光。  
風流別後人人憶、才器歸來種種長。  
不用更貪窮事業、風騷分付与沈湘。

■ 【05-1-042】 西齋

西齋深且明、中有六尺牀。  
病夫朝睡足、危坐覺日長。  
昏昏既非醉、踽踽亦非狂。  
褰衣竹風下、穆然濯微涼。  
起行西園中、草木含幽香。  
榴花開一枝、桑棗沃以光。  
鳴鳩得美蔭、困立忘飛翔。  
黃鳥亦自喜、新音變囁呶。  
杖藜觀物化、亦以觀我生。  
万物各得時、我生日皇皇。

■ 【05-1-043】 小兒

小兒不識愁、起坐牽我衣。  
我欲嗔小兒、老妻勸兒癡。  
兒癡君更甚、不樂愁何為。  
還坐愧此言、洗盞當我前。  
大勝劉伶婦、區區為酒錢。

■ 【05-1-044】 寄劉孝叔

君王有意誅驕虜、椎破銅山鑄銅虎。  
聯翩三十七將軍、走馬西來各開府。

南山伐木作車軸、東海取鼉漫戰鼓。  
 汗流奔走誰敢後、恐乏軍興污質斧。  
 保甲連村困未遍、方田訟牒紛如雨。  
 爾來手實降新書、扶別根株窮脈縷。  
 詔書惻怛信深厚、吏能淺薄空勞苦。  
 平生學問止流俗、衆裏笙竽誰比數。  
 忽令獨奏鳳將雛、倉卒欲吹那得譜。  
 況復連年苦饑饉、剥齧草木啖泥土。  
 今年雨雪頗忘時、又報蝗虫生翅股。  
 憂來洗盞欲強醉、寂寞虛齋臥空甌。  
 公廚十日不生煙、更望紅裙踏筵舞。  
 故人屢寄山中信、只有當歸無別語。  
 方將雀鼠偷太倉、未肯衣冠掛神武。  
 吳興丈人真得道、平日立朝非小補。  
 自從四方冠蓋鬧、歸作二浙湖山主。  
 高蹤已自雜漁釣、大隱何曾棄簪組。  
 去年相從殊未足、問道已許談其粗。  
 逝將棄官往卒業、俗緣未盡那得睹。  
 公家只在霅溪上、上有白雲如白羽。  
 應憐進退苦皇皇、更把安心教初祖。

■ 【05-1-045】 文与可字說

■ 【05-1-046】 与靈隱知和尚

■ 【05-1-047】 祭常山神祝文

■ 【05-1-048】 孔長源挽詞二首

其一

少年才氣冠當時、晚節孤風益自奇。  
君勝宜為夫子後、林宗不愧蔡邕碑。  
南荒尚記誅元惡、東越誰能事細兒。  
耆旧如今幾人在、為君無憾為時悲。

其二

小堰門頭柳繫船、吳山堂上月侵筵。  
潮声夜半千巖響、詩句明朝万口傳。  
豈意日斜庚子後、忽驚歲在巳辰年。  
佳城一閉無窮事、南望題詩淚灑箋。

■ 【05-1-049】 寄呂穆仲寺丞

孤山寺下水侵門、每到先看醉墨痕。  
楚相未亡談笑是、中郎不見典刑存。  
君先去踏塵埃陌、我亦來尋桑棗村。  
回首西湖真一夢、灰心霜鬢更休論。

■ 【05-1-050】 答陳述古二首

其一

漫說山東第二州、棗林桑泊負春游。  
城西亦有紅千葉、人老簪花却自羞。

其二

小桃破萼未勝春、羅綺叢中第一人。  
聞道使君歸去後、舞衫歌扇總生塵。

■ 【05-1-051】 懷西湖寄晁美叔同年

西湖天下景、游者無愚賢。  
深淺隨所得、誰能識其全。  
嗟我本狂直、早為世所捐。  
獨專山水樂、付与寧非天。  
三百六十寺、幽尋遂窮年。  
所至得其妙、心知口難傳。  
至今清夜夢、耳目余芳鮮。  
君持使者節、風采爍雲煙。  
清流与碧巘、安肯為君妍。  
胡不屏騎從、暫借僧榻眠。  
讀我壁間詩、清涼洗煩煎。  
策杖無道路、直造意所便。  
応逢古漁父、葦間自延縁。



問道若有得、買魚勿論錢。

■ 【05-1-052】張安道樂全堂

列子御風殊不惡、猶被莊生譏數數。  
步兵飲酒中散琴、於此得全非至樂。  
樂全居士全於天、維摩丈室空憐然。  
平生痛飲今不飲、無琴不獨琴無弦。  
我公天与英雄表、竜章鳳姿照魚鳥。  
但令端委坐廟堂、北狄西戎談笑了。  
如今老去苦思歸、小字親書寄我詩。  
試問樂全全底事、無全何處更相欠。

■ 【05-1-053】祭魏国韓令公文

■ 【05-1-054】余主簿母挽詞

閨庭蘭玉照鄉閭、自昔雖貧樂有余。  
豈独家人在中饋、却因麟趾識閨睢。  
雲駟忽已歸仙府、喬木依然擁旧廬。  
忍把還鄉千斛淚、一時灑向老萊裾。

■ 【05-1-055】張文裕挽詞

高才本出朝廷右、能事方推德業余。  
每見便聞曹植句、至今伝宝魏華書。

濟南名士新雕喪、劍外生祠已潔除。  
欲寄西風兩行淚、依然喬木鄭公廬。

■【05-1-056】次韻劉貢父李公抃見寄二首

其一

白髮相望兩故人、眼看時事幾番新。  
曲無和者忘思郢、論少卑之且借秦。  
歲惡詩人無好語、夜長蹀守向誰親。  
少思多睡無如我、鼻息雷鳴撼四隣。

其二

何人勸我此間來、弦管生衣甑有埃。  
綠蟻濡唇無百斛、蝗虫撲面已三回。  
磨刀入谷追窮寇、灑涕循城拾棄孩。  
為郡鮮歡君莫嘆、猶勝塵土走章台。

■【05-1-057】祭常山回小獵

青蓋前頭点皂旗、黃茅岡下出長圍。  
弄風驕馬跑空立、趁兔蒼鷹掠地飛。  
回望白雲生翠巘、歸來紅葉滿征衣。  
聖明若用西涼簿、白羽猶能效一揮。

■【05-1-058】江神子

老夫聊發少年狂。

左牽黃、

右擎蒼。

錦帽貂裘、

千騎卷平岡。

為報傾城隨太守、

親射虎、

看孫郎。

酒酣胸膽尚開張。

鬢微霜、

又何妨。

持節雲中、

何日遣馮唐。

會挽雕弓如滿月、

西北望、

射天狼。

■ 【05-1-059】 与鮮于子駿

■ 【05-1-060】 和梅戶曹會獵鉄溝

山西從古說三明、誰信儒冠也捍城。

竿上鯨鯢猶未掩、草中狐兔不須驚。

東州趙叟飲無敵、南国梅仙詩有聲。  
不向如臯閑射雉、歸來何以得卿卿。

■【05-1-061】雨中花慢

今歲花時深院、  
盡日東風、  
蕩漾茶煙。  
但有綠苔芳草、  
柳絮榆錢。  
聞道城西、長廊古寺、  
甲第名園。  
有國艷帶酒、  
天香染袂、  
為我留連。  
  
清明過了、  
殘紅無處、  
對此淚灑尊前。  
秋向晚、  
一枝何事、  
向我依然。  
高會聊追短景、  
清商不佞余妍。

不如留取、  
十分春態、  
付与明年。

■ 【05-1-062】 後杞菊賦并叙

叙

天隨生自言常食杞菊。及夏五月、枝葉老硬、氣味苦澁、猶食不已。因作賦以自広。始余嘗疑之、以爲士不遇、窮約可也、至於饑餓嚼嚙草木、則過矣。而余仕官十有九年、家日益貧、衣食之奉、殆不如昔者。及移守膠西、意且一飽、而齋廚索然、不堪其憂。日与通守劉君廷式、循古城廢圃、求杞菊食之、捫腹而笑。然後知天隨生之言、可信不繆。作後杞菊賦以自嘲、且解之云。

吁嗟先生、誰使汝坐堂上称太守。前賓客之造請、後掾屬之趨走。朝衙達午、夕坐過酉。曾杯酒之不設、攬草木以誑口。对案顰蹙、举箸噎嘔。昔陰將軍設麥飯与蔥葉、井丹推去而不嗅。怪先生之眷眷、豈故山之無有。

先生听然而笑曰、人生一世、如屈伸肘。何者爲貧。何者爲富。何者爲美。何者爲陋、或糠核而瓠肥、或梁肉而墨瘦。何侯方丈、庾郎三九。較豐約於夢寐、卒同歸於一朽。吾方以杞爲糧、以菊爲糗。春食苗、夏食葉、秋食花實而冬食根、庶幾乎西河、南陽之寿。

■ 【05-1-063】 与金山宝觉禅師

■ 【05-1-064】 劉貢父見余歌詞数首、以詩見戲、聊次其韻

十載漂然未可期、那堪重作看花詩。

門前惡語誰伝去、酔後狂歌自不知。  
刺舌君今猶未戒、灸眉我亦更何辞。  
相従痛飲無余事、正是春容最好時。

■ 【05-1-065】 和章七出守湖州二首

其一

方丈仙人出淼茫、高情猶愛水雲鄉。  
功名誰使連三捷、身世何緣得兩忘。  
早歲歸休心共在、他年相見話偏長。  
只因未報君恩重、清夢時時到玉堂。

其二

絳闕雲台總有名、應須極貴又長生。  
鼎中竜虎黄金賤、松下龜蛇緑骨輕。  
霽水未渾纓可濯、弁峰初見眼應明。  
兩卮春酒真堪羨、独占人間分外榮。

■ 【05-1-066】 上文侍中論權塩書

■ 【05-1-067】 醉白堂記

■ 【05-1-068】 和張子野見寄三絶句

其一 過旧遊

前生我已到杭州、到處長如到旧遊。  
更欲洞霄為隱吏、一庵閑地且相留。

其二 見題壁

狂吟跌宕無風雅、醉墨淋漓不整齊。  
忝為詩人一回顧、山僧未忍掃黃泥。

其三 竹閣見憶

柏堂南畔竹如雲、此閣何人是主人。  
但遣先生披鶴氅、不須更画染天真。

■ 【05-1-069】 送趙寺丞寄陳海州

景疏樓上喚蛾眉、君到忝先誦此詩。  
若見孟公投轄飲、莫忘衝雪送君時。

■ 【05-1-070】 減字木蘭歌

賢哉令尹、  
三仕之無喜愠。  
我独何人、  
猶把虛名玷縉紳。

不如歸去、  
二頃良田無覓處。

歸去來兮、  
待有良田是幾時。

■【05-1-071】和蔣夔寄茶

我生百事常隨緣、四方水陸無不便。  
扁舟渡江適吳越、三年飲食窮芳鮮。  
金齏玉膾飯炊雪、海螯江柱初脫泉。  
臨風飽食甘寢罷、一瓶花乳浮輕円。  
自從舍舟入東武、沃野便到桑麻川。  
剪毛胡羊大如馬、誰記鹿角腥盤筵。  
廚中蒸粟埋飯甕、大杓更取酸生涎。  
柘羅銅碾棄不用、脂麻白土須盆研。  
故人猶作旧眼看、謂我好尚如當年。  
沙溪北苑強分別、水脚一線爭誰先。  
清詩兩幅寄千里、紫金百餅費万錢。  
吟哦烹噉兩奇絕、只恐偷乞煩封纏。  
老妻稚子不知愛、一半已入姜塩煎。  
人生所遇無不可、南北嗜好知誰賢。  
死生禍福久不扞、更論甘苦爭蚩妍。  
知君窮旅不自積、因詩寄謝聊相鐫。

■【05-1-072】光祿庵二首

其一



文章恨不見文園、礼樂方將訪石泉。  
何事庵中著光祿、枉教閑處筆如椽。

其二

城中太守的何人、林下先生非我身。  
若向庵中覓光祿、雪中履跡鏡中真。

■ 【05-1-073】 答陳履常

■ 【05-1-074】 趙成伯家有麗人。僕忝鄉人、不肯開樽、徒吟春雪美句、次韻一笑  
繡簾朱戶未曾開、誰見梅花落鏡台。  
試問高吟三十韻、何如低唱兩三杯。  
莫嫌衰鬢聊相映、須得纖腰與共回。  
知道文君隔青瑣、梁園賦客敢言才。

■ 【05-1-075】 成伯席上贈所出妓川人楊姐

坐來真箇好相宜、深注唇兒淺畫眉。  
須信楊家佳麗種、洛川自有浴妃池。

■ 【05-1-076】 密州通判序題名記

■ 【05-1-077】 超然台記

■ 【05-1-078】 書子由超然台賦後

■ 【05-1-079】 晁君成詩集叙

■ 【05-1-080】 与王慶源

■ 【05-1-081】 塩官大悲閣記

■ 【05-1-082】 覺釋先生詩集叙

■ 【05-1-083】 書李憲臣藏墨

■ 【05-1-084】 立春日、病中邀安国、仍請率禹功同來。僕雖不能飲、當請成伯主會、某當杖策倚几於其間、觀諸公醉笑、以撥滯悶也。二首

其一

孤燈照影夜漫漫、拈得花枝不忍看。

白髮欹簪羞彩勝、黃耆煮粥薦春盤。

東方烹狗陽初動、南陌爭牛臥作團。

老子從來興不淺、向隅誰有滿堂歡。

其二

齋居臥病禁烟前、辜負名花已一年。

此日使君不強喜、早春風物為誰妍。

青衫公子家千里、白髮先生杖百錢。  
曷不相将来問病、已教呼取散花天。

■ 【05-2-001】 一叢花

今年春淺臘侵年。

冰雪破春妍。

東風有信無人見、

露微意、

柳際花邊。

寒夜縱長、

孤衾易暖、

鐘鼓漸清圓。

朝來初日半含山。

樓閣淡疏煙。

遊人便作尋芳計、

小桃杏、

忘已爭先。

衰病少情、

疏慵自放、

惟愛日高眠。

■ 【05-2-002】 刻秦篆記

■ 【05-2-003】 滿江紅

天豈無情、  
天也解、  
多情留客。  
春向暖、  
朝來底事、  
尚飄輕雪。  
君遇時來紆組綬、  
我忘老去尋泉石。  
恐異時杯酒忽相思、  
雲山隔。

浮世事、  
俱難必。  
人縱健、  
頭忘白。  
何辭更一醉、  
此歡難覓。  
不用向佳人訴離恨、  
淚珠先已凝雙睫。  
但莫遣、  
新燕卻來時、

音書絕。

■ 【05-2-004】 跋赤溪山主頌

■ 【05-2-005】 答李邦直

美人如春風、著物物未知。

羈愁似冰雪、見子先流澌。

子從徐方來、吏民拳熙熙。

扶病出見之、驚我一何衰。

知我久慵倦、起我以新詩。

詩詞如醇酒、盎然薰四支。

徑飲不覺醉、欲和先昏疲。

西齋有蠻帳、風雨夜紛披。

放懷語不扞、撫掌笑脫頤。

別來今幾何、春物已含姿。

柳色日夜暗、子來竟何時。

徐方雖雲樂、東山禁遊嬉。

又無狂太守、何以解憂思。

聞子有賢婦、華堂詠螽斯。

曷不倒囊橐、壳劍買蛾眉。

不用教系竹、唱我新歌詞。

■ 【05-2-006】 望江南

其一

春未老、  
風細柳斜斜。  
試上超然台上看、  
半壕春水一城花。  
煙雨暗千家。

寒食後、  
酒醒却咨嗟。  
休对故人思故園、  
且将新火試新茶。  
詩酒趁年華。

其二

春已老、  
春服幾時成。  
曲水浪低蕉葉穩、  
舞雩風軟紵羅輕。  
酣詠樂升平。

微雨過、  
何處不催耕。  
百舌無言桃李盡、

柘林深处鶉鴉鳴。

春色屬蕪菁。

■【05-2-007】滿江紅

東武城南、

新隄固、

蓮漪初溢。

隱隱遍、

長林高阜、

臥紅堆碧。

枝上殘花吹盡也、

與君更向江頭覓。

問向前、

猶有幾多春、

三之一。

官裏事、

何時畢。

風雨外、

無多日。

相將泛曲水、

滿城爭出。

君不見蘭亭修禊事、

当時座上皆豪逸。

到如今、

修竹滿山陰、

空陳跡。

■ 【05-2-008】 和文与可洋川園池三十首

其一 湖橋

朱欄画柱照湖明、白葛烏紗曳履行。

橋下龜魚晚無数、識君拄杖過橋声。

其二 横湖

貪看翠蓋擁紅粧、不覺湖邊一夜霜。

卷却天機雲錦段、從教匹練写秋光。

其三 書軒

雨昏石硯寒雲色、風動牙簽乱葉声。

庭下已生書帶草、使君疑是鄭康成。

其四 水池

不嫌冰雪繞池看、誰似詩人巧耐寒。

記取羲之洗硯处、碧琉璃下黑蛟蟠。

其五 竹塢



晚節先生道軫孤、歲寒惟有竹相娛。  
粗才杜牧真堪笑、喚作軍中十萬夫。

其六 荻浦

雨折霜乾不耐秋、白花黃葉使人愁。  
月明小艇湖邊宿、便是江南鸚鵡洲。

其七 蓼嶼

秋歸南浦螿蛄鳴、霜落橫湖沙水清。  
臥雨幽花無限思、抱叢寒蝶不勝情。

其八 望雲樓

陰晴朝暮幾回新、已向虛空付此身。  
出本無心歸亦好、白雲還似望雲人

其九 天漢台

漾水東流旧見經、銀潢左界上通靈、  
此台試向天文覓、閣道中間第幾星。

其十 待月台

月与高人本有期、挂簷低戶映蛾眉。  
只從昨夜十分滿、漸覺冰輪出海遲。

其十一 二樂榭

此間真趣豈容談、二樂并君已是三。  
仁智更煩訶妄見、坐令魯叟作瞿曇。

其十二 灑泉亭

聞道池亭勝兩川、忘須爛醉答雲烟。  
勸君多揀長腰米、消破亭中万斛泉。

其十三 吏隱亭

縱橫憂患滿人間、頗怪先生日日閑。  
昨夜清風眠北牖、朝來爽氣在西山。

其十四 霜筠亭

解籜新篁不自持、嬋娟已有歲寒姿。  
要看凜凜霜前意、須待秋風粉落時。

其十五 無言亭

慙慙稽首維摩詰、敢問如何是法門。  
彈指未終千偈了、向人還道本無言。

其十六 露香亭

亭下佳人錦繡衣、滿身瓔珞綴明璣。  
晚香消歇無尋處、花已飄零露已晞。

其十七 涵虛亭

水軒花榭兩爭妍、秋月春風各自偏。  
惟有此亭無一物、坐觀萬景得天全。

其十八 溪光亭

決去湖波尚有情、却隨初日動簷楹。  
溪光自古無人畫、憑仗新詩與寫成。

其十九 過溪亭

身輕步穩去忘歸、四柱亭前野竹微。  
忽悟過溪還一笑、水禽驚落翠毛衣。

其二十 披錦亭

烟紅露綠曉風香、燕舞鸞啼春日長。  
誰道使君貧且老、繡屏錦帳咽笙簧。

其二十一 禊亭

曲池流水細鱗鱗、高會佻觴似洛濱。  
紅粉翠蛾忒不要、畫船來往勝於人。

其二十二 菡萏亭

日日移牀趁下風、清香不斷思何窮。

若為化作龜千歲、巢向田田乱葉中。

其二十三 茶蘼洞

長憶故山寒食夜、野茶蘼發暗香來。

分無素手簪羅髻、且折霜蕤浸玉醅。

其二十四 篔簹谷

漢川修竹賤如蓬、斤斧何曾赦籜童。

料得清貧饑太守、渭濱千畝在胸中。

其二十五 寒蘆港

溶溶晴港漾春暉、蘆筍生時柳絮飛。

還有江南風物否、桃花流水鱖魚肥

其二十六 野人廬

少年辛苦事犁鋤、剛厭青山遠故居。

老覺華堂無意味、却須時到野人廬。

其二十七 此君庵

寄語菴前抱節君、與君到處合相親。

写真雖是文夫子、我亦真堂作記人。

其二十八 金橙徑

金橙縱復里人知、不見鱸魚餽自低。  
須是松江烟雨裏、小船燒薤擣香齏。

其二十九 南園

不種夭桃与綠楊、使君宥欲候農桑。  
春畦雨過羅紈膩、夏壟風來餅餌香。

其三十 北園

漢水巴山樂有余、一麾從此首歸途。  
北園草木憑君問、許我他年作主無。

■ 【05-2-009】 与文与可

■ 【05-2-010】 与程彝仲

■ 【05-2-011】 寄題刁景純藏春塢

白首歸來種万松、待看千尺舞霜風。  
年拋造物陶甄外、春在先生杖履中。  
楊柳長齊低戶暗、桜桃爛熟滴階紅。  
何時却与徐元直、共訪襄陽龐德公。

■ 【05-2-012】 書文与可超然台賦後

■ 【05-2-013】 書李邦直超然台賦後

■ 【05-2-014】 零泉記

■ 【05-2-015】 河滿子

見說岷峨凄愴、  
旋聞江漢澄清。  
但覺秋來歸夢好、  
西南自有長城。  
東府三人最少、  
西山八國初平。

莫負花溪縱賞、  
何妨藥市微行。  
試問当壚人在否、  
空教是處聞名。  
唱著子淵新曲、  
忘須分外含情。

■ 【05-2-016】 玉盤盃、并引

引

東武旧俗、每歲四月、大会於南禪、資福兩寺。以芍藥供仏、而今歲最盛、凡七千余餘朵、皆重跗累萼、繁麗豐碩。中有白花、正円如覆盃、其下十余葉、稍大、承之如盤、姿格絶異、独

出於七千朵之上、云、得之於城北蘇氏園中、周宰相莒公之別業也。而其名俚甚、乃為易之。

其一

雜花狼藉占春余、芍藥開時掃地無。  
兩寺粧成寶瓔珞、一枝爭看玉盤盂。  
佳名會作新翻曲、絕品難逢舊畫圖。  
從此定知年穀熟、姑山親見雪肌膚。

其二

花不能言意可知、令君痛飲更無疑。  
但持白酒勸嘉客、直待瓊舟覆玉彝。  
負郭相君初挾地、看羊屬國首吟詩。  
吾家豈與花相厚、更問殘芳有幾枝。

■ 【05-2-017】和路公超然台次韻

我公厭富貴、常苦勲業尋。  
相期赤松子、永望白雲岑。  
清風出談笑、万竅為号吟。  
吟成超然詩、洗我蓬之心。  
嗟我本何人、麋鹿強冠襟。  
身微空志大、交淺屢言深。  
囑公如得謝、呼我幸寄音。

但恐酒錢盡、煩公揮囊金。

■ 【05-2-018】 聞喬太博換左藏知欽州、以詩招飲

今年果起故將軍、幽夢清詩信有神。  
馬革裹屍真細事、虎頭食肉更何人。  
陣雲冷壓黃茅瘴、羽扇斜揮白葛巾。  
痛飲從今有幾日、西軒月色夜來新。

■ 【05-2-019】 寄黎眉州

膠西高處望西川、忘在孤雲落照邊。  
瓦屋寒堆春後雪、峨眉翠掃雨余天。  
治經方笑春秋學、好士今無六一賢。  
且待淵明賦歸去、共將詩酒趁流年。

■ 【05-2-020】 山堂銘、并敘

■ 【05-2-021】 和趙郎中捕蝗見寄次韻

麥穗人許長、穀苗牛可沒。  
天公獨何意、忍使蝗虫發。  
驅攘著令典、農事安可忽。  
我僕既胼胝、我馬亦款斫。  
飛騰漸云少、筋力亦已竭。  
苟無百篇詩、何以醒睡兀。



初如疏畎澮、漸若決澗渤。  
往來供十吏、腕脫不容歇。  
平生輕妄庸、熟視笑魏勃。  
愛君有逸氣、詩壇專斬伐。  
民病何時休、吏職不可越。  
慎毋及世事、向空書咄咄。

■ 【05-2-022】登常山絕頂廣麗亭

西望穆陵關、東望瑯邪台。  
南望九仙山、北望空飛埃。  
相將叫虞舜、遂欲歸蓬萊。  
嗟我二三子、狂飲亦荒哉。  
紅裙欲仙去、長笛有余哀。  
清歌入雲霄、妙舞纖腰回。  
自從有此山、白石對蒼苔。  
何嘗有此樂、將去復徘徊。  
人生如朝露、白髮日夜催。  
棄置當何言、萬劫終飛灰。

■ 【05-2-023】薄薄酒二首、并引

引

膠西先生趙明叔、家貧、好飲、不挾酒而醉。常云、薄薄酒、勝茶湯、醜醜婦、勝空房。其言雖俚、而近乎達、故推而廣之以補東州之樂府。既又以為未也、復自和一篇、聊以發覽者之

一噓云耳。

其一

薄薄酒、勝茶湯、麤麤布、勝無裳。

醜妻惡妾勝空房。

五更待漏靴滿霜、不如三伏日高睡足北窗涼。

珠襦玉柙萬人相送歸北邙、不如懸鶉百結獨坐負朝陽。

生前富貴、死後文章、百年瞬息萬世忙。

夷齊盜跖俱亡羊、不如眼前一醉是非憂樂都兩忘。

其二

薄薄酒、飲兩鐘、麤麤布、著兩重。

美惡雖異醉暖同、醜妻惡妾壽乃公。

隱居求志義之從、本不計較東華塵土北窗風。

百年雖長要有終、富死未必輸生窮。

但恐珠玉留君容、千載不朽遭樊崇。

文章自足欺盲聾、誰使一朝富貴面發紅。

達人自達酒何功、世間是非憂樂本來空。

■ 【05-2-024】 同年王中甫挽詞

先帝親收十五人、四方爭看擊鵬鷗。

如君才業真堪用、顧我衰遲不足論。

出處升沈十年後、死生契闊幾人存。

他時京口尋遺跡、宿草猶應有淚痕。

■ 【05-2-025】 七月五日二首

其一

避謗詩尋醫、畏病酒入務。

蕭條北窗下、長日誰與度。

今年苦炎熱、草木困薰煮。

況我早衰人、幽居氣如縷。

秋來有佳興、秫稻已含露。

還復此微吟、往和糟床注。

其二

何處覓新秋、蕭然北台上。

秋來未云幾、風月已清亮。

雲間聳孤翠、林表浮遠漲。

新棗漸堪剥、晚瓜猶可餉。

西風送落日、万竅含淒悵。

念當急行樂、白髮不汝放。

■ 【05-2-026】 趙郎中見和、戲復答之

趙子吟詩如澆水、一揮三百八十字。

奈何效我欲尋醫、恰似西施藏白地。

趙子飲酒如淋灰、一年十万八千杯。

若不令君早入務、飲竭東海生黃埃。  
我衰臨政多繆錯、羨君精采如秋鶻。  
頗哀老子今日飲、為君坐嘯主画諾。

■【05-2-027】和魯人孔周翰題詩二首、并引

引  
孔周翰嘗為仙源令、中秋以事留東武官舍中。時陳君宗古、任君建中皆在郡。後十七年中  
秋、周翰持節過郡、二君已亡、感時懷旧、留詩於壁。又其後五年中秋、軾与客飲超然台上、  
聞周翰乞此郡。客有誦其詩者、乃次其韻二篇、以為他日一笑。

其一

壞壁題詩已五年、故人風物兩依然。  
定知來歲中秋月、又照先生枕麴眠。

其二

更邀明月說明年、記取孤吟孟浩然。  
此去宦遊如伝舍、揀枝驚鷓幾時眠。

■【05-2-028】水調歌頭

明月幾時有、  
把酒問青天。  
不知天上宮闕、  
今夕是何年。

我欲乘風歸去、  
又恐瓊樓玉宇、  
高處不勝寒。  
起舞弄清影、  
何似在人間。

轉朱閣、  
低綺戶、  
照無眠、  
不覺有恨、  
何事長向別時圓。  
人有悲歡離合、  
月有陰晴圓缺、  
此事古難全。  
但願人長久、  
千里共嬋娟。

■ 【05-2-029】 送碧香酒与趙明叔教授

聞君有婦賢且廉、勸君慎勿為楚相。  
不羨紫駝分御食、自遣赤脚沽村釀。  
嗟君老狂不知愧、更吟醜婦惡嘲謗。  
諸生聞語定失笑、冬暖号寒臥無悵。  
碧香近出帝子家、鵝兒破殼酥流盎。

不学劉伶独自飲、一壺往助齊眉餉。

■ 【05-2-030】 趙既見和復次韻答之

長安小吏天所放、日夜歌呼和丞相。  
 豈知後世有阿瞞、北海樽前捉私釀。  
 先生未出禁酒国、詩語孤高常近謗。  
 幾回無酒欲沽君、却畏有司書簿帳。  
 酸寒可笑分一斗、日飲無何足袁盎。  
 更將險語压衰翁、只恐自是台無餉。

■ 【05-2-031】 蘇潛聖挽詞

妙齡馳譽百夫雄、晚節忘懷大隱中。  
 悃悞無華真漢吏、文章爾雅称吾宗。  
 趨時肯負平生志、有子還忘不死同。  
 惟我閑思十年事、數行老淚寄西風。

■ 【05-2-032】 和晁同年九日見寄

仰看鸞鵠刺天飛、富貴功名老不思。  
 病馬已無千里志、騷人長負一秋悲。  
 古來重九皆如此、別後西湖付与誰。  
 遣子窮愁天有意、吳中山水要清詩。

■ 【05-2-033】 祭常山祝文

■ 【05-2-034】 送喬施州

恨無負郭田二頃、空有載行書五車。  
江上青山橫絕壁、雲間細路躡飛蛇。  
雞号黑暗通蛮貨、蜂鬧黃連采蜜花。  
共怪河南門下客、不応万里向長沙。

■ 【05-2-035】 蓋公堂記

■ 【05-2-036】 李氏山房藏書記

■ 【05-2-037】 与周開祖

■ 【05-2-038】 次韻周邠寄雁蕩山囿二首

其一

指点先憑采藥翁、丹青化出大槐宮。  
眼明小閣浮煙翠、齒冷新詩嚼雪風。  
二華行看雄陝右、九仙今已压京東。  
此生的有尋山分、已覺温台落手中。

其二

西湖三載与君同、馬入塵埃鶴入籠。  
東海独来看出日、石橋先去踏長虹。

遙知別後添華髮、時向樽前說病翁。  
所恨蜀山君未見、他年攜手醉郵筒。

■ 【05-2-039】 題鮮于子駿八詠後

■ 【05-2-040】 雪夜獨宿柏仙庵  
晚雨纖纖變玉霰、小庵高臥有余清。  
夢驚忽有穿窗片、夜靜惟聞瀉竹聲。  
稍壓冬溫聊得健、未濡秋旱若為耕。  
天公用意真難會、又作春風爛漫晴。

■ 【05-2-041】 和孔郎中荊林馬上見寄

秋禾不滿眼、宿麥種亦稀。  
永愧此邦人、芒刺在膚肌。  
平生五千卷、一字不救飢。  
方將怨無襦、忽復歌緇衣。  
堂堂孔北海、直氣凜群兒。  
朱輪未及郊、清風已先馳。  
何以累君子、十萬貧與羸。  
滔滔滿四方、我行竟安之。  
何時劍關路、春山聞子規。

■ 【05-2-042】 江神子



前瞻馬耳九仙山。

碧連天、

晚雲間。

城上高台、

真箇是超然。

莫使匆匆雲雨散、

今夜裏、

月嬋娟。

小溪鷗鷺靜聯拳、

去翩翩。

點輕烟。

人事淒涼、

回首便他年。

莫忘使君歌笑處、

垂柳下、

矮槐前。

■ 【05-2-043】 別東武流杯

莫笑官居如傳舍、故忘人世等浮雲。

百年父老知誰在、惟有雙松識使君。

■ 【05-2-044】 留別零泉

挙酒属霄泉、白髮日夜新。  
 何時泉中天、復照泉上人。  
 二年飲泉水、魚鳥亦相親。  
 還將弄泉手、遮日向西秦。

■ 【05-2-045】 留別釈迦院牡丹呈趙倅

春風小院初却時、壁間惟見使君詩。  
 忘問使君何處去、憑花説与春風知。  
 年年歲歲何窮已、花似今年人老矣。  
 去年崔護若重来、前度劉郎在千里。

■ 【05-2-046】 董儲郎中嘗知眉州、与先人遊、過安丘、訪其故居、見其子希甫、留詩屋壁

白髮郎潜旧使君、至今人道最能文。  
 隻雞敢忘橋公語、下馬來尋董相墳。  
 冬月負薪雖得免、隣人吹笛不堪聞。  
 死生契闊君休問、灑淚西南向白雲。

■ 【05-2-047】 跋董儲書

■ 【05-3-001】 除夜大雪、留濰州、元日早晴、遂行中途雪復作

除夜雪相留、元日晴相送。  
 東風吹宿酒、瘦馬兀殘夢。  
 葱曠曉光開、旋轉余花弄。

下馬成野酌、佳哉誰与共。  
須臾晚雲合、乱灑無欠空。  
鵝毛垂馬駿、自怪騎白鳳。  
三年東方旱、逃戶連欹棟。  
老農积耒歎、淚入饑腸痛。  
春雪雖云晚、春麥猶可種。  
敢怨行役勞、助爾歌飯甕。

■ 【05-3-002】 大雪、青州道上、有懷東武園亭、寄交孔周翰

超然台上雪、城郭山川兩奇絕。  
海風吹碎碧琉璃、時見三山白銀闕。  
蓋公堂前雪、綠窗朱戶相明滅。  
堂中美人雪争妍、粲然一笑玉齒頰。  
就中山堂雪更奇、青松怪石乱瓊糸。  
惟有使君游不歸、五更上馬愁斂眉。  
君不見淮西李侍中、夜入蔡州縛取吳元濟。  
又不見襄陽孟浩然、長安道上騎驢吟雪詩。  
何当閉門飲美酒、無人毀譽河東守。

■ 【05-3-003】 至濟南、李公扈以詩相迎、次其韻二首

其一

敝裘羸馬古河浜、野闊天低糝玉塵。  
自笑餐氈典屬国、来看換酒謫仙人。

宦遊到处身如寄、農事何時手自親。  
剩作新詩与君和、莫因風雨廢鳴晨。

其二

夜擁笙歌霽水濱、回頭樂事總成塵。  
今年送汝作太守、到处逢君是主人。  
聚散細思都是夢、身名漸覺兩非親。  
相從繼燭何須問、蝙蝠飛時日正晨。

■ 【05-3-004】 陽關曲

濟南春好雪初晴、  
纔到鼇山馬足輕。  
使君莫忘霽溪女、  
還作陽關腸斷聲。

■ 【05-3-005】 問養生

■ 【05-3-006】 祭柳子玉文

■ 【05-3-007】 僕曩於長安陳漢卿家、見吳道子画仏、碎爛可惜。其後十余年、復見之於鮮于子駿家、則已裝背完好。子駿以見遺、作詩謝之  
貴人金多身復閑、爭買書画不計錢。  
已將鉄石充逸少、更補朱繇為道玄。

煙薰屋漏裝玉軸、鹿皮蒼壁知誰賢。  
吳生畫仏本神授、夢中化作飛空仙。  
覺來落筆不經意、神妙獨到秋毫顛。  
昔我長安見此畫、嘆惜至寶空漣然。  
素糸斷續不忍看、已作蝴蝶飛聯翩。  
君能收拾為補綴、體質散落嗟神全。  
誌公彷彿見刀尺、修羅天女猶雄妍。  
如觀老杜飛鳥句、脫字欲補知無緣。  
問君乞得良有意、欲將俗眼為洗湔。  
貴人一見定羞作、錦囊千紙何足捐。  
不須更用博麻縷、付與一炬隨飛烟。

■ 【05-3-008】 滿江紅

清潁東流、  
愁目斷、  
孤帆明滅。  
宦遊處、  
青山白浪、  
萬重千疊。  
辜負當年林下意、  
對牀夜雨聽蕭瑟。  
恨此生、  
長向別離中、

添華髮。

一樽酒、

黃河側。

無限事、

從頭說。

相看恍如昨、

許多年月。

衣上旧痕余苦淚、

眉間喜氣添黃。

便當君、

池上覓殘春、

花如雪。

■ 【05-3-009】 与眉守黎希声

■ 【05-3-010】 和孔君亮郎中見贈

偶对先生尽一樽、醉看万物洶崩奔。

優游共我聊卒歲、骯髒如君合倚門。

只恐掉頭難久住、應須傾蓋便深論。

固知巖勝風流在、又見長身十世孫。

■ 【05-3-011】 殢人嬌

滿院桃花、  
盡是劉郎未見。  
於中更、  
一枝纖軟。  
仙家日月、  
笑人間春晚。  
濃睡起、  
驚飛亂紅千片。

密意難窺、  
羞容易見。  
平白地、  
為伊腸斷。  
問君終日、  
怎安排心眼。  
須信道、  
司空自來見慣。

■ 【05-3-012】 洞仙歌

江南臘盡、  
早梅花開後。  
分付新春與垂柳。  
細腰肢、

自有入格風流。  
仍更是、  
骨体清英雅秀。

永豊坊那畔、  
尽日無人、  
惟見金糸弄晴画。  
断腸是、  
飛絮時、  
綠葉成陰、  
無個事、  
一成消瘦。  
又莫是、  
東風逐君來、  
便吹散眉間、  
一点春皺。

■ 【05-3-013】 送范景仁游洛中

小人真闇事、閑退豈公難。  
道大吾何病、言深聽者寒。  
憂時雖早白、駐世有還丹。  
得酒相逢樂、無心所遇安。  
去年行万里、蜀路走千盤。



投老身弥健、登山意未闌。  
西游為桜筍、東道尽鸕鷀。  
杖履携兒去、園亭借客看。  
折花斑竹寺、弄水石樓灘。  
鬻馬衰憐白、驚雷怯笑韓。  
蘇書標洞府、松蓋偃天壇。  
試与劉夫子、重尋靖長官。

■ 【05-3-014】次韻景仁留別

公老我亦衰、相見恨不數。  
臨行一杯酒、此意重山岳。  
歌詞白苧清、琴弄黃鐘濁。  
詩新眇難和、飲少僅可學。  
欲參兵部選、有力誰如犖。  
且作東諸侯、山城雄鼓角。  
南游許過我、不憚千里邈。  
会当聞公來、倒屣髮一握。

■ 【05-3-015】書韓幹牧馬圖

南山之下、汧渭之間。  
想見開元天寶年、八坊分屯隘秦川。  
四十万匹如雲烟、騏驎駉駉駉駉駉駉。  
白魚赤兔駢皇輶、竜顛鳳頸瓘且妍。

奇姿逸德隱驚頑、碧眼胡兒手足鮮。  
 歲時剪刷供帝閑、柘袍臨池侍三千。  
 紅粧照日光流淵、樓下玉螭吐清寒。  
 往來蹙踏生飛湍、衆工舐筆和朱鉛。  
 先生曹霸弟子韓、厖馬多肉尻脰圓。  
 肉中畫骨誇尤難、金羈玉勒繡羅鞍。  
 鞭箠刻烙傷天全、不如此囙近自然。  
 平沙細草芒芊綿、驚鴻脫兔爭後先。  
 王良挾策飛上天、何必俯首服短轅。

#### ■ 【05-3-016】 韓幹馬十四匹

二馬並驅攢八蹄、二馬宛頸駿尾齊。  
 一馬任前双拳後。一馬却避長鳴嘶。  
 老髯奚官騎且顧、前身作馬通馬語。  
 後有八匹飲且行、微流赴吻若有聲。  
 前者既濟出林鶴、後者欲涉鶴俯啄。  
 最後一匹馬中竜、不嘶不動尾搖風。  
 韓生畫馬真是馬、蘇子作詩如見畫。  
 世無伯樂亦無韓、此詩此畫誰當看。

#### ■ 【05-3-017】 韓幹畫馬贊

#### ■ 【05-3-018】 与司馬温公

■ 【05-3-019】送魯元翰少卿知衛州

冗士無處著、寄身范公園。  
桃李忽成陰、薺麥秀已繁。  
閉門春春永、惟有黃蜂喧。  
誰人肯携酒、共醉榆柳村。  
髯卿獨何者、一月三到門。  
我不往拜之、髯來意彌敦。  
堂堂元老後、亶亶仁人言。  
憶在錢塘歲、情好均弟昆。  
時於冰雪中、笑語作春溫。  
欲飲徑相覓、夜開叢竹軒。  
搜尋到篋笥、鮓醢無復存。  
每愧煙火中、玉腕親炮燔。  
別來今幾何、相對如夢魂。  
告我當北渡、新詩侑清罇。  
坡陀太行麓、洶湧黃河翻。  
仕宦非不遇、王畿西北垣。  
斯民如魚耳、見網則驚奔。  
皎皎千丈清、不如尺水渾。  
刑政雖首務、念當養其源。  
一聞襦袴音、盜賊安足論。

## ■ 【05-3-020】 次韻子由送蔣夔赴代州学官

功利爭先變法初、典型獨守老成余。  
窮人未信詩能爾、倚市懸知繡不如。  
代北諸生漸狂簡、牀頭雜說為爬梳。  
歸來問雁吾何敢、疾世王符解著書。

## ■ 【05-3-021】 李若之布氣

## ■ 【05-3-022】 京師哭任遵聖

十年不還鄉、兒女日夜長。  
豈惟催老大、漸復成彫喪。  
每聞耆舊亡、涕泣聲輒放。  
老任況奇逸、先子推輩行。  
文章小得譽、詩語尤清壯。  
吏能復所長、談笑萬夫上。  
自喜作劇鼎、偏工破豪党。  
奮髯走猾吏、嚼齒對奸將。  
哀哉命不偶、每以才得謗。  
竟使落窮山、青衫就黃壤。  
宦遊久不樂、江海永相望。  
退耕本就君、時節相勞餉。  
此懷今不遂、歸見累累葬。  
望哭國西門、落日銜千嶂。

平生惟一子、抱負珠在掌。

見之齟齬中、已有食牛量。

他年如入洛、生死一相訪。

惟有王濬沖、心知中散狀。

■ 【05-3-023】 与文与可

■ 【05-3-024】 代張方平諫用兵書

■ 【05-3-025】 宿州次韻劉涇

我欲歸休愁漸希、舞雩何日著春衣。

多情白髮三千丈、無用蒼皮四十圍。

晚覺文章真小技、早知富貴有危機。

為君垂涕君知否、千古華亭鶴自飛。

■ 【05-3-026】 徐州謝兩府啓

■ 【05-3-027】 徐州送交代仲達少卿

此身無用且東來、賴有江山慰不才。

旧尹未嫌衰廢久、清樽猶許再三開。

滿城遺愛知誰繼、極目扁舟挽不回。

歸去青雲還記否、交遊勝絕古城隈。

■ 【05-3-028】 和孔密州五絶

其一 見邸家園留題

大旆伝聞載酒過、小詩未忍著磚磨。  
陽関三疊君須秘、除却膠西不解歌。

其二 春歩西園見寄

歳歳開園成故事、年年行楽不辜春。  
今年太守尤難繼、慈愛聡明恵利人。

其三 東欄梨花

梨花淡白柳深青、柳絮飛時花滿城。  
惆悵東欄二株雪、人生看得幾清明。

其四 和流杯石上草書小詩

蜂腰鶴膝嘲希逸、春蚓秋蛇病子雲。  
醉裏自書醒自笑、如今二絶更逢君。

其五 堂後白牡丹

城西千葉豈不好、笑舞春風醉臉丹。  
何似後堂氷玉潔、遊蜂非意不相干。

■ 【05-3-029】 和趙郎中見戲二首

其一

燕子人亡三百秋、卷簾那復似揚州。  
西行未必能勝此、空唱崔徽上白樓。

其二

我擊藤牀君唱歌、明年六十奈君何。  
醉顛只要裝風景、莫向人前自洗磨。

■ 【05-3-030】 与司馬温公

■ 【05-3-031】 司馬君實独樂園

青山在屋上、流水在屋下。  
中有五畝園、花竹秀而野。  
花香襲杖履、竹色侵盞罍。  
樽酒樂余春、棋局消長夏。  
洛陽古多士、風俗猶爾雅。  
先生臥不出、冠蓋傾洛社。  
雖云与衆樂、中有独樂者。  
才全德不形、所貴知我寡。  
先生独何事、四海望陶冶。  
兒童誦君實、走卒知司馬。  
持此欲安歸、造物不我捨。  
名声逐吾輩、此病天所積。  
撫掌笑先生、年來效瘖啞。

## ■ 【05-3-032】 保母楊氏墓誌銘

## ■ 【05-3-033】 次韻子由与顔長道同遊百步洪、相地築亭種柳

平明坐衙不暖席、歸來閉閣閑終日。

臥聞客至倒屣迎、兩眼蒙籠余睡色。

城東泗水步可到、路轉河洪翻雪白。

安得青糸絡駿馬、蹙踏飛波柳陰下。

奮身三丈兩蹄間、振鬣長鳴声自乾。

少年狂興久已謝、但憶嘉陵繞劍關。

劍關大道車方軌、君自不去歸何難。

山中故人應大笑、築室種柳何時還。

## ■ 【05-3-034】 和李邦直沂山祈雨有応

高田生黄埃、下田生蒼耳。

蒼耳亦已無、更問麦有幾。

蛟竜睡足亦解慚、二麦枯時雨如洗。

不知雨從何処來、但聞呂梁百步声如雷。

試上城南望城北、際天菽粟青成堆。

饑火烧腸作牛吼、不知待得秋成否。

半年不雨坐竜慵、共怨天公不怨竜。

今朝一雨聊自贖、竜神社鬼各言功。

無功日盜太倉穀、嗟我与竜同此貴。



勸農使者不汝容、因君作詩先自劾。

■ 【05-3-035】 与梁先、舒焕泛舟、得臨釀字、二首

其一

彭城古戰國、孤客倦登臨。

汴泗交流處、清潭百丈深。

故人輕千里、繭足來相尋。

何以娛嘉客、潭水洗君心。

其二

老守厭簿書、先生罷函丈。

風流魏晉間、談笑羲皇上。

河洪忽已過、水色綠可釀。

君毋輕此樂、此樂清且放。

■ 【05-3-036】 次韻答邦直、子由五首

其一

簿書顛倒夢魂間、知我疏慵肯見原。

閑作閉門僧舍冷、臥聞吹枕海濤喧。

忘懷杯酒逢人共、引睡文書信手翻。

欲吐狂言喙三尺、怕君瞋我却須吞。

其二

城南短李好交遊、箕踞狂歌不自由。  
 尊主庇民君有道、樂天知命我無憂。  
 醉呼妙舞留連夜、閑作清詩斷送秋。  
 瀟灑使君殊不俗、樽前容我攬須不。

## 其三

老弟東來殊寂寞、故人留飲慰酸寒。  
 草荒城角開新經、雨入河洪失旧灘。  
 車馬追陪迹未掃、唱酬往復字忘漫。  
 此詩更欲憑君改、待与江南子布看。

## 其四

君雖為我此遲留、別後淒涼我已憂。  
 不見便同千里遠、退歸終作十年游。  
 恨無揚子一区宅、懶臥元龜百尺樓。  
 聞道鵝鴻滿台閣、網羅忘不到沙鷗。

## 其五

五斗塵勞尚足留、閉閤却欲治幽憂。  
 羞為毛遂囊中穎、未許朱雲地下遊。  
 無事會須成好飲、思歸時欲賦登樓。  
 羨君幕府如僧舍、日向城南看浴鷗。

■ 【05-3-037】 宝繪堂記

■ 【05-3-038】 与杭守

■ 【05-3-039】 送顏復兼寄王鞏

彭城官居冷如水、誰從我遊顏氏子。  
我衰且病君亦窮、衰窮相守正其理。  
胡為一朝捨我去、輕衫觸熱行千里。  
問君無乃求之与、答我不然聊爾耳。  
京師万事日日新、故人如故今有幾。  
君知牛行相君宅、扣門但覓王居士。  
清詩草聖俱入妙、別後寄我書連紙。  
苦恨相思不相見、約我重陽嗅霜蕊。  
君歸可喚与俱來、未忘指目妨進擬。  
太一老仙閑不出、踵門問道今時矣。  
因行過我路幾何、願君推挽加鞭箠。  
吾儕一醉豈易得、買羊釀酒從今始。

■ 【05-3-040】 書諸公送覺繹先生詩後

■ 【05-3-041】 顏樂亭詩並叙

叙

顏子之故居所謂陋巷者、有井存焉、而不在顏氏久矣。膠西太守孔君宗翰、始得其地、浚治

其井、作亭於其上、命之曰顏樂。夫子以簞食瓢飲賢顏子、而韓子乃以為哲人之細事、何哉。蘇子曰、古之觀人也、必於其小者觀之、其大者容有偽焉。人能碎千金之璧、不能無失聲於破釜、能搏猛虎、不能無變色於蜂蠆。孰知簞食瓢飲之為哲人之大事乎。乃作顏樂亭詩以遺孔君、正韓子之說、且以自警云。

天生烝民、為之鼻口。

美者可嚼、芬者可嗅。

美必有惡、芬必有臭。

我無天遊、六鑿交鬪。

驚而不返、跬步商受。

偉哉先師、安此微陋。

孟賁股票、虎豹却走。

眇然其身、中亦何有。

我求至樂、千載無偶。

執瓢從之、忽焉在後。

### ■ 【05-3-042】 快哉此風賦、并引

引

時与吳彦律、舒堯文、鄭彥能各賦兩韻、子瞻作第一、第五韻、占風字為韻。余皆不錄。

賢者之樂、快哉此風。

雖庶民之不共、眷佳客以攸同。

穆如其來、既偃小人之德。

颯然而至、豈独大王之雄。  
若夫鷁退宋都之上、雲飛泗水之湄。  
寥寥南郭、怒号於万竅。  
颯颯東海、鼓舞于四維。  
固以陋晉人一呷之小、笑玉川兩腋之卑。  
野馬相吹、搏羽毛于汗漫。  
忘竜作処、作鱗甲以參差。

■ 【05-3-043】 蠍虎

黄雞啄蠍如啄麦、窗間守宮称蠍虎。  
暗中繖尾伺飛虫、巧捷功夫在腰膂。  
跂跂脉脉善綠壁、陋質從來誰比数。  
今年歲旱号蜥蜴、狂走兒童鬧歌舞。  
能銜渠水作冰雹、便向蛟竜覓雲雨。  
守宮努力搏蒼蠅、明年歲旱当求汝。

■ 【05-3-044】 子由將赴南都、与余会宿於逍遙堂、作兩絕句、讀之殆不可為懷、因和其詩以自解。余觀子由、自少曠達、天資近道、又得至人養生長年之訣、而余亦竊聞其一二。以為今者宦游相別之日淺、而異時退休相從之日長、既以自解、且以慰子由云  
其一

別期漸近不堪聞、風雨蕭蕭已斷魂。  
猶勝相逢不相識、形容變尽語音存。

其二

但令朱雀長金花、此別還同一轆車。  
五百年間誰復在、会看銅狄兩咨嗟。

■ 【05-3-045】 記子由詩

■ 【05-3-046】 留題石經院三首

其一

蔥蒨門前路、行穿翠密中。  
却來堂上看、巖谷意無窮。

其二

夭矯庭中檜、枯枝鷓踏消。  
瘦皮纏鶴骨、高頂轉龍腰。

其三

窈窕山頭井、潛通伏澗清。  
欲知深幾許、聽放輓轡聲。

■ 【05-3-047】 過雲竜山人張天驥

郊原雨初足、風日清且好。  
病守亦欣然、肩輿白門道。  
荒田咽蛩蚓、村巷懸梨棗。

下有幽人居、閉門空雀噪。  
西風高正厲、落葉紛可掃。  
孤僮臥斜日、病馬放秋草。  
墟里通有無、垣墻任摧倒。  
君家本冠蓋、糸竹闌隣保。  
脫身声利中、道德自濯澡。  
躬耕抱羸疾、奉養百歲老。  
詩書膏吻頰、菽水媚翁媪。  
饑寒天隨子、杞菊自擷萐。  
慈孝董邵南、雞狗相乳抱。  
吾生如寄耳、歸計失不早。  
故山豈敢忘、但恐迫華皓。  
從君好種秫、斗酒時相勞。

■ 【05-3-048】 徐州与人

■ 【05-3-049】 贈王仲素寺丞

養氣如養兒、棄官如棄泥。  
人皆笑子拙、事定竟誰迷。  
歸耕獨患貧、問子何所賫。  
尺宅足自庇、寸田有余畦。  
明珠照短褐、陋室生虹霓。  
雖無孔方兄、顧有法喜妻。

彈琴一長嘯、不答阮与与嵇。  
曹南劉夫子、名与子政齊。  
家有鴻宝書、不鑄金裹蹄。  
促膝問道要、遂蒙分刀圭。  
不忍独不死、尺書肯見梯。  
我生本強鄙、少以氣自擠。  
孤舟倒江河、赤手攬象犀。  
年来稍自笑、留氣下暖臍。  
苦恨聞道晚、意象颯已淒。  
空見孫思邈、区区賦病梨。

■ 【05-3-050】 陽関詞三首

其一 贈張繼愿

受降城下紫髯郎、戲馬台前古戰場。  
恨君不取契丹首、金甲牙旗歸故鄉。

其二 答李公択

濟南春好雪初晴、行到竜山馬足輕。  
使君莫忘霽溪女、時作陽関腸断声。

其三 中秋月

暮雲收尽溢清寒、銀漢無声轉玉盤。  
此生此夜不長好、明月明年何処看。



■ 【05-3-051】 水調歌頭

安石在東海、  
從事鬢驚秋。  
中年親友難別、  
系竹緩離愁。  
一旦功名遂、  
準擬東還海道、  
扶病入西。  
雅志困軒冕、  
遺恨寄滄州。

歲雲暮、  
須早計、  
要褐裘。  
故鄉歸去千里、  
佳處輒遲留。  
我醉歌時君和、  
醉倒須君扶我、  
惟酒可忘憂。  
一任劉玄德、  
相對臥高樓。

■ 【05-3-052】 和孔周翰二絶

其一 再觀邸園留題

小園香霧曉蒙籠、醉守狂詞未必工。  
魯叟録詩应有取、曲収彤管邶鄘風。

其二 觀静觀堂效韋蘇州詩

弱羽巢林在一枝、幽人蝸舍兩相宜。  
樂天長短三千首、却愛韋郎五字詩。

■ 【05-3-053】 答任師中、家漢公

先君昔未仕、杜門皇祐初。  
道德無貧賤、風采照鄉閭。  
何嘗疎小人、小人自闊疏。  
出門無所詣、老史在郊墟。  
門前万竿竹、堂上四庫書。  
高樹紅消梨、小池白芙蕖。  
常呼赤脚婢、雨中攬園蔬。  
矯矯任夫子、罷官還旧廬。  
是時里中兒、始識長者車。  
烹雞酌白酒、相對飲有余。  
有如龐德公、往還葛与徐。  
妻子走堂下、主人竟誰歟。  
我時年尚幼、作賦慕相如。

侍立看君談、精悍實起予。  
歲月曾幾何、耆老逝不居。  
史侯最先沒、孤墳拱桑樗。  
我亦涉万里、清血滿襟祛。  
漂流二十年、始悟万緣虛。  
独喜任夫子、老佩刺史魚。  
威行烏白蛮、解辮請冠裾。  
方当入奏事、清廟陳璠璠。  
胡為厭軒冕、歸意不少紓。  
上蔡有良田、黄沙走清渠。  
罷亞百頃稻、雍容十年儲。  
閑隨李丞相、搏射鹿与豬。  
蒼鷹十斤重、猛犬如黃驢。  
豈比陶淵明、窮苦自把耒。  
我今四十二、衰髮不滿梳。  
彭城古名郡、乏人偶見除。  
頭顱已可知、幾何不樵漁。  
会当相從去、芒鞋老菑畬。  
念子瘴江邊、懷抱向誰攄。  
賴我同年友、相歎出同輿。  
氷盤薦文鮓、玉罍傾浮蛆。  
醉中忽思我、清詩綴瓊瑀。  
知我少所諧、教我時卷舒。

世事日反覆、翩如風中旗。  
 雀羅弔廷尉、秋扇悲婕妤。  
 升沈一何速、喜怒紛衆狙。  
 作詩謝二子、我師寧与遽。

■ 【05-3-054】 初別子由

我少知子由、天資和而清。  
 好學老益堅、表裏漸融明。  
 豈獨為吾弟、要是賢友生。  
 不見六七年、微言誰与賡。  
 常恐坦率性、放縱不自程。  
 會合亦何事、無言對空杯。  
 使人之意消、不善無由萌。  
 森然有六女、包裹布与荆。  
 無憂賴賢婦、藜藿等大烹。  
 使子得行意、青衫陋公卿。  
 明日無晨炊、倒牀作雷鳴。  
 秋眠我東閣、夜聽風雨聲。  
 懸知不久別、妙理重細評。  
 昨日忽出門、孤舟轉西城。  
 歸來北堂上、古屋空崢嶸。  
 退食悞相從、入門中自驚。  
 南都信繁會、人事水火爭。

念当閉閣坐、頽然寄聾盲。

妻子亦細事、文章固虛名。

会須掃白髮、不復用黃精。

■ 【05-3-055】 与劉貢父

■ 【05-3-056】 次韻呂梁仲屯田

雨葉風花日夜稀、一杯相属竟何時。

空虛豈敢酬瓊玉、枯朽猶能出菌芝。

門外呂梁從迅急、胸中雲夢自逶遲。

待君筆力追靈運、莫負南台九日期。

■ 【05-3-057】 王鞏屢約重九見訪、既而不至、以詩送將官梁交且見寄、次韻答之。交頗文

雅、不類武人、家有侍者、甚惠麗

知君月下見傾城、破恨懸知酒有兵。

老守無何惟日飲、將軍競病自詩鳴。

花枝不共秋欹帽、筆陣空來夜斫營。

愛惜微官將底用、他年只好写銘旌。

■ 【05-3-058】 台頭寺雨中送李邦直赴史館、分韻得憶字人字、兼寄孫巨源二首

其一

霜林日夜西風急、老送君歸百憂集。

清歌窈眇入行雲、雲為不行天為泣。

紅葉黄花秋正乱、白魚紫蟹君須憶。  
憑君說向髯將軍、衰病相逢忘不識。

## 其二

珥筆西歸近紫宸、太平典冊不緣麟。  
付君此事寧論晉、載我當時旧過秦。  
門外想無千斛米、墓中知有百年人。  
看君兩眼明如鏡、休把春秋坐素臣。

## ■ 【05-3-059】代書答梁先

此身与世真悠悠、蒼顏華髮誰汝留。  
強名太守古徐州、忘歸不如楚沐猴。  
魯人豈独不知丘、隣藉夫子無罪尤。  
異哉梁子清而修、不遠千里從我遊。  
瞭然正色懸双眸、世之所馳子独不。  
一經通明伝節侯、小楷精絕規摹歐。  
我衰廢学懶且媮、畏見問事賈長頭。  
別来紅葉黄花秋、夜夢見之起坐愁。  
遺我駁石盆与甌、黑質白章声琳球。  
謂言山石生澗溝、追琢尚可王公羞。  
感子佳意能無酬、反将木瓜報珍投。  
学如富賈在博収、仰取俯拾無遺籌。  
道大如天不可求、修其可見致其幽。

願子篤實慎勿浮、發憤忘食樂忘憂。

■ 【05-3-060】 送楊奉禮

譜牒推闕右、風流出靖恭。  
時情任險陂、家法故雍容。  
南去河千頃、余惟酒一鐘。  
更誰哀老子、令得放疏慵。

■ 【05-3-061】 九日邀仲屯田、為大水所隔以詩見寄、次其韻

無復崑山對孟嘉、西來河伯意雄誇。  
霜風可使吹黃帽、樽酒那能泛浪花。  
漫遣鯉魚伝尺素、却將燕石報瓊華。  
何時得見悲秋老、醉裏題詩字半斜。

■ 【05-3-062】 獎諭勅記

■ 【05-3-063】 河復、并叙

叙

熙寧十年秋、河決澶淵。註鉅野、入淮泗。自澶魏以北、皆絕流而濟。楚大被其害、彭門城下水二丈八尺、七十餘日不退。吏民疲於守禦。十月十三日、澶州大風終日。既止、而河流一枝、已復故道、聞之喜甚、庶幾可塞乎。乃作河復詩、歌之道路、以致民願而迎神休、蓋守土者之誌也。

君不見西漢元光元封間、河決瓠子二十年。

鉅野東傾淮泗滿、楚人恣食黃河鱸。

万里沙回封禪罷、初遣越巫沈白馬。

河公未許人力窮、薪芻万計隨流下。

吾君盛德如唐堯、百神受職河神驕。

帝遣風師下約束、北流夜起澶州橋。

東風吹凍収微淥、神功不用淇園竹。

楚人種麥滿河淤、仰看浮槎棲古木。

■ 【05-3-064】 登望◆亭 [◆は谷+共という字]

河漲西來失旧◆、孤城渾在水光中。

忽然歸壑無尋處、千里禾麻一半空。

■ 【05-3-065】 有言郡東北荆山下、可以溝畎積水、因与吳正字、王戸曹同往相視、以地多乱石、不果。還、遊聖女山、山有石室、如墓而無棺槨、或云宋司馬桓魋墓。二子有詩、次其韻二首

其一

側手区区豈易遮、奔流一瞬卷千家。

共疑智伯初困趙、猶有張湯欲漕斜。

已坐迂踈來此地、分將勞苦送生涯。

使君下策真堪笑、隱隱驚雷響踏車。

其二



茫茫清泗遶孤岑、歸路相將得暫臨。  
試著芒鞋穿拳確、更然松炬照幽深。  
縱令司馬能鑿石、奈有中郎解摸金。  
強寫蒼崖留歲月、他年誰識此時心。

■ 【05-3-066】 表忠觀碑

■ 【05-3-067】 與劉貢父

■ 【05-3-068】 贈寫御容妙善師

憶昔射策干先皇、珠簾翠幄分兩廂。  
紫衣中使下傳詔、跪捧冉冉聞天香。  
仰觀眩晃目生暈、但見曉色開扶桑。  
迎陽晚出步就坐、絳紗玉斧光照廊。  
野人不識日月角、彷彿尚記重瞳光。  
三年歸來真一夢、橋山松檜淒風霜。  
天容玉色誰敢畫、老師古寺昼閉房。  
夢中神授心有得、覺來信手筆已忘。  
幅巾常服儼不動、孤臣入門涕自滂。  
元老侑坐鬚眉古、虎臣立侍冠劍長。  
平生慣寫龍鳳質、肯顧草間猿與麀。  
都人踏破鉄門限、黃金白壁空堆牀。  
爾來摹寫亦到我、謂是先帝白髮郎。

不須覽鏡坐自了、明年乞身歸故鄉。

■ 【05-3-069】 哭刁景純

讀書想前輩、每恨生不早。  
紛紛少年場、猶得見此老。  
此老如松柏、不受霜雪槁。  
直從毫末中、自養到合抱。  
宏材乏近用、千歲自枯倒。  
文章余正始、風節貫華皓。  
平生為人爾、自為薄如縞。  
是非雖難齊、反覆看愈好。  
前年旅吳越、把酒慶壽考。  
扣門無晨夜、百過跡未掃。  
但知從德公、未省厭丘嫂。  
別時公八十、後會知難保。  
昨日故人書、連年喪翁媪。  
傷心范橋水、漾漾舞寒藻。  
華堂不見人、瘦馬空恋阜。  
我欲江東去、匏樽酌行潦。  
鏡湖無賀監、慟哭稽山道。  
忍見万松岡、荒池沒秋草。

■ 【05-3-070】 答呂梁仲屯田

乱山合沓困彭門、官居独在懸水村。  
居民蕭條雜麋鹿、小市冷落無雞豚。  
黃河西來初不覺、但訝清泗流奔渾。  
夜聞沙岸鳴甕盎、曉看雪浪浮鵬鯤。  
呂梁自古喉嚨地、万頃一抹何由吞。  
坐觀入市卷閭井、吏民走尽余王尊。  
計窮路断欲安適、吟詩破屋愁鳶蹲。  
歲寒霜重水歸壑、但見屋瓦留沙痕。  
入城相对如夢寐、我亦僅免為魚鼈。  
旋呼歌舞雜詼笑、不惜飲釀空餅盆。  
念君官舍冰雪冷、新詩美酒聊相温。  
人生如寄何不樂、任使絳蠟燒黃昏。  
宣房未築淮泗滿、故道堙滅瘡痍存。  
明年勞苦忘更甚。我当畚鍤先鯨髡。  
付君万指伐頑石、千鍾雷動蒼山根。  
高城如鉄洪口決、談笑却掃看崩奔。  
農夫掉臂免狼顧、秋穀布野如雲屯。  
還須更置軟脚酒、為君擊鼓行金樽。

■ 【05-3-071】 答宋寺丞

■ 【05-3-072】 祭任鈐轄文

■ 【05-3-073】 臨江仙

忘却成都來十載、  
因君未免思量。  
憑將清淚灑江陽。  
故山知好在、  
孤客自悲涼。

坐上別愁君未見、  
歸來欲斷無腸。  
慙慙且更盡離觴。  
此身如伝舎、  
何處是吾鄉。

■ 【05-3-074】 答孔周翰求書与詩

身閑曷不長閉口、天寒正好深藏手。  
吟詩写字有底忙、未脫多生宿塵垢。  
不蒙譏訶子厚疾、反更刻画無塩醜。  
征西自有家雞肥、太白忝驚飯山瘦。  
与君相從知幾日、東風待得花開否。  
撥棄万事勿復談、百觚之後那辞酒。

■ 【05-4-001】 思堂記

■ 【05-4-002】 与文与可

■ 【05-4-003】 与劉貢父

■ 【05-4-004】 送李公恕赴關

君才有如切玉刀、見之凜凜寒生毛。  
願隨壯士斬蛟蜃、不願腰間纏錦綵。  
用違其才志不展、坐与胥吏同疲勞。  
忽然眉上有黃氣、吾君漸欲收英髦。  
立談左右皆動色、一語徑破千言牢。  
我頃分符在東武、脫略万事惟嬉遨。  
尽壞屏障通內外、仍呼騎曹為馬曹。  
君為使者見不問、反更对飲持双螯。  
酒酣箕坐語驚衆、雜以嘲諷窮詩騷。  
世上小兒多忌諱、独能容我真賢豪。  
為我買田臨汝水、逆將歸去誅蓬蒿。  
安能終老塵土下、俯仰隨人如桔槔。

■ 【05-4-005】 張寺丞益齋

張子作齋舍、而以益為名。  
吾聞之夫子、求益非速成。  
譬如遠遊客、日夜事征行。  
今年適燕薊、明年走蠻荆。

東觀尽滄海、西涉渭与涇。  
 歸來閉戶坐、八方在軒庭。  
 又如學醫人、識病由飽更。  
 風雨晦明淫、跛躄瘖聾盲。  
 虛實在其脈、靜躁在其情。  
 榮枯在其色、壽夭在其形。  
 苟能閱千人、望見知死生。  
 為學務日益、此言當自程。  
 為道貴日損、此理在既盈。  
 願君書此詩、以為益齋銘。

#### ■ 【05-4-006】 春菜

蔓菁宿根已生葉、韭芽戴土拳如蕨。  
 爛烝香薺白魚肥、碎点青蒿涼餅滑。  
 宿酒初消春睡起、細履幽畦掇芳辣。  
 茵陳甘菊不負渠、鱠縷堆盤織手抹。  
 北方苦寒今未已、雪底波棱如鉄甲。  
 豈如吾蜀富冬蔬、霜葉露牙寒更茁。  
 久拋菘葛猶細事、苦筍江豚那忍說。  
 明年投効徑須歸、莫待齒搖并髮脫。

#### ■ 【05-4-007】 祭老泉焚黃文

■ 【05-4-008】 送鄭戶曹

遊遍錢塘湖上山、歸來文字帶芳鮮。  
羸僮瘦馬從吾飲、陋巷何人似子賢。  
公業有田常乏食、広文好客竟無氈。  
東歸不趁花時節、開盡春風誰与妍。

■ 【05-4-009】 讀孟郊詩二首

其一

夜讀孟郊詩、細字如牛毛。  
寒燈照昏花、佳處時一遭。  
孤芳擢荒穢、苦語余詩騷。  
水清石鑿鑿、湍激不受篙。  
初如食小魚、所得不償勞。  
又似煮彭●越、竟日嚼空螯。 [●は虫+越]  
要当鬪僧清、未足当韓豪。  
人生如朝露、日夜火消膏。  
何苦將兩耳、聽此寒虫号。  
不如且置之、飲我玉色醪。

其二

我憎孟郊詩、復作孟郊語。  
饑腸自鳴喚、空壁轉饑鼠。  
詩從肺腑出、出輒愁肺腑。

有如黄河魚、出膏以自煮。  
尚愛銅斗歌、鄙俚頗近古。  
桃弓射鴨罷、独速短蓑舞。  
不憂踏船翻、踏浪不踏土。  
吳姬霜雪白、赤脚浣白紵。  
嫁与踏浪兒、不識離別苦。  
歌君江湖曲、感我長羈旅。

■ 【05-4-010】 訪張山人得山中字二首

其一

魚鼈隨水落、猿鶴喜君還。  
旧隱丘墟外、新堂紫翠間。  
野麋馴杖履、幽桂出榛菅。  
灑掃門前路、山公亦愛山。

其二

万木鎖雲霓、天留与戴公。  
路迷山向背、人在灑西東。  
薺麥余春雪、桜桃落晚風。  
入城都不記、歸路醉眠中。

■ 【05-4-011】 送孔郎中赴陝郊

驚風擊面黄沙走、西出嶠函脱塵垢。



使君来自古徐州、声振河潼殷閔右。  
十里長亭聞鼓角、一川秀色明花柳。  
北臨飛檻卷黃流、南望青山如峴首。  
東風吹開錦繡谷、淥水翻動蒲萄酒。  
訟庭生草數開樽、過客如雲牢閉口。

■ 【05-4-012】 虔州八境圖八首、并引

引

南康八境圖者、太守孔君之所作也。君既作石城、即其城上樓觀台榭之所見而作是圖也。東望七閩、南望五嶺、覽群山之參差、俯章貢之奔流、雲煙出沒、草木蕃麗、邑屋相望、雞犬之聲相聞。觀此圖也、可以茫然而思、粲然而笑、慨然而嘆矣。蘇子曰、此南康之一境也、何從而八乎。所自觀之者異也。且子不見夫日乎、其旦如盤、其中如珠、其夕如破壁、此豈三日也哉。苟知夫境之為八也、則凡寒暑、朝夕、雨暘、晦冥之異、坐作、行立、哀樂、喜怒之變、接於吾目而感於吾心者、有不可勝數者矣、豈特八乎。如知夫八之出乎一也、則夫四海之外、詭譎譎怪、禹貢之所書、鄒衍之所談、相如之所賦、雖至千萬未有不一者也。後之君子、必將有感於斯焉。乃作詩八章、題之圖上。

其一

坐看奔湍繞石樓、使君高會百無憂。  
三犀竊鄙秦太守、八詠聊同沈隱侯。

其二

濤頭寂寞打城還、章貢台前暮靄寒。

倦客登臨無限思、孤雲落日是長安。

其三

白鵲樓前翠作堆、縈雲嶺路若為開。

故人忘在千山外、不寄梅花遠信來。

其四

朱樓深處日微明、皂蓋歸時酒半醒。

薄暮漁樵人去盡、碧溪青嶂繞螺亭。

其五

使君那暇日參禪、一望叢林一悵然。

成仏莫教靈運後、著鞭從使祖生先。

其六

却從塵外望塵中、無限樓台煙雨濛。

山水照人迷向背、只尋孤塔認西東。

其七

雲煙縹緲鬱孤台、積翠浮空兩半開。

想見之罘觀海市、絳宮明滅是蓬萊。

其八

回峰乱嶂鬱參差、雲外高人世得知。

誰向空山弄明月、山中木客解吟詩。

■ 【05-4-013】 禱靈慧塔文、告賜靈慧謚号塔文

■ 【05-4-014】 与梁左藏会飲傅国博家

將軍破賦自草檄、論詩說劍俱第一。

彭城老守本虛名、識字劣能欺項籍。

風流別駕貴公子、欲把笙歌暖鋒鏑。

紅旆朝開猛士噪、翠帷暮捲佳人出。

東堂醉臥呼不起、啼鳥落花春寂寂。

試教長笛傍耳根、一声吹裂階前石。

■ 【05-4-015】 徐州蓮華漏銘、并叙

■ 【05-4-016】 寒食日答李公抃三絕次韻

其一

從來蘇李得名双、只恐全齊笑陋邦。

詩似懸河供不弁、故欺張籍隴頭澆。

其二

簿書鞞鼓不知春、佳句相呼賴故人。

寒食德公方上冢、歸來誰主復誰賓。

## 其三

巡城已困塵埃眯、執扑仍遭蟻虱緣。  
欲脫布衫携素手、試開病眼轉黃連。

■【05-4-017】約公挾飲是日大風  
先生生長匡廬山、山中誦書三十年。  
旧聞飲水師顏淵、不知治劇乃所便。  
偷兒夜探黑白丸、奮髯忽逢朱子元。  
半年群盜誅七百、誰信家書藏九千。  
春風無事秋月閑、紅妝執樂豪且妍。  
紫衫玉帶兩部全、琵琶一抹四十弦。  
客來留飲不計錢、齊人愛公如子產。  
兒啼臥路呼不還、我慚山郡空留連。  
牙兵部吏笑我寒、邀公飲酒公無難。  
約束官奴買花鈿、薰衣理鬢夜不眠。  
曉來顛風塵暗天、我思其由豈坐慳。  
作詩愧謝公笑謹、歸來瑟縮愈不安。  
要当啖公八百里、豪氣一洗儒生酸。

■【05-4-018】夜飲次韻畢推官  
簿書叢裏過春風、酒聖時時且復中。  
紅燭照庭嘶騾裏、黃雞催曉唱玲瓏。

老來漸減金釵興、醉後空驚玉筋工。  
月未上時應早散、免教壑谷問吾公。

■ 【05-4-019】 与文与可

■ 【05-4-020】 芙蓉城、并叙

叙

世佖王迥子高与仙人周瑤英遊芙蓉城。元豐元年三月、余始識子高、問之、信然。乃作此詩。極其情而歸之正、亦變風止乎礼義之意也。

芙蓉城中花冥冥、誰其主者石与丁。  
珠簾玉案翡翠屏、雲舒霞卷千娉婷。  
中有一人長眉青、炯如微雲淡疏星。  
往來三世空鍊形、竟坐誤誦黃庭經。  
天門夜開飛爽靈、無復白日乘雲駟。  
俗緣千劫磨不盡、翠被冷落淒余馨。  
因過緱山朝帝廷、夜聞笙簫弭節聽。  
飄然而來誰使令、皎如明月入窗櫺。  
忽然而去不可執、寒衾虛幌風冷冷。  
仙宮洞房本不扃、夢中同躡鳳凰翎。  
徑渡万里如奔霆、玉樓浮空聳亭亭。  
天書雲篆誰所銘、繞樓飛步高踰屏。  
仙風鏘然韻流鈴、蓬蓬形開如酒醒。

芳卿寄謝空丁寧、一朝覆水不返瓶、羅巾別淚空熒熒。  
春風花開秋葉零、世間羅綺紛臃腫。  
此身流浪隨滄溟、偶然相值兩浮萍。  
願君收視觀三庭、勿与嘉穀生蝗螟。  
從渠一念三千齡、下作人間尹与邢。

■ 【05-4-021】 続麗人行、并引

引

李仲謀家有周昉画背面欠伸内人、極精、戲作此詩。

深宮無人春日長、沈香亭北百花香。  
美人睡起薄梳洗、燕舞鶯啼空斷腸。  
画工欲画無窮意、背立東風初破睡。  
若教回首却嫣然、陽城下蔡俱風靡。  
杜陵飢客眼長寒、蹇驢破帽隨金鞍。  
隔花臨水時一見、只許腰肢背後看。  
心醉歸來茅屋底、方信人間有西子。  
君不見孟光举案与眉齐、何曾背面傷春啼。

■ 【05-4-022】 章質夫寄惠崔徽真

玉釵半脫雲垂耳、亭亭芙蓉在秋水。  
當時薄命一酸辛、千古華堂奉君子。  
水邊何處無麗人、近前試看丞相嗔。

不如丹青不解語、世間言語原非真。  
知君被惱更愁絕、卷贈老夫驚老拙。  
為君援筆賦梅花、未害広平心似鉄。

■ 【05-4-023】 聞李公枳飲傅国博家大二首

其一

兒童拍手鬧黄昏、応笑山公醉習園。  
縱使先生能一石、主人未肯独留髡。

其二

不肯惺惺騎馬回、玉山知為玉人頽。  
紫雲有語君知否、莫喚分司御史來。

■ 【05-4-024】 傅子美召公枳飲、偶以病不及往、公枳有詩、次韻

樊素阿蛮皆已出、使君応作玉箏歌。  
可憐病士西窗下、一夜丹田手自摩。

■ 【05-4-025】 觀子美病中作、嗟嘆不足、次韻

百尺長松澗下摧、知君此意為誰來。  
霜枝半折孤根出、尚有狂風急雨催。

■ 【05-4-026】 起伏竜行、并叙

叙

徐州城東二十里、有石潭。父老雲与泗水通、増損清濁、相応不差、時有河魚出焉。元豊元年春旱、或云置虎頭潭中、可以致雷雨。用其説、作起伏竜行

何年白竹千鈞弩、射殺南山雪毛虎。  
 至今顛骨帶霜牙、尚作四海毛虫祖。  
 東方久旱千里赤、三月行人口生土。  
 碧潭近在古城東、神物所蟠誰敢侮。  
 上敬蒼石擁巖竇、下応清河通水府。  
 眼光作電走金蛇、鼻息為雲擢煙縷。  
 当年負凶伝帝命、左右羲軒詔神禹。  
 爾来懷宝但貪眠、滿腹雷霆暗不吐。  
 赤竜白虎戰明日、((是月丙辰、明日庚寅。))倒卷黄河作飛雨。  
 嗟吾豈樂鬪兩雄、有事徑須煩一怒。

■ 【05-4-027】 徐州祈雨青詞

■ 【05-4-028】 浣溪沙

其一

照日深紅暖見魚。  
 連溪緑暗晚藏烏。  
 黄童白叟聚睢盱。

麋鹿逢人雖未慣、



猿猱聞鼓不須呼。  
歸家說与采桑姑。

其二

施抹紅妝看使君。  
三三五五棘籬門。  
相挨踏破舊羅裙。

老幼扶携収麥社、  
烏鳶翔舞賽神村。  
道逢醉叟臥黃昏。

其三

麻葉層層翬葉光。  
誰家煮繭一村香。  
隔籬嬌語絡糸娘。

垂白杖藜擡醉眼、  
捋青擣麩饑腸。  
問言豆葉幾時黃。

其四

簌簌衣布落棗花。

村南村北響繰車。  
牛衣古柳壳黃瓜。

酒困路長惟欲睡、  
日高人渴漫思茶。  
敲門試問野人家。

其五

軟草平莎過雨新。  
輕沙走馬路無塵。  
何時收拾耦耕身。

日暖桑麻光似澆、  
風來蒿艾氣如薰。  
使君元是此中人。

■【05-4-029】聞公扨過雲竜張山人、輒往從之、公扨有詩、戲用其韻

我生固多憂、肉食常苦墨。  
軒然就一笑、猶得好飲力。  
聞君過雲竜、對酒兩靜默。  
急携清歌女、山郭及未昃。  
一飲難力致、邂逅有勝特。  
喧蜂集晚花、乱雀啼叢棘。

山人樂此耳、寂寞誰侍側。  
何当求好人、聊使治要襍。  
使君自孤憤、此理誰相值。  
不如學養生、一氣服千息。

■ 【05-4-030】送李公叔  
嗟予寡兄弟、四海一子由。  
故人雖云多、出處不我謀。  
弓車無停招、逝去勢莫留。  
僅存今幾人、各在天一陬。  
有如長庚月、到曉爛不收。  
宜我與夫子、相好手足侔。  
比年兩見之、賓主更獻酬。  
樂哉十日飲、衍衍和不流。  
論事到深夜、僵仆鈴與騶。  
頗嘗見使君、有客如此不。  
欲別不忍言、慘慘集百憂。  
念我野夫兄、知名三十秋。  
已得其為人、不待風馬牛。  
他年林下見、傾蓋如白頭。

■ 【05-4-031】蝶戀花

簌簌無風花自墮。

寂寞園林、  
柳老桜花過。  
落日有情還照坐。  
山青一点横雲破。

路尽河回人轉舵。  
繫纜漁村、  
月暗孤燈火。  
憑仗飛魂招楚些。  
我思君处君思我。

■ 【05-4-032】 送荀芍藥与公扨二首

其一

久客厭鹵饌、((蜀人謂東北人虜子。))枵然思南烹。  
故人知我意、千里寄竹萌。  
駢頭玉嬰兒、一一脱錦縵。  
庖人忘未識、旅人眼先明。  
我家拙廚膳、彘肉芼燕菁。  
送与江南客、燒煮配香粳。

其二

今日忽不樂、折尽園中花。  
園中亦何有、芍藥裊殘葩。

久旱復遭雨、紛披乱泥沙。  
不折亦安用、折去還可嗟。  
棄擲亮未能、送与謫仙家。  
還將一枝春、插向兩髻丫。

■ 【05-4-033】和孫莘老次韻

去国光陰春雪消、還家蹤跡野雲飄。  
功名正自妨行樂、迎送纔堪博早朝。  
雖去友朋親吏卒、却辭讒謗得風謠。  
明年我亦江南去、不問繁華与寂寥。

■ 【05-4-034】遊張山人園

壁間一軸煙蘿子、盆裏千枝錦被堆。  
慣与先生為酒伴、不嫌刺史亦顏開。  
纖纖入麦黃花乱、颯颯催詩白雨來。  
聞道君家好井水、歸軒乞得滿瓶回。

■ 【05-4-035】杜介熙熙堂

崎嶇世路最先回、窈窕華堂手自開。  
咄咄何曾書怪事、熙熙長覺似春台。  
白砂碧玉味方永、黃紙紅旗心已灰。  
遙想閉門投轄飲、鷓鴣弦鉄撥響如雷。

## ■ 【05-4-036】 次韻答劉涇

吟詩莫作秋虫声、天公怪汝鉤物情、使汝未老華髮生。  
 芝蘭得雨蔚青青、何用自燔以出馨。  
 細書千紙雜真行、新音百變口如鶯。  
 異議蜂起弟子争、舌翻濤瀾卷齊城。  
 万卷堆胸兀相撐、以病為樂子未驚。  
 我有至味非煎烹、是中之樂籲難名。  
 綠槐如山暗広庭、飛蟲繞耳細而清。  
 敗席展軫臥看經、亦自不嫌翠織成。  
 意行信足無溝坑、不識五郎呼作卿。  
 吏民哀我老不明、相戒無復煩鞭刑。  
 時臨泗水照星星、微風不起鏡面平。  
 安得一舟如葉輕、臥聞郵簽報水程。  
 葍羹羊酪不須評、一飽且救饑腸鳴。

## ■ 【05-4-037】 携妓樂遊張山人園

大杏金黃小麦熟、墮巢乳鷓拳新竹。  
 故將俗物惱幽人、細馬紅粧滿山谷。  
 提壺勸酒意雖重、杜鵑催歸声更速。  
 酒闌人散却闌門、寂歷斜陽掛疏木。

## ■ 【05-4-038】 種徳亭、并叙

叙

廸士王復、家於錢塘。為人多技能、而医尤精、期於活人而已、不志於利。築室候潮門外、治園圃、作亭榭、以与賢士大夫游、惟恐不及、然終無所求。人徒知其接花芸果之勤、而不知其所種者德也、乃以名其亭、而作詩以遺之。

小圃傍城郭、閉門芝朮香。

名隨市人隱、德与佳木長。

元化善養性、倉公多禁方。

所活不可数、相逢旋相忘。

但喜賓客來、置酒花滿堂。

我欲東南去、再觀双檜蒼。

山茶想出屋、湖橘応過牆。

木老德亦熟、吾言豈荒唐。

■ 【05-4-039】 書鮮于子駿楚詞後

■ 【05-4-040】 和鮮于子駿鄆州新堂月夜二首

其一

去歲遊新堂、春風雪消後。

池中半篙水、池上千尺柳。

佳人如桃李、胡蝶入衫袖。

山川今何許、疆野已分宿。

歲月不可思、駛若船放溜。

繁華真一夢、寂寞兩柴朽。

惟有當時月、依然照杯酒。  
忘憐船上人、坐穩不知漏。

其二

明月入華池、反照池上堂。  
堂中隱几人、心与水月涼。  
風螢已無跡、露草時有光。  
起觀河漢流、步履響長廊。  
名都信繁會、千指調絲簧。  
先生病不飲、童子為燒香。  
獨作五字詩、清絕如韋郎。  
詩成月漸側、皎皎兩相望。

■ 【05-4-041】 跋楊文公書後

■ 【05-4-042】 徐州賀河平表

■ 【05-4-043】 浣溪沙

慚愧今年二麥豐、  
千畦細浪舞晴空。  
化工余力染天紅。

歸去山公応倒載、



闌街拍手笑兒童。

甚時名作錦薰籠。

■【05-4-044】文与可有詩見寄云、待將一段鵝溪絹、掃取寒梢萬尺長。次韻答之  
為愛鵝溪白繭光、掃殘雞距紫毫芒。  
世間那有千尋竹、月落庭空影許長。

■【05-4-00-45】徐州上執政謝獎諭啓

■【05-4-046】聞弁才法師復歸上天竺、以詩戲問

道人出山去、山色如死灰。

白雲不解笑、青松有余哀。

忽聞道人歸、鳥語山容開。

神光出寶髻、法雨洗浮埃。

想見南北山、花發前後台。

寄聲問道人、借禪以為誼。

何所聞而去、何所見而回。

道人笑不答、此意安在哉。

昔年本不住、今者亦無來。

此語竟非是、且食白楊梅。

■【05-4-047】和子由送將官梁左藏仲通

雨足誰言春麥短、城堅不怕秋濤卷。

日長惟有睡相宜、半脫紗巾落紈扇。  
 芳草不鋤當戶長、珍禽獨下無人見。  
 覺來身世都是夢、坐久枕痕猶著面。  
 城西忽報故人來、急掃風軒炊麥飯。  
 伏波論兵初矍鑠、中散談仙更清遠。  
 南都從事亦學道、不惜腸空誇腦滿。  
 問羊他日到金華、忘許相將遊閨苑。

■ 【05-4-048】 次韻秦觀秀才見贈、秦與孫莘老、李公軾甚熟、將入京應舉

夜光明月非所投、逢年遇合百無憂。  
 將軍百戰竟不侯、伯郎一斗得涼州。  
 翹關負重君無力、十年不入紛華域。  
 故人坐上見君文、謂是古人籟莫測。  
 新詩說盡萬物情、硬黃小字臨黃庭。  
 故人已去君未到、空吟河畔草青青。  
 誰謂他鄉各異處、天遣君來破吾願。  
 一聞君語識君心、短李髯孫眼中見。  
 江湖放浪久全真、忽然一鳴驚倒人。  
 縱橫所值無不可、知君不怕新書新。  
 千金敝帚那堪換、我亦淹留豈長算。  
 山中既未決同歸、我聊爾耳君其漫。

■ 【05-4-049】 王元之画像贊

■ 【05-4-050】 滕縣公堂記

■ 【05-4-051】 雨中過舒教授

疏疏簾外竹、瀏瀏竹間雨。

窗扉靜無塵、几硯寒生霧。

美人樂幽獨、有得緣無慕。

坐依蒲褐禪、起聽風甌語。

客來淡無有、灑掃涼冠履。

濃茗洗積昏、妙香淨浮慮。

歸來北堂暗、一一微螢度。

此生憂患中、一飽安閑處。

飛鷺悔前笑、黃犬悲晚悟。

自非陶靖節、誰識此閑趣。

■ 【05-4-052】 次韻舒教授寄李公叔

草書妙絕吾所兄、真書小低猶抗行。

論文作詩俱不敵、看君談笑收降旌。

去年逾月方出昼、為君劇飲幾濡首。

今年過我雖少留、寂寞陶潛方止酒。

別時流涕攬君鬚、懸知此飲墜空虛。

松下縱橫余屐齒、門前輾轉想君車。

怪君一身都是德、近之清潤淪肌骨。

細思還有可恨時、不許藍橋見傾国。

■ 【05-4-053】 送鄭戸曹

水繞彭城樓、山圍戲馬台。  
 古來豪傑地、千載有余哀。  
 隆準飛上天、重瞳亦成灰。  
 白門下呂布、大星隕臨淮。  
 尚想劉德輿、置酒此徘徊。  
 爾來苦寂寞、廢圃多蒼苔。  
 河從百步響、山到九里回。  
 山水自相激、夜聲轉風雷。  
 蕩蕩清河堰、黃樓我所開。  
 秋月墮城角、春風搖酒杯。  
 遲君為坐客、新詩出瓊瑰。  
 樓成君已去、人事固多乖。  
 他年君倦游、白首賦歸來。  
 登樓一長嘯、使君安在哉。

■ 【05-4-054】 次韻答舒教授觀余所藏墨

異時長笑王會稽、野鷺臙腥汚刀几。  
 暮年却得庾安西、自厭家雞題六紙。  
 二子風流冠當代、顧與兒童爭愠喜。  
 秦王十八已竜飛、嗜好晚將蛇蚓比。

我生百事不掛眼、時人謬說云工此。  
世間有癖念誰無、傾身障簾尤堪鄙。  
人生當著幾●屐、定心肯為微物起。 [●は糸+兩]  
此墨足支三十年、但恐風霜侵髮齒。  
非人磨墨墨磨人、瓶忒未罄壘先恥。  
逝將振衣歸故國、數畝荒園自鋤理。  
作書寄君君莫笑、但覓來禽與青李。  
一螺點漆便有余、萬竈燒松何處使。  
君不見永寧第中搗鼃麝、列屋閑居清且美。  
倒暈連眉秀嶺浮、雙鴉畫鬢香雲委。  
時間五斛賜蛾綠、不惜千金求獼髓。  
聞君此詩當大笑、寒窗冷硯冰生水。

■ 【05-4-055】 答黃魯直

■ 【05-4-056】 次韻黃魯直見贈古風二首

其一

嘉穀臥風雨、稂莠登我場。  
陳前漫方丈、玉食慘無光。  
大哉天宇間、美惡更臭香。  
君看五六月、飛蚊殷回廊。  
茲時不少暇、俯仰霜葉黃。  
期君蟠桃枝、千歲終一嘗。

顧我如苦李、全生依路傍。  
紛紛不足愠、悄悄徒自傷。

其二

空山学仙子、妄意笙箫声。  
千金得奇藥、開視皆豨苓。  
不知市人中、自有安期生。  
今君已度世、坐閱霜中蒂。  
摩挲古銅人、歲月不可計。  
閨風安在哉、要君相指似。

■ 【05-4-057】 密州宋国博以詩見紀在郡雜詠、次韻答之

吾觀二宋文、字字照縑素。  
淵源皆有考、奇險或難句。  
後來邈無繼、嗣子其殆庶。  
胡為尚流落、用舍真有數。  
當時苟悅可、慎勿笑杖杜。  
斲窗誰赴球、袖手良優裕。  
山城辱吾繼、欠短煩遮護。  
昔年謬陳詩、無人聊瓦注。  
於今賡絕唱、外重中已懼。  
何当附家集、擊壤追咸漢。

■ 【05-4-058】 答范祖禹

吾州下邑生劉季、誰數区区張与李。  
重瞳遺跡已塵埃、惟有黃樓臨泗水。  
而今太守老且寒、俠氣不洗儒生酸。  
猶勝白門窮呂布、欲將鞍馬事曹瞞。

■ 【05-4-059】 送胡掾

亂葉和淒雨、投空如散帛。  
流年一如此、遊子去何之。  
節義古所重、艱危方自茲。  
他時著清德、仍復畏人知。

■ 【05-4-060】 祭胡執中郎中文

■ 【05-4-061】 次韻答王定国

每得君詩如得書、宣心寫妙書不如。  
眼前百種無不有、知君一以詩驅除。  
伝聞都下十日雨、青泥沒馬街生魚。  
旧雨來人今不來、悠然獨酌臥清虛。  
我雖作郡古云樂、山川信美非吾廬。  
願君不廢重九約、念此衰冷勤呵噓。

■ 【05-4-062】 送將官梁左藏赴莫州

燕南垂、趙北際、其間不合大如礪。  
 至今父老哀公孫、烝土為城鉄作門。  
 城中積穀三百万、猛士如雲驕不戰。  
 一旦鼓角鳴地中、帳下美人空掩面。  
 豈如千騎平時來、笑談罄欬生風雷。  
 葛巾羽扇紅塵静、投壺雅歌清燕開。  
 東方健兒虓虎様、泣涕懷思廉恥將。  
 彭城老守亦淒然、不見君家雪児唱。

■ 【05-4-063】 答仲屯田次韻

秋來不見漢陂岑、千里詩盟忽重尋。  
 大木百困生遠籟、朱弦三嘆有遺音。  
 清風卷地収殘暑、素月流天掃積陰。  
 欲遺何人賡絶唱、滿階桐葉候虫吟。

■ 【05-4-064】 次韻子由送趙屺歸觀錢塘、遂赴永嘉

歸舟轉河曲、稍見楚山蒼。  
 候吏來迎客、吳音已帶鄉。  
 言從謝康樂、先獻魯靈光。  
 已擊三千里、何須四十強。  
 風流半刺史、清絶校書郎。  
 到郡詩成集、尋溪水澣裳。  
 芒鞋隨采菜、繭紙記流觴。



海靜蛟鼉出、山空草木長。

宦遊無遠近、民要更嘗。

願子伝家法、他年請尚方。

■ 【05-4-065】 書子由黃樓賦後

■ 【05-4-066】 中秋月寄子由三首

其一

殷勤去年月、潑灑古城東。

憔悴去年人、臥病破窗中。

徘徊巧相覓、窈窕穿房櫳。

月豈知我病、但見歌樓空。

撫枕三嘆息、扶杖起相從。

天風不相哀、吹我落瓊宮。

白露入肝肺、夜吟如秋虫。

坐令太白豪、化為東野窮。

余年知幾何、佳月豈屢逢。

寒魚亦不睡、竟夕相唼喁。

其二

六年逢此月、五年照離別。

歌君別時曲、滿座為淒咽。

留都信繁麗、此会豈輕擲。

鎔銀百頃湖、掛鏡千尋闕。  
 三更歌吹罷、人影乱清樾。  
 歸來北堂下、寒光翻露葉。  
 喚酒与婦飲、念我向兒說。  
 豈知衰病後、空盞对梨栗。  
 但見古河東、蕎麥如鋪雪。  
 欲和去年曲、復恐心断絕。

## 其三

舒子在汶上、閉門相对清。  
 鄭子向河朔、孤舟連夜行。  
 頓子雖咫尺、兀如在牢扃。  
 趙子寄書來、水調有余聲。  
 悠哉四子心、共此千里明。  
 明月不解老、良辰難合并。  
 回顧坐上人、聚散如流萍。  
 嘗聞此宵月、万里同陰晴。  
 天公自著意、此会那可輕。  
 明年各相望、俯仰今古情。

## ■ 【05-4-067】 中秋見月和子由

明月未出群山高、瑞光万丈生白毫。  
 一杯未盡銀闕湧、乱雲脱壞如崩濤。

誰為天公洗眸子、應費明河千斛水。  
遂令冷看世間人、照我湛然心不起。  
西南火星如彈丸、角尾奕奕蒼竜蟠。  
今宵注眼看不見、更許螢火爭清寒。  
何人艤舟臨古汴、千燈夜作魚鼈變。  
曲折無心逐浪花、低昂赴節隨歌板。  
青熒滅沒天前山、浪颭風迴豈復堅。  
明月易低人易散、歸來呼酒更重看。  
堂前月色愈清好、咽咽寒螿鳴露草。  
卷簾推戶寂無人、窗下咿啞惟楚老。  
南都從事莫羞貧、對月題詩有幾人。  
明朝人事隨日出、恍然一夢瑤台客。

■ 【05-4-068】 与子明兄

■ 【05-4-069】 永遇樂

名月如霜、  
好風如水、  
清景無限。  
曲港跳魚、  
圓荷瀉露、  
寂寞無人見。  
攄如三鼓、

鏗然一葉、  
黯黯夢雲驚斷。  
夜茫茫、  
重尋無處、  
覺來小園行徧。

天涯倦客、  
山中無路、  
望斷故園心眼。  
燕子樓空、  
佳人何在、  
空鎖樓中燕。  
古今如夢、  
何曾夢覺、  
但有旧歡新怨。  
異時對、  
黃樓夜景、  
為余浩歎。

■ 【05-4-070】 答王鞏

汴泗繞吾城、城堅如削鉄。  
中有李臨淮、号令肝膽裂。  
古來彭城守、未省怕惡客。

惡客云是誰、祥符相公孫。  
是家豪逸生有種、千金一擲頗黎盆。  
連車載酒來、不飲外酒嫌其村。  
子有千瓶酒、我有萬株菊。  
任子滿頭插、团团見花不見目。  
醉中插花歸、花重壓折軸。  
問客何所須、客言我愛山。  
青山自繞郭、不要買山錢。  
此外有黃樓、樓下一河水。  
美哉洋洋乎、可以療飢並洗耳。  
彭城之游樂復樂、客惡何如主人惡。

■ 【05-4-071】 与頓起、孫勉泛舟、探韻得未字

窗前堆梧桐、牀下鳴絡緯。  
佳人尺書到、客子中夜喟。  
朝來一樽酒、晤語聊自慰。  
秋蠅已無聲、霜蟹初有味。  
當為壯士飲、背裂須磔蝟。  
勿作兒女懷、坐念蠪蛸畏。  
山城亦何有、一笑瀉肝胃。  
泛舟以娛君、魚鱉多可饌。  
縱為十日飲、未遽主人費。  
吾儕俱老矣、耿耿知自貴。

寧能傍門戶、啼笑雜猩猩。  
要將百篇詩、一吐千丈氣。  
蕭條歲行暮、迨此霜雪未。  
明朝出城南、遺跡觀楚魏。  
西風迫吹帽、金菊亂如沸。  
願君勿言歸、輕別吾所諱。

■ 【05-4-072】 次韻答頓起二首

其一

挽袖推腰踏破紳、旧聞携手上天門。  
相逢応覺声容似、欲話先驚歲月奔。  
新學已皆從許子、諸生猶自畏何蕃。  
殿廬直宿真如夢、猶記憂時策萬言。

其二

十二東秦比漢京、去年古寺共題名。  
早衰怪我遽如許、苦學憐君太瘦生。  
茅屋擬歸田二頃、金丹終掃雪千徑。  
何人更似蘇司業、和遍新詩滿洛城。

■ 【05-4-073】 九日黃樓作

去年重陽不可說、南城夜半千漚發。  
水穿城下作雷鳴、泥滿城頭飛雨滑。

黃花白酒無人問、日暮歸來洗靴襪。  
豈知還復有今年、把盞對花容一呷。  
莫嫌酒薄紅粉陋、終勝泥中事鋤鋤。  
黃樓新成壁未乾、清河已落霜初殺。  
朝來白露如細雨、南山不見千尋剎。  
樓前便作海茫茫、樓下空聞檣鴉軋。  
薄寒中人老可畏、熱酒澆腸氣先壓。  
煙消日出見漁村、遠水鱗鱗山鬱鬱。  
詩人猛士雜鼉虎、楚舞吳歌亂鵝鴨。  
一杯相屬君勿辭、此景何殊泛清雪。

■ 【05-4-074】太虛黃樓賦見寄、作詩為謝

我在黃樓上、欲作黃樓詩。  
忽得故人書、中有黃樓詞。  
黃樓高十丈、下建五丈旗。  
楚山以為城、泗水以為池。  
我詩無傑句、萬景驕莫隨。  
夫子獨何妙、雨雹散雷椎。  
雄辭雜今古、中有屈宋姿。  
南山多磬石、清滑如流脂。  
朱蠟為摹刻、細妙分毫厘。  
佳處未易識、當有來者知。

■ 【05-4-075】 九日次韻王鞏

我醉欲眠君罷休、已教從事到青州。  
鬢霜饒我三千丈、詩律輸君一百籌。  
聞道郎君閉東閣、且容老子上南樓。  
相逢不用忙歸去、明日黃花蝶也愁。

■ 【05-4-076】 送頓起

客路相逢難、為樂常不足。  
臨行挽衫袖、更賞折殘菊。  
佳人亦何念、淒斷陽關曲。  
酒闌不忍去、共接一寸燭。  
留君終無窮、歸駕不免促。  
岱宗已在眼、一往繼前躅。  
天門四十里、夜看扶桑浴。  
回頭望彭城、大海浮一粟。  
故人在其下、塵土相逐蹴。  
惟有黃樓詩、千古配淇澳。

■ 【05-4-077】 送孫勉

昔年罷東武、曾過北海渠。  
白河翻雪浪、黃土如蒸麩。  
桑麻冠東方、一熟天下賤。  
是時累飢饉、嘗苦盜賊變。



每憐迫胥官、野宿風裂面。  
君為淮南秀、文采照金殿。  
胡為事奔走、投筆腰羽箭。  
更被髯將軍、豪篇來督戰。  
親程三郡士、玉石不能銜。  
欲知君得人、失者亦稱善。  
君才無不可、要欲經百煉。  
吾詩堪咀嚼、聊送別酒巵。

■ 【05-4-078】 李思訓畫長江絕島圖

山蒼蒼、江茫茫、大孤小孤江中央。  
崖崩路絕猿鳥去、惟有喬木攬天長。  
客舟何處來、棹歌中流聲抑揚。  
沙平風軟望不到、孤山久與船低昂。  
峨峨兩煙鬢、曉鏡開新粧。  
舟中賈客莫漫狂、小姑前年嫁彭郎。

■ 【05-4-079】 張安道見示近詩

人物一衰謝、微言難重尋。  
殷勤永嘉末、復聞正始音。  
清談未足多、感時意殊深。  
少年有奇誌、欲和南風琴。  
荒森蝮虺亂、廢沼蛙蠃淫。

遂欲掩両耳、臨文但噫喑。

蕭然王郎子、来自緱山陰。

云見浮丘伯、吹簫明月岑。

遺声落淮泗、蛟鼉為悲吟。

願公正王度、祈招繼愔愔。

■ 【05-4-080】 次韻王鞏顏復同泛舟

沈郎清瘦不勝衣、辺老便便帶十圍。

躑躅身輕山上走、歡呼船重醉中歸。

舞腰似雪金釵落、談弁如雲玉麈揮。

憶在錢塘正如此、回頭四十二年非。

■ 【05-4-081】 次韻張十七九日贈子由

千戈万槊擁篳籬、九日清樽豈復持。

官事無窮何日了、菊花有信不吾欺。

逍遙瓊館真堪羨、取次塵纓未可縻。

迨此暇時須痛飲、他年長劍拄君頤。

■ 【05-4-082】 登雲竜山題名

■ 【05-4-083】 登雲竜山

醉中走上黄茅岡、滿岡乱石如群羊。

岡頭醉倒石作牀、仰看白雲天茫茫。

歌声落谷秋風長、路人举首東南望、拍手大笑使君狂。

■ 【05-4-084】次韻王鞏留別

去国已八年、故人今有誰。  
當時交遊内、未数蔡克兒。  
豈無知我者、好爵半已縻。  
争為東閣吏、不顧北山移。  
公子表独立、与世頗異馳。  
不辭千里遠、成此一段奇。  
蛾眉亦可憐、無奈思餅師。  
無人伴客寢、惟有支牀龜。  
君歸与何人、文字相娛嬉。  
持此調張子、一笑当脱頤。

■ 【05-4-085】与鮮于子駿

■ 【05-4-086】次韻僧潜見贈

道人胸中水鏡清、万象起滅無逃形。  
独依古寺種秋菊、要伴騷人餐落英。  
人間底处有南北、紛紛鴻雁何曾冥。  
閉門坐穴一禪榻、頭上歲月空崢嶸。  
今年偶出為求法、欲与慧劍加礪硎。  
雲衲新磨山水出、霜髭不翦兒童驚。

公侯欲識不可得、故知倚市無傾城。  
 秋風吹夢過淮水、想見橘柚垂空庭。  
 故人各在天一角、相望落落如晨星。  
 彭城老守何足顧、棗林桑野相邀迎。  
 千山不憚荒店遠、兩脚欲趁飛猿輕。  
 多生綺語磨不尽、尚有宛轉詩人情。  
 猿吟鶴唳本無意、不知下有行人行。  
 空階夜雨自清絕、誰使掩抑啼孤惺。  
 我欲仙山掇瑤草、傾筐坐歎何時盈。  
 簿書鞭扑画填委、煮茗燒栗宜宵征。  
 乞取摩尼照独水、共看落月金盆傾。

■ 【05-4-087】 次韻潛師放魚

法師說法臨泗水、無数天花隨塵尾。  
 勸將淨業種西方、莫待夢中呼起起。  
 哀哉若魚竟坐口、遠愧知幾穆生醴。  
 況逢孟簡對盧仝、不怕校人欺子美。  
 疲民尚作魚尾赤、数罟未除吾類泚。  
 法師自有衣中珠、不用辛苦沙泥底。

■ 【05-4-088】 浣溪沙

一別姑蘇已四年。  
 秋風南浦送歸船。

画簾重見水中仙。

霜鬢不須催我老、

杏花依旧駐君顏。

夜闌相對夢魂間。

■ 【05-4-089】 滕縣時同年西園

人皆種榆柳、坐待十畝陰。

我独種松柏、守此一寸心。

君看閭里間、盛衰日駸駸。

種木不種德、聚散如飛禽。

老時吾不識、用意一何深。

知人得數士、重義忘千金。

西園手所開、珍木來千岑。

養此霜雪根、遲彼鸞鳳吟。

池塘得流水、龜魚自浮沈。

幽桂日夜長、白花亂青衿。

豈独蕃草木、子孫已成林。

拱把不知數、會當出千尋。

樊侯種梓漆、壽張富華簪。

我作西園詩、以為里人箴。

■ 【05-4-090】 次韻王廷老和張十七九日見寄

其一

霜葉投空雀啄籬、上樓筋力強扶持。  
對花把酒未甘老、膏面染鬚聊自欺。  
無事亦知君好飲、多才終恐世相縻。  
請看平日銜杯口、會有金椎為控頤。

其二

接果移花看補籬、腰鎌手斧不妨持。  
上都新事長先到、老圃閑談未易欺。  
釀酒閉門開社甕、殺牛留客解耕縻。  
何時得見織纖玉、右手持杯左捧頤。

■ 【05-4-091】 鹿鳴宴

連騎匆匆畫鼓喧、喜君新奪錦標還。  
金盞浮菊催開宴、紅蕊將春待入關。  
他日曾陪探禹穴、白頭重見賦南山。  
何時共樂升平事、風月笙簫一夜間。

■ 【05-4-092】 次韻參加師寄秦太虛三絕句、時秦君舉進士不得

其一

秦郎文字固超然、漢武憑虛意欲仙。  
底事秋來不得解、定中試與問諸天。

其二

一尾追風抹万蹄、昆侖玄圃謂朝齊。  
回看世上無伯樂、却道塩車勝月題。

其三

得喪秋毫久已冥、不須聞此氣崢嶸。  
何妨却伴參寥子、無数新詩咳唾成。

■ 【05-4-093】 答秦太虛

■ 【05-4-094】 与舒教授、張山人、參寥師同遊戲馬台、書西軒壁、兼簡顏長道二首

其一

古寺長廊院院行、此軒偏慰旅人情。  
楚山西斷如迎客、汴水南來故繞城。  
路失玉鈎芳草合、林亡白鶴古泉清。  
淡游何以娛庠老、坐聽郊原琢磬聲。

其二

竹杖芒鞋取次行、下臨官道見人情。  
天寒菽粟猶棲畝、日暮牛羊自入城。  
沽酒独教陶令醉、題詩誰似皎公清。  
更尋陋巷顏夫子、乞取微言繼此聲。

## ■ 【05-4-095】 夜過舒堯文戲作

先生堂前霜月苦、弟子誦書喧兩廡。  
推門入室書縱橫、蠟紙燈籠晃雲母。  
先生骨清少眠臥、長夜默坐數更鼓。  
耐寒石硯欲生冰、得火銅瓶如過雨。  
郎君欲出先自贊、坐客斂衽誰敢侮。  
明朝阮籍過阿戎、応作羲之羨懷祖。

## ■ 【05-4-096】 次顔長道韻送傅倅

兩見黃花掃落英、南山山寺遍題名。  
宗成不独依岑范、魯衛終當似弟兄。  
去歲雲濤浮汴泗、与君泥土滿衣纓。  
如今別酒休辭醉、試聽双洪落後声。

## ■ 【05-4-097】 百步洪二首、并叙

叙

王定国訪余於彭城。一日棹小舟、与顔長道携盼英卿三子游泗水、北上聖女山、南下百步洪、吹笛飲酒、乘月而歸。余時以事不得往、夜著羽衣、佇立於黄楼上、相視而笑、以為李太白死、世間無此樂三百余年矣。定国既去逾月、復与參寥師放舟洪下、追懷曩游、已為陳迹、喟然而嘆。故作二詩、一以遺參寥、一以寄定国、且示顔長道、舒堯文邀同賦云。

其一

長洪斗落生跳波、輕舟南下如投梭。



水師絶叫鳧雁起、乱石一線争磋磨。  
有如兔走鷹隼落、駿馬下註千丈坡。  
断弦離柱箭脱手、飛電過隙珠翻荷。  
四山眩転風掠耳、但見流沫生千渦。  
嶮中得樂雖一快、何異水伯誇秋河。  
我生乘化日夜逝、坐覺一念逾新羅。  
紛紛争奪醉夢裏、豈信荆棘埋銅駝。  
覺来俯仰失千劫、回視此水殊委蛇。  
君看岸边蒼石上、古来篙眼如蜂窠。  
但忘此心無所住、造物雖駛如余何。  
回船上馬各歸去、多言●●師所呵。 [●は言＋堯]

其二

佳人未肯回秋波、幼輿欲語防飛梭。  
輕舟弄水買一笑、醉中蕩槳肩相摩。  
不学長安閭里俠、貂裘夜走臙脂坡。  
独将詩句擬鮑謝、涉江共采秋江荷。  
不知詩中道何語、但覺兩頰生微渦。  
我時羽服黃樓上、坐見織女初斜河。  
歸来笛声滿山谷、明月正照金叵羅。  
奈何捨我入塵土、擾擾毛群欺臥駝。  
不念空齋老病叟、退食誰与同委蛇。  
時来洪上看遺跡、忍見屐齒青苔窠。

詩成不覺雙淚下、悲吟相對惟羊何。  
欲遣佳人寄錦字、夜寒手冷無人呵。

■ 【05-4-098】 送參寥師

上人學苦空、百念已灰冷。  
劍頭惟一吷、焦穀無新穎。  
胡為逐吾輩、文字爭蔚炳。  
新詩如玉雪、出語便清警。  
退之論草書、萬事未嘗屏。  
憂愁不平氣、一寓筆所騁。  
頗怪浮屠人、視身如丘井。  
頽然寄淡泊、誰與發豪猛。  
細思乃不然、真巧非幻影。  
欲令詩語妙、無厭空且靜。  
靜故了群動、空故納萬境。  
閱世走人間、觀身臥雲嶺。  
鹹酸雜衆好、中有至味永。  
詩法不相妨、此語當更請。

■ 【05-4-099】 與參寥

■ 【05-4-100】 書游湯泉詩後

■ 【05-4-101】 日喻

■ 【05-4-102】 十月十五日觀月黃樓、席上次韻

中秋天氣未忘殊、不用紅紗照座隅。

山下白雲橫匹素、水中明月臥浮囿。

未成短棹還三峽、已約輕舟泛五湖。

為問登臨好風景、明年還憶使君無。

■ 【05-4-103】 与文与可

■ 【05-4-104】 徐州上皇帝書

■ 【05-4-105】 答王定民

開緘奕奕滿銀鈎、書尾題詩語更遒。

八法旧聞宗長史、五言今復擬蘇州。

筆蹤好在留台寺、旗隊遙知到石溝。

欲寄鼠鬚並繭紙、請君章草賦黃樓。

■ 【05-4-106】 放鶴亭記

■ 【05-4-107】 莊子祠堂記

■ 【05-4-108】 雲竜山觀燒得雲字

丁女真水妃、寒山便火耘。  
 隕霜知己殺、坏戸聴初焚。  
 束緼方熠燿、敲石俄氤氳。  
 落点甘泉烽、横煙楚塞氛。  
 窮蛇上喬木、潜蛟躡浮雲。  
 驚飛墮傷雁、狂走迷癡麋。  
 谷蟄起蝮燕、山妖竄夔犢。  
 野竹爆哀声、幽桂飄冤芬。  
 悲同秋照蟹、快若夏燎蚊。  
 火牛入燕壘、燧象奔吳軍。  
 崩騰井陘口、万馬皆朱幘。  
 搖曳驪山陰、諸姨爛紅裙。  
 方隨長風卷、忽值絶澗分。  
 我本山中人、習見匪独聞。  
 偶從二三子、來訪張隱君。  
 君家亦何有、物象移朝曛。  
 把酒看飛燼、空庭落繽紛。  
 行觀農事起、畦壟如纈紋。  
 細雨發春穎、嚴霜倒秋蕒。  
 始知一炬力、洗尽狐兔群。

■ 【05-4-109】 祈雪霧猪泉祝文

■ 【05-4-110】 祈雪霧豬泉、出城馬上作、贈舒堯文

三年走吳越、踏遍千重山。  
朝隨白雲去、暮與棲鴉還。  
翩如得木狢、飛步誰能攀。  
一為符竹累、坐老敲榜間。  
此行亦何事、聊散腰脚頑。  
浩蕩城西南、亂山如玦環。  
山下野人家、桑柘雜榛菅。  
歲晏風日暖、人牛相對閑。  
薄雪不蓋土、麥苗稀可刪。  
願君發豪句、嘲詼破天慳。

■ 【05-4-111】 次韻舒堯文祈雪霧豬泉

長笑蛇醫一寸腹、銜水吐雹何時足。  
蒼鵝無罪亦可憐、斬頸橫盤不敢哭。  
豈知泉下有豬竈、臥枕雷車踏陰軸。  
前年太守為旱請、雨天隨人如撒菽。  
太守歸國竈歸泉、至今人詠淇園綠。  
我今又復罹此旱、凜凜疲民在溝瀆。  
却尋旧跡叩神泉、坐客仍携王子淵。  
看草中和樂職頌、新声妙語慰華顛。  
曉來泉上東風急、須上冰珠老蛟泣。  
怪詞欲逼竈飛起、險韻不量吾所及。

行看積雪厚埋牛、誰与春工掀百蟄。  
此時還復借君詩、余力汰輻仍貫笠。  
揮毫落紙勿言疲、驚竜再起震失匙。

■ 【05-4-112】 和田国博喜雪

疇昔月如昼、晚來雲暗天。  
玉花飛半夜、翠浪舞明年。  
螟螣無遺種、流亡稍占田。  
歲豐君不樂、鐘磬幾時編。

■ 【05-4-113】 宋復古画瀟湘晚景圖三首

其一

西征憶南國、堂上画瀟湘。  
照眼雲山出、浮空野水長。  
旧遊心自省、信手筆都忘。  
会有衡陽客、來看意渺茫。

其二

落落君懷抱、山川自屈蟠。  
經營初有適、揮灑不応難。  
江市人家少、煙村古木攢。  
知君有幽意、細細為尋看。

其三

咫尺殊非少、陰晴自不齊。  
經蟠趨後崦、水會赴前溪。  
自說非人意、曾經是馬蹄。  
他年宦遊處、忘話劍山西。

■ 【05-4-114】跋宋漢傑畫

■ 【05-4-115】贈狄崇班季子

狄生臂鷹來、見客不會揖。  
踞牀吃得雋、借箸數禽入。  
短後掬豹裘、猶濺猩血濕。  
指呼索酒嘗、快把長鯨吸。  
半酣論刀槊、怒髮欲起立。  
北方老獬子、狂突尚不繫。  
要須此剽悍、氣壓辺烽急。  
夜走追鋒車、生斬符離級。  
持歸獻天王、封侯穩可拾。  
何為走獵師、日使群毛泣。

■ 【05-4-116】石炭、并引

引

彭城旧無石炭。元豐元年十二月、始遣人訪獲於州之西南白土鎮之北、冶鉄作兵、犀利勝

常云。

君不見前年雨雪行人断、城中居民風裂骭。

湿薪半束抱衾裯、日暮敲門無処換。

豈料山中有遺宝、磊落如礩万車炭。

流膏迸液無人知、陣陣腥風自吹散。

根苗一發浩無際、万人鼓舞千人看。

投泥潑水愈光明、爍玉流金見精悍。

南山栗林漸可息、北山頑曠何勞鍛。

為君鉄作百鍊刀、要斬長鯨為万段。

■ 【05-4-117】 与枢密侍郎

■ 【05-4-118】 謝張太保撰先人墓碣書

■ 【05-4-119】 祭欧陽仲純父文

■ 【05-4-120】 与欧陽仲純

■ 【05-5-001】 人日獵城南、会者十人、以身輕一鳥過、槍急万人呼為韻、得鳥字

兒童笑使君、憂慍長悄悄。

誰拈白接羅、令跨金驄裏。

東風吹湿雪、手冷怯清曉。



忽發兩鳴鶻、相趁飛虻小。  
放弓一長嘯、目送孤鴻矯。  
吟詩忘鞭轡、不語頭自掉。  
歸來仍脫粟、塩鼓煮芹蓼。  
何似雷將軍、兩眼霜鶻皎。  
黑頭已為將、百戰意未了。  
馬上倒銀瓶、得免不暇燎。  
少年負奇志、蹭蹬百憂繞。  
回首英雄人、老死已不少。  
青春還一夢、余年真過鳥。  
莫上呼鷹台、平生笑劉表。

■ 【05-5-002】 將官雷勝得過字代作

胡騎入雲中、急烽連夜過。  
短刀穿虜陣、濺血貂裘洩。  
一來輦轂下、愁悶惟欲臥。  
今朝從公獵、稍覺天宇大。  
一雙鉄糸箭、未發手先唾。  
射殺雪毛狐、腰間余一個。

■ 【05-5-003】 獵會詩敘

■ 【05-5-004】 三槐堂銘

## ■ 【05-5-005】 和參寥見寄

黄樓南畔馬台東、雲月娟娟正点空。  
 欲共幽人洗筆硯、要伝流水入糸桐。  
 且随侍者尋西谷、莫学山僧老祝融。  
 待我西湖借君去、一杯湯餅澆油葱。

## ■ 【05-5-006】 台頭寺步月得人字

風吹河漢掃微雲、步屨中庭月趁人。  
 泔泔爐香初泛夜、離離花影欲搖春。  
 遙知金闕同清景、想見氈車碾暗塵。  
 回首旧游真是夢、一簪華髮岸綸巾。

## ■ 【05-5-007】 種松得徠字

春風吹榆林、乱莢飛作堆。  
 荒園一雨過、戢戢千萬栽。  
 青松種不生、百株望一枚。  
 一枚已有余、氣压千畝槐。  
 野人易斗粟、云自魯徠徠。  
 魯人不知貴、万竈飛青煤。  
 束縛同一車、胡為乎來哉。  
 泫然解其縛、清泉洗浮埃。  
 枝傷葉尚困、生意未肯回。

山僧老無子、養護如嬰孩。  
坐待走龍蛇、清陰滿南台。  
孤根裂山石、直幹排風雷。  
我今百日客、養此千歲材。  
茯苓無消息、雙鬢日夜摧。  
古今一俯仰、作詩寄余哀。

■ 【05-5-008】 遊桓山、會者十人、以春水滿四沢、夏雲多奇峰為韻、得沢字

東郊欲尋春、未見鶯花迹。  
春風在流水、覺雁先拍拍。  
孤帆信溶漾、弄此半篙碧。  
艤舟桓山下、長嘯理輕策。  
彈琴石室中、幽響清磔磔。  
弔彼泉下人、野火失枯腊。  
悟此人間世、何者為真宅。  
暮回百步洪、散坐洪上石。  
愧我非王襄、子淵肯見客。  
臨流吹洞簫、水月照連壁。  
此歎真不朽、回首歲月隔。  
想像斜川遊、作詩寄彭沢。

■ 【05-5-009】 游桓山記

## ■ 【05-5-010】 戴道士得四字代作

少小家江南、寄跡方外士。  
 偶隨白雲出、壳葉彭城市。  
 雪霜侵鬢髮、塵土汚冠袂。  
 頼此三尺桐、中有山水意。  
 自從夷夏亂、七糸久已棄。  
 心知鹿鳴三、不及胡琴四。  
 使君獨慕古、嗜好與衆異。  
 共弔桓魋宮、一灑孟嘗淚。  
 歸來鎖塵匣、獨對斷弦喟。  
 掛名石壁間、寂寞千歲事。

## ■ 【05-5-011】 乞醫療病囚狀

## ■ 【05-5-012】 往在東武、與人往反作粲字韻詩四首、今黃魯直亦次韻見寄、復和答之

苻堅破荊州、止獲一人半。  
 中郎老不遇、但喜識元嘆。  
 我今獨何幸、文字厭奇玩。  
 又得天下才、相從百憂散。  
 陰求我輩人、規作林泉伴。  
 寧當待垂老、倉卒収一旦。  
 不見梁伯鸞、空對孟光案。  
 才難不其然、婦女廁周亂。

世豈無作者、於我如既盥。  
獨喜誦君詩、咸韶音節緩。  
夜光一已多、矧獲累累貫。  
相思君欲瘦、不往我真懦。  
吾儕眷微祿、寒夜抱寸炭。  
何時定相過、經就我乎館。  
飄然東南去、江水清且暖。  
相與訪名山、微言師忍粲。

■ 【05-5-013】 祭文与可文

■ 【05-5-014】 題文潞公詩

■ 【05-5-015】 作書寄王晋卿、忽憶前年寒食北城之遊、走筆為此詩

北城寒食煙火微、落花蝴蝶作團飛。  
王孫出游樂忘歸、門前驄馬紫金鞵。  
吹笙帳底煙霏霏、行人拳頭誰敢睨。  
扣門狂客君不麾、更遣傾城出翠幃。  
書生老眼省見稀、画囟但覺周昉肥。  
別來春物已再菲、西望不見紅日囿。  
何時東山歌采薇、把盞一聽金縷衣。

■ 【05-5-016】 月夜与客飲酒杏花下

杏花飛簾散余春、明月入戶尋幽人。  
褰衣步月踏花影、炯如流水涵青蘋。  
花間置酒清香發、爭挽長條落香雪。  
山城薄酒不堪飲、勸君且吸杯中月。  
洞簫聲斷月明中、惟憂月落酒杯空。  
明朝卷地春風惡、但見綠葉棲殘紅。

■ 【05-5-017】 送蜀人張師厚赴殿試二首

其一

忘歸不覺鬢毛斑、好事鄉人尚往還。  
斷嶺不遮西望眼、送君直過楚王山。

其二

雲竜山下試春衣、放鶴亭前送落暉。  
一色杏花紅十里、新郎君去馬如飛。

■ 【05-5-018】 雪齋

君不見峨眉山西雪千里、北望成都如井底。  
春風百日吹不消、五月行人如凍蟻。  
紛紛市人爭奪中、誰信言公似贛公。  
人間熱惱無處洗、故向西齋作雪峰。  
我夢扁舟適吳越、長廊靜院燈如月。  
開門不見人與牛、惟見空庭滿山雪。

■ 【05-5-019】 以双刀遺子由、子由有詩、次其韻

宝刀匣不見、但見竜雀環。  
何曾斬蛟蛇、亦未切琅玕。  
胡為穿窬輩、見之要領寒。  
吾刀不汝問、有愧在其肝。  
念此乃自藏、包之虎皮斑。  
湛然如古井、終歲不復瀾。  
不憂無所用、憂在用者難。  
佩之非其人、匣中自長歎。  
我老衆所易、屢遭非意干。  
惟有王玄通、堦庭秀芳蘭。  
知子必後大、故挾刀所便。  
屠狗非不用、一歲六七剗。  
欲試百鍊剛、要須更泥蟠。  
作詩銘其背、以待知者看。

■ 【05-5-020】 次韻田国博部夫南京見寄二絕

其一

歲月翩翩下坂輪、歸來杏子已生人。  
深紅落尽東風惡、柳絮榆錢不當春。

其二

火冷錫稀杏粥稠、青裙縞袂餉田頭。  
大夫行役家人怨、応羨居郷馬少游。

■【05-5-021】再次韻答田国博部夫還二首

其一

西郊黄土没車輪、滿面風埃笑路人。  
已放役夫三万指、從教積雨洗殘春。

其二

枝上稀疏地上稠、忍看紅糝落牆頭。  
風流別乘多才思、歸趁西園秉燭遊。

■【05-5-022】答郡中同僚賀雨

水旱行十年、飢疫遍九土。  
奇窮所向惡、歲歲祈晴雨。  
雖非為己求、重請終愧古。  
鬼神亦知我、老病入腰膂。  
何曾拜向人、此意難不許。  
重雲萋已合、微潤先流礎。  
蕭蕭止還作、坐聽及三鼓。  
天明將吏集、泥土滿靴屨。  
登城望麩麥、綠浪風掀舞。  
愧我賢友生、雄篇闢新語。



君看大熟歲、風雨占十五。  
天地本無功、祈禳何足數。  
渡河不入境、未若無蝗虎。  
而況刑白鵝、下策君勿取。

■ 【05-5-023】題逸少書三首

■ 【05-5-024】淵明非達

■ 【05-5-025】留別叔通元弼坦夫

田三昔同寮、向我每傾倒。  
當年或齟齬、反覆看愈好。  
寇三我部民、孝悌化隣保。  
有如袁伯業、苦学到衰老。  
石生吾邑子、勁立風中草。  
宦遊甌生塵、菽水媚翁媪。  
我窮交旧絕、計拙集枯槁。  
三子尤見存、往復紛紜縞。  
迎我淮水北、送我睢陽道。  
願存金石契、凜凜貫華皓。

■ 【05-5-026】江神子

天涯流落思無窮。

既相逢。

却忽忽。

携手佳人、

和淚折殘紅。

為問東風余幾許、

春縱在、

与誰同。

隋堤三月水溶溶。

背歸鴻。

去吳中。

回首彭城、

清泗与淮通。

欲寄相思千点淚、

流不到、

楚江東。

■ 【05-5-027】 減字木欄花

彭門留別

玉觴無味。

中有佳人千点淚。

學道忘憂。

一念還成不自由。

如今未見。

歸去東園花似霰。

一語相開。

匹似当初本不来。

■ 【05-5-028】 罷徐州、往南京、馬上走筆寄子由五首

其一

吏民莫扳援、歌管莫淒咽。

吾生如寄耳、寧獨為此別。

別離隨處有、悲惱緣愛結。

而我本無恩、此涕誰為設。

紛紛等兒戲、鞭鐙遭割截。

道邊双石人、幾見太守發。

有知当解笑、撫掌冠纓絕。

其二

父老何自来、花枝裊長紅。

洗盞拜馬前、請壽使君公。

前年無使君、魚鱉化兒童。

拳鞭謝父老、正坐使君窮。

窮人命分惡、所向招災凶。

水来非吾過、去亦非吾功。

其三

古汴從西來、迎我向南京。  
東流入淮泗、送我東南行。  
暫別還復見、依然有余情。  
春雨漲微波、一夜到彭城。  
過我黃樓下、朱欄照飛甍。  
可憐洪上石、誰聽月中聲。

其四

前年過南京、麥老櫻桃熟。  
今來旧遊處、櫻麥半黃綠。  
歲月如宿夕、人事幾反覆。  
青衫老從事、坐穩生髀肉。  
聯翩閱三守、迎送如輻輳。  
歸耕何時決、田舍我已卜。

其五

卜田向何許、石佛山南路。  
下有爾家川、千畦種秔稌。  
山泉宅童蜃、平地走膏乳。  
異時畝一金、近欲為逃戶。  
逝將解簪紱、壳劍買牛具。

故山豈不懷、廢宅生蒿穰。  
便恐桐鄉人、長祠仲卿墓。

■ 【05-5-029】 答呂熙道

■ 【05-5-030】 与文郎

■ 【05-5-031】 靈壁張氏園亭記

■ 【05-5-032】 書泗州孫景山西軒

落日明孤塔、青山繞病身。  
知君向西望、不愧塔中人。

■ 【05-5-033】 泗州過倉中劉景文老兄戲贈一絕

既聚伏波米、還和魏舒籌。  
忘笑蘇夫子、僥倖得湖州。

■ 【05-5-034】 過淮三首贈景山兼寄子由

其一  
好在長淮水、十年三往來。  
功名真已矣、歸計亦悠哉。  
今日風憐客、平時浪作堆。  
晚來洪沢口、捍索響如雷。

其二

過淮山漸好、松檜亦蒼然。  
藹藹葺孤寺、冷冷出細泉。  
故人真吏隱、小檻帶巖偏。  
却望臨淮市、東風語笑伝。

其三

回首淮陽幕、簿書高没人。  
何時桐柏水、一洗庾公塵。  
此去漸佳境、独游長慘神。  
待君詩百首、来写浙西春。

■ 【05-5-035】 舟中夜起

微風蕭蕭吹荻蒲、開門看雨月滿湖。  
舟人水鳥兩同夢、大魚驚竄如奔狐。  
夜深人物不相管、我独形影相嬉娛。  
暗潮生渚弔寒蚓、落月掛柳看懸蛛。  
此生忽忽憂患裏、清境過眼能須臾。  
雞鳴鐘動百鳥散、船頭擊鼓還相呼。

■ 【05-5-036】 余跋歐陽家書

■ 【05-5-037】西江月

三過平山堂下、  
半生彈指聲中。  
十年不見老仙翁、  
壁上竜蛇飛動。

欲弔文章太守、  
仍歌楊柳春風。  
休言万事轉頭空、  
未轉頭時皆夢。

■ 【05-5-038】余去金山五年而復至、次旧詩韻、贈宝覺長老

誰能斗酒博西涼、但愛齋廚法豉香。  
旧事真成一夢過、高譚為洗五年忙。  
清風偶与山阿曲、明月聊隨屋角方。  
稽首願師憐久客、直將歸路指茫茫。

■ 【05-5-039】大風留金山兩日

塔上一鈴独自語、明日顛風当断渡。  
朝來白浪打蒼崖、倒射軒窗作飛雨。  
竜驤万斛不敢過、漁舟一葉從掀舞。  
細思城市有底忙、却笑蛟竜為誰怒。  
無事久留童僕怪、此風聊得妻孥許。

灑山道人独何事、半夜不眠聽粥鼓。

■ 【05-5-040】 祭刁景純文

■ 【05-5-041】 遊患山、并叙

叙

余昔為錢塘倅、往來無錫、未嘗不至患山。即去五年、復為湖州、與高郵秦太虛、杭僧參寥同至、覽唐處士王武陵、竇群、朱宿所賦詩、愛其語清簡、蕭然有出塵之姿、追用其韻、各賦三首。

其一

夢裏五年過、覺來雙鬢蒼。  
還將塵土足、一步漪瀾堂。  
俯窺松桂影、仰見鴻鶴翔。  
炯然肝肺間、已作水玉光。  
虛明中有色、清淨自生香。  
還從世俗去、永與世俗忘。

其二

薄雲不遮山、疏雨不濕人。  
蕭蕭松經滑、策策芒鞋新。  
嘉我二三子、皎然無緇磷。  
勝遊豈殊昔、清句仍絕塵。



弔古泣旧史、疾讒歌小旻。  
哀哉扶風子、難与巢許隣。

其三

敲火發山泉、烹茶避林樾。  
明窗傾紫盞、色味兩奇絕。  
吾生眠食耳、一飽万想滅。  
頗笑玉川子、饑弄三百月。  
豈如山中人、睡起山花發。  
一甌誰与共、門外無來轍。

■ 【05-5-042】 贈惠山僧惠表

行遍天涯意未闌、將心到处遣人安。  
山中老宿依然在、案上楞嚴已不看。  
欹枕落花余幾片、閉門新竹自千竿。  
客來茶罷空無有、盧橘楊梅尚帶酸。

■ 【05-5-043】 贈錢道人

書生苦信書、世事仍臆度。  
不量力所負、輕出千鈞諾。  
當時一快意、事過有余作。  
不知幾州鉄、鑄此一大錯。  
我生涉憂患、常恐長罪惡。

静観殊可喜、脚浅猶容却。  
 而況錢夫子、万事初不作。  
 相逢更何言、無病亦無藥。

■ 【05-5-044】 与秦太虚、参寥会於松江、而閔彦長、徐安中適至、分韻得風字二首

其一

吳越溪山興未窮、又扶衰病過垂虹。  
 浮天自古東南水、送客今朝西北風。  
 絕境自忘千里遠、勝遊難復五人同。  
 舟師不会留連意、擬看斜陽万頃紅。

其二

二子緣詩老更窮、人間無處吐長虹。  
 平生睡足連江雨、盡日舟橫擘岸風。  
 人笑年來三黜慣、天教我輩一樽同。  
 知君欲写長想憶、更送銀盤尾鬣紅。

■ 【05-5-045】 次韻答参寥

我有方外客、顏如瓊之英。  
 十年塵土窟、一寸冰雪清。  
 搗來從我遊、坦率見真情。  
 顧我無足恋、恋此山水清。  
 新詩如彈丸、脫手不暫停。

昨日放魚回、衣襟滿浮萍。  
今日扁舟去、白酒載烏程。  
山頭見月出、江路聞鼃鳴。  
莫作孺子歌、滄浪濯吾纓。  
吾詩自堪唱、相子棹歌声。

■ 【05-5-046】 次韻閑令送魚

拳網驚呼得巨魚、饑涎不易忍流酥。  
更煩赤腳長鬚老、來趁西風十幅蒲。

■ 【05-5-047】 次韻秦太虛見戲耳聾

君不見詩人借車無可載、留得一錢何足賴。  
晚年更似杜陵翁、右臂雖存耳先聾。  
人將蟻動作牛鬪、我覺風雷真一噫。  
聞塵掃盡根性空、不須更枕清流派。  
大朴初散失渾沌、六鑿相攘更勝敗。  
眼花亂墜酒生風、口業不停詩有債。  
君知五蘊皆是賊、人生一病今先差。  
但恐此心終未了、不見不聞還是礙。  
今君疑我特佯聾、故作嘲詩窮嶮怪。  
須防額癢出三耳、莫放筆端風雨快。

■ 【05-5-048】 湖州謝上表

■ 【05-5-049】 跋錢君倚書遺教經

■ 【05-5-050】 謁文宣王廟祝文

■ 【05-5-051】 端午遍遊諸寺得禪字

肩輿任所適、遇勝輒留連。

焚香引幽步、酌茗開淨筵。

微雨止還作、小窗幽更妍。

盆山不見日、草木自蒼然。

忽登最高塔、眼界窮大千。

下峰照城郭、震沢浮雲天。

深沈既可喜、曠蕩亦所便。

幽尋未云畢、墟落生晚煙。

歸來記所歷、耿耿清不眠。

道人亦未寢、孤燈同夜禪。

■ 【05-5-052】 自記吳興詩

■ 【05-5-053】 送劉寺丞赴余姚

中和堂後石楠樹、与君对牀聽夜雨。

玉笙哀怨不逢人、但見香煙橫碧縷。

謳吟思歸出無計、坐想蟋蟀空房語。

明朝開鎖放觀潮、豪氣正与潮争怒。  
銀山動地君不看、独愛清香生雪霧。  
別来聚散如宿昔、城郭空存鶴飛去。  
我老人間万事休、君亦洗心從仏祖。  
手香新写法界觀、眼淨不覷登伽女。  
余姚古県亦何有、竜井白泉甘勝乳。  
千金買断顧渚春、似与越人降日注。

■ 【05-5-054】 南歌子

山雨瀟瀟過、  
溪橋瀏瀏清。  
小園幽榭枕蘋汀。  
門外月華如水、  
彩舟橫。

苕岸霜花尽、  
江湖雪陣平。  
兩山遙指海門青。  
回首水雲何處、  
覓孤城。

■ 【05-5-055】 与久上人

■ 【05-5-056】 祭陳令举文

■ 【05-5-057】 祭張子野文

■ 【05-5-058】 霽上訪道人不遇

花光紅滿欄、草色綠無岸。

不逢青眼人、長歌白石澗。

■ 【05-5-059】 李公択過高郵、見施大夫与孫莘老賞花詩、憶与僕去歲会於彭門折花饋荀

故事、作詩二十四韻見戲、依韻奉答、亦以一戲公択云

汝陽真天人、絹帽著紅槿。

纏頭三百万、不買一微哂。

共誇青山峰、曲尽花不隕。

当時謫仙人、逸韻謝封吟。

詩成天一笑、万象解寒窘。

驚開小桃杏、不待雷發軫。

余波尚涓滴、乞与居易稹。

爾来誰復見、前輩風流尽。

寂寞兩詩人、殘紅对桜筍。

饑腸得一醉、妙語伝不泯。

君来恨不与、更復相牽引。

我老心已灰、空煩扇余燼。

天遊照六鑿、虛空掃充牣。

懸知色竟空、那復嗜烏吻。  
蕭然一方丈、居士老龐蘊。  
散花從滿袂、不答天女問。  
故人猶故日、怨句写余恨。  
疑我此心在、遮防費欄楯。  
忘虞已斃蛇、折尾時一蠹。  
仄聞孟光賢、未學處仲忍。  
寄招忘已足、左右侍雲鬢。  
何時花月夜、羊酒謝不敏。  
此生如幻耳、戲語君勿愠。  
忘同亡是公、一對子虛听。

■ 【05-5-060】 王鞏清虛堂

清虛堂裏王居士、閉眼觀心如止水。  
水中照見万象空、敢問堂中誰隱几。  
吳興太守老且病、堆案滿前長渴睡。  
願君勿笑反自觀、夢幻去來殊未已。  
長疑安石恐不免、未信犀首終無事。  
勿將一念住清虛、居士与我蓋同耳。

■ 【05-5-061】 和孫同年下山竈洞禱晴

吳興連月雨、釜甑生魚蛙。  
往問下山竈、曷不安厥家。

梯空上巉絕、俯視驚豁訝。  
 神井湧雲蓋、陰崖垂蘚花。  
 交流百道泉、赴谷走群蛇。  
 不知落何處、隱隱如纜車。  
 我来叩石戶、飛鼠翻白鴉。  
 寄語洞中竜、睡味豈不嘉。  
 雨師少弭節、雷師亦停攄。  
 積水得反壑、稻苗出泥沙。  
 農夫免菜色、竜亦飽豚豕。  
 香君擁黃紬、高臥放晚衙。

■ 【05-5-062】 乘舟過賈収水閣、収不在、見其子、三首

其一

愛酒陶元亮、能詩張志和。  
 青山來水檻、白雨滿漁蓑。  
 淚垢添丁面、貧低拳案蛾。  
 不知何所樂、竟夕獨酣歌。

其二

嫋嫋風蒲亂、猗猗水荇長。  
 小舟浮鴨綠、大杓瀉鵝黃。  
 得意詩酒社、終身魚稻鄉。  
 樂哉無一事、何處不清涼。



其三

曳杖青苔岸、繫船枯柳根。  
德公方上冢、季路獨留言。  
已占蒲魚港、更開松菊園。  
從茲來往數、兒女自鷹門。

■ 【05-5-063】次韻孫秘丞見贈

感慨清哀似變風、老於詩句耳偏聰。  
迂疏自笑成何事、冷淡誰能用許功。  
不怕飛蚊如立豹、肯隨白鳥過垂虹。  
吟哦相對忘三伏、擬泛冰溪入雪宮。

■ 【05-5-064】與客遊道場何山、得鳥字

清溪到山盡、飛路盤空小。  
紅亭與白塔、隱見喬木杪。  
中休得小庵、孤絕寄雲表。  
洞庭在北戶、雲水天渺渺。  
庵僧俗緣盡、淨業洗未了。  
十年畫鶴竹、益以詩自繞。  
高堂儼像設、禪室各深窈。  
奔泉何處來、華屋過溪沼。  
何山隔幽谷、去路清且悄。

長松度翠蔓、絕壁挂啼鳥。  
 我友自杭來、尚歎所歷少。  
 歸途風雨作、一洗紅日燎。  
 俄驚万竅号、黑霧卷蓬蓼。  
 舟人紛变色、坐羨輕鷗矯。  
 我独喚酒杯、醉死勝流殍。  
 書生例強狠、造物空煩擾。  
 更將掀舞勢、把燭昼風筱。  
 美人為破顏、正似腰支嫋。  
 明朝更陳迹、清景墮空杳。  
 作詩記余歡、万古一昏曉。

■ 【05-5-065】 僕去杭五年、吳中仍歲大飢疫、故人往往逝去、聞湖上僧舍不復往日繁麗、  
 独淨慈本長老学者益盛、作此詩寄之  
 来往三御一夢間、故人半作冢累然。  
 独依旧社伝真法、要与遺民度厄年。  
 趙叟近聞還印綬、竺翁先已返林泉。  
 何時杖策相隨去、任性逍遙不學禪。

■ 【05-5-066】 送表忠觀錢道士歸杭、并引

熙寧十年、詔以菴山廢仏祠為表忠觀。元豐二年、通教自杭來、見予於吳興。問、觀亦卒工乎。曰、未也、杭人比歲不登、莫有助我者。余曰、異哉、杭人重施輕財、是不独為福田也、

將自托於不朽、今歲成矣、子其行乎。及還、作詩送之。

先王旧德在民心、著令称忠上意深。  
墮淚行看会祠下、挂名争欲刻碑陰。  
淒涼破屋塵凝座、憔悴雲孫雪滿簷。  
未信諸豪容郭解、却從他県施千金。

### ■ 【05-5-067】 舶趨風、并引

引

吳中梅雨既過、颯然清風弥旬、歲歲如此、湖人謂之舶趨風。是時、海舶初回、云此風自海上与舶俱至云爾。

三旬已過梅黃雨、万里初來舶趨風。  
幾處縈回度山曲、一時清駛滿江東。  
驚飄簌簌先秋葉、喚醒昏昏嗜睡翁。  
欲作蘭台快哉賦、却嫌分別問雌雄。

### ■ 【05-5-068】 丁公默送蟾蜍

溪邊石蟹小如錢、喜見輪囷赤玉盤。  
半殼含黃宜点酒、兩螯斫雪勸加餐。  
蛮珍海錯聞名久、怪雨腥風入坐寒。  
堪笑吳興饑太守、一詩換得兩尖團。

■ 【05-5-069】 送孫著作赴考城、兼寄錢醇老、李邦直二君、於孫處有書見及

使君閑如雲、欲出誰肯伴。  
清風獨無事、一嘯亦可喚。  
來從白蘋洲、吹我明月觀。  
門前遠行客、青衫流白汗。  
問子何恩慙、王事不可緩。  
故人錢与李、清廟兩圭瓚。  
蔚為萬乘器、尚記溝中斷。  
子亦東南珍、衲重不可算。  
別情何以慰、酒盡對空案。  
惟持一榻涼、勸子巾少岸。  
北風那復有、塵土飛灰炭。  
欲寄二大夫、發發不可絆。

■ 【05-5-070】 泛舟城南、會者五人、分韻賦詩、得人皆苦炎字四首

其一

城中樓閣似魚鱗、不見清風起白蘋。  
試選苕溪最深处、仍呼我輩不羈人。  
窺船野鶴何曾下、見燭飛虫空自馴。  
遠郭荷花一千頃、誰知六月下塘春。

其二

苦熱誠知处处皆、何当危坐学心齋。  
海螯要共詩人把、溪月行遭霧雨霾。  
鄉国飄零断書信、弟兄流落隔江淮。  
便应築室苕溪上、荷葉遮門水浸階。

其三

紫蟹鱸魚賤如土、得錢相付何曾數。  
碧筒時作象鼻彎、白酒微帶荷心苦。  
運肘風生看斫脰、隨刀雪落驚飛樓。  
不將醉語作新詩、飽食应慚腹如鼓。

其四

橋上游人夜未厭、共依水檻立風簷。  
樓中煮酒初嘗芡、月下新粧半出簾。  
南郭清游繼顏謝、北窗歸臥等羲炎。  
人間寒熱無窮事、自笑疏頑不受疢。

■ 【05-5-071】 与王郎夜飲井水

吳興六月水泉温、千頃菰蒲聚鬪蚊。  
此井独能深一丈、凜然如我亦如君。

■ 【05-5-072】 次韻李公扝梅花

詩人固長貧、日午飢未動。

偶然得一飽、万象困嘲弄。  
 尋花不論命、愛雪長忍凍。  
 天公非不憐、聽飽即喧哄。  
 君為三郡守、所至滿賓從。  
 江湖常在眼、詩酒事豪縱。  
 奉使今折磨、清比於陵仲。  
 永懷茶山下、携妓修春貢。  
 更憶檻泉亭、插花雲髻重。  
 蕭然臥瀟麓、愁聽春禽哢。  
 忽見早梅花、不飲但孤諷。  
 詩成獨寄我、字字愈頭痛。  
 嗟君本侍臣、筆橐從上雍。  
 脫靴吟芍藥、給札賦雲夢。  
 何人慰流落、嘉●天為種。〔●は「萌」の字で、「日」を「白」に「月」を「為」に置き換えた字〕  
 杯傾笛中吟、帽払果下鞞。  
 感時念羈旅、此意吾儕共。  
 故山亦何有、桐花集兮鳳。  
 君亦憶匡廬、歸掃藏書洞。  
 何當種此花、各抱漢陰甕。

■ 【05-5-073】 送淵師歸徑山

我昔嘗為徑山客、至今詩筆余山色。  
 師住此山三十年、妙語応須得山骨。

溪城六月水雲蒸、飛蚊猛捷如花鷹。  
羨師方丈冰雪冷、蘭膏不動長明燈。  
山中故人知我至、爭來問訊今何似。  
為言百事不如人、兩眼猶能書細字。

■ 【05-5-074】 答周開祖

■ 【05-5-075】 次韻周開祖長官見寄

俯仰東西閱數州、老於岐路豈伶優。  
初聞父老推謝令、旋見兒童迎細侯。  
政拙年年祈水旱、民勞处处避嘲謳。  
河吞巨野那容塞、盜入蒙山不易搜。  
仕道固忘慚孔孟、扶顛未可責由求。  
漸謀田舍猶懷祿、未脫風濤且傍洲。  
惘惘可憐真喪狗、時時相觸是虛舟。  
搗來震沢都如夢、只有苕溪可倚樓。  
齋釀酸甜如蜜水、樂工零落似風鷗。  
遠思顏柳并諸謝、近憶張陳与老劉。  
風定軒窗飛豹脚、雨余欄檻上蝸牛。  
旧游到处皆蒼蘚、同甲惟君尚黑頭。  
憶昔湖山共尋勝、相逢杯酒兩忘憂。  
醉看梅雪清香過、夜棹風船駭汗流。  
百首共成山上集、三人同作月中遊。

海南未起垂天翼、澗底仍依徑寸厓。  
 已許春風歸過我、預憂詩筆老難酬。  
 此生歲月行飄忽、晚節功名亦繆悠。  
 犀首正緣無事飲、馮驩為有魚留。  
 從今更踏青州麴、薄酒知君笑督郵。

■ 【05-5-076】 林子中以詩寄文与可及余、与可既歿、追和其韻

斯人所甚厭、投畀每不受。  
 欲其少須臾、奪去惟恐後。  
 云誰尸此職、無乃亦佞守。  
 賦才有巨細、無異斛与斗。  
 胡不安其分、但聽物所誘。  
 時來各飛動、意合無妍醜。  
 坐令雞棲車、長載朱伯厚。  
 平生無一旅、既死咤万口。  
 自聞与可亡、胸臆生堆阜。  
 懸知臨絕意、要我一執手。  
 相望五百里、安得自其牖。  
 遺文付來哲、後事待諸友。  
 伶俜嵇紹孤、老病孟光偶。  
 世人賤目見、爭笑千金帚。  
 君詩与楚詞、識者當有取。  
 但知愛墨竹、此歎吾已久。



故人多厚祿、能復哀君否。

不見林与蘇、饑寒自奔走。

■【05-5-077】与王郎昆仲及兒子邁、繞城觀荷花、登峴山亭、晚入飛英寺、分韻得月明星

稀四首

其一

昨夜雨鳴渠、曉來來風襲月。

蕭然欲秋意、溪水清可啜。

環城三十里、处处皆佳絕。

蒲蓮浩如海、時見舟一葉。

此間真避世、青蕩低白髮。

相逢欲相問、已逐驚鷗沒。

其二

清風定何物、可愛不可名。

所至如君子、草木有嘉聲。

我行本無事、孤舟任斜橫。

中流自偃仰、適与風相迎。

拳杯属浩渺、樂此兩無情。

歸來兩溪間、雲水夜自明。

其三

苔水如漢水、鱗鱗鴨頭青。

吳興勝襄陽、万瓦浮青冥。  
 我非羊叔子、愧此峴山亭。  
 悲傷意則同、歲月如流星。  
 從我兩王子、高鴻插修翎。  
 湛輩何足道、當以德自銘。

## 其四

吏民憐我懶、鬪訟日已稀。  
 能為無事飲、可作不夜歸。  
 復尋飛英游、盡此一寸暉。  
 撞鐘履聲集、顛倒雲山衣。  
 我来無時節、杖屨自推扉。  
 莫作使君看、外似中已非。

## ■ 【05-5-078】次韻章子厚飛英留題

款段曾陪馬少游、而今人在鳳麟洲。  
 黃公酒肆如重過、杳杳白蘋天盡頭。

## ■ 【05-5-079】城南縣尉水亭得長字

兩尉鬱相望、東西百步場。  
 插旗蒲柳市、伐鼓水雲鄉。  
 已作觀魚檻、仍開射鴨堂。  
 全家依画舫、極目亂紅妝。

激激波頭細、疏疏雨脚長。  
我来閑濯足、溪漲欲浮牀。  
沢国山圍裏、孤城水影傍。  
欲知歸路处、葦外記風檣。

■ 【05-5-080】 与胡祠部游法華山  
陂湖欲尽山為界、始見寒泉落高派。  
道人未放泉出山、曲折虚堂瀉清快。  
使君年老尚兒戲、綠棹紅船舞澎湃。  
一笑翻杯水濺裙、余飲濯足波生隘。  
長松攬天竈起立、蒼藤倒谷雲崩壞。  
仰穿蒙密得清曠、一覽震沢吁可怪。  
誰云四万八千頃、渺渺東尽日所曬。  
歸途十里尽風荷、清唱一声聞露薤。  
嗟余少小慕真隱、白髮青衫天所械。  
忽逢佳士与名山、何異枯楊便馬疥。  
君猶鸞鶴偶飄墮、六翮如雲豈長鍛。  
不将新句紀茲游、恐負山中清淨債。

■ 【05-5-081】 又次前韻贈賈耘老  
具区吞滅三州界、浩浩湯湯納千派。  
從來不著万斛船、一葉漁舟恣奔快。  
仙壇古洞不可到、空聽余瀾鳴澎湃。

今朝偶上法華嶺、縱觀始覺人寰隘。  
 山頭臥碣弔孤塚、下有至人僵不壞。  
 空余白棘網秋虫、無復青蓮出幽怪。  
 我来徒倚長松下、欲掘茯苓親洗曬。  
 聞道山中富奇葉、往往靈芝雜葵薤。  
 詩人空腹待黃精、生事只看長柄械。  
 今年大熟期一飽、食葉微虫真癩疥。  
 白花半落紫穉香、攘臂欲助磨鎌鍛。  
 安得山泉變春酒、与子一洗尋常債。

#### ■ 【05-5-082】 趙閱道高齋

見公奔走謂公勞、聞公引退云公高。  
 公心底处有高下、夢幻去來隨所遭。  
 不知高齋竟何義、此名之設緣吾曹。  
 公年四十已得道、俗緣未盡余伊臯。  
 功名富貴皆逆旅、黃金知繫何人袍。  
 超然已了一大事、持冠而去真秋毫。  
 坐看猿獠落置罔、兩手未肯置所操。  
 乃知賢達与愚陋、豈直相去九牛毛。  
 長松百尺不自覺、企而羨者蓬与蒿。  
 我欲贏糧往問道、未忘拳臂辭虛教。

#### ■ 【05-5-083】 送俞節推

吳興有君子、淡如朱糸琴。  
一唱三太息、至今有遺音。  
嗟余与夫子、相避如辰參。  
猶喜見諸郎、窈然清且深。  
異時多良士、末路喪初心。  
我生不有命、其肯枉尺尋。

■ 【05-5-084】次韻答孫侔

十年身不到朝廷、欲伴騷人賦落英。  
但得低頭揖東野、不辭中路候淵明。  
艤舟荅雪人安在、卜築江淮計已成。  
千里論交一言足、与君蓋亦不須傾。

■ 【05-5-085】次韻和劉貢甫登黃樓見寄並寄子由二首

其一

清派連淮上、黃樓冠海隅。  
此詩尤偉麗、夫子計魁梧。  
《劉為人短小。》  
世俗輕瑚璉、巾箱襲武夫。  
坐令乘伝遽、奔走為儲須。  
邂逅我已失、登臨誰与俱。  
貧貪倉氏粟、身聽冶家樞。  
会合難前定、歸休試後囚。

腴田未可買、窮鬼却須呼。  
二水何年到、双洪不受鱸。  
至今清夜夢、飛轡策天吳。

其二

与子皆去国、十年天一隅。  
数奇逢恶歳、計拙集枯梧。  
好士余劉表、窮交憶灌夫。  
不矜持漢節、猶許攬桓須。  
清句金糸合、高楼雪月俱。  
吟哦出新意、指画想前樞。  
自写千言賦、新裁六幅図。  
伝看一坐聳、勸著尺書呼。  
莫使騷人怨、東游不到吳。

■ 【05-5-086】 文与可画篔簹谷偃竹記

■ 【05-5-087】 題楊朴妻詩

■ 【05-5-088】 杭州召還乞郡狀

■ 【05-5-089】 吳江岸

曉色兼秋色、蟬声雜鳥声。

壯懷銷鑠盡、回首尚心驚。

■ 【05-5-090】 黃州上文潞公書

■ 【05-5-091】 御史台榆、槐、竹、柏四首

其一 榆

我行汴堤上、厭見榆陰綠。

千株不盈畝、斬伐同一束。

及居幽囚中、亦復見此木。

蠹皮溜秋雨、病葉埋牆曲。

誰言霜雪苦、生意殊未足。

坐待春風至、飛英覆空屋。

其二 槐

憶我初來時、草木向衰歇。

高槐雖驚秋、晚蟬猶抱葉。

淹留未云幾、離離見疎莢。

棲鴉寒不去、哀叫飢啄雪。

破巢帶空枝、疎影挂殘月。

豈無兩翅羽、伴我此愁絕。

其三 竹

今日南風來、吹亂庭前竹。

低昂中音会、甲刃紛相触。  
肅然風雪意、可折不可辱。  
風霽竹已回、猗猗散青玉。  
故山今何有、秋雨荒籬菊。  
此君知健否、歸掃南軒綠。

其四 柏

故園多珍木、翠柏如蒲葦。  
幽囚無与榮、百日看不已。  
時來拾流膠、未忍踐落子。  
當年誰所種、少長与我齒。  
仰視蒼蒼幹、所閱固多矣。  
忘見李將軍、膽落温御史。

■ 【05-5-092】 己未十月十五日、獄中恭聞太皇太后不予、有赦、作詩

庭柏陰陰昼掩門、烏知有赦闌黃昏。  
漢宮自種三生福、楚客還招九死魂。  
縱有鋤犁及田畝、已無面目見丘園。  
只忘聖主如堯舜、猶許先生作正言。

■ 【05-5-093】 十月二十日、恭聞太皇太后升遐、以軾罪人、不許成服、欲哭則不敢、欲泣則不可、故作挽詞二章

其一



巍然開濟兩朝勲、信矣才難十乱臣。  
原廟固忘祠百世、先王何止活千人。  
和熹未聖猶貪位、明德雖賢不及民。  
月落風悲天雨泣、誰將椽筆写光塵。

其二

未報山陵国士知、遶林松柏已猗猗。  
一声慟哭猶無所、万死酬恩更有時。  
夢裏天衢隘雲仗、人間雨淚变形帷。  
闕睢卷耳平生事、白首累臣正坐詩。

■ 【05-5-094】 予以事繫御史台獄、獄吏稍見侵、自度不能堪、死獄中、不得一別子由、故作二詩授獄卒梁成、以遺子由、二首

其一

聖主如天万物春、小臣愚暗自亡身。  
百年未滿先償債、十口無歸更累人。  
是处青山可埋骨、他年夜雨独傷神。  
与君世世為兄弟、又結来生未了因。

其二

柏台霜氣夜淒淒、風動琅璫月向低。  
夢繞雲山心似鹿、魂驚湯火命如雞。  
眼中犀角真吾子、身後牛衣愧老妻。

百歳神遊定何処、桐郷知葬浙江西。